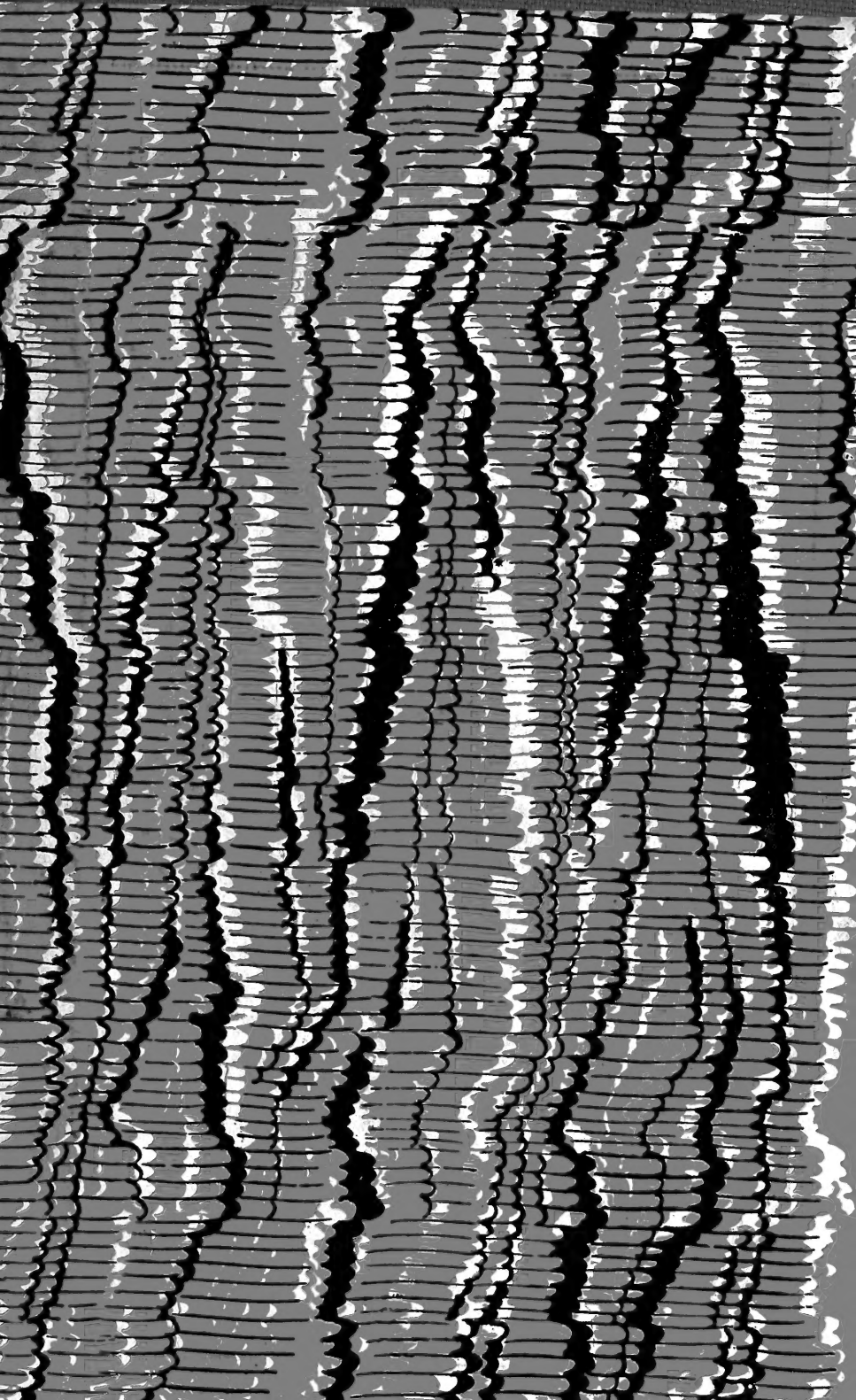
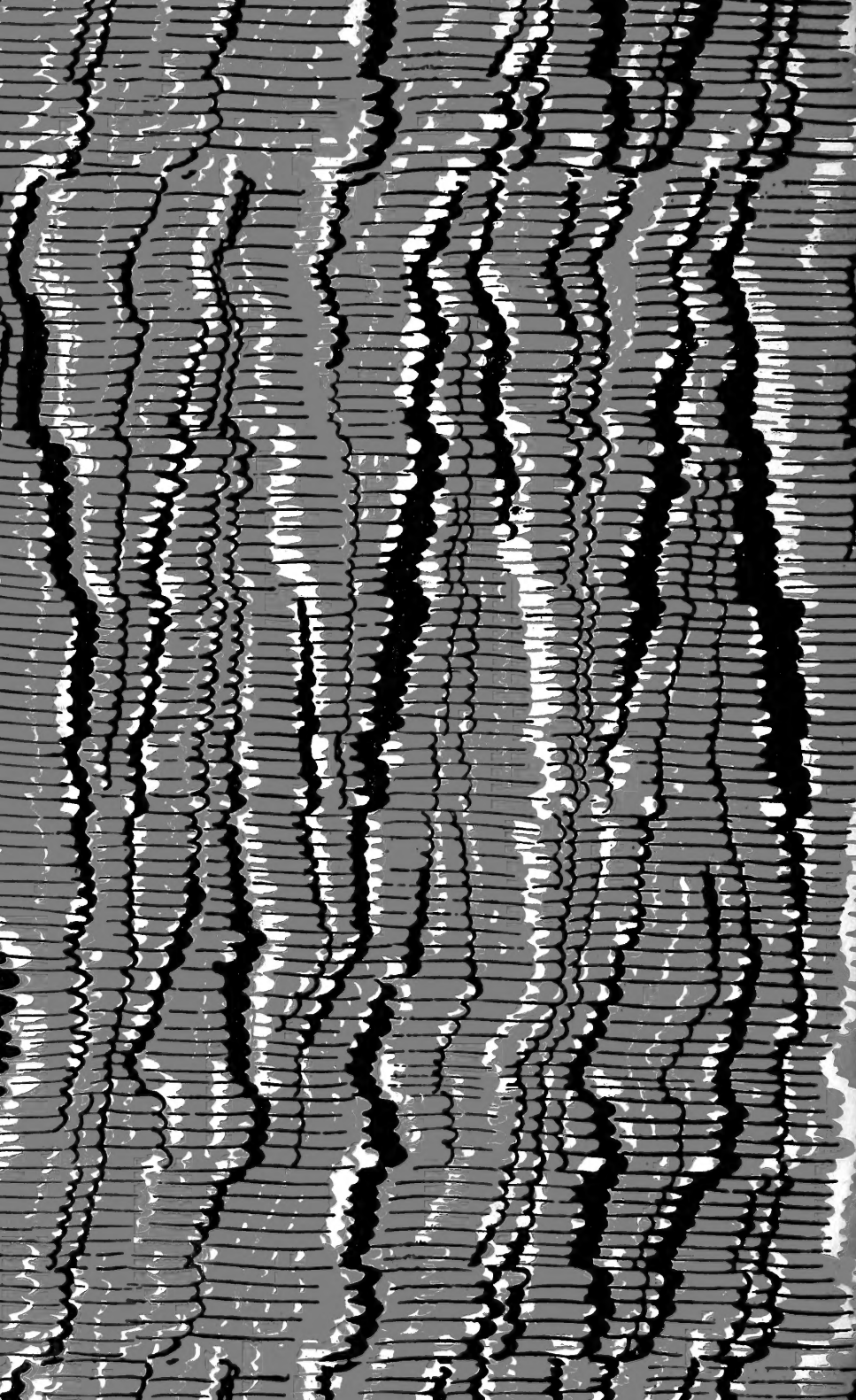


SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES

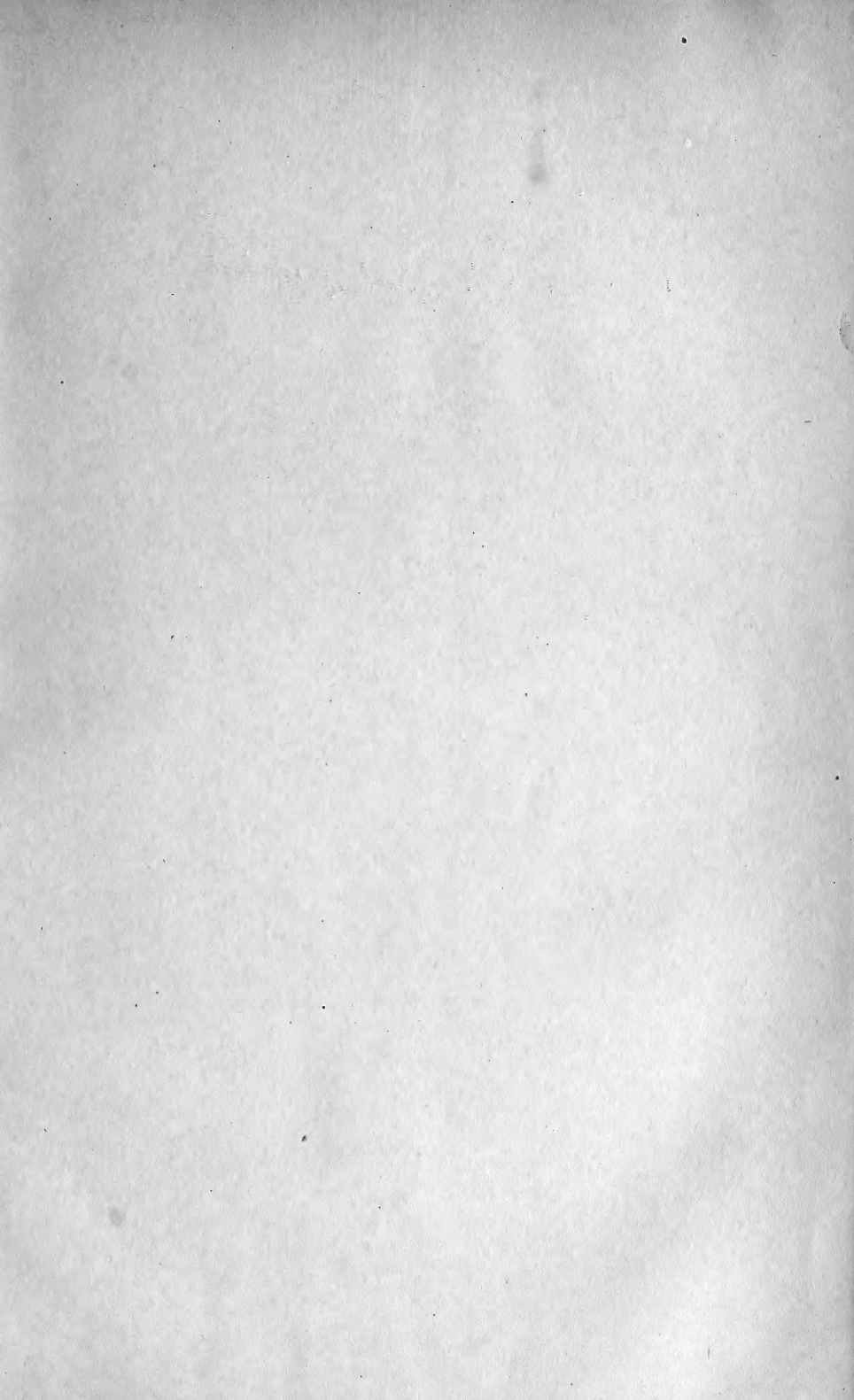


3 9088 00987 1245











鳥

第
十
五
號

大正二十七年七月發行

日本鳥學會

「鳥」第三卷第十五號目次

口 繪

Rheinardius ocellatus の頭部(第七圖版)……………蜂須賀正氏原圖

論 說

稀れなる雉類 Rheinardius ocellatus に就て(口繪第七圖版附)……………蜂須賀正氏

臺灣産鳥類の追加……………獸醫學士 内田清之助

宮城縣若柳附近に於ける鷓・千鳥類の「渡り」(下)……………熊谷三郎

筑前の春の鳥界……………理學士 黒田長禮

講 話

鳥學之歴史(下)……………和田千藏

雜 纂

燈臺にて候鳥渡來に關する觀察……………萩原新正

朝鮮黃海道西島燈臺の鳥類……………理學士 黒田長禮

西朝鮮に於ける夏季の鳥類……………吉田雄次郎

宮城縣下の鳥類の「渡り」……………熊谷三郎

イワツバメ及ケアシノスリに就て……………石澤健夫

廣島市附近に於ける鳥類……………神名勉聰

オホコノハヅクに就て……………熊谷三郎

モズの蕃殖に就て……………小澤國平

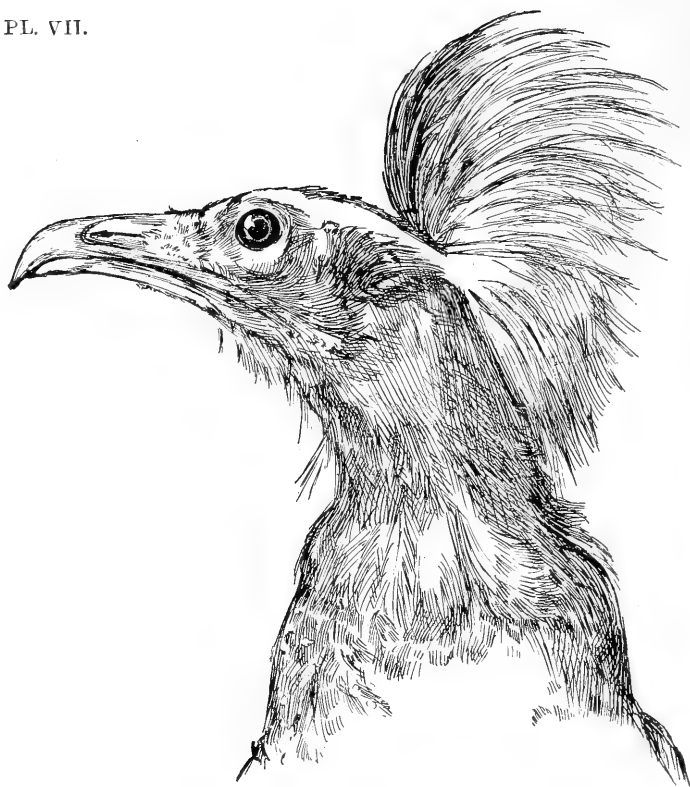
八甲田山の夏季の鳥界……………和田千藏

雉の距及尾羽の斑紋異常例……………熊谷三郎

質 疑 應 答 五 件 (黒田長禮回答)

雜 報 十 一 件

PL. VII.

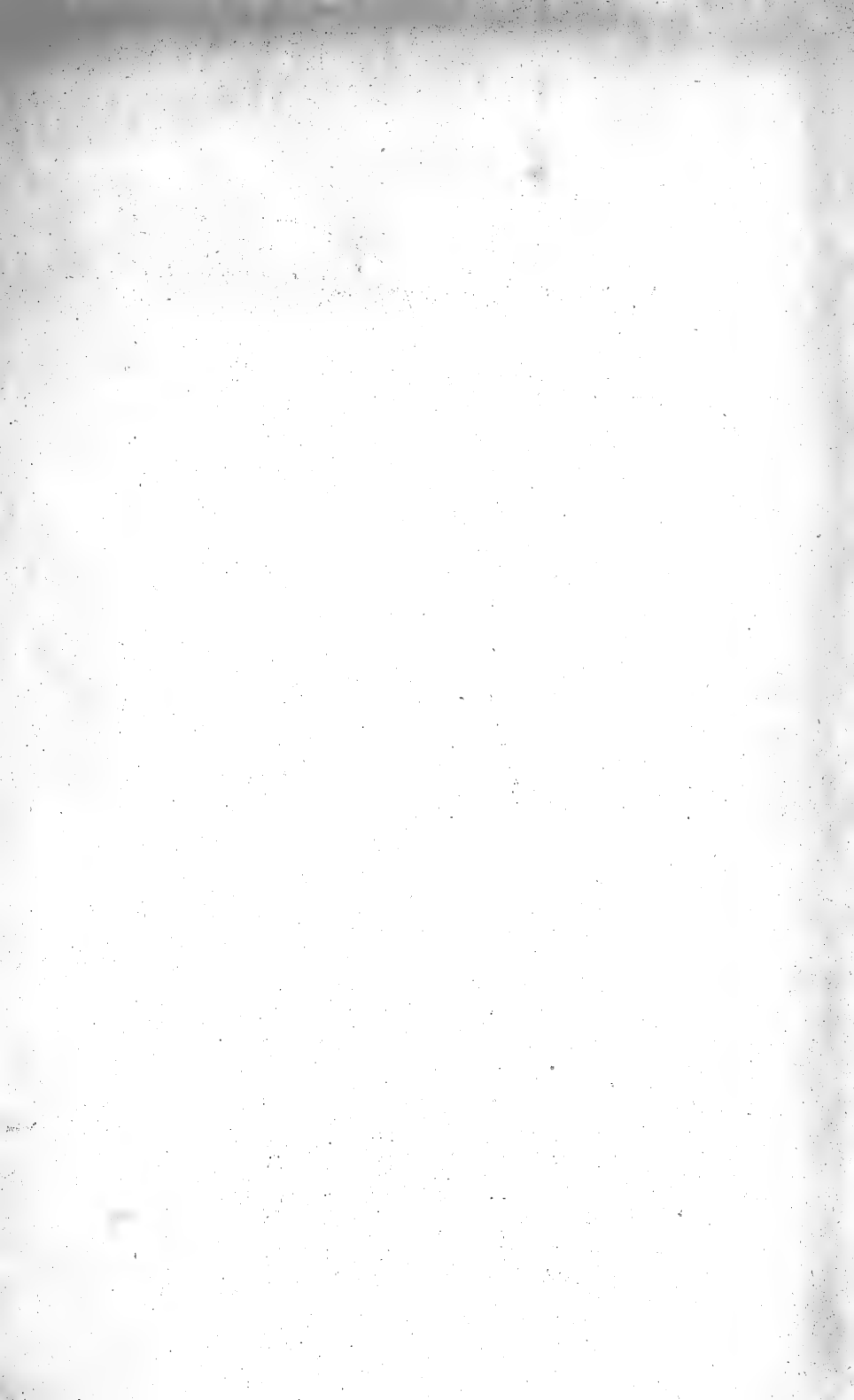


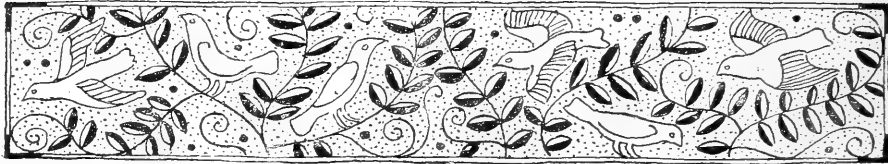
蜂須賀正氏原圖

The head of *Rheinardius ocellatus* (Elliot).

說明

此雜類は現今生存鳥類中最珍品の一つとして知られて居る、産地は東京トシキンと安南とであつて從來獲られた標本の數も至つて少なく十餘個に過ぎないのである、その内の一個を最近在英國の蜂須賀氏が入手せられその頭部の寫生を送られたのが上圖である。





論 說

稀なる雉類 *Rheinardius ocellatus* に就て

(口繪第七圖版附)

在劍橋 蜂須賀正氏

幸にも余は *Rheinardius ocellatus* 成鳥の完全な雄を一羽手に入れる事が出来た。現在生存鳥類中では最珍品の一と看做される。此の標本について参考の爲各地の博物館に聞き合はせた時に得た色々の記載等をまごめてここに述べ様と思ふ。

Norfolk の海岸は鳥の渡り場所として知られて居るがその Clay 云ふ海に面した村に長年住んで居る剝製師と知り合ひになつた。その七十に近い老人の若い中に集めた云ふ色々な外國産鳥類の中で一際異彩を放つて居たのが此標本である、大戰以後此方面の商人仲間は非常な不振を來たして居る。倫敦でも少し珍らしい外國の標本を買はふと思ふと幾んど戦争前に得た物より外に無い。國內に於ても雉類飼育場の如き未だに閉塞したまゝのがずにある分ある様な状態故以上の標本も余の想像よりはるかに安價で求める事が出来た。此の鳥の始めて學界に知られたのは帝雉の如く他の鳥とは多少異なつて居る。

一八五六年二枚の尾羽のみについて巴里博物館に於て發表されたのが最初で一八八二年までは鳥體を見た事がなく、その年佛軍の東京戦争中(トシキ)に數羽を得巴里に送られた。Commander Rheinhardt の報告による(アンナ)土人は此の羽を非常に珍重がり頭飾りに用ひて居るさうである。

巴里博物館には雄四羽雌一羽を藏しその中三羽は安南の産で他の二羽は明かでない。大英博物館には一番

あり一八九二年に購入したもので産地は東京の山地トシマニ耳より外に知られて居ない、その他獨逸 Stuttgart の博物館にも購入せしもの一番を有し、英國トリング博物館には數羽を保存してあるがその中雄ニ羽雌一羽は、Rehhardt の採集にかゝり標本には何等の記載無ければ同じくトキン戦争中に得られたものか或は同氏の再度の採集かその邊は明かでない、紐育博物館よりの通知には一羽の標本も藏せずおそろく全合衆國中に此の鳥を有する博物館は無からんこの事である。

大英博物館の雄は余の標本よりは體の茶褐色斑紋は幾んご白ミ云ふべき度なり管理者ウオレス氏の話に退色せし故なりミ云ふ、然れども眉線は年齢によつて多少異なる様に思はれる、トリング博物館所藏品の中には大英博物館の標本の様に幾んご白ミのがあつた、又大英博物館の雄の尾羽先端は多少すり切れた形跡があるが余の標本に至つては長き尾羽の二對まで先端の僅かに外方にねじれて居るのを認める。

雄、體の上面は黒褐色にして各所に赤褐色を混じ各羽毛には密に極く淡き褐色の斑紋あり大雨覆の外辨は不規則なる斜線ミなり内辨は點ミ點ミの間連續してかすかに六角形をなし、風切羽の内辨に至りては鮮明に



龜甲形を形成す。第五雨覆羽は風切羽より僅に長し。

頭頂は天鷲絨様の短き羽毛にて蔽はれ中央は黒褐色にして兩側は次第に色淡く眉線は汚白色なり、後頭より直立せる毛狀羽は頭部に近き方黒褐なる事頭頂ミ同じにして後方に至るに從つて色淡く中央は汚白色なり。耳羽は黒褐色、顎及喉は汚白色にして頭部は裸出する事無し(Ogilvie-Grant, Game birds, Vol. II 中では sides of the head naked ミある故特に裸出しない事を擧げる事ミす)、上頸は赤褐色なり。體下面は脊ミ略同色なれミ羽軸に沿ひたる部分は濃赤褐色なり。上尾筒、下尾筒及非常に伸長せる十二枚の尾羽は灰色にして赤褐色斑あり更に少なる汚白色の斑點散在す、尾羽の羽軸に沿ひたる大なる赤褐斑は中央黒し。

雌、冠羽は雄より小形にして灣曲する事無し、體の上面は黃焦茶色にして黒及淺黃の横縞あり、雨覆羽及尾羽に至つては一層色濃し、下方は茶褐色にして細かき黒色の蟲喰狀紋あり。

次に測定表を擧げておくがその中からこれを基形標本ミ定める事は幾んご不可能である。

Total length	Bill	Wing	Tail	Tarsus	Middle toe with claw	Sex	Locality	Date	Measured by:	Possessor
.....	mm. 36	mm. 390	mm. 1500	mm. 100	74 without claw 60	♂	Annam	1906?	Stuttgart Museum
.....	32	280	320	78	68 without claw 56	♀	Nha-trang, Annam	"	"
.....	38	380	1530	93	♂	Tonkin	...	Hartert	Tring Museum
.....	40	370	1530	97	♂	"	...	"	"
.....	31	310	372	78	71 without claw 63	♀	"	...	Rothschild	"
.....	36	375	1540	91	74 without claw 59	♂	"	1906	Hachisuka	Hachisuka
.....	34	360	1090	90	70	♂	Annam	1882	Berlioz	Paris Museum
.....	37	369	1090	109	74	♂	"	"	"	"
.....	33	329	390	80	69	♀	"	"	"	"

about 7 ft.	in. 13.5	feet 5	in. 3.5	in. 3.7	♂	Mountain in Interior of Tonkin	1892	Ogilvie-Grant	British Museum
about 31 in.	11.5	in. 14.5	3.4	♀	"	"	"	"

臺灣産鳥類の追加

獸醫學士 内田清之助

臺灣總督府臺南師範學校教諭牧茂一郎氏より種類鑑定のため送附せられたる十四種の鳥類中左に記する三種類は從來臺灣より獲られたる記録なきものにして就中第三の鳩類は本邦のファウナに新なる種類なるを以て以下之を圖説すべし。

一、ハジロクロハラアジサシ *Chidonias leucopterus* (Temminck).

産地 臺南州安平

採集年月 大正十一年九月十七日

本種は從來朝鮮、樺太及び小笠原島より採集せられたる種類なり（記載「増訂日本鳥類圖説」三四三頁にあり）

一、カラフトアヲアシシギ *Pseudoglossis guttifer* (Nordmann).

産地 高雄州鳥樹林

採集年月 大正十一年十一月二十六日

本種は從來朝鮮、樺太、本州及び九州の各地にて獲られたる種類なり（記載前書一八八頁にあり）

三、タイワンヒメアヲバト（新稱）

Leucotreron leclancheri (Bonaparte).

（第四十五圖）



第四十五圖 タイワンヒメアチバト (新稱)

採集年月 大正十一年十一月一日
異名 *Ptilopus leclancheri* Salvadori

(Cat. B. Brit. Mus. XXI, p. 79).

Tyrrolaima leclancheri Bonaparte

(Compt. Rend. xli, p. 247).

形態 雄鳥は頭、頸及び胸灰色にして腮黒く後頭及び後頸は微に綠色を帯び胸は微に黄色を帯ぶ、脊以下の背面は凡て美麗なる綠色にして翼及び尾は特に色濃く稍金屬光澤を帯ぶ尾羽の先端は黄綠色を呈し風切羽の外辨は淡黄色を以て縁取らる、下面胸の下方には黒栗色の一帯あり以下の下面は暗綠色にして腹の中央は黄白色下尾筒は淡き栗色を呈す、尾羽の下面は濃灰黑色にして先端は鼠色なり、嘴は鮮黄色下嘴基部と脚とは暗紅色なり。雌は頭の前部綠灰色を呈し下面の色彩一般に鈍く胸下部に存する黒栗色帯は雄の如く顯著ならず。

幼鳥は全部綠色にして腮は淡栗色を呈し胸の栗

色帯は二三の斑點を示すに過ぎず。

今回獲られたる標本は符箋に雄と記しあるも雄成鳥の羽色に比するに頭前部の羽毛先端綠色を呈するこゝ及び胸の黒栗色部は帶狀を爲さずして點斑狀を呈するこゝにより察するに恐らく多少幼羽を殘存せる雄鳥なるべしと考へらる。

本種は從來比律賓諸島にのみ知られたる種類にして其の他の產地としては大英博物館に一個ニウギニアより獲られたる標本あるも疑はしく即ち比島以外には今回初めて臺灣島に採集せられたるものこす。

本種は臺灣に於ける習性は何等知らるゝ所なしと雖比島に於ては常に森林中に棲息し果樹に食を求むる際を除きては群棲するこゝなしと云ふ、巢は普通の鳩の巢の如きも比島に於て採集せられたる四巢は何れも只一個の卵を藏するに過ぎざりしと云ふ、卵は白色にして長徑三一一—三五耗短徑二二二—二二五耗を算す。

今回牧茂一郎氏より送附せられたる前記三種以外の種類を參考の爲め附記すれば次の如し。

一、タイワンイソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis* (P. L. S. Muller).

大正十一年十月二十九日高雄州大湖庄採集

二、サメビタキ *Hemichelidon sibirica sibirica* (Gmelin).

大正十一年十月四日臺南北門外採集

三、コムシクビ *Acanthopneuste borealis borealis* (Blasius).

大正十一年十月五日臺南北門外採集

四、チウヒ *Circus aeruginosus aeruginosus* (L.).

大正十一年十一月三日高雄州岡山郡白砂崙採集

五、ムナグロ *Pteralis dominicens fulvus* (Gmelin).

大正十一年十一月十日臺南州鹽埕採集

六、キヤウジャウシギ *Arenaria interpres interpres* (L.).

大正十一年九月十七日臺南州安平採集

七、シロチドリ *Charadrius alexandrinus derbatus* (Swinhoe).

大正十一年十一月十六日臺南州安平採集

八、イソシギ *Actitis hypoleucos* (L.).

大正十一年十月三十日臺南州安平採集

九、トウネン *Pisolia minuta ruficollis* (Pallas).

大正十一年十一月十二日臺南州鹽埕庄採集

十、コアジサシ *Sternula albigularis sinensis* (Gmelin).

大正十一年九月十七日臺南州安平採集

十一、クロハラアジサシ *Chlidonias leucopareus sichhoi* Mathews.

大正十一年九月十七日臺南州安平採集

宮城縣若柳附近に於ける鷓・千鳥類の「渡り」(下)

熊谷三郎

(13) *Helobromas ochropus* (L.).

クサシギ

此の種の「渡り」に就ては第十九表を得たるに過ぎず、これに據れば秋季は九月中旬以降渡來し始め十月下旬に二羽獲たり而して少數越冬するものあり、春季の去期は不明なり

第十九表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大六、一、二六	三・〇	(一) 七・二	九八	西	二	五	晴	一羽水田にて見る
大八、九、二〇	二五・〇	八・〇	八九			一〇	曇	一羽を見る
大九、一〇、九	一七・〇	九・〇	七八			九	同	水田にて求食のもの一羽を見る
同 一〇、二一	二〇・八	一・四	九〇			一〇	雨	水田にて求食のもの一羽採集
大10、11、12	一六・五	九・六	八五	西	一	七	晴	尾松村にて一羽採集す

二七〇

(14) *Heterosclalus incunus brevipes* (Vieill.)

第二十表

キアシシギ

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大四、九、二三	二六・六	一五・〇	七六			二	快晴	三羽飛翔中のを見る
大六、九、一七	二一・〇	一六・〇	一〇〇			一〇	雨	三羽を見る
大八、八、一	二九・一	二二・〇	七三			一〇	曇	夜中鳴聲す多数
同 八、二	二七・六	二〇・五	八五	南	一	一〇	曇	同
同 八、一	三一・六	二〇・一	六七			四	晴	午後十二時鳴聲を聞く
同 八、二四	三〇・六	二〇・二	一〇〇			一〇	雨	一羽を見る
同 九、三〇	二三・一	二二・五	九五			一〇	雨	飛翔中のもの三羽を見る
大九、七、一八	二一・〇	一五・四	六四	南	二	四	晴	午後二時頃五羽を見る
同 七、一九	三三・一	二一・六	七二	南	二	五	晴	午前二時半頃鳴聲す
同 七、二〇	三一・一	二〇・〇	八一			七	晴	午後九時一羽を見る
同 一、一六	一四・二	三・七	五七	南	二	三	晴	鳴聲を聞く

同 一一、八	一五・〇	五・一	九六		一〇	曇	凝もなき本種の鳴聲を聞く
大 一〇、五、一三	一六・二	二・九	四七	北東	二	快晴	午前六時頃二十羽の一群北方へ
同 九、一	二一・五	一七・四	九七		一〇	曇	鳴聲す
同 九、一六	二三・三	一二・六	六四		五	晴	多数の鳴聲を聞く

此の種類は當地にありては秋季の「渡り」の際は其の數多からざれども普通のものにして即ち觀察の結果は第二十表の如し、而して秋季渡來初期は七月中旬にして八月上旬より九月中旬の頃は最も多數渡來し九月下旬以降は極めて少數となり尙十一月上旬迄も見るこゝあれぎ斯くの如きは稀れにして單に一羽位を見たるに過ぎず、第二十一表は右を簡單に書けるものにして其の春季渡來期

季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度	季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度
七月中旬	Min. 乃至 二一・〇 一五・四 二一・六	十一月月上旬	Min. 乃至 一四・二 一五・〇 三・七	五月中旬	Min. 乃至 一六・二 二・九	不 明 不 明	

に於ては極めて少なく五月中旬一回の觀察あり、この時期は六郷川口に於ける春季渡來の最盛期に一致す。
(15) *Actitis hypoleucos* (L.).
第二十一表
イソシギ

年月日	最高溫度	最低溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大六、九、二一	二一・二	一八・〇	九〇			九	曇	迫川の砂地にて一羽を見る
大八、一〇、一二	二一・五	八・五	七四			七	晴	田圃にて一羽を見る
大九、七、五	二九・六	一八・八	八一			九	曇	二三羽を川原に見る

これを簡單に記せば次の第二十五表の如し。
第二十五表

八月下旬	秋季 季渡來初期	同上月 上溫度	同去期	同上溫度	同上溫度	春季 季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度
Min. 乃至 一九・四 Max. 乃至 二四・八	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
十月下旬	同去期	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
Min. 乃至 一・四 Max. 乃至 一五・〇	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
不明	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
不明	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
不明	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度
不明	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度	同上溫度

同	一〇、二八	一五・〇	八・七	一〇〇	一〇	雨	同	二羽を見る
同	六九、九、一〇	二四・一	一〇・八	六三	一	晴	二羽を見る	
同	九、三〇	二〇・六	一七・八	九四	一	曇	鳴聲を聞く	
同	一〇、一八	一七・〇	九・〇	七八	一	曇	二羽飛翔す	
同	一〇、一八	一七・五	九・四	八四	二	曇	長沼附近にて二羽を見る	
大六、	八、二三	三〇・一	一九・四	九〇	二	曇	早朝鳴聲を聞く	
同	八、二九	二四・九	一七・〇	八三	一	曇	追川畔に一羽を見る	
同	八、三〇	二四・八	一一・八	七九	一	同	一羽飛翔す	
同	九、一六	二四・七	一四・二	八八	二	同	田圃にて一羽を見る	
同	九、一八	二五・一	二二・〇	九〇	一	雨	一―二羽宛諸所に多し	
同	九、二四	二四・三	一二・三	九九	一	晴	早朝鳴聲す	
同	九、二六	二二・三	一二・六	六四	一	晴	鳴聲のみ	
同	九、二二	二九・〇	一六・〇	〇〇	一	同	同	
同	九、三〇	二七・〇	一五・八	九九	一	同	鳴聲のみ	
同	一〇、一二	二六・〇	一一・二	六三	一	晴	午後十一時半鳴聲を聞く 午前七時四十分五分五羽の一群南方へ飛翔するを見る	
同	一〇、二四	一五・六	一一・四	〇〇	一	雨		

右表に據れば秋季渡來初期は八月下旬にして以降一——二羽常に散見し得十月下旬までは留まるも尙十一月中旬伊豆沼にて獲られたるこゝあり斯くの如きは稀れなる場合にして又五羽以上の群を見たるこゝなし、而して春季は秋季に比し更にその數少なきが如く其の觀察せしこゝなし。

(17) *Philonachus pugnax* (L.).

エリマキシギ

本種に就ては唯一回左記の採集あるのみ

第二十六表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大〇、九、二五	二五・二	一五・二	七九	—	—	九	曇	南谷地にて一羽(幼令)採集す

尙伊豆沼附近に於て數年前の春季に成鳥二羽獲られたるこゝあるものゝ如く其の地方の一獵師の談に據り推定せらる。右に據れば春秋二季の「渡り」に渡來するなるべし。

(18) *Pisolia minuta pulicollis* (Pall.).

トウネン

此の種に就ての觀察は第二十七表の如し。

第二十七表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大八、五、二一	二二・〇	八・〇	一〇〇	東	一	一〇	雨	茅沼にて少數を見る
同 一〇、三〇	一八・〇	八・〇	七一	南	三	三	晴	二——三羽を見る
同 一一、一	一〇・六	(一) 〇・九	九五	—	—	六	同	鳴聲のみ
大九、五、二一	一九・一	七・七	六四	—	—	九	曇	同
大〇、七、二	二六・六	二一・二	八九	南	二	八	雨	同

これを簡単に記せば第二十八表の如し。

第二十八表

季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度	季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度
七月上旬	Min. 二一・二 Max. 二六・六	十月下旬 より 十一月月上旬	Min. 乃至八・〇 Max. 乃至一〇・六	五月下旬	Min. 乃至八・〇 Max. 乃至二二・〇	不 明	不 明

右表によれば七月上旬已に渡來し始め十一月月上旬に至る間少數觀察せり而して春季は秋季よりも其の數少なく五月下旬なりき、即ち六郷川口に於ける最盛期に一致するなり。

(19) *Pelidna alpina sakhalina* (Vieill).

ハマシギ

本種は六郷川口にありては冬鳥なれ共も當地方にありては大正八年度に於て第二十九表の如き觀察あるのみ、これに據れば秋季渡

第二十九表

年月日	最高溫度	最低溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大八、八、一二	三三・五	一八・六	六三			六	晴	鳴聲す
同 九、六	二九・六	二〇・〇	七七	北西	三	一	快晴	夕方少數飛翔中のものあり
同 一〇、二三	一七・〇	五・四	六七	東	一	二	同	鳴聲を聞く
同 一〇、二八	一八・五	一三・五	八四	東	一	六	晴	少數を見る
同 九、二八	二一・五	八・八	六三			六	同	同

來初期は已に八月中旬にして其の去期は十月下旬なりき。

(20) *Cappella gallinago raldai* (Buturini).

タシギ

本種に就ての觀察は未だ不充分にして明細に報告するを得ざれ共も第三十表に據れば秋季渡來初期は他所の例の如く已に八月下旬にして十月下旬に至る、而して春季にありては一回表記の如く四月中旬の觀察あるのみなり。

第三十表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	氣備	考
大七、八、二六	三一・六	一七・五	六八	—	—	—	—	快晴	水田にて一羽採集
大九、四、一七	一七・〇	八・〇	六三	西	一	七	—	晴	南谷地にて少群を見る
大十、一〇、三	二一・五	一三・六	九六	—	—	一〇	—	雨	二羽採集

旬にして十月下旬に至る、而して春季にありては一回表記の如く四月中旬の觀察あるのみなり。

(21) *Neospiza solitaria* (Hodgs.).

アヲシギ

本種は當地にて未だ採集せられざりしも第三十一表に記せる場所に大正十一年二月六日一羽獲られたり、この例に據れば明らかに越冬す

第三十一表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	氣備	考
大二、二、六	五・〇	(一) 四・八	—	北	一	八	曇	岩手縣東磐井郡 <small>キノミ</small> 黄海にて一羽採集す	—

るなり而して本種は本邦にては留鳥なり、尙東北地方にて採集せられたる記録は岩手縣下並びに宮城縣金華山(鷓・千鳥類圖説四一三頁参照)に於てなり。

因に第三十一表の産地は當地より數里の北東北上河畔なり。

(22) *Ejuncocoryptes minimus* (Brunnich).

コシギ

本種は本邦に渡來するは稀なることにして從來當地方にては一羽も採集せられざりしが大正十一年第三十二表の如く冬季に於て

第三十二表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大一一、二、二六	(一) 一・二	(一) 一〇・八				一〇	雪	有賀村にて一羽採集
同 一、三一	(一) 一・〇	(一) 一四・八				七	晴	石越村にて一羽採集
同 二、二一	一〇・五	二・〇					快晴	若柳附近にて一羽採集

三羽獲られたり。

(23) *Scolopax rusticola rusticola* L.

ヤマシギ

本種に就ての採集観察の結果は第三十三表の如し。

第三十三表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天気	備考
大六、三、二	一・五	(-) 七・二	九八	南	三	三	晴	一羽採集す
大七、二、二〇	五・〇	(-) 二・六	九六			一〇	雪	採集せられたるあり
大九、一、八	一五・〇	五・一	九六			一〇	曇	油島にて一羽の採集物を見る
大〇、一、一三	一・五	四・三	九八	西	一	五	晴	河畔の湿地にて一羽を見る
大二、一、三一	(一) 一・二	(-) 一〇・八				一〇	雪	石越にて一群採集す

これを簡單に記せば第三十四表の如し。

第三十四表

季	季渡來初期	同上温度	同去期	同上温度	季	季渡來初期	同上温度	同去期	同上温度
秋	十一月月上旬	Max. 一五・〇	なし	なし	春	三月月上旬	Max. 一・五		

Min.
五・一

Min.
(一)
七・二

右表に據れば十一月上旬より渡來し初め翌春三月上旬までは越冬し留まるものなり、而して當地方にありては繁殖せざるものゝ如し。

以上にて各種類の「渡り」に就て記述せるが更に概括すれば第二十五表の如し(温度は最高温度)。

第三十五表

種名	夏、秋、冬、春季 渡來初期	同上温度	同上去期	同上温度	春季渡來初期	同上温度	同去期	同上温度
ケ	八月下旬	二四・一	不	一五・〇	二月下旬	九・一	不	一四・〇
タ	八月下旬	二四・八	十月下旬	一七・〇	三月下旬	五・〇	四月中旬	一五・〇
ダ	九月中旬	二二・〇	十月下旬	一七・五	三月下旬	五・〇	五月中旬	二二・〇
ム	八月下旬	三〇・一	十一月下旬(稀)	二五・五	四月下旬	一五・〇	五月下旬	一五・〇
イ	少數越冬すべし							
コ	不		十月下旬	一八・〇	四月中旬	一〇・四	不	
キ	七月中旬	三一・一	十月下旬	二一・五	四月中旬	一〇・四	不	
ダ	八月中旬	二二・〇	九月中旬	一七・〇	五月中旬	二〇・〇	五月下旬	一七・八
ホ	不		十月中旬	二四・三	不	五・〇	五月下旬	一七・八
オ	八月下旬	二一・〇	九月下旬	二〇・八	三月下旬	五・〇	五月下旬	一五・六
チ	八月下旬	二二・〇	九月下旬	二四・五	不		不	
ヲ	九月下旬	二九・〇	十月下旬	二〇・〇	五月下旬	二五・一	不	
ソ	九月下旬	二九・一	十一月下旬	二五・〇	三月下旬	二五・〇	不	
キ	七月下旬	二九・一	十一月下旬	二四・二	五月下旬	二一・〇	不	
イ	七月上旬	二九・六	十一月下旬	二一・五	不	一六・二	不	

ア	エ	ト	ハ	ク	タ	ア	コ	ヤ
チ	リ	ウ	マ	サ	シ	チ	シ	マ
アシ	マキ	ウネ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
シギ	シギ	シ	ギ	ギ	ギ	ギ	ギ	ギ
八月	九月	七月	八月	九月	八月	二月	二月	十一月
下旬	中旬	上旬	中旬	中旬	下旬	上旬	中旬	上旬
二四・八	二〇・一	二五・二	二六・三	三三・五	二五・〇	一一・二	一〇・五	一五・〇
十一月	十一月	十一月	十月	十月	十月	十月	十月	十月
中旬	中旬	上旬	下旬	下旬	上旬	上旬	上旬	上旬
明	明	明	明	明	明	明	明	明
一五・五	一三・〇	一〇・六	一七・〇	二六・五	二〇・五	二一・五	二一・五	二一・五
不	不	不	不	不	不	不	不	不
明	明	明	明	明	明	明	明	明
不	不	不	不	不	不	不	不	不
明	明	明	明	明	明	明	明	明
一五・〇								

右表に據り若柳附近に渡來する鶺鴒・千鳥類の「渡り」の季節に就て述べれば秋季已に七月上旬、イソシギ、トウネンの「渡り」に始まり而して中旬に至ればキョジョシギ、キアシシギを加へ越えて八月中旬よりハマシギ、ダイシヤクシキの「渡り」を見、更に、下旬に至ればタシギ、ケリ、タゲリ、ムナグロ、オホソリハシシギ、アチアシシギ等の各種の「渡り」を見る。而して九月上旬チグロシギ、ダイゼン(已に七月中に渡來するなるべし) ツルシギの各種を加へ下旬更にエリマキシギ、クサシギの渡來し十一月上旬ヤマシギの渡來にて鶺鴒類の大部分の「渡り」を終るものなり、而して其の去期は九月上旬以降オホソリハシシギ、ダイシヤクシギ、チグロシギ、ツルシギ、キアシシギの順に各渡去し更に十月に入りては其の最盛期にしてタゲリ、ダイゼン、ムナグロ、キョジョシギ、ホウロクシギ、イソシギ、アチアシシギ、ハマシギ、クサシギ(少數越冬するあり)タシギの各種の渡去を見るものなれ共も尙十一月上旬乃至中旬までにトウネンキアシシギ、アチアシシギ、ムナグロ等の少數稀に觀察し得たるのみにして冬季にはアチシギ、コシギ、ヤマシギ、クサシギ、イカルチドリ等の少數越冬するものあり、尙二月下旬タゲリを獲たること並に稀にツルシギの渡來を觀察し得たる場合あり。次に春季渡來は三月上旬ツルシギの渡來に始まりホウロクシギ、ダイゼンこれに次ぎ、四月中旬に至ればムナグロ、タシギを見られ五月中旬、キョジョシギ、チグロシギ、キアシシギ等の少數の渡來を見るのみ。而してイカルチドリ、コチドリの二種繁殖

のため四月中旬以降越冬地より渡來するものなり。

概して春季に於ては秋季より渡來するもの少なく尙ほ春秋二季の「渡り」の期間に就て比較せは下の如く、秋季に於ては七月上旬より十一月上旬乃至中旬に至る約百三、四十日の長期に亘るも春季に於ては三月上旬（大正十一年三月九日午後十二時頃月夜）より五月下旬に亘る約九十日間にして秋季の場合より約四、五十日短かかりき。

「渡り」の期節と温度との關係

若柳附近に於ける鶺鴒・千鳥類の「渡り」に就て其期節と温度との關係は種々雑多にして一定せる關係なく第三十六表によれば秋季第三十六表

期節	秋季渡來初期	同 去 期	春季渡來初期	同 去 期
最高温度	七月上旬より 十月下旬	九月中旬より 十一月月上旬	三月上旬より 五月中旬	四月中旬より 五月下旬
最低温度	二〇・八一—三一・一 八・〇—二二・四	一九・〇—二八・一 (一〇・九—二〇・〇)	五・〇—二五・一 (一六・七—一四・四)	一四・〇—二二・〇 二・一—一〇・〇
平均	二〇・五七	一九・五〇	九・四五	一・二〇二

渡來初期は平均上温度最も高く、春季渡來初期は最も低し、又秋季の去期は高く、春季の去期は低し、され共も六郷川口の場合に於ては秋季の去期は低く、春季の去期は高し、そは若柳附近に於ける春季の去期は四月中旬より五月下旬までなるに六郷川口に於ては五月上旬より七月上旬までにて初夏の候に至るものなれば従つて温度高きなるべし、これ即ちキョジョシギ、ダイシャクシギ、オホソリハシシギ、キアシシギ、ダイゼン等の鶺鴒・千鳥類は春季尙六郷川口にありては六月上旬以降七月上旬に至る間滞留するものなるに若柳附近にては殆んど滞留するものなきに據るものなり。これを綜合すれば秋季は温度高き間に已に北方の繁殖地より渡來し、寒冷加ふるに従つて南方越冬地に去り、春季は温度尙ほ低きも南方より渡來し、暑氣稍や加ふるに従つて北方繁殖地に向ひ去るものなり。

「渡り」と湿度、雲量、天候との關係

鶺鴒・千鳥類の「渡り」に天氣、湿度並に雲量等の氣象との關係は一定せる關係なきものゝ如くなれ共も先づ天氣に就て各種（コチドリ、イカルチドリ、アヲシギ、コシギ、ヤマシギ等越冬又は繁殖するものを除き）の場合を綜合せるに次の第三十七表を得たり。

第三十七表

天 氣	秋 季 渡 來		春 季 渡 來		合 計	%
	晴	曇	晴	曇		
快 晴	六	四二	三	一八	九	七・一四
曇	二五	二二	八	二	三三	四七・六九
雨	二二	二二	二	二	二四	二六・一〇
						一九・〇四

これに據れば晴雨にかゝらず其の渡來を見るものなれ共も多きは晴の場合にして全部の場合の四七・六九%に達す、これは當然の事柄にして其の「渡り」に好都合な所謂飛行日和なるが爲めなり。次で曇り、雨天の場合が多く、降雨中ムナグロの大群の「渡り」（大正十年九月二十三日）を見たる例あり、又出水により海濱、入江、川口等に普通なる種類の時として當地方の水田、濕地に見たる例もあり、即ちダイシヤクシギ、オホソリハシシギ等の如し、而して、最も少なきは快晴の場合なるが、こは「渡り」に不適當なるに非ざる可く當地の天氣の觀測中に快晴の場合少なき故従つて最も少なき七・一四%を示し居るなるべし。

第三十八表

雲 量、濕 度	秋 季		春 季	
	雲 量	濕 度	雲 量	濕 度
と 天 氣	一	一一	一	一一
快 晴	四七	九〇	五七	六九

雨	曇	晴
八—一〇	八—一〇	二—八
八九—一〇〇	七三—九〇	四五—一〇〇
一〇	六一九	二—九
一〇〇	五五—八八	四四—九五

次密雲に閉され又は降雨に遭遇し、進路の展望を妨げられその他風向、風力等種々なる氣象上の變化により飛行困難となり、ここに秋季幼鳥を伴なへる大群の場合は益々困難になり、群の散亂、又は通路を迷ふことを恐るゝものゝ如く、斯くの如き場合は高空を飛翔中のものも漸次降下し來り一時適當なる地に避難すること飛行機の不時着陸等しく前述の如く曇り、雨天の場合に於ても比較的
多き觀察を得たるなるべし。

「渡り」と風向と風力との關係

この場合も密接なる關係を有すること又蛇足を要せず、其の「渡り」この關係は天氣に於けること同様無風の場合最も多く前記晴の
第三十九表

風	向	秋季渡來	春季渡來	合	計	%
	無	五〇	七	五七	五七	四九・一三
	東	四	三	七	七	六・〇三
	西	六	九	一五	一五	一二・九三
	南	一九	六	二五	二五	二一・五五
	北	一	一	二	二	〇・八六
	東南	二	二	四	四	三・四四
	西南	四	一	五	五	四・八二
	北東	一	一	二	二	〇・八六
	北西	一	一	二	二	〇・八六

風	力	秋季渡來	春季渡來	合	計	%
	四 三 二 一 〇	二 六 一七 一三 五六	〇 三 三 一六 七	二 九 二〇 二九 六三	二 九 二〇 二九 六三	一・六二 七・二三 一六・二六 二三・五七 五一・二一

場合と共に平穩なる日に渡來を見ること多し、次は南風多く秋季南方越冬地に渡來するに好都合なる風向と云ふ可く斯かる場合の風力（風速毎秒米一は一・五—三・五、二は三・五—一八・〇）は一——にして微弱なるものなりき、而して春季に於ては北方の繁殖地に至るなれば北風が好都合なることなるべしと考ふれど觀察は然らず、未だ一回の北風の場合の渡來を見ず。

又、風力次第に加ふるに従つて其の渡來の觀察少なきは強き風力は「渡り」に不適當なることを明らかに證するものなり。

以上にて余の觀察に據る若柳附近に於ける鶺鴒・千鳥類の「渡り」を季節、温度、湿度、風向、風力、雲量並に天氣に就て記述せしが其の氣象上の觀察は午前十時一回のみなれば、本種類の多く渡來する夜間又は高空を飛翔せる等の場合は遺憾ながら多少相違せしことなるべし。

「渡り」と緯度との關係

北緯三十八度四十七分に位する若柳町附近と北緯三十五度三十三分に位する六郷川口とは地勢の相違並に各種類の習性等の關係上兩地に共通なる種類は少なく第四十一表に示せし如く、これに據れば秋季は北方繁殖地より渡來する場合は緯度高き若柳附近に早く、即ち、タゲリ、ムナグロ、キヨジョシギ、ダイシヤクシギ、ツルシギ、クサシギ、キアシシギ、イソシギ、アヲアシシギ、トウネン等は六郷川口に比し約十日位早し、（但し、タゲリ、ムナグロ、ツルシギの渡來は六郷川口の場合と差違甚だし、され共も若

第四十一表

六郷川口の観察は黒田理學士に依る。

種名	渡來期	六郷川		同去期	若柳	附	
		川	口			附	近
タゲゼン	一二月頃	同去期	三月頃	同去期	渡來、秋、冬季	同去期	來、春季
ムナグロ	七月下旬	同去期	四月下旬	同去期	八月下旬	同去期	三月下旬
コチドリ	十月上旬	同去期	四月下旬	同去期	八月下旬	同去期	四月下旬
キヨシヨシギ	七月下旬	同去期	四月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ダイシヤクシギ	八月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ホウロクシギ	八月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
オホソリハシシギ	八月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
チガロシギ	九月上旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ツルシギ	一月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
クサシギ	一月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
キアシシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
イソシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
アチアシシギ	九月上旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
トウネン	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ハマシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ハシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
タマシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬
ヤマシギ	七月下旬	同去期	五月下旬	同去期	八月下旬	同去期	五月下旬

柳附近には表記の通り早く渡來す。又ダイゼンの場合若柳附近の観察は不充分なり。而して春季は南方の越冬地より渡來するなれ

ば秋季は反對に六郷川口に早きは當然なることなり、即ちムナグロ、キヨジヨシギ、ダイシヤクシギ、キアシシギ、イソシギ、トウネン等の場合の如し、(但し、ツルシギ、ホウロクシギの春季渡來は若柳附近の方早かりき) 尙オホソリハシシギ、チグロシギ、ハマシギ、タシギ、ヤマシギ等の場合は秋季に於て兩地共殆んど其の渡來を一致す。

斯くの如く緯度の相違は其の兩季に於ける渡來の季節に多少相違を來すなれ共緯度相等しき地方にありては兩季の「渡り」も亦非常なる相違なきこと六郷川口と北米に於けるこの比較の如し(六郷川口に於ける鶺鴒・千鳥類の「渡り」四二頁参照)。

蕃殖地と「渡り」との関係

鶺鴒・千鳥の「渡り」と蕃殖地との關係に就ては已に六郷川口に於ける鶺鴒・千鳥類の「渡り」四六一—五五頁に詳しく記載せらるゝが尙ほ若柳附近に渡來する時期と蕃殖地並に越冬地との關係に就て述べんに、二十三種の中イカルチドリミコチドリこの二種は當地方にて蕃殖するものにて尙越冬する場合もあれ共多くは冬季小移動をなすも遠くへ赴かざるものゝ如し而して春季は四月中旬より渡來し始め其の蕃殖は四月中旬より六月中旬に至る間に於て秋季は十月上・下旬已に越冬地へ渡去す。又冬季見らるゝものゝ内には本邦に留鳥なるものあり云ふ。アラシギは亞細亞にありては北極圏に入り最北の地にて蕃殖するコシギ並に北緯三〇度より六七度云ふ大區域にて蕃殖する故其の「渡り」は不規則なるべけれ共も當地方にては十一月以降渡來し越冬す、尙クサシギ(秋季十月下旬渡去するも尙越冬せる場合あり)等の場合を除き蕃殖地と越冬地の遠近と其の「渡り」の時期とを比較せば第四十二表の如し又第四十三表は春秋兩季の渡來と其の蕃殖期との關係を表示せるものなり。

第四十一表

*印あるは黒田理學士の調査に依る。

種名	蕃殖地		蕃殖の月		越冬地		若柳附近に於ける渡來期	
	*	*	*	*	*	*	秋	春
イソシギ	北緯二三・三〇—北緯五五	五	月	頃	北緯一五—南緯二〇	七月	上旬	不
タシギ	北緯三六・七—北緯三三	四	月上旬	五月	北緯二五—北緯五	八月	下旬	四
								月中
								旬
								明

タ グ リ	北緯四〇—北緯五五	三月—四月上旬	北緯二五	八月下旬	二月下旬
オ ホ シ リ ギ	新世界にては 北緯五三—北緯六三 舊世界にては 北緯四〇—北緯五五	五月上旬—八月中旬	北緯二五—南緯四〇	八月下旬	不
キ ヨ シ シ ギ	北緯四五—北緯八三	六月上旬—七月下旬	北緯三〇—南緯四〇	七月中旬	五月中旬
ト ウ ネ ン	北緯五一—北緯七五	六—七月頃	北緯二五—南緯二〇	七月上旬	不
ホ ウ ロ ク シ ギ	北緯五一—北緯五五	六—七月頃	北緯一六—南緯二〇	不	三月下旬
チ グ ロ シ ギ	北緯五一—北緯五五	六—七月頃	北緯二五—南緯二〇	九月上旬	五月下旬
グ イ シ ヤ ク シ ギ	北緯五三?	四月上旬—五月下旬	北緯二五—北緯 八	八月中旬	不
キ ア シ シ ギ	北緯五五?	不	北緯二五—南緯二〇	七月中旬	五月中旬
ア チ ア シ シ ギ	北緯五五	五—六月頃	北緯二五—北緯二〇	八月下旬	不
ク サ シ ギ	北緯五五	五月下旬頃	北緯三六—赤道直下	九月中旬	不
ム ナ グ ロ	北緯五八—北緯六七	六—七月頃	北緯二五—南緯四二	八月下旬	四月下旬
エ リ マ キ シ ギ	北緯五五	五—六月頃	北緯二五—赤道直下	九月中旬	不
ハ マ シ ギ	北緯六五—北緯七三	六月中旬頃	北緯三三—赤道直下	八月中旬	不
ツ ル シ ギ	北緯六八—北緯六九	五月—六月上旬	北緯二五	九月中旬	三月
グ イ ゼ ン	北緯六九—北緯七三	六月—七月上旬	北緯二五—南緯二〇	九月中旬	三月

第四十三表

種	名	春	季	渡	來	蕃	殖	期	秋	季	渡	來	
タ シ ギ	タ シ ギ	四	月	中	旬	四	月	上	旬	五	月	八	月
タ シ ギ	タ シ ギ	二	月	下	旬	三	月	上	旬	四	月	上	旬
オ ホ シ リ ギ	オ ホ シ リ ギ	*四	月	中	旬	五	月	上	旬	八	月	中	旬
キ ヨ シ シ ギ	キ ヨ シ シ ギ	五	月	中	旬	六	月	上	旬	七	月	下	旬

ホ	ウ	ロ	ク	シ	ギ	*五	月	上	旬	六	—	—	七	月	八	月	下	旬
チ	グ	ロ	シ	ギ	五	月	下	旬	六	—	—	七	月	九	月	上	旬	
ダイ	シ	ヤ	ク	シ	ギ	*三	月	中	旬	四	月	上	旬	—	五	月	下	旬
キ	ア	シ	シ	ギ	*四	月	中	旬	六	—	—	七	月	な	る	べ	し	
ア	チ	ア	シ	シ	ギ	*五	月	上	旬	五	—	—	六	月	七	月	中	旬
															八	月	下	旬

* 印は六郷川口の場合なり

右を綜合すれば即ち同緯度にて蕃殖するものにて其の「渡り」に相違あることタグリ、オホソリハシシギ(北緯四〇——六六・三に亘るも多くは五五度)ホウロクシギ、チグロシギ、ダイシヤクシギ、キアシシギ、アチアシシギ、クサシギ、エリマキシギ等の場合の如し。

又極めて北方にて蕃殖すれ共秋季早く來り、春季も亦早く來る場合あり即ちトウネン、ダイゼン(六郷川口の場合)の例の如し、次にオホソリハシシギ、ムナグロの如く最南の越冬地に至るものは秋遅く春も亦遅し、而して極めて北方にて蕃殖する故秋は遅く而して春季の早きは即ちツルシギ、ダイゼンの如し、又キヨジョシギ、キアシシギの如く秋季の渡來は早く春季は遅き場合もあり、尙蕃殖地は遠からざるも秋遅くされ共春季の早きタシギ、タゲリの如きあり、以上に據れば鶴・千鳥の渡來は蕃殖地と越冬地との遠近と其區域の廣狹並に蕃殖の時期(第四十三表参照)の早晚等種々なる場合の組合せに依り其の「渡り」は各種一様ならざるものなり。

結 論

其の「渡り」の起因に關しての諸説は今之を略し本種類の渡來に就て已に記述せるところを綜合すれば即ち秋季蕃殖地より直ちに最南の越冬地に至る場合は渡來期と緯度との相違は少なく但し途中諸地に一時滞留する場合は常に緯度の相違と渡來期とは正比例すべく同一緯度に於ては相等しく春季越冬地より蕃殖地に向ふ際は常に非常なる相違なきものゝ如く其の去期は大略一定すそは蕃殖期と密接なる關係を有するものゝ如し、而して春秋兩季に於ける其の滞留は各種の習性、及び棲息地の適不適、食物の發生の多少

個體的差異等により長短あるべく或は地勢の變化天氣其の他の氣象上の種々なる關係により異例の渡來を見るべきこと、又は一時的滯留、若くは完く渡來を見ざる等の場合もあり、又繁殖地と越冬地との遠近による組合せ等其の他種々なる條件によるものなれど其の「渡り」は夜間に多く而して平穩なる時期に渡來するものなることを知り得たり。(完)

筑前の春の鳥界

理學士 黒 田 長 禮

大正十一年三月十二日東京出發四月十一日に歸京する迄の間、北九州筑前に滞在し鳥類採集並びに觀察をなしたる結果を左に報告せん。※印あるは九州より始めて報告せられし種類なり。

(一)アオ *Columbus strillatus* Pontopidan.

粕屋郡志賀島附近(三月十六日)にて二十羽の群を見る。

※(一)シロエリオホハム *Columbus arcticus pacificus* Lawrence.

博多灣内殘島及志賀島附近(三月十六日)にて五六十羽の群に出會し二羽を採集す。粕屋郡和白その他各所の海面(三月二十七日)に之れを見一羽を採集す。糸島郡芥屋村福の浦及岐志(三月二十九日)にて數羽を見る。濱の町海面より志賀島に至る間(三月三十一日)にて可なり多數を見る。糸島郡今津灣内外(四月九日)にて二十餘羽を見一羽を採集す(第四十六圖参照)九州に眞のオホハムの渡來するものありや否やは疑問に屬し多くは此種類なるが如し。

(二)ハジロカイツブリ *Oedijtes nigricollis nigricollis* (Brehm).

粕屋郡唐の原沿岸(三月二十七日)にて一羽を採集し、糸島郡芥屋村字岐志及び福の浦(三月二十九日)にて比較的多數を見四羽を採集す何づれも完全なる生殖羽を示したり、此附近にて蕃殖するものあり得べし。



第四十六圖 今津灣内に於けるシロエリオホハム
(大正十一年四月九日撮影)

(四)アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena holboellii* (Reinhardt).

糸島郡福の浦(三月二十九日)にて數羽を見たり、頸部已に赤羽の生じたるものもありたり。

(五)オホミズナギドリ *Puffinus leucomelas* (Temm.).

福岡市材木町海岸(三月二十四日)にて得、二十三日の暴風の爲め打上けしものなり。

(六)カハウ *Phalacrocorax capillatus* (Temm. & Schl.).

博多灣内殘島(三月十六日)にて少數を見、糸島郡福の浦(三月二十九日)及粕屋郡志賀島附近(三月三十一日)にて各々ウの類を見る恐らく本種なりしならん。

(七)ヒメウ *Urile pelagicus pelagicus* (Pallas).

博多灣内殘島及志賀島附近(三月十六日)にて少數を見たり。

(八)ウミアイサ *Mergus serrator* Linn.

早良郡室見川口(三月十六日)にて五羽を見、粕屋郡和白(三月二十七日)にて一羽を見、糸島郡福の浦(三月二十九日)にて二羽を見、同郡今津灣(四月九日)にて四羽を見二羽を採集す。

(九)ピロウドキンクロ *Melanitta fusca stejnegeri* (Ridgway).

博多灣内殘島及志賀島附近(三月十六日及三十一日)にて四五百羽の群を見三羽(雄成鳥)を採集す。



第四十七圖 志賀島附島に於けるピロウドキンクロの群飛(海面に浮べるはウミスズメの群なり)
(大正十一年三月十六日撮影)

(一〇)ホ、ジロガモ *Glaucionetta clangula clangula* (L.).

濱の町海濱附近(三月十六日)にて数百の群を見、粕屋郡名島附近

(三月二十七日)にて少数を見一羽を採集す。糸島郡岐志(三月二十九

日)にて少数を見、濱の町海上より那珂川口に至る間(三月三十一日)に

て本種(?)の群を見たり。

(一一)スズガモ *Marela marila murrioides* (Vigors).

粕屋郡和白(三月二十七日)にて数百の群を見一羽(雌)を採集す。

(一二)ヨシガモ *Fimetta falcata* (Georg.).

糸島郡(三月下旬)にて獲られし雌成鳥一羽を安部幸六氏より寄贈

せらる。

(一三)トモエガモ *Nycticorax nycticorax* (Georg.).

糸島郡(三月下旬)にて獲られし一番を購入し又同所の一番を安部

幸六氏より寄贈せられたり。

(一四)トビ *Milvus lineatus lineatus* (Gray).

糸島郡岐志(三月二十九日)にて一羽を見、同郡今宿(四月九日)に

て一羽を見たり。

(一五)ハイタカ *Accipiter nisus nisosimilis* (Tyeckl.).

糸島郡櫻井(三月十九日)にて獲られたる雌一羽及び粕屋郡(三月二十一日)にて獲られし雄一羽を小嶺武雄氏より寄贈ありたり。

福岡市藝園山(三月二十四日)にて一羽を見、粕屋郡名島(三月二十七日)にて一羽を見たり。

(一六)クヒナ *Rallus aquaticus indicus* Blyth.

糸島郡 (三月下旬) にて獲られし雄一羽を入手す。

(一七)シロチドリ *Aegialophilus alexandrinus deubatus* (Swinhoe).

糸島郡芥屋村字新町の川口 (三月二十九日) にて三羽を見雌一羽を採集す。此標本は可なり發育せる卵を有したるにより此地方にて蕃殖し得るものと認む。同郡今津灣 (四月九日) にて六羽を見たり。

(一八)ホウロクシギ *Numenius cyanopus* Vieillot.

粕屋郡和白 (三月二十七日) にて二羽を見る。

(一九)ヤマシギ *Sceloporus rusticola rusticola* Linn.

福岡市警固山 (三月二十四日) にて一羽を見たり。安部幸六氏より糸島郡 (三月下旬) にて獲られし一羽を贈らる。

(二〇)タシギ *Capella gallinago raiidai* (Baturin).

糸島郡今津 (四月一日) にて三好彌六氏銃獵の九羽を贈らる。同所 (四月九日) にて余の獲たる一羽は尾羽十四枚ならずして十二羽のみなりき (二羽脱落せし跡なし)。

(二一)タマシギ *Rostratula benghalensis benghalensis* (L.).

糸島郡今津 (四月一日) にて三好彌六氏の獲られし一羽を贈らる。

(二二)セグロカモメ *Larus argentatus regae* Palmen ?

博多灣内鶴來島 (三月十六日) にて少数を見、又那珂川口 (三月二十七日及三十一日) にて少数を見る。恐らく本種ならん。

(二三)ウミネコ *Larus crassirostris* Vieillot.

福岡市中島橋附近の那珂川の洲上 (三月十三日) にて少数を見、早良郡室見川口 (三月十六日) にて少数を見たり。

(二四)ユリカモメ *Larus ridibundus* Linn.

福岡市那珂川の洲上(三月十三日)にてウミネコミ混群せるものを見る稍々多数なりき。濱の町海上及那珂川口(三月三十一日)にて見る。本邦に渡來するユリカモメ類に二亞種あり一つを *L. r. sibiricus* (ユリカモメ) 他を *L. r. sibiricus* (オホユリカモメ) とす。未だ此兩者の調査を充分なしたるこゝなきを以て筑前産のものは何づれに屬するや明記するを得ず。

〔註〕(一五) マダラウミスヅメ *Brachyramphus narmoratus perla* (Pallas).

博多灣内殘島及志賀島附近にて十二三羽を見六羽を採集し調査したるに雌五羽、雄一羽のみなりき。本種は次のウミスヅメ混群せぬものゝ如く海面にては稍々分離し居たり。



第四十八圖 志賀島前に於けるウミスヅメ千餘の大群(大部分のものは海中に墜入し居れり)

(大正十一年三月十六日撮影)

博多灣内志賀島附近(最多し) 鶴來島附近及室見川口等(三月十六日)にて群を見たり特に志賀島附近にては千餘の大群に出會し撮影し(第四十八及四十九圖参照)十羽を採集す。粕屋郡名島、和白及唐の原並びに濱町海上(三月二十七日)にて八羽を採集す。



第四十九圖 志賀島前のウミスズメ小群とイカナゴ漁の状況
(大正十一年三月十六日撮影)

糸島郡岐志及福の浦(三月二十九日)にて五羽を採集す。鶴來島、志賀島間(三月三十一日)にて少数を見しも三月十六日の如く多からず。

今回多數を得生殖羽のものを調査したるに黒喉にして白羽頭側にあるものは一般に雄成鳥なるも一羽の雌(老鳥?)にもこの生殖羽のものありたり只多少喉の黒色部廣からざるを知れり。生殖羽を示さざる雌雄にありて睪丸及卵巢は共に生殖羽のもの同大に發達せし個體あり故に恐らく二年鳥にても蕃殖する能力ありと信ぜらる。

ウミスズメ、マダラウミスズメ、アビ、シロエリオホハム等はイカナゴ漁中の爲めに此時期に大群をなして渡來するなり、毎年同様なりと云ふ。

今回はカンムリウミスズメを一羽も目撃せず。

※(二七)コウミスズメ *Ciconia pusilla* (Pallas)?

博多灣内志賀島附近(三月十六日)にてウミスズメ大群より分れて單獨に浮べる只一羽を目撃したる小形のもの(ウミスズメの半分位)は殆んど誤りなき本種なりしも容易に接近せしめず極めて迅速に飛び圓味多く恰もゴムマワリの如くに見えたり。九州の如き南方地に渡來するは稀れなることなるべし。

(二八)キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham).

糸島郡周船寺(三月十九日)にて獲られし一羽を小嶺武雄氏より贈られたり。

(一九)アナバト *Sphenurus sieboldii sieboldii* (Temm.).

糸島郡 (四月初旬) にて獲られし一羽を入手す。

(二〇) キウシウコゲラ *Yungipicus kizuki kizuki* (Temm.).

早良郡生の松原 (三月二十九日) にて鳴聲を聞く、粕屋郡志賀島 (三月三十一日) にて少数を見る。

(二一) ヒバリ *Alauda arvensis japonica* Temm. & Schl.

早良郡堤 (三月二十六日) にて一羽を採集し、糸島郡今津 (四月九日) にて可なり見たり。

(二二) ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Kittlitz.

糸島郡芥屋村字新町 (三月二十九日) にて一羽を採集し、同郡今津 (四月九日) にて一羽を見たり。

(二三) ビンズイ *Anthus trivialis hollisoni* Richmond.

福岡市警固山 (三月二十四日) にて少々多く目撃す。

(三四) タヒバリ *Anthus spinoletta japonicus* Temm. & Schl.

福岡市平尾 (三月二十四日) にて少数を見、糸島郡今津 (四月九日) にて少々多く見たり。

(三五) ヒョドリ *Microceles amurensis amurensis* (Temm.).

糸島郡 (三月中旬) にて獲られし三羽を入手す。博多灣内残島 (三月十六日) にて少数を見又志賀島 (三月三十一日) にて少数を見る。

(三六) シグミ *Planesticus eunomus* (Temm.).

早良郡 (三月中旬) にて獲られし一羽を入手す。粕屋郡 (三月二十一日) にて小嶺武雄氏の獲たるものを贈らる。同郡唐の原 (三月二十七日) にて少々多くを見る。

(三七) シロハラ *Planesticus pallidus* (Gmelin).

博多灣内殘島(三月十六日)にて一羽を見る。小嶺武雄氏より糸島郡周船寺(三月十九日)にて獲たるものを受く。

(二八)イソヒヨドリ *Monticola solitarius magnus* (La Touche).

福岡市濱の町(三月二十七日)にて一羽を見る。

(二九)ジャウビタキ *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas).

博多灣内殘島(三月十六日)にて雄一羽を見、福岡市内大名町(三月十八日)にて雄一羽を見、福岡市警固山(三月二十四日)にて三羽採集、早良郡油山麓及同友泉亭(三月二十六日)にて三羽採集、粕屋郡唐の原(三月二十七日)にて三羽を見一羽を採集す。本種は北九州には多し。

(四〇)ウゲヒス *Horornis cantans cantans* (Temm. & Schl.).

博多灣内殘島(三月十六日)にてチャツチャを聞く少し。福岡市警固山(三月二十四日)にて一羽を見、早良郡堤(三月二十六日)にて一羽採集、同油山(同日)にも見る。粕屋郡唐の原(三月二十七日)にて一羽を見たり。

(四一)セツカ *Cisticola cisticola bruniceps* (Temm. & Schl.).

糸島郡今津(四月九日)にて二羽を見る。

(四二)ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* (Scopoli).

福岡市濱の町(三月十六日)にて一羽を見るこれ當地にては大正十一年春の初渡來者なり。大堀には多く飛翔せるを目撃す。早良郡油山麓(三月廿六日)にて一羽採集、糸島郡今津(四月九日)にて數羽を見たり。

(四三)レンジャク類 *Bombycilla*.

福岡市大名町(三月十九日)にて約五十羽の群を見る。ヒレンジャクミキレンジャクミの混群なりと云ふ者あり。遠かりし爲め余は兩者中何づれなるかを認め得ざりき。

(四五)キズ *Lanius bucephalus* Temm. & Schl.

粕屋郡（三月二十一日）にて一羽を得、福岡市警固山（三月二十四日）にて一羽を見たり。

(四六) キクイタヅキ *Regulus regulus japonensis* Blakiston.

福岡市警固山（三月二十四日）に多く三羽採集、早良郡堤（三月二十六日）に稍々多し。同郡生ノ松原（三月二十九日）にて一羽を採集。博多灣内志賀島（三月三十一日）にて群を見たり。

(四七) シマシジフカラ *Parus major quepariensis* Kunoda.

早良郡油山觀音附近及堤（三月二十六日）にて少數を見たり。北九州に産するものは本州のシジフカラと同定するよりも濟州島、對馬、及壹岐に産するシマシジフカラと見る方可なるが如し。

(四八) キウシウエナガ(新稱) *Aegithalos caudatus kiusiensis* Kunoda.

福岡市警固山（三月二十四日）にて少數を見、早良郡油山觀音附近（三月二十六日）にても少數を見たり。余は九州産の種類を本州産より區別して上記の如く命名したり即ち翼及尾短かきを特徴とす記載は "Auk" XL, 1923, P. 313 に掲載せらる。

(四九) カラス類 *Corvus*.

今回觀察せし *Corvus* 屬のものは凡てハシブトガラスらしく見えたるも確實ならざるにより種名を決せず。博多灣内殘島（三月十六日）にて二羽を見、糸島郡櫻井附近（三月二十九日）にて群集せるを見たり或は次の種類なりしか。博多灣内志賀島（三月三十一日）にて二羽を見たり。

(五〇) ミヤマガラス *Tyrannocorax fragilis justinator* (Gould).

遠賀川附近列車中（三月十三日）より數百の群飛せるを見たり、恐らく本種の渡去の爲め群集せるものなるべし。又福岡驛附近にて列車中（四月十日）より再び數百の群を見たり。

※(五一) ハシナガホシガラス *Nucifraga caryocatactes macrohynchos* Brehm.

大正十一年二月五日博多灣内殘島にて獲られし一標本を入手したり。本標品はホシガラスにあらずしてハシナガホシガラスなるこ

ご測定上より明かなり。九州にて此類の獲られたる報告なく本標品は只一個の恐らく朝鮮より迷ひ來りしものなるべし。余の有する樺太の一標本も亦本亞種に屬す。

(五二)メジロ *Zosterops palpebrosa japonica* Temm. & Schl.

福岡市大名町(三月十四日)少數を見、同市警固山(三月二十四日)には多く三羽採集、早良郡油山及堤(三月二十六日)にて多數を見、粕屋郡唐の原(三月二十七日)にて二羽を採集す。

(五三)イイジマメジロ *Zosterops palpebrosa tjinne* Kuroda.

博多灣内殘島(三月十六日)にて雄一羽を採集、志賀島(三月三十一日)に多し。

(五四)コカハラヒワ *Chloris sinica minor* (Temm. & Schl.)

福岡市警固山及平尾(三月二十四日)にて少數を見、糸島郡芥屋村字新町及早良郡生の松原(三月二十九日)にて少數を見たり。

(五五)ウソ *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* Lafresnaye.

粕屋郡(三月二十一日)にて獲られし雌一羽を小嶺氏より贈らる。

(五六)スゝメ *Passer montanus saturatus* Stejneger.

福岡市大名町(三月十四日)に少く、博多灣内殘島(三月十六日)に稍多く、福岡市警固(三月二十四日)に少數を見、早良郡油山麓及堤(三月二十六日)にて二羽を採集す。

(五七)ミヤマホホジロ *Emberiza elegans* Temminck.

福岡市警固山(三月二十四日)に稍多く三羽を採集す。

(五八)アナジ *Emberiza spodocephala personata* Temm.

福岡市警固山(三月二十四日)にて少數を見、早良郡友泉亭(三月二十六日)にて少數を目撃せり。

(五九)イイジマホホジロ *Emberiza cioides tjinne* Stejneger.

博多灣内殘島（三月十六日）に稍多く一羽を採集す。

（六〇）ホ、アカ *Emberiza fucata fucata* Pallas.

福岡市平尾（三月二十四日）に少なく一羽採集、早良郡友泉亭（三月二十六日）にて一羽採集又糸島郡今津（四月九日）にても一羽を採集せり。

（六一）カシラダカ *Emberiza rustica* Pallas.

粕屋郡唐の原（三月二十七日）にて少群を見一羽を採集す。

雌が雄のやうになつた雌の話

去勢すれば潜在する異性の質が出る。久留米の或人が飼育して居つた雌に面白い現象が起つた。といふのは其人が十年ばかり前に八女郡黒木附近でやつと獨立し得る様になつたばかりの雛雌二匹を捕つて来て自分の家で飼育して居るうちに卵も六七個は産む様になつた、處が雌が病氣か何か分らないが變れてしまつたので雌一羽になつたが其後は勿論卵を産まないやうになるし、妙な事にはだんく體の模様が變つて来て脚の趾爪の極く小さい處や腹部の毛などは未だ雌の様な處があるが頭部其他は雄の毛に變り、尾の草摺毛なども立派に生へて一年ばかりたつ間に全く雌が雄の様な形に變つてしまつた。

其後惜しい事には其男になつた雌は野獸に襲はれて驚いて金網に體をしたたか打ちつけた爲めに骨を折つて死んだので後で解剖して見ると、ラツパ管や輸卵管はあるが卵巢は萎縮して見當らなかつた、又一部に脂肪變性を來して居つたと云ふ事である。

之について九大農學部の博士の説を聞くと人間に於ては女は男の性質を持たないが男には女の性質が潜在して居ると云はれて居る。鳥は丁度之と反對で雌には元來雄の性が潜在して居るもので卵巢を剔出するか又は病的の原因の爲めに卵巢が萎縮すると雄の性質を表すもので之は内分泌の關係に由る事は云ふまでもない。鶏でも鴨でも雌でも同じ事で前に云つた様な場合は要するに自然的去勢に外ならぬ。

海かに、などはサツキユリナと稱する寄生蟲が寄生すると血液の成分に變化を來たして雌が雌となるものもあるが之も自然的去勢の一例である。

斯様に自然的去勢に依つて雌が雄に變化するので従つて人工的にも雄の形した雌を作る事が出来る。外國では斯して作つた變種がいくつもある。

セブライトバンナムと稱する鶏は雄でありながら雌の様な形をして居るものである、然し飼育して居る雌に自然的去勢が行はれたと云ふ事は兎に角めづらしいと云はれて居る（大正十二年五月二十八日福岡日々新聞による）。



講 話

鳥 學 之 歷 史 (下)

和 田 干 藏

第二項 我國に於ける鳥學の歴史概要

我國鳥類研究に關する歴史の概要を按ずるに從來は稀に鳥類を蒐めたる人ありしも之を眞の學術的に修業せしは實に明治維新後のここにして其の進歩極めて遅々たるが如し、維新前に於ける本邦鳥類蒐集者には二様の種類あり、一は諸侯の命により諸鳥類を採集せんため各地を跋涉せるものにして時として頗る熱心に行ひ之を家傳の定業の如くなせるものさへありき。他の一派は單に鳥類の奇形及び鳴聲を愛玩せるものにして其の形態の奇き音聲の美きを競へり。而して何れも皆簡單なる外形の特徴のみに注意し未だ以て學問と稱するに足らず、只本草家の一部に鳥類の片影を認めしものあるのみなりき。從て著述も一二に止らずと雖も極めて幼稚なる内容を有せしが如し。當時有名なる鳥類家として知らるゝは堀田正順、蘇生堂主人(本名未詳)、毛利梅園、佐藤中陵等の諸氏なりとす。而して著述の方面を通覽するに、慶安二年己丑蘇生堂主人鶉書一卷を著して上木し、同氏は更に寶永七年庚寅(紀元一三七〇)には諸鳥呼子鳥三卷を著し鳥類の飼養法を説述せり。正徳三年癸巳(紀元一三三二)に寺崎良安(浪華の字を尙願と云ひ杏林堂と號し醫を業とせり)氏は和漢三才圖會と稱する一大雜書を作り其の中に鳥に關する記事數多を藏せり。延享元年甲

子(紀元二四〇四)田中長興氏は太平鶴譜を著し鶴の種類及び關係せる事實を輯録せり。又之より先年享保二年丁酉(紀元二七七七)には佐馬介氏諸禽萬益集を作り諸鳥類の形狀、捕方、飼養法等を記述せり。其の他の著述を年代の順を願慮せず不順序に記述せんに享和二年壬戌(紀元二四六二)比野勘六氏の作になる鳥骨案山子あり、其の内容は諸鳥類の飼付方療養法より本邦鳥舶來諸鳥類の飼養法等あり。次で同氏は文化八年辛未(紀元二四七一)諸鳥馴養秘傳三卷を書き、日本鳥唐土鳥の諸鳥類を網羅して其の形狀産地を説き且飼養法療病法をも述べたり。其の他比野氏は鳥博士續篇及び唐紅毛渡鳥集等を著し、後者は支那其の他の諸國より渡來せる鳥類の飼養法を記したるものにして享和二年壬戌(紀元二四六二)の作なり、前者は鳥類の系譜飼養の來歴等を記し、和鳥を七十七種に分ちて各形狀飼養法を説き藩主へ奉りしものなり。尙同氏の著に係はる養禽物語(文化年中の作)も有益なるものとす、因に比野氏は薩摩藩の鳥方にして重行と稱せり。弘化四年丁未(紀元二五〇七)には柏原信好氏舶來玩禽一覽一卷を草し舶來禽類凡そ二十六種を列記せり。文化五年戊辰(紀元二四六八)には佐藤成裕(水戸の本草家にして中陵と號す)飼籠鳥(二十卷)を著述せり、之は汎く和漢書を引證して諸鳥の事を詳記せるものにして、書中の種目を擧ぐれば飼法部六十六條、雞部十六種、鳩部二十種、鸚鵡部二十七種、山雀部二十種、駒鶯部二十二種、雀部三十種、諸雀部四十三種、黃鳥部二十三種、鳥鵲部二十二種、候鳥部十四種、鳩鶯部四十二種、鷓鴣部二十七種、鵝鴨部三十六種、鶴部二十七種、鷹部一種、隼鵬部二十八種等あり。寛政十一年己未(紀元二四五九)には泉花堂三蝶(十六兵衛と稱す東都の人なり)諸鳥餌食百千鳥を書き諸國鳥類を網羅して圖説せり。仁孝天皇天保十二年辛丑(紀元二五〇一)の春宇久比須考(二卷)なる書は千葉直胤氏によりて著され内容はウグヒスに關する諸種の考證なり、上卷は鶯の説なれども附して鶯ミウグヒスとは異なること云ふことより老ウグヒスをムシクヒと云ふことに及ぶ十三條よりなり、下卷はウグヒスのカヒコの中の杜鵑の説より鶯ミウグヒスの異名に至る十三條凡て二十六條の和漢古書百五十九部を参照して考證せり、尙追加するに百千鳥考八ヶ條を以てせり(千葉氏は塙保己一の西人にして江戸の和漢學者なりき)。又著者未詳なれども四鶯説なる作品あり、之は鳥族(鶉)の事に關する考證にして幾多の漢書より徵論す、老鶉と云ひ茅鶉と云ひ角鶉と云ひ、泉鶉と云ふ四説を擧げて論斷せるものなり、漢文無點にて記され海保漁村の校正を経論說中には安政萬延の年號あり。光格天皇寛政五年癸丑(紀元二四五三)

關盈文氏海舶來禽圖說一卷を著す、舶來鳥を寫生し其の生態を記せり。尙著者及び年代共に未詳なれども鳥類寫生圖と稱する三十
八枚より成れる圖書あり、内容は鳥類四十餘品の彩色畫に各其の釋名を考記したるものにして鶯二品、香鴨、眞鴨、鳧之一種二品
マグソタカ、鶺鴒、都鳥、錦鷄、墨是可國雞、ヘラサギ、鴻、四十雀雁、貉、白鷗、鳧之種類六品、青莊鳥、鷓、信天綠、鷓、五
位鷺、鶉、鶺鴒、雁、サカツラヒシクヒ、慈鳥、鳥、鴉、鶉、鶉二品、鶉、鶉、雉、ケリ、アマサギ、高麗雉、斑鳩、白鴉等を收
載せり。

以上の外鳥類に關する著述は頗る多く主なるものを列記せば次の如し。

著述者	書名	冊卷	年代	備考
小野 蘭山	蘭山禽譜	一	未詳	和漢禽類を蒐集圖說せり
秋元 萬藏	養鶯辨圖	一	文政元年	養鶯記事なり
未詳	鳥の系圖	一	未詳	鳩の種類五十種の表裏を着色して百圖に描けるものなり
未詳	和漢花鳥譜	二	未詳	和漢家駝の諸説を編輯せるものなり
未詳	鳩圖	一	未詳	諸種の異鳥百種を着色寫生せるものなり
凡芳子春(加賀)	駝史圖	一	未詳	鶯の飼養法を評論せり
未詳	百鳥圖	二	未詳	鳥類を網羅して椽木、唱雞游の諸類に分ちて詳説せり
鶯舍半藏	春鳥圖	一	弘化二年	鶯の飼養に關する事項を記せり
未詳	將翁軒禽譜	二	文政十一年	
未詳	鶯飼様口傳書	二	嘉永二年	
鼓腹堂山人	鳥詔鼓吹抄	一	安永四年	鶯の飼方を記述せり而して藤村如皐の序を載せた

泉花堂三蝶	諸鳥飼養百千鳥	二	未	詳
堀田正順	觀文禽譜	一	未	詳

尙以下書名のみを示して参考に資せんこす。

業餘禽錄 禽 譜

飼鳥冊 百鳥圖贊

百千鳥 鳥名便覽

類聚禽譜 止利乃保無

應鵲秘傳 鳩 史

蓄翎秘訣 風鳥暗呼類

山封陸禽譜 寫真鳥かゞみ

水谷氏禽譜 白 鷹 記

我國に於ける鳥類研究は斯の如く古來幾多の本草學者及び醫家の手によりて研究せられ、其の著述も一二に止らずしてガン、カモサギ、ツル、タカ、ウグヒス、メジロ、フクロフ等の如き普通有用の種類は之を識別し得たりと雖も、是も往々他のものと混同せるもの蓋し少しせせず、又其の分類の如きに至りては甚だ不完全にして到底學術上寸厘の價値あるものにあらざりき、而るに泰西諸國にありては夙に本邦産鳥類に注目し之か研究に従事せるもの尠からず、今其の一端を叙するも趣味あることなれば左に予の知れる所を述べんこす。

獨逸のシーボルト(Philipp Franz Von Siebold, 1796—1866)氏は文政五年(西紀一八二二年)職を和蘭東印度會社に奉じ文政六年(西紀一八二三年)和蘭貢使に隨ひ我國に來り、出鳥醫官として前任者の後を承け醫術を以て人に施し我國醫家に傳ふるの間に我國生物學上

の研究に心を潜めたり、其の結果蒐集せる鳥類に就き西紀一千八百四十五年乃至一千八百五十年に亘り、テンミンク (Temminck) 及
ビシユレーゲル (Schlegel) 兩氏は Fauna Japonica Aves なる主題の下に佛文を以て完全に日本産鳥類を記載せるものを出版せり、蓋し
本書を以て我國鳥類を眞に科學的に研究せる嚆矢とす。次でブラキストン (Bridgton) 及びプライアー (Pryer) 兩氏は明治十三年(西
紀一八八〇年) Catalogue of Birds of Japan を發表し、間もなく明治十五年(西紀一八八二年)には又 Birds of Japan, Trans. Asiatic Socie-
ty を、更に明治十七年(西紀一八八四年)には Amended List of Birds of Japan を出版して大に我國鳥學者の志氣を刺戟せり、明治二
十年(西紀一八八七年)タクザノスキー (Taczanowski) 氏は Liste d. Oiseaux rec. en Corée を、又翌くる明治二十一年にはタクザノスキ
ー氏は Liste suppl. d. Oiseaux rec. en Corée par Kahlowski を公表せり、明治二十三年(西紀一八九〇年)シーゴーム (Seehorn) 氏は Bi-
rds of the Japanese Empire を出版し、明治二十四年(西紀一八九一年)理學博士飯島魁(大正十年三月卒)氏は List of the Birds of
Japan を動物學雜誌に發表し、次で明治二十六年(西紀一八九三年)東京帝國大學元理科大學(今の理學部)紀要に Notes on a collection
of Birds from Tsushima を發表し、明治三十一年(西紀一八九八年)には保護鳥圖譜を出版し大に我國鳥學者の面目を發揮せり。以
後引續き之が研究に従事するもの多きを加へ明治三十三年(西紀一九一〇年)には多田綱輔氏臺灣鳥類一班を出版し、翌三十四年
(西紀一九一一年)飯島氏は我狩獵法律の改正と共に前記保護鳥圖譜を訂正増補し當時の保護鳥類八十四種を擧げ説明するに一々鮮
明なる圖版を以てせり。明治三十八年(西紀一九〇五年)には理學博士八田三郎及び故村田庄次郎兩氏は札幌博物學會報に A preli-
minary List of the Birds of Hokkaido を發表せり。又同年故小川三紀氏は動物學彙報に Notes on Mr. Alan Owston's Collection of Birds
from the Islands lying between Kushin and Formosa を發表し、其の後從來の諸目錄を參酌し最近に行はるゝ分類法によりて明治四
十一年(西紀一九〇八年) A Hand List of the Birds of Japan を動物學彙報に發表し本邦鳥類研究上に一大新面目を發揮するに至れり。
尙小川氏は本邦鳥學者の權威にして分類の方面は勿論鳥類の季節的移住をなすこと等にも注目し、極力其の研究に熱注せしが其の
眞隨の公表を果すに先ちて逝去されしは吾人の深く哀惜に堪えざる所なり。其後諸篤學者出で鳥類に關する研究に従事し明治四十
五年(西紀一九一二年)内田清之助氏は動物學雜誌第二百八十三號に千島産鳥類目錄を發表し、又動物學彙報には A Hand List of

Formosan Birds 为题し臺灣産鳥類に關する文献を發表し、尙引續き有益なる文献を動物學雜誌及び其の他の誌上に發表し本邦鳥學を開拓するこゝ甚大なり。聽て明治四十五年(西紀一九一二年)には東京帝國大學元理科大學動物學教室内に日本鳥學會の創設を見るに至れり、本會の目的は鳥類に興味を有するもの、懇親を計るこゝは勿論鳥類に關する學術の進歩を促すこゝ及び鳥類愛護の思想を普及せしめ鳥類保護増殖を圖るこゝ等にあるが故に、年二回機關雜誌「鳥」を發行するの外臨時刊行物を出版し毎年春秋二回會合して鳥類に關する講演會、展覽會等を催す、其の他鳥學的探檢を舉行するこゝ等の事業をなすが故に本邦鳥學發展の徑路愈々確實なるに至れり。最近に至り鑿司信輔、黒田長禮兩氏は何れも鳥學專攻の士にして巨額の私金を投じ或は個人研究所を設け、或は海外探險等を行ふ等極めて熱心に斯學の研究に従事するが故に本邦鳥學は勿論世界鳥學上にも貢獻するこゝ甚大なり。一方政府に於ても各地の鳥類調査に着手し明治四十五年(西紀一九一二年)には農商務省農務局にて内田清之助氏をして鵜類の調査をなさしめ鵜類圖説を出版し又同年海産保護鳥圖説をも出版して世に公表するに至れり。大正三年(西紀一九一四年)には樺太廳に於ても故村田庄次郎氏を囑託して同島の動物を調査せしめ、其復命を樺太動物調査報告と稱して世に普く頒布せり、同書の内容は哺乳類及び鳥類の調査なれども五分の四は鳥類に關する記載にして頗る斯學研究に參考なるものなり。尙樺太の鳥類に就きては囊にレーンベルグ(Lönnberg)氏の調査あり即ち Contributions to the Ornithology of Saghalien を東京帝國大學元理科大學紀要第三十三冊第十四編に發表せられ同島産鳥類を凡そ百八十種こなせり。以上の外前記篤學者は諸種の方面に涉りて鳥類を研究し諸誌上に發表し以て斯學の發展を企劃しつつあるなり。今參考の爲め本邦鳥學に關する著書的一端を紹介し如何に本邦鳥學者は努力しつつあるやを示さむとす。

著者	書名	發行年代	發行所
黒田長禮	世界の鴨	大正元年	日本鳥學會
同	世界の雁と鶺鴒	大正二年	同

内田清之助	日本鳥類圖說(下)	大正三年	警醒社
同	日本鳥類圖說續編	大正四年	同
仁部富之助	郭公の蕃殖に關する研究	大正四年	日本鳥學會
黒田長禮	臺灣島の鳥界	大正五年	同
川口孫治郎	杜鵑之研究	大正五年	寶文館
黒田長禮	鮮滿鳥類一斑	大正六年	日本鳥學會
鷹司信輔	飼ひ鳥類講話	大正六年	裳華房
内田清之助	鳥類講	大正六年	同
内田清之助	鳥類の渡り及蕃殖期	大正七年	東京動物學會
仁部富之助	鳥類圖說	大正七年	裳華房
黒田長禮	六郷川口に於ける鵲千鳥類の「渡り」	大正八年	日本鳥學會
同	邦領南洋諸島産鳥類	大正十年	同

(尙動物學雜誌及び諸誌上なる文献及び科學的ならざる飼養鳥に關する著述は紙面の都合上茲に省略す)

以上の出版物により我國鳥學研究者は大なる便益を享け着々各地に斯學研究に着手せんことを加ふるに至れり。又一方政府は大正七年四月我國內地の狩獵法全部を改正し大正八年四月より農商務省にては狩獵鳥類の種類決定のため野禽類の調査を開始し、技師内田清之助氏主として之に當り其の結果同年九月一日より狩獵法律の實施を見るに至りたるが故に、各府縣に一名若くは二名宛の狩獵取締官吏を設置し以て其の効果を擧げむとせり。而して取締官吏には動物學殊に鳥學の知識を有する者を選定したるに同時に此等の者に狩獵事務に關する講習會を同年七月十五日より向ふ一ヶ月間東京農業大學に於て開催し、狩獵法及各國狩

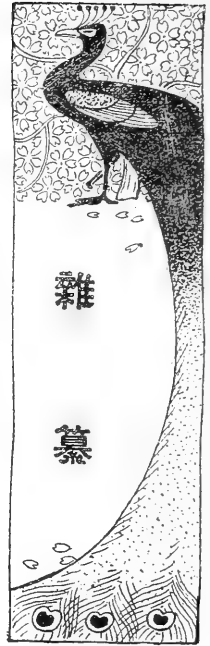
獵法、刑法及び刑事訴訟法、銃砲火藥及其の取締、動物學大意、鳥類生態學及鳥類保護、應用昆蟲學、狩獵鳥獸論、甲種狩獵術、乙種狩獵術其の他科外講話及び實習等の諸學課を講習せり。更に同年秋期より國費を投じて農商務省直轄の鳥類實驗所を東京府下南多摩郡多摩村宇連光寺山元御獵場内に設置し、野生鳥類の習性並に人生に及ぼす利害關係及び利用の研究より進では歐洲産、支那産等の鳥類の孵化育成又は之の内地産鳥との交配等を試験するの機運に向ひたるのみならず、他方に於ては全國數箇所の學校農事試驗場、測候所等に依託して諸鳥類「渡り」の時期及び蕃殖季等を調査せしめ斯種研究の材料を蒐集しつゝあり。又大正九年六月一日より向ふ十日間第二回の狩獵に關する講習會を東京農業大學に於て開催する等諸種の施設を以て斯界の開拓を企圖しつゝあるが故に、必ずや近き將來に於て泰西諸國に遜色なき境域となること疑なかるべし、本邦鳥學に志す者豈奮勵努力せざるべけんや(云)

(泰西に於ける鳥學の歴史はリンネ時代以前を詳記して他は大略す。我國鳥學歴史は大正十年五月頃迄を限度とせり)

燈臺の光で鶯六十羽悉く斃死す

鳥根半島北岸の地藏岬燈臺は從來の瓦斯を廢して電燈を用ふるこゝまし工事中のこゝろ、廿二日竣工したので廿三日夜二千燭光の送電試験を行つたがレンズの擴大により二萬燭光を發して光芒は遠く四十五海里の沖合にまで達し頗る好成绩であつた。この試験の際に附近の山林中から約六十羽の鶯が燈臺の光りに釣られて飛び出し強烈な光線に觸れ悉く斃死した。

(大正十一年九月二十五日大阪毎日新聞に依る)



燈臺にて候鳥渡來に關する觀察

朝鮮西島燈臺 萩原新正

嘗て黒田理學士より脇山三彌氏が旅順白玉山表忠塔に衝突する鳥類に就て(鳥)第一卷第五號五九頁)を送附せられ余の各燈臺に於ける從來の觀察を記述する様依頼を受けしにより以下斷片的に記憶を辿り書き列られたるも燈臺當直中の餘暇になしるもの故重複もあるべく不備の點は寛恕を乞ふ次第なり。

渡來期は五六兩月及九十の兩月最も多し之れは何れも候鳥の渡來する時期にて附近に「渡り」の途中棲息するものが暗夜に飛び立ち燈臺の光を目掛けて飛來するもの多し。故に暗夜殊に俄雨の降りたるとき最も多し。燈臺の光は能く十數裡以上に及ぶを以て其近くに雨なくとも其光の及ぶ範圍内に雨あれば來襲す。其故に脇山氏の説の如く晴天の夜又は月夜には來らぬもの

なり。

濃霧の夜、暴風雨の夜等に來るものは前記候鳥の移住期に限らず附近に棲息する鳥類が光を見て迷ひ來るなり、如何なれば其附近に平素常棲する種類なるが爲めなり。

候鳥の來る方向は脇山氏の説の如く秋は北より春は南より來る如く思はるゝも燈臺に飛來するは大部分は風下より來り突き當るを以て實際の方向を確め難し。秋春とも略同一種類なることも脇山氏の觀察と一致す。

年によつて墜鳥の多少は候鳥の多少にのみ標準し得ざる理由あり。候鳥の多きとき雖も曇夜又は暗夜に俄雨を催すことなれば燈臺へ大襲來をなすことなければなり。故に此事は少なくとも十數年觀察の統計を見ざれば判じ難きものご思考す。

候鳥の燈臺に來るは其光力の強弱に依ることは當然なるも一つは位置に大關係あることを考へざるべからず。同じく五六十萬燭光を有する燈臺は日本中多くあるも來鳥燈臺は三四に止まり最も多きは三ヶ所のみなり。

最も多く飛來するは青森縣尻矢崎燈臺なり。同燈臺には多きときは何千何萬なるを知らず燈籠を履ふ程に集り、翌日臥に何俵も云ふ程拾集することあり。之れに次ぐは玄海灘の烏帽子島

燈臺なり。此處にも何千を數ふるこゝあり。山口縣角島燈臺、北海道襟裳岬燈臺、長崎縣五島の大瀬崎燈臺等にも多少飛來するこゝあり。

長崎縣五島の大瀬崎燈臺(福江島の南角)にては毎年春秋にヒヨドリの渡るこゝ何萬何十萬の集團をなすこゝあるも夜間燈臺に突當るこゝは稀れなり。

燈臺に突當りて死する鳥は多くは飛行速力強き種類例へば鳩類、ホトトギス(六月濃霧の夜に來るも至つて少し)等の如きもの多く鴨類にても一度突當れば大方は死して墜落す。小禽類の速力弱きものは燈籠に群集し尻矢崎の如き燈臺にては燈光を障害する迄に集るこゝあり。又速力弱き鳥にても風力強きこゝは之に抗し飛來するを以て衝突死に至るものなり。

或人の俳句に「燈臺を取り巻ひて鳴く千鳥かな」こゝあり之れは如何にも實際的の句にて千鳥類は五六月濃霧又は曇暗夜に燈臺を遠巻きになし睡眠の出來ぬ程鳴き續け終夜に及ぶこゝあり。

候鳥の集團が之れより遠方に行かんこゝし又は遠方より來りたるこゝ其他の岬角に一時羽を休むる爲め止まるものならん。燈臺は多く岬角にあれば飛來鳥多き譯ならん。十萬、二十萬の光力を有する燈臺にても處により少しも來鳥なき處あるは地理上

(候鳥の通路にあらざる爲め)に關係ある次第ならん。

僅々一二湮に過ぎざる馬關海峡にありても福岡縣部崎燈臺(門司より東に當る突角)所在地は九州地より本州地への足溜りこなすものかヒヨドリ集團本州地より來るを岬角に霞網を張りて捕らへたるこゝあり。

青森縣尻矢崎は本州より北海道へ、部崎は九州より本州へ、玄海灘の鳥帽子島は本州又は九州より對州及朝鮮へ、長崎縣五島大瀬崎は同地より朝鮮、支那等の遠距離へ渡る際の足溜り又は通路等と結び付け研究せば何等かの資料を得らるこゝこゝ思はる。余の在勤燈臺中十數ヶ所、一府一道八縣下の内にて來鳥の多きは前記の場所のみなるこゝも參考となるなり。

春秋の候鳥の季節にはヒヨドリ、ツグミ等の集團は所々に見る處なるも其れ等とは異り何千何萬と云ふ大集團にて愈々居を遷さんこゝするこゝは各所の小集團が一ヶ所に集る。五島大瀬崎の如き愈々之より海上へ飛び去らんこゝするや飛び立ちて海上一二湮行きては戻りかくするこゝ數回、遂に飛び去るなり。其間鷹類(ハヤブサ)の襲ふ様壯觀なり。ハヤブサの集團を襲ふや大集團をなすものは決して之を捕らへ得ず一羽なりこゝも集團を離れ列外に出づれば直に捕らへ去るを見る。

余の前任地七發島燈臺は全羅南道羅州群島の一角に位ひし南西に離れたる一小島なるが春秋毎年數百千の小鳥を捕ふるこゝあるも西島は黃海道西岸鎮南浦沖の小島にて地理上より見れば來鳥多からんと思はるゝも燈臺の小なる爲めか大正十年秋にはセキレイ、アラジ、キクイタバキ、シタキリ（編輯者記すヒタキ類）の類僅か數羽來りしのみなり。

脇山氏の説通り衝突墜死するは飛來中の極小部分に過ぎざるものなり。

西島燈臺も光力としては二萬一千燭を有するも四等燈臺なるを以て燈籠小なる爲め（高さ三尺五寸）サーチライトの如く閃光（二十秒に一閃光）を發するもの故遠距離よりは飛來せざるならんか。七發島（十五秒に一閃光）は一等燈臺なれば燈籠（高一丈三尺）大にして光力も六十萬燭光なり。青森縣尻矢崎の如きは曇天には二千六百萬燭光（十秒間）を發し光力は北海道沿岸に及ぶなり。尤も二、三萬燭光にても燈籠大なる處（二等燈臺以上）なれば飛來するなり。旅順の表忠塔は僅に二、三萬燭光なるも燈臺のサーチライトの如くなるゝ異り不動燈を數多く照らしあるを以て附近は却て十萬燭、二十萬燭の燈臺よりも明るき故來鳥多しと思はるゝなり。

尻矢崎燈臺にては鴨類の飛來も珍らしからざるも之等は季節によらず暴風雨の夜に多し。

朝鮮黃海道西島燈臺の鳥類

理學士 黒田長禮

黃海道鎮南浦附近椒島附屬西島燈臺の萩原新正氏より同島にて蕃殖する鳥類の標本寄贈を受け且つ其鳥類の習性其他に關し極めて面白き記事を送られたるを以て之れを紹介せん。茲に同氏の好意を深謝す。

西島燈臺は黃海道の西北大同江沖椒島の西方約半渾東徑百二十四度四十六分、北緯三十八度三十分に位ひする小島にして燈臺吏員退息所の外人家なし、周圍七八丁、海拔二八〇尺餘屹立せる岩礁より成る、中腹以上雜草生じ櫻其他の小木少し存す。

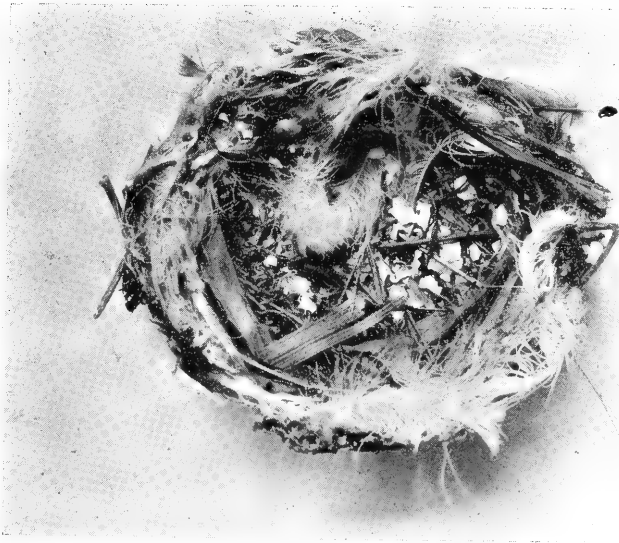
當島にて蕃殖する鳥類は四種なり即ちアマツバメ（俗稱岩燕）ウミスズメ（俗稱海雀）、ウミネコ（俗稱白鷗）及びオホミズナギドリ（俗稱斑鷗又は黒斑鷗又は黒鷗）三す。

（一）アマツバメ *Jyns pacificus pacificus* (Latham).

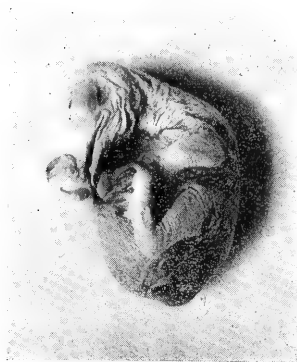
渡來期 三月下旬より四月上下旬。

産卵期 五月下旬より六月下旬迄に産卵するものゝ如し、一腹三個の如きも不明、但し卵二個及雛二羽酒精漬標本送附あり

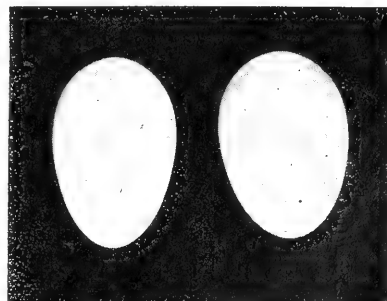
たるにより一腹二個は確かなり。



第五十圖 アマツバメの巢 (二分の一強實物大)



第五十二圖 アマツバメの鶯 (實物大)



第五十一圖 アマツバメの卵 (約實物大少しく縮少)

● 巢 燕巢に似て小形なり岩石の間隙に造る材料は土砂と塵毛
ミ(枯草)にて一種の粘液を以て固着せしめしものにて丸形な

り。巢の大きさ106×85

mm. 深さ32mm.あり。

成鳥二羽、巢一個、

卵二個及雛上記の通

り寄贈ありたり(大

正十一年五月十五日

及六月二十一日採

集)二卵共白色にし

て測定は38×18mm.

及27×17mm.あり卵

量二個共一匁一分な

り。

● 習性 此種は多數

來島し普通の燕より

も渡來期は早し、秋

には歸り去る。飛行

速度の早きこし風を

切りて飛ぶときは斯る小鳥なれどもヒューツと唸りを發しツバメより以上の速度を有するものゝ如く見受けらる。

(二) ウミスッメ *U. amp. anti-us* (Gmelin)

來島期及蕃殖の習性 毎年三月初旬より來り雜草の繁茂せる

中及び岩石の間隙等にて交接し三月中旬又は下旬より四月初旬迄に産卵す、別に巢ミ云ふ程のものを設けず凹みに草葉等二三を敷きて産卵す。卵は普通一腹二個なるも稀れに三個のこゝあり毎日没後に來りて未明に去る、但し卵を暖むるに及びては晝夜在巢す。孵化期は詳かならざるも三週間以上を要する如く五月中旬より下旬迄には退島す。雛は孵化後二三日以内に連れ去るもゝの如く其後は獨力にて成育するものゝ如く認めらる、小雛の獨力にて遊泳するを認むるを以てなり。成鳥二羽及卵二個寄贈あり(十一年三月二十七日採集)、卵には地色濃淡あり母鳥の割に大なり二卵の測定は $62.5 \times 38.5 \text{mm}$ 、 $64 \times 39 \text{mm}$ 、一個の卵量十三匁二分あり。

備考 本鳥の最も多きは萩原氏の知れる範圍にては朝鮮全羅南道羅州群島の一部七發島燈臺所在地(東經一二五度四七分)にし

て其數實に何萬何千萬なるを知らず殆無數なり。卵を採集せんごせば一日能く數百個を得る容易なり。氏は嘗て親鳥數千羽を



第五十三圖

ウミスッメの卵

(約實物大)

向つて左淡色

右暗色

得て羽子蒲團を造れり。西島は僅少にして數百羽を數ふるのみならんか内地にては福岡縣唐津沖なる烏帽子島(燈臺所在地)に

來島産卵するを見たるも至つて少し漸く數十羽に過ぎざるべし
何づれも無人島にして周圍七八丁より半里以内の小岩礁島なり。

(三) ウミネコ *Larus crassirostris* Vieillot.

來島期及蕃殖の習性 毎年四月初旬より來り、初めは毎未明
に海面に群集し鳴き騒ぎ交尾を始むる頃より上陸す。四月中旬
より交尾し五月初旬より六月初旬迄産卵す。岩角上にて交尾す
其後は晝夜共在島す。交尾期より雛の成育する迄は全島を白く
する程滞在するも其以外即ち九月より翌年三月迄は近海に折々
一二羽の姿を見るのみにして附近には居らず何づれにか移住す
るものゝ如し。雌の抱卵中雄は傍に番をするが如く一雄一雌制
の如く見ゆるも如何にも多數のこご故確實には決し難し。

巢及卵 岩石の凹み又は草中に僅かの枯草の類にて巢の形を
なすに過ぎず一腹二個或は三個なるも二個のもの多し。始め一
個を産み次のものを産む迄五六日以上十日位間隔あるものゝ如
く孵化するに際しても他の鳥類の如く一時に孵化せず一巢の中
に兄弟の如く早く孵化せしものと遅きものと大小あり。寄贈六
卵中完全のもの三個の測家下の如し 65.5 × 44 × 45.5mm. 一
卵量一七匁五分及一八匁五分。

雛 六月初旬より八月下旬迄に成育し飛び去る。其間親鳥が



第五十四圖

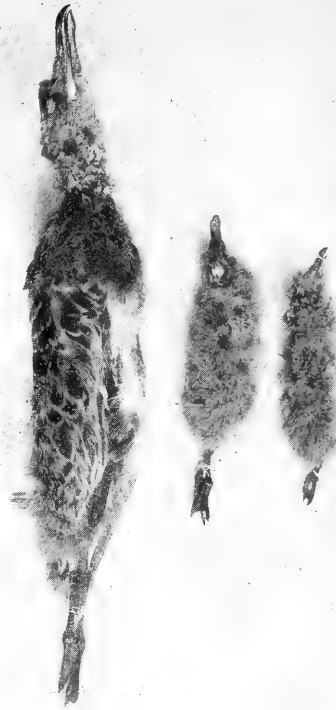
向つて右ウミネコの卵

向つて左オホミズナギドリ

1

2

3



第五十五圖 ウミノコノ鵜 (凡て縮少)

向つて右より
 1 孵化後凡三乃至四週
 2 " " " 一週
 3 " " " 三週

的容易に捕獲し得られたり。ウミノコノ(俗稱白鵜)は晝間に來り産卵し夜間も眠むれるものゝ如く月光の夜は鳴聲も聞こゆ。全島にこれを見るもオホミズナギドリ(俗稱斑鵜)は夜間のみ來りて晝間は穴の中に居るものゝ外決して姿を見せず故に俗に前者を「晝の鵜」後者を「夜の鵜」と呼ぶ。

(四) オホミズナギドリ *Puffinus leucomelas*

Temminck.

渡來期其他 三月下旬より來島し始め土

中に横穴を穿ち又は岩石の間等に入る。六月下旬より七月初旬に産卵す交尾は穴中な

餌を運び來る。餌は小形の鰯類及小形の烏賊類等なり。

雌雄の別 體長、體量に僅かの相違(雄は大)ある外特に差を認め得ず。

成鳥二番鵜三羽、卵六個寄贈(大正十一年五月十五日及六月

二十一日採集)

備考 捕獲するには何千何萬云ふ數多き故岩角上に麻糸の

先に足ク、リを造りたるものを置き遠方より手引きたるに比較

るや或は他にて行はるゝや詳かならざるも穴中にて行はるゝが如く思はる。

巢及卵穴中或は岩石の間隙に塵一本も置かず産卵するを以て巢云ふ程にあらず。卵は一腹一個に限り白色にして表面滑かなり。卵黄は薄黄色にして卵白は殆んご無色透明なり。

鵜 孵化後は穴中又は岩の間隙にありて親鳥より小なる鰯又は烏賊の類を與へらる。鵜の類の如く咽喉に含み來り吐き出し

て與ふるものゝ如し。暑中(八月頃)は穴の入口に鷯か這ひ出し居りて人の足音又は姿を見るや穴中に逃げ込むなり。十月中旬より巢立ちし下旬迄には全部成長し何づれへか飛び去る。

習性 日没前後に海面沖合に浮び遊ぎ集り來り島の附近に來るや飛び立ち夜中島を廻り或は穴に入り騒ぎ、日出二三分以前に悉く飛び去り晝間は一羽も附近に見えず。但し穴中に抱卵中は晝夜共殘島す故に雌は捕へ易きも雄は捕へ難し。夜間之れを撲殺することを得。此鳥は空中を飛翔するには如何にも巧妙にて宙返り等を行ふはツバメミ異らず。然るに陸上より飛び立たんごするときは飛行機の滑走する如く地面と平行して後に非らざれば飛び上り得ず。燈臺構内は高さ五尺のコンクリート堀にて取り圍みあり其中に夜間過ちて飛び込むときは容易に出づることを得ず少くとも七八間以上横に滑走し斜めに飛び立つに非らざれば五尺の堀を越ゆること難きものゝ如し。

此鳥の特性は穴中に抱卵中手を入れば噛み附くを以て卵を得んごせば竹の先に徑三寸位の玉綱を附したるもの又は熊手形のもの腹の下に挿入して卵を掻き出すものなるが手早く行はざれば怒りて自ら卵を嘴にて突き破るものなり、産卵は一個を限るを以て産むと同時に抱卵するものゝ如く大部分の場合親鳥

が抱卵中にて卵のみあることは極めて稀れなり。

成鳥一羽、卵二個寄贈ありたり。(大正十一年六月二十一日採集)。此一卵の測定は $6.5 \times 4.5 \text{mm.}$ 及 $7.5 \times 4.5 \text{mm.}$ あり、一卵量十九匁七分あり。(第五十四圖左参照)。

備考 全羅南道七發島にはオホミズナギドリ夥多來りウミネコは皆無なるが西島には前者少なく後者夥多にして稀れにアハウドリ(俗稱鼠鷗)も混ず。平安北道鴨綠江沖合なる水運島燈臺には此鼠鷗夥多なる由聞知せり。右によれば此三種類は自ら棲息地を異にせるが如く南部一ヶ所にはオホミズナギドリ(黑鷗)中央部一ヶ所には三種共來島するもウミネコ最も多く他は至つて少なく北部一ヶ所には所謂鼠鷗來島することゝなる。萩原氏によれば之れ氣候の關係ならんか?

西朝鮮に於ける夏季の鳥類

朝鮮總督府技手 吉田雄次郎

余は大正十一年七月九日黃海道及平安北道に旅行し、夏季に於ける野生鳥獸の生棲狀況を視察せり。

先づ京城より沙里陀、載寧を経て海州より瓮城、馬山に至り引返して海州、載寧に、載寧邑よりは西鮮殖産鐵道に乗り上海にて銀山面に乗替へ、門土の終點より長壽山に登り、更に引返して沙里陀に出で、黃州を

經て新義州、龍岩浦に至り、七月二十三日歸京せり。

今左に途中より沿線の鳥類を視察したるもの及蕃殖地に於ける鳥類を視察したるもの種名を列舉して同學者の參考に資せんとす。

(一) 鵬鵯科、カイツブリ *Poticipes pulchellus philippensis?*

七月二十二日平安北道郭山驛より北方山下の江岸に於て見る。

(二) 鷺科、コモ、ジロ *Caenerolais albus moussieri*.

七月十二日海州郡翠野より西方約一里位の水田中に二羽馬山附近に於て二羽を見る何れも自働車より二十間乃至三十間ばかりの距離に涉遊す。

(三) 同 アラサギ *Ardea cinerea japonica*.

七月九日南大門より瑞興までに汽車の片側より二十七羽を觀察せり又沙里院より海州までの間に五羽、七月十二日馬山より海州までに十二羽、七月二十二日馬洞、興水間に三羽を見たり。

(四) 鸛科、コウノトリ *Ciconia boyciana*.

七月十二日瓮津郡馬山面芦湖里に於て自働車沿道より約二十間の水田中に一羽の鸛を見る自働車を恐れず悠悠海岸の方面に歩を進めたり。

(五) 雁鴨科、カルガモ *Anas zonorhynchos*.

本種は瓮津郡北面に蕃殖するもの多し七月三日此の地の未永農場にて捕獲せり幼鳥を七月十三日海州の渡邊忍氏(黄海道内務部長)の邸にて實見せり。

瓮津の海岸線には本種並にバン、クヒナ類の好蕃殖地なりと云ふ、又七月二十二日平安北道嶺美附近の山間江岸に飛去る鴨を見たるか之れも多分本種ならん。

(六) 鷲鷹科、イヌワシ *Aquila chrysaetos*.

(七) 同 トビ *Niueus lineatus lineatus*.

長壽山及黃州徳目山上高く飛翔するを見る。

(八) 同 ハヤブサ *Falco peregrinus calurus*.

(九) 雉科、カウライギシ *Phasianus colchicus karpowii*.

七月九日黄海道物開驛にて汽車の停まらんじする際鳴聲を聞けり長壽山附近にては十數回も聞けり。

(一〇) 同 ウヅラ *Coturnix coturnix japonica*.

(一一) 秧雞科、オホバン *Rallus obsoletus*.

七月十一日海州郡沿海にて一羽、七月二十一日龍岩浦の附近にて一羽を見たり。

(一二) 鷗科、カモメ *Larus carinus major*.

七月二十日鴨綠江の下流及龍岩浦にて本種の飛行するを見る。

(一三) 同 ウミネコ *Larus crassirostris*.

七月二十一日龍岩浦にて多數飛行するを見る龍岩浦より海上七里を距ぬる水運島には五月下旬より六月下旬の間に鴨より少しく大型の水禽が全島に生棲し岩間に産卵孵化するもの幾千なるを知らず龍岩浦其の他より此の野生鳥の卵を食用のため採取に渡島するものありこの話を聞き其の何種なるかを調査せんがため渡島すべき豫定なりしも黄海の風浪荒く遂に渡島するに能はざりき之れ或は本種ならんか。

(一四) 鳩鴿科、キジバト *Streptopelia orientalis orientalis*.

(一五) 同 カウライバト *Columba rapaestris rapaestris*.

(一六) 杜鵑科、クワクコウ *Quercus canorus telephonus*.

(一七) 同 ホト、ギス *Quercus poliocephalus*.

(一八) 佛法僧科、ブツボウソウ *Eurystomus orientalis calongu*.

以上長壽山にて觀察せり。

(一九) 翡翠科、カハセミ *Alcedo atthis japonica*.

七月十四日載寧江の江岸及同十八日黃州郡黃州川の月波樓

下に於て見る。

(二〇) 梟鴟科、アチバツク *Ninox scutulata*.

(二一) 蚊母鳥科、ヨタカ *Caprimulgus indicus yokata*.

以上長壽山及徳月山にて觀察せり。

(二二) 雨燕科、アマツバメ *Apus pacificus pacificus*.

雨中の新義州、鴨綠江及長壽山にて見たり。

(二三) 啄木鳥科、テウセンアカゲラ *Dryobates major seoulensis*.

(二四) 雲雀科、コヒバリ *Alauda arvensis dulcor*.

(二五) 同 チウヒバリ *Alauda arvensis intermedia*.

(二六) 同 カンムリヒバリ *Galerida cristata coreensis*.

以上三種共多數見たり瓮津郡馬山面冷井里にてはカンムリ

ヒバリ多く道路に遊歩し殆き足元まで近寄ることを得。

(二七) 鶺鴒科、キセキレイ *Monticola cinerea melanope*.

(二八) 同 ホ、ジロセキレイ *Monticola alba leucopsis*.

七月十四日載寧邑附近の柳田及長壽山の溪流七月十八日黃州郡黃州川及同郡州南面の溪流等に於て觀察せり又平安北道和峴驛より良策驛に至る間の溪川にてセキレイ一羽を見たるも其の何種なるやハ判明せず。

(二九) 鶺鴒科、ノビタキ *Saricola torquata stejnegeri*.

(三〇) 鶺鴒科、ムギマキ *Poilongius mauginaki*.

(三二) 同 オホルリ *Gyornophila cyanomelana*.

(三三) 鶯科、テウセンウグイス *Horornis cantans borealis*.

以上長壽山にて観察せり。

(三四) 燕科、ツバメ *Hirundo rustica gutturalis*.

(三五) 同 コシアカツバメ *Hirundo laurica nipalensis*.

以上の二種は黄海道平安南北道にも多数見たるも黄海道最

も多く載寧鳳山平野の電柱線に群るもの幾萬なるを知らず。

(三六) 鶇科、モズ *Lanius bucephalus*.

(三七) 四十雀科、シジフカラ *Turdus major minor?*.

以上海州の百世清風碑の附近沙里陀、長壽山等にて見る。

(三八) 黄鳥科、カウライウグイス *Oriolus indicus*.

七月十五日長壽山にて観察す。

(三九) 鴉科、テウセンハシブトガラス *Corvus corone mandchuricus*.

(四〇) 同 ハシボソガラス *Corvus corone interpositus*.

以上の二種とも多数見たり馬山温泉の牛市場附近にハシボ

ソガラスの群十五六羽を見、平壤大同江の沿岸にテウセンハ

シブトガラスの群五六十羽を見る又平安北道石下驛より白馬

驛の間に同種の群十五六羽を見る。

(四一) 同 カサ、ギ *Pica pica sericea*.

西鮮三道とも多し南大門より新義州まで三百十哩の間に汽

車の片側より観察せるものを通算して八十三羽を見た。

(四二) 雀科、テウセンスメ *Passer montanus djiboutsi?*

西鮮三道とも多数なり殊に瓮津郡廳附近のアカシヤ林には

其の數幾萬なるを知らず。

(四三) 同 テウセンホ、ジロ *Emberiza cioides castaneic ps.*

長壽山にて見る。

宮城縣下鳥類の『渡り』調査

熊谷三郎

大正九年より十年に至る間の調査報告なり

種	名	來	期	去	期	雜	記
ツ	バ	メ	大九、四、七		一〇、一五		

マ	鴨	チ	ツ	ク	サン	ア	コ	ミ	ヤ	ヨ	オ	シ	カ
ガ	シ	グ	ク	ク	ク	カ	グ	ソ	マ	タ	ホ		ケ
モ	ド	ミ	ミ	ウ	ウ	グ	ラ	ザ	ガ	カ	ヨ	メ	ス
	類	リ		テ	テ	ラ	ラ	イ	ラ	ラ	キ		

常棲するならむ

大10、1、18

大9、4、30

大10、5、3

大10、5、10

大9、5、13

大9、9、5

大10、9、24

大9、10、上旬

大9、8、31

大9、5、1

大10、5、2

大9、5、12

大10、5、1

大9、10、8

大9、9、26

大10、4、17

大10、3、29

大9、4、30

大9、4、7

大10、3、24

大10、3、20

大10、4、29

10、中旬

9、上旬

大10、4、23

大10、4、23

大10、4、23

雄一羽捕へらる

種名不詳十六羽北方に去るを遠望す

大正十年六月二日雄一羽有賀村にて捕はる

五、六羽を見る

去來とも十五六羽を見る

當地方にて明らかに繁殖す

雌雄一對を見る

雄一羽採集せらる

來期に於て降雨甚だしく大洪水ありき

チ ゴ モ ズ	大一〇、五、一七	雄一群を見る
ベ ニ マ シ コ	大〇九、一、一五 大一〇、三、一三	
	大一〇、五、五	本種は冬季にのみ現はる

種名	初鳴期	停鳴期
ヒバリ	大九、三、一〇 大一〇、三、八	大九、一〇、一三
ウグヒス	大九、四、一二 大一〇、三、一三	大九、八、一四

右ヒバリの停鳴期は八月頃鳴き休みてより更に(二期囀り)十月に四、五日鳴くことあるも記入せず。

ウグヒスの初鳴期大九、四、一二は自宅附近にて聞きたるものにて少しくおそき様なり三月のは農夫が山間にて聞きし日なり

イワツバメ及びケアシノ

スリに就て

(一) イワツバメに就て

石澤健夫

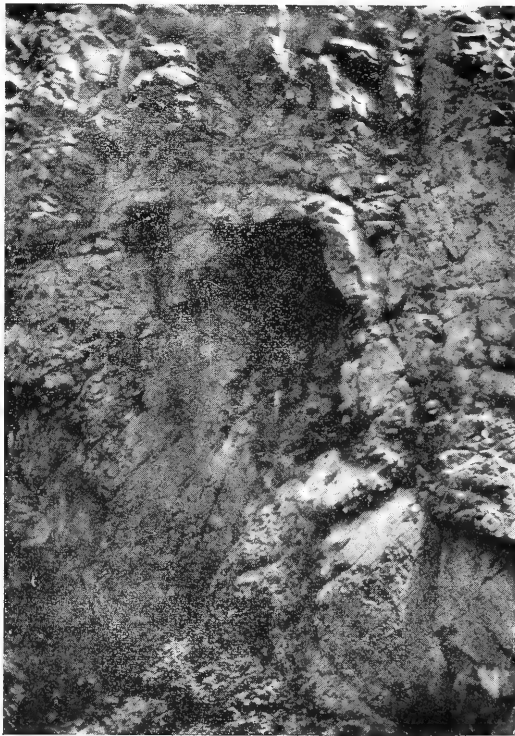
大正十一年二月十八日動物學教室に於て日本鳥學會ニ東京動

物學會この講演會があつた際内田清之助氏の幻燈説明の中に本邦に於てイワツバメの蕃殖地は青森縣下の岳温泉の人家の檐に營巢蕃殖して居るものニ栃木縣及び熊本縣の岩窟に於て發見せられたのみであると言ふ御話があつた。

私は以前から羽前の勝地山寺村を去る東方一里餘の岩窟毘沙門藏ヒシヤに一種のツバメが營巢蕃殖して居ると言ふ話をきいて居たのでもしやこれがイワツバメではあるまいかと考へて大正十一年六月數回當地に至り觀察した結果イワツバメに相違無いことを確めた。又日下部博士著二人行脚により藏王山頂上附近には多數のイワツバメをみる由を知つたから大正十一年八月生物採集のため數回登山した際少しく觀察した結果イワツバメの多數蕃殖するこゝを發見した。

以下は今夏毘沙門藏ニ藏王山に於て少しく觀察したこゝである。毘沙門藏は羽前山寺村を去る東方里餘立谷川の上流の右岸に

突き立つた斷涯のこゝで長さは一二町高さ十數丈に達して居る斷涯には川に面して數個の洞窟があり其中二個は殊に大きくして奥行は割合に淺いが高さは數丈に達して居る、この大小の洞窟の天井を始めこの岩の雨を防ぎ得る所には至る所にイワツバメの巢を見る、巢はツバメの巢よりは大形なれど岩の形に適應して構へられて居るので形態は不規則である、巢の上部或は稍横の方には鳥の出入口が開いて居る巢は勿論土を以て固めたものであるが極めて良く岩の色に似て居るので巢の所在を發見するには注意を要する巢底には松葉の枯れたものや禾本科植物の枯葉等を敷いて居る巢の多い割合に鳥の数が少ないがこれは巢の大部分は舊巢であるためであつてこれを以て見ればイワツバメは舊巢を利用しないことも考へられるが詳細は今後の調査を要する、六月九日洞窟の天井近く一兩



第五十六圖 イワツバメが構集せる斷崖の窟みを示す

日中に孵化すべき三卵在中の一巢六月十九日孵化後數日を経過せる四雛在中の一巢を觀察した結果後者の巢中にはほぼ中央から横に二片に破壊した陶白色の卵殻四個分八片を發見したがこれを以てみればイワツバメはある鳥類が孵化する際卵殻が不規則に破壊せらるゝものゝ異り規則正しく破壊せらるゝことを知るこゝが出来ることの場合には卵殻の破片が巢中に在つたが雛の居る巢の下の地上を注意深く檢するゝ見付かる場合もある。晴天の日はこの附近に數羽のイワツバメを認めるのみなるも、或るイワツバメ釣る男の話によれば霧が押しこめて澤山洞窟の中から出てくるさうである。藏王山は山形縣ミ宮城縣の境界に在り高さ千八百二十八米の有名なる火山にして頂上附近は大方裸出し至る所斷涯絶壁をな

して居る山上にはイワツバメ、アマツバメ等數千羽飛翔せるを見ることあるも天候の關係にて殆んど見ざることもあるイワツバメは千丈ヶ瀧の上下の斷涯附近に最も多く飛翔し居り谷間に下りて注意深く觀察する時は多數の巢を發見することが出来る

巢はやはり雨の當らない斷崖の窪める所に澤山集りて構巢

されて居る(第五十六圖はこ

れを示す然し巢は見へず)大

方の達しない所であるが稀

に地上三四尺の所に構巢した

ものもある、六月十六日地上

四尺位の所に一巢を發見し巢

口よりイワツバメの尾羽が出

て居るので忍びよつて尾を引

く死後數十日を経過して骨

さ固い羽毛ばかり残つた形骸

が出て來た、巢は完成して居るが巢中には雛や卵は無かつた。

死因は不明である其外地上一丈ばかりの所は一兩日中孵化すべ

き三卵在中の一巢、地上三尺の所に一卵在中の一巢を觀察した



第五十七圖 イワツバメの巢及卵

(第五十七圖は最後の巢を岩より取り去つて寫したものである) 八月八日藏王山の火口湖の沿岸に二羽のアマツバメの死體の漂着して居るのを見た案内人の話によればイワツバメの死體の漂着せるも見ることある由であるこれの死因に就いて考へて

見るに左記の様な場合を想像することが出来る。

(一)濃霧の日誤りて水中に勢強く飛び込んで溺死する場合

(二)濃霧の日湖岸の斷涯に衝突して負傷したものが水中に落ち溺死する場合

(三)水面を飛翔せるものが有毒瓦斯湧出のため窒息して水中に落下する場合

合

又山案内人はイワツバメミアマツバメを總稱して岳燕イワツバメと呼んで居るこれで甚だ簡單ながら私が本夏觀察したイワツバメの習

性である其後内田氏の御話によれば各地にてイワツバメの蕃殖するこゝを聞かれたさうだし山形縣及び附近に於ても以上の外山寺奥の磐司岩や大東山（共に宮城縣下に屬す）にも蕃殖するさうだし羽前の湯殿山にも蕃殖する斷涯があるさ聞いて居る少しく注意したら各地の山間に稀ならざるこゝも思はれる。

二ケアシノスリに就て

私は先年約十年以前の冬季山形縣長崎町附近に於て捕獲せられたさ言ふケアシノスリらしい一羽の鷹の標本を入手したが日本鳥類圖説（再版）の記載と引き合せてみるに翼長に於て餘程差異を認め、のでケアシノスリと斷定するのに疑を挾み *Archibuteo* として動物學雜誌第三百九十號に報告して置いた其後内田清之助氏の御鑑定により右標本はケアシノスリに相違無いこと及び日本鳥類圖説再版までのケアシノスリの翼長一尺四五分は一尺四五寸の誤植であることが判つた、増訂の分には訂正されてある。

次に大正十一年一月十二日山形市内の一鳥屋の店頭につり下けあつた一羽のケアシノスリ名の死鳥を購求したがこれは土地の獵人が一月九日山形市附近にて捕獲したものであるさ言ふ話であつた又ある獵人から數年以前の秋季山形市附近の須川沿

岸にてやはりこの様な鷹を捕獲したこゝがあるさ言ふ話を聞いたこゝがある尙本誌十二、十三號合本にも本種が大正七年三月信州にて獲られたこゝが載つて居るがこれ等によつて從來本邦に於ては北海道に於てのみ捕獲せられた本種が本州に於ても稀ならざるこゝを知るこゝが出来る。

廣島市附近に於ける鳥類

神名 勉 聰

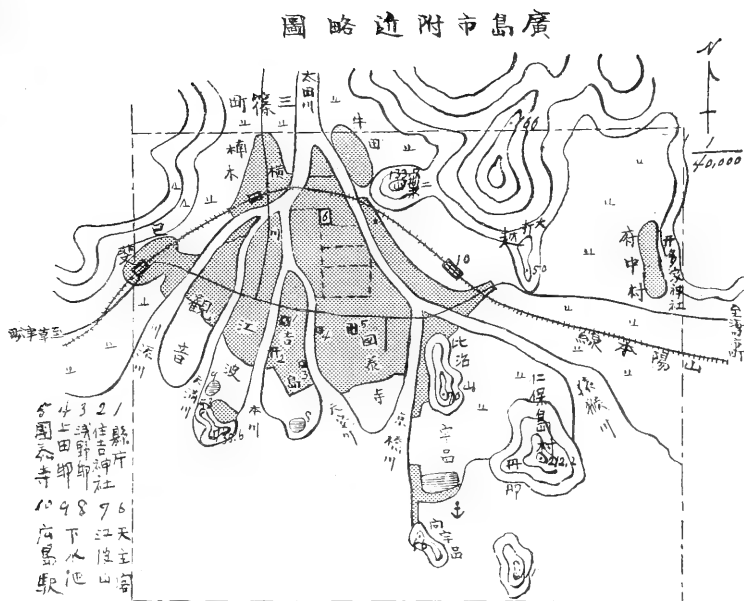
- 一、本記載は予の觀察日記を適當期間毎にまとめたものである、特に鳥類觀察の爲めに供したる時間の少きと、鳥學に關する予の智識の貧弱なると共に遺憾なれども、當地附近に於ける此の種の記載は本誌第三卷第十一號に於て中尾春雄氏の發表せられたる外未だ耳にしないので、多少の參考にもと考へ敢て本誌の紙上に割愛して載こゝとした。
- 一、こゝに廣島市附近と稱するは、凡そ附圖に示す區域とす。
- 一、本記の觀察は大正十一年五月より七月に亘るものなり。

1. *Spizella cinereus* (Temminck).

ムクドリ

極めて普通なる種類にして、縣廳、上田男爵、淺野邸、東寺町寺院並住吉神社境内、比治山公園及公會堂庭内等には常に喧噪なる鳴聲を聞き、時々十羽内外の群をなして市中を飛翔

せるを見る、前記數箇所は何れも好適なる蕃殖場とせらる、比治山公園の巢に就て、五月二十日觀察せる處に依れば、午



第五十八圖

後一時二十分より二時二十分迄一時間二羽の運餌總回数は二十一回にして、其の内雌の運餌は極めて稀なり、而して五月三十一日巢立せり。各所に聞く噪聲は七月中旬を以て止む、幼鳥が親の哺育を離れて一人前となりたるも此の期なり。注意したるもコムクドリに遭遇したることなし。

2. *Casmerodius albus* (L.).

ダイサギ

五月中旬より六月下旬迄本川河口干潮に六羽を毎日の如く見たり、市民は鶴なりとて吉兆を祝せり、土着人の確言する處に依れば、昨年は二十羽内外を見たる事ありて、宇品沖金輪島は之が蕃殖場なりと、眞否疑はし。

(編輯者記す一恐らくコモ、ジロの方ならん)。

3. *Nycticorax nycticorax* (L.).

コササギ

四月下旬より本市の空を飛ぶ單獨のものを少數見初め、五月に入りては稍多く、六月に至り最も多數を諸所に於て目撃す、吉島海濱に於ては、十數羽の群を見るべく、比治山は最も盛んなる蕃殖地にして、同所に於ては六月二十日前後に總て巢立を了したり。

4. *Tachyclus sinensis sinensis* (Swinh.).

ヨシゴサギ

吉島下水池葦中に多數蕃殖す、巢を檢するに産卵四乃至五

個にして、六月下旬孵化す。

5. *Parus varius* Temminck & Schlegel.

ヤマガラ

比治山にて随時目撃し得るも数多からず、此處にて蕃殖するは確實なるべし。

6. *Aeginhalos canadatus trivirgatus* (L. & S.).

エナガ

五月二十五日、比治山に於て四十雀の大群に多数本種の混じて昆虫をあさりつゝあるに遭遇す。

7. *Parus major minor* Temminck & Schlegel.

シジフカラ

(方言シジウガラ)

比治山及興樂園等に蕃殖すること確實なり、従つて比治山縣廳内等にては常に多数本種を目撃し、繁華なる市中の電線に見ること亦屢なり。五月二十五日比治山陸軍墓地に於ては幼鳥を混じたる三四十羽の群に遭遇せり。同所に於て五月十五日椋の樹洞に營巢し雌雄の交々之に運餌しつゝあるを發見したり予の日記中より之が觀察記を摘録すれば左の如し。

五月十五日 晴天 午前十一時より十三分間觀察したるに

二羽の運餌回数は十三回で雌雄殆同回数なりき餌の種類

は昆虫の幼虫にして、何れも帶黄白色のものゝみなり、

巢の附近に多数の雀群り來りて喧しく囀つり居れり、四

十雀の餌を運び來るあらば之を掠奪せんことをよく見ゆるも遂に果さざりき、然し一回モズの横合より不意に來りて口にせる餌を奪ひ去れるを實見す、又四十雀の留守中に、雀が巢口に來りて巢中を覗き見ること屢々にして、入らんせしも入口の大きさは四十雀の出入の都度非常に困難を感ずる如く見ゆる程小なるを以つて、雀の終始飽く事なき此の努力も遂に空しく終れり。

五月二十日 晴天 雀の來ること稀なり、而して運び來る

餌の色は帶綠色の幼虫にして、運餌回数等前回に異ならず、特記す可き事なし。

五月二十五日 曇天 異狀なし、餌は總て褐色乃至黑色のものゝなり、成虫の如く見ゆ、運餌毎に巢中の雛の極めて喧しく囀つるが聞ゆ、巢立近かるべし。

五月三十日 巢は既に空家なりき、恐らく二十六七日頃巢立したるならん。

8. *Horornis cantans* (Temminck & Schlegel).

ウグヒス

本期を通じて大打越峠及比治山に於て本種の鳴聲を聞けども数多からず、最も美しき囀聲は六月迄にして、七月に入れば地鳴のみなり。

9. *Acrocephalus orientalis* (Temminck & Schlegel). オホヨシキリ
(方言オホヨシギリ)

本種の初鳴期は四月下旬なるも、五月中旬より六月上旬迄最もその鳴聲盛んなり。已斐、三篠、府中等市の郊外に於て到る處に多く、市中にては東寺町境内、吉島下水池、江波山及比治山等に極めて多く、前記諸所に於て蕃殖す、比治山にては數箇の巢を發見したり。六月下旬に至りて鳴聲著しく減じ、六月二十日比治山公園に於て數日前巢立と思はるゝ幼鳥を見たり、而して七月十五日は各所に於て殆ど全く停鳴す。

10. *Acrocephalus tristriceps* Swincoe. コヨシキリ

(方言コヨシギリ)

前者と共に少からざれども前者より稍數少かるべし。

11. *Alauda arvensis japonica* Temminck & Schlegel. ヒバリ

市の郊外至る處に長閑なる鳴聲を聞くを得、特有の囀聲は六月中旬迄なりこす。

12. *Emberiza cioides ciopsis* Bp. ホホジロ

大打越峠、比治山、江波山等人家を距りたる場所にて梢頭に高く囀聲を聞く數少くして聲の最も愛すべきは五月中にして六月に入りては聲を聞き又は目撃するこゝ極めて稀なり。

13. *Chloris sinica minor* (Temminck & Schlegel). コカハラヒワ

區内諸所に於て普通少群を目撃し得、五月中旬幼鳥を見る。

14. *Zosterops palpebrosa japonicus* F. & S. メジロ

向宇品及丹那山に少からず。

15. *Passer montanus saturatus* Stejneger. スズメ

最も普通なる種類にして到る處の軒或はコシアカツバメの巢等に、七月上旬迄營巢をなし、産卵も七月中旬まで續く。茲に本種構巢に就き特記すべきは、吉島町某家に於て炊事場の煙筒(毎日數度煙を出す)の中途に營巢したることなり、同家に於ては夫妻が時々煙筒より藁屑の落ち來るに不審を起して之を發見せしなりこ。

16. *Hirundo rustica gutturalis* (Scopoli). ツバメ

稍普通の種類にして、昨年始めて見たるは四月二十三日にして一昨年比し約十日遅かりしが如し。

17. *Hirundo daurica nipalensis* (Hodgson). コシアカツバメ

初めて見たるは四月二十八日にして(之も一昨年より數日遅い)普通何處にても見る様になりしは、五月中旬以後なり本種は前者こそその數に於て相半す、營巢は人馬の往來少く靜かにして最も好適に見らるゝ白壁(倉等の多き府中村に絶體に

體に見るこゝなく、稍雑踏せる段原町、尾長町、横川通及巖町上流川等市街地の軒を盛に利用せるは稍奇異の觀あり、市の中央なる郵便局附近の繁華なる町にある一醫院の軒に三十個を並べ居れるを見たり。

18. *Delichon urbica dasypus* (Bonaparte). イワツバメ

五月十日、已斐町附近に於て特に高く飛翔せる三羽を認めて鏡見したるに、腰部の白色部極めて鮮明に見ゆ、必ず本種なるべし、本區に於ては珍らしき種類といふべし。(編輯者記
オーアーツツメにては非らざるか)

19. *Macilla alba grandis* Sharpe. セグロセキレイ

郡部に於ては常に普通見得れども、本期本區に於ては山寄せ近き箇所へば三篠楠木小川邊に一度(五月十日)、又府中村多家神社本殿棟木に營巢中(五日五日)を一度見たるのみなり。

20. *Lanius bucephalus Temminck & Schlegel*. モズ

比治山公園及府中等蕃殖地なり。

21. *Lanius cristatus superciliosus* Latham. アカモズ

比治山公園に蕃殖し、此の地にては前種より普通なるが如し。

22. *Lanius tigrinus* Drapiez. チゴモズ

本種も同所に於て少からざるが知し、六月三十日、數日前巢立と思はるゝ幼鳥數羽に遭遇したり。

23. *Lanius excubitor molis* Eversmann. オホモズ

五月十五日、比治山公園巡守詰所附近に於て松樹に高く本種と思はるゝもの一羽を認めたり、當季節に於て本區に之を見るは極めて奇異の感あるも必ず本種なりと信ず、其の後注意したるも、重ねて見るを得ざりき。

24. *Corvus coronoides japonicus* Bonaparte. ハツブトガラス

25. *Corvus corone interpositus* Latham. ハシボソガラス

二種共諸所にあり、五月五日府中村に於て十數羽の群を見たる外本期間群をなすを見ず、已斐驛東端附近一帶の松樹林中には多數の鳴聲あり又大形の餌を口にして遠く市中より歸るありて、同所に於て五月中産卵育雛をなすは確實なり。

26. *Charadrius*.

五月二十五日吉島海濱に於て一羽、同所下水池に於て四五羽、本川河口邊りに十數羽の群あり、その鳴聲は五月十八日以降數回自宅に於て暗夜上空に聞きたる聲と全く同一なり、種の判別困難なれども、形は中の大にして飛翔中の特長

に徴し、暫く本亞科に屬するものゝなす、兎も角本區に於ける

春季千鳥の通過期は五月中旬乃至六月下旬いふを得べし。

27. *Charadrius dubius cauronicus* (Gmelin). コチドリ

五月三十日江波下水池泥土上に一羽、七月十五日吉島下水

池に五羽、何れも餌をあさりつくあるを見たり、飛び去り飛

び来れども群をなすことなし。

28. *Copelia gallinago ya-lari* (Butorin). タシギ

七月二十日、吉島下水池に二十羽餘の群を見たり。

29. *Rallus aquaticus indicus* (Blyth). クヒナ

府中村及吉島下水池に於て、各一度之を目撃したるのみな

るが本區には多數棲息するは疑なし。

30. *Gallinula chloropus purpurifrons* Blyth. バン

吉島下水池に於て、數羽見るこゝあり、時に鳴聲をも聞く、

當所にて多數蕃殖するは事實なるも巢を發見するこゝ難かり

也。

31. *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham). キジバト

比治山公園に於て本期を通じて長閑なる鳴聲を聞く、數多

からざれども十羽許りに遭遇したるこゝあり、此處にて蕃殖

するは確然たり。

32. *Alcedo atthis japonica* Rp. カハセミ

本種は七月十五日初めて一羽を吉島下水池に現出せるを

見、爾後時々一二羽を同處及其の附近に於て目撃したり。

33. *Sitta uruleensis* (Pallas) P フクロウ

東寺町、進徳女學校及比治山等にて夜崗本種の鳴聲を聞

く。七月二十五日縣廳立關前の楠樹中に四羽動くこゝなく殆

く一日中靜止し居れり、幼鳥なるが如し。(編輯者記すアチ

マツクにては非らざるか)

34. *Milvus lineatus lineatus* (Gray). ト

本區に於て普通見る種類なるも本期に於て見たるは數回に

止まる。

35. *Pan-tin halia tus halia tus* L. ニサゴ

決して多からず、余の實見したるは七月二十日吉島町粟村

氏邸内の池に魚をねらつて來たる際のみ、養魚業者は「ビシ

ヤ」稱して恐る。

オホコノハヅクに就て

熊谷三郎

當地方の方言にてコノハヂクニ云ふのはオホコノハヅクの誤

稱であつたミ云ふ事を御報致します。

「鳥」(第十二號——第十三號)六五頁羽山氏の八丈島産鳥類



第五十九圖
オホコノハヅクの卵と鶴

二三に就ての論文中的附記二、熊谷氏のコノハヂク(方言)なるものはオホコノハヅクなるが如し……の記事がありますがこれは羽山氏の言の如くコノハヂクミ云ふのは當地方の方言であつて實はオホコノハヅクを誤稱したのであつたミ云ふこゝを知り得ました。先に觀察された鳥はオホコノハヅクかコノハヅクか明らかでなかつたので方言そのままコノハヂクミ題して先年動物學雜誌に發表したのでありますがそれは全く私しの不明の結果でありました。而してその後當地のヅク類を蒐集に努めましたが多くはオホコノハヅクであるミ云ふ結果を得たのであります。即ち次表の如し。

番 號	採 集 月 日	採 集 地	嘴	峯	翼	長	尾	長	跗	趾	備	考
一	大五、二、一	志波		一九	一九	一六七	八五	三七	三〇	色彩異常ならず		
二	大七、三、五	油島		二一	一六五	一六五	七七	二九	二九	同		
三	大七、二、一	若柳		二一	一六五	一六五	八〇	二九	二九	黑色濃し		
四	大八、二、一	志波		二二	一六八	一六八	八七	三〇	三〇	濃焦茶色		
五	同	同		二二	一七二	一七二	八九	二九	二九	色彩普通跗趾に至るも縦斑あり		
六	同	石越		二二	一六四	一六四	八一	三〇	三〇	色彩普通		
七	大〇、三、一八	有賀		二〇	一六五	一六五	七〇	三七	三七	同		
八	大〇、三、九	荒濱		二〇	一八〇	一八〇	九五	三七	三七	黒味勝なり		

附記 (二)は岩手縣下(八)は福島縣下其の他は宮城縣下に屬す

八甲田山の夏季の鳥界

和田 千藏

この測定表によれば明らかに方言にてコノハヂクミ云ふのはオホコノハヅクの誤稱であつたミ云ふこゝを知り得たのであります。故に、こゝに訂正しておく次第であります。當地産のオホコノハヅクの卵及鷓の寫眞をこゝに附加するこゝにします。

(第五十九圖参照)

モズの蕃殖に就て

小澤 國平

埼玉縣熊谷高等女學校構内に毎年モズ (*Lanius biaceptus*) が營巢をする。大概五月から始めるのが普通であるのに大正十一年には二月二十五日に巢を發見した、其時已に半ば出來上つて居た。内田清之助先生の高著には三月頃を以て始めとしてあるがそれよりも早き報告を知らないで珍らしいと思ふ。又本校構内に營巢ミ云つても實は教室の窓より二尺位のミこのころのミカンの木中であつた。モズには随分噪しい處であるが一向平氣で已に二年も續けて斯の様な處を選び營巢した。中々人馴れたものと思つた。去年 (大正十年) 發見のものは二間四方位の竹藪の中の杉 (別々の木) に二ヶ所一度に營巢育雛した。

大正十年七月二十九日より東北の名山八甲田山に登山を思立ち無事決行したりしも獲物極めて少なく左記の通りなり。

- 1. ホシガラス雄 五千二百尺の高處、
- 2. イワヒバリ巢及卵四個 五千尺の高處、
- 3. キセキレイ 四千尺、
- 4. エナガ 三千尺、夏發見せしは今回始めてなり
- 5. ノジコ 四千尺、

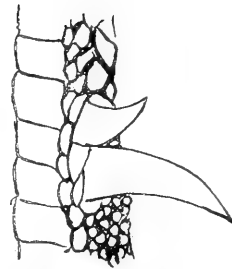
以上の外觀察せしものにはサンクワウテウ、カケス、ウグヒス、メジロ、オホルリ、ミソサバイ、ヒヨドリ、ミヤマホ、ジロ、ヒバリ、ウヅラ、ハリチアマツバメ (五千尺の地帯を往復するが如し)、鷺鷹類あり何づれも鳴きつゝあり。

雉の距及尾羽の斑紋異常例

熊谷 三郎

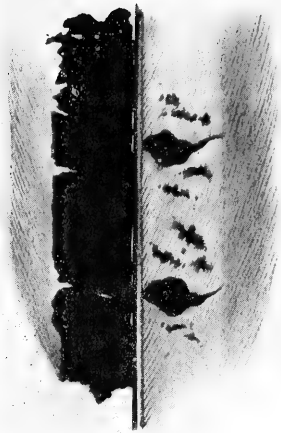
大正十年十二月上旬岩手縣西磐井郡永井村附近にて獲られた雉雄の一標本を調査した處兩脚共に距を二個宛有して居た、即

ち第六十圖に示した通りで普通の距の上基部に長さ凡そ三分位のものが生じて居て其尖端は圖の如く上向きして居つた、斯くの如きは誠に稀例と思はれる。又中央尾羽左側の斑紋も第六十一圖の如く異常である即ち一方の羽辨は普通の斑紋を示しているが他方の羽辨は全部黒色であつた。此標本は残念ながら入手するこゝを得なかつたので略圖丈



第六十圖
キジ雄に二距ある一例

け掲げて報告するこゝをこゝとした。



第六十一圖
キジ雄の中央尾羽の斑紋の異常を示す

稀れなる日本鳥類標本

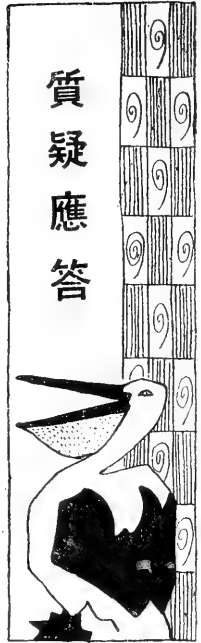
左に掲げる鳥類は未だ小生の採集物中にない種類であります若し御持ちの方又は御入手の節は御寄贈又は御交換が願はるれば幸ひであります

(黒田記す)。

- ヒメシロハラミズナギドリ
 - チシマウガラス
 - ハジプトゴキ(小笠原群島産)
 - コウノトリ
 - クロトキ
 - ヘラサギ(クロツラヘラ)
 - コバハクテウ
 - カラフトロシ
 - オホハヤブサ
 - ワキスザハヤブサ
 - ヒメミフウヅラ
 - オホライテウ
 - チグロツル
 - ソデグロツル
 - ハジロコチドリ
 - コシヤクシギ
 - コチバシギ
 - オホハシシギ
 - コアナアシシギ
-
- チシマウミバト
 - ウミバト
 - コバシウミスズメ
 - シラヒゲウミスズメ
 - ツノメドリ
 - チガサハラカラスバト
 - チナガバト
 - ミヤコセウビン
 - テウセンシマフクロウ
 - リウキウオホコノハヅク
 - キンメフクロウ
 - スズメフクロウ
 - チナガフクロウ
 - カラフトフクロウ
 - シベリアフクロウ
 - メンフクロウ
 - タイワンヨタカ
 - クロビタヘハリチツバメ

(日本鳥類日録大正十一年御参照を乞ふ)

質疑應答



一一一 質疑者 東京岡田喜一

問一 鳥卵學 (Oology) に關する英文書名御教示を乞ふ。
答 左記の書籍は適當なるべし。

Oates, E. W. :—Catalogue of the Collection of Birds' Eggs in the British Museum. (1901—1905.)

Jaffin, F. H. & Short, E. H. :—The Standard Catalogue of North American Birds' Eggs.

Vos, G. H. :—Birds and their Nests and Eggs found in and near Great Towns.

Dresser, H. E. :—A Manual of Palearctic Birds, 2 Parts. (1902—1903.)

問二 ヤイロテウの發見は何時のこゝなるや。

答 ヤイロテウの發見せられしは餘程古きこゝにて確實ならざるも其學術界に發表せられたるは一八五〇年にテミンク、シユレーゲル兩氏が朝鮮より持ち來たされし活物一羽の寫生を基こなし圖版を附し記載せるものなり。

三四 質疑者 大分縣上 泰治

問三 本誌第十號口繪解説ヤマガラ分布中に九州(?)にあれご當地に産するごは確實なり?を取り去りても可なりや。

答 北九州に産するものはツシマヤマガラ *Sittiparus varius hima?*

ご同一ご見るべきものにて南九州に産するは恐らくタネヤマガラ *S. varius sumsumi?* ご同一なるべし。大分縣のものは未だ實驗せしごなき故何づれに屬するや不明なれごも恐らく

北九州(筑前、豊前等)産ご同一なるべし。

問四 目今盛な狩獵を絶対に禁じたる時は鳥界は如何になるご想像され得るや。

答 狩獵を絶対に禁じたりごせば我國特有の鳥類の蕃殖するもの多くなり又渡り鳥も安心して來る様になるごご明かなり。其結果は農産業には一般に有益ごなるべし。

五 質疑者 宮城縣 熊谷三郎

問五 カモメウミネコ兩種の幼鳥の主なる區別點御教示被下度候。

答 ウミネコの幼鳥はカモメの幼鳥に比し羽色黒味勝にして、嘴強大、且つ尾の黒帶廣大なるごによりて區別せらるべしウミネコは成鳥にても尾に黒帶あり。(答一一五 黒田)



雜報

□第十五號表紙書説明 大阪天王寺動物園飼養の印度地方産雁類の一種 *Barrd headed Goose (Fulibeta indica)* を撮影せるものなり。

此種の我國に飼養せらるゝもの他にあるを知らず。雁類中最美麗なるものゝ一つにして後頭及上頸には黒色の二帯ありて顯著なり、嘴は橙黄色又は黄色なり。(大正十一年十一月二十三日黒田撮影)。

□第十九回總會 大正十二年六月九日午後五時より本會春季總會を神田一ツ橋學士會假會館で開會左の八氏の出席があつた(來會順)

- 鷹司 信輔 黒田 長禮 内田清之助
- 大岩 紀鹿 渡瀬庄三郎 櫻田 儀七
- 高野 鷹藏 岩田 巖

會場には滿鮮産雉類、千島産鳥類及書籍を陳列し晚餐後内田幹事から會務及會計の報告があつた後新入會員渡瀬庄三郎氏新に

評議員に推選せられた。講演は黒田長禮氏ホクマンキジミカウライキジの分布に就て一々標本を示して詳細研究の結果を述べられた外最近農商務省から千島に派遣せられて歸京せる大岩紀鹿氏の千島諸島の鳥類に關する有益なる調査報告があつた。尙會員から千島諸島に關する質問應答があつて散會したのは午後十時であつた同日の陳列標本及書籍は左の通りである。

- 千島産鳥類 十四個 大岩紀鹿氏出品
- 同 鳥卵 三個 同 上
- ホクマンキジ(滿洲産) 六一個 黒田長禮氏出品
- カウライキジ(朝鮮平安北道産) 二個 同 上
- キンクロハジロ雌バフ變(霞ヶ浦産) 一個 同 上
- キジ雌の雄變標本(遠州産) 二個 同 上
- セグロカモメ雌(相模産) 一個 同 上
- ワシカモメ雌(アラスカ産) 一個 同 上
- カケス雌、尾羽に横帯あるもの(山口縣産) 一個 同 上
- The Ornithology of Francis Willughby, 1678
- Amusement's des dames dans les Oiseaux de Volière, 1785.
- Nouveau traité des serins de Canarie (1700, 1711, 1734, 1745, 1785). A. donologie, 1773.
- 以上高野鷹藏氏出品

尙最近本會交換の左の書籍を供覽せり。

日本動物學輯報、原著及抄録、學術研究會編纂、大正十一年

第一卷第一號

(Japanese Journal of Zoology. Transactions and Abstracts.

Published by the National Research Council of Japan, Vol.

I, No. 1, D. c. 29, 1922.)

The Condor, Vol. XXIV, No. 6, 1922; Vol. XXV, Nos. 1 & 2, 1923.

American Museum Novitates, 1923, Nos. 56, 58, 62, 67, 71. 五册

Papers on Birds from Bulletin of the American Museum of

Natural History, 1922—1923. 三册

Le Gefant, Fasc. II, 1923.

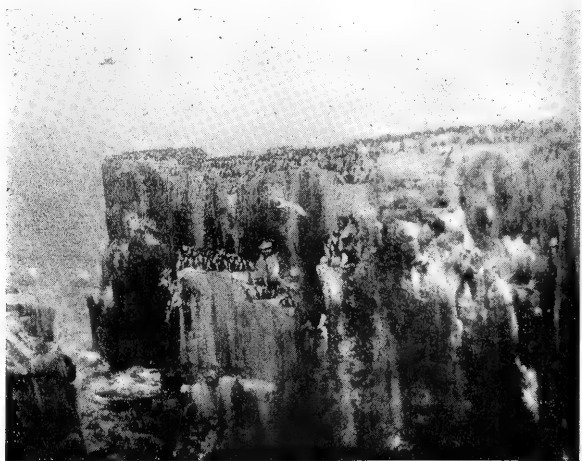
Club van Nederlandsche Vogelkundigen, Jaarb. No. 12, Af. 3 en
4, 1922.

Verhandlungen der Ornithologischen Gesellschaft in Bayern.

Band XV, Heft 1, 1921; Heft 2, 1922.

Field Museum of Natural History. Publication 208. Report

Series, Vol. VI, No. 4, Jan., 1922.—Annual Report of the Director to the Board of Trustees for the Year 1921.



第六十二圖 蜂須賀正氏寄贈
英國 Furn Island に於ける海雀類 (Guillemots, Puffins) 及鷗類 (Gulls) の蕃殖場
(大正十一年七月中旬撮影)

□別稿記載の通り帝國大學理學部教授理學博士渡瀬庄三郎氏は
新に本會評議員に就任せられた。

□目下英國に留學中の會員蜂須賀正氏氏は本年から British
Ornithologists Union の Member に推薦せられた。

尙ほ同氏より寄贈の三個の寫眞を挿入する、即ち第六十二圖か



第六十三圖 蜂須賀正氏氏寄贈
英國産雄雄白變

Loc. : Cambridge, England. Date : end of October, 1922.

ら第六十四圖迄がそれである。

□狩獵鳥類掛圖の出版 狩獵法改正の結果新に制定せられた狩獵鳥類に就ては未だ掛圖の出版せられたるものなく不便を感じられてゐたが今回農商務省で調製された原圖及解説書を本會から出版する計劃である、まだ農商務省から許可の指令に接しないが此計畫は近々中に實現せられる筈である、内容體裁等は次の如く出版の期限は多分本年九月下旬頃になるだらう。

(内容) 五枚一組 狩獵鳥類百二十種百五十四圖別に解説書一冊附

(體裁) 大さ 菊版全紙(縦二尺七寸横二尺一寸)

紙質 舶來上質百二十斤

印刷 石版十五度刷(東京印刷石版部調製)

(定價) 一組五圓 本會會員一割引

□會員歸朝 米國に四ヶ年餘留學中なりし會員水野誠氏は去る二月二十三日歸朝せられたり、又一ヶ年餘歐米各地を巡遊せられし會員森爲三氏も去る四月三十日無事歸朝せられ朝鮮に赴かれたり。

□臨時刊行物第十編 仁部富之助氏著「鶏の鳴きに就て」を本會臨時刊行物として出版した、鶏の鳴きに就ては古來幾多の傳説



第六十四圖 蜂須賀正氏氏寄贈
英國産雄雌白變の頭部
(第六十三圖と同一のもの)

□會員死亡 會員長與鼎氏は本年一月東京に於て死去せられた、同氏は元アラン、オーストン會社の動物標本の係として永く斯業に従事しオーストン氏の死去後獨立して標本業に従事された、標本業者としては永い經驗を有するのみならず廣く各地に採集し學界に寄與する所少くなかつた、本會は茲に謹で哀悼の意を表する。

□入會

- 奈良市角振町 松原直方氏(乙種)
- 福岡市魚町 豊原良助氏(乙種)
- 新潟市東大畑通二渡邊 順氏(乙種)
- 牛込區南町九 渡瀬庄三郎氏(甲種)
- 京都市下鴨下 井上敬道氏(乙種)
- 京原町四六

□轉居

もあり且つ最近に於ては某新聞紙上で色々論議されたこともあるが實は今迄特に研究されたものもなかつたのであるが最近仁部氏は詳細な研究に従事されつゝあつたが今回之を本會から上梓するこゝこゝなつた、本書は會則により甲種會員には既に配本したが乙種會員中御希望の諸君は至急御申込を乞ふ

- 府下荏原郡入新井町新井宿長田一六 石井金吾氏
- 名古屋市中區流川町二七ノ二 黒田莊治郎氏
- 大連市兒玉町滿鐵教育研究所 大賀一郎氏
- 茨城縣松原町高萩 關東八氏

神田表猿樂町二番地玉津館内

愛知縣立工業學校

□本會編纂「日本鳥類目錄」(大正十一年)正誤

91	10	1870— <i>Osmotreron dom- villi</i> Swinhoe, Dis. 1870, p. 354 (Hainan).
103	12	<i>Hirundapus</i>
135	13	Yabusame
160	21	<i>Oriolus indicus indicus</i> <i>Oriolus chinensis in- dicus</i>
160	27	<i>trilliti</i>
174	19	Prov. Prefect

珍らしき鳥類の雜種

ゴ井サギ(雄)シコサギ(雌)シの雜種が昨年五月福岡市外箱崎水族館で出來た、次號に其寫眞を出す、ツツする。
米國では近頃七面鳥シ鶏シの雜種を作つた、これをターキンシ命じてをる、卵は鶏よりも大きく一年に二百個以上を産むシの、ツツである。

溝口乙治郎氏

水野誠氏

頁 行 誤 正

14	22	<i>modesta</i>	<i>modestus</i>
16	23	Riu Kiu (Okinawa)	付 除
31	18	<i>fuscus</i>	<i>fuscus</i>
41	11	McClelland	(McClelland)
42	8	<i>nissiniensis</i>	<i>nissiniensis</i>
60	3	<i>Charadrius</i>	<i>Charadrius</i>
75	1	II, p. 92	II, p. 92 (New Guinea)
75	6, 7 & 13	<i>Chlidonia</i>	<i>Chlidonia</i>
75	24	Montagu	Montagu
87	16	Blyth	Hodgson
87	17	1845— <i>Columba pulch- collis</i> Hodgson in Gray's Zool. Misc., 1844, p. 85 (Nepal).	1844— <i>Columba pulchri- collis</i> Hodgson in Gray's Zool. Misc., 1844, p. 85 (Nepal).
91	9	Blyth	Swinhoe

日本鳥學會刊行物目錄

臨時刊行物第一編ヨリ第十編迄別廣告ニリア

農商務省農務局編

狩獵鳥類の方言

定價二圓 郵稅八錢

日本鳥學會編

日本鳥類目錄

定價
並上
製製
稅稅
三五
二
錢圓圓

農商務省農務局編

飼鳥の飼料としての害蟲利用

定價四十錢 郵稅二錢

農商務省農務局編

鳥獸調查報告第一編

定價四圓五十錢 郵稅十二錢

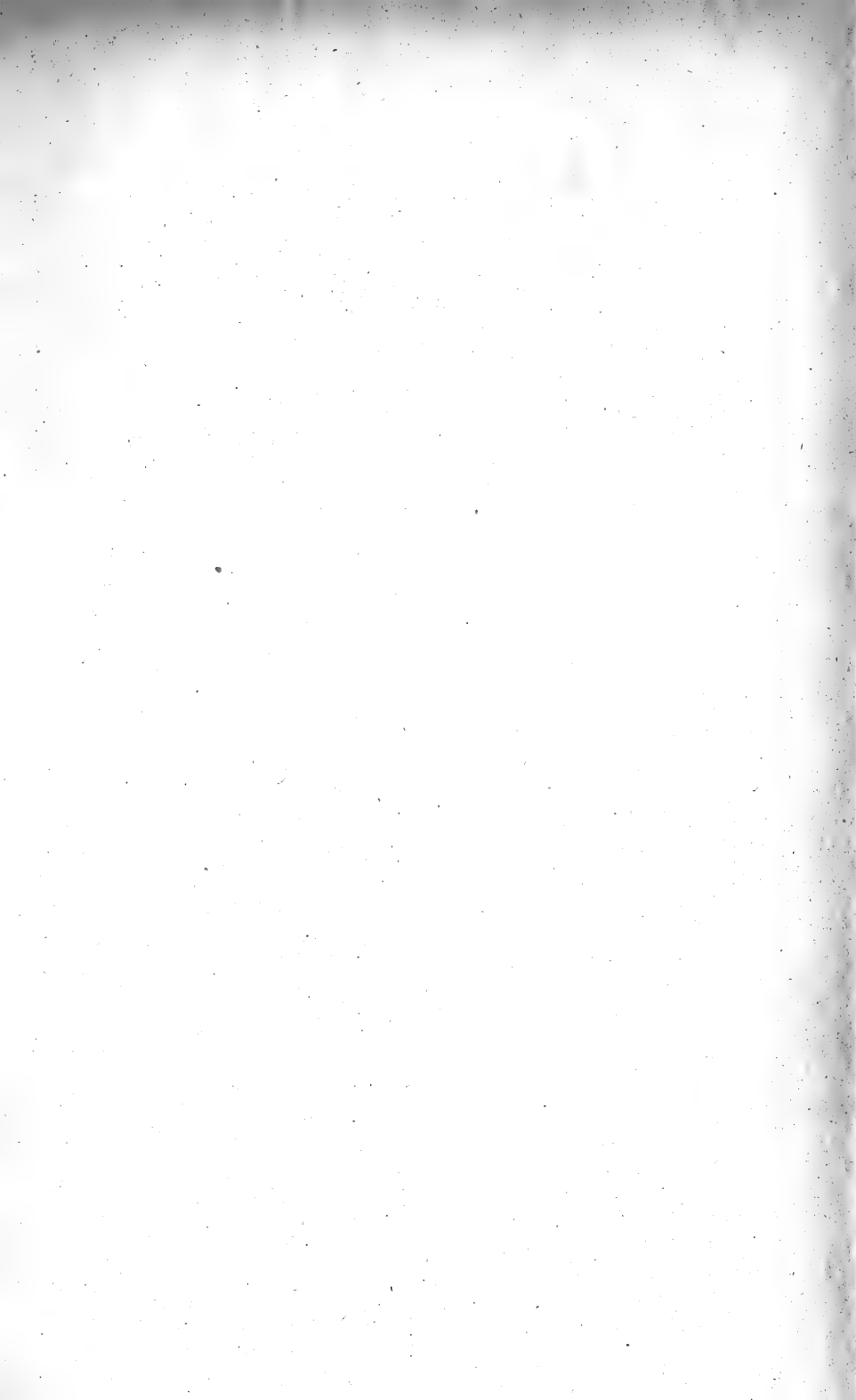
(雀類に關する調査)

鳥

第三卷

自第一號
至第一百五號

日本鳥學會



『鳥』第三卷（自第一一號至第一五號）總目錄

口 繪

第一圖版	故會頭理學博士飯島魁先生肖像	理學士	黑田長禮氏原圖	一號
第二圖版	眞孔雀の蕃殖	理學士	黑田長禮氏原圖	一號
第三圖版	本邦鳥學の發達に貢獻せる鳥學者肖像	理學士	蜂須賀正 <small>マサウツ</small> 氏原圖	一三號
第四圖版	英吉利國の雉類	理學士	蜂須賀正 <small>マサウツ</small> 氏原圖	一三號
第五圖版	稀れなる鴨類雜種	理學士	黑田長禮氏原圖	四號
第六圖版	十週年記念「鳥の展覽會」陳列標本	理學士	小林重三氏筆	四號
第七圖版	<i>Rhinartus ocellatus</i> の頭部	理學士	蜂須賀正氏原圖	五號

論 說

二三鶉・千鳥類の羽衣脱更	理學士	黑田長禮	一頁
二種の迷鳥ヒゲガラ及ノドグロツグミに就て	獸醫學士	内田清之助	七
クロトウゾクカモメの習性	理學士	榎山徳太郎	一〇
廣島市内の一部にて見る鳥類	理學士	中尾春雄	一八
ミカドキジに一新屬の提唱	理學士	公爵 齋司信輔	二三
	理學士	黑田長禮	三七

鷗の換羽に付て……………子爵 松平頼孝……………二二三^號 三八頁

駿河靜浦附近産鳥類(上下)……………理學士 黒田長禮……………二二三 一四〇

テガサハラマシコに就て……………蜂須賀正氏……………二二三 一六三

八丈島産鳥類二三に就て(上)……………榎山徳太郎……………二二三 六一

イヌワシの飛翔に就て……………榎本佳樹……………二二三 七二

四國産鳥類の調査……………藤田昌世……………二二三 七七

逆斑卵に就て……………仁部富之助……………二二三 九八

再び大盜賊鷗に就て……………理學士 公爵 鷹司信輔……………二二三 一〇四

宮城縣若柳附近に於ける鷗・千鳥類の「渡り」(上下)……………熊谷三郎……………二五四 一八三

伊豆大島に於ける鳥類……………榎山徳太郎……………二四 一九六

稀れなる雉類 Rheinardus ocellatus に就て(口繪第七圖版附)……………蜂須賀正氏……………二五 二六三

臺灣産鳥類の追加……………獸醫學士 内田清之助……………二五 二六六

筑前の春の鳥界……………理學士 黒田長禮……………二五 二八八

講 話

カリフォルニヤ啄木鳥の奇習……………理學博士 丘 淺次郎……………二二三 一〇八^號 頁

英吉利國の雉類について(口繪第四圖版附)……………蜂須賀正氏……………二二三 一一一

鳥學之歴史(上下)……………和田千藏……………二五四 二九四

雜 纂

エゾムシクヒの新分布地(靱山徳太郎)……………	二二
カケスの頭部の斑點の變異(理學士黒田長禮)……………	二四
米國シカゴ市リンコン公園の鳥類其他に就て(水野誠)……………	二五
長門佐々並地方の鳥類の價格(兼常彌富)……………	二九
病的の瘤を有するマナヅル(理學士黒田長禮)……………	三〇
青森縣産鳥類目錄(和田干藏)……………	三〇
隱岐島の鳥類(曾田義文)……………	三一
長門佐々並地方の鳥類(上下)(兼常彌富)……………	三一
タマシギの習性(法學士川口孫治郎)……………	三一
池村平太郎……………	三二
ハチクマ及サシバに就て(子爵松平頼孝)……………	三二
信州にて獲たる二種の鳥類(高松良)……………	三三
山形縣村山地方鳥類方言(石澤健夫)……………	三三
宮城縣下鳥類雜記(熊谷三郎)……………	三四
ツバメに就て一觀察(齋藤源三郎)……………	三五
コチドリ(?)の巢及び卵(武知彦榮)……………	三五
ハヅロコチドリ(子爵松平頼孝)……………	三六
アネハヅルの新渡來地(熊谷三郎)……………	三六

質 疑 應 答

カルガモをマガモ屬より分離せしむる時の屬名に就て(答黒田)……………	三二
------------------------------------	----

號 頁

千葉縣茂原町附近の鳥類(齋藤武夫)……………	二二
鳥の方言一二(理學士公爵鷹司信輔)……………	二二
北部本邦産鶺鴒の亞種(靱山徳太郎)……………	二二
ツバメに就て一觀察(齋藤源三郎)……………	二二
刺身で郭公の雛を育て得たり(仁部富之助)……………	二二
傳書鳩使用による夜間通信(岩田巖)……………	二二
燈臺にて候鳥渡來に關する觀察(萩原新正)……………	二二
朝鮮黃海道西島燈臺の鳥類(理學士黒田長禮)……………	二二
西朝鮮に於ける夏季の鳥類(吉田雄次郎)……………	二二
宮城縣下の鳥類の「渡り」(熊谷三郎)……………	二二
イワツバメ及ケアシノスリに就て(石澤健夫)……………	二二
廣島市附近に於ける鳥類(神名勉聰)……………	二二
オホコノハヅクに就て(熊谷三郎)……………	二二
モズの蕃殖に就て(小澤國平)……………	二二
八甲田山の夏季の鳥界(和田干藏)……………	二二
雉の距及尾羽の斑紋異常例(熊谷三郎)……………	二二

<i>Fuligula marila neuretica</i> (Scaupinger) は <i>F. m. marila</i> 及 <i>F. m. maritima</i> の何れの「シノニム」なるやに就て(答黒田)……………	三二
--	----

カハツ、シマツの類とヒメウ、チシマウガラスのいずれを
Phalaropus 属の基型種となすべきか(答黒田)…………… 三
Colymbus imber (Günther) に就て(答黒田)…………… 三
マガモとカルガモの幼鳥綿羽に於ける差異(答黒田)…………… 三
雁、鴨、鴛鴦の夜間寝る場所及視力に就て(答黒田)…………… 三
サ、ゴキ、ヨシゴキ、オホヨシゴキの營巢の状態及び卵の
形状、色彩、長徑、短徑等に就て(答黒田)…………… 三
東京及び其の附近にて剥製用死鳥を集め得る店に就て(答
内田及黒田)…………… 三
動物標本社にて發賣する「乾き粉」の原料及び製法に就て
(答内田)…………… 三
孔雀の雛の概態に就て(答黒田)…………… 三
「色變り」に對する學名に就て(答黒田)…………… 三
家雞の曉を報ずる由來に就て(答黒田)…………… 三
野雞の曉を報ずる有無に就て(答黒田)…………… 三
世界の凡ての雞種の發達に就て(答黒田)…………… 三

雜 報

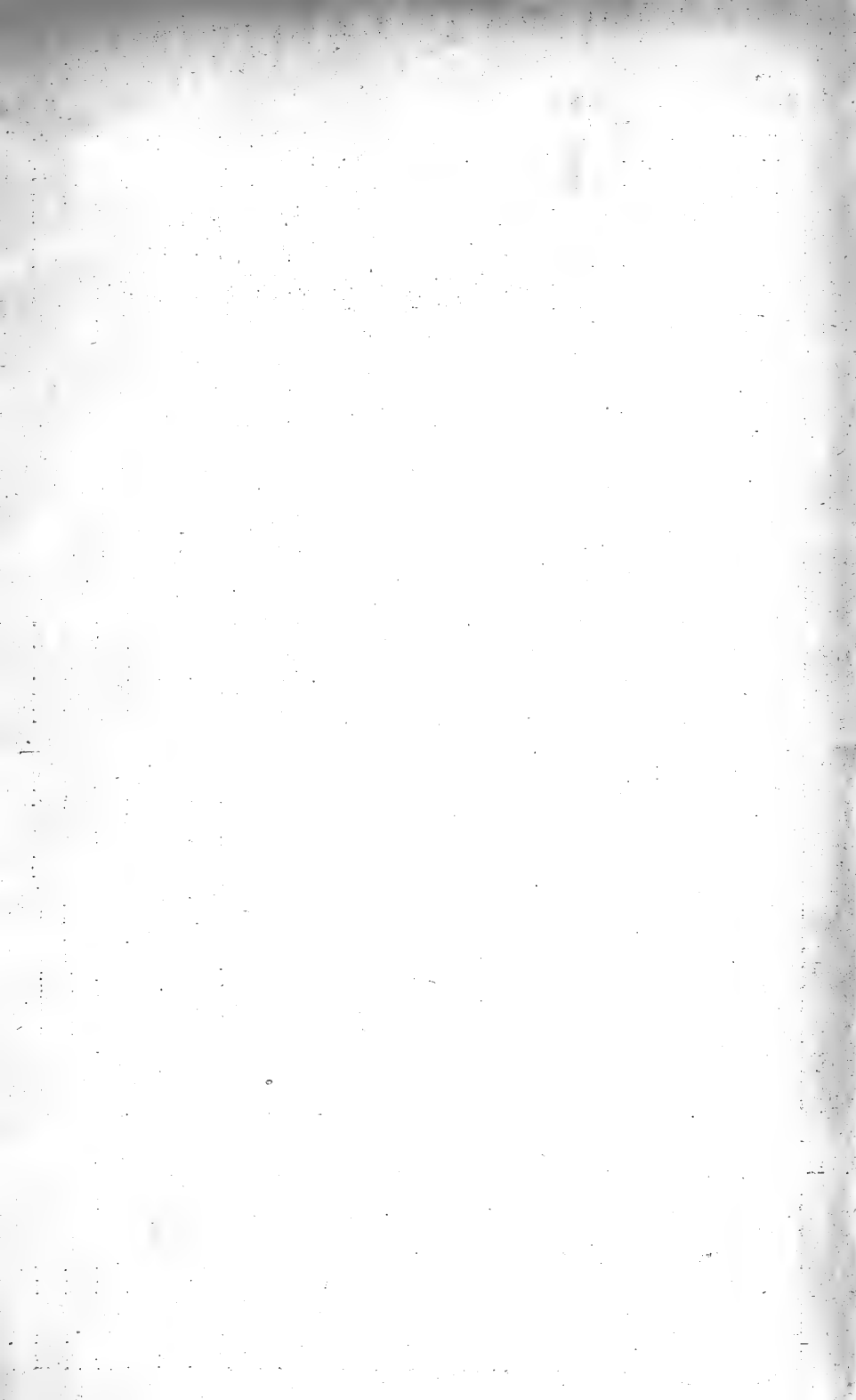
表紙畫説明…………… 三
外國雜誌交換…………… 三
日本鳥類目錄の編纂…………… 三
入會…………… 三
轉居…………… 三

理想的本剥製永久保存棚箱の構造に就て(答黒田)…………… 三
雉及鶺鴒類の尾羽の數に就て(答黒田)…………… 三
日本産雉類及金鷄、銀鷄、白鷗、天鷄、孔雀等を除きたる
此類の鳥類の和名に就て(答黒田)…………… 三
Locustella ochotensis と *Locustella plaska* との差及分布に
就て(答黒田)…………… 三
英國博物館所藏のアカコッコに就て(答黒田)…………… 三
ナガサハラグロビテウに關する書物名及所藏博物館名に就
て(答黒田)…………… 三
鳥卵學に關する英文書名に就て(答黒田)…………… 三
ヤイロテウの發見年代に就て(答黒田)…………… 三
本誌第十號口繪解説ヤマガラ分布に九州(?)とある理由
(答黒田)…………… 三
目今盛な狩獵を絶対に禁じたるよきの鳥界に就て(答黒田)
…………… 三
カモメとウミノコ兩種の幼鳥の差異に就て(答黒田)…………… 三

退會…………… 三
死亡…………… 三
鳥第二卷總目錄正誤…………… 三
附錄 動物學雜誌に掲載せられし鳥類に關する文獻…………… 三
第十五回總會…………… 三

會頭公爵鷹司信輔氏	二一三	一五六
天然紀念物の指定	二一三	一五八
天然紀念物活動寫眞攝影	二一三	一五六
蜂須賀正氏通信	二一三	一五六
福岡鳥の會	二一三	一五九
寄贈書籍目錄	二一三	一五九
新著紹介	二一三	一六〇
第十六回總會	二一三	一六一
鳥の展覽會	二一三	一六二
日本鳥學會十週年記念「鳥の展覽會」	二一四	二五一
第十七回總會	二一四	二五四
蜂須賀氏通信	二一四	二五五
會員和田千藏氏とヤマドリ(純白變)寫眞	二一四	二五六
會員森爲三氏渡歐	二一四	二五六
第十八回總會	二一四	二五七
はとの會設立	二一四	二五八
伺鳥の餌料としての害蟲利用	二一四	二五九
倫敦動物園に新着の極樂鳥	二一四	二五九
本號表紙畫説明	二一四	二五九
鳥十三號正誤	二一四	二六一
臨時刊行物第九篇正誤表頒布	二一四	二六二
本會々則の變更	二一四	二六二
應狩の活動フィルム中の一部	二一四	二六二
第十五號表紙畫説明	二一五	三三三

第十九回總會	二一五	三三三
新評議員渡瀬理學博士	二一五	三三四
蜂須賀氏英國鳥學會々員に推薦せらる(同氏寄贈の三寫眞)	二一五	三三四
狩獵鳥類掛圖の出版	二一五	三三五
會員歸朝	二一五	三三五
臨時刊行物第十篇	二一五	三三五
本會編纂「日本鳥類目錄」正誤	二一五	三三七



日本鳥學會規則摘要

第二條 本會事務所は東京帝國大學理學部動物學教室内に置く

第四條 本會は前條の目的を達する爲め評議會の決議を経て隨時種々の事業をなす

一 當分一年に二回雜誌「鳥」を出版すること

一 臨時刊行物を刊行すること

一 毎年春秋二回會合し鳥類に關する講演談話をなし同時に鳥類に關する圖書標本其他の展覽會を催す

一 鳥學的探檢を舉行すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員と乙種會員の二とす

一 甲種會員は會費として一箇年金五圓を納むること

一 乙種會員は會費として一箇年金二圓五十錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌「鳥」及臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌「鳥」を配布す臨時刊行物は配布せず定價の二割引を以て講讀することを得

會頭 公 爵 鷹 司 信 輔
幹事 内 田 清 之 助
評 議 員 (イロハ順)

理學博士 飯 塚 啓 理學博士 丘 淺 次 郎
理學博士 渡 瀬 庄 三 郎 黑 田 長 禮
子 爵 松 平 頼 孝

大正十二年七月七日印刷

定價金 壹 圓

大正十二年七月十日發行

禁 轉 載

編輯兼 發行者 木 下 憲
東京市日本橋區兜町二番地

印刷人 神谷 岩 次 郎
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

發 行 所

帝國大學理學部 動物學教室內 日本鳥學會
振替口座東京六五九九番

發 賣 所

東京日本橋區 十軒店町 裳 華 房
振替口座東京一〇七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助 著
第一篇 鷓類圖說
 絶版

獸醫學士 內田清之助 著
第二篇 海産保護鳥類圖說
 原定色版三枚
 稅價四十四錢
 附錢

理學士 田長禮 著
第三篇 世界の鴨
 絶版

理學士 田長禮 著
第四篇 世界の雁と鵠
 絶版

仁部富之助 著
第五篇 郭公の蕃殖に關する研究
 寫眞版一枚地圖一枚
 定價金卅五錢 郵稅四錢

理學士 田長禮 著
第六篇 臺灣鳥界
 附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性
 寫眞版四拾錢 繪數一個
 定價四拾錢 郵稅四錢

理學士 田長禮 著
第七篇 鮮滿鳥類一斑
 寫眞版十拾錢 繪數一個
 定價一圓五十錢 郵稅十二錢

理學士 田長禮 著
第八篇 千鳥類の「渡り」
 寫眞版口繪二葉
 定價七拾五錢 郵稅六錢

叔山德太郎 著
第九篇 邦領南洋諸島産鳥類
 原色版三枚コロタイプ版四葉
 地圖二葉挿畫數個約四百頁
 定價六圓半 郵稅十二錢

仁部富之助 著
第十篇 鷄の鳴きに就て
 附圖版三葉
 定價七拾五錢 郵稅六錢

成 完 部 全 版 改 訂 増

閱生先魁鳥飯 士博學理

著生先助之清田内

版 改 訂 増

卷 下 上 說 圖 類 鳥 本 日

(錢八拾稅郵 圓八各價正)

りせ新一目面りよに訂改の項要記下

- (す致一に録目類鳥編會學鳥本日)正改の名學 1
加追の種亞新並類種の數多るたれらせ見發後行發版初 2
入挿の圖生寫類鳥るな巧精ふ伴に右 3
補増訂改の部說總他の其録目書文 4

編 續 說 圖 類 鳥 本 日 増 補

(錢八拾稅郵 圓七金價正)

す加追を種十四約類鳥産灣臺るたれらせ見發後行發版初

元 版

店 書 社 醒 警

町 張 尾 座 銀 京 東

成 完 部 全 版 改 訂 増

農商務省農務局編纂
日本鳥學會發行

狩獵鳥類の方言

定價貳圓 郵稅八錢 (本會々員ニ限リ割引)

農商務省農務局に於て全國各府縣に照會蒐集せしめ調査報告書
本會は鳥類學の發展に資するに、基礎を築き、
鳥類の分布、生活、習性、形態、生態、系統、地理、
分類、及び利用等、の諸問題を、系統的に、
調査し、整理し、出版することを、
目的とし、
東京動物學會發行所、
東京市本區橋十軒店、
第十番地、
に發行所を、
開設し、
發行することを、
決定し、
茲に、
第一號、
「**狩獵鳥類の方言**」を、
發行するに、
由り、
ここに、
告げ、
知らせる。

東京市本區橋十軒店第十番地

發賣所 裳華房書店

著 共 助 之 清 田 内
助 之 富 部 仁

鳥類ノ「渡リ」及蕃殖期

定價壹圓五拾錢稅不

東京動物學會發行

發賣所 裳華房書店

■ 日本鳥學會創立十週年紀念出版 ■

日本鳥學會編纂

日本鳥類目錄 (英文)

A Hand-List of the Japanese Birds.

編輯擔當

理學士 黒田長禮
子 爵 松平頼孝
理學士公爵 鷹司信輔
獸醫學士 内田清之助

内 容

現時知ラル、全日本(各殖民地ヲ含ム)産鳥類ノ全種類ヲ含ム目錄ニ
シテ之ヲ最近ノ分類ニ從テ排列セリ其内容ハ

學名及其ノ原記載掲載ノ書目 英名

學名ノ重要ナルしのにむ 和名及其ノ重要ナルしのにむ

從來知ラル、本邦内ノ詳細ナル分布 索引

體 裁

菊版 用紙舶來上質百斤

紙數約百六十頁

並製 表紙こーでりあ假綴

上製洋布表紙天金脊及角皮

出 版 部 數

上製百部

並製三百部

再版セズ

實 價

並製金三圓

上製金五圓

郵稅十二錢

注 意

本會會員ニ限リ一割引(會員ハ直接本會へ申込ヲ乞フ)

臨時刊行物ニ非ザルヲ以テ甲種會員ニモ無代配布ヲナサズ

出版部數僅少ナルヲ以テ豫メ本會又ハ賣捌所へ御申込ヲ乞フ

賣 捌 所 裳 華 房

日本橋區十軒店町
振替東京一〇七番

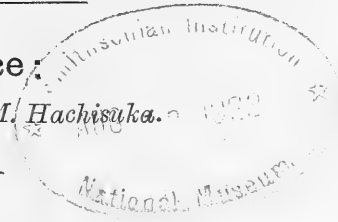
“TORI” THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. III. No. 15. July, 1923.

Frontispiece:

The head of *Rheinardius ocellatus*. By M. Hachisuka.



Contents:

On a rare pheasant, *Rheinardius ocellatus*. By M. Hachisuka.

Some additions to the avifauna of Formosa. By S. Uchida.

On the migration of some Waders near Wakayagi, Prefect. Miyagi
(II). By S. Kumagai.

Spring birds at Chikuzen, Kiusiu. By N. Kuroda.

History of the Birds (II). By K. Wada.

ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN.

c/o Science College, Tokyo Imperial University.

President.

PRINCE N. TAKATSUKASA.

Secretary.

S. UCHIDA, C.F.A.O.U.

Committee.

The President, Ex officio. The Secretary, Ex officio.

A. IZUKA, *Rigakuhakushi*.

A. OKA, PH. D., *Rigakuhakushi*.

S. WATASÉ, PH. D., *Rigakuhakushi*.

N. KURODA, F.M.B.O.U., H.F.A.O.U. VISCOUNT Y. MATSUDAIRA.



鳥

第
十
四
號

行發月三年二十正大

會學鳥本日

「鳥」第三卷第十四號目次

口 繪

稀れなる鴨類雜種(第五圖版)..... 理學士 黑田長禮氏原圖
小林重三氏筆

十週年記念「鳥の展覽會」陳列標本(第六圖版)

論 說

駿河靜浦附近産鳥類(下)..... 理學士 黑田長禮

宮城縣若柳附近に於ける鷓・千鳥類の「渡り」(上)..... 熊谷三郎

伊豆大島に於ける鳥類..... 榎山徳太郎

講 話

鳥學之歴史(上)..... 和田千藏

雜 纂

長門佐々並地方の鳥類(下)..... 兼常彌富

ハジロコチドリ..... 子爵 松平頼孝

アネハヅルの新渡來地..... 熊谷三郎

千葉縣茂原町附近の鳥類..... 齋藤武夫

鳥の方言一二..... 理學士 公爵 鷹司信輔

北部本邦産鶴雉の亞種..... 榎山徳太郎

ツバメに就て一觀察..... 齋藤源三郎

刺身で郭公の雛を育て得たり..... 仁部富之助

傳書鳩使用による夜間通信..... 岩田巖

質 疑 應 答 五 件 (黑田長禮回答)

雜 報 十八件



1

2

稀れなる鴨類雜種 (東京府下羽田にて採集せる野生のもの)

1 ヨシガモとヒドリガモとの雜種(雄)

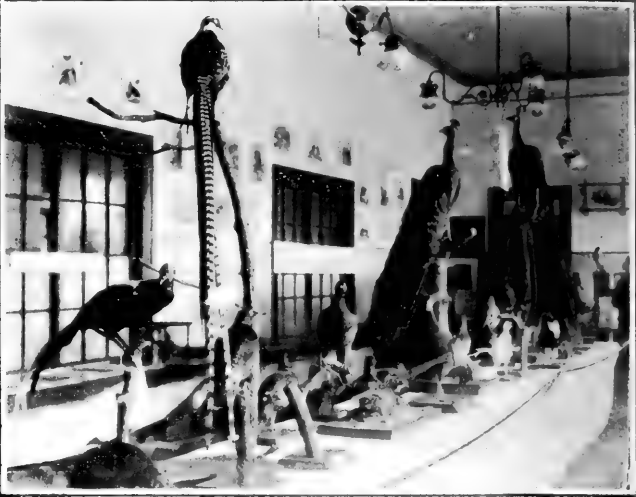
Eunetta falcata × *Mareca penelope*. ♀ nat. size.

2 ナナガガモとマカモとの雜種(雄)

Naflia acuta acuta × *Anas platyrhynchos platyrhynchos*. ♀ nat. size.

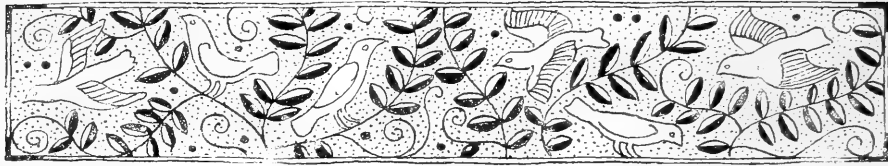
黒田 長禮 氏 筆
小林 重三 氏 筆
黒田 長禮 氏 原 圖





内務省出品天然紀念物としての鳥類(第二室の一部)

本標列陳[會覽展の鳥]念記年週十



論 說

駿河靜浦附近産鳥類 (下)

理學士 黒田長禮

* 60. *Alauda arvensis japonica* T. & S.

ヒバリ

桃郷・沼津間の畑には稍多く此聲を聞き得れき(大正四年三月卅日)志下附近には少なく余は一回大正九年二月廿六日に見たることあるのみ。太正四年四月五日沼津在門地にて見る。

61. *Calobates cinereus melanope* (Pall.)

キセキレイ

當地方にては普通の種類にして余の見たる記録左の如し。

大正	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三	八	七	八	八	九	二	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
廿三日	廿五日	廿八日	廿八日	廿九日	三月廿六日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日	三月廿九日
伊豆	伊豆	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長	志長
下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡	下岡
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽
生	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼	幼
殖	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥
示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示
す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す
即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即	即
ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち
黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒
喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉	喉

右の記録によれば伊豆長岡にては蕃殖するものあること疑ひなく又佐野濠園附近の流れには留鳥として年を通じて見らるゝならんこと信ず 靜浦村志下地方にては恐らく蕃殖するものあるべきも尙ほ不明にして秋の渡來させば幼鳥が已に八月初旬より見られ恐らく越冬するものゝ如く未だ生殖羽のものを見たることなし。

62. *Motacilla alba granitis* Sharpe.

セグロセキレイ

當地方にては普通の種類にて記録左の如し

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備 考
大年 四年四月三日	伊豆木負	一羽	海岸にて見る
同 八年六月十九日	志下海岸	一羽	海岸の舟の上にて成鳥轉る
同 年七月五日	伊豆長岡	一羽	幼鳥鼠色のもの、當地にて蕃殖せしならん
同 年八月十一日	志下海岸の松林	二羽	松の太木の可かり高所にて一羽の方轉る成鳥雌雄ならん
同 九年二月廿一日	志下海岸	二羽	本年始めて見たり。成鳥
同 年二月廿六日	志下海岸	少數	畑にて見る。成鳥
同 年三月十九日	伊豆木負	同上	小川及海岸にて見る。成鳥
同 年三月廿八日	佐野濠園附近	同上	流れにて見る。成鳥
同 年八月廿日	志下海岸	一羽	幼鳥を見る
同 年八月廿七日	佐野濠園附近	少數	成鳥を見る

以上の結果當地方にては留鳥として見らるゝものゝ認むることを得べし。狩野川には多く見たることあり。本種は主として流れ又は河原に多きも時として畑にも又海岸にも岩上にも見ることあり。海岸にて小魚の落ちしものを食ふを見ること多し。

63. *Motacilla alba tugens* Kitch.

ハクセキレイ

當地方にてはセグロセキレイよりも確に少なく余は主として冬季に見たり。

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正三年八月廿三日	志西浦沿岸下	一羽	海岸にて見る
同四年一月六日	志西浦沿岸下	一羽	海岸にて見る
同七年三月一日	志西浦沿岸下	一羽	同上
同年三月二日	同	少數	海岸及畑にて見る
同年三月四日	同	數	川口にて見る
同年三月八日	伊豆野内	二羽	海岸にて見る
同年三月十七日	多比濱	少數	同上
同八年十二月廿六日	志	一羽	同上
同十年三月十一日	同	一羽	同上
同十年三月十三日	同	一羽	畑にて見る

本亞種も海岸(第三十圖)にて見るこゝろ(第三十一圖)にて見るこゝろあり。

64. *Fulvus trivialis hodgsoni* Richmond.

ビンスイ

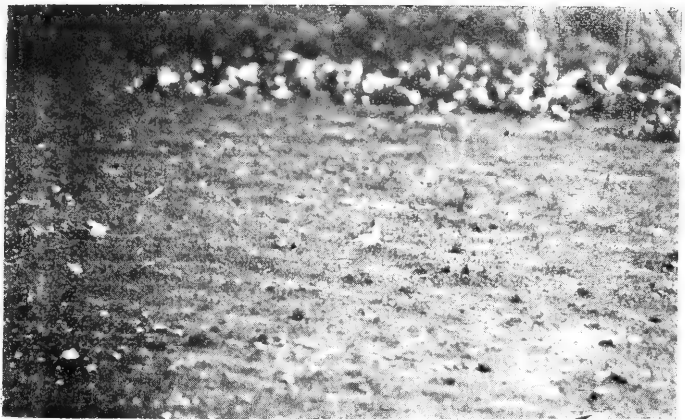
當地方にては明かなる冬鳥にして其渡來期は二月に入る如し。各別莊の庭等の松林に來り歩むもの常に五六羽より十羽位ひこす。本種に關する記録左の如し

觀察月日	觀察地	觀察數
大正四年四月四日	志下海岸松林下	一羽
同九年二月廿二日	志下海岸松林上	一羽
同十年四月十日	同	數
同十年二月十日	同	數

當地方にては四月初旬迄留まるこゝは確實なり然し蕃殖するものありや否や尙ほ不明にして夏季には全く見ず
又は稀れ(?)に狩野川原にて見しこゝあり。
當地山地の松林



第三十圖 海濱に於けるハクセキレイ
(志下にて大正十年三月十一日撮影)



第三十一圖 畑に於けるハクセキレイ
(志下にて大正十年三月十三日撮影)

當地方にてはビンズイよりも稍多く明かなる冬鳥なり其渡來期は十二月下旬の如し。主として水田に群集するも亦海岸の潮干の瀬又は川口の礫又は堤防材木の上或は海邊の砂上等にも屢々見掛くることありハクセキレイ又はセグロセキレイの場合の如く海邊にては小蟲の外小魚の落ちたるを食ふを目撃す。余の本種に關する記録は左の如し。

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備 考
大正八年十二月卅日	志 下	一 羽	初渡來?
同 九年一月四日	揚原村下香貫	少 數	田にて見る
同 年二月廿六日	志 下	可なり多 數	同上
同 年三月十九日	伊豆木	稍多 し	同上
同 十年三月十日	志 下	少 數	同上

春季の去期は不明なり。余は狩野川口にても多數を見たり。

65. *Microscelis amaraotis amaraotis* (Temm.).

ヒヨドリ

當地方にては數多からざるも留鳥たり余の觀察記録左の如し。

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備 考
大正四年四月五日	沼津在門地	一 羽	
同 八年六月廿三日	鷺頭山麓		遠聲を聞く
同 年六月廿四日	伊豆淡島		鳴聲を聞く
同 年六月卅日	多 比		同上
同 年七月一日	志下鷺頭山間		同上
同 年七月五日	伊豆淡島		同上
同 年七月六日	鷺頭山麓		同上

又早き *tau, tau, tau* (ら聞) の。こは幼鳥(體に白斑あるもの)の聲なり。

68. *Planesticus eunomus* (Temm.)

ツグミ

明かなる候鳥にして其渡來期も亦早からず。當地方にては冬鳥にして其數稍多し。

觀察月日	觀察地	備考
大正四年四月五日	沼津在門池	林にて捕獲
同 九年一月四日	揚原村下香貫附近	畑にて見る
同 年一月十一日	志 下	同上
同 年二月廿六日	同 上	同上
同 年三月廿六日	同 上	松林にて捕獲

69. *Planesticus chrysolus* (Temm.)

アカハラ

明かなる冬鳥にして少數を見る

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正四年三月卅一日	志 下	一 羽	
同 年四月五日	沼津在門池	一 羽	
同 八年十二月卅日	志 下海岸松林	一 羽	
同 九年二月廿三日	同 上	一 羽	
同 十年二月廿七日	同 上	一 羽	庭内の木の實を食ふ
同 年三月九日	同 上	一 羽	
同 年四月四日	沼津在門池	一 羽	

70. *Planesticus pallidus* (Temm.)

シロハラ

大正九年三月十九日伊豆田方郡木負より不動の瀧(一里二十餘丁)間にて一羽を見る。同五年三月三日及同十年四月四日沼津在門池にて二羽を得。

71. *Monticola solitarius magnus* (La Touche).

イソヒヨドリ

當地沿岸各地に多少を見る留鳥なり。

大正八年八月十六日	大正八年八月十八日	大正八年八月廿一日	大正八年八月廿六日	大正九年九月三日	大正九年九月五日	大正九年九月九日	大正九年九月十日	大正九年九月十五日	大正九年九月廿一日	大正九年一月六日	大正八年八月廿三日	大正八年八月卅日	大正九年九月廿四日
志下海濱	同	多比濱	伊豆大瀬	靜浦島	馬込獅子濱間城山	志下濱	同上	同上	伊豆淡島	靜浦島	同上	江浦島	靜浦島
一	一	一	一	二	一	二	一	一	一	一	一	一	一
羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽
雌	同	雌	雌	雌(海岸)	雌雄	性不明、色彩は雌なり而して囀る	同上	雌	雌	雄成鳥囀る	雌	雌	雌
考													

本種の雄の囀りは非常に佳聲なり靜浦雀島(大正九年八月廿三日参照)にて聞く。大正八年九月十日及十五日に聞きしものにして余のノートには次の如く記しあり。

イソヒヨ一羽電線に止りて轉り少し飛びつゝも鳴けり而して下面に赤味全くなし♀*ad.*なりしか♀*im.*してはこの鳴聲佳なるは不思議なり。或は♂*juv.*? 又は♂? *est.* 因に大正七年夏も福岡濱町にて下面赤からざるもの轉りたり。記して後の研究の料とす。

72. *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pall.).

ジャウビタキ

當地方にては明かなる冬鳥なり。

観 察 月 日	観 察 地 地	観 察 数	備	考
大正四年一月六日	伊豆西浦沿岸	一	海岸にて見る	
同 七年三月一日	志 下	二		
同 九年一月三日	鷺 頭 山 麓	一		
同 年二月廿一日	志 下 海 岸 松 林	一	鳴聲「ヒンヒンヒン」を聞く	
同 年二月廿二日	同 上	一	雌	
同 年二月廿四日	同 上	一	雄	
同 年三月廿八日	佐 野 瀑 園 附 近	一		
同 年四月三日	志 下 海 岸 松 林	一		
同 十年二月十日	同 上	一		
同 年三月八日	同 上	一	雄	

本種の渡來期は恐らく一月初旬なるべく而して四月初旬迄留まることは確實なり。主として山地に棲息するも二月以後は屢々海濱の松林にも訪れ又海岸の波打際の岩上等にも之れを見ることあり。(後例は西浦沿岸にて見たり表中参照)。

本種は方言タマツバキと稱する小樹の低き葉上にて降雨の節盛んに水浴びをなし居たるを見たり(靜浦志下にて大正九年三月廿一日觀察)。

73. *Tarhica cyathura* (Pall.).

ルリビタキ

明なる冬鳥にして其數少なし。

觀察月日	觀察地	觀察數
大正四年一月六日	伊豆大瀬岬	一羽
同年四月五日	沼津在門池	一羽
同年三月廿八日	佐野瀑園附近	一羽

本種に關する渡りの材料少きを以て明記するを得ず。

* 74. *Cisticola cisticola bruniceps* (T. & S.).

セツカ

大正三年八月廿七日志下の畑にて本種の鳴きつゝ飛ぶを實見したり。其後全く見ず。

* 75. *Horopus cantans cantans* (T. & S.).

ウグヒス

當地方にては海岸附近は明かなる候鳥なるが山地附近は蕃殖するものあるやも知れず但し淡島には晩夏の候に鳴聲を聞く。

觀察月日	觀察地	備	考
大正三年八月廿日	伊豆淡島	一羽のホーホケキヨを聞く	
同年三月十五日	志下海岸附近	一羽のホーホケキヨを聞く初鳴?	
同年三月十九日	伊豆木負	少數を見る	
同年三月廿八日	佐野瀑園附近	一羽のホーホケキヨを聞く	
同年三月五日	志下海岸附近	一羽のホーホケキヨを聞く、初鳴	

初鳴期は三月初旬又は中旬の如し。

76. *Regulus regulus japonensis* Blak.

キクイタダキ

當地方にては冬鳥にして大正四年四月五日沼津在門地にて數羽を見たり大正九年三月廿八日佐野瀑園附近にて數羽を見たり。

* 77. *Cinclus pallasi pallasi* Temm.

カハガラス?

大正九年三月十九日伊豆木負より不動の瀧間にて本種の鳴聲(?)を聞けり。同十一年九月二日佐野瀑園にて二羽を見たり。

* 78. *Hirundo rustica gutturalis* Scop.

ツバメ

本種に關する余の記録左の如し。

觀察月日	觀察地	觀察數	備	考
大正八年六月十八日	志下	一	餘り多からず	
同 年六月廿二日	同上	一	暴風雨中飛行するを見る	
同 年六月廿八日	楊原村上香貫山	少		
同 年七月七日	鷺頭山	同		
同 年八月一日	志下	同		
同 年九月廿一日	鷺頭山	同		
同 九年四月四日	志下	同		
同 年八月廿七日	大岡村	二	初渡來	
同 年九月八日	牛臥附	一		
同 年九月九日	狩野川	二		
同 年九月廿七日	鷺頭山	三		
同 年九月廿七日	鷺頭山	一		

渡來期は四月初旬なるこゝ一回のみなれど確實にして去期は尙ほ不明恐らく十月に達すべし。

79. *Lanius tacephalus* T. & S.

モズ

當海岸地方にては非留鳥の一種と認むべく勿論單に小距離の移動をなすのみなり。兎に角志下にて初秋より春迄に見られ蕃殖するも夏は山地に去るものゝ如し。

觀察月日	觀察地	觀察數	備	考
大正四年四月五日	沼津在門池	一羽	鳴聲を聞く、初鳴ならん	
同 八年九月五日	沼津在門池	一羽	同上	
同 九年九月六日	同上	一羽		
同 十二年十二月廿七日	同上	一羽		
同 九年一月一日	同上	一羽		
同 年二月廿六日	同上	一羽		
同 年三月十九日	伊豆木	少數		
同 年八月廿八日	志	一羽	新渡來ならん或は留鳥?	
同 年九月八日	同	一羽	初鳴ならん	
同 年同月同日	牛臥	一羽	同上	
同 年同月同日	狩野	一羽	同上	
同 十年二月廿八日	志	二羽		
同 年三月十日	同上	一羽		
同 年三月十九日	同上	一羽		
同 十一年八月廿六日	同上	一羽	巢立ち前約一週間位の雛なり。	
同 年八月廿六日	同上	一羽	初鳴を聞く	
同 年八月廿六日	同上	一羽	同上	

80. *Turdus major minor* F. & S.

本種の觀察記錄左の如し。

シジフカラ

觀察月日	觀察地	觀察數	備	考
大正三年八月廿一日	志	一羽		
同 四年四月五日	沼津在門池下	二羽		

同	八年八月十一日	志下海岸松林	一	羽	夏は極めて少し数日前にも鳴聲を聞きし如し囀聲に あらず 聲を聞く、囀聲にあらず 自庭内午前七時半見る 聲を聞く、囀聲にあらず
同	九年九月廿二日	同上	一	羽	
同	九年三月十九日	伊豆木負	少	數	
同	年三月廿八日	佐野瀑園附近	同	上	
同	年八月十六日	志下海岸松林	一	羽	
同	年九月二日	同上	一	羽	

本種は志下地方にては留鳥にあらず恐らく不定の出現を見るべく實際其數少なし。他の山地々方にて蕃殖するものあるは疑ひを容れず。沼津在門池にては普通なり。

81. *Sittiparus parvus eurivus* (T. & S.).

ヤマガラ

大正四年四月五日沼津在門池にて觀察せしのみにして海岸地方には來らず、

82. *Periparus ater insularis* (Helm.).

ヒガラ

大正四年四月一日志下にて見 同年四月五日沼津在門池にて見る。

83. *Fagihalos caudatus tetrirgatus* (T. & S.).

エナガ

大正四年四月一日志下山にて同四年四月五日沼津在門池にて數羽を又同九年三月十九日伊豆木負にて見たり。

84. *Corvus coronoides japonensis* Bp.

ハシブトガラス

當靜浦地方には普通にして留鳥たり。

觀察月日	觀察地	備	考
大正三年八月廿三日	伊豆江梨		
同七年三月一日	志下	海濱可なり多し	



第三十二圖 海濱に於けるハシブトガラス
(桃郷にて大正十年三月十一日撮影)

85. *Corvus corone interpositus* Latham.

本種も留鳥として見られるも多からず又大群をなさざるが如し。主として海岸にのみ棲息し人の接近し得るは前種よりも容易なり山地及び畑にては全く見ず。狩野川口、桃郷海岸等に見る。大正四年一月六日伊豆西浦沿岸にて捕獲、大正八年八月廿七日桃郷海岸に二羽を見る恐らく雌雄ならん。本種は二羽(雌雄ならん)のみにて海岸に見るこゝ多し。大正八年十二月廿七日も同地にて見たり。

本種は畑にも亦海岸にも又松林にも之れを見るこゝを得。主として山地及畑に棲息するものゝ如きも海岸に漁夫の捨てたる魚類其他塵埃を見て之れに集り來る(第三十二圖)。特に冬季寒冷の候には早朝人出なきときは海岸に多數の群を見るこゝあり。又生巢のイワシを食ふを見るこゝあり。次の種類よりも數多し。

ハシブトガラス

同	大正八年六月十八日	志	下	海岸松林にて鳴く
同	年六月二十三日	同	上	海岸砂上に見る。確實!
同	年七月五日	伊豆淡島		
同	年七月六日	鶯頭山		中腹にて見る
同	年八月一日	志	下	海岸の松林にて見る
同	年十二月二十七日	同	上	同上
同	九年二月二十六日	同	上	畑にて見る
同	年三月十九日	伊豆木負		少し、本種なりしならん
同	年三月廿八日	佐野瀑園附近		少し
同	十年三月十一日	桃郷		海岸に見る

* 86. *Troglodytes japonicus* T. & S.

カケス

當靜浦地方には棲息せず余は大正九年三月十九日伊豆田方郡木負附近不動の瀧にて三羽を見、又同年三月廿八日佐野瀑園附近にて一羽を目撃せり。

* 87. *Spydiopsar cinereus* (Temm.).

ムクドリ

本種は當志下のエノキの大なる樹洞にて近年年々蕃殖す。

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正八年六月十八日	志 下	十四—五羽	エノキの樹洞にて蕃殖
同 年六月二十三日	桃 郷 林	少 數	八月に入りて始めて見たる如し
同 年八月三十日	志 下	多 數	
同 年九月四日	同 上	同 上	
同 年九月十日	同 上	五—六羽	多數居るものの内少數丈け見たるが加し
同 年十二月二十七日	同 上	多 數	
同 年一月四日	同 上	同 上	
同 年二月二十六日	同 上	少 數	
同 年三月十九日	伊 上 畑	同 上	
同 年八月二十七日	大 岡 村	同 上	
同 年九月九日	狩 野 川 土 手	約 五 十 羽	此川の沿岸の樹洞にて此年に蕃殖せしならん
同 年九月二十五日	志 下 松 林	多 數	コムクドリと混群す
同 年二月十日	志 下	少 數	エノキの樹洞に出入す
同 年八月廿六日	同 上	一 群	群始めて來る

當地方にては留鳥として見らるるも時期により數に増減あり、即ち此地のエノキの樹洞にて蕃殖し得ざるものは他の地方に趣くものゝ如し。即ち少數のものゝみが蕃殖し八月下旬頃には他地方にて孵化せし幼鳥渡來し多數なるものゝ如し。

* 88. *Sturnia violacea* (Bodd.).

コムクドリ

一七八

當地方にては單に大正九年九月廿四日志下の海岸の松林に多數來りしを見たり之れ秋季の渡來初期なり。翌廿五日にも本種コムクドリの混群を觀察せり。本種の春季にも渡來するや否や不明にして又冬季は全く棲息せず。

89. *Zosterops puberula japonicus* T. & S.

メジロ

當地方にては春季ツバキの花開きし際には多きも其他の期節には少なし。

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正三年八月廿日	伊豆淡島	少數	此島には留鳥ならんツバキに多し同上他に見ず
同五年二月十八日	伊豆大瀬岬	多數	
同八年九月十五日	志下	多數	
同九年三月廿七日	伊豆大瀬岬	少數	
同十年三月十一日	志下	一羽	

伊豆淡島にては明に蕃殖するものあり得べし。

90. *Coccyzus coccyzus japonicus* T. & S.

シメ

當靜浦にては冬鳥として少數のみ見らる。

觀察月日	觀察地	觀察數
大正九年一月十二日	志下	一羽
同年二月二日	同上	一羽
同年二月廿六日	同上	一羽

同	同	上	上	一	一	羽	羽
同	十年二月十日	同		一		羽	

四月初旬迄留まるは確實なり。

91. *Fringilla montifringilla* L.

アトリ

大正四年四月五日及同五年三月三日沼津在門池にて二羽を得たり。

92. *Spirus spinus* (L.)

マヒワ

大正四年四月五日沼津在門池にて一羽を得たり。

93. *Chloris sinica minor* (T. & S.)

コカハラヒワ

觀察月日	觀察地	觀察數	備	考
大正三年三月三日	沼津在門池	一羽		
同四年三月卅一日	志下	少數		
同八年六月十九日	志下海岸松林	二—三羽		
同九年二月廿六日	志下	少數		
同十年八月廿八日	志下海岸松林	同上		
同十年三月六日	同上	一羽	ゲーゲーと鳴く	
同十一年八月廿一日	同上	一羽	チリチリを聞く	

本種は多からざるも留鳥として見られ明に蕃殖するものあり得るなり。

94. *Passer montanus saturatus* Stejn.

スズメ

本種は留鳥たること勿論にしてその數多からず。余は志下(可なり多し)伊豆木負(少)及び佐野濠園附近(少)にて見たり。大正十



第三十三圖 ホ、ジロ
(志下にて大正十年三月十日撮影)

一年八月廿四日夜來の暴風雨の爲め五羽斃死せるものあり幼鳥のみにて已に黒喉となりし程度のものなりき。

* 95 ♀ *Emberiza fucata fucata* Pall. ホ、アカ?

大正八年十二月廿七日志下の畑地の溝内にて目撃せし一羽は恐らく本種なりしならん。其數少なし。

96. *Emberiza cioides ciopsis* Bp. ホ、ジロ

當地方にては留鳥なり。最も普通に畑(第三十三圖)及び山地に見るも決して非常に多からず。蕃殖すること確實なり。

大正三年八月廿七日	觀	鷺	可なり多し	備考
同四年四月五日	察	沼津在門池	鳴聲盛なり囀聲もあり	
同八年六月廿一日	月	鷺頭山麓	少數	
同六年六月廿八日	日	楊原村上香貫	囀聲を聞く	
同六年六月卅日		多	少數	
同七年七月五日		伊豆長	多し。此年の幼鳥一二羽を見る	
同七年七月六日		鷺頭山麓		

同	大正八年八月十三日	志	山下	山	鳴聲屢々聞こゆ
同	九年八月廿六日	伊豆	大瀬	岬	二羽を見る
同	九年一月三日	鶯	頭山	麓	
同	九年一月四日	楊	原村下	貫	
同	九年二月廿六日	志	下の香	畑	
同	九年三月十九日	伊豆	大木	負	多し
同	九年三月廿七日	伊豆	大瀬	岬	少数
同	九年三月十八日	佐野	瀑園	近	同上
同	九年八月十八日	鶯	頭山	麓	鳴聲を聞く
同	十年三月十日	志	下の山	畑	桑畑にて一羽を見よ(第三十三圖)

本種の囀聲は七月初旬に幼鳥を見るに拘らず夏にも即ち蕃殖期後?にも聞くこゝを得るなり(右表参照)。

97. *Emberiza pusilla* Pall.

カシラダカ

明に冬鳥にして靜浦地方には少なし余は只二回大正五年二月廿二日及廿六日に少数を目撃し且つ採集せり。

98. *Emberiza spilocephala personata* Temm.

アチジ

明に候鳥にして冬季より春季に掛けて目撃す。雄の春季の囀聲頗る佳なり。

大正四年四月一日	志	山下	山	少数
同 年 四月五日	沼津	在門	池	同上
同 年 三月一日	志			同上
同 九年一月三日	志			同上

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
三	二	四	三	三	三	三	三	三	三
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
十	十	二	八	八	八	八	八	八	八
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
同	同	志	佐	伊	伊	伊	伊	伊	伊
			野	豆	豆	豆	豆	豆	豆
			瀑	大	大	大	大	大	大
			園	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬
			附	附	附	附	附	附	附
			近	岬	岬	岬	岬	岬	岬
			上	少	稍	稍	稍	稍	稍
			同	同	同	同	同	同	同
			上	上	上	上	上	上	上
			同	同	同	同	同	同	同
			上	上	上	上	上	上	上
			上	上	上	上	上	上	上

當地には一月初旬頃より來り四月初旬迄留まることは確實なり。

99. *Ysa viridialis* (Tamm).

大正七年三月七日志下にて余は一羽を獲たり。當地には稀れなる種類なり。

(完)

クロジ

鳥類生態寫眞

鳥類の生態的研究にはその野生状態に於ける儘の寫眞が最も必要である。各國の鳥學會では此種の寫眞が多くの雜誌に掲載せられて居るのは常に見ることであるが我國では至つて此種の寫眞が少ないから今後各地の會員諸君から本誌へ御寄贈を願ひ度いのであります(黒田記す)。

宮城縣若柳附近に於ける鷓・千鳥類の「渡り」 (上)

熊谷三郎

宮城縣の西北部なる若柳町（東經百四十一度—北緯三十八度四十七分）附近に於ける鷓・千鳥類の「渡り」に就ては先に「宮城縣下に於ける鳥類の「渡り」と氣温」（動物學雜誌大正九年二月號）の題下に於て概括的に表示せしに過ぎざりき。然るに其の後の觀察と採集物との結果多少の追加と訂正とを要することとなりたり乃ち次に報告せんと欲す。

本報告を發表するに當り理學士黒田長禮氏は特に諸種の御教示と貴重なる標本とを贈られ本調査に非常なる便宜を與へられたる御厚意に對して、ここに謹んで感謝の意を表す。

尙本文記載中の氣象に關する調査に就ては若柳氣候觀測所の稻葉研次郎氏の御厚意を謝す。

若柳附近に渡來する種類

大正四年以降大正十一年二月二十八日までには於て採集並に觀察し得たる鷓・千鳥類は次の如く (1)ケリ (2)タゲリ (3)ダイゼン

- | | | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|---|------------|------------|--------------|-----------|
| (4)ムナグロ | (5)イカルチドリ | (6)コチドリ | (7)キャウジヨシギ | (8)ダイシヤクシギ | (9)ホウロクシギ | (10)オホソリハシシギ | (11)ラグロシギ |
| (12)ツルシギ | (13)クサシギ | (14)キアシシギ | (15)イソシギ | (16)アヲアシシギ | (17)エリマキシギ | (18)トウネン | (19)ハマシギ |
| (21)アヲシギ | (22)コシギ | (23)ヤマシギ | の二十三種を數ふるを得たり然れども目下引續き採集中なれば今後多少種類の増加すべきことを思はるるは次回に於て報告せん | | | | |

各種類の「渡り」に就て

次に上記の二十三種類の各に就ての「渡り」の状況を記述せんに

* 表中氣温其他の觀測は若柳氣候觀測所の午前十時一回の觀測にして温度は攝氏にて示せり

Max. (最高温度) Min. (最低温度)

(1) *Microsaurus cinereus* (Blyth).

ケリ

本種を當地方にて獲たることは屢々ありしものゝ如く「ケール」「ヤマゲル」等の方言あるにても知り得べし、然るに私の觀察並に採集は甚だ不充分にして第一表の如く夏期一回採集物入手せるのみなり、而し他地方の例に據れば(黒田氏著鷓・千鳥類圖説二八

第一表

年月日	最高温度	最底温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備	考
大正六、八、二五	二四・一	一八・〇	九〇	—	—	—	二快 晴	一羽採集す	

頁参照) 明治十五年十二月廿三日埼玉縣川越にて、明治四十四年三月靜岡にて各採集せられ尙產地不明、明治十八年四月二十八日採集せられたる例あり。これに據つて本種の本州に於ける其の渡來期は八月下旬東北地方に始まり埼玉、靜岡兩縣下にて越冬するものゝ如く四月下旬頃は其の渡去期に非らざるか。

(2) *Vanelus vanelus* (Linn.)

タゲリ

此種は前種よりは多けれども普通なるものに非ず、余は本種の「渡り」に就ては第二表の觀察をなし得たるに過ぎず。これに據れば秋季渡來は已に八月下旬にして十月下旬までは多少見るを得れども以後見られざるは普通なれど二月下旬採集せられたる例あれば當地方にて越冬するものもあり得べし、而し多くは當地以南にて越冬するものに非らざるか、春季四月下旬に見たるは其の渡去期なるべし。

第二表

年月日	最高温度	最底温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備	考
大正七、二、二五	九・一	(一) 三・四	七七	—	—	四	晴	新田にて雄一羽採集	

大正九、四、一一	一五・二	二・二	四	西	一	七	同	午後十時頃鳴聲をきく
同 四、一三	一四・二	四・二	五五	南	一	八	曇	夜中鳴く
同 一〇、八、三〇	二四・六	二・八	七九	西	二	八	同	鳴聲をきく
同 一〇、一一	二五・〇	一七・六	六六	西	二	五	晴	午後十二時鳴聲を聞く
同 一〇、二六	一四・〇	四・二	六一			六	同	南谷地にて雄一羽採集

第二表は其の觀察日記にして第三表は其の結果を簡單に表示せるものなり

第三表

季秋	季春
渡來初期	渡來初期
同上	同上
溫度	溫度
Min. Max.	Min. Max.
二・八 二四・六	四・一 一四・〇
八月下旬	二月下旬
同去期	同去期
同上	同上
溫度	溫度
Min. Max.	Min. Max.
二・八 二四・六	三・四 九・二
十月下旬	四月中旬
同上	同上
溫度	溫度
Min. Max.	Min. Max.
二・八 二四・六	乃 乃
	四・一 二・二

(3) *Syatturole syatturole* (1.)

ダイゼン

此の種に就ての「渡り」の觀察は未だ不充分にして第四表を得たるに過ぎず、これに據れば春秋二季の「渡り」に其の通路たるを知り得たり。

第四表

年	月	日	最高溫度	最低溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正八、五、二一			二二・〇	八・〇	一〇〇	東	一	一〇	雨	午後十二時頃鳴聲をきく
同 一〇、一三			一七・〇	四・一	四五	南	二	五	晴	鳴聲のみ
同 九、九、一四			二二・〇	九・六	六二	南	一	七	同	五十六羽の少群をみる

同	一〇、三、二九	五・〇	(一)	〇・七	七・五	西	一	四	同	三羽飛翔中鳴聲を發す
---	---------	-----	-----	-----	-----	---	---	---	---	------------

(4) *Charadrius dominicus fulvus* Gm.

ムナグロ

此の種は元來水田又は畑地等に降る習性あるなれば當地方の如き水田畑地の多き地にありては其の「渡り」の途次求食のため滞留

第五表

年	月	日	最高溫度	最低溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正	八	四、三〇	一五・〇	三・一	七・五	東	一	四	晴	少群あり
同	同	五、一	二〇・〇	一〇・〇	六・一	南東	一	二	同	二羽をみる
同	同	九、一七	二九・一	二〇・〇	八・六	南	三	八	曇	一羽の鳴聲をきく
同	同	九、二八	二三・〇	九・〇	九・四	南	三	六	晴	午前七時頃五六羽の群南へ
同	同	一〇、一四	二〇・三	一一・〇	六・一	南	三	五	同	少群あり一羽採集す
同	同	一〇、五、一六	一五・〇	一二・七	六・九	東	一	一	快晴	鳴聲を聞く
同	同	八、二三	三〇・一	一九・四	九・〇	南西	二	九	曇	同
同	同	八、二五	三〇・六	二二・八	九・六	南	一	一	晴	少群
同	同	九、一九	二五・一	一四・六	八・六	南	一	九	曇	二羽採集す
同	同	九、二三	一九・〇	一六・〇	一〇・〇	南	一	九	雨	午後七時頃より九時迄の間に連続大群の渡る鳴聲あり
同	同	九、二六	二四・四	一六・八	九・四	南	四	六	晴	南谷地に於て三羽採集す
同	同	一〇、一七	一九・〇	一四・六	七・九	西	二	五	快晴	二羽採集二十羽位の群あり
同	同	一〇、一一	二五・〇	一七・六	六・六	西	二	五	晴	夜間鳴聲をきく
同	同	一〇、二三	一五・六	一・四	八・四	西	二	八	曇	四羽採集
同	同	一一、一	一二・五	六・三	八・八	西	二	五	晴	早朝一羽の鳴聲をきく
同	同	一一、六	一四・一	二・三	七・九	西	二	七	同	一羽を見る

するに好適の場所なるべし、右の如き理由に依り自然當地方に多く見らるゝ種類にして其の秋季渡來は已に八月下旬にして次第に其の數を増し九月中、下旬頃は最盛期にして可なりの大群の渡來を見ることあり而し其の以後稍減じ數羽若くは十數羽位の群を見るのみにして十月下旬までは普通なれども十一月上旬には稀れにて斯の如き場合は一羽位のみなり、然るに春季の渡來は不足にして第五表の觀察日記に據れば四月下旬より五月上旬に至る間少數を見たるのみ第五表を簡單に記せば第六表の如し。

第六表

季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度	季渡來初期	同上溫度	同去期	同上溫度
八月下旬	Min. Max. 乃至 三〇・一 一九四 三〇・六 乃至 二二・六	十月下旬 乃至 十一月月上旬	Min. Max. 乃至 二二・二 二五〇 二五・三 乃至 二七・六	四月下旬	Min. Max. 乃至 一五・〇 三・一	五月月上旬	Min. Max. 一〇・〇

(5) *Agallitis placida* (Gray).

イカルチドリ

此の種は元來留鳥にして「渡り」をなさざるものなれども當地方にありては冬季越冬のため小距離の移住をなすが如く第七表に據れば四月以降より一番づゝとなり河原に見受くるものにして四月中旬頃より(大正五、四、二四、巳に孵化せし一雛採集せし例より推定せば)營巢産卵を見るもの、如く尙ほ六月中旬(大正九、六、二〇雛)に至る間迫川畔にて繁殖し而して雛の成育するに到りて數羽の小群となり七月上旬より九月

第七表

年月日	最高溫度	最底溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正四、四、一五	一〇・四	一・三	六二	西	一	五	晴	迫川にて五羽をみる
同 九、二、三	二六・六	一五・〇	七六			三	同	川畔の砂地にて三羽をみる
同 五、四、一一	一三・五	六・六	四四	西	二	三	同	同上
同 四、一、九	一九・七	七・二	八三			九	曇	二羽をみる

第八表

(6) *Fringilla tula curvica* (Fm.).

コチドリ

下旬頃まで滞留するもの多く夜中殊に盛んに鳴き聲をきく時として終夜之を聞くこと多しされども十月に至り寒氣到れば鳴聲衰へ其の多くは當地より以南の越冬地へ小移動をなすが如けれども尙少數の滞留を見ること大正十年二月二十六日の例あるが如し。因に本種(或はコチドリをも混合せしか)の越冬状況に就て當地の鳥通の談に據れば冬季は川原又は土手などの凹所に盤居しおり時々暖かな日には求食のため出現しつゝ越冬するものありと而し其の数は多からずと云ふ

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正五、五、七	二四・二	六九	四三			二	快晴	伊豆沼の茅地に八羽をみる
同 七、九、二〇	二八・二	一九八	一〇〇	北		一〇	雨	追川にて五―六羽をみる
同 八、九、一〇	二四・〇	八〇	八九			一〇	曇	同 上
同 九、一七	二九・二	二〇〇	八六	南	三	八	晴	砂地にて四羽をみる
同 九、九、一七	二五・四	二〇〇	七〇	西	一	七	同	川原にて少群をみる
同 一〇、五、二二	二〇・〇	八〇	六八			四	同	同 上
同 五、二六	二〇・〇	六八	七二	南	一	八	曇	追川の上流にて二羽をみる
同 五、二八	二七・三	一〇・一	七二	南	二	五	晴	川畔を飛翔中鳴くあり

大正二〇、八、四	二三・六	一九二	八五			七	晴	夜中鳴く
同 八、二五	三〇・五	二一八	九六	南		九	曇	同 上
同 八、三〇	二四・八	二一八	七九			八	同	同 上
同 九、六	二四・七	一四二	八八	南西		七	晴	夜中盛んに鳴く
同 九、二五	二五・三	一五二	七九			九	雨	川原にて四―五羽を見る
同 二、二六	六・〇	四・〇	七一			五	晴	夜中鳴聲連続す

大正二〇、七、一	二五・五	一三四	九〇	南西	一	一〇	曇	夜中鳴聲を發す
同 九、一六	二五・二	一五二	九〇	北東	三	八	同	少數の飛翔をみる

此の種は殆んど前種と同様他所の例に依れば留鳥にして「渡り」をなさざるものなれども余の觀察第八表に據れば五月上旬以降九月中旬まで其の滯留を見たれば恐らく當地方にて繁殖するなるべけれども越冬するや未だ不明なり。

(7) *Artemia interpres oahuensis* (Bloch.)

キヤウジヨシギ

此の種の「渡り」に就ての觀察は第九表の如く多くは春秋二季の「渡り」の節其の鳴聲 *kin, kin, kin* に據りて夜間通過するを知り得たり、これに依れば秋季渡來初期は已に七月中旬より始まり十月下旬に至る而して春季に於ては五月中旬なりき。

第九表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正八、八、一七	二二・〇	一五・四	七四	南	二	九	曇	少なし
同 一〇、二	二二・〇	一七・〇	九四	南	一	一〇	雨	鳴聲のみ
同 一〇、一〇	二三・〇	二〇・〇	一〇〇	西	三	二	晴	夜中飛翔中鳴聲を發す
同 一〇、一七	一八・六	八・〇	七七	南	一	七	同	同
同 一〇、二三	一七・〇	四・一	四五	南西	二	五	同	同
同 九、五、一九	一六・二	七・五	五五	南西	一	七	同	午後十一時頃鳴聲をきく
同 七、二〇	三一・一	二〇・〇	八一	西	一	七	同	鳴聲のみ
同 一〇、一四	二〇・三	一四・四	七六	西	二	七	同	同
同 一〇、五、一二	二〇・三	一四・四	七六	西	一	八	曇	同
同 八、二二	三三・二	二〇・一	六九	南	一	七	晴	同

第九表の結果を簡單に書けば第十表の如し

第十表

季	渡來初期	同上	溫度	同去期	同上	溫度	季	渡來初期	同上	溫度	同去期	同上	溫度
秋	七月中旬	Min. Max.	二〇・〇 三二・一	十月下旬	Min. Max.	一七・〇 四二	春	五月中旬	Min. Max.	乃至一六・二 乃至七・三	不明	不明	不明

(8) *Numenius arquatus thersites* Cav.

ダイシヤクシギ

此の種は當地方にありては決して多からず僅に第十一表の觀察をなし得たるに過ぎず。

第十一表

年	月	日	最高	最低	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備	考
大正	七	五、二六	一七・八	七・七	七二	南	二	九	曇	田圃にて二―三羽をみる	
同	八	八、一七	二二・〇	一五・四	七四	南	二	九	同	水田にて求食する三羽を見る	
同	一〇	九、一二	二五・一	一三・二	八一			九	同	水田上を一羽飛翔中鳴く	
同	九	一、四	二四・三	一二・三	九九			一〇	雨	水田にて鳴聲をきく	

第十二表

此の表により其の「渡り」を決せば第十二表の如く秋季渡來は已に八月中旬にして九月中旬まで留まり十月に達せざるものゝ如く

季	渡來初期	同上	溫度	同去期	同上	溫度	季	渡來初期	同上	溫度	同去期	同上	溫度
秋	八月中旬	Min. Max.	一五・四 二二・〇	九月中旬	Min. Max.	乃至一四・三 乃至二・三	春	五月中旬	不明	不明	五月下旬	Min. Max.	一七・八 七・七

而して春季渡來初期は六郷川口に於ては已に三月中旬に渡來し六月中旬以後迄留まるも當地にありては五月下旬に一回觀察し得たるのみ

(9) *Numenius cyanopus* Vieill.

ホウロクシギ

此の種に就ての觀察は第十三表の如くにして多く夜間渡來を見たりそは本種の鳴聲 *hyo, hyoi, ho* 長く聞えるにより他種と混同す

第十三表

年月日	最高溫度	最低溫度	濕度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正九、四、一一	一五・二	二・一	四四	西	—	七	晴	午後十時少群の鳴聲をきく
同 一〇、一一	二〇・八	一一・四	九〇	西	—	一〇	雨	鳴聲をきく
同 一〇、三、二九	五・〇	〇・七	七五	西	—	四	晴	同上
同 四、一	一四・六	一・九	五七				快晴	午後十二時頃鳴聲を發す
同 四、二六	一八・六	八・五	七七			八	曇	少群の飛翔中鳴くをきく
同 五、一四	一五・六	四・四	七〇			八	同	三羽の飛翔するをみる

ることなし。右表に據れば春季は已に三月下旬より始まり五月中旬に至る、然れ共も秋季の渡來に就ては調査不充分にして明確に記すを得ざれどもダイシヤクシギと大差なかるべく尚六郷川口にありては八月下旬より十月初旬までにして十月中旬以後下旬近く迄留まるものあるが如く當地にありては大正九年十月廿一日の觀察あるのみなり。

(10) *Limosa lapponica baueri* Naum.

オホソリハシシギ

此の種の「渡り」に就ては第十四表を得たるのみにして尙明確ならざれども秋季渡來は八月下旬より九月初旬なること六郷川口に於ける其の渡來初期と一致し此の時季は常に大群をなすこと云ふ。

第十四表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正二〇、八、三一	二四・五	一八・五	一〇〇	—	—	一〇	雨	夜中多数の鳴聲をきく
同 九、一	二二・五	一七・四	九七	—	—	一〇	雨	南谷地にて四十羽位の一群をみる

(11) *Timosa himusa melanoides* Gould.

ナグロシギ

此の種に就ての觀察は第十五表の如くにして秋季渡來初期は九月上旬より中旬にして其の以後留まるものあるや不明なり而して

第十五表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正二〇、九、一八	二五・一	一四・六	八六	南	一	九	曇	南谷地にて二羽採集
同 九、五、一七	一九・四	九・三	五六	西	三	四	晴	伊豆沼にて十六羽の一群をみる
同 五、二九	一六・二	七・五	五五	南西	一	七	同	午後十一時頃少群の鳴聲をきく
同 九、八	二三・〇	二〇・四	九八	南	一	一〇	雨	鳴聲のみ
同 八、五、二八	二〇・〇	一二・〇	六九	南	二	七	晴	同上

春季渡來は五月中旬より下旬に至る間なりき右表を簡單にせば第十六表の如し

第十六表

季	同上温度	同去期	同上温度	季	同上温度	同去期	同上温度
秋	二二・〇	—	—	春	一六・二	—	—
渡來初期	同上	同上	同上	渡來初期	同上	同上	同上
九月上旬	乃至二五・一	不明	不明	五月中旬	乃至二〇・〇	不明	不明
より中旬	乃至二四・六	不明	不明	より下旬	乃至一七・五	不明	不明
	二〇・四	不明	不明		二〇・〇	不明	不明

「附記」大正十年九月十八日採集せる幼鳥を飼養せしに常に力強く *Kio*, *Kio* の鳴くを聞きたり。

(12) *Totanus fuscus* (L.).

ツルシギ

第十七表

年月日	最高温度	最低温度	湿度	風向	風力	雲量	天氣	備考
大正五、三、二〇	三〇	(一) 六七	八八			六	曇	伊豆沼にて五羽を採集す
同 七、三、一九	九八	四三	九四		二	九	晴	同所にて一羽を採集す
同 八、三、一三	一一一	〇七	七五	西	三	九	曇	夜半鳴聲す
同 三、二、二五	一五〇	七一	八八			八	晴	長沼にて三羽を採集す
同 九、一、一七	二九一	二〇〇	八六	南	三	八	同	三羽飛翔するをみる
同 五、一、一	二〇〇	一〇〇	六一	南東	一	二	同	一羽をみる
同 九、一〇、一四	二〇三	一四四	七六	南	二	七	同	午後八時頃鳴聲をきく
同 一〇、九、二六	二四四	一六八	九四	西	四	六	同	幼鳥一羽南谷地にて採集
同 九、三、一〇	二七〇	一五八	一〇〇	南		一〇	雨	飛翔中の一羽あり

これは秋季渡來初期は九月中旬にして十月中旬前迄留まるも多からず、而して春季渡來初期は已に三月中旬にして其の去期は五月

第十八表

季渡來初期	同上温度	同去期	同上温度	季渡來初期	同上温度	同去期	同上温度
九月中旬	Min. Max. 二〇〇 二九一	十月中旬	Min. Max. 一四四 二〇三	三月中旬	Min. Max. 四三 三〇	五月上旬	Min. Max. 一〇〇 二〇〇

上旬なり即ち第十八表の如し

此の種は従來冬季に於ては採集又は觀察せられしこもなく唯だ「六郷川口に於ける鵜・千鳥類の「渡り」二〇頁に次の如き事柄が記されてある

シーボーム氏は日本沿岸には冬季渡來する様記述すれどもこは恐らく中部以南のここなるべきか或は誤りなるべし。

然るに大正十一年二月二十五日（最高温度一三度最低温度五度風向、西、風力四、雲量五、天氣晴）午後九時三十分疑もなき本種の鳴聲 *chewi, chewi* をきく得たり、尙本種の春季渡來初期は大正八年度は三月十三日、大正十一年度は三月九日で他種よりは常に早く渡來を見るものなり、即ち三月上旬前已に二月下旬に於ても時として渡來を見るこありてシーボーム氏の記述に稍や一致す。されども斯くの如きは誠に珍らしき現象であつて此の起因に就ては左の如き氣象上の變化と密接なる關係を有するが如し、即ち大正十一年二月二十六日登載の東京日日新聞には「七十一度を示した、きのふの陽氣」なる見出しにて次の如き氣象臺始ての珍現象を報じてゐる。

前略、……中央氣象臺で聞く東京の廿五日正午の最高温度は華氏の七十一度二分（攝氏の約二十二度）四月中旬以後の氣候、いふ珍現象、二月中に斯うした高温は中央氣象臺開始以來の最高記録だ……後略、斯くの如く冬季に渡來するこは當地方にありては全く珍現象である。（未完）

心なき身にもあはれはしられけり

鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

西行法師

伊豆大島に於ける鳥類

附、二新亞種の記載

榎山徳太郎

大正十年十月より同十一月に掛け約二十日間を伊豆七島中の大島に滞在し所産鳥類の採集並びに觀察に勉めたり、歸京後も同地在住の高田己之助・土屋喜作兩君より諸種の鳥類を送達あり是等は翌十一年三月に至りて完結せるを以て余が滞在中に觀察せし處を前記兩君より聽取せるを基とし尙採集鳥類を對照し本篇を草せり。

種(亞種を含む、以下同斷)名の頭に*印あるは既に伊豆七島中の他の島よりは報告あるも大島よりは今回初めて識らるゝもの、**印は從來伊豆七島産鳥類として報告なかりし種とす。印なきは採集若くは標本を入手せる各鳥、他は觀察せしに止まり採集するあたはざりしか又は産する事あるを聞知せるものゝ中の確實と認めらるゝ種なり。和名の下に括弧を附し記入せるは同島方言にして特に村名あるもの以外は元村附近の方言とす、勿論同島全部に亘りて同一方言を以て呼稱せらるゝ種も亦尠からず。各項下に記入せる同島に於ける留渡別は高田・土屋兩君に依る處多し、爰に兩君の好意を謝す。

I PHASIANIDÆ. 雉科

(1) *Phasianus versicolor affinis* MONTYAMA.

イイジマキジ(キジ)

村落附近の畠地より三原山舊墳火口内の砂地(通稱砂漠)内の小叢林に至る迄の島内各地に産す、獵期初めは村落附近の海拔低き個所にて比較的獲すれども(二年以下の若鳥多し)冬寒に及びては山地の叢林深く入りて銃獲に難くなれりと謂ふ、而して老鳥は海拔高き方に棲息するを常とせる由。

(2) *fortuata coturnix japonica* TEMM. & SCHLEG.

ウヅラ(ウヅラ)

「島内の草生地に少數を見るもあまり多からざるものミす主として二羽若くは單獨にて在る事多し、十一月初旬に北方より渡來あ

り十年度には十一月三日初渡來者一羽を銃獲せり」(高田君に依る)。

II TURTRIDÆ. 雉鳩科

(3) *Streptopelia orientalis orientalis* (LATH.).

キジバト(ハト又はキジバト)

四時留棲し常に目撃する處なり、秋季畠地に降り農作物に加害尠からず、此季に農場等にて銃獲せらるゝは幼鳥多し成鳥は慧敏
こなれる爲ならん。

III COLUMBIDÆ. 鳩科

(4) *Streptopelia japonica japonica* (TEMPER.).

カラスバト(クロバト)

元村地内には稀なり泉津村(同村は島の東北に位置し殆んご大半は山林なり)には可也に見るを得べし。狩獵者に依れば本種は
冬鳥にして渡來期(冬寒に至りて渡來)には一夕のみにて優に十羽以上を銃獲すべしと謂ふ、果して冬鳥なるか疑なきにしもあら
ず、恐らく夏季尙殘棲するものもあり得べし。

IV TRERONIDÆ. 綠鳩科

** (5) *Sphenurus stielolii stielolii* (TEMPER.).

アヲバト(アヲバト—狩獵者間のみにて)

「嘗て十一月に二羽を獲たる事あり」(高田君に依る)「此種は甚だ稀に訪來するものなるが如し」(土屋君に依る)。

V RALLIDÆ. 秧雞科

** (6) *Rallus aquaticus indicus* (BLYTH).

ク井ナ

「往年内地の狩獵家の渡島せし折共獵せしに茅原に低き草生地との間より飛び出せし異様の鳥を同行の狩獵家に依りて此種なるを
教へられたり」(高田君に依る)而して形態等を聞くに本種なる事疑なきものゝ如し、加ふるに内地の狩獵家にしてク井ナを識らざ
る人も亦寡かるべきを以て充分信じて可なるべく想はる、大島には水流殆んご皆無に近き程過少なるに水田を有せざるを以て
秧雞類の棲息に適せざるなり、該時のものは恐らく偶然渡行せしと見做すべきならん。

VI COLYMBIDÆ. 阿比科

** (7) *Columbus* sp.

アビ類(ヘーケドリ)

冬間元村附近の海上に游泳せるを見る事あり、其大さよりしてアビ *C. stellatus* Pontop. かオホハム(恐らくシロエリオホハム) *C. arcticus pacificus* Lawr. かの何れかなるべし。

VII ALCIDÆ.

海雀科

* (8) *Synalbidorhamphus uniazusime* (Temm.).

カムムリウミスズメ(ウミスズメ)

元村中野(十月二十九日)の岩岸近き海上に一羽游泳せるを見たり「冬間は珍しからず主として二羽宛にて遊ぎ居る事多く船に乗じて近接せば棒にて打ちて挿ふる事難からず冬間にも頭部に冠毛あるを然らざる事あり」(高田君に依る)。

** (9) *Cetorhincha monocerata* Pall.

ウトウ(ウドリー鵜類と混稱)

元村泉(十月二十九日)なる一小浦に二羽を見る、嘴は黄色にして側壓形を爲せるが明かに認められたり、冬間海上に稀ならざる由。

VIII LARIDÆ.

鷗科

** (10) *Larus argentatus regia* PALMER.

セグロカモメ(カゴメ又はカモメ)

岡田村附近(十月二十九日)の海上にて二二三羽を目撃せり、近接せる一羽は幼羽にして他は逆光線の爲め色彩不明なりき。

* (11) *Larus crassirostris* VIEILL.

ウミネコ(カゴメ又はカモメ)

「初秋以後冬間を通じ該鳥の海上に見るを得べし」(土屋君に依る)余も亦岡田村及び元村なる海濱附近に此種を目撃せり、同鳥産鷗類中最も普通種なるが如し、島内にては恐らく蕃殖は爲さざるべし。

** (12) *Gavia* [= *Chroicocephalus*] *nitidunula capistrata* (Temm.).

ユリカモメ(カゴメ又はカモメ)

冬間は嘴細くして赤色、體形小なる鷗類をも見る由、恐らく本亞種と見て誤りなかるべきを信ず。

IX CHARADRIIDÆ. 千鳥科

*** (13) *Charadrius mongolus mongolus* (PALL.).

メダイチドリ(チドリ)

元村長根(十月二十日)にて二羽中の一羽を採集せり、他に單獨の本種らしきものをも銃撃せしも搜索する事を得ざりき。

*** (14) *Charadrius leucurus leucurus* (L.).

ハシボソシロチドリ(チドリ)

元村長根(十月二十日)にてムナグロ四一五羽を本種三羽より爲れる一群中より一羽を採集せり、其前日(十月二十九日)にも同所附近にて中型なる千鳥類中に小型なるもの三羽混在し居りしを目撃せしが高く飛過ぎ行きしを以て種名判別せざりき、夫は同じく二鳥の混群なりしならん。

*** (15) *Pterodroma dominicus fulvus* (GM.).

ムナグロ(チドリ)

元村長根附近(十月二十九日)の砂濱並に同村湯の濱(十月三十一日)にて三羽を獲たり、前回は十數羽の群中より一羽を採集せしが後日の分は單獨にて居りしなり。

X SCOLOPACIDÆ. 鷓科

(16) *Scolopax rusticola rusticola* L.

ヤマシギ(シギ)

「少數は留棲し山地にて蕃殖す、獵期初めに獲らるゝ鳥は凡てかゝるものにて「渡り鷓」は十一月上中旬に北方より渡來す」。高田君に依る。十年度には十一月十日に初渡來あり右目撃者の談に「朝分十羽程の一群の内地方面より海上高く飛來千ヶ崎(最北角にて燈臺あり)附近に到着し林中に散入せり」云。該島にては水田無きを以て田鷓類 *Gallinago* を産せず、依て本種並びにイイジマキジは好獵鳥の兩角なり、冬間を通じて銃獲數多大にしてシギなる方言は本種のみ宛てられ居り内地にてタシギ *G. gallinago* *ruficeps* (Bull.) を通例單にシギニ呼稱し居るに對し渡鳥當初は奇異の感あり。元村地内(十一月十日)にて夕暮に村落内低く飛過ぎ海邊の方に急翔し行けり、更に後回は村落内に下降せり「此種は往々暗暮に村落内に飛來する事ありて稀に電線に打當り飛翔の氣力を失ひたるものを赤手して捕拾する事あり」(高田君に依る)云謂ふ。

XI ARDEIDÆ.

鷺科

(17) ? *Mesoploceus intermedius intermedius* (WAGL.).

チウサギ (シラサギ)

波江氏は大島(四月中旬)に於て此種を目撃せられし由を報ぜらる(「動物學雜誌」第一卷三七〇頁明治廿二年)同島在住の狩獵家に依れば白色なる鷺類は冬間海邊等に見る事ありと謂ふ、冬間渡來するものは本種ならずしてコサギ *Epetta garrzetta garrzetta* (L.) の方ならん歟とも思考すれども余が直接目撃せしにあらざれば聞知の事實のみを掲げ置くに止む。

* (18) *Nycticorax nycticorax nycticorax* (L.).

ゴ井サギ(サギ—夜啼聲に謂ふ)

元村村内(十一月初旬)にて夜間飛び啼くを數回聞きたり、「山間の樹林中に見る事あり脊面藍黑色にして白色なる冠毛二三あるもの暗褐にして全身に星斑のあるるあり」(高田君に依る)この事なるを以て本種なるは疑ひなし。

(19) *Gorsuchius gotsagi* (T. ENRI.).

ヤマイボ(ゴ井サギ又はヤマサギ—後者は甚稀)

「山間の溪谷に面せる傾斜地に見る事あり」(土屋君に依る)波江氏も岡田村内の平山にて雌雄を目撃せられたり(「動物學雜誌」第一卷三三〇頁)。

* (20) *Botaurus stellaris stellaris* (L.).

サンカノゴ井

元村大清水(十一月二十三日)にて獲られたる雌一羽を入手せり。

XII ANATIDÆ.

雁鴨科

* (21) *Histrionicus histrionicus pacificus* BROOKS.

シノリガモ(カモ—他種の鴨類と共に總稱)

元村泉(十月二十九日)にて單獨の雌一羽を海汀數間に射獲す。

因に冬間該島に訪來する處の鴨類は多種あるもの、如ければ凡て海鴨類 *Mareca* に屬すべし、在住者は綠首の鴨類も渡來す(謂ふも其體型を聽くにマカモ *Mareca platyrhynchos platyrhynchos* L. にはあらずして海鴨類中の綠首なる種なるが如し)。

XIII PHALACROCORACIDÆ.

鷗鷺科

(22) *Phalacrocorax carbo* [(P)sinensis (SHAW & NODD.)].

ウミウ(ウドリ)

海上に見る事珍しからず、夏季は北方に去りて見ざるものなる由。本種の他にヒメウ *Trile pelagicus pelagicus* (PALL.) も亦同島に達するものゝ如けれど確證なきを以て他日に譲る。

XIV PANDIONIDÆ. 鵟科

** (23) *Pandion haliaetus haliaetus* (L.).

ミサゴ(ゴシヤゴ)

「冬間に此種の海上に搏魚するを見る事あり」(土屋君に依る)。

XV FALCONIDÆ. 鷲鷹科

* (24) *Milvus lineatus lineatus* (GRAY).

トビ(トビ)

「稀に見る、ノスリ(方言、タカ)とは明かに異れり」(高田君に依る)。

* (25) *Accipiter nisus nisosimilis* TUCK.

ハイタカ(ハヤブサ一誤稱)

元村地内(十一月六日)にて小型の鷹類一羽の廻翔を遠望す、翼打ち五―六回續行の後圓形に滑翔し更に再び翼打ちを爲す其狀本種なる事殆んど疑なし、同村小清水(十二月二十五日)にて獲られし雌一羽及び他にコノリ一羽(大正九年秋季)ミを入手せり、あまり多からざるものなりと謂ふ。

* (26) *Haliaeetus albicollis* (L.).

ナジロワシ(ワシ又はワシタカ―後者は稀に)

元村赤ッ元(一月三十日)にて獲られたる雄幼期のもの一羽を入手せり、數年前も野増村地内にて一羽統獲せられ目下泉津村小學校に珍藏せらるゝ由、冬間稀に訪來あるに過ぎざるが如し。

** (27) ? *Syrizaeus nipalensis orientalis* TEMM. & SCHLEG.

クマタカP(クマタカ)

「甚だ稀に獲らるゝ事あり、可也大なるものなり」(高田君に依る)、恐らく本種を見て誤りあらざるべしと想へざるも此種の和名は往々他種の鷹類に誤用せられ居る事あるを以て標品を検せし上ならでは明確に謂ふを得ず、依て?印を附し置けり。

* (28) *Buteo buteo japonicus* (Temm. & Schleg.).

ノスリ(タカ)

元村地内(十一月十六日)にて一羽を見たり、あまり多からざるが如し。

XVI BUBONIDÆ. 梟鴞科

** (29) *Urus hufkammerni scottorum* (Temm. & Schleg.).

オホコノハヅク(ミミヅク)

元村ツバイツキ(十一月十五日)にて獲られたる雌一羽を入手せり、島内の林中に稀ならざるが如く四時留棲し納屋の隅、樹洞稀には鶏の空巢等にて蕃殖する由。

** (30) *Asio otus* (L.).

トラフヅク

元村野地(十一月十四日)及び同村大清水(一月五日)にて獲られたる雌雄各一羽を入手せり、此種は甚だ稀なるものに屬せり。謂
40

* (31) *Ninox scutulata japonica* Temm. & Schleg.

アラバヅク(ミミヅク—夜啼聲に謂ふ)

夏夜に其啼聲を聞く事尠からざる由、島内にて蕃殖するものあり樹洞内に産卵育雛す。謂ふ、内地に於けると同様なり。

XVII CAPRIMULGIDÆ. 怪鴞科

** (32) *Cyprinotus indicus jotoaka* Temm.

ヨタカ(ヨタカ)

元村地内(十一月初旬及び中旬)にて暗暮村落内に飛來し空中に捕蟲し居るを見る事稀ならず、在住の狩獵家に依れば此種は冬間も尙殘棲せりと謂ふも稍疑はしく想はる、山地の地上に産卵育雛する事常例と異ならず。

XVIII MICROPODIDÆ. 雨燕科

(33) *Micropus pacificus pacificus* (LATH.).

アマツバメ(ヤマツバメ)

小川三紀氏は此種を三原山墳火口内及び他に一個所にて觀察せられし由、「動物學雜誌」第十五卷(一九一頁明治廿六年)なれど余は遂に本種に會するあたはずして次種を見たり。

** (34) *Urocyon caudatus caudatus* LAMN.

ハリテアマツバメ(ヤマツバメ)

元村地内(十一月七日及び同十四日)にて毎回三—四羽の廻翔を目撃せり、アマツバメに比し體短大なりしを以て本種ニ断定せり。

XIX CUCULIDÆ.

杜鵑科

** (35) *Circus interpres intermedius* VANH.

ホトトギス(ホトトギス)

夏夜に啼き過ぐる聲を聞く事ある由。

XX PICIDÆ.

啄木鳥科

** (36) *Yungipicus kizuki*, subsp.

コゲラ亞種?(キツツキ)

「甚だ稀に見る處のものたり」(高田君に依る)大島産の亞種は本州産ニ同一のコゲラ *Y. k. nippon* Kuroda の方か或は三宅島産なるミヤケコゲラ *Y. k. matsudairai* Kuroda の方に屬するか標本入手の上ならでは判明せず。

XXI HIRUNDINIDÆ.

燕科

(37) *Hirundo rustica gutturalis* SCOP.

ツバメ(ツバメ)

元村地内(十月二十九日及び同三十一日)にて毎回少數を目撃せしも十一月に入りてよりは一影もなし、夏鳥にして人家に營巢爲す事常例ニ同じ。

XXII MUSCICAPIDÆ.

鶉科

** (38) *Troglodytes atricaudatus* JOURN.

サンクツウテウ

「往年五月(?)に長尾の一羽を目撃す、甚だ珍稀の種に屬す」(土屋君に依る)該時のものは例のクイノクイノなる佳聲を發し居りしと謂ふ、本種雄生殖羽なるは誤りなかるべし、恐らく「渡り」の途路に偶然寄島せしならん。

** (39) *Zonotrichia querula querula* (TEMN.).

キビタキ

元村吉谷(十一月七日)にて單獨の雄成鳥を採集せり、南行の途路なりしを認む、該島にては甚だ稀なるもの、如く未だ目撃せし事なしを在任諸人は謂へり。

** (40) *Cyanopitta cyanomelana* (TEMN.).

オホルリ(ルリ)

夏季渡來し山地にて蕃殖す、其巢雛を捕へ飼養するものありを謂ふ

XXIII BOMBYCILLIDÆ.

連雀科

* (41) *Bombycetta grayii centralis*e POLAKOV.

キレンジャク

泉津村込内(十二月十一日及十二日)にて獲られたる三羽を入手せり、同島にては冬鳥なるが如し。

XXIV PYCNONOTIDÆ.

鴨科

(42) *Micropodis taururolis taururolis* (TEMN.).

ヒヨドリ(ヒヨ又はヒヨドリ)

十月下旬より十一月初旬へ掛け北方より來島する群を眺からず目撃せり、其大なるものは三―四百羽に及ぶ、該島に到達後留冬するもの更に南方へ渡行するものあり、「春季北方へ渡行する際は島内諸々鳴き交はしつゝ群を増大し海上へ向け飛び行き飛び戻り再三再四之を繰り返す而して靜穩なる波上へ一群全部の浮ぶ事あるを見る、漁船に塔じ觀察するに百間位迄より近接せしめざれば浮漂時の姿體は詳細に識るを得ざれども群の波上に在るを遠望する時は海上に砂を蒔きたる如し更に全群の飛起ちて出發點附近へ歸還す、かゝる事を數回反覆するを見る事殆んど例年なり依て此種の渡行は海上靜穩なる日に限り島の住民は海上平穩なる日を鴨風ヒヨドリナギと稱す」(土屋君に依る)、事の眞疑は余が直接觀察なせしにあらざるを以て容喙するあたはず聞知の事實のみを掲げ後の参考に資す。

XXV TROGLODYTIDÆ. 鷓鴣科

* (43) *Troglodytes troglodytes fumigatus* TEMN.

ミソサザイ

元村大清水(十一月二十九日)にて獲られし一羽を入手せり、同島にては留鳥なるも夏季は山中にて蕃殖し冬間は村落附近へ出現

すの謂ふ。

XXVI TURRIDÆ.

鶉科

カヤクグリ

** (44) *Prunella rubra* (TEMM. & SCHLEG.).

泉津村上平(イヅミ) (十一月二十五日) にて獲られし一羽を入手せり、同鳥にては稀有の種に屬すべし。

* (45) *Dendulus alchidze* (TEMM.).
コマドリ(コマ)

「山中深く常棲し村落近くに出づる事なし」(土屋君に依る)。

** (46) *Phoenicurus amurens amurens* (PALL.).
ジャウビタキ

中秋より春彼岸後迄村落附近に稀ならず、夏季は歸北し殘鳥のものなきが如し。

(47) *Trusiger cyanurus* (PALL.).
ルリビタキ(ルリー誤稱)

小雪後に至り初めて渡來し冬間を通じ島内に見る。

** (48) *Saxicola torquata stejnegeri* (PARROT).
ノビタキ

元村泉(十月十九日)にて雌一羽を採集す、渡南の途路偶々訪來せしを見るべし。

(45) *Monticola solitarius nigra* (LA TOUCHE).
イソツグミ(イソヒヨ又はバカー後者は稀に)

海邊の岩上並びに枯枝等に見る事多し村落内の高屋の屋上(瓦葺に限れるが如し)等に來る事あり、四時留棲島内にて蕃殖す。

(46) *Trudus celanops celanops* STEIN.
アカコッコ(ゴミカキ又はアカツバラ)

四時留棲す。雖も季節に依り多寡甚し即ち嚴冬に至れば村落附近に出現數多きも夏時は山中にてもあまり多からず恐らく蕃殖の爲め慧敏になりて近接を許さざる。樹葉繁茂せる爲め觀察に難きも一因たるべし、冬間は林中の地上に堆積せる落葉を搔きて鳥體に比し割合に大なる音響を發す、ゴミカキなる方言は其習性を最も適切に言顯せり。

** (47) *Trudus pallidus* GM.

シロハラ

元村地内(十一月六日及び同十六日)にて觀察せり。前回は非常の高度にて四羽の一群飛行せるを双眼鏡にて單に、鶯類なる事を識り得たるのみ遂に種名を明かになすを得ざりしが後回は單獨のものを近くにて觀察し初めて其種名を分明するを得たり。而して同村大清水(十一月二十六日)にて獲られし一雌を入手し一層確實はなりたり。

(48) *Turdus enanthes* TEMM.

ツグミ(チョーマ)

元村地内(十一月十五日及び十六日)にて見たり、未だ渡來後間も無き見え小群を爲し高飛せる事多かりき同村仲^{ナカ}中山^{チウヤマ}(十一月三十日)にて獲られし一羽を入手せり。

* (49) *Oryzopsis dauma oweri* (HOLLANDER).

トラツグミ(トラツグ)

あまり多からざる種なり、元村地内(十一月十日及び同二十六日)にて獲られし二羽を藏せり、此地にて蕃殖の有無詳かならず。

XXVII SYLVIIDÆ. 鶯科

(51) *Horornis cantans cantans* (TEMM. & SCHLEG.).

ウグヒス(ウグイス)

島内各所に尠からず村落内屋裡の籬等に傳ひ來る事、内地に於けると同様にして尙一層數多し、十月下旬既に口舌り茲に「ケキョ」を小音に鳴くものあるを識れり、夏季は稍山地に移行し蕃殖すこ謂ふ、

(51) *Cisticola cisticola lymnæiceps* TEMM. & SCHLEG.

セツカ

元村泉(十月二十九日)なる海岸近き芝原より本種二羽飛出し例の高飛びを爲しつゝ「ヒーイヒーイヒーイ」及び「チャッチャッ」を發聲せるを見たり、草原にては四時見るを得べしと謂ふ、嘗て小川三紀氏も野田濱附近にて觀察せられたり(「動物學雜誌」第十五卷二九二頁)。

* (52) *Acanthopneuste tyme* STEIN.

イイジマメボソ

「夏季は多し」(土屋君に依る)「冬間も留棲す」(高田君に依る)と謂ふも余は元村吉谷^{ヨシヤ}(十一月十日)にて一羽を目撃せしに過ぎず

若し冬間に見るものありせば恐らく唯一部の残留するなるべく多数はより南方の諸島に移行するにはあらざらん歟。

XXVIII LANIDÆ. 鴟科

(53) *Phoenens borephidus* (Temm. & Schleg.)

モズ(モズ)

該島に常棲極めて普通に見得れども多産は謂ふあたはず、冬間はジャウビタキを追逐せる事を度々目撃す殊に被逐者は雌にして追驅者は雄鳥なる場合最多し。

XXIX PARIDÆ. 四十雀科

(54) *Picus major oregoni*, subsp. nov.

ナガワシデフカラ(新亞種・新稱)(シジューカラ)

記載(雄成鳥冬羽)——本州産シデフカラ *P. major minor* Temm. & Schleg. に似るも翁の上部の黄色は濃色にして其幅廣く翼の風切羽々縁に橄欖色を帯ぶる事僅かに大なり此點は濟州島・對馬より九州北部に互り各地に分布するシマシデフカラ *P. m. queipartensis* Kuroda に近きも腰部に橄欖色を帯ぶる事なきを相違せり、胸側より腹部中央を除ける下面一體は一般に極めて淡き帶橄欖乳脂色を呈す、測定上シデフカラに大差なきも嘴に於てのみ平均上短小なり、但し南部九州産カコシマガラ *P. m. kagoshime* Takatsukasa 程にあらす。

測定——四雄二雌に就て調査せる結果左表の如し。

所	歳	番號	採集地	採集日	全長	嘴長	翼長	尾長	跗蹠	雄雌	測定者		
楓山	同	1812*	元村新込	15/xi.21	127	10.0	66.5	58	17.5	♂ ad.	同		
		1813	同	"	"	126.5	9.5	68.5	18	♂ ad.			
		1815	元村肯澤	27/xi."	"	132	10.0	68.5	18	♂ ad.			
		1816	元村丸山	29/xi."	"	不完全	不完全	66.5	58.5	17.5		♂ ad.	

標	山	1811	元村北野	8/xi.21	122	10.0	65	55	17	♀ ad.	標	山
同	同	1814	元村大清水	23/xi."	123	11.0	65	55.5	17.5	♀ ad.	同	同

基型標本——前表中初出の雄成鳥にして土屋喜作君の採集に係る、測定其他上述の如し。

分布——伊豆七島大島産のものは凡て本亞種と認む、三宅島産は測定上同一なるが如けれど「動物學雜誌」第三十卷三一五—三一六頁大正七年）標本未檢なるを以て斷言するあたはず、八丈島産は尙一層小形にして別亞種なるが如し。

新亞種名は嘗て大島に渡行せられ同島産鳥類研究に對して貢獻ありし故小川三紀氏を紀念し名譽の爲めに氏の姓を附したり。該島に常棲すれども極めて多しこは謂ふを得ず、内地産に比し性敏くして採集に容易ならず、却つて次種の方普通に見受けられ比較的鈍にして獲易し乍併冬間小群を爲すは本種の方多く次種は普通雌雄のみを見るを常こし群を爲す事稀なり。

(55) *Sittiparus varius varius* (TEMME & SCHLEG.)

ヤマガラ(ヤマガラ)

夏季は山中に入り初秋より村落附近に出現す。該島産のものは測定上内地産と一致し新島産ナミエヤマガラ *S. v. namiyai* (Kuroda) の方にあらず。

XXX REGULIDÆ.

菊戴科

** (56) *Regulus regulus japonensis* BRADIS.

キクイタダキ

元村地内(十一月十五日・二十八日・二十九日)及び泉津村秋の原(十一月十九日)にて獲られたる五羽を入手せり同島にては冬鳥なりの謂ふ。

XXXI ZOSTEROPIDÆ.

繡眼兒科

(57) *Zosterops japonicus japonicus* TEMME & SCHLEG.

メジロ(メジロ、稀にクニメジロ—次亞種に對して)

(58) *Zosterops japonicus stejnegeri* SAEBO.

シチタウメジロ(メジロ、稀にシマメジロ—前亞種に對して)

兩亞種乍ら該島に留棲す、後亞種多くしてメジロの方は尠し、聞くに元來此島にはシチタウメジロのみより産なかりしも鳴聲佳なりて内地産を取り寄せ飼養する者多く夫等の鳥の放籠せられ漸時蕃殖なせしと謂ふ、兩亞種の中間型を見るべきものも亦尠ならず、此の如きは兩亞種間に於ける雜種若くは錯雜種と見做して大過なかるべし。

XXXII MOTACILLIDÆ. 鵲鴝科

(59) *Motacilla alba lugens* KIRRI.

ハクセキレイ(セキレイ)

霜降前後に北方より渡來し冬間を通じ海邊に普通に見受くる處なり、黒田理學士も野増村にて獲られたる標本を藏し居らる(動物學雜誌「第三十七卷三一四頁」)。

** (60) *Motacilla alba pyralis* SHARPE.

セグロセキレイ

元村地内にて十月三十一日以降翌月十日迄の間に再々此種に會せり、特有なる濁聲を發し滯宿地附近を南過還北せる事一日數回を算す毎回單獨にて飛び行けるを以て恐らく偶然唯一羽の内地より迷來せしもの歟と推考せり、該時のものが同一鳥なるは其飛過の時間並に通路略一定し居りしに依りて明かなるべく且つ單獨鳥なりと認めしは若し配偶の居りしなれば此季に連翔せざる筈なけばなり。

* (61) *Colobotes cinereus melanope* (PALL.).

キセキレイ(セキレイ)

「四時島内に見るを得べく茅屋根等に營巢蕃殖す」土屋君に依る(余も亦人家附近・墓地・並びに海岸等にて目撃せり、海岸にありてはハクセキレイの方多し)。

** (62) *Anthus spinolletta japonicus* TEMM. & SCHLEG.

タババ

元村地内にて十一月一日初めて小群(十羽)に會す、其後も引續き同様のものを見居りしも同月十四日頃より稍増加し諸々に目撃せり、主として海濱を歩しつゝ搜餌せるを見る事多し。

ALAUDIDÆ.

雲雀科

Alauda arvensis japonica Temm. & Schleg.

コバシ

「元村地内(十一月十三日)なる荒蕪地より疑なき本種一羽の飛立ちしを目撃せり、鳴聲並びに飛翔状態よりして如何にしても此種に他ならざるなり」(木村又三郎氏談)嘗て同地にて内地より持來りて籠飼せる處の本種を逃避せしめたる事あり其後約一箇年を経過せりと謂ふも該時の逸籠鳥の尙野外に生續爲し居りて偶會せしにはあらざらん歟との疑あり、依て今回は該鳥産鳥類中に加入せず單に附記し置くに止む。

XXXIII FRINGILLIDÆ. 雀科

* (63) *Tisa varicollis* (Temm.)

クロジ

元村吉谷(十一月十日及び同十二日)にて二羽を採集す、同鳥にては冬鳥なるが如し。

(64) *Hippocentor sptolophthalmus personatus* (Temm.)

アナジ

秋季より冬間を通じ村落附近に出現す、夏季滞島するものありや或は全數の歸北するなりや詳かならず。

(65) *Euboeia cioides nanupei*, subsp. nov.

ナミエホホジロ(新亞種・新稱)(ホオジロー元村ナジロ又はヤマスズメー共に泉津村)

記載(雄成鳥冬羽)——濟州島・鬱陵島並びに九州全島(對島・壹岐・種子島を含む)に分布するイイジマホホジロ *E. c. vigne* Stejn. に酷似するも耳羽は帶栗色鈍くして寧ろ本州及び北海道産のホホジロ *E. c. ciopsis* Bonapt. に等しきも頭頂の兩側眉線に接するの部分は濃色にして暗赭栗色を呈す、即ち色彩上より見る時は前記兩亞種の間中に位せり、測定上翼長大にして七八一八〇耗、其他の諸部にありては大差を認め得ず。

測定——波江氏の二標本及び余の二雌二雌の各部の長さ左表の如し。

所 藏	番 號	採 集 地	採 集 日	全 長	嘴 長	翼 長	尾 長	跗 蹠	雄 雌	測 定 者
東大理學部 動物學教室	—	大 島	15/vi, 87	mm 165	mm —	mm 78	mm 74	mm 22	♂	波 江 氏
同	—	同	?	mm 170	mm 13	mm 80	mm 74	mm 21	♀	同

種	山	1857	元 村 泉	30/x,21	—	11.5	78	73.5	21	♀ ad.	種	山
同	同	1859*	元 村 出 拂	7/xii, ♀	166	12	80	78.5	20.5	♀ ad.	同	同
同	同	1858	同	16/xi, ♀	153	12	72.5	71.5	21.5	♀ ad.	同	同
同	同	1860	同	7/xii, ♀	161	12.5	71	70	19.5	♀ ad.	同	同

基型標本——大正十年十二月七日、大島元村出拂デハラヒにて土屋喜作君の採集に係れる雄成鳥なり即ち前表中の第四番目に掲げたる*
印を附せしもの夫れなり。

分布——伊豆七島大島産のものは確實に本亞種と認むべく尙南方の諸島に分布するも恐らく同一亞種なるべし。
雌にありても本州産に比し頭頂の兩側は稍濃色を呈せる傾向あり。

新亞種名は嘗て伊豆七島に航せられ鳥學上多大の貢獻ありし故波江元吉氏の名譽の爲めに附したるものにて和名も亦氏の姓を取
りてナミエホホジロと命ぜり。

大島にては極めて普通に見る處の鳥類にして村落附近にて營巢蕃殖す、波江氏も採集せられしは前記測定表中にあるが如く「動
物學雜誌」第一卷三七〇頁）又黒田理學士も元村附近産の標本を藏せらる（「動物學雜誌」第三十卷二二七頁）。

(66) *Passer montanus saturatus* STEIN. スズメ(スズメ)

四時留棲極めて普通なるもメジロ類の方本種よりも寧ろ多し、該島に於ても本種が冬間に向ひ構巢材料を補足するの事實を目撃
せり(十一月二日)。

** (67) *Loxia curvirostris albiventris* SWINH. シロハラリスカ

元村アシ澤(一月五日)にて獲られし雌(?)二羽を入手せり、冬寒に至り渡來する種なるが如く稀有のものにす。

** (68) *Pyrrhula pyrrhula gysseorumis* LARRES. ウン

元村地内(十一月十四日及び十六日)に特有なる口笛の如き「ホイホイ」を聞ゆる鳴聲を發し居りしも鳥體を見るあたはざりき、十年度には其前日即ち「十一月十三日初めて一群に會したりしが恐らく夫が初渡來者なるべし」(土屋君に依る)この事なり、泉津村地内(十一月十九日及び二十二日)にて獲られたる雌雄三羽を入手せり。

** (69) *Chrysomitris spinus dybowskii* Tacz.

マヒワ

泉津村三原(十一月二十三日)及び元村上山(十一月二十七日)にて獲られし雌二羽を入手す。

* (70) *Chloris sinicus kawachiha* (Temm.).

オホカハラヒワ(ヒワ—次亞種と混稱)

元村出拂(十一月十五日)にて本亞種一羽を樹梢に目撃す、程遠からざる所にコカハラヒワをも見たれど餘程小型なりき、岡田村湯場下(十二月十日)にて獲たる一羽を入手し檢するを得たれば同島に本亞種を産する事あるは疑なし但し夏季は歸北し該島に留る事は恐らくあらざるべし。

(71) *Chloris sinicus minor* (Temm. & Schleg.).

コカハラヒワ(ヒワ—前亞種と混稱)

四時留棲し秋季農作物に加害夥しむ謂ふ。

(72) *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temm. & Schleg.

シメ

冬間村落附近に飛來する事ありと謂ふ、黒田理學士は元村附近産の一標品を藏せらる(「動物學雜誌」第三十卷二一七頁)。

XXXIV STURNIDAE. 椋鳥科

* (73) *Spodiopsus cinereus* (Temm.).

ムクドリ

元村地内(十一月十日及び十三日—十五日)にて疑なき此種を目撃す、十日午前八時に二—三十羽の一群初めて渡來あり、十三日には午前七時半—二十五羽以上三十羽位の一群を午前八時に四—五十羽の一群と到着し同日午前十一時には遅れたるものか只一羽飛び過けり、十四日以後は一—二羽の附近に残居りしを見たるのみ、恐らく十日に會せし一群は該地に於ける十年度の初渡來者なるべし。

* (74) *Neelofaena erythrogastrus japonicus* HAER.

ホシガラス

元村小清水(十一月十一日)なる山島に二羽下降し居りし内の一雌銃獲せられ余の入手する處ごなれり、本州にありては本種の如きは山嶽地方にあらざれば殆んど見る事難きものに屬すも該島にては村落をあまり遠からざる地に見るは同地が島積廣からざるには關らず海拔比較的高きに起因するなるは疑なきを信す。

(75) *Corvus coronoides japonicus* BONAP.

ハシブトガラス(カラス)

島内各地に普通に見受くるの種なり、四時留棲し夏季は同島内に蕃殖する各鳥の卵雛を盜奪し以て己の雛に哺するの一半に充つ如何に其被害鳥の多數に上れるか察するに餘りあり、冬季は海邊に群居せるを見る事多し、海濱の岩間波浪靜かなる個所にて水浴を行へるは秋冬の候時々目撃する處なり、因に波江氏も該島に於て此種を採集せられたり(「動物學雜誌」第一卷三三三頁)。(完)

ちひさき水鳥 (ヒレアシギの類?)

寛政六年夏、下總の國銚子浦に遊びけるに、その浦人寺井節之がいひけるは、八とせはかり先つ年の秋、この川口えめなれぬ鳥あまたむれ來りぬ、其形はまたく鴨のやうにて、羽のいろあひも鴨にことなることなく、首あなきもまだらなるもありて、足はすこし長きかたにて、大きさは雀などよりはちひさし、波の上にあまたうきぬたるを、人々とらへ來て、或は池にはなち、あるひは水舟などにいれおきて、もてあそびものとせり、さて廿日ばかり有つるに、ひと日雨つよう降て風はげしく吹ければ、いづれの家なるもいづち行けん皆なくなりぬ、年老たる人などにたづねけるに、昔よりかゝる鳥の來けんことはいひもつたへすとなくなたりける(織錦舎隨筆上より)。

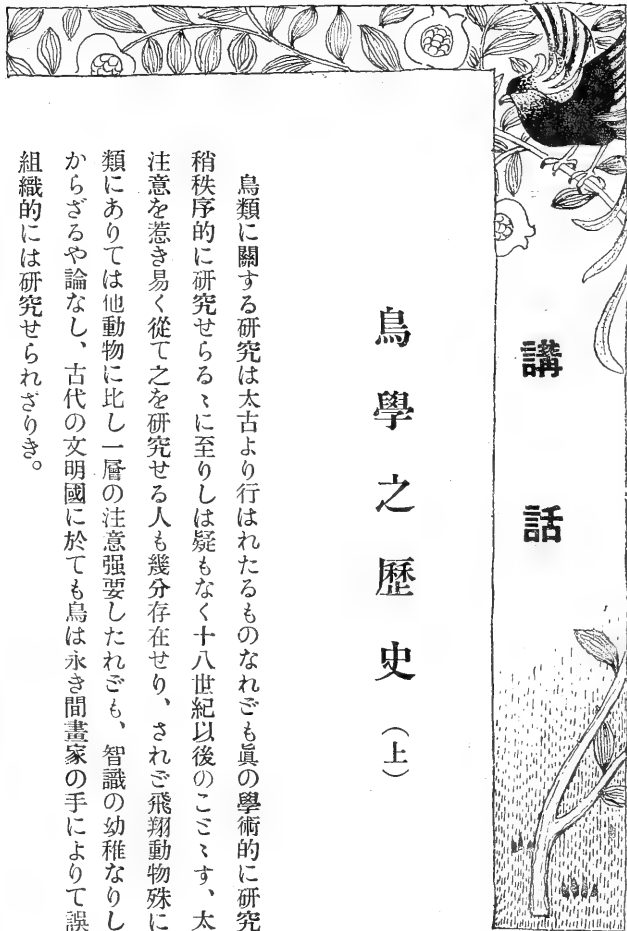
講 話

鳥 學 之 歴 史 (上)

和 田 干 藏

鳥類に關する研究は太古より行はれたるものなれども眞の學術的に研究せらるゝに至りしは實に近來のこゝにして稍秩序的に研究せらるゝに至りしは疑もなく十八世紀以後のこゝにす、太古は何れの國に於ても陸上動物は多少人の注意を惹き易く從て之を研究せる人も幾分存在せり、されど飛翔動物殊に廣漠無邊の天空を己が意の儘に飛翔する鳥類にありては他動物に比し一層の注意強要したれども、智識の幼稚なりし當初の時代には之を蒐集する者だに望むべからざるや論なし、古代の文明國に於ても鳥は永き間畫家の手によりて誤れる描き方を繼續せられたるのみにて之を組織的には研究せられざりき。

抑も鳥學の起元も稱し得べき時代は草昧のこゝ故考證するに由なしと雖も、往古埃及ブーラク博物館 (Boiak Museum) に保存せられたるガテフを描ける壁畫の破片あるを見れば當時既に鳥類の研究者ありしこゝ明かにして以て斯學の嚆矢となすべし、而して此の壁畫は有名な埃及學者の説によればメードムの墓地 (Maydoon Tomb) より採出されたるものにして耶蘇紀元凡そ三千年以前の古畫と稱せられ、描かれたる六羽の水禽は形態及び色彩等に就きては幼稚ながらも頗る丹誠を凝せるものにして此の内四羽は相違なく直ちに今日の *Anser albifrons* (眞雁) 及び *Anser*



mithilis の二種に屬せしむべく残りの二羽も雖も専門家によりて深く調査を積みたらんには必ずや或部類に屬せしめ得べし云ふ其の後年に至り種々なる鳥類を埃及の畫家竝に彫刻家が材料として製作せるもの殆ど無數に出現するに至れり、又アシシリヤ人 (Assyrian) の或記念碑は大概遙か後年に出來たるものなれども矢張鳥類を材料に供したるものゝ如し、而ながら歐洲の有史以前に使用せし石 (Stones) 骨 (Bones) 象牙 (Ivories) 等には鳥の像を有するもの會て發見せられざりき、以下各國に於て鳥類を研究せる徑路の一端を説述せむとす。

第一項 外國に於ける鳥學の歴史概要

鳥類の研究は既に太古より行はれたるものなるべし、雖も多くは其の立場を宗教上或は實用上に置きたるが故に全然非科學的部分を多く包含せりと謂ひ得べし、而して科學的に研究したる最初の國を案するに東洋なりとす、即ち支那にては今を去る三千年の昔爾雅 (周公の撰する所と傳へらる) なる一書出で其の釋鳥篇 (第十七卷) にて禽に關する記載をなせり、其の一節に曰く禽の定義を下すに「二足而羽謂之禽、四足而毛謂之獸」となせり、之を以て推測するに當時既に禽類に對し羽族の觀念を有せしことを推察し得べし、其の後泰西に於て斯學の胚胎を見るに至りしは實に紀元前四世紀のころにしてアリストートル (Aristotle, B.C. 384—322) 氏之が先鞭者たりとす、彼は當地既に一百七十種以上の鳥類に關する記載をなせり、此の研究は往々にして矛盾せる觀察をなせるためハチ、蝙蝠等の如き飛翔動物をも加へたり、されば其の或種類に至りては後進者の疑問となり之が解決には約三百年間を消費し尙不可能の悲に終はれりと云ふ、最近に於ける斯學の大家瑞典國サンデバル (Sundevall, 1831) 教授に於ても該研究に没頭し一千八百六十三年には凡そ二十種の鳥類を遺憾ながら不明のものとして斷念せざるを得ざりき、彼の研究は後年に至りガザ (Gaza) 氏等の手によりて羅甸譯書となり一千五百三年ヴェニス (Venice) より出版せられたりしが次でスカリガー (Gallien) 氏の手によりて引續き別版を出だし其の後不完全なりとは雖も二種の英譯書さへ出版せられたり。

アリストートル氏より遙後年にプリニー (Pliny, A.D. 23—79) 氏は該博なる自然の研究を三十七冊の *Historia Naturalis* に記載し其第十卷には鳥類に關する事項を記載せり、彼の著書の殆んど大部分は彼の先進者よりの承繼にして其報告を自由に利用し而し

て全體に訂正を行ひたりとは云ひ難し、此等の著者は何れも極めて不明瞭なる部類以外には鳥を分類せざりき。

アリストートル氏は次の八種の部類を認めたるが如し、

- 一、 Gamsonyches.
- 二、 Scoliochaga.
- 三、 Acanthophaga.
- 四、 Scipophaga.
- 五、 Peristeroide.
- 六、 Schizopoda.
- 七、 Steganopoda.
- 八、 Bara.

ブリニー氏は脚の特徴を大略の基礎として三部類に分け命名したりき、即ち一、 Hooked talons (タカの如きもの) 二、 Round long claws (鶉鶏類の如きもの) 三、 Broad flat whole footed (水禽の特徴なるもの) 等なるものはヒレモンホーランド (Philemon Holland) 氏の説にして氏は一千六百〇一年に珍奇にして縮少せる而も忠實なるブリニーの英譯書を出版せり。

二世紀に至りエーリアン (Ælian, A. D. 149 死) 氏出で諸種の動物に就き多様な觀察をなせしものはギリシヤに於て編輯せり彼の研究は科學的辨別に缺點ありし雖も稍多數の鳥類に就きて記載せるは吾人の敬服する所なり、されど其内容の或物は今日の研究より見て極めて無意味のものもあり又一面に於ては頗る興味ある觀察をもなせり。マグナス (A. Magnus, 1200-1280) 氏は獨逸の博物學者にして一千四百七十八年 De Animalibus et Albertus Magnus (Groth) を稱する二十六卷の書は出版せられたり、而して該書の多くはアリストートル氏の書に基きたるものにして多くの記述は文字通りに繰返され或は全然無意識的に寫記せる部分もあり、又往々アヴィシenna (Avicenna) 氏及び其の他餘り有名ならざる著作より引用したれども、夫等に添加せる報告は稍價値あるものゝ如し、同書の第二十三卷は De Avibus にして數多の鳥名は始めて出現せり、而して其の多くは何れの種に屬すべきものなるや頗る困難なりき。一千八百四十五年には Ortus sanitatis の第一卷は現はれ其の評判宜しかりしことは多くの版を重ねたる事

實によりて明かなり。キウバ (Cuba) 氏の説によれば東部歐洲、西部亞細亞、埃及を旅行せる或貴族の蒐集せるもの、研究より作成せるものなり云ふ、其の貴族は恐らくブライデンバッハ (Braidenbach) 氏にして其の旅行記は一千八百四十六年にメンツ (Mentz) に於て發行せられたり、其の實際は醫學的調査にして動物學的研究はマゲナス氏の縮寫物にして中に或はセビーレ (Soville) 氏の *Isidorus* 及び *Physiologus* の拔萃物をも混在せり、此の三卷は鳥類を専門に記載したれども中にはコウモリ、ハチ其の他の飛翔動物をも包含せしめたり、而し鳥類の形態を最初の印刷物として紹介したるものなるが故に其の圖解の多くは粗雑なる彩色の木版にして種類の詳細なる説明を誤りたりと雖も、鳥の形狀を最初に木版となせる點は大に注目すべき價値を有す。

ウィリアムターナー (William Turner, 1520—1568) 氏は英國 Northambrian の人にして死刑を避けて外國に逃走せし其の間 Cologne に於て一千五百四十四年にアリストール及びブリニー氏によりて擧げられたる鳥に最初の説明を試みたり、其は近代科學者と同様な精神によりてせられたるものにして其の年及び其れ以後にロングリー (Longius) 氏の *Dialogus de Avibus* 出版せられ、而して一千五百七十年にはカイウス (Cains) 氏はロンドンにて彼の研究論文を *De rari urum animalium et que stirpium historia* に發表せり、是は一小論文なれども鳥類學に關する事項は比較的豊富なり、而して以上述べたる三氏の論文は今日に於ても鳥類研究者に興味と實益とを與ふるこゝ甚大なり、斯かる間に其の方面の研究は一千五百五十五年チウリッヒ (Zurich) に於ける有名なるコンラードゲズネル (C. Gesner, 1516—1565) 氏の *Historia Animalium* なる書の第三卷の出版により、又同年バリに於けるペロン (Belon, 1517) 氏の *Histoire de la nature des Oiseaux* の出版により大なる刺戟を受くるに至れり、ゲズネル氏は夫れ以後と雖も匹敵し得ざる彼の主題に關する多量の説明を發表せり、彼の記載せし時代より考ふれば彼の觀察は多くの點に於て優れたりしものに相違なし、然しながら彼の著書中にては組織的研究と稱し得べきものは極めて少し、エーリアン氏以後の殆んど凡ての先進者の如く彼は當時學者間に餘り重視せられざりしがアルハベット式の配列を採用せり、而して鳥の各種類を最も代表するものを最初に置き其の下に其れに類似せるものを集むるこゝを或程度迄分類の主義となせり、ペロン氏は同時代の者よりも讀書せるこゝ少なけれども決して淺薄なる學者にあらずして疑もなく鳥類に關する實際の知識に富み其の外的構造並に内的構造に關する知識を有し鳥

人との骨格の比較を試みたる最初の人なり、故に佛語にて書かれたる彼の書籍は多くは獨創的部分を包含し加之ベロン氏は彼の知れる鳥類を一定の方式に従ひて分類をなせり、此の業績は粗雑なりしことは勿論なれども彼の後繼者は好んで其れに従ひて自説を立つべき根柢を作れり、而して尙今日に至る迄其の影響の痕跡は諸書に於て認めらる、ベロン氏の著述はゲズネル氏と同様に木版圖解を有し其の多くは彼の正確と細心を示せるは大に尊敬すべき點なりとす。其後フレスリア人 (Frisian) コイター (Cotter, 1534—1600) 氏は一千五百七十三年及び一千五百七十五年にニウレンメルト (Nuremberg) に於て二大論文を發表せり、其の一は一般鳥類内部構造に關するものにして内容は信頼に價するものなり、他の一は或鳥類の型を其の骨格學 (Osteology) 並に筋肉學 (Myology) に頗る詳細に記述せられ且細心に描かれたる挿畫を有せるものなり、前者は *Eternarum et eternarum principalium humani corporis Tabulae* 後者は最も價值あるものにして *Lectioes Tabularis Fallopii de partibus Similiaribus humani corporis* なる書中に一部分記載せられたり、而して兩書の範圍は醫學的なるがため單なる自然科学者よりは全然閑却せらるゝ、雖もコイター氏は *De differentiis Avium* の表を紹介して彼の知れる鳥類に關して粗雑なる分類の手引を與へたり、而して是を注目に價する斯種の企中最初のものなりとす。此等の人々を同時代にアルドロバンダス (Aldrovandus, 1524—1605) 氏あり、氏は伊太利ボルネー (Bolognese) の人として *Historia Naturalium* と稱する十六卷の著述をなせり、一千六百〇五年に於ける彼の死後に至りて多くは出版せられたれども鳥類に關する三卷の著ば一千五百九十九年より一千六百〇三年の間に其の一を出版せり、同書はゲズネル氏の記事を屢引用し殊に *Ornithologus* に於て然りとす彼はベロン氏の分類法を變化せしめ一層詳細なる説明をなせりと雖も或數個所の點に於ては却て退步せる傾向を有せり、尙同氏の著書には不完全ながらも銅版の圖を用ひ好評なりしがため數版を重ねたり。カスパーシユウレンクフエルト (Caspar Schurenfeld) 氏の醫學的研究は極めて價值あるものにして一千六百〇三年リーグニッツ (Liegnitz) にて *Theorotrophum Silesiae* なる表題の下に其の第四卷を出版せり、吾人は *Fauna* なる名目を以て知れる著作の嚆矢とす、彼は先進者の作品に通用したることは一百卷以上の目錄よく之を證明せり、彼の記載せる多くの性質の系統立つるに足る程度の正確さの下に記載せられたり、而して彼等に對する觀察は興味あるものなれども彼は分類的研究には智識を有せざりしが故に彼の時代の誤謬を訂正し

得ざりき、是がために前述の著作は *Orbis Veteribus notus* に屬する鳥以外のものを殆んど研究し得ざりき、されど十六世紀の地理的探檢の成功と共に多くの未知の種類の動物は約百年以後に至りて世に知らるゝに至れり、茲に於ては單にボンテウス (*Boninus*) クラシス (*Clasius*) ヘルナンデツツ (*Hernandez*) マルクグラフ (*Margrave*) ニーレンベルク (*Nieremberg*) ユン (*Piso*) 等の名を示したるに止む、彼等の作品は兩印度地方の生物を記載せしものなれどもオリナ (*Olina*) ウオルム (*Worm*) の作品を合せて顯著なる効果を作り出したり、彼は科學的鳥類學の基礎を見做さるべきものに迄至らしめたるものなり、此の基礎はフランセスウエルグビ (*Francis Willughby, 1635—1672*) 氏、クヰンローイ (*John Ray, 1629—1705*) 氏の協力によりて鞏固となり、兩者は常に合同して研究し又蒐集旅行等をもなせり、ウエルグビー氏は不幸にして研究半途に死したれどもレイ氏は生前の約束を果しレイ氏の名目にて之を世に發表せり、加之レイ氏は自己研究の結果を以て一千六百七十六年羅旬語の *Ornithologia* を出版し後一千六百七十八年には訂正を加へて出版せり、該書によれば鳥は大體陸禽水禽の二大部類に區分せらる、前者は曲嘴曲足を有するもの、後者は伸直なる嘴瓜を有するもの、二部に分類せられ、又後者は水邊に屢集するもの、水面を游泳するものに分類し其の各部門は又多くの小部門に細別し、其の全體には項目を與へ殆んど凡ての諸書に觀察せし殆んど凡ての鳥類を夫々適當なる位置に誤なく編入し得る様便宜を與へたり、レイ氏の鳥類學に對する興味は一千六百九十四年 *Synopsis methodica Avium* となりて現はれたり、其は其を依托されたる本屋の間違にて一千七百十三年に至る間デルハム (*Derham*) 氏の發表する迄其を出版せざりき、レイ氏の死後二年にして瑞典國にリンネー (*Linnaeus, 1707—1778*) 氏即ち博物學の第一改革者は生れ、一千七百三十五年には有名なる *Systema Naturae* の第一版を著し再版は著者監修の下に一千七百四十年、一千七百四十八年、一千七百五十八年及び一千七百六十六年に發行せり、同書により從來自然界に對する誤れる觀察は訂正せられ自然分類學の基礎は築かれたり、而して鳥類の分類は主としてレイ氏の方法を採用し夫れに改良を加へたることは極めて稀なりき、パーレル (*Barrele*) 氏は一千七百四十五年にベルピグナム (*Perpignum*) にて *Ornithologiae specimen novum* を出版し、一千七百五十二年にマールリング (*Mahring*) 氏はオーリツチ (*Aurich*) にて其れより尙小なる *Avium Genera* を著述せり、是等兩著は今日頗る珍貴にしてリンネー氏的方式に基きて記載せり。クライン (*Klein*) 氏は彼等に決して劣らざる分

類學者にして一千七百五十年に *Historia Avium Prodomus* をリウヰック (Lutbeck) にて一千七百五十九年に *Stemmata Avium* をライプチヒ (Leipzig) にて出版し天下の歡迎を博したり、而して後の書の特徴も稱し得べき點は多くの鳥の頭と脚とを四十枚の圖版に示したるにあり。

リンネー氏大著の増版は博物學を進歩せしむるは勿論且言語上にも緻密なる注意を向けたるの實例は科學的鳥類學の著者に甚大なる影響を及ぼしたれども、一方に於ては他の多くの著者は其れと異なる方法を取りて鳥類の研究を進めたり、其の異なる方法は主として眼に訴へて判斷し得る範圍に於て鳥の繪を描きて説明するものなりき (今日の所謂圖説) マルクカテスビー (Mark Catesby) 氏は一千七百三十一年より一千七百四十三年迄の間にロンドンに於て *Natural History of Carolina* を著述せり、同書は二卷に互る大版物にして其の内容たるや植民地フロリダ (Florida) バハマス (Bahamas) に於ける鳥類の鮮明なる色彩圖を挿入し現今頗る賞讃せらるゝ多數の高價なる大書の先驅なり。一千七百三十八年より一千七百四十年迄の間にエリザル、アルビン (Eliazar Albin) 氏は *Natural History of Birds* を著述せり、該書は三卷より成り前書より一層の大冊にして四つ折判なりき、されど彼は鳥類學を輕視したる傾向ありしが如し、而して彼の色彩圖版はカテスビー氏の其れに比しては遜色あり。鳥の繪に關する點又學者としての點に於て前兩者に優さるものはジョージ、フェドワード (George Edward) 氏なりとす、氏は一千七百四十三年にアルビンと同様な表題の下に活版印刷を有する鳥の畫集を出版せり、同書は *Gleaning in Natural History* なる表題にて引續き出版せられ一千七百六十年に至り其の六部門即ち四卷に達したる時遂に完了せり、其の挿畫は殆んご常に任意に描かれたるものなり。エドワード氏の作品完成と同年に一層有名なる學者は佛國に現はれたり (ベロン時代以來佛國は斯學に貢獻する所少かりしが)、即ちマサリン、ジャツケス、ブリツスソン (Mathurin Jacques Brisson, 1723-1806) 氏にして其の著 *Ornithologie* は同時代に於ける斯學の發展に貢獻するこゝ甚大なるものにして六卷に互る大冊なり、而して其の特徴とする所は稀有の記述的鳥學者たるこゝを保つ今日にても尙彼に及ぶ者なかるべし、氏の分類はリンネー氏のものよりも確に優秀なりしが故に後代鳥學者の引用する所頗る多かりき。サラーンネ (Salerne) 氏は一千七百六十七年パリに於て *L'histoire naturelle éclaircie dans une des Parties Principales, L'Ornitho-*

Logie を出版したれどもレイ氏の Synopsis に多少訂正を加へたるものなり。オーゼントン (D. Audenton) 氏は Buffon 氏の刺戟を受け Palanches En luminez d'histoire naturelle を出版し、該書には一百八枚の彩色図版を挿入し其の大部分は鳥類なり、パツフォン氏は一千七百四十九年に Historia Naturelle generale et Particuliere の出版に着手しモンテネラーム (Mont Bellin) 氏の助力により一千七百七十年に完成出版せり、此の第一巻は鳥類に關する記載にしてアリストートル氏以來眞文學的内容を含める最初の書なるを以て宗教上大に信憑せられたり、又彼は動物の地理的分布を最初に研究し一方不完全ながらもリンネー氏の種不變説に反對し自然科學者の範圍を擴張せり。ラザム (John Latham) 氏は一千七百八十一年に General Synopsis of Birds を書きたれども學名を採用せざりき、彼は主として鳥學の發達史に無上の興味を抱き専心之が研究に従事せり、彼の Synopsis は一千七百八十五年に完成し一千七百八十七年乃至一千八百〇二年に二度増訂し、更に一千七百九十年には Index Ornithologiens なる表題の下に右書の拔萃物出版せられ同書には學名を採用して各種を説明せり、一千八百二十一年乃至一千八百二十八年の間に彼はウインチエスター (Winchester) にて十一卷の彼の原本を擴大せる A General History of Birds なるものを出版したれども彼の編纂者としての缺點は年々共に大となり其の結果面白からざるの不幸となり。マウデレー (Maudslayi) 氏は Encyclopedie Methodique の中なる鳥學を分擔し一千七百八十四年に完成せり、一千七百九十年該書の改版に際しボンナトレー (Bonnatre) 氏は此の鳥學を分擔し二百三十頁を達稿せし時恰も佛國革命起りて死せるを遺憾す。ヴィロー (Vieillot) 氏はボンナトレー氏の遺業を繼ぎ Tableau encyclopedique et methodique des trois regnes de la Nature なる表題にて出版し、此の内鳥學は四乃至五卷に跨り一千八百二十三年に完成せり、而して此の舊版にてはマウデレー氏はアルハベツト順に配列せしが新版にてはオーベントン氏の論議に修正を加へたれども其の業績は極端に淺薄にして取るに足らざりき。概して當時代の作品は大なる價值を有するもの少く中にはペンナト (Pennant) 氏及び其の他の小研究者出で、次でミユラー (Müller) ボツダルト (Boddart) スコポリ (Scopoli) ソンネラート (Sonnerat) グメリン (Gmelin) 等の編纂者出で、從來の研究を整理せり、此の間コイター氏以來內的構造の研究なかりしが發生學の基礎は偉大なるハルマー (Harvey) 氏により雛の發達研究より決定せられ、一千六百六十二年乃至一千六百六十九年の間にペーラルト (Perault)

氏はパリに於てバーネー (Du Verney) 氏は多種の鳥類に關する細究の八報告を出版せり、此の物は一千七百二十年英國に於て *The Natural History of Animals* として發行せらるゝに至れり、此等の解剖學者の死後他に八報告書と同種類を説明せる叢書現はれたるが故に此等二種のを合せて一千七百三十三年及び一千七百七十三年に佛國科學協會の *Mémoires* 中に發表せり。ゲラードブラツシス (Gerard Blasius) 氏は一千六百八十一年アムステルダムに於て *Anatome Animalium* を出版し彼の發見したる有ゆる動物の細説を試みたる結果は内容に含まれ其の第二卷は *Volatilia* の研究にて三分の二は *De ovoet pullis* の研究なり。

以上の如くリンネー氏以來十八世紀の末葉に至る迄諸學者出て研究を積みたれども其の業績は多く分類の方面にして互に相違せる方法を探りたる結果今日尙人を迷はずが如き記録を残したり、されど他の方面に於ては英國のハンター (John Hunter, 1738—1798) 氏及び佛國のヴィック、ド、アヅール (Vicq d'Azyr, 1748—1794) 氏は鳥の骨格と筋肉組織に關して重大なる研究をなせり。獨逸のカスパー、フリデリッヒ、ウォルフ (Casper Friedrich Wolff) 氏は一千七百六十四年に雛の發育問題に注意を向け近代發生學の大基礎を作れり。解剖學は有名なるキウヴィエー派 (Cuvierian school) のキウヴィエー (G. Cuvier, 1769—1819) 氏及び多くの弟子等によりて大に開拓せられ其の後彼等は分類を企てたれども現今一般に採用せらるゝ方式は認められず。斯して鳥學を研究する者漸く多きを加へ十九世紀の初年には鳥類の形狀及び分類の智識は非常なる勢力を以て駿々として進歩し、一千七百九十五年より一千八百〇四年には獨逸のナウマン (J.A. Naumann, 1744—1826) 氏 *History of the Birds of North Germany* を出版し、一千八百三十八年には米國のオーデュボン (J. G. Audubon, 1780—1851) 氏は自然に對する天才的才能を以て同國に於ける斯學の開拓を企て、メイン (Maine) よりルイジヤナ (Louisiana) に至る東部諸洲テキサス (Texas) フロリダ (Florida) カナダ (Canada) ラブラダー (Labrador) の諸洲及び當時最も未開地たりしミズリー河 (Missouri River) イエローストン河 (Yellowstone River) の流域地方を探検し其の材料を以て *Birds of America* の大著述をなせり、同書は五卷より成り自然大に着色せる精巧無比の圖版四百四十八枚を藏し一千六十五種の鳥類を擧げ極めて後世を裨益せり、尙氏は現今諸文明國に於て注目する鳥類保護に關する基礎を作りたる人にして吾人の深く敬意を表すべき篤學者なり。獨逸のティーネマン (Thienemann, 1783—1853) 氏は北部歐洲及びアイスランド (Iceland) を探検し歸りて一千八百四

十五年より一千八百五十三年に亘り *History of the Reproduction of Divers Species of Birds* を出版し、該書は一百枚の着色圖版を藏し頗る價值あるものなり。其の他英國のグレイ (J. E. Gray, 1800—) グールズ (J. Gould, 1804—) ウイルソン (J. Wilson, 1795—1856) スクレター (Sclater, 1829—) 等の篤學者出て一般鳥學の内容を一層豊富ならしめ、一方英國のオウエン (H. Owen, 1804—) 米國のパーシ (D. Marsh, 1806—1853) 氏等の化石學者出て、化石學に貢獻し、又パーカー (W. K. Parker) 教授は發生學にニウトン (A. Newton) 教授ウォーレス (Wallace, 1823—1913) 氏等及び其の他の人々は分布に、英國のハックスレー教授 (Huxley, 1825—1895) は科學的分類に大貢獻する所あり。

又十九世紀の末葉には從來研究せる事項を整理せんとして諸學者は專心斯學研究に従事したる結果頗る完全なる著作物のみ現はれ以て今日に及べるものなり、即ちシーボーム (H. Seeborn) 氏は一千八百九十年ロンドンにて *Classification of Birds* シャープ (R. B. Sharpe) 氏は一千八百九十一年ブタペスト (Budapest) に於て *A Review of Attempts to Classify Birds* ヲイバート (G. Mayr) 氏は一千八百九十二年ロンドンにて *The Elements of Ornithology* ニウトン氏は一千八百九十三年より一千八百九十六年に亘りロンドンにて鳥類に關する術語辭典即ち *A Dictionary of Birds* を出版し現今鳥學者の指針をなせり。又一千八百九十八年にはベツダス (F. E. Beddard) 氏の *Structure and Classification of Birds* をロンドンにて出版しイバンス (A. H. Evans) 氏は一千八百九十九年ロンドンにて *Birds (Cambridge Natural History, Vol. IX)* 即ちケンブリッジ博物叢書の第九編を出版し、鳥類の各科に亘りて其の特徴生態等を正確に記載せるが故に鳥類研究者の好指針となれり、大英博物館は一千八百九十五年に亘りて *Catalogue of the Birds in the British Museum, 27 Vols.* なる二十七卷より成る大書を出版し出版當時迄の世界鳥類各種の記載を網羅せるが故に鳥類分類學に貢獻する、此頗る大なり。其の他十九世紀の末葉に至りハンスガドウ (Hans Gadow) 氏は現今採用する分類方式を定めたり。更に二十世紀の御代に至りノルトン (Knowlton) 氏は一千九百〇九年ニウヨークに於て *Birds of the World* をアメリカ博物叢書中の一冊として編纂し、其の他各國に於て多くの鳥學者は競ふて綿密なる注意の下に諸種の調査を夫々専門的に研究しつゝあるが故に斯學研究の發展に長足の進歩を來す、分類及び生態は勿論應用的方面に至る迄一として此の區域に達せざるものなし、又政府は種々な

る行政機關施設の下に鳥類の保護増殖を企圖し、一方民間に於ても篤學の士出て個人の研究所及び鳥學會等を組織して細究しつゝあるの機運に向ひたるは實に喜ぶべき現象なりとす。

要之泰西に於ける鳥學研究の發達は以上略説せし如く其の起元は古代に萌出したるものなりと雖も、其漸く隆盛となりたるは疑もなく近來のこころとす。されば未だ深く調査研究せられざる事項も多かるべく足跡の至らざる地も多きの感あり。

我國歐米の文運に遅るゝこころ尠からずと雖も今後之が研究に従事する者多からんか、土地の自然的狀況よく鳥類の研究に適するが故に先人未發の事項は踵を次で起るべく、却て歐米諸國の學者をして其進運を羨望せしむるこころ決して難きにあらずとす。

(未完)

講話欄に御投稿を願ふ

本誌講話欄に掲載すべき材料が乏しくありますから會員諸君の此種の原稿御送附を願ひます。

(編輯者記す)



長門佐々並地方の鳥類 (下)

兼常彌富

旬。

冬より春にかけて普通なる種類なり、獵鳥として知らる、ヒサカキ、ナンテン、ハゼ、ウメモドキ、ツタ、其他の實を食す。

44. コマドリ 方言 コマ、

候鳥 來期 四月上旬乃至中旬 去期 九月下旬

四五月頃川邊の深林中にて、高き鳴聲を放つ、稀なり。

45. ジャウビタキ 方言 ヒンコチ、バカドリ、ホトケノコウタキ、アカヒンカチ、

傳説 小兒等の言ひ草に、ヒンコチは貧でも紋付を着て居る。

候鳥 來期 十月上旬乃至中旬 去期 四月上旬

冬季普通なる種類にて、常に原野に多く、森林中に少なし、ヒサカキ、ウメモドキ、ナンテン、マツタ、ツタ、ハゼ、其他の實を食す。

46. ルリビタキ 方言 アラビンコチ、バカドリ、ボチシウ、

候鳥 來期 十月中下旬 去期 三月中下旬。

冬季普通なる種類なり、原野に少なく、森林中に多し、前種同様のものを食す。

47. ノビタキ 方言 イネコギ、

傳説 本種は方言の示す如く、稻を食害するものとし、一般に害鳥

と唱へ居れり。

41. トラツグミ 方言 ツヅリツグミ、

候鳥 來期 十月下旬乃至十一月上旬

去期 三月下旬乃至四月上旬

冬季他の鶺鴒に混じ來るも、其數餘り多からず。

42. アカハラ 方言 カシハツグミ、

候鳥 來期 十月下旬乃至十一月 去期 四月上旬乃至中旬

冬より春にかけて普通なる種類なり、大群をなして來り、燒野又は田畑に下り食餌をあさる。

43. シロハラ 方言 シバホリツグミ、シバカキツグミ、

候鳥 來期 十月中旬乃至下旬 去期 三月下旬乃至四月中

候鳥 來期 十月上中旬 去期 四月上旬。

秋季稻田に普通なる種類なり、畦畔等に植へたる大豆の頂上其他小高き所に止り、飛び交ひするを常とす。

48. マキノセンノウ

夏季深林中の笹原等に於て見る種類なるも、其の數餘り多からず。

49. ウグヒス

蕃殖 四月下旬乃至八月上旬頃、深林の二三尺の所に、繁りたる笹原等に營巢す、枯笹、ス、キ等を材料とし、卵は赤色のもの三個乃至六個を有す、

四時に棲息する普通なる種類なり、早春より美はしき鳴聲を放つ、十一月下旬乃至十二月上旬頃、暖かき小春の時に於て、微聲にて轉る、常に深き所に多く、樹林、笹原間に在りて小虫を捕食す。

50. メボソ 方言 ウグヒス 鶯と混同す、

候鳥 來期 四月 去期 十月。

四月頃より九月頃迄普通なる種類なり、七、八月頃人家近く來り、「アナバハゴロモ」(昆虫)を追ひばちくと嘯音を立てて食す。

51. キクイタダギ

候鳥 來期 十月上中旬 去期 四月上中旬。

秋より冬にかけて普通なる種類なり、エナガ、シツアカラと混じ、松杉科の植物等に多く集り小虫を捕食す。

52. カハガラス、

傳説 本種の黒燒にしたるものは、婦人血の妙藥として、黒燒となす。

四時共に棲息し普通なる種類なり、常に河流を上下し、山間の溪谷にまで至る、巢は流下する水の奥に營むと云ふ。

53. ミソサザイ 方言 センネン、ミソナメセンネン、

四時共に棲息し普通なる種類なり、夏季は深山に入り、晩秋より里方へ出で、暖かなるに及んで深山に入る、霜白き朝美はしき嘯鳴を放つ、巢を深山の溪谷に營むと云ふ。

54. ツバメ 方言 ツバクロ、ツバクラ、

傳説 「ツバメ」は佛の使なり、故に人家に營巢するを、非常に喜ぶ、若し營巢せざるときは、其年家内に凶事ある前兆となし非常に憂慮す。

燕來るや各家共巢臺を吊して、彼の營巢するを俟つ、巢臺は藁又は板にて作り、三本緒にて吊す、左り繩又は四本緒等にては、營巢せずと云へり。(實際は四本緒にても營巢す)

又燕は親の急病なる報に接したるときは、優長に紅、金などを付け、美々しく己が體を飾り、赴きたる爲め臨終に會するを得ざりき、故に其の罰にて、姿は美々しくとも斯く虫類のみを食し、巢は泥土を以て作ると、之れに反し雀は親の急病

に接し、仕事着のまゝ綴り衣を着し急ぎ赴きたる爲め、親の臨終に會するを得たり、故に斯く穀類を食とするを得、と云へり。

候鳥 來期 三月中旬乃至下旬 去期 九月下旬乃至十月上旬、

蕃殖 四月上旬より八月上旬頃迄、人家の内外に人工の巢臺

又は軒等に營む、巢は泥土に藁等を交へて作り、内部は松葉、藁、毛髮等を用ゆ、卵は三個乃至七個を産し二番及び三番子迄育雛す。

三月中旬頃より初秋の頃迄、極めて普通なる種類なり、最初來りたるときは只一羽中空に現はれ、漸次其の數を増す、去期には里方に姿を認め得ざるも、臺持、風翔等の高山に上れば、極めて多數群り飛翔するを見る。

本種には稀に白變を出すことあり、明治四十四年八月下旬、宇市附近の中空を飛ぶ燕類の中に、一羽白色のものあり、能く注視したるに腰部に少しく、薄黒色の部分あるのみにて、他は全部白色なり、産地に就き種々調査したるに、彼は宇舞谷と云へる所の村井市五郎と云ふ、一農家にて孵化したるものにて、主人の言によれば、五羽孵化したるものと内、只一羽白色のもの居たりと、(當時の防長新聞に記載したることあり、白燕現はるれば貴女生ると古書にあり)

55. コシアカツバメ 方言 ミヤマツバメ、ミヤコツバメ、ミヤマツバクロ、

傳説 本種の營巢するときは、福運來り幸多きとて、非常に喜ぶされば幸運隆正なる家ならでは營巢せずと。

候鳥 來期 三月下旬 去期 十月上旬

蕃殖 四月下旬乃至八月下旬頃迄、人家の軒又は屋内に德利

形の巢を造る 巢は前種同様泥土を用ゆるも、本種は道路等の赤土を使用す、天井縁、藁屋根の小口等にも營巢す、本種は前年の古巢を使用し、破損の個所を繕ひ、内部の藁、松葉等を更新し育雛す、

前種に比し稍少なきも、普通なる種類なり人家少なき所に少なく、人家多き部落に多く飛翔し、營巢す。

56. イワツバメ 方言 イハマツバメ、ヤマツバメ、

候鳥 來期 三月下旬乃至四月上旬 去期 九月下旬乃至十月上旬、

四五月頃山燒の煙立ち上る中を、稍低く速力鋭く飛翔するを見る、其後行動を見ず、九月下旬頃去期に際し、他の燕類に混じ高空を飛翔するを見る、其の數餘り多からず。

57. キレンジャク

候鳥 來期 十一月中下旬 去期 三月中下旬

秋期大群をなして來り飛ぶ、冬季山野の柿樹等に集り實を食ふ。

58. モズ 方言 モンズ、キチ／＼／＼、

蕃殖 四月中旬乃至七月下旬頃、竹林等に營巢す。

四時共に棲息する普通なる種類なり、夏季は深林中に多く、初秋の頃より里方へ出で、「キチ／＼／＼」と鳴く、モズの囀鳴を聞けば、秋と云ふことを思はしむるなり、本種は能く他鳥の鳴聲を真似て鳴く。

59. シジウガラ

蕃殖 四月上旬より六月下旬頃、樹木の空洞、若くは石垣の

空所等に營巢す、五卵乃至十卵を産す、早きもの多産なるものゝ如し。

四時共に棲息する普通なる種類なり、常にエナガ、ヤマガラ等と混じ、樹木を移り替る。

60. ヤマガラ

蕃殖 四月下旬乃至七月上旬の頃、樹木の空洞、又は石垣の

空間に營巢す。

四時共に棲息する普通なる種類なり、エゴノキ、シキミ、マツ等の實を割りて内部を食す。

61. エナガ 方言 マツムシ、ゴジウガラ、

蕃殖 四月中旬乃至七月中旬頃、松杉其他の樹木に、巧妙な

る巢を造り育雛す、外部は苔類を用ひ、蜘蛛の絲にて取り付け、内部を羽毛等にて、極めて柔かく暖かくなし上部の側面に小さき入口の穴を有す。

四時共に棲息する普通なる種類なり。松杉の樹木を飛び替り、小虫を捕食す。

62. ハシブトガラス 方言 カラス、

蕃殖 四月下旬乃至七月頃、大樹の高所に營巢す、巢は荒き

枝等を用ひ。

四時共に棲息する普通なる種類なり。然れども餘り多からず。

63. カケス 方言 クシヒキ、カゲエス、

蕃殖 四月下旬乃至七月上旬頃、繁りたる樹木に營巢す、小

枝、苔類、小さき樹根等を用ひ。

四時共に棲息する普通なる種類なり、本種は麥畑に下りて穂を啄み食す、能く他鳥の鳴聲を真似て鳴く。

64. メジロ

蕃殖 四月中旬乃至七月中旬、繁りたる樹木の枝、又は竹等

に營巢す、巢は苔を外部分し内部はス、キの穂等を用ひ、極めて薄く、透視するを得、枝の下部に吊して營

巢す。

四時共に棲息する普通なる種類なり、本種は花の蜜、ヒサカキ、サカキ、サクラ等の實を食す。

65. シメ

候鳥 來期 十月下旬 去期 三月下旬

秋季他の渡り鳥と混じり、群を爲して飛翔するも少数なり。

66. イカル 方言 イカルゴ、

候鳥 來期 十一月中旬 去期 四月上旬、

秋季群を爲して來り飛ぶ、普通なる種類なり。

67. イスカ

傳説 イスカの啄で喰ひ違ひ、と云ふ。

候鳥 來期 十月下旬乃至十一月上旬 去來 三月下旬、

秋季他の渡り鳥に混じるも少数なり。

68. ベニマシコ

候鳥 來期 十一月上旬乃至中旬 去期 四月上中旬、

秋季より春にかけて普通なる種類なり、禾本科植物等の實を食す。

69. アトリ 方言 アツトリ、

候鳥 來期 十月下旬乃至中旬 去期 四月上旬乃至中旬、

普通なる渡り鳥にして、大群をなして來り松杉の林に群り實を食す。

70. マヒワ 方言 ヒワ、

候鳥 來期 十月上旬乃至中旬 去期 四月上旬乃至中旬

秋季大群をなして來り、松杉の林に集り實を食す、最も多きは萬以上に達するものあり。

71. コカハラヒワ 方言 コウラ、アラジナ、

蕃殖 四月上旬乃至七月中旬、大樹の高所に營巢育雛す、

四時共に棲息し普通なる種類なり、樹の頂上に止り、キリ／＼と清らかなる鳴聲を放つ、禾本科の實を食す。

72. ウソ

候鳥 來期 十一月下旬 去期 四月中下旬

冬季普通なる種類なり、樹實を食する外、梅、桃、櫻等の蕾を食し大害を與ふることあり。

アカウソ (前種の色彩變型なるべし—黒田記す)。

候鳥 來期 十一月下旬 去期 四月上中旬、

冬季普通なり、本種は胸腹、脊面まで赤色を呈し居れるものなり

(春の赤色なるは疑はし恐らく赤味を帯ぶるの意ならん—黒田記す)。

73. スズメ、

蕃殖 四月中旬乃至八月中旬頃、人家瓦屋根の間等に營巢す

一番及び三番子迄孵化し、卵の形状斑點等種々あり、四時共に棲息し極めて普通なる種類なり、秋季稻田を襲ひ大害を興ふ、山間部にては全く棲息せざる所もあり。

74. ホホジロ

傳説 鳴聲を、チンチロベンケイ、チロベンケイ、サラモテコイ、シルスハシヨ。又、イツピツケイジヤウ、ツカマツリソロ、

と鳴くと云ふ。又、學校嫌ひの學生が學校へは行かず、毎日野山にて遊んでは歸り居たるが、或る日、いつもの如く野に遊んで居ると、傍の松の木の梢にて、頬白が、「一筆啓上仕候」と鳴くを聞き成る程と感じ、小鳥でさへ斯く囀るに、吾れは人間と生れて、こんなに、勉強せず遊んではすまぬと、以後は大そう勉強家になりたり、と云ふ話あり。

蕃殖 四月下旬乃至八月中旬頃、原野繁りたる小松なぎに營巢す、一間以上の高所に營むもの少なし、卵は三個乃至六個を産す。

四時共に棲息し、極めて普通なる種類なり、春日酣ならんとするの候、樹木の頂上に在りて、清らかなる囀鳴を放つ、一ヶ所に静止し長く鳴く、秋季山寄の稻田等を襲ひ稻穂を食害す。

75. ミヤマホホジロ

候鳥 來期 十一月 去期 四月

冬季より初春にかけて普通なる種類なり、田園などに下り食餌をとり。

76. アナジ

候鳥 來期 十一月下旬 去期 四月上旬、

秋季來り春去る候鳥にて、其の數餘り多からず、禾本科植物等の實を食す。

77. クロジ

候鳥 來期 十一月中下旬 去期 四月上旬、

前種と混じ來る候鳥にして、餘り多からず。

78. ノジロ

候鳥 來期 十一月下旬 去期 三月下旬

冬季見る候鳥なれども、餘り多からず、クロジ、アラジなどと混じ、食餌をわきまを見る。

附記 老農の言によれば、古來より頬白の一羽子は鷹になる、と云へり、頬白の巢に一羽居るものは鷹の子と云つて居る、實際を見ないのであるから、分明しないが、或は杜鵑科の委托せる幼鳥にはあらざるかとも思はる、杜鵑科の鳥は一見鷹の如き斑紋を有する故に、鷹の子と見誤り云へるにあらざるか、分明するまで暫く疑を存し記して參考に供す。

以上の外に數種候鳥あるものと如きも、極めて少數にて種類分明せざ

れば茲には省略せり、候鳥の來期、去期、又一般の蕃殖等については明治三十二年以降目撃したことを、日記に書き止めて置いたものにより、參酌記載したのである。(完)

ハジロコチドリ

子爵 松平頼孝

此珍らしき千鳥即ち *Agrius haiticola tundra* (Lew.) は千九百二十年九月十七日相模國高座郡小和田に於ける海岸に近き水溜りに於て他の二三羽のコチドリと共にありしものを射獲したるものなり偶然の來訪者なるべし此年他にヒバリシギ三、オジロトウネン一、エリマキシギ一をも得たり(エリマキシギの合は千九百十九年九月二十九日小和田より少し離れたる辻堂に於て得たる事あり)。

上嘴の基部に於ける線、頭頂、眼先は灰黒褐色にして各羽縁は軟皮色なり耳羽及び胸側を横ざる帯は黒褐色なり額及び眉斑は白色なるも軟皮色を帯ぶ喉、頸輪及體の下面、翼の裏面及び腋羽は純白色を呈す體の上面は頭頂と同じく各羽縁は軟皮色の細き縁を有するこゝ又同じ翼の風切は黒褐色にして灰白色の縁を有す初列風切の第一羽より第三羽迄は羽軸のみ白色にして第

四羽よりは羽軸の白色部に添へる外辨も亦白色なり次列風切は基部に近き二分の一は白色にして此部分羽軸は共に白色なり三列風切に近き或るものは純白色にして之れに隣りするものは白色に少許の黒褐色斑を有す三列風切は脊と同色にして黄白色の縁あり大雨覆の先端は幅廣き白色の縁を有す小翼羽の外辨は白色にして初列雨覆の羽縁は灰白色を呈す中央尾羽は灰黑色にして先端に向ふに従ひ濃黑色と異なる先端には白斑(黄味を帯ぶ)あるも此白斑は他のものに比して小形なり外側に至るに従ひ先端の白斑は次第に増大せらる而して最外側のものは全く白色なり、嘴は下嘴の基部に最小部分の黄色を見るも他は全部黑色なり脚は汚れたる橙黄色、紅彩は褐色なり。

嘴峰一四耗、翼長一二二耗、尾羽五七耗、跗蹠二九耗

アネハヅルの新渡來地

熊谷三郎

アネハヅル *Anthonoides virgo* (L.) が宮城縣にありて十一年六月に獲られ其の剥製標本撮影せるもの第三十四圖の如くである。

之れがアネハヅルなりミせば初夏の渡來は渡りの途次にあるものか、又はマナヅルの北海道にて繁殖せし例ある如く本種も

亦本州北部にて繁殖の目的にて渡來せるものご解すべきや。

日本鳥類圖説上卷二一五頁のアネハヅルの記載と大略一致す



第三十四圖 宮城縣下にて獲られし アネハヅル

るも次の點が相違しておる。

頭頂は灰色なるこゝ及び脚は綠黑色なるこゝ、

虹採は紅色なり、又圖に見る如く頭部より頸の上半を包み前頸より前胸に至る垂れ下れる黑色の飾羽あるこゝ、眼の後方に

總狀をなせる純白の長き羽毛あるこゝは本種の特徴である。

測定、露出せる嘴峰六八耗、翼長四六〇、尾長一五二、跗蹠

一七五、中趾爪共七八、尾羽は十二枚(灰鼠色)。

採集地 宮城縣栗原郡尾松村

採集年月日 大正十一年六月五日

本種が當地方に出現せしは六月五日の早朝であつて前記尾松村の田圃に二羽見受けられたる由にて(恐らく一對なりしなるべし)折しも田植中の農夫等は物珍らしく集まつて色々何鳥であるか評議したが遂に誰も見たこゝのない鳥である云ふこゝに一致したそうであるから此の鳥の當地方の出現は非常に稀れな出來事であつたご考へられる。余の赴いたのは其の翌日偶然採集地に私用で行つたのであるが其の際前記の話を聞かされたのであつた。採集せられたのは二羽の中の一羽であつたのでさうして此の日他の一羽が何れごもなく飛翔し去るのを見たご云ふこゝである。

本種の渡來に就ては圖説に次の記事があるのみで即ち……本邦ニテハ往時極メテ稀ニ渡リ來リタルガ如シ……これのみでは何れの地に渡り來りたるや又其の期節は明らかでない。黒田理學士に尋ねた處によるご北海道ご伊豆ごで獲られた記録がある

千葉縣茂原町附近の鳥類

齋藤武夫

のみこのここである。又繁殖地は東部及び南部歐羅巴、南部西
 比利亞、及び中部及西部亞細亞にして冬期に至れば東北亞弗利
 加、印度及び支那等に越冬す……さあるが今回採集の時期は六
 月であるから渡りの途にあるものとしては少し疑がはしい様な
 感がする又繁殖のためであることも申しかぬ様な次第で何れこ
 も自分には決し兼ねているから此點御教示を願ふ。

附記——アネハヅルの本邦に渡來したことは實に珍らしい現象である
 然かも二羽來たことから考へると飼鳥が逃れたのではあるまい恐らく
 何等かの原因によつて途を迷ひ思ひ掛けなくも本州に着したのではな
 かるうかと考へる（黒田記す）。

當町の東は平坦にして九十九里濱沿岸迄二里餘其の間沼地多く水禽の
 棲息に適し西は一帶の山地にて南は高平相仲ばし北は平地にして河川
 は西部山中より起り當町にて二川を合すされば山に川に採取すべく又
 觀察すべき好適地なり其の間に於て大正九年十月より今日迄で見たる
 鳥類に就て其の種名方言等を摘録したり。
 されど夏季の鳥類に就ては其の調査薄弱なれば今一層の努力を以て調
 査し完璧を期する所存なり。

種名	方言又は訛名	備考
1 カイツブリ	ミヨウ	鶏(ニホ)の轉じてミヨウと呼びしならん
2 アオサギ	幼鳥をバツコ 成鳥をアナサギ	大正九年七月二宮本郷村押日に中ば營巢したるが不幸にも 密獵者の爲め捕獲されたり
3 ゴイサギ		當一帶の山地に蕃殖す
4 ミゾゴイ		四月上旬渡來當地にて蕃殖す
5 ヨシゴイ	シヤノメ	翼蛇の目傘に似たるより稱するならん
6 マガモ	アタクビ又はホンガモ	
7 カルガモ	カリ又はナツガモ	
8 ヨシガモ	チユウガモ	當地湖沼にて蕃殖したる事もありたり

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
コ	カ	ツ	ク	キ	カ	ヤ	ア	タ	タ	ケ	バ	ク	ヒ	ヤ	キ	ハ	ト	オ	コ
ノ	ハ	、	ワ	ジ		マ	チ	マ				メ		マ		ヤ		ホ	
ハ	セ	ド	ク	モ		シ	シ	シ	シ			イ		ド		ア		タ	ガ
ヅ			コ	バ								イ							
グ	ミ	リ	ウ	ト	メ	ギ	ギ	ギ	ギ	リ	ン	ナ	ナ	リ	ジ	サ	ビ	カ	モ

タカブ又はタカベ

ト
ン
ビ

キ
ユ
ウ
ナ

チ
ド
リ

カ
ゴ
メ
單にハトと呼ぶ

ホン／＼ドリ又はサツキドリとも
稱す

當地にて蕃殖す
筆者は昨十年十月十五日初めて當地豊田村沼地にて採取し
たり
水鶏は口から卵を産すとの俗説あり
一帯の池沼にて蕃殖す

多くは河岸の藪へ深く穴を堀りて蕃殖す

48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29

ウ コ シ ア ツ ト ル ジ ヒ タ ビ ハ キ ヒ コ ア ヨ フ ア オ
グ ヨ ロ カ ヲ ヲ ラ リ ヤ ヲ ヒ ヲ ビ ハ ク セ キ ヒ コ ア ヨ フ ア オ
イ シ ハ ハ グ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
ス キ キ ハ ハ グ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ

ヨ
コ

單にキツ、ギと呼ぶ

單にセキレイと呼ぶ
ムギマキドリ

ナクレエア

モンツキ又はクダクダ

クダクダ

チヨウマン
クツツポロ

六月頃渡來夕に及べばウチホくくと鳴く

大正十年十月十六日豊田村小林山中にて始めて見たリ

麥蒔前に渡來し畑地に多く見る爲めなるべし

色彩及鳴聲によりて呼ぶなるべし雌は別種と考へて居るもの多し

雌雄共ジヤウビタキの雌と心得居るもの一般なり

大正十年二月二十日二宮本郷押日で一羽見たるのみなり

十一月中旬に渡來す

其の數少なし

49	ミ	ソ	サ	ザ	イ	48	チ	ナ	ケ	ス	47	カ	ハ	シ	ブ	ト	ガ	ラ	ス	46	エ	ナ	ガ	ラ	ズ	45	コ	モ	レン	ヂ	ヤ	ク	44	ヒ	レン	ヂ	ヤ	ク	43	ツ	バ	メ	42	シ	メ	シ	ロ	41	マ	ヒ	メ	40	シ	メ	シ	ロ	39	メ	シ	ロ	38	ム	ク	ド	リ	37	チ	ナ	ガ	36	カ	ケ	ス	35	ハ	シ	ブ	ト	ガ	ラ	ス	34	エ	ナ	ガ	ラ	ズ	33	コ	モ	レン	ヂ	ヤ	ク	32	ヒ	レン	ヂ	ヤ	ク	31	ツ	バ	メ	30	ミ	ソ	サ	ザ	イ
49	コー	ヂ	ンド	リ	48	カ	ギ	ス	47	モ	ク	ド	リ	46	マ	メ	モン	ズ	45	ノ	キ	バ	又	ハ	メ	キ	バ	と	稱	す	44	ノ	ツ	コ	43	ホ	ー	ツ	ロ	42	チ	ン	ノ																																																																			

大正十一年二月二十八日二宮本郷村山崎區川岸約二十米位の處を三十羽位の群にて飛翔西方に進むを見たり

當地河岸の松樹林によく營巢す

形モズに似て小豆を好んで食する爲めなるべし

マヒワ來れば其の年ば不作だとの俗説あり
後者と混じて渡來す

稀に渡來す

共に軒端に巢食ふためなるべし

十月下旬渡來す

ハシ	シ	アカ	オ	カ
ホソ	ジ	エリ	シ	シ
ガラ	ウ	カイ	シ	ラ
ラス	カ	ツ	ド	ダ
	ラ	アリ	リ	カ

十一月中旬渡來す
 當地にては稀なり
 附近松林へ多數營巢するを見たり

鳥の方言一一

理學士公爵 鷹 司 信 輔

海軍兵學校教授立花氏は柳川の仁なり余一日談らうて事方言に及び同地方に於ける鳥の方言を聞くを得たり、今此處に録して同好の上に供す。

コーゲーガラス(かさまき) 高麗より來る
 ヒウソ(♂)及アマウソ(♀) (うそ) ホジロ(ほくじろ) ギョー
 ーギョーシン(おほよしきり) キクイタ、キ(きくいたぶき)
 ヒンコツ(じょうびたき) カッチョ(しろはら) ミソツチョ(み
 そさぶい) ムックイドリ(むくざり) シッタ、キ、又はシッタ
 、キノタローゼ(せきれい) ツバサ(つばめ) コーセミ、又
 は、コーセビ(かはせみ) ゴロクソ、又は、ゴロクソヘーゼ

(ふくろ) ケーツグリ(かいつぶり) カグメ(かもめ) ウバ
 シキ(やましぎ) シキ(しぎ) ウノトリ(う) コンコンドリ、
 又は、タニハトリ(ひくるな)。
 次に千葉縣大網地方のものを上ぐれば
 ヌキバ、又は、ノキバ(すだめ) カラヒハ、又は、カラヒヤ
 (かはらひわ) マヒヤ(まひわ) チュウチュウガラガラ(しご
 うから) モンジユ(もず) チョウマン(つぐみ) クソッポロ、
 又は、クソッポロギ(あかはら) ヒンヒンカタカタ(じょうび
 たき) ナッピー(ひよざり) マグソダカ(のすり) ピーピー
 ガモ(こがも) カリ、又は、カリガモ(かるがも) チ、ガモ
 (まがも) ムグツチョ(かいつぶり) バッコ(あをさぎ) キュー
 ナ(くるな) ミヨ(ひめくるな)

北部本邦産鶴雉の亞種

靱山徳太郎

東北地方に産する鶴雉は基型のもの——Gould氏の *Plasianus*

(*Group. oplasianus*) *scutellans* の基産地は横濱——と相違の點を

檢出し得べきを以て別亞種とすべきならん、即ち上面及び下面は稍淡色にして光澤鈍く肩羽及び雨覆羽等の羽縁の白色部の幅廣し、其他尾羽も平均上短きが如し。右は分布區域の何れに迄

達し居れるかの點明瞭ならざれど恐らく北陸地方に及べるなるべく信濃北部産も同一なるべし、尙多數の標品に就き調査し得

たる上、分布區域を明瞭に識りたきものなり、而して余の説の誤りなかりし時は *Group. oplasianus s. immertingi set. lebrionensis*

と命じたき意向なり。(一九二二、二三)

ツバメに就て一觀察

齋藤源三郎

營業、大正十年五月十八日、立關のケタの正面に泥土を附け始めたり。垂直の面に營むので造り始めは、餘程困難の様であ

つた。

出來上り 二十五日には立派に出來上つて仕舞た。

産卵 六月一日には白色の地に赤褐色の斑點ある、奇麗な卵が五個あつた。

孵化 六月十三日全部孵化した。

巢立 七月三日午後二羽巢立したが、夜は歸て來た、四日は全部巢立し夜は又歸て來た。五日は親子其他に行き以後は再び歸らなくなつてしまつた。

刺身で郭公の雛を育て得たり

仁部富之助

予は大正十年七月十日にモズの巢と共に、郭公の一雛を入手し得た。雛はこれ迄の經驗上からして孵化後十二三日を経過せる雌で、體量は十三、四匁位と判斷する。而して雛は體の大きや羽毛の伸長の具合から推して、他種の雛ならば人を怖れて巢より遁れんもあせる時代にあるのに、本種の雛の常として未だ神妙に巢に靜止し、時々翼を展けたり、羽を繕ふたりするだけで、人を見れば直ちに口を開き食物を求めんとするのである。入手後初めの二三日はトンボやミズ等を與へて居つたが、

日を経るに従ひ却々夫れ位では食飽くなき、彼の食欲を満たし得ぬため。頻りに鳴き乍ら食物をねだるのに當惑の結果、試みに有合せのマグロの刺身を與へたるに、忽ち其三四切を食ひ盡し、空腹の癒ゆるに共に靜かに巢に蟄伏するのである。

食欲の方は先づ夫れでよいにしても一方には、若しや中毒しはしないかの心配がある。仍で翌日も其又翌日も糞の状態に注意したるが夫れには些かも異常を認めぬ處から、先づ適當の食物であるといふ自信を得たから、以後はマグロやマスの刺身だけで飼つて見る氣になり、七月三十一日過つて籠より遁がすまでこれが給與を續けた。

刺身は毎回新鮮なるもの程よいには違ひなからうが、若干古くして臭氣のあるものでも大なる故障なく、又この期間中に刺身の缺乏せるとき、鶏肉や豆腐、或は水漬して軟かき鮮の肉を與へたときは數度あつたが、一時を凌ぐには何等の差障りもなかつた。

右の如くにして飼養の結果、雛の發育状態はさうかといふに夫れは非常に良好で毎日く目に立つ程に大きくなり、先年摺餌で飼つたときは比較にならぬ速かさと思はれた。即ち十四日に之を籠に入れ栖木を與へたが、其後時々籠の隙間を狙つて

逃げやうとし、十七八日頃には籠内で翼を伸張したり嘴を磨いたりし、又時々栖木より下りて布紙を嘴にて啄み切り之を食ふたりした。二十日頃には羽毛が充分飛行する位に整ひ、且つ姿勢も親のやうになつた。

食欲は初めは旺盛で、一日數回食はしてやらなければならなかつたが、一週間後より次第に減退し、二十日頃には一日三回位與ふれば充分であるし、一回の刺身の分量も精々一切れか二切れであつた。而してこの鳥は人を見れば口を開きて食を求むるが、他の鳥のやうに餌に近寄つて來たり、向き換へたり、首を差のべたりするときは先づ絶対になく、必ず口腔へ押込んでやらなければならぬのミ、自らは却々餌を攝らぬこころは厄介である。

元來杜鵑類は飼鳥として強き餌を要する鳥であることは人々の知る通りであるが、併し子が窮餘の策として試みたる結果が意外にも、中雛より充分飛行の出來る迄に（遁がしたるときは一氣呵成に飛び去つたといふ）發育し且つ發育状態には毫も無理や缺點のなかつたことを報告して置きたい。

傳書鳩使用による夜間通信

代々木大磯間夜間通信實施報告

軍用鳩調査委員 岩田 巖
陸軍騎兵少佐

一、訓練の目安

大正十一年二月二十七日より同三月二十八日に亘る三十日間に鳩四八羽を以て五十二軒を距つる大磯より代々木練兵場に午後七時以降實用通信に差支なからしむるを目安として訓練せり

二、訓練手段の準據

本訓練手段の基くところは他の渡鳥、籠飼鳥と同様俗に謂ふ「感」により飛翔せしむるに外ならざる如く思惟する故に夜間通信を企圖する地區を畫間に知得せしめつゝ一方晝餌後は鳩車を暗黒にして暗所に目を馴らしめ夕餌も舍内燈火の許にせしむるを至便とす

三、訓練實施の成績

別表の如し

四、鳩の惡癖と矯正手段

訓練開始以來晝夜微細なる觀察の結果左の三種の主なる惡癖を

發見せり

- A. 放鳩訓練の歸途外泊するもの
- B. 畑地に降下し餌を漁るもの
- C. 歸車は迅速確實なるも入車を嫌ふもの

A. 夜間訓練の歸途外泊するもの多數を認めしが其原因を探究するに一部は能力乏しきに因るも多部は狡猾にして夜間飛翔の勞を惜むの惡意に出でたる如く認めたるを以て其矯正手段として拂曉外泊先より歸車せば終日餌を給することなく其夜に及ばしめ茲に他の勤務鳩の歸車前之を巢房に閉置せり斯くして他の勤務鳩を待ちて殊更餌を撒布する音響の巢房内閉置鳩に徹底する如く給餌することにより其前非を悔ひしむる處置に出でたるに其効果を認めしもの半數以上に及びしも F3101 3386, 2621, 2942, 1304, 1302 の六羽は能力劣等にして取るに足らざるを實驗し得たり

序ながら鳩の絶食は普通の健康状態にあるものは能く五日の激務に堪へ又靜止状態に置く時は十日乃至二十日は生命を絶つものにあらざることを附言せん

B. 畑地に降下し餌を漁るものは其原因多々あるべきも其矯正手段としては是等の鳩を發見せば機を失せず捕へて先に餌を漁

りし畑地に伴ひ味囊より逆に嚙に向ひ囊中の餌量を吐出したる後鳩車に連れ戻り茲に同種の餌量を豊富に投與することに
よりて矯正せり其鳩名 F. 3101 九年産 M. 1807 十年産

C. 歸車は迅速確實なるも入車を嫌ひ數時間屋上に時間を徒費するもの、之亦入車を待ち捕へて屋上に伴ひ猛烈なる體刑を加へたる後人口より追込むことにより全然癖を矯正し得たり其鳩名 F. 3101 九年産 M. 2026 九年産

五、大體的觀察

(一)、一般の歸巢性は雌雄異なることなきも眞に困難にして勞多き夜間飛翔は確に雄の雌に優るの感を抱かしめたり

(二)、天空の明暗は歸翔能力の難易に影響なし

(三)、能く訓練せられたる鳩の飛翔速度は晝間に異なることなし

(四)、失踪及落伍して歸る鳩と其配偶者との關係

失踪鳩九羽 配偶者なきもの 五、
配偶者を有するもの 四、

外泊鳩六羽 配偶者なきもの 三、
配偶者を有するもの 三、

是に依て之を見れば失踪及落伍は配偶者の有無に不拘能力の

優劣が主要なる關係あること明瞭なり

(五)、歸車當時の車内の状態は口頭を以て説明すべし

意見

一、訓練の繼續と孵化育雛

今回の實施は吾人が嘗て學習せし最大限の距離に就き四十八羽の雌雄を以て試みしが結果信を置くに足る三十羽を得たり夜間用鳩の繼承者を養成するの要あるを以て此優良種を以て尠くも一雙宛の孵化育雛の時日即ち五月中旬迄生活の自由を得せしめたる後更に訓練を重ね約七十軒の小田原附近よりの通信を企圖する亦有益なるべきを信ず

訓練の長き中絶は有害にして實驗調査の爲便ならず

二、夜間鳩車の改造に就て

車内の燈火は到着臺上の出入口及其上部の鐵網窓を通して射出するを以て其光線を目標として歸車する鳩は猛烈なる勢にて此鐵網窓に撃突し爲に跛行するものさへ尠からず之れ入車を嫌ふ原因の有力なるものと思惟せらるゝを以て鐵網窓の全部を閉鎖して光線の洩るゝを防ぎつゝ其射出量の不足を補ふ爲には出入口の幅員及高度を増大せば可なるべしと信ず

放鳩時刻 午 後

放鳩地	道玄坂	中目黒	中延	池上本門寺	川崎	鶴見	神奈川	保土ヶ谷	戸塚	藤澤	藤澤	大磯							
距離	一吉	三	七	一〇	一五	一八	二三	二六	三三	四一	四一	五二							
天候	微風 星明	逆風 曇夜	同 暗左	暗黒雨 模様	西北微風 曇	晴 微風	雨	晴 無風	晴 北西強風	暗黒 西強風	星明 北強風	小雨 北西強風	星明 明	星明 明	星明 明	暴風			
性別 鳩番號	2656	丁	丁	丁	一泊	一泊	一泊	乙	甲	一泊	甲	一泊	甲	甲	乙	一泊	丁		
	2698	丁	丁	丁	丁	丁	丙	丁	丁	一泊	一泊	甲	一泊	甲	甲	乙	一泊	甲	
	2717	丁	丁	甲	丁	丁	乙	一泊	失踪										
	2767	丁	丁	丁	一泊	丁	丁	一泊	乙	甲	甲		甲		甲	乙	一泊	甲	
	2920	丁	丁	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	丁	失踪									
	2937	丁	丁	丁	一泊	一泊	丙	一泊	乙	乙	一泊	甲	一泊	甲	甲	乙	甲	丁	
	3062	丁	丁	丁	一泊	一泊	丁	一泊	丁	甲	甲		甲		甲	乙	甲	甲	
	3063	丁	丁	甲	一泊	丁	乙	一泊	丙	甲	甲		甲		甲	乙	甲	甲	
	3065	丁	丁	甲	一泊	一泊	乙	一泊	乙	甲	一泊	甲	一泊	甲	甲	乙	甲	甲	
	3082	丁	丁	丁	一泊	乙	丁	一泊	丁	甲	一泊	甲	一泊	甲	甲	乙	一泊	甲	
	3100	丁	丁	丁	一泊	一泊	甲	一泊	丁	乙	甲	一泊	甲	甲		甲	乙	一泊	甲
	3124	丁	丁	丁	一泊	一泊	乙	丁	丁	甲	甲		乙		一泊	乙	甲	甲	
	3144	丁	丁	甲	一泊	一泊	丙	一泊	乙	丁	一泊	甲	丁		甲	丙	乙	甲	
	3181	丁	丁	丁	一泊	一泊	丁	丁	丁	丁			乙		甲	丙	一泊	甲	
	3188	丁	丁	丁	一泊	丁	一泊	一泊	乙	甲	一泊	甲	甲		甲	乙	一泊	甲	
	3221	丁	丁	丁	丁	丁	乙	丁	丁	甲	一泊	甲	甲		甲	乙	甲	乙	
	3558	丁	丁	乙	一泊	乙	乙	一泊	丁	甲	丁		甲		甲	乙	甲	甲	
6026	丁	丁	丁	一泊	一泊	丁	丁	丁	甲	丁		甲		甲	丙	甲	甲		
6028	丁	丁	丁	一泊	丁	乙	一泊	乙	甲	甲		甲		甲	乙	丁	甲		

備考 甲 700M. 以上
 乙 500-700
 丙 400-500
 丁 400(拂曉迄のもの)以下

夜間通信放鳩成績表

放鳩時刻		午後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
放鳩地		道	中	中	池上本門寺	川崎	鶴見	神奈川	保土ヶ谷	戸塚		藤澤								大磯		
距離		一吉	三	七	一〇	一五	一八	二三	二六	三三		四一								五二		
性別	天候	微風	逆風	同	雨模	微風	曇	曇	晴	晴	小	晴	星	星	暗夜	晴	星	星	星	曇	星	
	鳩番號	星明	暗夜	曇	模	微暗	西	西	微	西	北	雨	明	明	強	北	強	明	明	明	明	晴
雌	1302	丁	丁	丁	一泊	一泊	甲	丁	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	1304	丁	丁	丁	丙	丁	甲	乙	丁	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	1307	丁	丁	翌朝	丁	乙	丁	甲	丁	一泊	丁	丁	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	1801	丁	丁	丁	丙	丁	甲	一泊	丙	一泊	甲	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	1807	丁	丁	丁	一泊	丁	甲	丁	丁	丁	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	丁
同	2620	丁	丁	丙	丙	丁	甲	乙	丁	丁	一泊	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	丁
同	2621	丁	丁	甲	丁	丁	一泊	丁	丁	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	丁
同	2691	丁	丁	丁	一泊	丁	甲	失踪														
同	2708	丁	丁	丁	丁	丁	一泊	失踪														
同	2719	丁	丁	丁	丁	丁	甲	病	同	丁	甲	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	2745	丁	丁	丁	丁	一泊	失踪															
同	2764	丁	丁	丁	一泊	一泊	甲	丁	丁	丁	一泊	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	甲
同	2774	丁	丁	丁	丁	丁	甲	甲	丁	丁	丁	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	一泊	乙
同	2782	丁	丁	丁	失踪																	

放鳩時刻		午後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
放鳩地		道	中	中	池上	川	鶴	神	保土	戸		藤								大		
距離		一	三	七	一〇	一五	一八	二三	二六	三三		四一								五二		
天候 鳩番號 性別	性別	微風	逆風	同	微風	曇	曇	晴	晴	小	晴	星	星	暗夜	晴	星	星	星	星	曇	星	
		星	暗	曇	模	微	西		微	西					強	西北	星				後	
		明	夜	左	模	夜	風	北		風	北	雨		明	明	風	北	強	明	明	明	明
雌	2789	丁	丁	丁	泊	丁	甲	丁	乙	泊	泊	丁				甲		甲		乙	甲	
同	2861	丁	丁	丁	丁	丁	甲	甲	丁	丙	丁				甲		甲		甲	乙		
同	2878	丁	丁	丁	泊	丁	甲	丁	丁	丁	甲	泊	丙			甲		乙		甲	丁	
同	2883	丁	丁	甲	泊	丁	甲	丁	丁	丁	丁				泊		乙		乙	甲		
同	2890	丁	丁	丁	泊	丁	甲	丁	甲	丁	泊	泊	泊	泊	失蹤							
同	2942	丁	丁	丁	泊	泊	甲	甲	乙	丁	丁	泊	泊	泊	泊			乙		甲	甲	
同	2945	丁	丁	丁	泊	丁	丁	丁	丁	泊	泊	丁				甲		乙		甲	丁	
同	3017	丁	丁	丁	乙	丁	甲	丁	失蹤													
同	3101	丁	丁	丁	泊	丁	甲	丁		丁	泊	泊	泊	泊	泊			泊	乙	甲	丁	
同	3187	丁	丁	丁	丁	泊	甲	丁	乙	丁	丁	丁				甲	甲	乙		甲	甲	
同	3398	丁	丁	甲	乙	乙	丁	乙	甲	泊	泊	泊	泊	泊	泊			甲		甲	甲	
同	6027	丁	丁	丁	丁	丁	甲	丁	丁	丁	泊	丁				丁	甲	甲		丙	甲	
同	6029	丁	丁	丁	丁	泊	甲	丁	乙	丁	泊	泊	泊	甲		甲	甲	甲		甲	甲	
同	6030	丁	丁	丁	丁	丁	甲	丁	丙	丁	泊	泊		失蹤								
同	6031	丁	丁	丁	泊	泊	甲	乙	丁	泊	泊	丁				甲	甲	丙		泊	甲	

小田原代々木間夜間通信實施報告

夜間通信は三月實驗せし代々木——大磯間の通信を擴張し更に代々木——小田原(六十六杆六百)間を午後十時以後實用上差支なき程度に訓練を了せり

詳細に關しては左記(成績は別表)の如し

イ、惡癖を其矯正手段

四月二十二日夜の訓練は諸般の景況前日と異なるなきに拘らず其成績著しく不良にして外泊鳩多かりしも翌日午後より夕刻に亘り三々伍々歸車せり而も歸車後は平素の如く沈靜ならず恐怖の狀明瞭なりき其原因は不明なるも輸送前車内に於て人鳩の親和を缺きたるこゝありしものと推測せられしを以て其翌日及翌々日の訓練を中止し専ら車内に於ける人鳩の親和を計れり之が爲には主として鳩の嗜好する玄米、葉綠素を少量宛手づから鳩に與ふるこゝによりしが幸にして二十五日には全然舊に復するの成績を收め得たり

ロ、大體的觀察

一、前回の實驗成績に鑑み夜間通信は其距離更に擴大し得るの所信を得たるを以て今回の如く六十六杆六百米に延長したり其結果相當に歸巢能力を有する鳩は訓練を重ねるこゝによ

り實務に差支なく殊に其速度は分速一杆五百より二杆に達するもの數羽を得たり

二、降雨の際は勿論空氣の濕潤せる場合は晝の飛翔に於ても亦大なる障礙として忌むべきものなるが夜間飛行に於ては殊に其障礙著しく成績不良の最大原因をなすものなるこゝを實驗せり

ハ、結論

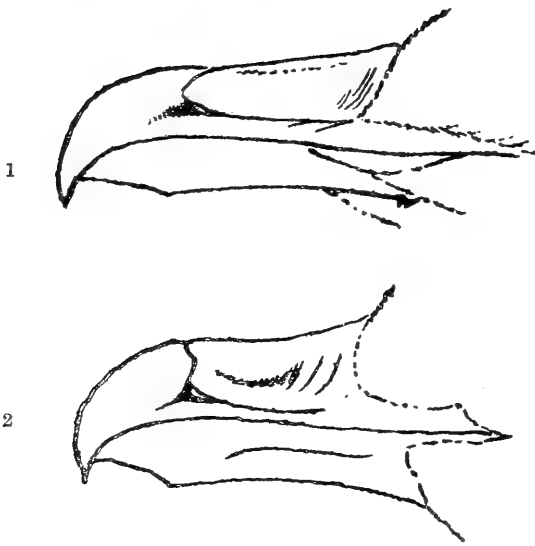
要するに夜間通信は相當の練成を淘汰しを重ねれば暗夜約七十杆の實用に差支なきを確認し得たり

自四月十日 小田原一代々木間夜間通信訓練成績表
至同二十七日

放鳩地	大磯集團	小田原各個	同左集團	同左五羽宛	同左五羽宛	同左五羽宛	同左二羽宛	同左二羽宛	同左各個	同左各個	同左各個	同左各個
放鳩法												
時日	十六日午後時	前十一日午後時	後十三日午後時	後十五日午後時	後十六日午後時	後十八日午後時	後十九日午後時	後二十日午後時	二午後十一日午後時	二午後十二日午後時	二午後十五日午後時	二午後十七日午後時
天候	星明	晴	曇小雨	星明	曇後晴	晴後曇	暗黒	星明	星明	星明	星大風	星明
號鳩番	2698	2767	2937	3062	3082	3190	3124	3188	3558	3221	6026	6028
號鳩番	1307	1807	2620	2719	2878	2942	3187	3398	6029	6031	1304	2883
	甲	甲	泊	乙		甲	甲	甲	甲	甲	甲	乙
	丙	甲	甲	乙		泊	泊	甲	甲	泊	失踪	
	乙	甲	丁	丙		甲	泊	甲	乙	泊	丙	甲
	乙	甲	泊	失踪		乙	失踪					
	乙	甲	泊	乙		乙	泊	丙	甲	甲	乙	丙
	甲	甲	泊	泊	丁	丙	泊	丁	甲	泊	乙	甲
	甲	甲	丙	丙		甲	泊	甲	甲	泊	泊	甲
	甲	甲	泊	乙		甲	乙	甲	甲	泊	甲	甲
	甲	甲	乙	丁		甲	泊	甲	甲	泊	甲	丙
	甲	甲	泊	泊	泊	泊	泊	失踪				
	乙	甲	丁	丙		乙	泊	甲	甲	甲	甲	甲
	甲	甲	丙	乙		丁	泊	乙	乙	泊	泊	丙
	丁	甲	乙	乙		甲	乙	甲	甲	甲	甲	甲
	甲	乙	甲	乙		乙	泊	甲	甲	泊	乙	乙
	乙	由	乙	乙		丙	泊	甲	甲	甲	甲	甲
	丁	甲	泊	泊	泊	乙	泊	丁	乙	泊	泊	泊
	甲	甲	乙	甲		乙	泊	甲	甲	甲	甲	甲
	乙	甲	泊	乙		甲	泊	乙	甲	泊	甲	乙
	乙	甲	丙	甲		甲	泊	甲	甲	甲	甲	甲
	乙	甲	泊	丁		泊	泊	乙	甲	乙	乙	乙
	丙	甲	泊	乙		甲	泊	甲	甲	泊	乙	甲
	乙	甲	丁	丙		乙	泊	甲	甲	乙	甲	甲
				泊	丁	泊	泊	甲	甲	乙	甲	泊
				泊	丁	甲	乙	甲	甲	甲	甲	甲

備考
 1. 分速甲 700m以上 2km 乙 500m-700m 丙 400m-500m 丁 300m-400m
 2. 1304, 2883 は代々木-大磯間の夜間成績中位以下なりしものを特に途中より参加せしめて實驗せり

御断り 本誌第十二、十三號鷹司理學士の「再び大盜賊鷗に就て」の論文中に挿入すべき挿繪四圖は其當時印刷所の都合により脱漏するに至りしを以て茲に挿入するこゝせり即ち第三十五圖—第三十八圖迄がそれなり著者の御寛恕を乞ふ（編輯者記す）。

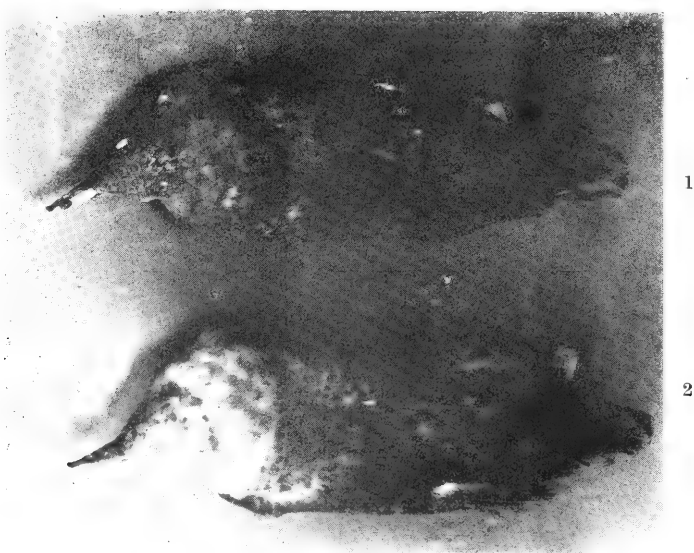


第三十五圖 *Catharacta* 屬二種の嘴比較

1. *Catharacta skua*. 2. *Catharacta maccormicki*.

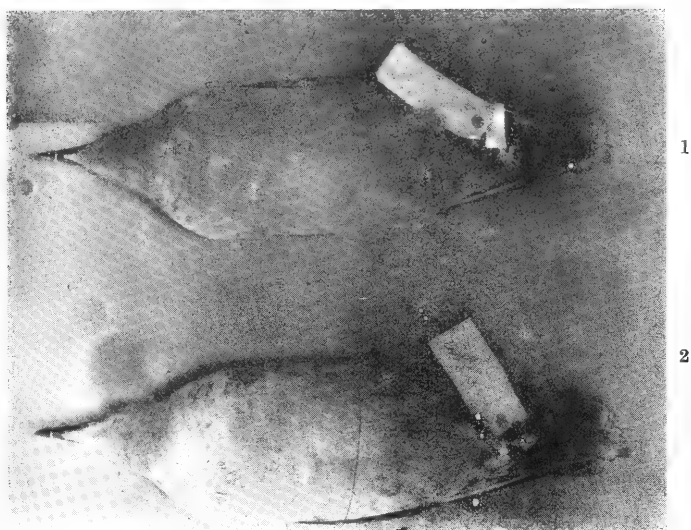


第三十六圖 オホトウゾクカモメの嘴
Catharacta mtsudairae Taka-Tsuka a.



第三十七圖 オホトウヅクカモメ 上面

1. 餘り褪色せざるもの、羽の末端或は軸の附近の白く見ゆるは褪色白化せる所
2. 褪色白化せる鳥、本鳥は最も甚しきもの、一つにして各羽の磨損せる事甚し



第三十八圖 オホトウヅクカモメ 下面

1. 餘り褪色し居らざるもの、胸部尾端等の白色に見ゆるは褪色白化せるものなり
2. 羽色褪色して白化せるもの

質疑應答



一五 質疑者 在英國 蜂須賀 正氏

問一 雉及鸚類の尾羽の數御教示を乞ふ

答 日本産雉及鸚類の尾羽多數を調査したる結果左の如し

雉及鸚類の尾羽の數：十八枚 普通

同 上……十六枚 屢々あり(兩種共に)

同 上……二十枚 稀例 ヤマドリ シコクヤマドリ 二例
ホクロクキジ 一例

同 上……十七枚 一例 キジにあり、一枚脱
落せぬ様なり

問二 日本産雉類及金鷄、銀鷄、白鷄、天鷄、孔雀等を除きたる此

類の鳥類に和名あらば御教示を願ふ

答 左記のものには和名及支那名の知られたるものなり

Perdix daurica (Pallas)……ヤマウヅラ(關東都督府狩獵規則)
石 ヤコ(鷹司氏飼ひ鳥)
鷄(支那名)

Cucubis chinensis (Gray)……シヤコ(通稱) イワシヤコ(鷹司氏飼ひ鳥)

Bambusiocha thoracica (Temm)……小壽鷄

Tragopan……吐綬鷄(支那名)

Tragopan caboti (Hoult)……綬鷄(同上)

Crossoptilon manchuricum Swinh. ……火鷄(同上)

Pucrasia xanthospila Gray ……ミノキジ(黒田命名)

Gallus gallus (L.)……野鷄

Polyplectron chinensis (Mull.)……小孔雀

Argusianus argus (L.)……セイラン(鸞鷄)

Megapodius japonensis senex Hartl ……ツカツクリ(黒田命名)

Megapodius japonensis japonensis Temm. ……マリアナツカツクリ(同上)

終りの二つは塚造科鳥類なり。

問三 *Locustella ochotensis* ♀, *Locustella pusilla* の差及分布御教

示を乞ふ

答 此二者は確に相異し前者即ちシマセンニウは嘴及脚短小な

り後者即ちウチャマセンニウにありては強大なり。シマセン

ニウは北部より冬季南部地方に渡るらしく、ウチャマセンニ

ウは朝鮮及内地(本州、九州)恐らく支那にも之れを見ること

coloured plates.

Rothschild, W.:—Extinct Birds, 1907.

此鳥類は一八二八年に小笠原群島にて発見せられペトログラ
ーの Museum of the Imperial Academy of Sciences に其基型標
本一個藏せられ第二標本は Leyden Museum にあり第三は
Vienna Museum にあるに過ぎず (答一十五 黒田)

を得べし。後者は朝鮮と九州北部にては蕃殖するもの確實
ならん。學名として前者を *L. ochotensis chot. nisei* (Midendorf)
とし後者を *L. ochotensis plesteri Taczanowski = hondoensis Ste-*
inger とす。

問四 アカコッコが英國博物館所有のものゝ内に Tajima, E.
coast of Izu, Japan と云ふ産地が附せられしものあり之は時
々ある事か或は非常に稀れなる事か御教示を願ふ。

答 伊豆半島に渡來せしこゝは已に聞き及びたる事實なり恐ら
く大島邊より稀れに渡り來るものなるべし。

問五 ナガサハラグワビテウに關する書物名及所有博物館名御
教示を乞ふ

答 此鳥類に關する書物は左記のもの位ひならん (但し日本鳥
類圖説以外の洋書)

Kittlitz: Ueber die Vögel des Inselgruppe von Boninsima.

Mém. présentés à l'Acad. Imp. des Sciences de St.

Petersb. par divers savans, 1830, p. 244, pl. 17.

Seeborn, H.:—The Birds of the Japanese Empire, 1890, p. 44.

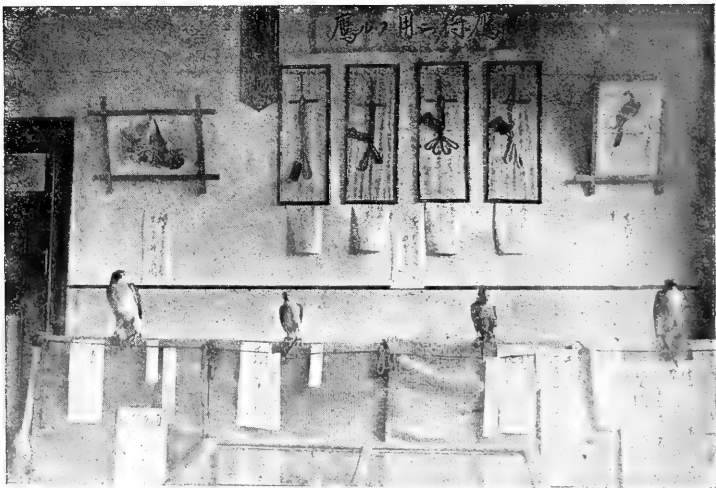
Seeborn, H.:—A Monograph of the Turdidae or Family of

Thrushes, 2 vols. London, 1900—1902, with 149

昨年出版の日本鳥類目錄の正誤を本誌に掲載する考へであり
ましたがまだ出來ませんから次號に出す筈であります就ては
御氣付きの點がありますれば御報知を願上けます (黒田)

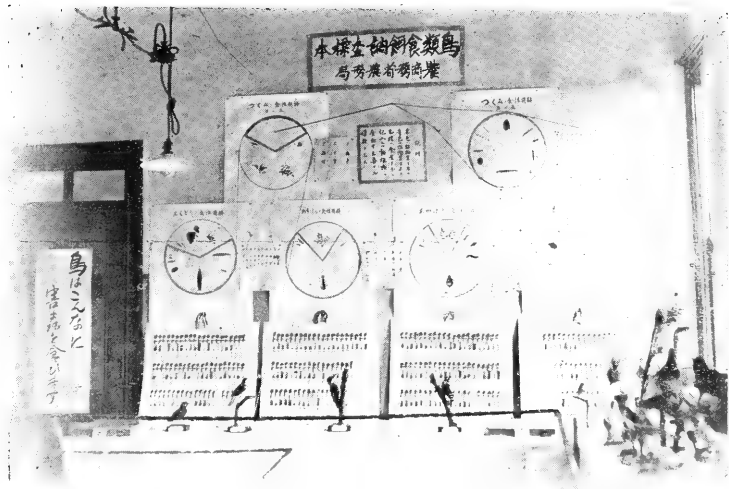


□日本鳥學會十週年記念「鳥の展覽會」 日本鳥學會創立十週年記念事業の一として日本鳥學會及鳥の會共同主催のもに大正十一年三月三、四、五の三日間東京市赤坂區溜池三會堂に於て「鳥の展覽會」を開催し尙五日夜は御茶の水教育博物館に於て鳥類に關する講演會を開催せり鳥の展覽會は本邦最初の試みにして會場たる赤坂三會堂には鳥類の剝製標本、參考書籍、繪畫、寫眞及飼鳥等を出陳せり即ち第一室には本邦産鳥類標本は勿論松平頼孝氏黒田長禮氏其他諸氏の出陳に係る東洋及歐米産鳥類標本及本邦産鳥類にして既に絶滅に瀕せる種類並に往時鷹狩に使用せられし各種獵具及鷹狩に關する各種參考品其他鳥學會及鳥の會の出版物並に諸外國の書籍等を陳列せり而して其主標本とも見る可き物は支那及兩米大陸産鳥類の鮮麗なる標本にして人目を引き殊に鷹狩に使用せられたる諸用具の如きは往時所謂「お鷹野」氣分を彷彿たらしめたり、第三十九圖に掲げたるもの

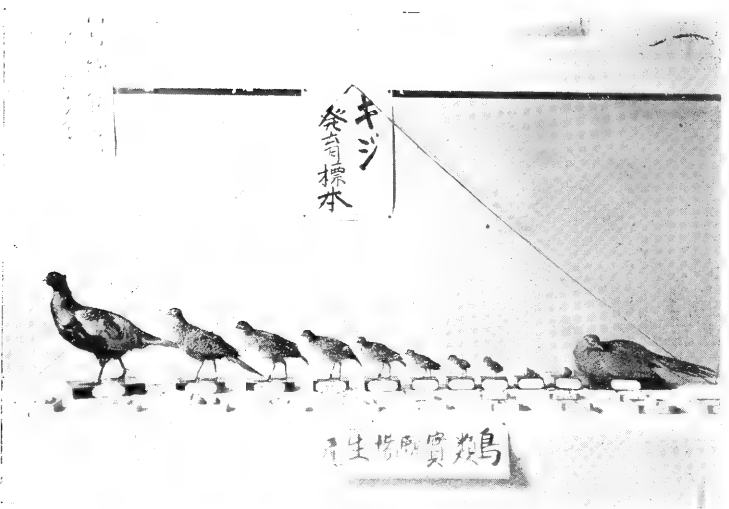


第三十九圖 鷹狩に用ふる鷹三種及附屬品

(鳥の展覽會第一室の一部)



第四十圖 農商務省出品鳥類食餌標本
 (鳥の展覽會第二室の一部)



第四十一圖 農商務省出品キジの發育標本
 (鳥の展覽會第二室の一部)

即ち之れなり同圖上方に見ゆる緒は四季によりて相異し向つて

右より春三ヶ月大緒白（櫻、梅を方に取りて繋ぐ）、夏三ヶ月大

緒赤（柳を方に取りて繋ぐ）、秋三ヶ月大緒草色（紅葉を方に取り

りて繋ぐ）、冬三ヶ月大緒紫色（松を方に取りて繋ぐ）第二室に

於ては宮内省より出陳の狩獵の圖、内務省出品に係る天然紀念

物中鳥類に關する標本圖書及寫真等何れも貴重なる参考品を陳

列し尙又農商務省の出陳に係るものはツグミ、ムクドリ、モズ

アカゲラ、キジ其他鳥類の食餌検査の成績を示せる圖（第四十圖

参照）胃及嗉囊より發見せられたる動植物の標本等にして雉の

如きは一胃中に數十種の動植物を藏せるもの等ありて觀覽者を

驚嘆せしめたり其外狩獵鳥類各種の剥製標本は狩獵家をして垂

涎たらしめ又農商務省鳥獸實驗場に於ける事業の一端を示す可

き雉、鶴、輕鳴等の發生順序を表はせる標本は秩序よく配列せ

られたり（第四十一圖参照）第三室は階上にして一般飼鳥を陳列

せり即ち其大部分は鳴禽にして眞似鳥、觀鳥等を合せ總數二百

五十二點の多きに達し特に優秀を認めらるるものに對しては本

展覽會より賞及名譽賞を授與せられたり

今名譽賞を授與せられたる出品名を記せば左の如し（順序不同）

卷毛金糸雀 一番 細金糸雀 一番

大鵠白變 一羽 雲雀黑變 二羽

瑠璃山鵠 一羽 紅風琴鳥 雄一羽

紅玉鳥 一番 連雀野路子 雄二羽

頭赤五色鳥 一羽 王紅鳥 二羽

尺八鳩 一羽 獨逸鈴鳴金糸雀 雄一羽

獨逸鈴鳴金糸雀 雄一羽 鴨鳥 一羽

九官鳥 一羽 南京軍鷄 一番

本展覽會開催中は晴雨に不係好學の士及愛鳥家諸氏の來觀せらるる者頗る多く雜沓を極めたり最終五日午後一時には特に

閑院宮春仁王殿下當會場に成らせられ暨司本會々頭以下の御案内にて會場各室を御巡覽あらせられたり。

五日午後五時半より御茶の水教育博物館に開催せる講演會は日本鳥學會々頭公爵暨司信輔氏の開會の辭に次ぎ農商務技師内田

清之助氏は幻燈を使用して「鳥類の保護」を題してその事業の如何に必要なかを力説せられ、又理學博士丘淺次郎氏は「鳥類の

進化」を題し活動寫真を利用して感興深き講演を試みられたり次で鳥類保護に關する活動寫真數卷の映寫ありたり。本會合も

亦頗る盛會にして開會前既に聽衆場に充ち八時四十分閉會せり

□第十七回總會 大正十一年六月三十日午後五時から神田一ツ橋學士會假會館に於て開會左の十三氏出席されたり(來會順)。

- 黒田 長禮 高野 鷹藏 内田清之助 葛 精一
- 石井 時彦 大岩 紀鹿 石井 金吾 鷹司 信輔
- 藤田 昌世 高木 正得 丘 淺次郎 飯塚 啓
- 寺岡 直

晚餐後會場にて左記三氏の講演ありたり

福岡縣下の二三鳥類に就て(標本供覽) 黒田長禮君(十分間)

高知縣蒲葵島の大水風鳥に就て(同上)

内田清之助君(約四十分間)

樺太産ケントガモ(ウトウ)に就て(同上)

飯塚 啓君(約十分間)

以上終りて午後九時四十分散會。

同日の出品者、陳列標本及書籍左の通りである。

種類 個數

ウトウ(雌成鳥)(樺太産) 一 一 以上飯塚 啓氏

オホミズナギドリ 一 一

同 卵 一 二 以上内田清之助氏

福岡縣下産鳥類標本 四 九

ナジロワシ卵(福岡市箱崎水族館) 一

ミカドキジ卵(東京赤坂飼鳥産卵) 一

オホミズナギドリ卵(朝鮮産) 一

ウトウ(本州産) 一

タンチャウ(灰色變) 一

ウミウ(下面白變)(府下羽田産) 一

マミチャジナイ(局部白變)(本州産) 一

キジ♂×カウライキジ♀(雄)(東京赤坂産) 一

Phasianus colchicus mongolicus

1 1

Phasianus colchicus strachii

1 1 以上黒田 長禮氏

アネハヅル(宮城縣産) 1 1 以上熊谷 三郎氏

Gould:—Birds of Asia. Vols. I—V. I. 以上鷹司 信輔氏

沼田 荷舟著 聚鳥畫譜 一

唐鳥未渡の部 一 寫錦袋 後編六

浪華浦川公左畫 畫本早眞名類初編 禽之部 弘化五戊申 年初春新刻一

鶉飼用秘傳 安永五年申二月末 一 群禽識名 一

小野職愨輯録

業餘禽錄未定稿

明治十年九月二十八日
起筆一
同年十月二日卒業

外一點

以上高野鷹藏氏出品

本會交換外國鳥學雜誌供覽

Club van Nederlandsche Vogelkundigen. 1921. I—IV; 1922. I.

The Condor, Vol. XXIII, Nos. 3—6 (1921); Vol. XXIV, Nos. 1&2.

(1922).

Le Gerfant, 1919, Fasc. I—IV; 1921, Fasc. I—IV.

The Oologists' Record, 1921, Vol. I, Nos. 1—4; 1922, Vol. II,

No. 1.

Aquila, XXVII, 1920.

寄贈圖書供覽

Buller, W. J., — Manual of the Birds of New Zealand. 1882.

以上田子勝彌氏寄贈

□蜂須賀氏通信 今年の始め幸にも *Rhinardius cellatus* (Verr.)

英語で Crested Argus Pheasant ヲ云ふ支那産(トンキン)の雄鳥

一羽を購入致しました大英博物館には僅か一番を有するだけで

最珍鳥ニ云ふ事になつて居ります、私も珍らしい物故次號に報

告を致さうと思つて居ります今歐洲大陸及米國へ色々聞き合は



蜂須賀正氏寄贈

第四十二圖 英國産雄の七面白變

せ中でその中面白返事を得る事と思ひます、その外當地の食用野鳥等について、しらべて見るに日本で正式に云へば御正月鶴の肉を食する様に當地でも七面鳥の輸入さるゝ前はクリスマスに鶴を食した記録等が有り候

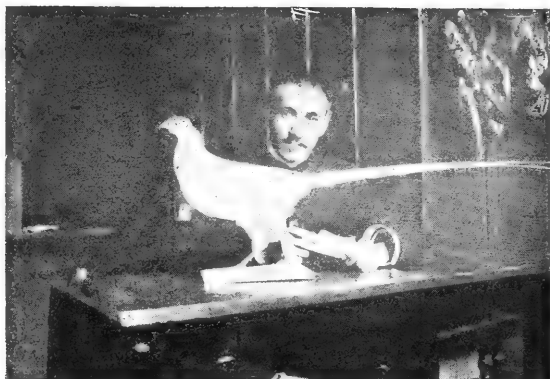
第四十二圖は同氏より寄贈の英國産雉の變りである前號口繪に追加すべきものである。因に同氏は Cambridge Natural History Society に入會せられた云ふ、

□本會々員青森師範學校の和田千藏氏より第四十三圖に掲げし如き珍らしきヤマドリ(純白變)の寫真を送られたり。

□本會々員朝鮮京城第一高等普通學校の森爲三氏は昨年四月渡歐せられたり。目下英國滯在中にて蜂須賀氏と共にトウリングの動物博物館に赴きハータート博士に面會の筈なりこの通信知人のもこに到着せり。九月九日附ロンドンよりの通信の一節を左に掲ぐ

此頃日本の氣候は如何がですかロンドンに夏でも日本の秋の様で八十度以上の事はありません朝夕は寒い位で時々 *low water* がふつて來ます白服を着るもの無く又氷屋もありません勉強にはよろしいが夏らしい氣分がしません小生は唯今ロンドンの北の *Hamstead* に居ります高臺で横の *Parliament hill* に上りますとロンドンの大部分が見えます *Keats* とか

Byron とかの詩人が居つた處で近くは *Wales* も住んで居りました誠に閑靜で健康地ですが *Natural History of Muscum* に行くに *tube* で約一時間かゝります *Museum* には *Mammals* には *Thomas* と云ふ大家



第四十三圖 會員和田千藏氏とヤマドリ雄(白變)

が居りますが鳥の方にはあまり大家も居らない様です然し鳥の研究はなかゝ盛んで *Ibis* の様な専門雜誌以外に通俗な雜誌 *The Birds of our Country* などと云ふ様なのがよく賣れてゐます又少し専門になつた *British Birds* と云ふ雜誌も相當に賣れて居ます其の外 *British Birds* の書物になると大部のもの

が幾つもあつて *Dre* がよいかわかりません又 *Migration* の調査もなかなか盛んで又標本交換會も相當に盛んの様です、然し飼鳥の事になりますと日本の方が進んで居る様です先達も蜂須賀さんに案内されて *High*

Str. Kensington の Derry & Eton Department の Zoo に参りましたが餌などはごく簡単でバナナをやつたり虫をやつたりして日本のスリエの様な進歩したものはやつて居りませんでした蜂須賀さんが店のものから聞いたのによると英國では小鳥を捕へて飼ふ事を禁じてあるさうで夫等の店のも外國からもつて來た物だとの事です標本屋にも蜂須賀さんに連れられて参りました Rosenbergs (近頃博物館の前に店を出しました)と云ふのに参りましたが假剥の鳥を分類して山の様に積んでおました極樂鳥や雉の種類の珍稀なものも随分持つてゐます Catalogue の Index をして名前を云ふと夫れをくつて出してくれます世界の Museum 相手にやつて居る様で大仕掛です次に私一人で Piccadilly の Rowland Ward に参りましたが此の方は學術研究家の標本屋でなく Sportsman & Amateur や普通教育の學校相手で虎や獅子の本剥製やら毛皮を随分もつて居りま又 Sportsman の書物も賣つてゐます銃は勿論です其の外 Holborn の James Gardner にも参りましたが山越の寧ろ小さい様なものでした然し主人は滿洲で鳥を採集した様な事を云ひました兎に角英國人は應揚で動物を可愛がり動物相手に遊ぶと云ふ性がありま博物館の庭でもサンドウキツチなかがりパンの残りを雀にやつて遊んでゐます公園などでは鳩や雀や栗鼠などを餌で呼び寄せ手の上で食はして居るのをよく見ます日本の様に人を見れば動物が直に逃げ腰とは大反對です此の點は日本の教育に於てもモット動物を可愛がり友達となる氣

分を養ふ事が肝要です英國では Royal Society に附屬して動物愛護會があります

蜂須賀さんは鳥の御研究がなかく盛んでこちらに來られてから已に單筒に一杯集めて居られます又生態的の御研究に務めて居られます又英國では生態研究が容易いです動物が人を怖れないものですから人家近くに巢を作つて居ます。

□第十八回總會 大正十一年十一月八日午後五時より秋季總會を神田一ツ橋學士會假會館に於て開會左の二十氏の出席あり

(來會順)

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 蓮沼 薫 | 内田清之助 | 櫻田 儀七 | 矢野 懋 |
| 葛 精一 | 黒田 長禮 | 大岩 紀鹿 | 鹽司 信輔 |
| 石井 時彦 | 清棲 幸保 | 丘 淺次郎 | 及部辰之助 |
| 田子 勝彌 | 小林 桂助 | 寺岡 直 | 飯塚 啓 |
| 柳澤 保承 | 岩田 巖 | 高野 鷹藏 | 久島 五郎 |

會場には馬來半島ジョホール産鳥類及巢、外國産鴨類標本並に圖書書籍の陳列あり晚餐後内田幹事より本年度の會計報告あり同氏の東京市内及附近に輸入後蕃殖せる野生的の小壽鶏の棲息地に關する報告及イカルチドリの四趾を有する珍品を供覽せられ(以上約二十分間)又田子勝彌氏は青森縣蕪島に於けるウミ

ネコの蕃殖に關する報告ありて(約二十分)續いて黒田長禮氏はミカドキジ育雛の経過を報告せられ(約十分)蓮沼薫氏は南洋(ジヨホール産)鳥類に關し標本に依りて詳細に講演せられたり(一時間二十分)午後九時半散會、同日の陳列標本及圖書左の如し

南洋産鳥類標本	九四點	鷹司 信輔氏
同 巢	七點外寫眞	同
外國産鴨類標本	一〇點外繪畫(ミカドキジ雛)黒田長禮氏	
小壽鷄及イカルチドリ(四趾を有す)標本四點		内田清之助氏
鳥類寫生	一	高野 鷹藏氏
鸚哥譜全	一	同
鸚鵡考 岡邨小謙述	全一	同
都鳥考	全一	同
宇久比須考 上下	二	同
こり空嚙	全一	同

尙最近本會交換の左の雜誌を供覽せり

American Museum Novitates, 1921—1922,

十冊

Nos. 2, 16, 17, 18, 25, 27, 30, 31, 43, 44,

Papers on Birds from Bulletin of the American Museum of

Natural History, 1916—1921 十冊

Aquila, Tom. XXVIII, Budapest, 1921.

Le Gerfant, Fasc. 1, 1922.

Club van Nederlandsche Vogelkundigen, Jaarb. No. 12, Af. 2, 1922.

The Oologists' Record, Vol. II, Nos. 2&3, 1922.

The Condor, A Magazine of Western Ornithology, Vol. XXIV,

Nos. 3,4 & 5, 1922.

Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society, No.

84, Nov., 1921. —Malayan Fishes by C. N. Maxwelll.

□はこの會設立 從來關西地方に於ては傳書鳩に關する諸會二三ありて放鳩競技會等も盛に舉行せられたるも東京に於ては未此種の企を見ざりしが今回軍用鳩調査會の岩田少佐、鳥の會々員小坂喜徳、江木善一氏等の主唱により「はこの會」設立せられ次の規定により傳書鳩の普及に努力す云々

はこの會の定め

一本會は、はとの會と云ひまして傳書鳩の趣味者の集りでその改善進歩をはかり飼料用具の研究をいたします

一會員の中から數名の役員を定めて總ての事務を扱ひます

一入會をなされる方は會員が事務所にお話し下されば役員會が御返事申上

げます

一會は毎月八日に例會をいたす外時折放鳩會競技會品評會等をして賞牌を贈ります

一入會金は金參圓で會員章を差上げ會費年金貳圓です

一此の定めのないことは總て役員會にお任せ下さい

一事務所は東京市神田區淡路町二丁目 江木善一方 (電話神田七三〇)

は　こ　の　會

〔飼鳥の飼料としての害蟲利用〕の發刊本篇は鳥類餌料として

害蟲の利用に關し農商務省農務局に於て同省の囑託員農學博

士丸毛信勝氏の調査せるものにして鳥類飼育上有益なる參考

資料なるを以て本會に於て之れを刊行せり本會員は定價 (四

十錢) の一割五分引を以て講讀せらるゝを以つて希望の方は

本會事務所宛御申込ありたし

〔倫敦動物園に新着の極樂鳥

ニウ、ギニアに布教に従事して居たダブリアウ、シ、セ、フロストは其

任地から歸國する時に自ら持參して澤山の鳥類を英京倫敦の動物園に寄

贈した。其の内には世界に其羽根にて有名な極樂鳥の奇麗な可愛い

のも見えた。此の極樂鳥にも澤山の種類があるが今茲に見られるのはキ

ング、グレーター、レッサーと拾貳ワイヤード等で特に此後者に至りて

は其兩翼下から出て先端に黃羽を有して中央は針金狀を呈せる十二本の

羽は丁度黒針金の如く見受けられて鳥が針金の上に留まつて居るかの如

き觀を呈する最奇異の形狀をなして居るのである。大翡翠オホカハセやベスキット

鸚鵡なども極樂鳥の間に伍して居た、此のベスキット鸚鵡は又特別のも

ので禿鶯に似た頭部を有して居るが肉類よりもバナナを好んで喰べる。

(中略)因云ふ極樂鳥と一口に云ふも其種甚だ多くして眞實の極樂鳥屬た

る *Paradisaea* (グレーター、レッサーを含む) の外 *Parotia*, *Cicinnurus*

(キングは此内に含まる) *Epimachus*, *Selenchides* (拾貳ワイヤードを含

む) *Tophorina*, *Diphyllodes* 等の屬中のもを云ふものにして吾博物

館に標本として次の十種十點で即ち六種極樂鳥、肩掛極樂鳥、十二線極樂

鳥、マイエル鳥、大風鳥、ジョセ鳥風鳥、赤風鳥、玉極樂鳥、黃脊雙線極

樂鳥、四肩線極樂鳥を有すれど動物園には育つた生物は居らない。之に

反して諸外國の動植物園は總て市民の恩惠で成立して市民の智識の向上

に資して居る。或は布教師或は外交官或は商人あらゆる種類の市民によ

りて其市民相互の智識普及の爲めに相當の努力と經費を投じて今日を致

して居るのである。吾日本も文化の程度を早く此の如くに進歩せしめて

行きたいのが吾人の希望である。(文化農報第六號より抄録) 在朝鮮本

會々員吉田雄次郎氏送附)

〔本號表紙畫説明 農商務省水産局にて撮影せる漁業實況の活

動寫眞フィルム中瀬戸内海に於けるイカナゴ漁「鳥持網代漁」の

一部を複製したるものにして圖中群集せる鳥類は阿比類なり。

此種類は普通群集せざる習性を有すれど小魚類の大群を見るこ
きは千餘の群をなすこと稀れならず故に此鳥群を利用してイカ
ナゴ(カウナゴ)を漁するなり。此寫眞は恐らくシロエリオホ
ハム *Colymbus arcticus pacificus* が大部分を占め居るが如し。

□入會

東京市赤坂區青山高樹町一四ノ一號 高木 正得氏(甲種)

東京市麻布區材木町五六眞田伯爵邸 清棲 幸保氏(甲種)

A.H. Paget Wilkes, M.B.O.U. 16 Holywell, Oxford, England (甲種)

東京市麴町區永樂町二ノ二高田商會業務部 生田松平氏(乙種)

東京市外世田ヶ谷池尻二三七 石井 時彦氏(乙種)

長崎縣諫早農學校 五味 義尙氏(乙種)

鹿兒島縣熊毛郡北種子村西之表三九六 八板 時彦氏(乙種)

長野縣長野市狐池一七 本多 政一氏(乙種)

東京帝國大學理學部動物學教室 小野 俊一氏(甲種)

愛媛縣北宇和郡二丁間村 岡本 景光氏(乙種)

東京市赤坂區臺町十三 三枝光太郎氏(乙種)

香川縣三豐郡豐濱町 藤村 寛氏(乙種)

廣島縣廳警察部保安課 栗柄 忠雄氏(乙種)

岡山縣 同 上

德島縣 同 上 日根 晋氏(乙種)

東京府下西巢鴨町二〇五二 櫻田 儀七氏(同)

長野縣廳警察部保安課 青木 傳藏氏(同)

秋田市橘山末無町四四 阿部 正愨氏(同)

奈良縣廳警察部 高木 重三氏(同)

島根縣 同 上 原 銀次郎氏(同)

石川縣 同 上 岡野 佐氏(同)

岐阜縣 同 上 龜山 元一氏(同)

山形縣 同 上 山川 幹治氏(同)

三重縣 同 上 鈴木茂一郎氏(同)

長崎縣 同 上 林 孝吉氏(同)

神奈川縣廳產業部農務課 大熊 新一氏(同)

福井市浪花上町五 天井幸次郎氏(同)

千葉縣長生郡本納町本納一九三六 佐久間 武氏(同)

靜岡市東草深町一ノ四三 今井 讓氏(同)

東京府下中野軍用鳩調查會 岩田 巖氏(甲種)

朝鮮京城黃金町二ノ七五 高橋 永造氏(乙種)

□轉居

在英國 23, Thurlow Rd., Hampstead, London.

山口縣立山口高等女學校

臺灣臺中高等女學校

本郷區元町二丁目六六 清輝館方

島根縣能義郡安來町

○退會

○死亡 京都帝國大學理學部教授本會々員理學博士池田岩治氏

は昨年六月逝去せられたり。

○鳥十三號正誤

誤

steyneger

apacificus

一あ八耗

こりて

鷹狩

正

Steyneger

pacificus

一八耗

こありて

鴨獵

第三圖版説明

頁 九

五八 五

六二 後より六

六二 後より五

一五八 下段五—六

本誌第十二第十三合號七十三頁イヌワシの飛翔に關する挿圖

は印刷の都合により原圖よりも縮少せしを以て七十六頁の説明

中梯尺「二十分一」を「約三十四分一」に、同「百分一」を「約百七十分一」に改む。(榎本佳樹)

「八丈鳥類二三に就て」正誤 (榎山徳太郎)

森 爲三氏

小田常太郎氏

清水善次郎氏

葛 精一氏

會田 義文氏

岡田 信利氏

頁	行	誤	正
六二	表中の所藏欄一	”	”
同	表中の所藏欄二	”	”
同	七—八	嘴峯〇・八吋以上、跗蹠一・三五吋以上	嘴峯〇・八吋(二〇耗)以上、跗蹠一・三五吋(三四耗)以上
同	九—一〇	嘴峯〇・八吋以下、跗蹠一・三吋以下	嘴峯〇・八吋(二〇耗)以下、跗蹠一・三吋(三三耗)以下
同	終より五—六	(〇・七二)一あ八耗)とりて	(〇・七二)一八耗)とありて
六三	同	<i>Sceloporus rusticola rusticola</i> Linnaeus.	<i>Sceloporus rusticola rusticola</i> Linnaeus.
同	函ぬき	ノ後ノ ヤミキ	ノ四キ加フ
六六	同	<i>semitorquus</i>	<i>semitorquus</i>
六八	同	<i>Turdus celanops</i>	<i>Turdus celanops</i>
同	同	低狀	紙狀
同	同	<i>alpehrosa</i>	<i>pulpehrosa</i>

本誌第十二、十三合號「山形縣村山地方鳥類方言」正誤

誤 正 頁 行

溫 泉 鑛 泉 一四九 上 段 一四

イツパイ エツパエ 同 同 一九

サギ サギ 同 同 六一

ワダリノ ツコ 一五一 同 六

ノ コ	ノ ツ コ	同	同	八
マギガラ ス・マゲ (マゲと は……)	マギガラ ス(マギ とは……)	同	下 段	一三
ボダシロ	ボダシロ	一五二	上 段	二
		(石澤健夫)		

拙稿「八丈島産鳥類二三に就て」は上半のみ前號に掲載せしも其後余が該島に渡行するに及び後半は増補改纂せざるを得ざる事となり且つ表題に相應しからざる内容となりたるを以て他日稿を改めて上掲すべし、依て前號の表題下に(上)に附せしは抹殺し末尾の(未完)も取除くべきものとす (靱山徳太郎)

□臨時刊行物第九篇正誤表頒布 「邦領南洋諸島産鳥類」正誤表追加は本會より直接發送せし分には各々添包せしも書籍店を通じて購求ありたる諸方には届兼ねし事もあるべし、右の正誤表追加希望者(會員外にても差支なし)は直接著者迄用込るれば配布を受くべし、因に上製及び並製の別ありて各方向乍ら同質の用紙に印刷せられ切抜貼附に便ならしむる様製しあれば申込者は所蔵書の別を可成申添ありたき事、著者の現住地は東京府下八丈島大賀郷村(特に郵税其他不要)。(靱山徳太郎)

□本會々則の變更 評議員會の決議により左の通り本會々則を變更せり
第六條二項中 「定價の三割引」とあるを 「二割引」に改む
第七條を左の通り改む

第七條 本會に入會せんとするものは住所、氏名及び職業を記載し本會

事務所に申込むべし但し甲種會員の入會には會員二名以上の紹介を要し入退會の決定は評議員會の決議による
甲種會員に入會せるものは入會金五圓を納むべし
□一昨年六月廿六日府下羽田にての鷹狩の活動フィルムの一部を第四十四圖に出す(第十二、十三號一五八頁参照)



第四十四圖 オホタカがゴキサギを捕へたる處

成 完 部 全 版 改 訂 增

閱生先魁鳥飯 士博學理

著生先助之清田内

版 改 訂 增

卷 下 上 說 圖 類 鳥 本 日

(錢八拾稅郵 圓八各價正)

りせ新一目面りよに訂改の項要記下

- (す致一に録目類鳥編會學鳥本日)正改の名學 1
加追の種亞新並類種の數多るたれらせ見發後行發版初 2
入挿の圖生寫類鳥るな巧精ふ伴に右 3
補増訂改の部說總他の其録目書文 4

編 續 說 圖 類 鳥 本 日 增 補

(錢八拾稅郵 圓七金價正)

す加追を種十四約類鳥產灣臺るたれらせ見發後行發版初

元 版

店 書 社 醒 警

町 張 尾 座 銀 京 東

成 完 部 全 版 改 訂 增

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助 著
第一篇 鷓類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助 著
第二篇 海産保護鳥類圖說

原色版三枚
 定價四錢
 附錢

理學士 黑田長禮 著
第三篇 世界の鴨

絶版

理學士 黑田長禮 著
第四篇 世界の雁と鵠

絶版

仁部富之助 著
第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

コロタイプ版一枚
 寫眞版挿畫數個
 定價金卅五錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮 著
第六篇 臺灣島の鳥界

附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性

原色版口繪一枚
 寫眞版挿畫數個
 定價四拾錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮 著
第七篇 鮮滿鳥類一斑

原色版口繪一個
 寫眞挿畫十數個
 定價一圓五十錢
 郵稅十二錢

理學士 黑田長禮 著
第八篇 千鳥類の「渡り」

寫眞版口繪二葉
 定價七拾五錢
 郵稅六錢

榑山德太郎 著
第九篇 邦領南洋諸島産鳥類

原色版三枚
 地圖二葉
 挿畫數個
 定價六圓半
 郵稅十二錢

賣 捌 所 日 振 本 橋 區 十 軒 店 七 番 裳 華 房

■ 日本鳥學會創立十週年紀念出版 ■

日本鳥學會編纂

日本鳥類目錄 (英文)

A Hand-List of the Japanese Birds.

編輯擔當

阿比目ヨリ鶴型目迄七日	理學士 黒田 長 禮
鷓鴣型目ヨリ佛法僧目迄三日	理學士 鷹 司 信 輔
燕雀目	獸醫學士 内 田 清 之 助

内 容

現時知ラル、全日本(各殖民地ヲ含ム)産鳥類ノ全種類ヲ含ム目錄ニシテ之ヲ最近ノ分類ニ從テ排列セリ其内容ハ
學名及其ノ原記載掲載ノ書目 英名
學名ノ重要ナルしのにむ 和名及其ノ重要ナルしのにむ
從來知ラル、本邦内ノ詳細ナル分布 索引

體 裁

菊版 用紙泊來上質百斤 紙數約百六十頁
並製 表紙こーでりあ假綴 上製洋布表紙天金脊及角皮

出 來 期 日

大正十一年三月 日

出 版 部 數

上製百部 並製三百部 再版セズ

實 價

並製金三圓 上製金五圓 郵稅十二錢

注 意

出版遲延ノ所漸ク本月製本成ル
本會會員ニ限り一割引(會員ハ直接本會へ申込ヲ乞フ)
臨時刊行物ニ非ザルヲ以テ甲種會員ニモ無代配布ヲナサズ
出版部數僅少ナルヲ以テ豫メ本會又ハ賣捌所へ御申込ヲ乞フ

賣 捌 所 裳 華 房

日本橋區十軒店町
振替東京一〇七番

■ 日本鳥學會出版 ■

農商務省農務局編纂

鳥類調查報告第一號

雀類ニ關スル調査

本編ハ農業上最重大ナル關係ヲ有スル雀類ニ關シ農商務省ニ於テ
内田清之助 仁部富之助 葛精一三氏ノ調査セル所ニシテ調査ノ範
圍各般ニ亘リ邦産鳥類ニ就キ最初ノ生態學的並ニ應用鳥學的研究ト
稱スベシ

内 容

- 一、雀ノ蕃殖 二、雀ノ食物 三、雀ノ農作物ニ與フル被害
四、雀ノ驅除及雀害ノ豫防 五、雀ノ有害益兩方面ニ關スル考察
六、結 論 七、入内雀

體 裁

四六倍判 本文約四百五十頁 着移版三枚 寫真版五枚
統計圖十六個

定 價

四圓五十錢 郵稅十八錢 本會員ニ限リ定價ノ一割引

賣 捌 所 裳 華 房 東京日本橋十軒店

日本鳥學會規則摘要

第二條 本會事務所は東京帝國大學理學部動物學教室内に置く

第四條 本會は前條の目的を達する爲め評議會の決議を経て隨時種々の事業をなす

一 當分一年に二回雜誌「鳥」を出版すること

一 臨時刊行物を刊行すること

一 毎年春秋二回會合し鳥類に關する講演談話をなし同時に鳥類に關する圖書標本其他の展覽會を催す

一 鳥學的探檢を舉行すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員と乙種會員の二とす

一 甲種會員は會費として一箇年金五圓を納むること

一 乙種會員は會費として一箇年金二圓五十錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌「鳥」及臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌「鳥」を配布す臨時刊行物は配布せず定價の二割引を以て講讀することを得

會頭 公 爵 鷹 司 信 輔

幹事 内 田 清 之 助

評 議 員

理學博士 飯 塚 啓 理學博士 丘 淺 次 郎

黑 田 長 禮 子 爵 松 平 頼 孝

大正十二年三月二十九日印刷

大正十二年三月二十六日發行

定價金 壹 圓

禁 轉 載

編輯兼 發行者 木 下 憲

東京市日本橋區兜町二番地

印刷人 神 谷 岩 次 郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東 京 印 刷 株 式 會 社

東京市日本橋區兜町二番地

發 行 所

帝國大學理學部 動物學教室內

日 本 鳥 學 會

振替口座東京六五九九番

發 賣 所

東京日本橋區 十軒店町

裳 華 房

振替口座東京一〇七番

“TORI” THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. III. No. 14. March, 1923.

Frontispiece :

Two rare hybrid ducks (Pl. V.) By *N. Kuroda*.

Some birds exhibited in the Ornithological Exposition held to commemorate 10 years' lapse since the establishment of the Society (Pl. VI).

Contents :

Birds in the vicinity of Shizuura, Suruga (II). By *N. Kuroda*.

On the Migration of some Waders near Wakayagi, Prefect. Miyagi (I). By *S. Kumagai*.

Notes on birds from Ōshima, Prov. Izu. By *T. Momiyama*.

History of Birds (I). By *K. Wada*.

ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN.

c/o Science College, Tokyo Imperial University.

President.

PRINCE N. TAKATSUKASA.

Secretary.

S. UCHIDA, C.F.A.O.U.

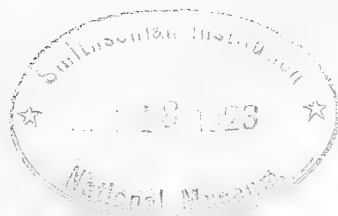
Committee.

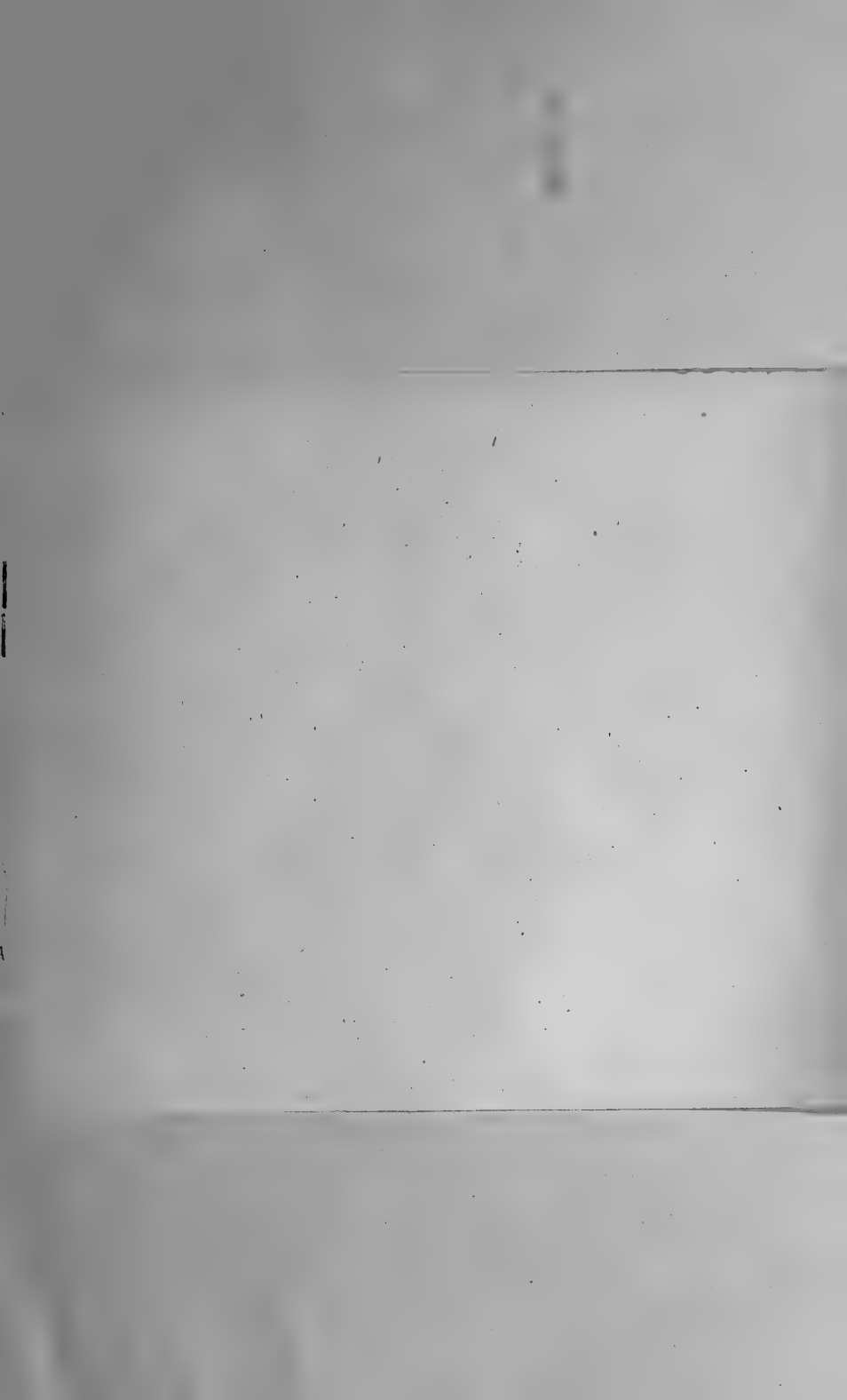
The President, The Secretary, Exofficio.

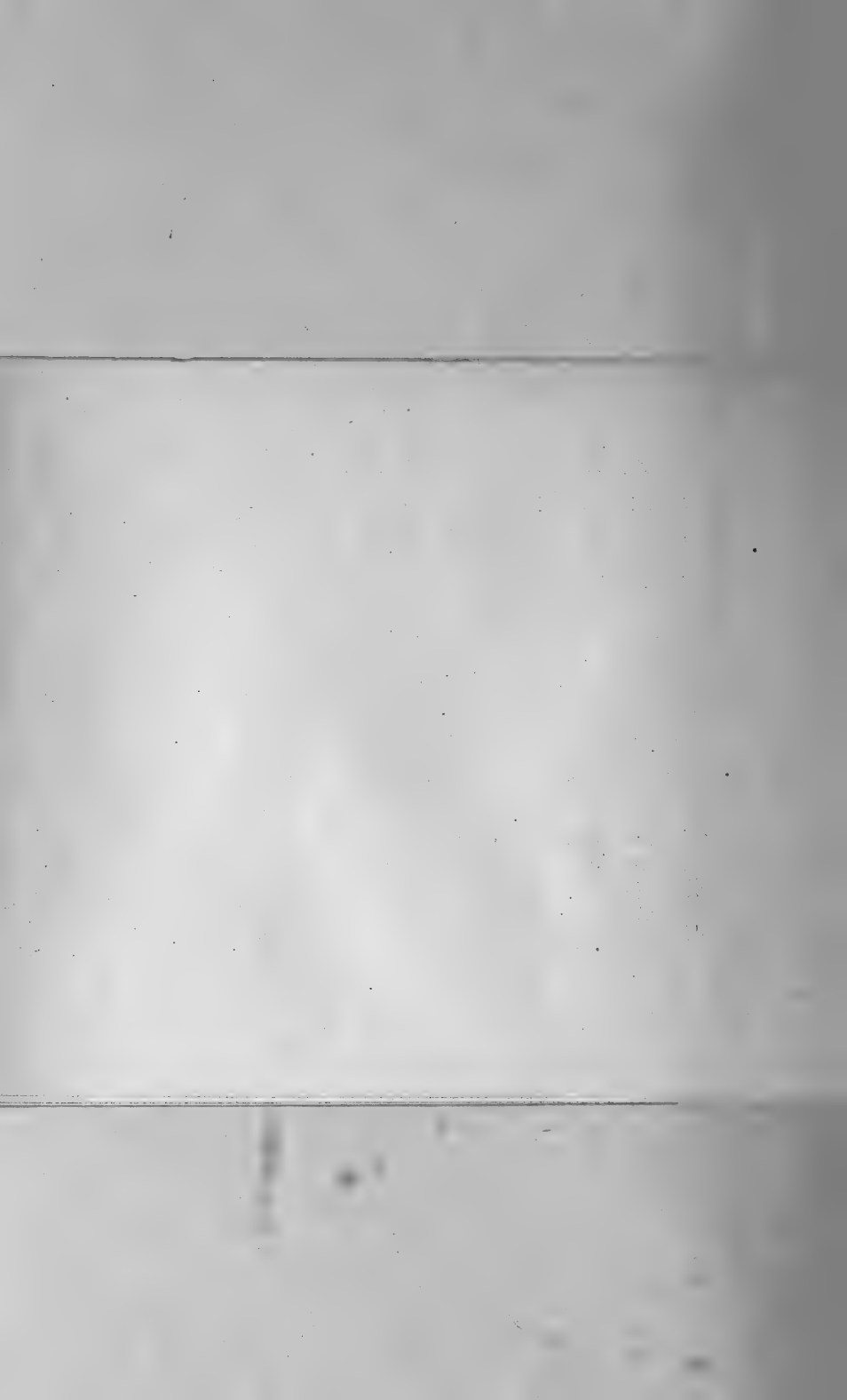
A. IZUKA, *Rigakuhakushi*.

A. OKA, Ph. D. *Rigakuhakushi*.

N. KURODA, F.M.B.O.U., H.F.A.O.U. VISCOUNT Y. MATSUDAIRA.







一 三四名

五 四四名

一 八八名

山 川 幹 治

吉 田 北 男

乙種

甲種
内 計

合 計

山形縣 小石川 表町 四三
警察 係 安課

八板時彦

○矢野戀三

○吉村福三

○山階芳麿

○柳澤保承

○山添輝夫

○吉田雄次郎

○吉田倉狂聖助

○吉田雙之助

○吉原要二雄

○山内繁三郎

○矢澤米寬夫

○矢澤寬宗一

○山田信一

○山田篤

○矢野宗一

○矢野宗一

鹿兒島縣毛郡種子西之表

東京市外大井町字山中四二七

一 橫濱市青木上反町四八

一 東京市外上目黒村五

三 東京市外代々木山谷二八

一 山東省青島千島町

*of Sr. Sr. Higa 2a., Dolores #29 Mexico
D. F. Mexico*

六 朝鮮京城南山町一

一 大連市春日町番外地洗兵營

一 府日暮里町七六

一 岐阜縣南長森村細柳一五〇

八 小石川區大塚町

長野縣本市女子師範學校

一 府上下灘谷一四

目黒區林業試驗場

新潟縣長岡市東坂

四谷區大番町八

○高松甚兵衛
○高知彦樂
○高木重三得
○高木重三
○高橋永造
○坪井重一

柳木縣芳賀郡山前村
橫須賀海軍航空隊
赤坂區青山高樹町四一
奈良縣警察部保安課
京城府黃金町二七七
岡山縣警察部保安課

○内庭清之助
○馬庭軍治
○上野海忠
○内野吉甫
○歌野海忠
○内野吉甫

朝鮮釜山府實永町二七七
赤坂區青山北町七七一
大分縣速見郡八坂
福島縣福島市柳町三三
長崎縣對馬縣原中學校
福岡縣福岡市博多馬場新町六增崎方

W

脇田山三彌
和田千三彌
和野山三彌

青森縣師範學校
福岡縣福岡市博多馬場新町六增崎方

16 Holywell, Oxford, England.

X

A. H. Paget Wilkes.

千葉縣長生郡本納町 一九三六

東京府下西巢鴨町 二〇二五

三重縣桑部保安課

赤坂區臺町 三一

東京市小石川區高田豐川町 二四二

臺灣省中等女學校

千葉縣長生郡二宮村本郷押日

千葉縣桑部保安課

北海道廳產業部

盛岡市川原町 一〇一九

山口縣吉敷郡小郡町

愛媛縣伊豫郡南伊豫村八倉 五五

鳥根縣能義郡安來町

三重縣安濃郡片田中田 四四六

鳥取市栗谷町 二

德島縣德島市徳島會所町

兵庫縣明石市右手塚町 五一

佐久間 武七

櫻田 儀一

鈴木 茂一

三枝 光大

鈴木 文五

清水 善次

齋藤 武夫

三枝 正治

齋藤 春治

砂子 澤龜次郎

末吉 猪助

重松 孝行

曾田 義文

庄村 助太郎

白根 豊治

佐藤 實三

佐藤 三次

三 岐阜市外長良村東尾鶴飼

山梨縣養部保安課

六 神戶市加納町一ノ

八 大阪市北區天神橋四ノ

千葉縣夷隅郡上野村荒川小學校

廣島縣廣品郡立高女學校

福島縣石城郡赤井村西小川

廣島縣立吳中學校

臺北臺灣總督府農事試驗場

朝鮮京城博物館

沖繩縣首里町一ノ

5

末永貞治郎

坂本保重

坂井辰三

酒井彌之助

齋藤三郎

佐藤龜一

關東八

妹尾惠亭

素木得一

○ 下山誠一

○ 尚景

大熊新一

岡野景光

岡本景之助

及部俊一

○ 小野

京都帝國大學動物學教室

○ 東京府多摩郡戸塚町諏訪六

愛媛縣北字三郎三間村

石川縣養部保安課

神奈川縣產栗部農務課

埼玉縣立高等女子學校

神戶區河臺東紅梅町 二

兵庫縣川邊郡伊丹町

府下高田大字司谷四一八

福井縣福井市牛車町四

大連市大町神戶五十五號

U. S. Nat. Mus., Washington, D. C., U. S. A.

靜岡縣藤山

三重縣久屋町歩兵第五十一隊

淺草區小島町四五

山口縣立山口高等女學校

小石川區小日向臺町三〇一七

小石川區小日向臺町一〇四四

0

赤坂區福吉町黑田侯爵邸內

東京帝國大學農科大學植物學教室

福井縣水産試驗場

小澤國平

○岡田高平

岡田利衛

大岩絶喜

岡賀一

大賀一

○ H. C. Oberholser.

大澤保

大場四平

○大久保忠春

小田常太郎

○小野安善

○小丘淺次郎

中島利一郎

中島庸三

野村實一

關東州旗原市博物館
 廣島市南竹屋町榎小路
 朝鮮大邱普通學校
 秋田縣仙北郡花館村農事試驗場陸羽支場
 東京府下在原郡田谷村池尻二一四
 仁部富之助
 中野右衛門
 倉宗雄
 勝

N

長野縣長野市新田町
 小石川區水道町九
 場下南多摩郡多摩村大字連光寺農實驗場
 東京府下在原郡黒目黒村字上黒柳五〇二
 靜岡縣磐田郡西淺村淺岡
 朝鮮京城龍山漢江通 一一
 本郷區駒込西片町一〇
 京橋區石町三 一
 水野太誠
 〇 榎山徳太郎
 〇 松永安徳衛
 都田甚三郎
 溝口乙治郎
 〇 松平康一邦
 〇 間島謙一
 三井高遜
 水野高平
 上井高遜
 水野高平
 長野縣長野市新田町
 東京府下在原郡田谷村池尻二一四
 秋田縣仙北郡花館村農事試驗場陸羽支場
 朝鮮大邱普通學校
 廣島市南竹屋町榎小路
 關東州旗原市博物館
 勝
 倉宗雄
 中野右衛門
 仁部富之助
 永井靖吉
 水野高平
 上井高遜
 三井高遜
 〇 間島謙一
 〇 松平康一邦
 溝口乙治郎
 都田甚三郎
 〇 松永安徳衛
 〇 榎山徳太郎
 水野太誠
 一 森田淳
 三 森島

1243 N. Clark st., Chicago, Ill., U. S. A.

大阪府立醫科大學動物學教室

遊路市外町坪村(目)下在外

南滿洲鐵道株式會社 長春商業學校

松川 勉
○ 松平 賴孝

小石 久堅 町四
久堅 町四

M

○ 清棲 幸雄
栗栖 忠雄
龜山 元俊

麻布區 木田 眞伯 町五
眞伯 町五

久保 山元
久保 山知俊

慶應義塾 警察部 安部 課
慶應義塾 警察部 安部 課

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

福岡市 外箱崎 水族館
岐阜縣 警察部 安部 課

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

名古屋市 東區 西葉 町二
西葉 町二

小原 理一
柏富 道雄
久谷 伸次郎

東京府 下西 鴨二 五二
東京府 下西 鴨二 五二

久谷 伸次郎
久保 山元俊
久保 山知俊

大阪府 北區 上福 島一
上福 島一

久保 山元俊
久保 山知俊
栗田 莊重

和歌山縣 那賀郡 小倉 村
和歌山縣 那賀郡 小倉 村

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

東京府 下西 西原 接調 查所
東京府 下西 西原 接調 查所

久保 山元俊
久保 山知俊
栗田 莊重

青森縣 陸奥 勤業 課
青森縣 陸奥 勤業 課

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

廣島縣 廣島市 新川 町二
廣島縣 廣島市 新川 町二

久保 山元俊
久保 山知俊
栗田 莊重

岡山縣 上 高島 村 祇園 七
岡山縣 上 高島 村 祇園 七

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

廣島縣 廣島市 新川 町二
廣島縣 廣島市 新川 町二

久保 山元俊
久保 山知俊
栗田 莊重

廣島縣 廣島市 新川 町二
廣島縣 廣島市 新川 町二

栗田 莊重
小原 理一
柏富 道雄

廣島縣 廣島市 新川 町二
廣島縣 廣島市 新川 町二

葛 精 一

本郷區本町二ノ六六清輝齋

黒田保彌 吉

朝鮮京城西大門ノ二四ノ六

○兼常 富鑑

山口縣阿武郡佐々並村二五

○岸 喜

臺灣總督府研究所化學部

○風 鐵 吉

臺南博物館

○桂 長次郎

山口縣長府

○川 孫治郎

福岡縣中立學明善校

○近 藤他喜

本郷區龍岡町二七

米 山上 吉

神田區五軒一

河 上 才次郎

熊本縣立高等女學校

○熊 谷 三郎

宮城縣栗原郡若柳町五五

○小 林 桂太助

横濱市山下三二

○黒 川 義太郎

下谷區上野動物園

○黒 田 長禮

赤坂區吉町

K

今井 讓彦

静岡岡市東草深町一三四

石井 時彦

名古屋重帷第三隊一中隊

總 區 永 樂 町 二 丁目 二 高 田 商 會 業 務 部

芝 區 新 檀 田 町 九

日 本 橋 區 龜 島 町 一 八 〇

東 京 府 下 町 野 中 寺 下 屋 敷

東 京 市 外 中 區 澁 谷 一 〇 一 青 雲 會 館

福 岡 縣 立 岩 松 中 學 校

鹿 兒 島 縣 出 水 郡 高 尾 野 村

香 川 縣 高 松 市 下 橫 町 五

神 奈 川 縣 小 原 中 學 校

長 崎 縣 立 長 崎 中 學 校

東 京 府 北 豐 島 郡 高 田 町 大 字 高 田 一 三 六 三 〇

I

德 島 縣 警 察 部 保 安 課

長 崎 縣 警 察 部 保 安 課

島 根 縣 警 察 部 保 安 課

長 野 縣 長 野 市 狐 池 一 七

丹 波 國 船 井 郡 下 知 村 字 安 酒 里

〇 生 田 松 平

池 田 信 一

石 川 金 吾

〇 岩 田 巖

石 澤 健 夫

池 村 鐵 太 郎

石 澤 鐵 太 郎

石 川 章 三 郎

伊 藤 和 貴 郎

伊 東 育 太 郎

伊 敏 塚 啓

日 根 孝 夫

林 孝 夫

原 銀 次 郎

本 多 政 一 巖

晴 披 巖

富山市北古手傳町 五

The Lodge, Selwyn College, Cambridge, England

淡風堂下町 一ノ一 吹浪社

東京府下白塚五二七五二七五 左井左一郎方

臺灣臺北師範學校

府下野中町 二七 七

千葉縣長生郡鶴核村

H

長縣早慶學校

關崎市神金町 六

岐阜縣加茂郡東白川村

G

香川県三豊郡豊濱町

東京府下大崎町字上大崎中丸四四四四

兵庫縣内務部吉原課

高知市雜喰場 四七

埼玉縣秩父郡槻川村大字坂本二四四四九

邊見十郎

○蜂須賀徳氏

濱田徳次

○蓮沼

堀川安市

○林保吉

林壽祐

五味宗俊

五權斗

○五

藤村寛

藤波龍惠

○船津虎雄

藤田昌隆

福島

英

○藤木常隆 京都市祇園團圓山公園村井長樂館内

F

○榎本佳樹 和歌山縣伊都郡高野山三七四

E

○土居寛暢 朝鮮新義州青島通學校

D

千葉經三郎 長崎縣東彼杵郡竹松尋常高等小學校

C

青木福次郎 栃木縣日光町山内

天井幸六藏 福井市浪花上町五

安部幸傳 福岡縣固赤坂

青木傳六藏 長野縣警察部保安課

荒川五郎 秋田市北町九新町四

阿部正信 秋田櫛山末臺町四四

阿東榮信 新潟市白山浦一丁目三〇三

A

○大正十一年一月
甲午年十二月
會現員在

會員名簿

孝 平 松 子
 禮 長 田 黑 爵
 郎 次 淺 丘 爵
 啓 塚 飯 士 理學博士
 之 田 內 爵
 助 清 信 司 公
 輔 信 司 爵

評議員
 幹事
 會頭
 公 爵
 司 爵
 信 司 爵
 輔 信 司 爵

甲種會員(員)子以子細綴ス

第九條 本會會評議員會頭幹事及及會員ノ互選ルヨニ評議員若干名

第八條 本會會頭會名幹事名ヲ置ク

甲種會員ニ入會セラルモルハ退會ハ評議員ノ入會ニ限リテ

第七條 本會會頭會名幹事及及會員ノ住所ハ氏名職業ヲ記載シテ本會事務所
 ニ申込ムルモ但シ甲種會員ノ入會ハ評議員ノ決議ヲ要スルコトヲ要ス

- 乙種會員ハニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス但シ種會員ハ臨時刊行物ノ種會員ニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス及臨時刊行物ヲ配布ス
- 第六條 甲種會員ハニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス及臨時刊行物ヲ配布ス
- 乙種會員ハニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス但シ種會員ハ臨時刊行物ノ種會員ニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス及臨時刊行物ヲ配布ス
- 一 甲種會員ハニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス及臨時刊行物ヲ配布ス
- 一 甲種會員ハニニ雜誌「鳥」ヲ配布ス及臨時刊行物ヲ配布ス
- 第五條 本會々々分ヲ甲種會員トシテ年々金圓五拾圓ヲ納ム
- 一 鳥學の探検ヲ行ハスルコト
- 二 關スル圖書展覽會其他ノ展覽會ヲ催ス
- 一 毎年春秋會同ニシテ鳥類ニ關スル講演會ヲ行フ
- 一 臨時刊行物ヲ出版スルコト
- 一 當分一年ニ一回「鳥」雜誌ヲ出版スルコト
- ノ事業ヲス
- 第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議員ヲ選出シ決議ヲ行フ
- 一 鳥類ノ愛護ノ思想普及セシメテ鳥類ノ保護ヲ促進スルコト
- 一 鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促進スルコト
- 一 鳥類ニ關スル趣味ヲ有スルモノヲ惹起スルコト
- 第三條 本會ノ目的左ノ如シ
- 第二條 本會ノ事務ハ東京帝國大學理學部動物學部教育ニ委ニス
- 第一條 本會ハ日本鳥學ト稱ス

日本鳥學會規則

Handwritten text, possibly a title or header, located in the upper left quadrant of the page.

A vertical column of handwritten text, possibly a list or index, located in the middle-left section of the page.

"TORI" THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. III. No. 14. March, 1923.

With vol. 3, no. 14.

日本鳥學會
會員名簿
大正十一年一月現在

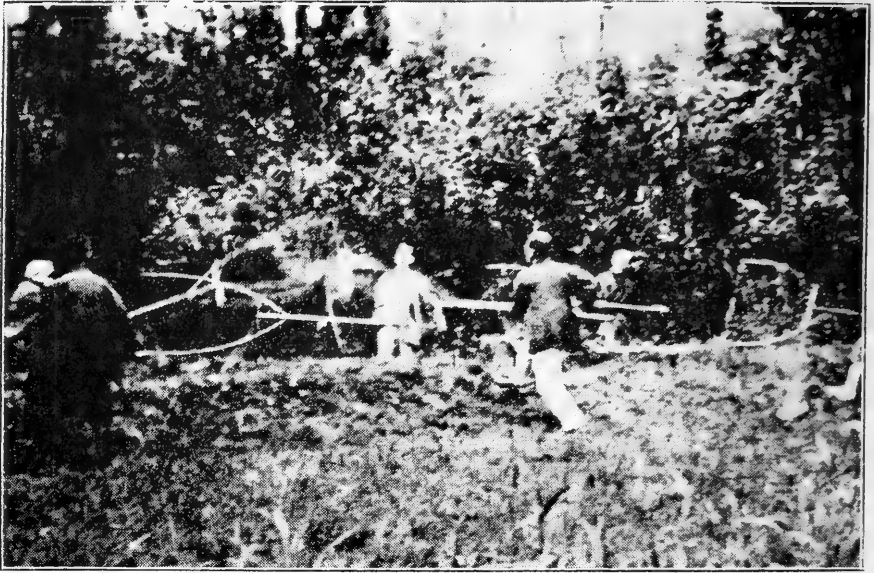
Committee.
The President, The Secretary, Exofficio.

A. IZUKA, *Rigakuhakushi.*

A. OKA, Ph. D. *Rigakuhakushi.*

N. KURODA, F.M.B.O.U., H.F.A.O.U. VISCOUNT Y. MATSUDAIRA.





鳥

第 第
十 十
三 二
號 號

行發月三年一十正大

會學鳥本日

「鳥」 第三卷第十二號—第十三號目次 (本會創立十週年記念號)

口 繪

本邦鳥學の發達に貢獻せる鳥學者肖像(第三圖版)
 英吉利國の雉類(第四圖版)

蜂須賀正氏マサツジ氏原圖

論 說

ミカドキジに一新屬の提唱

理學士公爵
 子爵

鷹司信輔

鷗の換羽に付て
 駿河靜浦附近産鳥類(上)

理學士
 子爵

松平長禮

ヲガサハラマシコに就て
 八丈島産鳥類二三に就て(上)
 イヌワシの飛翔に就て

理學士公爵

蜂須賀正氏

四國産鳥類の調査
 逆斑卵に就て
 再び大盜賊鷗に就て

理學士公爵

藤田昌世

講 話

カリフォルニア啄木鳥の奇習
 英吉利國の雉類について(口繪附)

理學博士

丘淺次郎

雜 纂

青森縣産鳥類目錄
 隱岐島の鳥類
 長門竹々並地方の鳥類(上)
 タマシギの習性

法學士
 子爵

和田義文

ハチクマ及サシバに就て
 信州にて獲たる二種の鳥類
 山形縣村山地方鳥類方言
 宮城縣下鳥類雜記
 ツバメに就て一觀察
 コチドリ(P)の巢及び卵

子爵

池田孝郎

質 疑 應 答
 九 件
 十 四 件
 (内田清之助・黒田長禮回答)

武齋藤彦榮



本邦鳥學の發達に貢獻せる鳥學者肖像

第三圖版說明

1. Ph. T. von Siebold. 氏は一八二三年より一八三〇年に至る間我國に滞在し其の間採集せる標本はライデンの Temminck 氏に送附し同氏により一八二七—一八三六年の間に發表せられ又氏の日本動物に關する名著 Fauna Japonica 中の鳥類の部は Temminck 及 Schlegel 兩氏(一八四五—一八五〇年)によりて執筆せられたり。
2. Captain T. W. Blakiston 氏は一八六二—一八八六年に至る間主として北日本各地の鳥類採集に従事し又本邦産鳥類の目錄其他を發表し當時の Pryer 氏と同時代の著名なる採集家にして且つ野外觀察者なり。
3. Dr. Leonhard Stejneger. 氏は一八八六—一八九五年に至る間日本各地の鳥類の研究に従事し多數の最重要なる論文を發表せり博士は瑞典人にして北米合衆國立博物館爬蟲兩棲類學部長として其名あり我國にも來訪せしことあり今は已に隱退せらる。
4. 故理學博士飯島魁氏 本邦人として最初の鳥學者にして且つ本會第一回の會頭たりしこと人の知る處なり本會の今日あるは全く博士の恩惠に外ならず略歴は「鳥」第十一號及動物學雜誌第卅三卷、第三百八十九號にあり。
5. 故波江元吉氏 本會評議員にして一八八六年撰ばれて米國鳥學會外國會員たり明治二十二年より大正二年迄の間鳥類に關する研究の動物學雜誌に發表せられしもの尠からず 略歴は「鳥」第二卷第七號及動物學雜誌第三十卷第三百五十七號にあり。

4

1



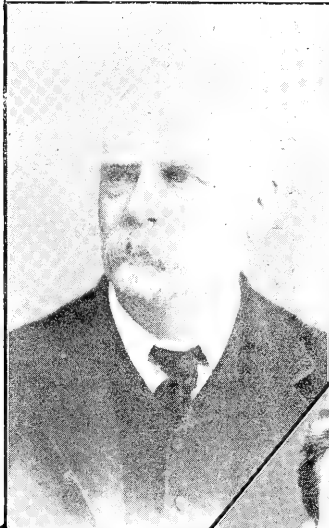
3

2

5



6



9



8



7



10



6. Mr. Alan Owston. 英國人の實業家にして我横濱に永住し有名なる採集家なることオーストニなる種名の多きによりても知らるゝ處なり。傳記は動物學雜誌第二十八卷第三百二十八號にあり。
 7. Outram Bangs. 北米ハーバード大學比較動物學博物館にありて東洋鳥類に精通し我國にては一九〇一年以後樺太及琉球の鳥類を調査發表せり。
 8. 故醫學士小川三紀氏は飯島博士に次ぎ日本鳥類研究者として著名なり其論著は明治二十九年より同四十年までの動物學雜誌及同彙報に發表せらる。略歴は動物學雜誌第廿卷、第二百四十二號にあり。
 9. Dr. Ernst J. O. Hartelt. 獨逸人にして英國トリング動物博物館にありて舊北區の鳥類研究を以て著明なる學者なり氏の舊北區鳥類に關する著書には我國に産する種類多く含有せらる。世界的鳥學者の一人なり。
 10. Prof. Dr. A. J. Einar Lönnberg. 瑞典ストックホルム動物博物館長にして嘗て飯島博士採集の樺太産鳥類に關する有益なる論文を我が理科大學紀要第廿三册、第十四編(一九〇八年)に發表せり。
- 以上諸氏の外、鳥學者として Pallas, Kitzlitz, Seeborn, Cassin, Swinhoe, Dresser, Ogilvie Grant, Ingram 等の諸氏並に採集家として Snow, Jouy, Holst 等の諸氏は我國鳥學の發達に大なる貢獻を爲したる人なり。

PLIV.

金鶏と銀鶏との雜種



英國產雉と家鷄との雜種

金鶏(雄)と麗鷄(雌)との雜種



英國產雉雌の羽毛雄變

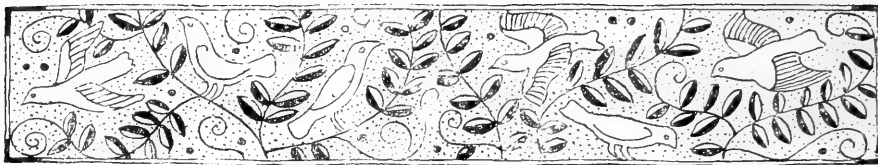
蜂須賀正氏原圖



英國產雉(白變)

英吉利國の雉類

(雜種及變り)



論 說

ミカドキジに一新屬の提唱

理 學 士 公 爵 鷹 司 信 輔

理 學 士 黒 田 長 禮

本年は本會創立十週年に相當するを以て其記念として茲に臺灣特産ミカドキジ (*Calophastis mikado* Ogilvie-Grant) の屬名を左記の如く新設せんじす

NEOCALOPHASIS, gen. nov.

特徴——跗蹠の後面は常に網目状を呈し、雄の距は老鳥ならざるものにありても極めて能く發達し、下背を横ぎる白帯なく、雄は體に赤褐色或は栗色の部分全くなし。

On a New Genus Proposed for Mikado Pheasant of Formosa.

By

Prince Nobusuke Takatsukasa, *Riyakushi*

and

Nagamichi Kuroda, *Riyakushi*.

NEOCALOPHASIS, gen. nov.

Diagnosis.—Hind aspect of tarsus reticulated; spur in male well developed even in immature bird; no white band across lower back; no reddish-brown or chestnut in plumage of male.

Type of the genus—*Calophastis mikado* O.-Grant of Central Formosa.

鷗の換羽に付て

子 爵 松 平 頼 孝

本會の十週年に會し應司、内田兩君より之に投稿せよとの御依頼を受け鷗の換羽並に其習性に付き少しく爰に述べ様と思ふ

鷗の生殖羽が完全に成るのは五位鷺の場合と同じく三年位のもので有らうか云ふ疑を起し之を確めるには先づ其の年に生れた鷗を飼つて試験して見様を考へた、其の爲に鷗の生擒を試みた最初は一般の漁夫が用ふる「ワナ」を以てした此の「ワナ」は竹の彈力を以て一方の糸の輪が鳥の首を締める様に出來て居る機械で之では餘り好結果を得なかつた、此外色々方法を講じたが當年の鳥ばかりを捕獲するに云ふ事は中々困難で止むを得ず銃を以て打ち落し比較的瘡の軽いものを撰ぶ事にした。即ち當年の鳥と思はるゝものに向つて射撃し翼を傷けて捕獲するので其の瘡を受けた方の翼は之を切斷し「コカイン」を付けて痛みを止め藁灰を瘡口に付け繃帯を施して置いた。鷗は思つたより丈夫な鳥で此の怪しい外科の手術でも直に元氣を回復し翌日から餌を食ふ様になる。

先づユリカモメを始めこしウミネコ、カモメ、ワシカモメ、オホセグロカモメ、シロカモメ等を飼養した。飼養場は金網の籠を用ゐる幸に庭に三百坪程の池が有るから之に放ち幾分天然に近い自由な生活を與へ餌としては魚類の臟腑、魚類に少許の鹽を附けたもの等を救した。

此等の鷗は皆非常に健康で二三羽のユリカモメが臆に取られた丈である。

此等の鷗の数は確實な報告を作る稍其の少き感はあるが今迄の觀察せる所を此處に序述して見る事とする

ユリカモメ 當年子は其第二年目には未だ左程の變化を呈せず脊部には茶褐色の羽毛を存して居る第三年目の五月頃頭部に少し

く黒色の羽を生ずるも其の先端には未だ白色で有る第四年目は四月下旬二頭に黒色が表れ此度は純然たる黒色の成鳥の羽色を呈する様になる同時に嘴は跗蹠も完全した生殖色彩となる、其の年の七月頃に嘴に近き部分に白色の羽を生じ初めるしかし八月初旬頃

でも未だ頭部は黒色を呈して居り八月の中旬頃に至り漸く白色に變る、但し之は二羽の鳥に付て觀察した事である。

ウミネコ 第二年目に脊部に少し灰青色の羽毛を生じ第三年目の春老鳥に近き羽毛となるしかし頭部は未だ暗褐色で白色はならず第四年目に至り初めて完全に完全な生殖羽を呈するに至る然し其の年の秋には又頭頸部に暗褐色が表れる而て此の暗褐色を呈して居る期間は年次と共に短縮せられ遂に春期に至らずして白色に變ずる様に成る。

オホセグロカモメ 第二年目の三月に至るも羽色に變化を表はさず四五月頃切めて脊部に少しく黒色の羽毛を生じ丁度ウミネコに於けると同様で有る。

余の試験せる材料は二羽で甲は一九一六年に孵化し一九一七年の三月に捕獲したもので有る此の鳥は一九一九年の春には頭部は淡い褐色の斑點を有し尾は大部分黒色で只先端丈白色となつた然し春は殆ど生殖羽を呈した一九二〇年の春には前年に比して稍々薄いけれ共斑點が頭部に表れ尾羽にも大きな黒斑を有して居る他の一羽にも同年同程度のもので一九二〇年には尾羽が全く白く脊部には美しき生殖羽を生じ四月に近きて完全に頭部が白色となつた然るに甲は一九二〇年の夏の中頃に至ても未だこの様な完全な生殖羽とならなかつた而て一九二一年の二月に至るも嘴の色は未だ黄色に變ぜない但し體の色彩は一層生殖羽に近きものとなつた、甲乙二羽は何れも雌で有る、一九一九年の十二月頃老鳥に近き雄を捕獲した之は四年子かと思はるゝ鳥で頭部に少許の暗褐色の斑點を有して居たが一九二〇年の春に純白となつた然し九月以降に再び斑點が表れた之は然し乍この如く多くは無かつた、此の斑點もウミネコの夫の如く之を有する期間は年と共に短縮せらるゝものゝ如し、野生の鳥で一月頃に頭部に少しも斑點を有せぬ鳥を捕獲した事が有る、又甲乙の羽色の變化に遅速あるは或は食物等の關係によるものなるや今猶研究中である。

前述の如く三種の鷗は凡そ四年目に完全なる生殖羽を呈するものゝ如し

鷗の雌は雄に比して概して體大生殖羽の完全せる雌は同程度の羽色を有する雄の傍に來りてキュウ／＼と首を伸して鳴く雌は又之と同じ動作をなして答ふ時に遂には互に相對立して屢々此動作を重ねる事が有る此の動作は春季のみに限らず秋季にも爲すことを見る、ウミネコは此時少しく小聲にてカオ／＼と繰返して鳴き雄は雌の周圍を一週す、又秋季天晴れたる朝或は南風の少しく吹ける春にはウミネコはカオ／＼と鳴き翼を張り飛び立たんことを見る、猶此の他の種類に付ては他日機を見て告ぐる所あるべし。

駿河靜浦附近産鳥類 (上)

理學士 黒田長禮

本篇に於て余の報告せんとする鳥類は靜岡縣(駿河國)駿東郡靜浦村を中心とし其附近に於て數年間時々採集及び觀察せし結果なりとす。

靜浦村は東海道沼津驛より東南約一里十町にあり。本村と大平村との堺には當地最高の鷲頭山或は鷲巢山(海拔三九二米)あり。本村に次の六大字あり即ち下志、馬込、獅子濱、江ノ浦、多比、口野とす。獅子濱、

靜岡村に接する北方の村を楊原村とす而してその沿岸には桃郷(島郷)及我入道の二大字ありその間に牛臥山突出し、我入道と片濱(千本)との間に狩野川流れて駿河灣にそそぐ。

江ノ浦間に突出せる部分あり之れを大久保ノ鼻と稱し、此鼻の岩壁より伊豆の淡島迄海上約四百五十間の間隔を有し自然の門戸を爲し三千餘間

靜浦村志下濱沿岸に一小島あり俗に瓜島又は西郷島或は雀島と稱す古くは鷹ヶ島と呼びしと云ふ。

海水突入して江ノ浦灣を形成す。本灣は天然の良港にして最も水深淺き處にても十八尋内外あり常に海面靜かなり。口野、重寺間に駿・伊兩國の國堺あり。即ち此沿岸は田方郡内浦・西浦の二ヶ村にして前村中に重

余が靜浦村志下より上記の沿岸地方以外の附近に赴きしは北方にありては沼津在門池(金岡村)、三島附近(凡そ五里)及び佐野濠園附近にて南方は伊豆修善寺(凡そ五里)迄とす。

寺、小海、三津、長濱、重須の五大字あり。後村に木負、久連、平澤、立保、古宇、足保、久料、江梨の八大字ありて大瀬崎に達す。此大瀬崎より志下迄海上二里餘あり。

以下記述する種類中※印あるは觀察せし種類のみにして又括弧内は方言とす。

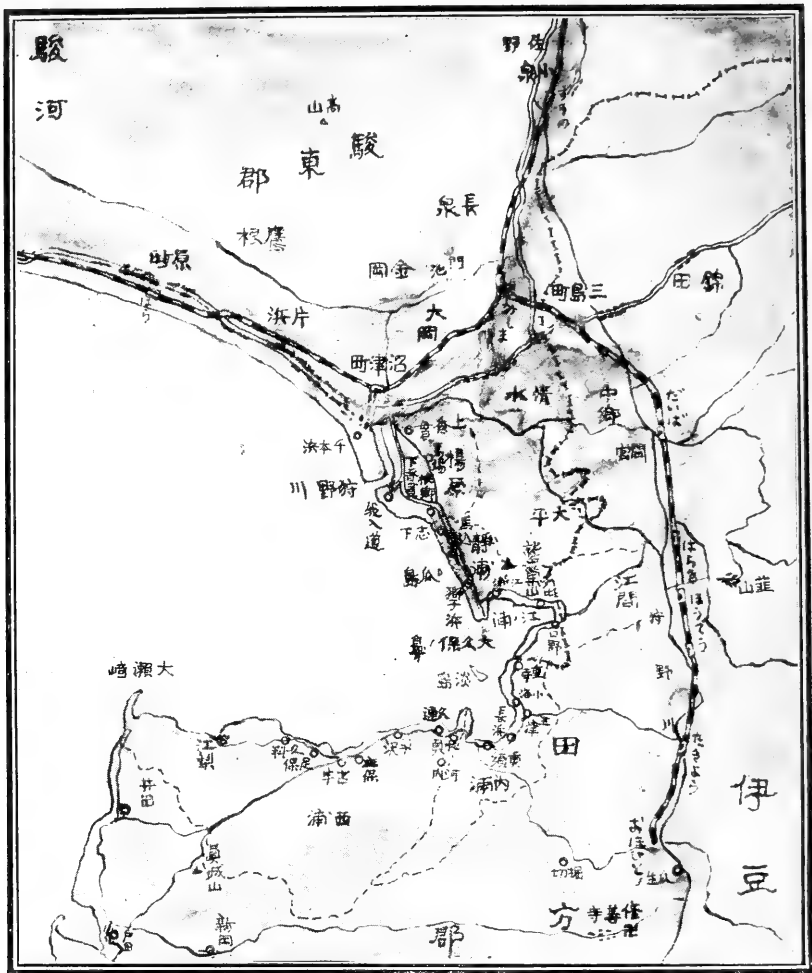
1. *Columbus stellatus* Pontopp.

ア

ア (ガトウ、ガトウゴロシ)
 (ヘイキドリ)
 ホウネンドリ

狩野川口より約七八町程上流にて五羽を見る食物となる魚類を求めつゝありたり午後漸干たる後は一羽も來らず。

(大正七年三月四日)



第十三圖 静岡縣靜浦村附近略圖

大正七年三月八日内浦にて數羽を見る。

2. *Columbus arcticus pacificus*.

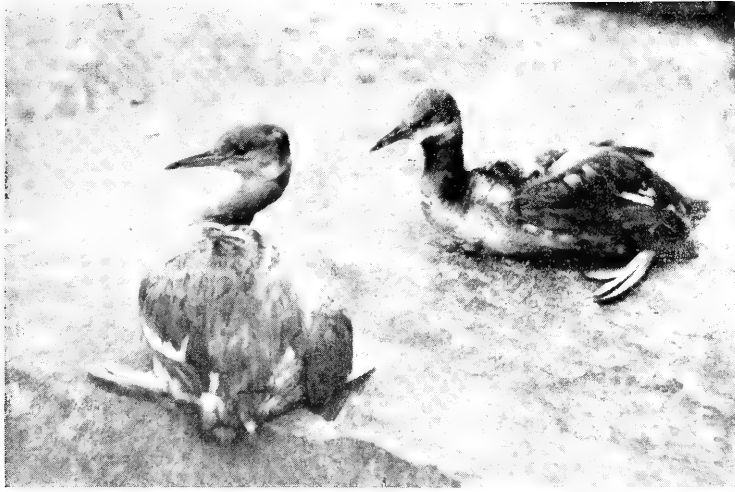
(Tafr.)

シロエリオオホム

(同 上)

此種は前種よりも當地方にては其數稍々多く狩野川口、志下海岸、江ノ浦港、西浦沿岸等にて採集及觀察す。秋季(十月頃)に見るこゝもなく冬季(二月頃)より春季に多きも時々春季渡り去らず残留せる個體あり斯くの如きは當地にて生殖羽(前頸紫黑色を呈し後頸灰白色を呈す)となり而して全夏を通じて生存し已に夏の羽衣脱更を開始せるものさへあり。余は大正三年八月廿二日狩野川口にて獲たるもの

は羽切脱更中の夏羽のものなりき(動物學雜誌第廿八卷四一八頁參照)。然れども當地方にては蕃殖するものには非ざるべし。恐らく負傷等のものならん。他地方にも此例あり。左に右の外本種を觀察せし月日及場所を記せば



第十四圖 アカエリカイツブリ(冬羽)
(大正九年三月十七日撮影)

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正七年三月八日	馬込海邊附近	一羽	幼期
同 年三月十七日	瓜島附近	少數	—
大正八年六月卅日	獅子濱沖	二羽	生殖羽のもの
同 年七月五日	江ノ浦港口及淡島附近	二羽	—
同 年七月八日	志下濱沖	一羽	喉は明に白し
同 年八月二日	志下濱海岸	一羽	海岸より約五丁沖を游泳後頸白く見え前頸に紫黒色なし兩翼を羽叩きせしに大部分の風切なかりし
同 年八月八日	牛臥・狩野川間	一羽	八月三日と同一のものらし

アビ及び此類は顔部のみを水中に入れ餌なる魚類を見つゝ游泳すること鵜類の如し而して發見するや否や潜行して捕魚す。

3 *Pedulithya griseigula holboellii* (Kienh.)

アカエリカイツブリ(イソガモ)

當地海岸(志下、江ノ浦及び西浦沿岸)にては前種よりも普通にして冬季及び春季に之を見る。本種の靜浦海岸に來るは一月に入りてよりの如し余は大正四年一月五六日に獲又大正九年一月二日始めて一羽を見た。大正四年三月卅一日及四月三日西浦及靜浦にて見、晩春には全く歸去るものなれども時こして前種の如く夏季にも殘存するものあり大正八

年八月一日及び二日各一羽を志下濱沖に見たり。大正十年四月六日江梨附近にて三——四羽を見、七日靜浦にて生殖羽の雌二羽を得たり本種はアビ類より以上に游泳巧みにして採集の際一射にして頭に命中せざれば殆んど其個體は捕獲困難と云ふべき程なり。

* 4. *Puffinus pacificus japonicus* Hartert.

カイツブリ(カワガラス)

大正七年三月四日狩野川口より八丁程上流にて一回二羽を見たのみ、留鳥なるべし。

* 5. *Diomedea albatrus* Pall.

アハウドリ(チキノコゾウ)

靜浦附近迄來りしこゝなきも灘にては見るこゝありと云ひ。而して古くは多數來り漁夫は釣りて捕らへしこゝありと云ふ。

* 6. *Puffinus leucomelas* (Temm.)

オホミズナギドリ

大正八年六月廿六日本種の斃死せるものを桃郷海濱にて見たり恐らく廿二日の暴風雨のミキ打上げられしものならん同年七月二日又々本種の一つを同地海岸にて見る。同年八月廿六日伊豆江梨沖にて四——五羽の飛翔せるを見たり。

7. *Puffinus griseus* (Tem.)

ハイイロミズナギドリ

大正八年七月五日志下濱にて本種らしきもの斃死(頭なき)せるを見たり。嘗て夏季に一羽の活動漁夫に捕らへられしものを見しこゝあり。冬季に見たるこゝなかりしはオホミズナギドリと同様なり。

* 8. ♀ *Phaethorcorax capillatus* (T. & S.)

シマツク(ウドリ)

大正八年六月十九日靜浦瓜島(雀島又は鷹ヶ島)に棲まりしを見たり恐らく本種ならん。昨今多からざるも以前は瓜島に來り眠りしもの多かりしと云ふ。

9. *Uria pelagicus pelagicus* (Pall.)

ヒメウ(ウドリ)

大正四年一月六・七日伊豆淡島附近にて二羽を採集す。大正七年三月十一日靜浦にて見る、昨今當沿岸に多からず。大正十年四月六日江梨附近にて一羽を見る。

* 10. ♀ *Casmerodius albus modesta* (Gray)

コモ、ジロ?

狩野川口にて飛翔中のもの一羽を見た(大正四年四月二日)

11. *Nycticorax nycticorax nycticorax* (L.)

ゴ井サギ

本種に關する記録は左の如し。

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備	考
大正八年六月廿九日	志 下 濱	四 羽	夕刻海岸にて飛行中を見る	
同 年八月二日	同	一 羽	同上	
同 年九月十九日	同	八 羽	同上	
大正九年八月廿五日	同	一 羽		

本種は主として夏季時刻當地に來り生巢あるときはこれに降りイワシ類を捕食す。冬季見たることなし。

* 12. *Butorid's striatus amurensis* (Schrenck)

サ、ゴ井

夏季夜間本種の鳴聲を聞けり。又大正三年八月廿日より九月一日迄の間靜浦・沼津間にて見たり。又大正七年三月十二日修善寺の桂川にて大きなバンよりも大きく黒く見え木に棲り居たり本種らしきも時期より考ふればサ、ゴ井なりとは思はれざりき。

13. *Fis galericulata* (L.)

ヲシドリ

大正九年三月二十七日伊豆田方郡大瀬岬の池に二——三十羽の群を見る當地にて蕃殖するものありや否やは不明に屬す。三島附近にて獲られたる標本を見た。

14. *Anas platyrhynchos platyrhynchos* (L.)

マガモ(ホンガモ)

西風及び其他の風強く波荒き日に限り靜浦志下濱近くに來り荒波の内に眠むるもの又羽叩きするもの等を海岸より見ることを得、又瓜島の岩上に休息し居るものあり。南風のときは北岸(向て右方)に來り西風の時は南岸に來るを普通とす云ふ而して風風ぐるや全くその影を止めず全部沖合に去るものゝ如し、觀察せし記録は左の如し、

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正七年三月十一日	志下沿岸	約二百羽	
大正九年一月一日	同	少數	晴西風強
同 年一月十三日	同	多數	同上
同 年一月十四日	同	多數	同上
同 年三月十六日	同	二—三十羽	同上
同 年四月四日	同	十—三十羽	晴西南風午後
同 年三月四日	同	三十羽	晴西風稍強
同 年三月十三日	同	小群	晴西風強

15. *Nation creca creca* (L.)

コガモ

三島町附近にて本種の標本を見たり。此附近にて捕獲せるものなり云ふ。

16. *Histrionicus histrionicus pacificus* Brooks.

シノリガモ(ヒヨウタン)

大正四年一月六日伊豆田方郡大瀬岬にて雄一羽採集す(動物學雜誌第廿七卷九九頁参照)。

17. *Otlemia nigra americana* Swains. A. Rich.

クロガモ

大正四年一月六日志下濱沖にて雌一羽採集せしのみにして其他九年一月六日同地沖にて一羽を見たるもの恐らく此種類なりしならん。當地にては極めて少きものとす。

18. *Mergus septator* L.

ウミアイサ(イソガモ)

冬季及春季は狩野川及同川口、桃郷海濱、志下海濱、江ノ浦港、西浦沿岸の各地に渡來するも決して多からず。嘗て大正三年九月一日江ノ浦港にて羽衣更衣中の雌一羽を獲たることあり夏季に此種を見たるは此一例のみにしてシロエリオホハムミ同様の現象ならん(動物學雜誌第廿八卷四八三頁参照)春季には時として二十羽位の群を見ることあり。余は大正四年四月二日靜浦にて一

羽を獲。大正七年三月四日狩野川口より約八丁程上流にて二羽を見しこゝあり（アビの記事参照）。大正七年三月十三日伊豆江梨及び久連沿岸にて多数を見たり。大正九年二月廿三日志下濱沖にて二羽を見又同年四月三日牛臥附近の小川口にて二番の生殖羽のものを見たり。四月初旬迄は確に留まるこゝを知る。

19. *Accipiter nisus nishimitsi* (Tock)

ハイタカ

三島町附近にてハイタカの標本を見たり。此地方にて獲られしものなり云ふ。

* 20. *Jurco jureo japonicus* (T. & S.)

ノスリ

志下にて一羽を目撃せしこゝあり（大正七年三月五日）、又爪島（雀島）にても見たり（同年三月十四日、十五日）。

21. *Milvus lineatus lineatus* (Gray)

トビ

當地方（志下）にて明かなる留鳥として四時之れを見るも餘り多からず四羽位見るは多き方なり。其他狩野川口及び伊豆大瀬にて見る（共に大正七年三月）

22. *Fulco columbarius insignis* (Clark)

コテウゲンボウ

三島町附近にて獲られし一標本を見たり。

23. *Archelus tinuncula japonica* (T. & S.)

テウゲンボウ

三島町にて本亞種の標本を見たり。又大正八年九月廿日大平村ミ靜浦村との堺なる鷲頭山（或は鷲巢山）頂より少しく下方を飛翔中の殆んど誤りなき本種一羽を見たり。

* 24. *Panlton halictus halictus* (L.)

ミサゴ（ビシヤ）

嘗て春季志下海岸近き瓜島（雀島）にて見しこゝあり。

25. *Phasianus versicolor versicolor* Vieillot.

キン

大正八年十二月下旬大平村にて獲られたる雄一羽を入手したり。當地方に古くは多かりし由なるも昨今少なし。伊豆淡島（銃獵

禁示)にも棲息するものある由にて嘗て飯塚博士が此島に赴かれし際叢中より飛出したるを目撃せり。余に語られたり。佐野濠園にて本種の剥製を見る。又大仁にて黒變種(雄)を見るべき標本を見たり一體に黒味かゝりて綠色光少なき稀品なりき、可なり古くに獲られしものなりとの話にて修善寺附近産なりと云ふ。三島町附近産の本亞種標本を入手したり。

[*Phasianus colchicus karpovi* Buturlin.]

カウライキジ

金岡村愛鷹山の一部分にて大正七年三月九日に獲られたりと梅する死物(新鮮のもの)雄二羽、雌一羽を當地(志下)に沼津より持來りしを購入せり。其産地に疑ひあるも確に同山奥にて獲たるものなりと云ふ故茲に附加し置くことせり(動物學雜誌第卅二卷一二四頁参照)。飼鳥の逃れしものが蕃殖せしか?此標本を調査せしに三個の内一雄にありては顔面の赤色裸出部は新鮮にして又眼にも潤ひを有し、脚趾は固かりしも趾の裏面は尙ほ軟かなりき。他の雄は尙ほ日數を経たる感あり、即ち三羽同日に獲られたるに非らざるが如し。最大の雄(體量三百匁)にては頭の白輪前方にありて中斷せられ(タイワンキジの如くに)而して後頭の中部も亦その幅狭し尾羽の縁に赤味多し。然るに他の雄(體量二六三匁)にありては頸輪は完全にして且つ幅著しく廣し、尾羽の縁に赤味多く横斑も相違せり、以上は個體的の趨異と認む。

26. (*Graptophasianus soemmeringii subrufus* (Kuroda).)

ウスアカヤマドリ(ヤマドリ)

大平村大井山は本亞種の基産地なり。(動物學雜誌第卅卷三二六頁及第卅一卷三〇三頁参照)余は此地方の數個の標本を藏す。個體の内には多少淡色にて白斑を肩羽及腰に少量認むる程度のもあり。伊豆修善寺邊のものにも同様の個體あり。而して伊豆下田邊のものは基型標本と同一程度に濃色のもの多し。

當地在住の獵師渡邊米藏の談によれば此ウスアカヤマドリの當地方の分布は左の如し。

伊豆修善寺附近より鷲頭山・大井山を経て楊原村邊迄の間に棲息す。又伊豆下田、河津及び内浦邊の山中に産するものも赤味ある方なるも鷲頭山に棲息するもの最も色彩濃美なりと云ふ。伊豆天城山のものも上面及び腰に白斑なしと云ふ故に大井山及鷲頭山のものと同なるべし。伊豆半島産は全部ウスアカヤマドリと見ることを得べし。箱根・足柄・富士・愛鷹等に産するものは色彩淡く白味多く、尾の節間淡色なり即ちヤマドリの方なり。然し體は比較的大(?)なりと云ふ。

大正八年七月六日鷲頭山に登る中腹に本亞種の羽三枚を認めたり、又同年九月廿日同山に登る本亞種の地面を搔撥し砂を浴びし

跡を發見せり。羽毛多數落ちいたり。

27. *Graculophasianus sommeringii scabillans* Gould

ヤマドリ (ヤマドリ)

沼津在 (北方にて獲られし本亞種の標本を見たり明に淡色なりき。

28. *Corvus corax japonica* T. & S

ウヅラ

鷲頭山麓にて二羽を得たる (こつあり (春季))。

* 29. *Gallinula chloropus parvifrons* Blyth.

バン

三島町附近にて標本を見たり此附近にて獲たるものなり云ふ。

30. *Charadrius placidus* Gray.

イカルチドリ

大正三年八月廿八日江ノ浦港内にて一羽 (幼期) を得たり。其後全く見たることなし。

* 31. *Charadrius rubrus curonicus* Gm.

コチドリ

大正八年七月二日成鳥一羽を桃郷海濱に見る他には全く見ざりき。

32. *Aegialophilus alexandrinus dealatus* Sw.

シロチドリ

狩野川口には冬季——春季には小群を見ることあり。大正七年三月四日及三月十五日同川口にて數羽を獲たり。志下濱には稀れにて大正九年一月十二日二羽を同一月廿四日五羽を見たり。

* 33. *Ardea interpres oahuensis* (Bloxham)

キヤウジヨシギ

大正九年八月十六日志下濱にて約十羽の群を目撃す。

* 34. *Nycticorax nycticorax* Vieill.

ホウロクシギ

大正九年八月十七日一羽を志下濱にて見る。

* 35. *Placopus placopus variegatus* (Scopoli)

チウシヤクシギ

大正十年八月廿三日牛臥沖にて鳴きつゝ飛翔したる一羽を實見す。

36. *Heteroschus tinamus brevipes* (Vieill.)

キアシシギ(ボタシギ)

夏季には當地方沿岸に普通なるも多からず十羽以上の群を見るこゝ稀れなり。余は大正三年以後夏に見たり。大正八年八月二日志下にて本種の聲を聞きたるを以て渡來初期とす。同年八月廿一日多比濱附近にて三―四羽を見る。同年八月廿六日伊豆田方郡大瀬岬にて一羽を見る。大正九年八月二十日志下にて一羽を見、同廿四日雀島にて一羽を見、同三十日江ノ浦にて一羽を、同九月八日牛臥にて一羽を、同九月九日狩野川口にて一―二羽を見たり。其他伊豆淡島及西浦沿岸にて見しこゝあり。

37. *Actitis hypoleucos* (L.)

イソシギ

本種も夏季に見らるゝ種類にしてキアシシギよりも數少なし。稀れに冬季も留まるものあり即ち大正四年一月六日伊豆西浦沿岸にて一羽を獲たり。大正七年三月四日狩野川口にて一羽を見る。大正三年夏季伊豆西浦にて見、大正八年八月三日初渡來の一羽を雀島にて見、同八月十八日雀島に一羽を、又九年九月九日狩野川にて一羽を見たり。

* 38. ? *Ptilinopus hardwicki* (Gray).

オホヂシギ?

大正九年三月十九日伊豆田方郡西浦村木負カシヨウより不動ノ瀧(凡そ一里二十餘丁)間にて一羽を目撃したるも終に獲ざりき恐らく本種の歸り渡來の早き例なるべし。

* 39. ? *Copropora pomarinus* (Temm.)

トウヅクカモメ? (ハカセ)

嘗て春季四月の初め獅子濱沖にて多數の鷗群中一羽の本種(?)を見たるこゝあり。其後一回も見ず。

40. *Icthyophaga pollucaris* Kidw.

ミツユビカモメ

大正四年三月卅一日伊豆淡島沖の波荒き内に幼鳥の群を見たり。大正七年三月十三日江ノ浦にて一羽を又同月十七日同所にて成鳥二羽を見る、同九年一月卅一日、二月一日、二月四日に各一羽宛を又二月廿五日に二羽を何づれも志下濱沖及沿岸にて見たり。大正十年三月卅一日少數を江ノ浦灣内多比にて見る他種と混群す。本種は明かなる冬鳥にして渡來期も一月以後に限られ非常なる

大群 見るこゝなし。

41. *Larus ridibundus* (L.)

ユリカモメ(チウナイ)

當地方には冬鳥としてイワシ漁のありし節大群をなして來るこゝまれ甚だ稀れにして全く見ざる年多し。嘗て大正七年三月二日より同十七日迄數百羽又は十數羽の群を狩野川口其他にて見る、時として志下海濱の波打際に群集せるを見、又江ノ浦港内のイワシの生葉の周圍に群飛する數百羽(成幼共)を見たり中々美觀なりき(大正七年三月八日)、内浦にても見る。

42. *Larus argentatus* rege Palm.

セグロカモメ

冬鳥として見らる其數多からず。志下濱及び江ノ浦並びに狩野川口に來る、寒冷の候にならざれば來らず志下(大正七年三月六日、十月二日、三月二日に見る)にては四月に見たるこゝなし。大正十年三月卅一日江ノ浦にて成幼少數を見る。

43. *Larus marinus* schistogus Stejn.

オホセグロカモメ

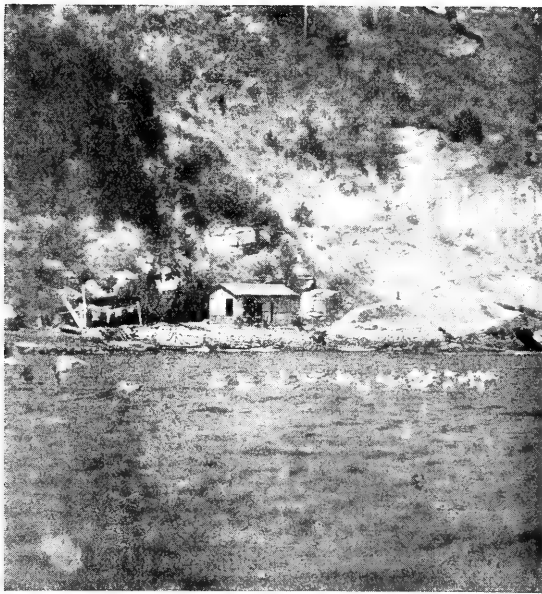
冬鳥として見らるゝもセグロカモメよりも少なく江ノ浦港内にて獲たるのみ。(大正四年三月卅一日)

44. *Larus crassirostris* Vieill.

ウミノコ

同一の個體が留まるには非らざるならんも殆んど年中多少を目撃するこゝを得。イワシ類灣内に多くなれば本種の數も亦多數なるなり。主として狩野川口、志下、江ノ浦等にて見らる。

觀察年月日其他左の如し。



第十五圖 カモメ、ウミノコ及ミツエビカモメの群游
(靜浦村多比にて大正十年三月卅一日撮影)

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備 考
大正三年八月廿三日	伊豆大瀬岬	數	
同 年八月廿八日	同 淡島附近	同	
同 四年一月六日	田子ノ浦沖	同	
同 年三月卅一日—四月三日	西浦及び狩野川口	同	
同 七年三月二日	志 下 沖	少	ユリカモメ二十羽位と混群
同 年三月四日	狩野川口	同	
同 年三月八日	内 浦	五	
同 年三月十一日	志 下 濱	數	
同 年三月十五日	狩野川口	一	成鳥
同 八年六月十八日	志 下 濱	少	
同 年六月廿四日	獅子濱沖	數	二年鳥のみ
同 年六月卅日	江ノ浦附近	約四十	岩上にある全部二年鳥にして成鳥一羽混す恐らく成鳥は蕃殖場に赴きし爲ならん
同 年七月五日	江ノ浦附近	少	二年鳥
同 年八月二日	志 下 濱	一	
同 年八月八日	狩野川口	數	成鳥數羽、幼鳥一羽、蕃殖を終りし成鳥ならん
同 年八月廿一日	江ノ浦	同	成鳥と幼鳥
同 年八月廿六日	西 濱	多	
同 年九月廿一日	江ノ浦	少	
同 九年一月二日	志 下 濱	同	
同 年三月十九日	江ノ浦	數	此春初めて見る
同 年八月十六日	志 下 濱	數	成鳥一羽のみ黒色の幼鳥數羽
同 年九月九日	狩野川口	十五	幼鳥のみ

觀察月日	觀察地	觀察數	備考
大正十年三月六日	志下濱	二—三羽	成鳥及幼鳥、他種と混す
同年三月卅一日	江ノ浦灣内多比	二三十羽	
同年四月七日	牛臥附近	少數	

ウミネコは生菓のイワシを食ふを以て漁夫は好まず。

45. *Larus canus major* Middend.

カモメ

大正十年三月卅一日成鳥及幼鳥を多比にて見る。他種と混群す。

* 46. *Larus hyperboreus* Gunn.

シロカモメ

冬鳥にして寒冷の候にのみ見らる。志下にて見たるは大正七年三月十一日成鳥幼鳥各一羽、大正九年一月廿三日幼期一羽、同廿四日幼期一羽、二月四日幼期一羽、二月六日幼期一羽、二月廿五日成鳥殆ど純白一羽を目撃し又狩野川口にて大正九年三月二日——二羽を見、大正十年三月卅一日江ノ浦にて約十羽を見、同年四月六日幼鳥少數を志下沖に見しがその以後に見ず即ち遅く来り早く歸り去る種類にして其數少なし。四月迄留まるは寧ろ例外なり。

47. *Larus leucopterus* Faber.

ハジロカモメ?

大正七年三月十一日成鳥一羽を志下沖にて見る本種らしきも或はワシカモメなりしか余は風切白色にして翁は淡色なりと見たり。

* 48. *Sterna longipennis* Nordm.

アジサシ? (チウナイ)

コアジサシの外大形のものを見る恐らくアジサシなるべし。其數少なく大正九年八月十六日——二羽を、同年九月一日二羽を目撃す。

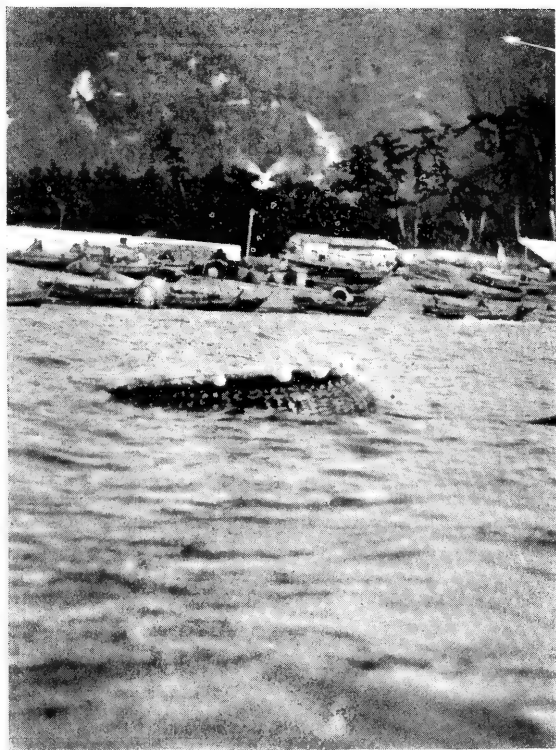
49. *Sterna bifrons sinensis* (Zin.)

コアジサシ(チウナイ、コチヨウ)

志下濱及びその沖にのみ来る夏鳥にして毎年来るにはあらず余は大正八年(少数)、九年多数及十年(尙多数)に目撃せしのみ。左表は觀察の結果をす。

觀察月日			觀察數			備	考
大正八年八月廿四日	同	同	十	二	三	羽	
同 年 八月 廿六日	同	同	數			羽	此日以後全く見ず
同 年 九月 十八日	同	同	一			羽	此日よりも數日前より來ると云ふ
同 年 八月 十五日	同	同	約	二	十	羽	寫眞撮影す(第十六圖參照)
同 年 八月 十六日	同	同	同			上	増加す、即ち幼鳥を増す
同 年 八月 廿四日	同	同	同			上	著しく減ず
同 年 八月 廿七日	同	同	約	五	十	羽	歸り去りしものとす
同 年 九月 一日	同	同	五			羽	成鳥及幼鳥並に二年鳥
同 年 九月 二日	同	同	同			上	
同 年 九月 七日	同	同	全	く	見	ず	
同 年 八月 廿日	同	同	約	六	十	羽	

本種は静岡縣下安倍川にて蕃殖するものあるが如く當地より非常に遠からざるを以て此川口にて生れしものが成鳥と共に來るものゝ如く而して生巢にイワシあるさき及漁夫のイワシを海中に散じ魚類を焦めつゝあるさきを最も多しとす。幼鳥は食物を捕ふることを得ずして生巢の縁に止まり成鳥は彼の特殊の方法にて生巢の上方に翼を動かしてつゝ停止しねらひを定めて一氣に落下しそれと同時に巧みに小魚を口に銜へ而して飛び上れば幼鳥はチチリ〜鳴きつゝ親鳥を追ひ親鳥は空中にて飛びながら一羽の幼鳥に與ふ。かくして食物無くなれば又更に落下して捕ふ。此様附近にて見物するは中々興味多し。余の見たるは生巢内に小なるカタクチのありし時なりき大形の魚類は捕へ兼ねるならん普通カタクチ約三寸位のものを最適當の大きとす。一回に一尾より以上は捕ふる



第十六圖 コアゲサシ

生巢の縁に群集せるは幼鳥にして其上方高く翼を開きて停止し將に生巢内に落下せんとするは親鳥なり。

(大正九年八月廿四日撮影)

こゝを得ず。極めて稀れには成鳥が海面に浮べる幼鳥に食物を與ふるこゝあるも直ちに飛び立つもの多し。

50. *Tringa erythraea* (Pall.) エトヒヨリカ

明治四十二年四月廿四日伊豆大瀬崎

附近にて漁夫がイカの餌にて釣り上げ捕へたり云ふ。左に當時の新聞記事を掲げんに、前略、生擒て見たるに横に平たき嘴あり嘴の先は曲り嘴の根元は銀色の光あり鳥の肩は長くして肩迄鰭の如くなり居り尾は短かく全身灰黑色にて足には水掻きあり大きは鴛鴦位ありて其聲は小兒の泣き聲の如く……」下略(静岡發) 右は沼津中學校山本末吉氏により上記の種類なりと決す。

ウトウ(ヒヨウタンガモ)

當地沿岸にては志下濱沖には少なく江ノ浦港及び西浦沿岸に多し。イワシ群多きときは大群をなして來る余は大正四年四月二日狩野川沖及靜浦にて見、明治四十年四月五日西浦沿岸にて大群を見たり。大正九年二月二日志下附近にて見る。一般にウミスズメに比し少し。本種の潜水時間を調べしこゝありしが優に一分間は潜行を續くるこゝを得るなり。而して潜水には兩翼を開きしまゝ行ふ。上嘴の基部の角突起は蕃殖期に向ふに従て顯著なる雌は之れを缺く。

* 52. ♀ *Uria troile californica* (Bryant)

ウミガラス?

大正八年六月廿四日午前伊豆淡島に赴く途中江ノ浦港口、大久保鼻附近に極めて近くにて見たる一海鳥は疑ひもなきウミガラスなりき。若し此觀察に誤りなしとせば本州より始めて報告せらるゝ面白き例なるべし。尙ほ今後の調査を要するところなり。余が假にウミガラスなりと肯定せし理由はウトウより數倍大なりしこみケイマフリよりは嘴細からざりしこみの二點にてウミガラスより外に近似のものなしと考へしなり。數回ウトウに似たる潜水をなすを見たり。

53. *Cyphus curbo* Pall.

ケイマフリ

大正四年一月六七日伊豆西浦沿岸にて冬羽のもの二羽採集す（動物學雜誌第二七卷九八頁參照）。大正七年三月十三日江梨沖にて一羽を見る。十年一月松平子爵は本種を西浦及び志下沖にて獲られたりと聞く。

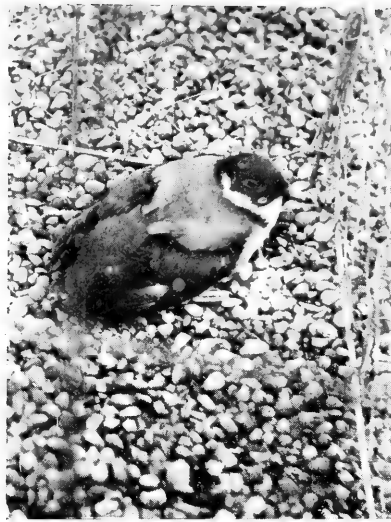
54. *Synthlibreithousaurus antiquus* (Fau.)

ウミスヅメ(ウミスヅメ)

冬季より春季には普通に見らるゝも大群少なく大正四年四月二日及三日西浦及靜浦に二——三羽又は五——六羽の小群を見たるのみ。イワシ群多きときは尙ほ多數なるべし。狩野川口、志下濱沖、江ノ浦及び西浦沿岸にて見る。大正九年には一月廿七日、二月廿五日、三月二日何づれも志下沖にて見たり。冬季ボラの仔魚を追ひて海岸真近く來り海岸に飛び上るこみありきは漁夫の談なり。余は海岸近くにては確に見たり。本種が舟の附近より逃れ行く際には先づ翼を開きて潜水し尙ほ追はるれば終に飛び上り數度海面に落ち恰もマワリのハズムが如くにして進み終に一直線に飛び行き主として海面と併行す。此習性は一般に海雀料鳥類の特性にして翼短きに基因す。

55. *Streptopelia orientalis orientalis* (Lath.)

キジバト



第十七圖 ウミスヅメ(雌)
(大正九年一月撮影)

本種は當地沿岸には留鳥として見られ松樹に營巢す。伊豆淡島も亦蕃殖地の一つたるは疑ひなし。

觀	察	月	日	觀	察	地	觀	察	數
同	大正四年三月卅一日	志	下	池	下	二			
同	同 年 四月 五日	沼	津	在	門	三			
同	同 年 六月 十七日	志	下	海	邊	四			
同	同 年 六月 廿四日	伊	豆	淡	島	三			
同	同 年 七月 七日	志	下	海	邊	四			
同	同 年 八月 九日	同		上	上	一			
同	同 年 九月 三日	同		上	上	一			
同	同 年 十二月 三十日	志	下	海	邊	一			
同	同 年 二月 二十六日	同		上	上	一			
同	同 年 三月 十九日	伊	豆	方	郡	少			
同	同 年 三月 廿八日	佐	野	園	附	三			
同	同 年 四月 四日	沼	津	在	門	四			
						五			

56. *Alcedo atthis japonica* Bonaprt.

留鳥として見らる余の見たる記録左の如し。

カハセミ

觀	察	月	日	觀	察	地	觀	察	數
大正四年一月六日	伊豆大瀬	一	一	一					羽
同 年 一月 廿六日	伊豆大瀬	一	一	一					羽
同 年 八月 廿一日	多豆江	一	一	一					羽
同 年 八月 廿九日	多豆江	一	一	一					羽
同 年 九月 十九日	木負比	一	一	一					羽
同 年 八月 廿七日	佐野園附	一	一	一					羽

同 年 九 月 八 日 牛 臥 附 近 一 羽

57. *Terre leucostictus leucostictus* (Temm.)

ヤマセミ

大正四年一月六日伊豆西浦沿岸(海岸)にて一羽を目撃す。佐野溍園には本種の剥製あり此附近にて獲たり云ふ。

58. *Tus japonicus japonicus* T. & S.

コノハヅク

三島町附近にて標本を見る此附近に産す。

59. *Tus hakano-nu semitorques* T. & S.

オホコノハヅク

三島町附近にて標本二個を見た。

60. *Vireo scutulata scutulata* (Rafin.)

アヲバヅク

當地海岸にて夏季にのみその聲を聞き又は飛翔せるを見る。

観 察 月 日	観 察 地	備	考
大正三年八月中旬	志 下	鳴聲を聞く	
同 八年八月十二日	同 上	午後八・九時「ホウホウ」と鳴く	
同 九年八月廿三日	同 上	午前四時頃に鳴く	
同 年八月卅日	同 上	午前二時半に鳴く	

渡來及歸去期に關しては調査不充分なり。三島町にて一標本を見た。

61. *Strix uralensis hondensis* Clark.

フクロウ

三島町にて二標本を見た。此附近にて獲たるものなり云ふ。

62. *Asio otus otus* (L.)

トラフヅク

三島町にて二標本を見た。

63. *Caprimulgus indicus jataka* (T.S.S.)

ヨタカ

大正八年九月廿一日江ノ浦港内の岩上に斃死(新鮮ならず)せる一羽を實見せり。如何にして此の岩上に死せるや不明なるも猛禽の衝へ來りて落したるものならんか。三島町にて一標本を見た。

*64. *Apus apertus* (Lath.)

アマツバメ(アマコイドリ)

本種に關する余の記録は左表の如し。

觀 察 月 日	觀 察 地	觀 察 數	備	考	天 候
大正八年六月廿二日	志下雀島	四—五羽	飛行せるもの		半晴
同 年六月廿二日	志下海濱	十四—十五羽	午前海濱及海上を低く飛ぶ、暴風雨のときは見ず		雨後暴風雨
同 年六月廿八日	楊原村上香貫山	一—二羽	午前中に飛行せるものを見る		半晴後曇勝
同 年七月七日	志下	一—二羽	飛行中		曇後雨
同 年八月十六日	同上	數	午後高く飛翔		曇後少雨冷氣
同 年九月十日	同上	二—三十羽	午後四時四十分頃より少雨のとき盛に海濱を比較的底く飛行するを見る僅かに五分間位		雨時々止む
同 年九月廿日	鷺頭山	數	山頂附近及山頂を飛ぶ		晴天
同 年三月廿八日	佐野澤園附近	四羽	飛翔中、初渡來者?		晴後曇
同 年八月廿七日	大岡村	數	飛翔中		曇冷氣午前少雨

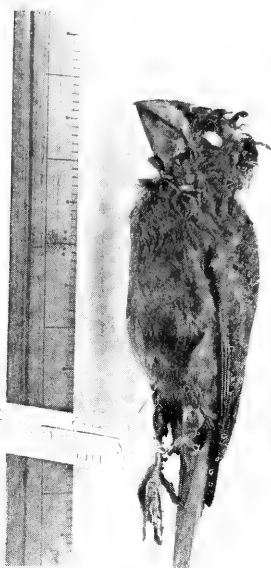
本種の活動するは其名の如く晴天の節は稀れにして多くは雨天の前に出現す。三月下旬に已に渡來するは確實なり而して秋は九月下旬近く迄留るが如し。(未完)

オガサハラマシコに就て

蜂 須 賀 正 氏



第十八圖 オガサハラマシコ(雄)
基型標本
(英國博物館所藏)



第十九圖 オガサハラマシコ(雌)
基型標本
(英國博物館所藏)

邦産鳥類中最稀品の一なるオガサハラマシコ (*Channoplectes ferretrostris* (Vigors)) を大英博物館に見、許可を得て撮影したるもの挿繪(第十八及十九圖)の如し。雌は嘴に霰彈の貫通せし穴あり。第二十圖は Rothschild's Extinct Birds, 1907 なる書物中にある原色圖を復寫せし物なり。同博物館所藏の標本はピーチー、ブロッソム號船長の週航せし時に得し物なり。翌年(一八二八)五月キトリッツ氏は小笠原諸島大部分に採集を試み數羽を得 *Dr. Petersburg* に二羽、*Frankfurt, Leyden* 及巴里に一、二羽所藏せり云へども信を置き難し、其の後シーボーム氏の採集人ホルスト氏が採集を行ひたれども不成功に終り、又アラン、オウストーン氏の採集人が同島に渡りしも目的を達せざりき。その後も度々採集家の同島に渡る事ありたれども共に得られざりし結果遂に何等かの不明なる理由の下に絶滅せしならんとの説を出したり。

キトリッツ氏の話によれば此鳥は海岸に沿ひたる木立の中に發見したり、數はあまり多からず姿は枝葉にかくれて明に分らざりき。性遲鈍にして左程人を恐るゝ事無し高き樹上に止る事



第二十圖 オガサハラマシコ
雄(後方)、雌(前方)
(Hon. W. Rothschild 原圖)

少なく大抵地上に居たり、鳴き聲は屢々聞きたるが非常によき聲(Diaper)なり、嗑囊及胃中には小きき果實及その土地に生ずる或種の木の芽を含みたる云ふ以上は小笠原島中最大の島に於ける觀察にして同時に得たり、體の色彩を記せば次の如し。

成鳥雄 體の上面は赤味を帯べる褐色にて脊面の羽軸は濃色なり大雨覆は茶褐色なり肩羽、風切羽、羽軸は茶色にして雨覆は他より灰色を呈す、上尾筒は脊と同色尾羽は汚茶色、頭頂及後頸は茶色にして薄き深紅色を帯ぶ前額、眉、顔側面、耳羽及體の下部の深紅色は一層薄くなる、喉、胸、腹は灰白色體の側面、脇は茶色にて薄き赤味あり、腿は茶褐色なり、下尾筒は薄き茶色、下雨覆及腋羽は薄き茶色にて薄き紅色を加味す、全長七吋、嘴峰〇、九五吋、翼長 四、二五吋、尾長二、八吋 跗蹠一、一吋、成鳥雌 體の上方は一見茶色なり脊部の羽毛は中央に灰色を加ふ。風切羽は脊と同色なり、肩羽、初列雨覆、羽軸は汚茶色にして縁は褐色なる事脊と同じ風切羽は色彩淡し、上尾筒は脊と同色尾羽は汚色なれども一見脊と大差無し頭頂は脊と同色、眼先き汚茶色眉線は薄き褐色なれども一見區別し難し、耳羽及頬は褐色、喉以下體の下面は薄茶色、下尾筒も同色にて白色を帯べる縁を有す、下雨覆及腋羽は薄茶なり。全長七、五吋、嘴峰一、一五吋、翼長四、二吋尾長二、九吋、跗蹠一、一吋。以上 List of Birds を参考としたり寸法等には余の測りしと多少の差ありたれど乾燥標本なれば本の記述をそのまま寫したり。

八丈島産鳥類二三に就て(上)

靱山徳太郎

余が先頃都下の一標本店より購求せる伊豆八丈島産鳥類標本並に鳥卵鳥巢の標品中に従來同地方より報ぜられし事なきもの二三あり。既知種にても卵及び巢等に就てはあまり識られざるが如きを以て夫等に就て些しく左に掲ぐる事と爲さん。

附記、八丈島採集鳥類鳥卵並に鳥巢標品は總て昨大正九年五月十五日より同月十七日迄の三日間内に採集せるものなりてふのみにて的確なる採集日不明なり。

種名の頭に*印を附せるは従來同島より採集せられし報告なきものなり。

* *Upvirellus leucinautis* (Lesson), オホメダイチドリ

雄(成殖羽)の一標品、各部一般に短小一特に嘴峯に於て一なれどもメダイチドリ (*G. m. monjotus* (Pall.)) にあらざるは上胸の褐色帯の上部に黒色の細線を見ざる事、跗蹠の長大なる事(メダイチドリにありては跗蹠は三三耗以下)等に依りて判別し得。本標品並に同種數個の測定を左に表出すべし。

所 藏	番 號	採 集 地	採集年月日	全長 mm.	嘴峯 mm.	翼 mm.	尾 mm.	跗蹠 mm.	尾羽の數	雌雄	測 定 者
靱 山	1320	伊豆八丈島	大正九年 五月中旬	—	21	136.5	55.5	36	12枚	♂ ad. rest.	靱 山
〃	—	Ya I., Yajuts. W. Carolines	大正八年 六月廿一日	192.5	22.5	137	52.5	36	12枚	♀ imm.	〃
東大理學部 動物學教室	2501	沖繩縣那霸	明治二十四年 十月	—	28	138.5	51	38	12枚	♀	黒田理學士
黒田理學士	658	石 垣 島	明治四十四年 十二月廿七日	—	25.5	136.5	50	37	12枚	♀	〃
〃	1339	Annam	明治四十一年 八月十日	213	25.5	136.5	54.5	36	12枚	♂	〃

* 3. *Pisolithus minutus ruficollis* (Palais). トウネン

成鳥夏羽の一標品、各部の測定左の如し。

嘴峰一六・五、翼九九、尾四四・五、跗蹠一九、中趾爪共一八耗。

4. *Scolopax rusticola* + *sticola* Linnaeus.

同腹の二卵(恐らく産卵途中のものたるべし)、測定左の如し。

番號	長	徑	短	徑
A	1.77 in. = 45 mm.		1.43 in. = 36.3 mm.	
B	1.75 in. = 44.5 mm.		1.38 in. = 35.2 mm.	

Aは乳脂軟皮色、Bは暗砂軟皮色を呈し共に淡暗紫色の殻斑を帯紫暗褐色及び淡紫褐色二様の表面の斑を有す、表面の斑の方殻斑に比し大なるもの多し、而してBは卵斑鈍端に集合すれどもAにありては寧ろ短周の最太部を一環して集合せる傾あり

* 5. ? *Orus bakkenensis semitorques* Temminck & Schlegel or ? *Ninox s ululata japonica* Temminck & Schlegel オホコノハツク?アラバツク?

同腹の二卵の測定左の如し。

番號	長	徑	短	徑
A	1.50 in. = 38.2 mm.		1.23 in. = 31.2 mm.	
B	1.48 in. = 37.7 mm.		1.24 in. = 31.4 mm.	

兩ながら陶土白色にて極めて鈍き光澤を有す、殻の表面は巢内の塵垢附着し汚土色なる濃淡雜然たる斑狀に染色せられ居たりしも(特に巢底に接し居りしを覺しき一面の方)標本製作後水洗せしに前記の眞の殻色を現出せり。

八丈島にミミックの類を産するの事實は故小川三純氏に依りて報ぜられしが氏は單にミミックとのみ記され學名を明かに爲さざりき(『動、雜』第十五卷四一四頁)黒田理學士は「伊豆七島産鳥類目錄及び分布表」中に此れを *Scops japonicus* (T. & S.)²⁾として掲げられ(『動、雜』第三十卷三一九頁)他にツクの類の名稱を記されざりしも石井重美氏に依る時は氏自ら三宅島にてアナバツクを觀察せられたる由(東京日々新聞大正七年八月)小川氏のミミックなるものは狹義のミミックなりとせば疑なくオホコノハツクを意味するなれど廣義に解する時は何れの種に該當すべきか判斷に苦しむ乍併今回の採集品が小川氏に依り同島に……………隨分多し(『動、雜』第十五卷四一四頁)と謂はれしミミックと同一種なる時は(恐らく誤りなかるべし)前表二卵の測定よりしてオホコノハツクか又はアナバツクか何づれかの種に屬するならんとの推定も強ち無謀なりとも想はへず。比較の爲めツク類數種の卵の測定を表出すべし。

備考、種名は總て原記載に従へり。

種名	産地	長徑	短徑	測定者又は掲載書名
<i>Scops plumiceps</i>	Kotaguri, N.W. Himalayas	mm. 1.21 (31)	mm. 1.05 (27)	『英國博物館鳥卵目錄』 同 同 同
	〃	1.25 (32)	1.10 (28)	
	〃	1.21 (31)	1.10 (28)	
<i>S. lachmanni</i>	W. Coast of India & Ceylon	1.13 to 1.30 (29 to 33)	0.95 to 1.15 (24.5 to 29.5)	同
	Yuen-in, China	1.40 (35.5)	1.22 (31)	同
<i>S. tempji</i>	Tenasserim	1.26 (32)	1.10 (28)	同
	Java	1.30 (33)	1.10 (28)	同
	Borneo	1.45 (37)	1.15 (29.5)	上

<i>N. semitorques</i>	—	1.25 to 1.28	(32 to 32.5)	1.10 to 1.15	(28 to 29.5)	『本邦産鳥類の巢と卵』
	陸前若柳	(1.58)	40	1.35)	34	熊谷 三 郎 氏
コノハチク	〃	(1.54)	39	(1.30)	33	同
	〃	(1.54)	39	(1.35)	34	同
アナバツク	筑前若松	(1.42)	36	(1.38)	35	川口 孫治 郎 氏
	Amur-land	1.52	(38.5)	1.20	(30.5)	『英國博物館鳥卵目録』
<i>Ninox japonica</i>	〃	1.65	(42)	1.27	(32.5)	同
	〃	1.60	(41)	1.24	(31.5)	同
	〃	1.49	(38)	1.23	(31)	同
	〃	1.49	(38)	1.20	(30.5)	同
<i>N. scutulata</i>	Ceylon	1.47	(37)	1.28	(32.5)	同
	—	1.45	(37)	1.27	(32.5)	『本邦産鳥類の巢と卵』

附記一、表中卵測、括弧を附せる分は對比の便宜上余が原測定より再測せし分なり。

附記二、熊谷氏のコノハチク(方言?)なるものはオホコノハツクなるが如し、コノハツク *Otus j. japonicus* T. & S. 卵の測定を見るを得ざりしが前掲 *Scops* 屬各種より實體小形なる該種が卵形のみ大なる筈は恐らくあらざるべしと信ぜらるればなり。因に識者間にありてもオホコノハツクを往々コノハツクと誤稱せらるる人あり、此兩種の如きを誤認するてふ事は實際信するあたはざるが如けれど事實有り得る事とす、本州各地にて前種は極めて一般的にして地方に依り可也普通に見らるる處のものたるも後種は極めて稀なるか或は全く産せざる地も亦珍しからず。

前表各種の卵徑を今回の採集品と比較する時はオホコノハツクより寧ろアナバツクの方に近き感あるも卵の寸法は同種中にて

母鳥の個體に依り非常なる隔差を見る事あり、且又同一親鳥の産卵中にも卵形に些少の相違を検出する處なるを以て僅々二卵を検せしのみにて其種名を斷定爲さんてふ如きは殆んど論外の事に屬すべし、據りて今回は前掲の如き相對的の假定の學名を報ずるに止め後日親鳥の標品入手の節更に報告する事爲さん。

附記、青ヶ島(八丈島の南)にも毛角を有するヅクの類を産する由、羽色形狀等を聞くにオホコノハヅクなるが如し。

6. *Turdus edanops* Stejneger subsp. nov.? アカコッコの亞種?

方言、カバリ(八丈島)

三巢六卵を入手せり、卵の測定並に色彩左の如し。

番號	長 徑	短 徑	殼 色 及 び 殼 斑 の 色 彩
1	三〇・耗	二〇・八耗	帶淡綠白色に帶灰淡紫色の殼斑と淡赭色の表面斑とあり、斑は中央部より鈍端に至る程多く尖端に粗なり
2	三〇・七	二二	帶蒼白色に淡赭色の細斑あり、斑の分布は(1)と同じ
3	三〇	二一・五	(1)と殆んど同色
4	二八・五	二〇・五	帶蒼白色に淡灰紫色の殼斑と帶紫赭色なる濃淡二様の表面斑とを有す斑は尖端半部は小にして粗、鈍端に至る程中大となり密集せり
5	二九・五	二〇・三	(3)に極めて酷似すれども細斑僅かに濃色
6	二九・五	二二	(5)に酷似すれども斑は一般に稍濃色にして僅かに粗大なり

表中の卵は二個づゝ同腹なりと謂ふ、されど(1)(2)並に(3)(4)の兩腹(?)の如きは卵色に可也の懸隔あり、三巢ながら産卵途中のものと思ふべし。

巢は外徑一七〇乃至一九〇、内徑八〇乃至九〇、高さ一〇〇乃至一二〇、深さ五〇乃至六〇耗、其外部を構成する主材は草蔓及び蘚類(クサゴケ、ミズゴケ、クラマゴケ)にして巢縁及び内部には細柔なる樹根、羊齒類の枯莖等を用ふ、尙少量の腐朽せる葉脈等を内部上縁等に混するあり、一巢のみは内底に本種の羽毛十五枚を敷在せり。

因に黒田理學士に依る時は八丈島産アカコッコは三宅島以北のものに比し羽色並に各部の大きさに相違ある由にて屋久島産に近きとの事なるを以て余も亦同氏に従ひ前掲の如くなし置く。

7. *Horreus cantans cantans* (Temminck & Schlegel) ウグヒス

二巢四卵を入手す、四卵は同腹のものにて一巢中の全數なり、尙他の一巢の内部には卵殻の破片數多ありて夫等の破片より推するに三卵以上在中せしが如し、恐らく採取時破損せしものならん、巢底に卵内容の流出乾固の爲め殻の細片は巢底の諸所に密着す。卵の測定左の如し。

卵號	長	短	徑
A	0.74 in. = 18.7 mm.	0.58 in. = 14.3 mm.	
B	0.73 in. = 18.5 mm.	0.57 in. = 14.2 mm.	
C	0.75 in. = 18.8 mm.	0.57 in. = 14.2 mm.	
D	0.73 in. = 18.5 mm.	0.57 in. = 14.2 mm.	

採卵は四個ながら濃煉瓦赤色にて尖端の方僅かに淡色なり、此程度はD卵最も多くA卵は稍尠し、B卵は異常にて兩端僅かに濃色にて央周部稍淡し、C卵は此濃淡の差最も少く殻面全部に極めて細小なる濃色の斑を有す、此細斑は鈍端近き周部を一環して稍多し又D卵は央周鈍端寄りに濃淡二色の接色部あり不明瞭なる斑を呈す(破片卵殻の方は一般に本巢のものより濃色なり)。

黒田理學士高著『本邦産鳥類の巢と卵』よりウグヒス屬の卵徑を抄出せば

タイワンウグヒス……………0.78×0.60 in. 濃煉瓦赤色、稀に暗色の斑あり
ウグヒス……………0.68×0.52 in. 蝦茶色又は淡蝦茶色、斑なし

とあり、今回のものは寧ろタイワンウグヒスの卵の記載に近きも成鳥を検せざる内は亞種名迄の斷案は爲し難し。

第一巢四卵在中の方は外徑七五・八五、巢縁の内徑約四五、高さ七五内外、深さ約五五程あり、其外部を構成する主材は茅葉

にして少量の笹葉を混す、内材の大半は纖維にして柔細なる枯草莖及び草莖皮、葉身の紙狀に變質せる潤葉樹葉等を用ひ巢底笹葉及び茅葉の細片の少量を敷在せり。

第二巢は外徑約一〇〇、巢縁の内徑約四〇、高さ八五—九〇、深さ約六〇耗あり、外部は殆んゞ茅葉のみを以て構ぜられクサゴケの小片四—五を混す(此蘚片は寧ろ偶然附着せしものかミ觀察す)内材は細根及び纖維を用ひ葉身低狀に變質せる樹葉の片一、キジバト *Streptopelia orientalis galastis* (Temm.) の腹羽一、ウグヒスの羽一を混す、巢底には茅葉の細片の少量敷在せらるゝ事第一巢と同じ。

8. *Zosterops dalrymplei stejnegeri* Seehorn シチタウメジロ

三巢及び破損二卵を入手、卵は飽卵半以上を經過せしものゝ如く内容乾固し居れり、卵殻の殘片に依れば一樣に蒼白色にして斑なきものなるを推定し得らる。

二巢は構巢樹枝葉と共に採取せられ巢材稍共通し本亞種の常例のものたるも他の一巢は草叢中より採取されし如く材料並に形狀等に相違の點あり。

各巢の巢形其他を左に詳述すべし。

第一巢(破損卵在中の分)はグミ(?)の分叉上に構ぜられ外徑約九〇、内徑約五〇、高さ四五、深さ三〇耗、巢形は扁平なり、其外部を構成する主材はミヅゴケ及び茅種(?)の頭軸にして諸所に蜘蛛網を纏附し尙少量のクサゴケ及び腐朽せる落葉樹葉脈等を混在す、内材は殆んゞ全部光澤ある黄白色の纖維を以て構ぜられ巢底には靱殻の二—三片在りたり

第二巢はサクラの斜上に突生せる兩枝間に懸釣せられ外徑八五、内徑四五—五〇、高さ約六五、深さ五〇耗、巢形は球形に近し、外部の主材は第二巢に同じ蜘蛛網を纏附せる點も同様なれど本巢の方其量に於て優れり、他に少量のクサゴケ、黒色の細根等を混じ蜘蛛糸の纏絡中に蜘蛛の卵塊一、イイジマメボン *Acanthopneuste tinnis* Stejneger 喉部の羽毛一枚、禾本科の種類二—三個を見出せり、此等は親鳥が蜘蛛網採取の折偶然混入せるものと見るべき歟、内部の主材は第一巢と同じ、本巢は殆んゞ完成せるが如きも尙

幾分内材に於て其量過少なる傾きあり未完成のものたらん。

第三巢は外徑九〇、内徑五〇—五五、高さ約五五、深さ三五耗、巢形は盆狀に近し、外部を構成する主材は腐汚せる潤葉樹葉脈及びクサゴケにして纖維、草莖の外皮、黑色なる草蔓葉身ある潤葉樹腐葉の片及び極めて少量のクラマゴケ並にキジバト下腹羽一枚等を混じ蜘蛛糸少量を巢縁に纏附せり、内材は第一及第二兩巢と同質なる纖維を用ふれど本巢のものは著しく暗色なり、巢底に粗殼八片を極めて細小なる卵殼破片數多在り、該卵殼の色彩に依れば本亞種の卵殼片なる事疑なし、恐らく巢立後のものならんと思察す。

9. *Embertia coides ciopsis* Bonaparte. ホホシロ

方言、ノスズ(八丈島)

二巢八卵を入手、卵の測定左の如し。

番號	長	徑	短	徑
A	0.77 in.	= 19.6 mm.	0.61 in.	= 15.5 mm.
B	0.76 in.	= 19.3 mm.	0.61 in.	= 15.6 mm.
C	0.81 in.	= 20.5 mm.	0.62 in.	= 15.7 mm.
D	0.77 in.	= 19.4 mm.	0.62 in.	= 15.7 mm.
E	0.81 in.	= 20.5 mm.	0.58 in.	= 14.9 mm.
F	—	—	0.62 in.	= 15.7 mm.
G	0.82 in.	= 21.6 mm.	0.61 in.	= 15.5 mm.
H	0.86 in.	= 21.8 mm.	0.61 in.	= 15.5 mm.

表中A—Fは一腹にしてG—Hは他の一腹のものなり。

拙藏東京附近産ホホシロ卵の測定を比較の爲左に掲ぐ

番號	採集地	採集年月	同腹在卵數	卵徑
15	武藏入間郡高麗村	大正六年正月十九日	2 卵	19.5 × 15.5 19.5 × 15.3
5	同上	同月二十九日	4 卵	19.1 × 15.8 19.3 × 15.8 19.5 × 15.3 20 × 16.2
12	同上	同月十二日	5 卵	19.4 × 14.9 19.5 × 15 19.6 × 14.8 19.6 × 15.1 19.7 × 14.5
6	同上	同月三十日	2 卵	19.7 × 15.8 19.8 × 15.7
13	同上	同月十七日	3 卵	20. × 15.7 20.2 × 15.4 20.2 × 15.7
14	同上	同月十八日	5 卵 (1卵破損)	20 × 15.3 20.4 × 15.7 20.8 × 15.9 21. × 15.8
2	同上	同月廿七日	1 卵	20.5 × 15
9	同上	同月六日	4 卵	20.5 × 16 20.5 × 16 20.8 × 16.3 21 × 16.3
—	相模中郡磯大	同月中旬	4 卵	20.5 × 14.7 21 × 15.8 21.5 × 15.5 21.6 × 15.8

—	武藏北豐島郡 練馬村	大正九年 七月二十二日	3 卵	21.2 × 15.2 21.6 × 15.8 21.8 × 15.8
	調査卵 三十二個			19.0 14.5 to to 21.8 16.3
	同 平均			20.3 × 15.5

今回の採卵も測定上全く右の東京附近産のものに一致せり。而して其卵殻の色彩を述べれば初出六卵は擬白色にて稍淡若を帯び後二卵は莖白色を呈す加ふるに全卵共に淡紫灰色・暗褐色並に濃紫褐色三様の不規則の條線を有し線は主として鈍端若くは鈍端近き部に集合せる等東京附近産のものに極めて普通に見得ると異ならず。

第一巢六卵在中の分)は岩石若くは土壁等を後面に控へたる個所に構ぜるもの、如く巢の一面は扁直なり、外径二一五——一三、内径約五五、高さ九〇、深さ五〇耗ありて本亞種の構巢としては大型の部に屬す(尙極大型なるものあり)外部の主材は茅の莖軸、同じく莖皮、雜草の枯莖、細根等にして潤葉樹の枯葉及び朽葉、羊齒類の根部等を混じり尙羊齒類——鳥名ノコギリシバの枯莖少量同じく枯葉の先端一、チカラグサ(?)の花穂の一部と其莖、クラマゴケ及びクサゴケの各小片、腐朽せる潤葉樹葉脈少量卷纏せる枯草蔓二——三をも見出せり。内材は主として纖維及び細柔なる草根(巢縁に用ふ)にして極めて少量の天蠶糸様の繭糸を混す。

第二巢(二卵在中の分)は其形状より推するに樹枝上に構ぜられし如く外径約一一〇、内径六〇内外、高さ六〇——六五、深さ四〇耗ありて本亞種の構巢としては最も普通の大きさなり、外部の主材は古葉及びシバ(?)の根莖にして細根は上縁に少量に用ひ又禾本科に屬する植物の枯葉少量、潤葉樹枯葉一、長き馬尾毛一本等を混す。内材は主として馬尾毛、長き毛髮、黃褐色及び擬白色二様の虫繭糸(天蠶糸様のもの)を以てし禾本科の枯葉一枚を混す。

附記、本亞種の營巢は各地共に極めて卑近のものたるも八丈島産は東京附近と其構材に相違の點あるを以て掲ぐる事とせり。(未完)

イヌワシの飛翔に就て

榎 本 佳 樹

イヌワシ *Aquila chrysaetus* (L.) の飛行及其他の習性に關しては、鳥_二第七號に一部分の略述を爲せしが該記事は只僅かに大正六年中の或季節間のみ觀察せし結果によるものなれば不備の點尠からざるを以て更らに大正七八九の三ヶ年間に觀察せし數點を記して聊前記事を補足修正せんとす。

當地には毎年(大正六年より觀察)五月上旬(一回)乃至六月上旬(三回)より八月下旬乃至十月中旬の間に於てイヌワシの姿を目撃し且つ其聲を聴くこと稀ならず、多分其一族當地の附近に棲住繁殖するものあらんと思はる。因て其習性に關し詳細なる觀察研究を爲し得ざることなからんも、遺憾ながら余は其時間を有せず、只屢彼等が當地の上空に飛翔する有様を觀察することを得たれば、茲に其結果に就て少許の記述を爲さんとす。

一、低空に於ける飛翔

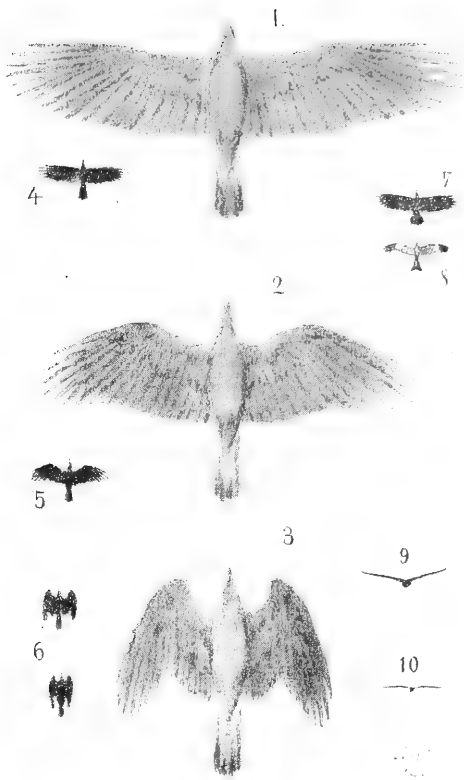
イヌワシが高空に飛翔する際には翼を搏動すること稀なるも、低空に於ては翼を搏動すること多く、殊に一つの靜居場所より遠隔せざる他の場所に位置を轉ずる時の如きは通常翼を搏動す、此時の速力は寧ろ遲緩にして又其翼搏動の速度は略トビの夫れに同じく、斯る場合には決して雄大或は壯觀等_三賞揚する能はざるなり。而して低空に於てはトビよりも翼を搏動する場合多く、又翼を搏動せざる時に在つては、兩翼はトビの夫れの如く水平を保たず、兩翼端は水平線_三約十五度乃至二十度の角度を爲して上空に向ふ。是を以て、低空に於けるイヌワシは其形狀動作共にノスリ (*Buteo buto japonicus*) に酷似し、少しく遠距離に在つては誤認し易し。

二、高空に於ける飛翔

右に反し高空に於ける飛翔は頗る壯大にして變化も亦甚多し。但し低空_三高空_三の境界、及之によりイヌワシの飛翔に判然たる區分等なきは勿論なり。

a、圈狀飛翔 之はイヌワシ飛翔の大部分を占むるものにして、多くは螺旋狀に圈形を描きつゝ漸次其水平或は垂直の位置を變

換し、或は屢8時形を描きて螺轉の方向を變ず、此種の飛翔間は尾羽を左右に擴けて絶えず之を動かし、以て方向變換の主機となす。圈の直徑は通常約百五六十米乃至四五百米なれども、之よりも著しく擴大或は縮小することあり。速力は一見迅速ならざるが如きも、馳行する汽車を遠距離より眺め、或は高空に於ける飛行機を見たる場合等を想像して比較するに、決して遅緩なるものにあらず、而して空高に昇るに従ひ漸次増大するもの、如し。高度は時として低きことあれども、多くは高空に於て行はれ、夏季無風の



第二十一圖 イワシの飛翔

日なきには、極めて高く上昇し、時としては雲間に姿を没し、或は無雲の時に於ても、肉眼にて目視する能はざるに至ることあり、海拔高度の最大限は、嘗て「鳥」第七號に述べし、約千七百米よりも遙かに高かるべし。此種の飛翔間は、殆んど翼を搏動することなく、只前記の如く尾羽の操縦により、翼を張りたるまゝ、上昇、水平、或は下降等の運動自由自在なり。(第二十一圖7)

り、位置轉換の際に於ける飛翔 前記の圈狀飛翔を爲し

ある際、遠距離に位置を轉せんとする時は、翼を張り或は少しく之を屈めたるまゝ、搏動することなく、一直線に目的位置に向つて突進す。此時の速力は圏狀飛翔の時よりも著しく強大にして、トビなどの到底及ぶべきものにあらず。移轉距離は其目的によりて一定せざれども、短小なるは稀にして、多くは千米以上に及び、時としては、山背或は樹木の彼方に遠く姿を没することあり。此種の飛翔間は尾羽を擴げざるを普通とす。(第二十一圖 1245)

、襲撃時の飛翔。主として遠距離に獲物を發見したる時に行ひ、前項位置轉換時の飛翔と略同要領なれども、其速力は更らに數倍し、所謂矢の如きものにして、如何なる飛行機も到底之に及ばざるべしと思はる、又翼は著しく之を屈し、時としては殆んど之を折疊まんとする程度に達す。觀察者頭上の高空、肉眼にて全長三尺、翼の開張七尺内外の大鳥を目視し得ざる如き遠距離より此種の飛翔を爲し、一瞬にして、稍隔りたる山の彼方に、姿を没する時の如きは、壯觀も其度を超し、一種凄愴の感を生ず。想ふに、體重一貫匁乃至一貫五六百匁、或は夫以上の巨鳥が、遠大の高空より、加速率を以て降下し、獲物を攻撃する際に於ける威力は實に絶大なるものならん。(第二十一圖 36)

三、飛翔間の諸動作

高空にて圏狀飛翔中、張りたる兩翼を、びり／＼と痙攣的に顫動することあれども、是は未だ其理由を研究し得ず、(ミサゴにも此種の動作あり)

二羽のものの相會する瞬間に於て、上方にあるものは襲撃の姿勢を取り、下方のものは迎撃の態度を爲す、是れは眞に争鬪する場合もあるべしと雖、多くは遊戯的に行ふものならん。此時に於ける下方のものは、急に體を逆轉し、體の下面は上空に向ひ、殊に脚部を上方に伸長して、敵手を蹴らんとするが如き形態を爲すこと一瞬時の後、直ちに以前の飛翔に復す、其動作頗る迅速にして巧妙を極む。

四、飛翔間に於ける他鳥との識別

飛翔中其附近に之を其大きさを比較し得べく、且つ種類の判明せる他の鳥類(餘り小なるは比較の標準とせざらざる)存在せざる時に在

つては、前に述べたるノスリの外、往々トビ、チュウヒ等と誤認し易きことあり。通常、トビは全長二尺乃至一尺一寸、翼の開張五尺二三寸、ノスリは全長一尺八九寸、翼の開張四尺四五寸、チュウヒは全長一尺八九寸、翼の開張四尺五六寸を夫れ夫れ各種に於ける大形のものゝ體尺とし、イヌワシは全長約二尺五六寸乃至三尺三四寸、翼の開張約六尺五六寸乃至七尺四五寸に達するを以て、大さに於ては著しき差異あり、且つ各部寸法の比例を異にするのみならず、色彩に於ても明かに區別し得るものなれども、イヌワシのみ飛翔しある時は、實際よりも遙かに小さく見ゆることあり、又細部の色彩形状等は近距離に非ざれば判明せざること多く、尙且つ飛翔動作に於て、上記數種と類似せる點ある等により、此誤認を生ずるならん。然れども、少しく熟視を怠らざれば、識別亦敢みて難事にあらず、即ち、イヌワシは飛翔間其位置を轉する時の速力強大なること、大規模の襲撃動作を有すること、色彩全體に黒味勝なること、及鳴聲の鋭く且つ大なること等により、他の三種と容易に區別し得る外、更らに細部に於ては(a)、トビは其尾比較的長く且つ僅に凹形を呈するも、イヌワシの尾は比例上トビのもの程長からず且つ凹形ならざること、トビの頸頭部は張りたる兩翼の上縁線(前縁)より突出すること短きも、イヌワシのものは比較的長きこと、トビは飛翔時に於て翼の前縁前後に屈曲するを常とするも、イヌワシのものは特別の場合の外屈曲少く、比較的直線狀に近きこと、及び翼を張りたるまゝ飛翔する時、トビの兩翼は殆んど一直線に近きも、イヌワシのものは兩翼端上方(上空の方)に傾斜すること等、トビと區別し得る點多し。(b)、ノスリは體下面及翼裏面等の色彩黒褐色に見ゆること殆んどなきも、イヌワシのものは常に黒褐色を呈すること、及びノスリは高空を飛翔することイヌワシよりも少きこと等により互に區別し得べし。(c)、チュウヒは翼裏面、胸部等イヌワシのものよりは遙かに淡色なること、及び屢「チュウヒー」を聽ゆる特殊の鳴聲を發すること等により區別容易なり。(第二十一圖78)

五、雜 件

a、五月乃至六月より當地に顯るゝは、他地方より渡り來りて初めて顯るゝものにあらず、又八月乃至十月に飛去するは、遠く他地方に渡り去るものにあらざるべく、多分當地附近に營巢繁殖するものならんも、孵卵育雛の時期たる三四五月の候、及び當地よりも他地方に食物多かるべき秋冬の季節には姿を現さざるものならん。

b、本年(大正十年)は營巢の位置を變したるか、或は其他に原因のあるるか、六月五日に姿を現したる後、十二三日間に時々之を目撃せしも、其後は久しく之を見ず。

右にて記述を終りたるが、尙不備誤謬等の點多かるべく、是等は各位の高教を仰ぎ、且つ余に於ても一層の研究を重ねんごす。

第二十一圖 說 明

- 1、下面より視たるイヌワシの直線飛翔圖、2、同、位置を變換する場合(稍速力を迅めたる時)、3、同、襲撃時。以上梯尺約二十分一
- 4 1の縮圖 5、2の縮圖、6、襲撃時に於て3に示したるものよりも速力を迅めたる場合、尙二畫像中下方のものは更らに速力を増加せるもの、7はイヌワシの小形寸法、8はトビの大型寸法を表はし兩者を比較したるもの、9、イヌワシ直線飛翔時の正面圖、10、トビ直線飛翔時の正面圖。以上梯尺約百分一

傳書鴿ノ雌雄數

本年(大正十年)産雛鳩中ノ一部ヲ以テ各期ノ産卵、孵化ニ育成スル各一雙ノ卵ノ果シテ如何ナル比例ヲ以テ雌雄ヲ得ルヤニ就キ試験セシ結果ハ左ノ如キ數字ヲ得タリ

試 驗 卵 數		上 記 ヨ リ 生 セ シ 雌 雄 別	各 一 雙 ノ 雛 ガ 雌 雄 一 方 ニ 偏 シ ヌ ハ 兩 性 ヲ 生 ジ タ ル 回 數
一六〇		雄	八五
(八〇双卵)		雌	七五
		兩 性	五三

之ニ依テ之ヲ見レバ各雙ヨリ生ズル雛ハ多クノ場合兩性ヲ産スルモ乍然兩性ヲ産スルガ通常トハ斷言スルコト能ハザル結果ヲ得タリ(中野軍用鳩調査委員事務所 大正十年十一月々報)

四國産鳥類の調査

藤田昌世

(一) 四國産鳥類目録

×印……………内田氏日録ニアルモノ・○印………確ニ四國ニテ産卵育雛スルモノ

	1	<i>Colymbus septentrionalis</i> (L.)	アビ
	2	<i>Colymbus arcticus</i> (L.)	オホハム
○	3	<i>Podiceps fluviatilis philippensis</i> (Ben)	カイツブリ
	4	<i>Podiceps nigricollis</i> (Brehm)	ハジロカイツブリ
×	5	<i>Puffinus leucomelas</i> (Temm.)	オホミヅナギドリ
	6	<i>Phalacrocorax corbo</i> (L.)	ウミウ
×	○	<i>Nycticorax nycticorax</i> (L.)	ゴキサギ
	○	<i>Ardea cinerea</i> L.	アチサギ
	○	<i>Ardetta sinensis</i> (Gmel.)	ヨシゴキ
	10	<i>Herodias garzetta</i> (L.)	コサギ
	11	<i>Tadorna cornuta</i> (S. G. Gmel.)	ツクシガモ
	12	<i>Aex galericulata</i> (L.)	オシドリ
	13	<i>Anas boschas</i> L.	マガモ
○	14	<i>Anas zonorhyncha</i> Swinhoe.	カルガモ
	15	<i>Eunetta falcata</i> Georgi.	ヨシガモ
	16	<i>Nettion crecca</i> L.	コガモ
	17	<i>Nettion formosum</i> (Georgi)	トモエガモ
	18	<i>Dafila acuta</i> (L.)	チナガガモ
	19	<i>Spatula clypeata</i> (L.)	ハシビロガモ
	20	<i>Marena penelope</i> L.	ヒドリガモ
	21	<i>Oidemia americana</i> Swains.	クロガモ
	22	<i>Mergus merganser</i> (L.)	カハアイサ
	23	<i>Mergus serrator</i> L.	ウミアイサ
	24	<i>Anser albifrons</i> (Scopoli)	マガン
	25	<i>Accipiter gularis</i> (Temm. & Schl.)	エツサイ
	26	<i>Haliaetus albicilla</i> (L.)	チジロワシ
	27	<i>Spizaetus nipalensis</i> (Hodgson)	クマタカ
○	28	<i>Buteo vulgaris</i> (Leach)	ノスリ
○	29	<i>Butastur indicus</i> (Gmel.)	サシバ
○	30	<i>Milvus ater melanotis</i> (T. & S.)	トビ
×	31	<i>Falco subbuteo</i> (Linn.)	チゴハヤブサ
×	32	<i>Falco tinnunculus japonicus</i> (T. & S.)	チヨウゲンボウ
×	33	<i>Pandion haliaetus</i> (Linn.)	ミサゴ
×	○	<i>Phasianus versicolor</i> (Vieillot)	キジ
×	○	{ <i>Phasianus scintillans</i> (Gould)	ヤマドリ } <small>シコクヤマ ドリ なる ん(編輯者 記す)</small>
		{ <i>Phasianus soemmerringi</i> (Temm.)	

×	36	<i>Coturnix japonica</i> T. & S.	ウヅラ
×	37	<i>Porzana pusilla</i> (Pallas)	ヒメクキナ
×	38	<i>Porzana fusca</i> (Linn.)	ヒクキナ
×	39	<i>Porzana exguisita</i> Swinhoe.	シマクキナ
×	40	<i>Rallus aquaticus indicus</i> (Blyth)	クキナ
	41	<i>Gallixrex cinereus</i> (Gmel.)	ツルクキナ
○	42	<i>Gallinula chloropus</i> L.	バン
	43	<i>Fulica atra</i> L.	オホバン
	44	<i>Streptilas interpres</i> (L.)	キヨウジヨシギ
×	45	<i>Charadrius fulvus</i> (Gmel.)	ムナグロ
×	46	<i>Charadrius placidus</i> (Gray)	イカルチドリ
	47	<i>Charadrius minor</i> Wolf & Meyer	コチドリ
	48	<i>Charadrius mongolicus</i> Pallas.	メダイチドリ
	49	<i>Lobivanellus cinereus</i> (Blyth)	ケリ
	50	<i>Vanellus vulgaris</i> Bechsteins.	タゲリ
	51	<i>Numenius phaeopus variegatus</i> (Scop.)	チユウシヤクシギ
	52	<i>Totanus incanus brevipes</i> (Vieillot)	キアシシギ
	53	<i>Totanus glareola</i> (L.)	タカブシギ
	54	<i>Totanus hypoleucus</i> (L.)	イソシギ
×	55	<i>Totanus ochropus</i> (Linn.)	クサシギ
×	56	<i>Tringa acuminata</i> Horsfield.	ウヅラシギ
×	57	<i>Gallinago coelestris</i> (Frenz.)	タシギ
	58	<i>Gallinago megalala</i> Swinhoe.	チウシギ
	59	<i>Gallinago australis</i> (Latham)	オホゲシギ
	60	<i>Scolopax rusticola</i> (L.)	ヤマシギ
×	61	<i>Rostratula capensis</i> (Linn.)	タマシギ
×	62	<i>Larus tridactylus</i> (Linn.)	ミユビカモメ
×	63	<i>Larus canus</i> (L.)	カモメ
×	64	<i>Larus vegøe</i> (Palmén)	セグロカモメ
×	65	<i>Larus crassirostris</i> (Vieillot)	ウミネコ
	66	<i>Sterna longipennis</i> Nordmann.	アジサシ
	67	<i>Synthliboramphus antiquus</i> (Gmel.)	ウミスズメ
×	68	<i>Turtur orientalis</i> (Latham)	キジバト
×	69	<i>Carpophaga ianthina</i> (Temm.)	カラスバト
	70	<i>Sphenocercus sieboldi</i> (Temm.)	アオバト
	71	<i>Cuculus scanorus</i> L.	カツコウ
×	72	<i>Cuculus poiocephalus</i> (Latham)	ホト、ギス
×	73	<i>Hierococyx fugax</i> (Horsf.)	ゲウウイチ
×	74	<i>Eurystomus orientalis</i> (Linn.)	ブツホウソウ

×○	75	<i>Alcedo bengalensis</i> Gmel.	カハセミ
×	76	<i>Halcyon coromanda</i> (Latham)	ミヤマシヨウビン
×	77	<i>Scops japonicus</i> T. & S.	コノハヅク
×	78	<i>Scops semitorques</i> (T. & S.)	オホコノハヅク
×	79	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)	アオバツク
	80	<i>Strix uralensis</i> Pallas.	フクロウ
×	81	<i>Strix uralensis fuscescens</i> (T. & S.)	キウシウ <small>キウシウフ</small> フクロウ <small>クロシのみ</small>
×	82	<i>Asio otus</i> Linn.	フクロウ <small>ならん(延</small> トラフヅク <small>考者記す)</small>
×○	83	<i>Caprimulgus jotaka</i> T. & S.	ヨタカ
×	84	<i>Cypselus pacificus</i> (Latham)	アマツバメ
×	85	<i>Picus leuconotus subcirris</i> (Stejn.)	オホアカゲラ
×	86	<i>Picus namiyei</i> (Stejn.)	ナミエゲラ
×	87	<i>Iyngipicus kisuki seebohmi</i> Hargitt.	コゲラ
×	88	<i>Lynx torquilla</i> L.	アリスヒ
×○	89	<i>Alauda arvensis japonica</i> (T. & S.)	ヒバリ
×	90	<i>Motacilla boarula melanope</i> (Pallas)	キセキレイ
×○	91	<i>Motacilla japonica</i> Swinhoe.	セグロセキレイ
×	92	<i>Motacilla alba lugens</i> Kittl.	ハクセキレイ
	93	<i>Anthus maculatus</i> (Hodgson)	ビンスキ
×	94	<i>Anthus spinoletta japonicus</i> (T. & S.)	タヒバリ
×	95	<i>Hypsipetes amaurotis</i> (Temm.)	ヒヨドリ
×○	96	<i>Terpsiphone princeps</i> (Temm.)	サンコウチヨウ
×	97	<i>Muscicapa latirostris</i> (Raffles)	コサメビタキ
×	98	<i>Xanthopygia narcissina</i> (Temm.)	キヒタキ
×	99	<i>Niltava cyanomelana</i> (Temm.)	オホルリ
×	100	<i>Turdus dauma aureus</i> (Holander)	トラツグミ
×	101	<i>Turdus fuscatus</i> Pall.	ツグミ
×	102	<i>Turdus naumanni</i> Temm.	ハチジヨウツグミ
×	103	<i>Turdus chrysolaus</i> Temm.	アカハラ
×	104	<i>Turdus pallidus</i> Gmel.	シロハラ
×	105	<i>Turdus sibiricus</i> Pall.	マミジロ
×	106	<i>Turdus cardis</i> Temm.	クロツグミ
×○	107	<i>Monticola solitaria</i> (P. L. S. Mill.)	イソヒヨドリ
×○	108	<i>Erithacus akahige</i> (Temm.)	コマドリ
×	109	<i>Erithacus calliope</i> (Pallas.)	ノゴマ
×	110	<i>Ruticilla aureora</i> (Gmel.)	ジヨウビタキ
×	111	<i>Torsiger cyanurus</i> (Fall.)	ルリビタキ
×○	112	<i>Aerocephalus orientalis</i> (Temm.)	オホヨシキリ
	113	<i>Cisticola cisticola</i> (Sharpe)	セツカ

× 114 *Cettia squamiceps* Sw.
 ×○ 115 *Cettia cantans* (T. & S.)
 × 116 *Phylloscopus xanthodryas* Sw.
 × 117 *Phylloscopus coronatus* Temm.
 × 118 *Regulus cristatus orientalis* Seeb.
 × 119 *Cinclus pallasi* Temm.
 120 *Troglodytes fumigatus* (Temm.)
 ×○ 121 *Hirundo rustica gutturalis* (Scop.)
 ○ 122 *Hirundo drurica nipalensis* (Hodg.)
 × 123 *Pericrocotus cinereus* Lafr.
 × 124 *Ampelis japonicus* Sieb.
 ×○ 125 *Lanius bucephalus* (T. & S.)
 126 *Lanius sphenocercus* (Cabanis)
 × 127 *Sitta caesia amurensis* (Sw.)
 × 128 *Parus major minor* (T. & S.)
 × 129 *Parus varius* (T. & S.)
 × 130 *Acredula trivirgata* (T. & S.)
 ×○ 131 *Corvus macrorhynchus japonensis* Bp.
 × 132 *Garrulus japonicus* (T. & S.)
 133 *Spodiopsar cineraceus* (Temm.)
 ×○ 134 *Zosterops japonica* (T. & S.)
 × 135 *Coccothraustes vulgaris japonicus* (T. & S.)
 × 136 *Eophona personata* T. & S.
 × 137 *Loxia curvirostra curvirostra* Linn.
 138 *Uragus sanguinolenta* T. & S.
 × 139 *Fringilla montifringilla* L.
 × 140 *Chrysomitris spinus* (Linn.)
 × 141 *Fringilla kawarahiba major* T. & S.
 ×○ 142 *Fringilla kawarahiba minor* T. & S.
 × 143 *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* Lafr.
 { *Pyrrhula pyrrhula rosacea* Seeb.
 ×○ 144 *Prsser montanus* (Linn.)
 × 145 *Passer rutilaus* Temm.
 × 146 *Emberiza fucata* (Pall.)
 × 147 *Emberiza pusilla* (Pall.)
 ×○ 148 *Emberza ciopsis* Bp.
 × 149 *Emberiza elegans* Temm.
 × 150 *Emberiza personata* Temm.
 × 151 *Emberiza variabilis* Temm.
 × 152 *Emberiza rustica* Pall.

ヤブサメ
 ウグヒス
 メボソ
 センダイムシクヒ
 キクイタダキ
 カハガラス
 ミソサライ
 ツバメ
 コシアカツバメ
 サンジヨクヒ
 ヒレンジヤク
 モツ
 オホカラモツ
 ゴジユウカラ
 シジユウカラ
 ヤマガラ
 エナガ
 ハシブトガラス
 カケス
 ムクドリ
 メジロ
 シメ
 イカル
 イスカ
 ベニマシコ
 アトリ
 マヒワ
 オホカラヒワ
 コカラヒワ
 ウソ } 同亜種なり
 テリウム } 編輯者記す
 スバメ
 ニウナイスバメ
 ホアカ
 コホアカ
 ホヰロ
 ミヤマホヰロ
 アオヰ
 クロヰ
 カシラダカ

(二) 土佐産鳥類測定表

1. *Colymbus arcticus* (L.) オホハム

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗趾	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	II, 1917	スクモ	分 188	分 92	分 20	分 16½	分 24	分 外 29 中 26½	分 3½	?	匁 400	尾羽数 18 後趾高シ

2. *Clymbus septentrionalis* (L.) アビ

a.	II, 1917	スクモ	188	86	16½	17	24	外 28½ 中 25	3½	?	350	尾羽数 20 後趾高シ
----	----------	-----	-----	----	-----	----	----	---------------	----	---	-----	-------------------

3. *Podiceps fluviatilis philippensis* (Bon.) カイツブリ

a.	I, 1917	スクモ	79½	34	?	6⅔	11	14½(爪共)	?	?	匁 50	
b.	X, 1917	ク	82	34	?	7½	10	16½(ク)	?	?	46	
c.	27/X, 1920	ク	90	30	?	6½	10	15(ク)	?	?	41	

4. *Podiceps nigricollis* (Brehm) ハジロカイツブリ

a.	¹¹ /XII, 1919	スクモ	98	41½	12	8	15	20(爪共)	?	?	72	
----	--------------------------	-----	----	-----	----	---	----	--------	---	---	----	--

5. *Nycticorax nycticorax* (Linn.) ゴキサギ

a.	I, 1917	スクモ	189	92½	34½	21½	25	22½	中	5	?	135	幼鳥
b.	ク	ク	177	91	34	22	25½	22½	中	5	?	140	
c.	II, 1917	ク	200	92½	34	23	25½	23	中	5	?	161	
d.	VII, 1920	ク	165	90	35	24	23	22	中	5	♀	118	病鳥?

6. *Ardea cinerea* L. アオサギ

a.	XI, 1919	スクモ	295	145	52	39	50	30	4½	♂	300	幼鳥
b.	XII, 1919	ク	310	148	65	37	52	30	5	?	370	

7. *Ardetta sinensis* (Gmel.) ヨシゴキ

a.	X, 1917	スクモ	115	47	13½	16	16	16	3½	♀	40	
b.	¹⁶ /X, 1917	ク	116	47	14½	17½	15	15	3⅔	♂	40	
c.	¹⁵ /XI, 1918	ク	?	47	?	17½	15	?	?	♀	29½	
d.	¹⁷ /IX, 1919	ク	122	47	14½	17	14	13	4	♂	34	
e.	ク	ク	122	44	14½	16	14	13	4	♀	38	

8. *Tadorna cornuta* (S. G. Gmel.) ツクシガモ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分	分	分	分	分	
a.	I, 1917	スクモ	215	111	36½	16½	18	20	4	♂	270	

9. *Aex galericulata* (L) オシドリ

	年月日	場所	分	分	分	分	分	分	分	分	雌雄	重サ
			分									
a.	XII, 1917	スクモ	152	74½	37	11	13	15	2½	♂	155	
b.	I, 1918	ク	145	73	33½	10	13½	15	2½	♀	152	
c.	ク	ク	152	79	40	10	13½	15	2½	♂	176	
d.	ク	ク	139	76	35	9	13½	15	2	♀	141	

10. *Anas boschas* L. マガモ

	年月日	場所	分	分	分	分	分	分	分	分	雌雄	重サ
			分									
a.	I, 1917	スクモ	200	92½	35	19	16	20	3½	♂	335	
b.	ク	ク	190	86	29	18	14	18	3½	♂	300	
c.	ク	ク	175	86	30	18	15½	18	2½	♀	285	
d.	II, 1917	ク	192	91	30	19	15	18	3½	♂	296	
e.	I, 1918	ク	183	88	30	18	15	18	2½	♂	260	
f.	ク	ク	177	83	30	16½	14	16½	3½	♀	270	
g.	XII, 1918	ク	187	92½	30	18	15	20	4	♂	220	

11. *Anas zonorhyncha* Swinhoe. カルガモ

a.	XII, 1918	スクモ	179	86	?	17½	16	20	4	♂	240	
----	-----------	-----	-----	----	---	-----	----	----	---	---	-----	--

12. *Eunetta falcata* Georgi. ヨシガモ

	年月日	場所	分	分	分	分	分	分	分	分	雌雄	重サ
a.	XI, 1916	スクモ	158	83	27	14½	15	15½	3	♂	?	
b.	ク	ク	158	83	25½	14½	11½	16	3	♀	192	
c.	XII, 1916	ク	148	78	23	14	13	16	3	♀	188	
d.	ク	ク	152	73	25	14	13	16	3	♀	153	
e.	ク	ク	152	83	27½	15½	13	15½	3	♂	214	
f.	I, 1917	ク	162	83	25	15½	14	16½	3	♂	219	
g.	ク	ク	158	83	26	14	13½	16½	3	♂	212	
h.	I, 1918	ク	165	83½	25	14½	13	16½	3	♂	215	
i.	ク	ク	152	78	28	14	13	16	2½	♀	175	
j.	ク	ク	152	80	27	15	13	17	2½	♂	193	
k.	ク	ク	146	80	25	13½	13	16	2½	♀	170	

13. *Nettion crecca* L. コガモ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分	分	分		匁	
a.	XI, 1916	スクモ	119	60	23	22	10	31	3	♂	68	
b.	〃	〃	119	60	22½	22	10	33	2	♀	73	

14. *Nettion formosum* (Georgi) トモエガモ

a.	20/III, 1920	スクモ	130	65	31	13	12	13	3	♂	102	
----	--------------	-----	-----	----	----	----	----	----	---	---	-----	--

15. *Dafila acuta* (L.) ナナガガモ

a.	XII, 1916	スクモ	158	80½	30	15	14	16½	3½	♀	188	
----	-----------	-----	-----	-----	----	----	----	-----	----	---	-----	--

16. *Spatula clypeata* (L.) ハシビロガモ

a.	I, 1917	スクモ	152	76	26	22	12	14½	3	♂	116	幼
b.	I, 1919	〃	163	78½	28	22	13	14½	3½	♂	137	

17. *Marca penelope* L. ヒドリガモ

a.	XI, 1916	スクモ	165	82	33	11½	13	15	3	♂	180	幼
b.	XII, 〃	〃	163	84	30	11½	13	15½	3	♂	172	
c.	XI, 〃	〃	165	86	33	12	13	16	3	♂	210	
d.	XII, 〃	〃	145	79½	28	11	12½	15	3	♀	170	
e.	〃	〃	155	82	28	11	14	16	3	♂	175	
f.	I, 1917	〃	162	82	34	12	13	17	3	♂	198	
g.	II, 〃	〃	148½	81	30	11	11	15	3	♀	154	

18. *Oidemia americana* Swains. クロガモ

a.	I, 1917	スクモ	143	69½	19	14	10½	18½	2½	♀	230	
----	---------	-----	-----	-----	----	----	-----	-----	----	---	-----	--

19. *Accipiter gularis* (Temm. & Schl.) ツミ

a.	27/X, 1917	スクモ	87	53	38	5½	16	10	3½	♀	109	
----	------------	-----	----	----	----	----	----	----	----	---	-----	--

20. *Haliaetus albicilla* (L.) ナジロフシ

a.	IV, 1921	トサ	?	190	128	33	30	26	13	?	?	
----	----------	----	---	-----	-----	----	----	----	----	---	---	--

21. *Spizaetus nipalensis* (Hodgson) クマタカ

a.	?	トサ	?	155	110	15	40	20	15	?	?	
----	---	----	---	-----	-----	----	----	----	----	---	---	--

22. *Buteo vulgaris* (Leach) ノスリ

a.	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
	XII, 1916	スクモ	分 176	分 125	分 76	分 11	分 23	分 12½	分 11½	?	匁 240	

23. *Butastur indicus* (Gmel.) サシバ

a.	13/IX, 1920	スクモ	138	90	60	6½	18	10	5	?	?	1919 年生
----	-------------	-----	-----	----	----	----	----	----	---	---	---	---------

24. *Milvus ater melanotis* (T. & S.) トビ

a.	XII, 1916	スクモ	202	158	89	13	20	15	7½	♀	270	
b.	〃	〃	211	162	105	13	20	15	7½	♀	305	

25. *Pandion haliaetus* (Linn.) ミサゴ

a.	XII, 1916	スクモ	195	158	71	15	20	19	13	♂	400	
b.	7/III, 1920	〃	180	155	68	12½	18	15	10	♀	360	

26. *Phasianus versicolor* (Vieillot) キチ

a.	XI, 1916	スクモ	221	79½	105½	9½	23	16½	5	♂	250	
b.	〃	〃	188	64½	79½	8½	22	15½	4	♀	?	
c.	XII, 〃	〃	178	67½	66	8½	23	16½	4	♀	200	
d.	〃	マスタダ	244	73¾	119	10	23	16½	5	♂	270	
e.	〃	スクモ	238	71	125½	10	23	16½	5	♂	250	
f.	〃	〃	188	66	79½	8½	21	15½	5	♀	220	
g.	I, 1917	〃	186½	67½	79½	9	21	15½	5	♀	196	
h.	〃	〃	195	67½	82½	8½	22	16	5½	♀	240	
i.	〃	〃	185	66	79½	8½	22	16	4½	♀	225	
j.	II, 1917	〃	177	66	72½	?	21½	15½	4¾	♀	200	
k.	XII, 1918	マスタダ	264	76	140	10	23	18	5½	♂	350	
l.	〃	〃	186½	66	82	8½	20½	16	4¾	♀	220	
m.	I, 1919	ヒロミ	230	76	119	10	24½	17½	4½	♂	285	
n.	〃	ヒロミ	228	76	119	10½	21½	18	4½	♂	285	

27. *Phasianus scintillans* (Gould) ヤマドリ (シヨクヤマドリ ならん)
(一編輯者記す)

a.	I, 1920	スクモ	425	70	273	8	22	16	5½	♂	?	
----	---------	-----	-----	----	-----	---	----	----	----	---	---	--

Phasianus Socommerringi Temm. アカヤマドリ(前者と同一ならん—編輯者記す)

a.	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分 455	分 73	分 275	分 9	分 20	分 18	分 5	♂ ♀ ?		

28. Coturnix japonica T. & S. ウヅラ

a.	XII, 1916	スクモ	67½	34½	14	4½	8½	8	2	♂	33	
b.	I, 1917	ク	63	33	13½	4	8½	7½	2	♂	30½	
c.	ク	ク	63	33	14	4	8½	7½	2	♀	25	
d.	ク	ク	69½	34½	16½	4½	9½	8	2	♀	32	
e.	ク	イヨ	60½	33	14½	3½	8½	6½	1½	?	?	
f.	II, ク	スクモ	66	33½	15	4½	9	8	2	?	25	
g.	XII, ク	ク	63	32½	13	4	9	7½	2	?	22½	
h.	XI, 1918	ク	63	33	14½	3½	9	7½	2	♀	28	
i.	XII, ク	イヨ	64½	33	14½	4½	9	8	2	♂	28	
j.	ク	ク	66	32	13½	4	9	7½	2	♂	25	
k.	ク	ク	67	33½	14	4	9½	8	2	♀	25	
l.	I, 1919	スクモ	63	33½	12½	4½	9½	7½	2	♂	27	

29. Porzana fusca (Linn.) ヒグキナ

a.	XI, 1916	スクモ	?	36½	6	7	12½	12½	2½	?	34	
b.	X, 1917	ク	?	36½	17½	7	12	13	2½	?	21½	
c.	XI, 1918	ク	?	36	17½	6½	12½	13	2½	?	22½	

30. Rallus aquaticus indicus (Blyth) クキナ

a.	I, 1917	スクモ	92	40	17½	12½	14	14	2½	♂	36	
b.	VI, ク	ク	89	39	17½	12½	13	14½	2½	?	?	
c.	XII, ク	ク	87	40	16½	11½	13	13	2½	♀	?	
d.	XI, 1918	ク	93	44	19	12½	14½	14½	2½	♂	36	

31. Gallicrex cinereus (Gmel.) ツルグキナ

a.	13/X, 1917	スクモ	110½	69½	25½	12½	20½	21½	4½	♀	?	
----	------------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	----	---	---	--

32. Gallinula chloropus L. バン

a.	I, 1916	スクモ	?	53	24½	11½	16	20	4½	♂	69	
b.	ク	ク	?	51½	23½	9	14	18	2½	♀	50	
c.	17/X, 1919	ク	112	53	22	12	16	19½	4	♂	68	
d.	ク	ク	97	32	15	8½	15	17	2½	?	55½	幼

33. *Fulica atra* L. オホバン

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峯	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分	分	分	分	分	
a.	2/XII, 1919	スクモ	140	67	24	14	20	25	4	?	149	

34. *Streptilas interpres* (L.) キヨウジヨシギ

a.	15/IV, 1921	コウチ	76	50	22	6 $\frac{1}{2}$	8	7	2	♀	20	
----	-------------	-----	----	----	----	-----------------	---	---	---	---	----	--

35. *Charadrius fulvus* (Gmel.) ムナグロ

a.	15/IV, 1919	スクモ	82 $\frac{1}{2}$	57 $\frac{1}{2}$	25	8	15	9	2	♂	27 $\frac{1}{2}$	
b.	17/X, 1919	ク	86	55	21	8	15	9	2	♀	41	
c.	ク	ク	86	53	20	7 $\frac{1}{2}$	15 $\frac{1}{2}$	8	2	♀	41	
d.	ク	ク	84	52	19	7 $\frac{1}{2}$	15	8	2	♂	35	
e.	ク	ク	84	52	19	7 $\frac{1}{2}$	14	8	2	♂	35	
f.	ク	ク	?	53	19	7 $\frac{1}{2}$	14 $\frac{1}{2}$	8	2	?	?	
g.	ク	ク	82	55	22	7 $\frac{1}{2}$	15	9 $\frac{1}{2}$	2	♀	45	
h.	15/IV, 1921	コウチ	85	58	?	7 $\frac{3}{8}$	15	8 $\frac{1}{2}$	2	?	23	

36. *Charadrius placidus* (Gray) イカルチドリ

a.	I, 1917	スクモ	68 $\frac{1}{2}$	46 $\frac{1}{2}$	25	7	11 $\frac{1}{2}$	7 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{2}{3}$	♀	16	
b.	17/X, 1920	ク	72	46	24 $\frac{1}{2}$	7	10	7 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$?	17	

37. *Vanellus vulgaris* Bechstein. タゲリ

a.	XI, 1920	スクモ	?	71 $\frac{1}{2}$	43	8	14	8	2	?	?	
----	----------	-----	---	------------------	----	---	----	---	---	---	---	--

38. *Numenius phaeopus variegatus* (Scopoli) チウシヤクシギ

a.	16/X, 1917	スクモ	124	74	26 $\frac{2}{3}$	23	18 $\frac{1}{2}$	11 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{2}{3}$?	84	
b.	19/IX, 1918	ク	145	78	30 $\frac{1}{2}$	26	21	13	2 $\frac{2}{3}$?	128	

39. *Totanus incanus brevipes* (Vieillot) キアシシギ

a.	16/X, 1917	スクモ	92 $\frac{1}{2}$	50 $\frac{1}{2}$	23 $\frac{1}{3}$	13 $\frac{1}{3}$	11 $\frac{1}{3}$	9 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{3}$?	31	尾羽数 12枚
b.	17/X, 1919	ク	85	52	22	12	11 $\frac{1}{2}$	9	1 $\frac{1}{2}$?	33	12

40. *Totanus glareola* (L.) タカブシギ

a.	16/X, 1919	スクモ	72	42	15	10	12 $\frac{1}{2}$	9	1 $\frac{2}{3}$?	19 $\frac{1}{2}$	尾羽 12枚
----	------------	-----	----	----	----	----	------------------	---	-----------------	---	------------------	-----------

41. Totanus hypoleucus (L.) イソシギ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	XI, 1916	スクモ	分 64 $\frac{1}{2}$	分 33	分 16 $\frac{1}{2}$	分 8 $\frac{1}{2}$	分 8	分 7	分 1 $\frac{1}{2}$	♂	匁 12	尾羽数 12枚
b.	I, 1917	ク	61	34 $\frac{1}{2}$	18 $\frac{1}{2}$	8 $\frac{1}{2}$	8	6 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$	♀	12 $\frac{1}{2}$	

42. Totanus ochropus (L.) クサシギ

a.	XII, 1916	スクモ	73	46 $\frac{1}{2}$	20	11	11 $\frac{1}{2}$	9	1 $\frac{2}{3}$	♀	20	
b.	X, 1919	ク	76	46	20	10 $\frac{1}{2}$	12	9	1 $\frac{1}{2}$	♀	20.2	
c.	ク	ク	76	46	20	11	11 $\frac{1}{2}$	9 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$	♀	20.7	

43. Tringa acuminata Horsfield. ウヅラシギ

a.	15/X, 1919	スクモ	67	42 $\frac{1}{2}$	20 $\frac{1}{2}$	8	9 $\frac{1}{2}$	8	1 $\frac{1}{2}$	♀	?	
----	------------	-----	----	------------------	------------------	---	-----------------	---	-----------------	---	---	--

44. Gallinago coelestris (Frenz.) タシギ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	XI, 1916	スクモ	86	43 $\frac{1}{3}$	19 $\frac{2}{3}$	21 $\frac{1}{3}$	10	10	2	♀	24	尾羽数 14
b.	XII, 1916	ク	86	43 $\frac{1}{3}$	19 $\frac{1}{3}$	21 $\frac{1}{3}$	10 $\frac{1}{3}$	10 $\frac{1}{3}$	2 $\frac{1}{2}$	♂	25	14
c.	ク	ク	86	43 $\frac{1}{3}$	19 $\frac{1}{3}$	21 $\frac{1}{3}$	11	10 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$	♀	22	14
d.	I, 1917	ク	91	42	19	23 $\frac{1}{3}$	11	11	2 $\frac{1}{2}$	♀	25	14
e.	II, 1917	ク	84	41 $\frac{1}{2}$	19 $\frac{2}{3}$	19 $\frac{2}{3}$	10	10 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{2}{3}$	♀	24	ク
f.	ク	ク	89	43	19 $\frac{1}{2}$	21 $\frac{2}{3}$	10 $\frac{1}{3}$	10 $\frac{2}{3}$	2	♀	25 $\frac{1}{3}$	ク
g.	ク	ク	87	41 $\frac{2}{3}$	18 $\frac{1}{2}$	20 $\frac{2}{3}$	10 $\frac{2}{3}$	11 $\frac{1}{3}$	2 $\frac{1}{3}$	♀	23 $\frac{1}{2}$	ク
h.	ク	ク	91 $\frac{1}{2}$	44 $\frac{2}{3}$	20 $\frac{1}{2}$	22	11	10 $\frac{2}{3}$	2	♀	26 $\frac{1}{2}$	ク
i.	ク	ク	87	42 $\frac{2}{3}$	18 $\frac{2}{3}$	21 $\frac{1}{3}$	11 $\frac{1}{3}$	11	2 $\frac{1}{3}$	♀	25	ク
j.	ク	ク	87	42 $\frac{2}{3}$	19 $\frac{1}{3}$	21 $\frac{1}{2}$	11 $\frac{1}{3}$	11	2	♀	23 $\frac{1}{2}$	ク
k.	X, 1919	ク	87	42 $\frac{1}{3}$	18	21	10	11	2	♀	22 $\frac{1}{3}$?
l.	XII, 1919	ク	86 $\frac{2}{3}$	43	18 $\frac{2}{3}$	22 $\frac{1}{2}$	11	11	2 $\frac{1}{3}$	♀	28	14
m.	X, 1919	ク	87	44	20	20	10	10 $\frac{1}{2}$	2	♂	27 $\frac{1}{3}$	12
n.	14/IV, 1921	コウチ	82	42	20	21	10 $\frac{1}{2}$	10	2 $\frac{1}{2}$	♀	?	14

45. Gallinago megalis Swinhoe チウシギ

a.	13/IV, 1921	コウチ	96	46	21	25	11	11	2	♂	33	尾羽数 20
b.	15/IV 1921	ク	96	44	20	24	12	12	2	♀	33	20
c.	ク	ク	99	45	20	24 $\frac{1}{2}$	12	12	2	♀	32	20
d.	ク	ク	92	44	21	18	11	12	2	♀	34	20
e.	ク	ク	93	45	21	24	13	12	2 $\frac{1}{3}$	♀	31	18 ♀
f.	ク	ク	100	43	19	23 $\frac{1}{2}$	12 $\frac{1}{2}$	12	2	♀	31	18 ♀

46. *Gallinago australis* (Latham) オホヰシギ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分					
a.	14/IV, 1921	コウチ	100	52	21	23	12	12	3	♀	37	尾羽数 18枚
b.	15/IV, ㄥ	ㄥ	99	51	18	22	12½	11	3	?	?	18枚

47. *Scolopax rusticola* (L.) ヤマシギ

a.	II, 1917	スクモ	122	66	28½	25½	12¾	13½	2½	♂	80	12枚
b.	ㄥ	ヒロミ	114	61½	27½	25½	12¾	12¾	2½	?	76	ㄥ
c.	I, 1918	ナカスギ	122	61½	30	27½	13½	13½	2½	?	80	ㄥ
d.	I, 1919	ヒロミ	117	64½	27¾	27	13½	13½	2½	♀	83	

48. *Rostratula capensis* (Linn.) タマシギ

a.	16/X, 1920	スクモ	80	40	1	14½	14½	12	2½	♂	36	10枚
----	------------	-----	----	----	---	-----	-----	----	----	---	----	-----

49. *Larus canus* (L.) カモメ

a.	XII, 1916	スクモ	147	119	48	15	16½	15	2½	♀	?	
----	-----------	-----	-----	-----	----	----	-----	----	----	---	---	--

50. *Larus vegae* (Palmén) セクロカモメ

a.	XII, 1918	スクモ	193	142	58¾	17¾	22½	18¾	3¾	?	?	幼
b.	ㄥ	ㄥ	198	142	58¾	16½	23	18¾	4	?	?	幼

51. *Larus crassirostris* (Vieillot) ウミネコ

a.	XII, 1918	スクモ	157	112½	44	15	16½	14	2¾	?	?	
b.	ㄥ	ㄥ	162	119	43	15½	17	14½	3	?	?	幼
c.	ㄥ	ㄥ	165½	120	43	17	18	15	3	?	?	

52. *Synthliborhamphus antiquus* (Gmel.) ウミスズメ

a.	II, 1917	スクモ	84	44	10	5	8	8½	2¾	?	63	
b.	ㄥ	ㄥ	84	44	10	4¾	8½	8½	2½	?	62	
c.	7/III, 1920	ㄥ	82	46	15	5	9	9	2	♂	57	
d.	ㄥ	ㄥ	85	47	13	5	9	9	2½	♀	?	

53. *Turtur orientalis* (Latham) キジバト

	年月日	場所	全長	翼長	長尾	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分					
a.	XI, 1916	スクモ	109	63	39½	5½	9½	9½	2½	?	63	
.	I, 1917	ク	109	63½	44½	5½	8½	9	3	?	62	
c.	ク	ク	102	61	42½	5½	8	8½	3	♀	54	
d.	ク	イヨ	106	61	39½	5½	9	8½	2½	?	?	
e.	II, ク	スクモ	111	63	46½	5½	9½	9½	3	?	70	
f.	ク	ヒロミ	109	61	43½	5½	9	8½	2½	?	61	
g.	19/X, 1919	スクモ	110	60	42	5½	0	9	3	?	57	

54. *Sphenocercus sieboldi* (Temm.) アオバト

a.	XII, 1918	スクモ	114	64	40½	6	8	9	6½	♀	70½	
----	-----------	-----	-----	----	-----	---	---	---	----	---	-----	--

55. *Cuculus canorus* (L.) カツコウ

a.	16/X. 1919	スクモ	110	68	55	7	7	7	3	?	44	
----	------------	-----	-----	----	----	---	---	---	---	---	----	--

56. *Alcedo bengalensis* Gmel. カワセミ

a.	XII, 1917	スクモ	56½	24	11	12½	3½	4½	2	?	8½	
b.	XI, 1919	ク	57½	23½	10	12	3	5	1½	♂	8	

57. *Scops semitorques* (T. & S.) オホコノハヅク

a.	29/I, 1920	スクモ	82	59	33	14	8½	6	9	♀	?	
----	------------	-----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	--

58. *Strix uralensis fuscescens* (T. & S.) キウシウフクロウ

a.	XII, 1917	スクモ	165	111	80	13½	17½	12½	9	?	177	
----	-----------	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	---	---	-----	--

59. *Iyngipicus kisuki seebohmi* Hargitt. コゲラ

a.	II, 1917	ヒロミ	46½	27½	16½	5½	5	中 外	3.5 4.3	2½	♀	5
b.	I, 1918	スクモ	46½	27½	16½	5½	4½	中 外	2.7 4.3	2½	♀	5
c.	XII, ク	イヨ	46½	26½	16	5½	5	中 外	4 4.3	2½	♂	5.3
d.	14/IV, 1919	ク	44½	27½	18½	4½	5	中 外	3.7 4.3	2½	♀	5.7

60. *I n x tarquilla* L. アリスイ

a.	20/X. 1919	スクモ	57	27	23	5	6½	6	2½	♂	6.8	
----	------------	-----	----	----	----	---	----	---	----	---	-----	--

61. *Motacilla boarula melanope* (Pallas) キセキレイ

a.	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
			分	分	分	分	分					
	20/X, 1920	スクモ	60	27	26	4	6	5	1 $\frac{1}{2}$?	?	

62. *Motacilla japonica* Swinhoe セグロセキレイ

a.	I, 1921	スクモ	?	32	33	5	9	5	1 $\frac{1}{2}$?	?	
----	---------	-----	---	----	----	---	---	---	-----------------	---	---	--

63. *Motacilla alba lugens* Kittl. ハクセキレイ

a.	XII, 1916	スクモ	69	31 $\frac{1}{3}$	33	4 $\frac{2}{3}$	8 $\frac{1}{2}$	中後 4 $\frac{1}{2}$ 2 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$ 2 $\frac{1}{3}$?	7	
----	-----------	-----	----	------------------	----	-----------------	-----------------	--	---	---	---	--

64. *Anthus maculatus* (Hodgson) ビンズキ

a.	I, 1917	スクモ	50 $\frac{1}{3}$	26 $\frac{2}{3}$	20	3 $\frac{2}{3}$	7 $\frac{1}{3}$	5	中後 1 $\frac{1}{2}$ 2 $\frac{2}{3}$?	5.85	
----	---------	-----	------------------	------------------	----	-----------------	-----------------	---	--	---	------	--

65. *Anthus spinoletta japonicus* (T. & S.) タヒバリ

a.	I, 1917	スクモ	57 $\frac{1}{3}$	29 $\frac{1}{2}$	22 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{2}{3}$	7	5	中後 1 $\frac{1}{2}$ 3 $\frac{1}{2}$?	6.4	
b.	15/IV, 1919	ク	54 $\frac{1}{2}$	30	22 $\frac{2}{3}$	4 $\frac{1}{3}$	7 $\frac{1}{3}$	6 $\frac{1}{3}$	中後 1 $\frac{1}{2}$ 3 $\frac{2}{3}$?	6.55	

66. *Hypsipetes amantaris* (Temm.) ヒヨドリ

a.	XII, 1916	イ ヨ	96	46 $\frac{1}{2}$	41	7 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$	♂	20.7	
b.	I, 1917	スクモ	94	43	40	8 $\frac{1}{3}$	7 $\frac{1}{3}$	7	2 $\frac{2}{3}$	♂	26.8	
c.	ク	ク	89 $\frac{1}{2}$	40 $\frac{2}{3}$	37 $\frac{2}{3}$	7	7 $\frac{1}{2}$	6 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$?	25	
d.	ク	イ ヨ	89 $\frac{1}{2}$	43	38 $\frac{2}{3}$	8	6 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$	♂	?	
e.	ク	ク	84	40	34 $\frac{2}{3}$	7 $\frac{1}{2}$	6 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	2	♀	?	
f.	II, 1917	スクモ	96	42 $\frac{1}{2}$	38 $\frac{1}{3}$	7 $\frac{2}{3}$	7 $\frac{1}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	3	?	25	
g.	XI, 1918	ク	93	41 $\frac{1}{2}$	40 $\frac{1}{2}$	8 $\frac{1}{3}$	7 $\frac{1}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$?	18.3	
h.	14/IV, 1918	ク	91	42 $\frac{1}{2}$	40	9	6 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{2}$?	17.3	

67. *Turdus daurina* aureus (Holandre) トラツグミ

a.	II, 1917	イ ヨ	96	49	34 $\frac{1}{3}$	10	11 $\frac{2}{3}$	8 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$?	35	尾羽 14
----	----------	-----	----	----	------------------	----	------------------	-----------------	-----------------	---	----	----------

68. *Turdus fuscatus* Pall. ツグミ

a.	XII, 1916	イ ヨ	79 $\frac{1}{2}$	46 $\frac{1}{3}$	33	5 $\frac{2}{3}$	10 $\frac{2}{3}$	8 $\frac{1}{3}$	3	♂	20	
b.	I, 1917	スクモ	77 $\frac{1}{2}$	41 $\frac{1}{2}$	29	5 $\frac{2}{3}$	10 $\frac{2}{3}$	8	2 $\frac{1}{2}$	♀	21	
c.	ク	ク	86	43 $\frac{2}{3}$	32 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{2}{3}$	11	7	3	♀	24	

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
d.	I, 1917	スクモ	分 77½	分 44⅔	分 31½	分 6	分 10⅔	分 8	分 3	♀	24	
e.	ク	ク	77½	40	30	5½	11½	7½	2½	♀	21	
f.	II, ク	ク	76½	42	30	5⅔	10⅔	7	2½	♂	22	
g.	15/IV, 1921	コウチ	80	41	30½	6	11½	7½	2½	♀	20	

69. *Turdus chrysolais* Temm. アカハラ

a.	14/IV, 1919	スクモ	77½	42	32½	7	10	8½	3½	♂	18.6	
----	-------------	-----	-----	----	-----	---	----	----	----	---	------	--

70. *Turdus pallidus* (Gmel.) シロハラ

a.	XII, 1916	イヨ	86	43	30	6½	10	8½	3	♂	20	
b.	I, 1917	スクモ	81	43	32½	6⅔	10⅔	8½	3½	♀	23	
c.	ク	ク	81	40⅔	30½	6⅔	10⅔	8½	8½	♀	24½	
d.	ク	ク	77½	40	30½	6½	10	8	8	♀	20½	
e.	II, ク	ク	81	43	30⅔	6½	10	8½	8½	♂	22	
f.	ク	ク	76	40⅔	30	6½	9½	7⅔	7⅔	♀	15⅔	
g.	14/IV, 1919	ク	77½	42½	32⅔	7½	10½	8⅔	8⅔	♂	23½	

71. *Turdus cardis* Temm. クロツグミ

a.	13/IV, 1921	コウチ	73	36	26	6	9½	7	3	♂	15	
----	-------------	-----	----	----	----	---	----	---	---	---	----	--

72. *Monticola solitarius* (P. L. S. Müll.) イソヒヨドリ

a.	XII, 1916	スクモ	76	40⅔	26½	7½	10⅔	8½	2½	♂	20	
b.	I, 1917	ク	75	40	26½	6⅔	10	7⅔	2½	♀	18	
c.	XI, 1919	ク	75	4	28	7½	10	7	2	♀	17	

73. *Ruticilla aurea* (Gmel.) ジヨウビタキ

a.	XI, 1916	スクモ	46½	24	22	3	6⅔	4⅔	1⅔	♂	3.45	
b.	II, 1920	ク	43	23	19	3½	7	5	2	♀	?	

74. *Tarsiger cyanurus* (Pallas) ルビタキ

a.	II, 1917	スクモ	46½	26	19	3½	7	4⅔	2	♀	4	
b.	13/IV, 1919	ク	46½	27	21	3	7½	5	2½	♂	3.6	
c.	II, 1920	ク	35½	26	11½	4	5½	5	2	♂	?	

75. *Acrocephalus orientalis* (Temm.) オホヨシキリ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	20/X, 1919	スクモ	分 ?	分 28	分 24	分 6	分 8	分 5½	中後 2½ 3	♀	匁 ?	

76. *Cisticola cisticola* (Sharpe) セツカ

a.	I, 1917	スクモ	41½	18½	17	3½	6½	4½	1¾	?	2.9	
----	---------	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	---	-----	--

77. *Cettia cantans* (T. & S.) ヲクニス

a.	4/XII, 1919	スクモ	46	20	21	3	7½	5	1½	?	2.8	
----	-------------	-----	----	----	----	---	----	---	----	---	-----	--

78. *Regulus cristatus orientalis* Seeb. キクイタバキ

a.	II, 1919	スクモ	30	18	14	3½	5½	3¾	1½	♀	1.45	
b.	I, 1920	ク	35	19	15	3	5	4	1	♂	?	
c.	IV, 1920	ク	30	17	12	2¾	5	3	1	♀	?	

79. *Troglodytes fumigatus* (Temm.) ミソサバイ

a.	I, 1917	スクモ	36½	11¾	11	4	5¾	中後 4½ 2½ 1½ 2	?	1.8	
----	---------	-----	-----	-----	----	---	----	----------------	------------------	---	-----	--

80. *Hirundo daurica nipalensis* (Hodgson) コシアカツバメ

a.	6/II, 1920	スクモ	70	40	34	2½	4½	4	1	?	?	
----	------------	-----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	--

81. *Lanius bucephalus* (T. & S.) モズ

a.	XII, 1916	イヨ	69½	30	33	5	8	6	2¾	♂	11	
b.	II, 1917	スクモ	66	28	29½	5	8½	5½	中後 2¾ 3	♀	8.7	
c.	13/IV, 1919	イヨ	66	29	30	5½	8½	6¾	中後 2¾ 3	♂	10.5	

82. *Lanius sphenocercus* (Cabanis) オホカラモズ

a.	I, 1920	スクモ	101	40	46	8	10	6	3	♀	?	
----	---------	-----	-----	----	----	---	----	---	---	---	---	--

83. *Parus major minor* (T. & S.) シバウカラ

a.	II, 1917	ヒロミ	46½	22	21½	3	6½	4½	2	?	4	
b.	13/IV, 1919	スクモ	45	21½	20½	3	6½	4½	中後 1¾ 2¾	♀	4.53	

84. *Parus varius* (T. & S.) ヤマガラ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	II, 1917	ヒロミ	44 $\frac{1}{2}$	23 $\frac{1}{2}$	16 $\frac{1}{2}$	4	6 $\frac{1}{2}$	4 $\frac{2}{3}$	中後 2 $\frac{2}{3}$ 後 1.8 中後 2 $\frac{1}{2}$?	4	
b.	VI, 1920	?	52	20	17	4	6	5		♂	?	

85. *Acredula trivirgata* (T. & S.) エナガ

a.	I, 1917	スクモ	40	19 $\frac{1}{2}$	24 $\frac{2}{3}$	2	5 $\frac{1}{3}$	3	2	?	1.7	
b.	13/IV, 1919	ク	41 $\frac{2}{3}$	19 $\frac{1}{2}$	24 $\frac{1}{2}$	2 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{3}$	3	1 $\frac{1}{3}$?	182	

86. *Garrulus japonicus* (T. & S.) カケス

a.	I, 1917	スクモ	105 $\frac{1}{2}$	53	47	9 $\frac{2}{3}$	13 $\frac{1}{3}$	8 $\frac{1}{3}$	3 $\frac{2}{3}$?	33	
----	---------	-----	-------------------	----	----	-----------------	------------------	-----------------	-----------------	---	----	--

87. *Zosterops japonica* (T. & S.)¹ メジロ

a.	I, 1919	スクモ	39 $\frac{1}{2}$	20	14 $\frac{1}{2}$	4	6 $\frac{1}{3}$		1 $\frac{1}{3}$?	?	
b.	4/XII, 1919	ク	39	20	15	4 $\frac{1}{2}$	5	4	1 $\frac{1}{2}$	♂	2.6	

88. *Coccothraustes vulgaris japonicus* (T. & S.) シメ

a.	XII, 1917	スクモ	6	33	17 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{2}{3}$	7	6 $\frac{2}{3}$	2	♂	14.9	
----	-----------	-----	---	----	------------------	-----------------	---	-----------------	---	---	------	--

89. *Uragus sanguinolenta* (T. & S.) ベニマシロ

a.	II, 1917	スクモ	47	21 $\frac{1}{3}$	22	2 $\frac{2}{3}$	6	4 $\frac{1}{3}$	2	♀	4.4	
----	----------	-----	----	------------------	----	-----------------	---	-----------------	---	---	-----	--

90. *Fringilla montifringilla* (L.) アトリ

a.	II, 1917	ヒロミ	56 $\frac{1}{3}$	32 $\frac{1}{3}$	22 $\frac{2}{3}$	4	6 $\frac{2}{3}$	5	2	♂	7	
b.	ク	ク	51	27 $\frac{2}{3}$	19 $\frac{1}{2}$	4	5 $\frac{2}{3}$	4 $\frac{2}{3}$	2	♀	5.6	

91. *Chrysomitris spinus* (Linn.) マヒロ

a.	I, 1917	スクモ	39	24	16	3 $\frac{2}{3}$	4 $\frac{2}{3}$	3 $\frac{1}{3}$	1 $\frac{1}{2}$?	3	
b.	ク	ク	39	23 $\frac{1}{3}$	15	3 $\frac{1}{3}$	5	3 $\frac{2}{3}$	1 $\frac{1}{2}$?	3	

92. *Fringilla kabarahiba major* (T. & S.) オホカワラヒロ

a.	I, 1917	スクモ	46 $\frac{1}{3}$	27 $\frac{1}{2}$	18	4	5 $\frac{2}{3}$	4 $\frac{2}{3}$	2	♀	6.9	
b.	ク	ク	46 $\frac{1}{3}$	27	18	4	5 $\frac{2}{3}$	4 $\frac{2}{3}$	2	♂	6.9	

93. *Fringilla kawarahiba minor* (T. & S.) コカハラヒソ

	年月日	場所	全長	翼長	尾長	嘴峰	跗趾	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	I, 1917	スクモ	分44	分26 $\frac{1}{3}$	分17	分3 $\frac{2}{3}$	分5	分4 $\frac{1}{2}$	分2	♂	分5.6	
b.	ク	ク	43 $\frac{2}{3}$	26 $\frac{1}{3}$	16 $\frac{1}{3}$	3 $\frac{1}{3}$	5	4	2	♀	4.8	
c.	14/IV, 1919	ク	43	25 $\frac{2}{3}$	17	4	5	5	2	?	4.8	

94. *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* Lafr. ウソ

a.	II, 1917	ヒロミ	50 $\frac{1}{3}$	27 $\frac{1}{2}$	21	3 $\frac{1}{3}$	5	4 $\frac{1}{3}$	2	♀	6.25	
b.	ク	ク	52	26 $\frac{1}{3}$	20	3 $\frac{1}{3}$	5 $\frac{1}{2}$	4 $\frac{2}{3}$	2	♀	6.1	

Pyrrhula pyrrhula rosacea Seeb. テリウソ (ウソと同一なり編輯者記す)

a.	XII, 1920	スクモ	?	28 $\frac{1}{2}$	21	3 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{2}$	4 $\frac{1}{2}$	1 $\frac{1}{2}$	♂	?	
----	-----------	-----	---	------------------	----	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	---	---	--

95. *Passer montanus* (Linn.) スバメ

a.	I, 1917	スクモ	44 $\frac{1}{2}$	22	17	3 $\frac{1}{2}$	6	4 $\frac{2}{3}$	1 $\frac{2}{3}$	♂	6	
b.	ク	ク	46 $\frac{1}{3}$	22	17 $\frac{1}{3}$	3 $\frac{1}{2}$	6	4 $\frac{2}{3}$	1 $\frac{1}{2}$	♂	6.3	

96. *Emberiza fucata* (Pall) ホ、アカ

a.	I, 1917	スクモ	54 $\frac{2}{3}$	25	21 $\frac{1}{2}$	4	7 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{2}{3}$	2	♂	6.8	
----	---------	-----	------------------	----	------------------	---	-----------------	-----------------	---	---	-----	--

97. *Emberiza pusilla* (Pall) コホ、アカ

a.	I, 1917	スクモ	50 $\frac{1}{3}$	24 $\frac{1}{3}$	21	3	7	4 $\frac{2}{3}$	2 $\frac{1}{3}$	♂	5.3	
----	---------	-----	------------------	------------------	----	---	---	-----------------	-----------------	---	-----	--

98. *Emberiza ciopsis* Bp. ホ、ジロ

a.	I, 1919	スクモ	53	25	24 $\frac{2}{3}$	3 $\frac{2}{3}$	6	5	1 $\frac{2}{3}$	♂	6.3	
b.	ク	ク	51 $\frac{1}{3}$	24 $\frac{2}{3}$	23 $\frac{1}{3}$	3 $\frac{1}{3}$	6	5	1 $\frac{2}{3}$	♂	5.8	
c.	ク	ク	50 $\frac{1}{3}$	23 $\frac{1}{2}$	23 $\frac{1}{2}$	3 $\frac{1}{3}$	6	5	2	♀	5.6	
d.	13/IV 1919	ク	53	23 $\frac{1}{2}$	23	4	6 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{3}$	1 $\frac{2}{3}$	♂	5.87	中後
e.	ク	ク	53	23 $\frac{1}{2}$	24 $\frac{2}{3}$	4	6 $\frac{1}{2}$	5 $\frac{1}{3}$	2 $\frac{1}{3}$	♀	5.6	中後

99. *Emberiza elegans* Temm. ミヤマホ、ジロ

a.	I, 1917	スクモ	50	23 $\frac{2}{3}$	23	3 $\frac{2}{3}$	6 $\frac{1}{2}$	中	5	2	♂	4.7
b.	ク	ク	50	24 $\frac{1}{3}$	22 $\frac{2}{3}$	3 $\frac{1}{3}$	6 $\frac{1}{2}$	ク	5	2 $\frac{1}{3}$	♂	4.9

100. *Emberiza personata* Temm. アオジ

	年月日	場所	全長	翼長	長尾	嘴峰	跗蹠	趾	爪	雌雄	重サ	備考
a.	II, 1917	スクモ	分 51	分 23	分 31½	分 3½	分 6	分 5	分 2	♂	匁 5.8	

101: *Emberiza variabilis* Temm. クロジ

a.	II, 1920	スクモ	55	26	23	3½	6½	5½	1½	♂	?	
b.	ク	ク	49	29	23	4	7	5	2	♀	?	

(三) ニ三鳥類の蕃殖に関する調査

大正八年八月一日

大雨後にて鶉の雛二(羽孵化後二週間乃至廿日経過)流れ来りしものを一羽捕獲せしに、脚部好く發達して極めて能く走り且つ泳ぎたり、全身には長さ約五分位の黑色細毛密生し居り下面喉の邊白毛を混ぜり、脚は黑色、嘴の色は成鳥夏羽に同じ

體長 三寸八分 跗蹠 九分 趾 一寸二分 嘴峰 五分なり

越て同月廿四日には腹面の羽域に鼠色の羽毛を生じ初め

體長 五寸餘 跗蹠 一寸 趾 一寸五分 嘴峰 七分五厘こなれり

食物は細米の外時々蟋蟀及青葉を與へしのみ三ヶ月にして成鳥こなれり

同年八月九日及十日の兩日バン、ヨシゴキ、カイツブリの巢を多數發見せしが其内産卵しありしものは各數個に過ぎず各卵の測定下の如し

▲バンの卵

番號	長徑寸	短徑寸	番號	長徑寸	短徑寸	番號	長徑寸	短徑寸			
1	1.35	1.025	9	1.40	.96	17	1.375	.97-IV			
2	1.33	1.025							10	1.37	.96
3	1.34	.94	11	1.30	.94						
4	1.37	.96									
5	1.37	.97	13	1.38	.98				平均	長徑寸 1.367	短徑寸 974
6	1.33	.94	14	1.40	1.00						
7	1.37	.97				15	1.40	1.00			
8	1.40	.97	16	1.40	.98	平均	1.1455	.89			

▲ヨシゴキの卵

番號	長徑寸	短徑寸	番號	長徑寸	短徑寸	番號	長徑寸	短徑寸			
1	1.20	.94	6	1.26	.81	11	1.13	.81			
2	1.21	.95							7	1.10	.80
3	1.20	.94	8	1.12	.82						
4	1.19	.93									
5	1.21	.95	10	1.15	.83				平均	1.1455	.89

▲カイツブリの卵

番號	長徑 寸	短徑 寸	番號	長徑 寸	短徑 寸	番號	長徑 寸	短徑 寸				
1	1.10	.85	6	1.16	.83	11	1.06	.83				
2	1.06	.85		7	1.13		.82	12	1.06	.83		
3	1.15	.85			8		1.19	.83	13	1.10	.84	
4	1.15	.85					9	1.18	.83	14	.98	.80
5	1.10	.82						10	1.07	.83	15	1.12 $\frac{1}{2}$
									平均	1.167	.83	

八月十二三日大雨あり出水してバン、ヨシゴキの巢は悉く水害を蒙り 全部廢巢
 となり、カイツブリのものは其孵化に至らずして人に破らる。

八月十七日には各巢共(但しバンのみ)以前巢のありし近傍に新巢を營むを見且
 つ既に完成せるさへありたり

八月廿七日以前卵四個ありしバン III 巢附近のものに八ヶ産卵しあるを見たり
 しが其後數を増さず

九月七日には六個に減じ居り同九日には四個に減じ居りたり 且つ卵殼に龜裂あ
 り鳴聲さへ聞えたれば自宅に持ち歸りて人爲を以て殼を割り 雛を出したる結
 果下記の如し

餌は オートミル、八分摺餌、ゴキブリの子、蠅、蟋蟀及小米等なり

バンの雛			重 量			
月	日	時 間	一號雛	二號雛	三號雛	四號卵
9.	9	P.M. 8	匁 卵 5.2 孵化	匁 卵 4.96	匁 卵 4.82	匁 4.53
ク	10	A.M. 8	翌朝 3.60	—	—	—
ク	10	P.M. 8	—	孵化 3.89	—	—
ク	11	ク 8	—	—	3.74	—
ク	12	ク 1	3.69	3.14	3.24	—
ク	ク	ク 8	3.82	3.22	3.22	腐敗
ク	13	A.M. 8	3.93	3.17	3.02	
ク	ク	P.M. 8	4.15	3.38	2.90	
ク	14	A.M. 8	4.23	3.15	2.81	
ク	ク	P.M. 8	4.64	死 ス	3.35	
ク	15	A.M. 8	4.50		3.23	
ク	ク	P.M. 8	5.07		3.35	
ク	16	ク 8	5.55		3.00	
ク	17	ク	6.85		2.90	
ク	18	ク	7.63		2.93	

月	日	時 間	一 號 雛	
9	19	P.M. 8	匁 8.22	○三號雛死ス
ク	20	ク	9.00	
ク	21	ク	10.00	
ク	22	ク 9	10.55	○殻ヲ出デシ雛ハ一時間位ニテ目ヲ開キ
ク	25	ク 3	11.12	四十時間位ヲ經テヨリ餌ヲ取り初ム
ク	26	ク 7	12.70	
ク	27	ク	13.55	
ク	28	ク	13.45	○野生ノモノハ大抵重量 50匁以上 70匁
ク	29	P.M. 8	13.67	位迄ナルハ餌料ノ關係ナルベシ
ク	30	ク 8	15.55	
10	1	ク 10	16.10	
ク	2	ク	16.87	○約二ヶ月前ニ孵化セル雛ト同シ籠ニ入
ク	3	ク	18.01	レシニ二日目ヨリ大ハ小ヲ羽下ニ入レ
ク	4	ク	18.51	テ愛シ小ハ大ヲ甚ダ慕フヲ見タリ
ク	5	ク	18.70	
ク	6	ク	19.50	
ク	13	ク 3	25.62	○卵ヨリ取りテ育セシハ甚ダ人ニ馴付ケ ドモ雛ヨリ育セルモノハ決シテ野生ノ性 質ヲ離レズ
11	18	ク	80匁成鳥 トナレリ	

▲測 定

月	日	雛ノ番號	體 長	跗 趾	趾	嘴 峰
9	10	I	寸分 3	寸分 0.5	寸分 0.8	分厘 4
ク	10	II	3	0.5	0.7	4
ク	11	III	2.8	0.4	0.7 $\frac{1}{2}$	4
ク	19	I	4.	6. $\frac{1}{2}$	1.00	4.5
10	13	I	---	13.	1.90	7.

逆斑卵に就て

仁 部 富 之 助

この一篇は特別に研究したるものではなく、數年來時折遭遇せる野外觀察の記憶を喚び起して書きたるものであるから、可なり杜撰のものであることを御斷りして置かねばならぬ。

鳥種により卵殻面に種々の斑紋の有るものと全くないものがある。通常前者を有斑卵といひ後者を無斑卵といふが、併し兩者の區別は斯く絶對的のものではなくして、例令ばコサメビタキ、オホルリの卵のやうに斑紋が非常に微かなるもの又トラツグミ卵のやうに一巢に有斑、無斑兩様の卵を混ざるものもある。故に本篇に於ては可成このやうなる曖昧のものは材料に使はぬことにする。有斑卵の色彩と斑紋の種類は多種多様であるが、本篇には直接關係のない事であるから略して單に斑紋の分布状態に入るが、これを正確に分類することは決して容易の業ではない。併し今逆斑卵の説明上極めて大ざつばに分類して見れば

甲類 斑紋は密に卵殻の全部に分布し、特に或る部分だけ濃密なるもの。而して其の位置は

一、卵の鈍端部なるもの

二、卵の中央部なるもの

三、卵の鈍端部なるもの

乙類 斑紋は卵殻面の一部に特に集合し、其他の部分は極めて疎なるか或は全く無きもの。而して其の位置は

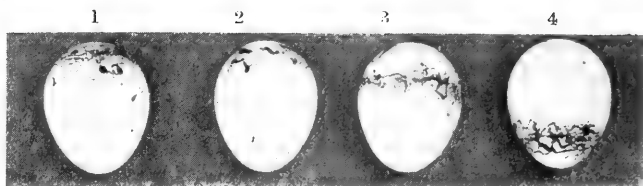
四、卵の鈍端部なるもの

五、卵の中央部なるもの

六、卵の鈍端部なるもの

の如く、而してシムメ卵の大部分は甲類に屬し、ホホジロ卵は乙類の適例である。但しこの二類は逆斑卵を鑑別する上に難易ある

だけであるから、強て區別せずとも素より差支へはない。又右の内一及び四に相當するものは普通斑卵で、三及び六は所謂逆斑卵である。



第二十二圖 ホ、ジロの一巢卵

1-2 普通卵、3 中央斑卵、4 逆斑卵

二及び五は共に前二者の中間型であるが、さちらかき云へば逆斑に屬す可き現象と思はるゝも、此種の實例は鵲類にホホジロ(第二十二圖)参照に於て二三卵を知るだけであるから、其の何れに所屬せしめても大勢に影響なきも、以下これは普通卵として取扱ふことにする。

夫れから斑紋が卵の銳端部に片寄るものは何故に逆斑と呼ばれ、一方鈍端に片寄りの斑あるものを普通斑にするかといふに、これは後者が普通の現象——多數の意味——なるに對し前者は比較的稀有なる處より兩者を區別する便宜上、しか謂ふもので必ずしも生成の原因に由來せる呼稱は斷じ難いと思ふ。

逆斑卵の存在は稀なる現象には相異ないが決して稀有さか珍稀さいふ程のものではない。夫れは黒田理學士が「動物學雜誌」第三十卷九十頁に澤山の例を掲げられたることによりて明である、尤も或る鳥種に就て見れば珍稀に類することもあり、異例とも見る場合もあるが、又或る鳥種に於ては寧ろ普通の現象のやうに思はるゝものもある。この點につき今予が數年來の經驗を記憶により鳥種に逆斑卵の多少の關係を述べれば

鵲類は最も逆斑卵の存在歩合高く、五六百顆の内三四十顆の割合である

ホホジロは之に亞ぎ多い。

コカハラヒロも相當に多いと思ふ。

スズメは千五六百顆の觀察卵中、僅かに十數顆に過ぎぬから鵲類よりは非常に少ない方である。

ヒバリの卵も彼此三百顆位目を通して居るがまだ一顆も發見し得ぬ。

オホヨシキリは約一千顆の内唯一顆だけで、予の實驗せる逆斑卵を有する鳥類中最少の例である。
コチドリ卵は百顆近く見てゐるが遂に逆斑を發見し得ない。

一巢内に於ける逆斑卵の数につきては、未だ一巢卵の悉くが逆斑なる例はないやうである。而して予の知れる範圍に於て會員糺山徳太郎氏珍藏のチゴモズの巢に六卵中四顆が逆斑なるものを以て最多の例とする。元來鴟類——主としてモズ——は一巢の卵數は五顆乃至七顆であつて、内三顆の逆斑卵を混ずることは左程に珍らしくもないが、糺山氏のはチゴモズで併かも六對四であるから餘り例がないやうに思ふ。尤もチゴモズに就ての觀察數は僅か數例だけであるから、今後非常に多くの巢を調査したならば、モズよりもチゴモズの方が却て逆斑卵が多いかも知れぬが今の處夫れに關する材料を有せぬ。尙ほ茲に注意すべき事は概して普通に逆斑の多き鳥種は一巢中の逆斑卵數も亦従つて多い傾向を有する點である。

産卵の順序と逆斑卵の生成との關係は未だ深く調査せぬ故明瞭でないが、從來の經驗によれば、初産卵の逆斑なるを見たることなく、必ず一乃至二顆を産みし後の卵に現はるゝやうであるから、多分逆斑卵は輸卵管が一回乃至二回、卵子を通過せる後に出來易いのであらうと思ふ。

一巢中に於ける普通斑卵と逆斑卵とに於て卵の大き及び卵形等に差異ありや否やを知らんがため、今逆斑二顆以上を藏するモズの巢につき卵の長徑、短徑及び卵形とを比較すれば次表の通りである。但し卵形は短徑を以て長徑を除したる指數を以て表はす。この表示法は眞の卵形と精密に一致せぬが大體を知る上にさして不都合なく、且つ卵形の差異を數量的に取扱ふ場合に最も便利である。

甲 巢	卵短長卵 形徑徑數 (粉粉)	普通斑卵		逆斑卵		同 (逆斑の少なきこと)
		平均	平均	平均	平均	
		一一二 一八二	一一三 一八四	一一二 一八一	一一三 一八五	(十)

丙 巢	乙 巢
卵短長卵 形徑徑數	卵短長卵 形徑徑數
一一二 二八二 二七一	一一二 二七三 二九二 四九二
一一二 二八二 四三五	一一二 三九三 〇七二
(十) 〇〇〇 〇〇〇 三二三	(十) 〇〇〇 〇〇〇 六〇〇

備考 表中(十)は逆斑卵の方多きを示す

右表に據れば平均上兩卵間に三巢を通じ同一項の何れもが著しき差異を示すものがない、唯乙巢の卵形に於て(十)、〇六の差は破格に大なるは少しく異様の加くなるも、之は其巢の逆斑卵の一顆が他卵に比し約〇、一粉だけ長徑の長かりしたため、少數の平均に於て其の差が消却されないためである。要するに一巢内に於ける普通卵と逆斑卵とは其の寸法及び卵形共に殆んど差異なきものと見て可なるが加く、従て一巢内に於ける逆斑卵は形態上特殊の點あるためそれが成因をなすものではなく、寧ろ偶發的のもの、やうにも考へらるゝのである。但し偶發的といふのは卵の形態以外の原因を無視する意味ではない。

一巢内に於ける逆斑卵と普通斑卵との形態上の差異なきこと前項の通りであるが、次に逆斑卵を藏する巢の卵と、普通斑卵だけけの巢の卵とに於ける形態を比較せんがため、從來測定せるモズの全卵を前記の二項に分ち其平均寸法及び卵形を示せば次表の如くである

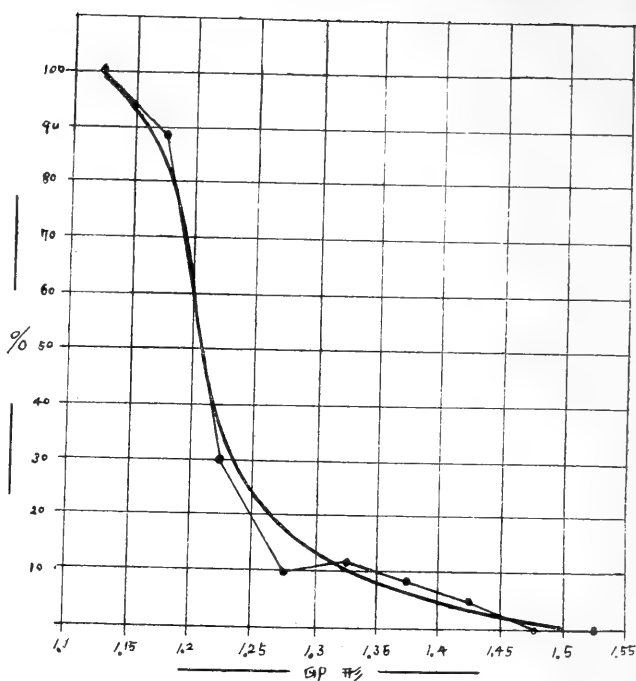
	平均卵數	長 徑	短 徑	卵 形
普通斑卵のみを藏する巢の卵	二六二	二、三七五	一、七九〇	一、三二四
逆斑卵を藏する巢の卵	四三	二、二九五	一、七九〇	一、二六九
差	一	〇、〇八〇	〇、〇〇〇	〇、〇五五

右表によれば短徑は兩者全く同じであるが、長徑は逆斑卵を藏する巢の卵の方は著しく短かく、従つて卵形も亦短圓である。即ち逆斑卵は平均上圓味ある卵を藏する巢に多いこととなるのである。

前項の結果により逆斑卵は細長なる卵に少なく短圓なる卵に多いことすれば、更に進んで卵形の圓さの程度に逆斑卵を藏する巢の卵子の形狀との關係を明かにして置く必要がある。依て測定全卵に對する逆斑卵を藏する巢の卵の割合を次表の如く卵形を階級別に算出せるに其の結果は

卵形	全卵數	内逆斑卵ある巢の卵數	割合上の%
一、一〇	二	二	一〇〇、〇〇
一、一五	八	七	八七、五〇
一、二〇	三二	九	二八、一三
一、二五	八三	八	九、六四
一、三〇	九二	一一	一一、九六
一、三五	六〇	五	八、三三
一、四〇	一九	一	五、二六
一、四五	七	〇	〇、〇〇
一、五〇	二	〇	〇、〇〇
計	三〇五	四三	一

ごなり、最も卵形の短圓なる階級に屬する卵の全部は逆斑卵を藏する巢の卵が占め、以下卵形の長さを加ふる毎に其の割合は次第に低減し、遂ひに皆無となるのである。而してこの現象は一面に於て前項の結果を更に具體的ならしめ、併せて其の關係の數理的なることを證明するものである。但し表中の各階級の數價は秩序的ならざるはこれ調査員數の少數なるため當然生じ易き、所謂實驗的誤差を見て大過なかる可く又第二十三圖は其關係を圖示せるもの(細線)なるが、卵形の變化に伴ふ増減率は果して假想線(太



第二十三圖

モズ卵の形状對測定全巢卵と逆斑卵を藏する巢卵との割合(%)を示す
細線は實驗せる割合、太線は想像線

線)の如くなるや否に至りては尙ほ今後の調査を俟たなければならぬ。

以上に述ぶる處の卵の大きさ及び卵形と逆斑卵及び之れを藏する巢の卵と普通斑卵との諸關係は、モズ卵だけに就ての統計なれば、他の鳥種にも之れを適用し得ることは云ひ難きも、ホ、ジロ及びブスマメの二種だけは既往の觀察により大體同一傾向に信じ得るのである。

逆斑卵の生因即ち逆斑卵は如何にして生成するかの問題に關しては、茲に述ぶ可き何等の材料を有せぬ。然れども内田學士の『鳥類講話』中に其簡單なる記載あり。又理學士鈴木清太郎氏が雜誌『理學界』第十八卷第九號に「卵は何れを先きに出づるや」につき述べられし論文は共に尙ほ若干研究の餘地あるやうに思はれるが、逆斑卵の生因を研究する上に貴

重なる文献である。併し何れにしても逆斑は卵子が輸卵管を下る途中に何等かの原因により、其位置を轉倒するによるならば轉例に際し卵形の細長きものよりは短圓なるものの方が比較的容易に行はるゝことは、蓋し想像し易きことである。

再び大盜賊鷗に就て

理學士公爵 鷹 司 信 輔

先に余は本誌第六號に於て本鳥に就て述べて置いた、其後松平頼孝氏は數多の標本を採集せられ之が調査を余に許され余をして充分に研究をする事が出来た、之れ一重に松平氏の好意に依るものにして此處に余は深謝する所である。

そも大盜賊鷗屬 (*Catharacta*, Brünnich)「*Catharacta* は *Uritae* の亞屬に用ゐられたるを以て *Megalarctis*, Bonaparte を使用し來たりしもマシュー氏は *Catharacta sinuata* はブリュニッチ氏の圖より見れば *C. cephalus* にして之れは海雀族でなく *Larus parasiticus* 等しきものである、夫れ故萬國命名法により *Catharacta* を使用する方が適當である云ふて居る」は蠟膜の末端の形状によつて二團に分つ事が出来る、即ち一つは嘴が比較的長く蠟膜の末端が著しく楔状をなして居るの、他は嘴が比較的短く蠟膜の末端が楔状の度少くかつ一層峭しくなつて居る、前者には *Catharacta antarctica* 種を屬せしめ後者に *Catharacta antarctica* 種及び *Catharacta macconnicki* 種を屬せしむる事が出来る、今現在已知の大盜賊鷗を此の團に分つて見るの第一團に *C. skua* (Brünnich)「北大西洋」*C. chilensis* (Saunders)「南米の南部」の二亞種が屬し第二團には羽色の濃いのに *C. antarctica antarctica* (Lessou)「フークランド」*C. antarctica lombergi* Mathews「濠洲近海」*C. antarctica intercedens* Mathews「ケルゲレン島」*C. antarctica clarkei* Mathews「南オークニー島」の四亞種が屬し羽色の淡い方に *C. macconnicki macconnicki* (Saunders)「南ヴィクトリアランド」*C. macconnicki wilsoni* Mathews「ウェッデル海」の二亞種が屬して居る又印度洋の各地方で少數の *C. antarctica* が捕獲せられた記事がある之れは前記の何れかの亞種に屬するもので有らう。又アリユート島及び加州モンテレー灣で捕獲せられた大盜賊鷗は確實な記事が無いので何れも云はれぬが多分之れは最近日本で捕れる大盜賊鷗と同一のものでは無いかと思はれる。

さて醜て我國にて採集せられたる大盜賊鷗を見るに蠟膜の末端の形状は第二團に屬するもので其の端は急角度をなして居る又羽色は *C. antarctica* に於ては暗褐色で特に頭頂部は濃く *C. macconnicki* に於ては頭頂は丁香褐色で腹部に行くに従つて濃くなり

ヒ一褐色を呈する様になる然るに我が大盜賊鷗に於ては頭部より體の下部にかけて色の濃淡殆なく一様に稍々チコレート褐色を帯びた灰褐色である。因に *G. antarctica* 及び *G. macrorhynchos* の亞種の區別は主として大きさ分布區域による。又 *G. macrorhynchos* に於ては頸部に金淡黄色の差毛が有るが大盜賊鷗に於ては之を見ない、次に大きさに於ては *G. antarctica* にては嘴峰六種三四、翼長四十三種三、跗蹠七種六あり *G. macrorhynchos* に於ては嘴峰五種八、翼長三十九種三六、跗蹠六種六五あり、然るに大盜賊鷗に於ては嘴峰五種、翼長三十九種九三、跗蹠六種〇三にして平均に於て何れよりも劣つて居る但し翼長は同様である、夫れ故余は大盜賊鷗は先に未だ標本の充分に無かつた折には *G. antarctica* に考へられたが今日充分の標本を驗するに及び一新種をなすを至當と思ひし次の如く之を命名した

atharacta natsudairae Take-Tsukasa, n. sp.

記載 雌 一九一七年五月十九日採集、相州江ノ島沖及三里海上、松平頼孝氏所有、番號一三五八九

頭部、頸及び體の下部は極て淡きコレート褐色を帯べる灰褐色にして下腹部より其の色の濃度を増し下尾筒に於ては暗灰褐色なる上嘴の基部、頸部及び前胸部は羽先は磨損して凝白色を呈す。間肩部及び其の他の上部は暗灰褐色にして翼及び尾の翹は濃きセピア黑色を呈す、翼の内面及び羽はセピア色なり初列風切の基部に大なる白斑あり但し第一羽の外辨は黒し嘴、足蹠、共に黒し、虹彩は暗褐色なり、雄、雌を區別し難し

大小 嘴峰五、一種。翼長三五、五種。跗蹠五、九種。

松平氏の獲られたる標本は全部五月乃至六月の鳥にして羽毛の磨損せられし程度に種々あり今其の特種ものを附記して見よう、五月廿五日に捕獲せられた雌(八四七五號)に於ては基型と異り頭部より下腹部迄一様に基型より稍濃き灰褐色で只下尾筒のみ暗灰褐色である、頸部及び下腹部に少量の白縁を有する羽毛が有るに過ぎぬ然るに風切や尾は大半其の先が折損じ其の周圍は淡灰褐色に退色して居る、之が最磨損して居らぬ鳥で(基型と共に)ほど之に近い程度の鳥に例へば(五月十八日雌一三五八六號)の如く下面に一樣に白色羽の散在して居る此鳥では間肩部の羽の軸は白色となり軸にそつて錠形に淡色に退色して居る最も多いのは頭頂、頸、

肩及び胸部が他より著しく褪色して居るもので其の程度は甚しきものに於ては殆ど白色となり居る六月五日に捕れた雌（一二二二九號）の如きは夫れで此鳥に於ては他の部分も著しく褪色し翼の如きは濃褐色或はセピア色となり羽軸及び各羽の縁邊は白色或は凝白色となり折損の程度も甚しきものである、次に跗蹠の前面に他の大盜賊鷗科の鳥に見る如く稍々コバルト青色を帯びた白色の斑紋を有するものが有る但し斑の位置大さ數等は一定して居らぬが概して跗蹠の中央より稍下方に大形のものが有り其の上下に小斑點が二三散在するのが普通である、次に比較的幼鳥（多分初年の鳥と思はるゝもの）の記載をしよう之れは一羽捕れたので昨年の五月二十六日三浦郡長井沖で採集せられた雄鳥である（大體の色は基型と同様であるが大雨覆及び次列風切の先端に近く淡色の横帯が有る外方次列風切、同じく大雨覆等のは殆ど凝白色を呈して居る特に内辨に於て然りである又上尾筒にも極めて濃淡の差は僅であるが横帯を認むる事が出来る此鳥も跗蹠に蒼斑を有して居る〔因に *G. macconnichi* に於ては幼鳥及び若鳥に此の蒼斑を有すこ云ふ本種も亦之を有する鳥は若きものか〕

松平氏及び余の所有の標本に付測定表を左に掲ぐ可し

番 號	嘴峰		翼長		跗蹠	性	月
	cm	mm	cm	mm			
8370	5.3	39.5	5.9		♂	V	
8472	4.9	38.0	5.8		♀	V	
8473	4.95	39.5	5.9		♀	V	
8474	4.9強	40.5	5.8		♀	V	
8475	4.9強	39.5	5.7		♀	V	
8478	4.5	38.5	6.5		♂	/	
8512	5.1	42.0	6.1		♂	VI	
8513	5.1強	41.0	6.0		♀	VI	
12229	5.3	41.0	5.8		♀	VI	
13585	5.2	40.5	5.65		♀	V	
13586	5.0強	39.5	5.8		♀	V	
13587	5.0弱	39.5	5.9		♂	V	
13588	5.1	39.0	6.0		♂	V	
13589	5.1	39.5	5.9		♀	V	
13590	5.3	39.0	6.2		♀	V	
13596	4.9	39.0	5.7		♀	V	
13597	4.7	42.0	5.7		♂	V	
13626	5.1	40.0	5.7		♀	VI	
13935	5.2	40.5	5.8		♂	VI	
13979	5.0	41.0	6.0		♀	VI	
13980	4.9	40.0	6.1		♀	VI	
14529	4.95	41.5	5.9		♀	V	
14530	5.0	39.0	5.8		♂	V	
14531	5.35	39.25	6.2		♀	V	
A	5.1強	39.5	6.1		♂	V	
B	5.0	41.0	6.4		♀	V	
C	5.2	41.0	6.4		♀	V	
D	5.1	40.5	6.1		♀	V	
E	5.2	39.5	5.9		♀	V	
F	5.3	40.5	6.1		♂	V	
1685 鷹司所有	5.1	40.0	6.1		♀	V	
1687 同上	5.0	41.5	5.7		♂	VI	

猶大正七年十月七日の鳥學會の總會に出品された動物學教室に在る浦賀沖にて明治三十三年七月下旬に捕獲せられた標本は正しく本種に屬す可きものである。又之は眞に想像であるが前記の如く六月に殆ど成鳥とならうとして居る幼鳥を見るからには十二月か一月頃に産卵繁殖をするのでは無からうかと思はれる但し繁殖地は全然未知である。日本近海に於ける習性は鳥第二卷(第六號)に述べて置いたから此處では述べぬ。

大盜賊鴨は基を *C. antarctica* に發し一つは北進して *C. matsudairae* となり一つは南進して *C. maccornicki* となつたのでは無からうかと考へられる。

Catharacta matsudairae Taka-Tsunaka, n. sp.

Head and under parts grayish chocolate brown, darker on the belly; and under tail-coverts dark grayish brown. The rest of the upper parts dark sepia brown, wing and tail blackish. A great white patch at the base of the primaries except the outer web of the first one, which is blackish brown. Under wing-coverts and axillaries blackish brown. The edge of the head, breast and wing feathers bleaching. Bill black, legs and feet black and iris dark brown. Culmen 5.1 cm., wing 35.5 cm., tarsus 5.9 cm.

かもめ居る洲崎のいはもよそならず
浪のかけこす袖にみなれて

(古事類苑動物部より)



カリフォルニア啄木鳥の奇習

理學博士 丘 淺 次 郎

カリフォルニアに産する啄木鳥が樹の幹に孔を穿ち、其の中に團栗を貯へることは有名な話で、讀本にも屢々出て居る位であるが、其の習性を詳しく記した報告は今まで一つも無かつた。カリフォルニア大學のリッター教授 (W. H. Ritter) は數年來之を觀察し特に一昨年と昨年とは夏、秋、冬に亘り、數回同じ場所を調査して、其の結果を同大學所在地なるパークレーのクーパー鳥學俱樂部から發行する鳥類學雜誌「コンドル」の昨年一月號に公にした、次に記すのは其の要點である。

カリフォルニア啄木鳥は學名を *Melanerpes formicivorus bairdi* に云ひ、カリフォルニア州中の森のある地方には大概何所にも居る。樺 (Oak) と松 (Pine) とが混じて生へて居る所では、主として松に孔をあけるが、松の無い地方では樺だけに孔をあける。但し、松には、生きた立ち樹の幹や太い枝に孔を造るに反し、樺にはたゞ枯木の皮、または皮の剥けた下の木材の表面に孔を造るだけで、生きた儘の樺の皮に孔を造つたのは一つも無い。

孔の深さは丁度團栗の丈の高さ位であり、孔の直徑も團栗の太さと同じに造る故、其所へ團栗を詰めるに頗る固く嵌まる。實地を見たのでないから、髓に保證は出來ぬが、土地の住民の話しによるに、啄木鳥は孔に團栗を固く打ち込む云ふ。團栗は必ず尖つた端を内に向けて孔に詰められ、基部を外に現はして居る、之には一つも例外は無い。

團栗の成熟するのは毎年十月頃であるが、啄木鳥は、其の頃地上に落ちた團栗を拾ふて孔に詰めるらしい、之も實地見た譯でない故、髓には云はれぬが、成熟の程度、其の他の事情から考へて見て、斯様に思はれる。尤も、樅の樹の枝に附いて居る團栗を取つて來ることが決して無いとの斷言は素より出來ぬ。

さて何の爲に斯く團栗を貯へるか云ふに、それが食料としてであるは云ふに及ばぬ。一説には團栗を孔に嵌め込んで置くのは後に團栗に蟲の附くのを待つて、其の蟲を食ふためである云ふが、之は決して左様には限らぬ。無論團栗には蟲が附くことがあり、實物を調べて見るに、蟲の附いた團栗を澤山に見出すが附けば、啄木鳥は素より喜んで蟲を食ふ。併し啄木鳥の胃を切り開いて内容物を調べて見るに、蟲の附かぬ團栗の肉も多量に見出される故、團栗をも常食することは慥である。但し、稀には、蟲の附かぬ團栗が、外皮を割つただけで、肉を食はずに捨ててあることがあるのを見るに、蟲が居るかと思ふて、皮を割り蟲の居ないのを發見して、失望して其の儘捨てるのではなからうかとも思はれる。啄木鳥が、實際、團栗の肉よりも蟲の方を好み、蟲が獲られぬ場合に限り團栗の肉を食ふ云ふ様なことが有るや否やは、今後、更に調査を重ねた上でなければ、何とも斷定は出來ぬ。

團栗を割るに當つては啄木鳥は先づ之を孔から抜き出さねばならぬ、孔に嵌まつた儘の團栗が、割るに不便であるべきは、誰にも考へられることであるが、實際に割られた團栗を見るに、此の事は頗る慥である。前にも述べた通り團栗は悉く尖端を内に向けて孔に嵌まつて居る故、若しも其の儘で割らうとすれば、基部から啄くの外は無譯であるが、基部から割られた形迹のある團栗は一つもない、皮を割るための傷は何時も必ず團栗の側面にあり、時としては却つて、尖端に近い方にある。啄木鳥が團栗を樹の孔に嵌め込むのは、之を割るに便利なためである云ふ説の取るに足らぬは云ふまでもない。

啄木鳥が團栗を樹に穿つた孔に詰めて置くのは、髓に食物不足の際に之を食ふためであるが、各自が、自身の貯へて置いた團栗を記憶して必ずそれを食ふや云ふに、其様な定まりは少しも無いらしい、即ち、種族全體として貯へて置いたものが、種族全體の役に立つ云ふだけで、一個一個の鳥としては、其の所有が定まつて居る譯ではない。

さて、以上述べたカリフォルニヤ啄木鳥の習性は、種族維持のために有利な一種の本能であるが、他の動物に於ても屢々見られ

る通り、本能なるものは、盲目的に働いて、往々其の本来の目的に適はぬこゝや、頗る無駄なこゝを爲すものである。此の鳥の習性に就いても、實際を調べて見るに、斯様な點が數多く見出される、先づ第一に、穿つた孔が悉く利用せられるか云ふに、決して左様ではない。松の樹の皮の面積一平方呎毎に平均六十個の團栗が貯へられてあり、周圍十一呎、高さ二十呎の樹の表面には一萬三千二百の團栗が貯へられてあるに計算せられ、また、倒れて居た長さ五十呎の松の木には、孔の數が三萬一千八百あつた云ふから、啄木鳥の穿つ孔の數は總計としては實に夥しいものである。然るに、此の孔の中には、單に穿たただけで、少しも利用せられず、其の儘に朽ち果てるものが、甚だ多い。

團栗が成熟して地面に落ちるのは十月頃であるが、啄木鳥が、樹に孔を造るのは、其頃ばかりには限らぬ、六、七月頃にも盛に孔を造り、二月に成つても、相變らず孔を造つて居る、後に食料とするこゝを豫期して團栗を貯へるのに比べれば、後に團栗を詰めるこゝを豫期して、數ヶ月も前から孔だけを造つて置くに考へられぬこゝも無いが、餘り時日を経るに、折角造つた孔も風雨其の他のために變化して、役に立たなく成る、同じ場所に並んで數本の松の樹の中で、一本には、孔の大多數に團栗が詰めてあり一本には、少數の孔だけより團栗が詰めてなく、更に他の一本には、孔の數は頗る多くありながら、團栗は一つも詰めてない云ふ如き場合が幾らもある。若しも一旦團栗を詰めたのを後に至つて、抜き出して食用に供したのならば、樹の根元の周圍に團栗の皮が澤山に落ちて居るべき筈であるが、それが無い所から推すに、單に穿たれた儘で、一回も利用せられなかつたものらしい。また、樹によつては下の方では孔に團栗の嵌まつて居るのが多く、高い所に行くほど、團栗の詰めてない空の孔の數が多く成つて居るのを見るこゝもあるが、之は恐らく、地面に落ちて居る團栗を拾ふてから、孔まで行く距離が、樹の高い所ほど遠く成るに基つくのでは無からうかとも考へられる、何れにせよ、啄木鳥の穿つ孔の數は、實際團栗を貯へるために利用せられる孔の數に比較するに遙に餘計であつて、啄木鳥はそれだけ、無駄な仕事を爲したこゝに當る。

また孔に貯へられた團栗は實際悉く食料として利用せられるか云ふに、之も、無駄に成る部分が決して少なくない。孔に嵌まつて居る團栗を抜き出して見るに、已に一年以上を経過して、肉の黒く成つて居るものが幾らもある。基部の外皮は風雨に曝され

て白くなり、且、裂目を生じ、雨に遇へば、水が内部まで、浸み込んで、肉は益々食用に堪へぬものご成る。されば、啄木鳥は、骨折つて、孔を穿ち、其の中に、團栗を固く詰め込んで置くだけの勞力を無駄に費した譯である。

更に面白いのは、穿つた孔の中に、團栗と同じ位の大きさの小石が詰められてあることである。パークレーの大學脊椎動物博物館に保存してある標本は、皮の剥けた樫の樹の一部であるが、一面に散在する多數の孔に、悉く、小石が固く詰め込込である。之は此の標本に限らず、他でも往々見ることであるが、啄木鳥は、穿つた孔には、何物かを詰め込まねばならぬこと云ふ本能の働きで、斯様な目的に適はぬ所業を爲したのであらう。本能なるものは、大體から見れば、種族維持のために極めて有益なものでありながら、一個一個の場合には往々盲目的に働いて、何の役にも立たぬことを爲すことがあること云ふ最も適切な例と思はれる。

尚カリフォルニア啄木鳥が團栗を貯へるために穿つ孔は、僅に松の樹の皮の厚さだけでも達せぬ頗る浅いものである故、樹木に害を及ぼす心配は毫も無い。

英吉利國の雉類について(口繪附)

在 劍橋 蜂 須 賀 正 氏

現今英吉利に盛に繁殖し居る雉について最初外國より移植された事や其學名の起り及び自然又は人為的に出來た雜種等の事につき見聞せし事柄を纏めて見ると日本雉、高麗雉及高加索から來た雉と此三種が最も重きを置かれて居るので餘り關係なき人名等は略する事として種類は和名を與へられたる者のみを記さん、今度黒田理學士の加筆を得て投稿の運びに成りたり。

余の當地に着きしは九月上旬にて季節上獵鳥に關し比較的面白き觀察を成し得たり。

梧桐の一葉に秋立ち初めてよりチョンクキークと勇ましく百舌鳥が梢に囀り鴨鳥の鳴合ひさては目白、頬白に至るまで歌ひ出す長閑さは同じ天下の秋にても英國にては絶て見る事なき光景にて耳目に新しき小鳥の窓外に訪る時は自然異國情緒を引起すなり、天候も日本の如く天高氣澄は

到底秋の中頃より初春までには見る事稀にして有名なる濃霧は十一月中最も深く晴るともなく降るともなく常に陰鬱極まりなく就中龍動は十月頃より

二月中旬頃まで日光を見る事極めて少し。

最も人目につく鳥は第一駒鳥 (Robin) なりヒタキの如き小鳥にて鳴聲非常に愛らしく聲は頬白の囀づる如く開ゆる所もあり、次は矢張り雀に鳥ならん雀は日本内地産と同種なれども色彩に變化多く雨覆羽に白羽を雜へ居るをよく見受る事あり鳥は普通のカー／＼の外 Jackdaw と云ふ少し小形にして鳴聲宛然五位鶯の如し。四十雀の類には B. h. といふもあり田舎にては此小鳥の椰子實の内部を嚼び食する爲め適當なる穴を明け軒近くつるし室内より小鳥の來りて中實を食する動作を見る等面白き事どもなり。一步足を原野に踏出せば雉、鷓鴣の類夥しく候鳥としては田鳥最も多く群集して田甫の上に食をあさりつゝあるを見る當地に於て余の最も氣つきしは總て鳥の人間を恐れざる事にて到る所老樹の頂きには鳥、椋鳥等の巢二、三は必ずかくり居れりコバン等は二間位近寄りても少しも人を恐るゝ事なし。右に付余の判斷を述べれば事實上英國人は小鳥を好嗜せざる爲め打たざる故ならん (伊太利人は非常に好嗜)、鳩は日本よりは大形にして一般食膳に上れ共鳴等は籠動に於て小數の料理屋に於て用ひ居りしを見たる耳にて、むしろ贅澤料理に屬し自然獵るもの少く雉、鷓鴣、鴨等の獵鳥は居場所も定まり居り人は小鳥に對し幾んど危害を加へざる故ならん。英國人の著せる獵鳥に關する書物中には燕千鳥及アカエリヒレアシシギの如き小形の鳥の記載あれ共獵鳥點取表等は田鴨が最少なり。余は曾て本にて英國の小供は小鳥の巢及卵等を取る事を非常に好むが如く記憶すれど、事實は然らざる如く手入の行届きたる庭園中地上十尺位の小枝に小鳥の巢喰しを屢ば見し事あり穴巢等も保存に勉むる如く巢箱は各所に見受らる。

英國の雉

雉類の原産地は亞細亞にして英國には凡そ八百年以前に於て現今 Old English 又は Black necked pheasant (Pheasantus colchicus) といふはるゝ種類が最初に輸入されたり。原産地は土耳其、中央亞細亞、高加索山脈全部ボヘミア及びサロニカ灣附近にして古昔希臘人が中央亞細亞中の Colchis の River Phasis 附近にて始めて此鳥を發見し川の名に因みて Phasis と命名し其後如何なる方法により歐羅巴に傳播せしかは分明ならざれ共現在殆ど確實に認められ居るは伊太利羅馬帝國時代に此地に駐屯せし軍隊により行はれしものならんといふ、降て十三世紀頃則ち伊太利の Augustine 帝時代に盛に養殖されたれ共現今にては最早人爲的飼養の必要なく只金満家の道樂仕事となりたり。一例を述べば或る獵季初め伊太利ゼノア附近に於て得られし雉の數は一日二百五十羽の多きに上つたこと云ふ。英國にてはノルマン民族よりもデーン人種よりも以前ローマン人の勢力ありし時代其土官によつて傳播され名はローマ

ン時代 Phasianus ヲ云ひしが、英國人の時代に Pheasant ヲ云はれ同時(或は少し以前)佛國にても處々に傳播せられ Phasianus は變じて現在の Pheasant となり、英國にてはヘンリー一世の時代(一一〇〇年八月二日) Aunshurg の僧院長に兎ニ雉を捕獲する特權を與へたる事あり。佛蘭西にては一一七九年皇室にて保護せしがチャールス四世(一三三八)の時貴族に網にて捕獲する事を許せり云ふ、同時已に可成繁殖せしもの見ゆ。西班牙にては十一世紀頃愛蘭^{アイルランド}にては一五八九年始めて野生の狀態にて獲られたり同時に和蘭、伯耳義、獨逸、澳地利等に擴がり一八九一年には已に一四七九一二羽の鳥が一冬に獲れたとの記録あり。瑞典にては Ozkar 王が大に繁殖を奨励したとの事なり以上は總て黑頸種なれ共セントヘレナ島には一七七五年ホルトガル人により高麗雉を放ちたり、英國に高麗雉を放ちしは一八五五年なれ共それ以前に於て已に獲られたる記録もあり會てヘンリー七世よりエリサベス女王時代まで(自一四八五) Tudor 王が饗應の飾りに高麗雉を北支那より得、黑頸種と交せて用ひし事あり。或人は一八〇八年ターナーの獵鳥を繪きし作中の雉は明かに白き首輪ありし故此頃には普通の鳥となりたるなり云へり。His 一八六九年の三五八頁にウォールサム(ロンドン附近)の地に於て始めて雉の得られたるこの記録あり、文章は或人の手紙にて事柄は數年前の事なり、次の一句は各書に引用されあるを以て余も此に記さん。

“De inventione Saurae Crucis nostrae in Monte Aento et de ductione ejusdem apud Waltham.”

此の時より以前に於ける事を前に記せども His によりて見れば此の時代英國内地にて得らるゝ雉はあまり多からざりしが如し。

十八世紀頃より黑頸種と高麗種の雜種が數代數十代續きし故今は原の黑頸種も高麗種も(一二の例外地はあれど)幾んど見るを得ざる様になりたり此種の羽色を記せば高麗雉に於る眉班の白色羽なく頸部の白帯は前後を缺ぎ僅に頸の兩側に残り脊及上尾筒の羽毛は赤褐色を帶び居り即ち兩種の中間の彩色なり冬期市場の店頭に列ぶ雉は此種類のものにして一般の人には相の子種則ち黑頸種(Old English pheasant)と信ぜられ居るなり雉類飼育所にては黑頸種、高麗種及び日本種の三種が實用向きとして飼はれ其他追込用としては十五種以上の種類あり。以下我國(日本)に知られ居る種類を略記せば、

雉 *Phasianus versicolor.*

一八四〇年 Earl of Darby が日本より一番を輸入せしに途中雌は死亡せし故黒頸種との雑種を作りたるに第一回は半分つゝ次回はその子親より三三四の割の子を得、數代の後遂に純粹の雉を得たるこの事なり。其内數羽は Prince Demidoff と稱する伊太利人に買はれ以來伊國に養はれ残りの數羽は Mr. F. J. Gurney 英人の所有となりたり、數年の後一八五三年原野にて高麗雉との雑種を得られたる事あり重量は四、五磅なりきと云ふ、一般に英國の雉は黒頸種、高麗雉及日本雉の三種より出で體質強健となり今日にては獨立種になりたりとの説有力なれど余の觀察にては色彩上よりは日本雉の特長見へず尤も廣き範圍より材料を蒐集せば或は日本雉の特徴を認め得られざることも限らず目下研究中なり、黒頸種（以後雉とは内
地産を云ふ）との雑種は大變に大きく肉も上等にて、蒙古種及高麗種とも第一代は好成绩なれども次第に劣等なる事あれど數年前英國 Norfolk に放たれたるは間もなく附近へ擴がりたりと云ふ事もあり凡て何種の雉にかぎらず他種の餘り多からざる場所に相當の雌雄を放たば其所に他種の雉が居りても決して雑種を生ぜざりし實事あり又日本より取り寄せて放らし事もあれど追込飼養し原野に放ちしとは同じからざる事明なり、或人の説には雉は蒙古産の雉との雑種が最も成績よしと云はる黒頸種との雑種は西南支那の原産なる Stone's pheasant (*P. elegans*) に似通へり。

高麗雉 *Phasianus torquatus.* (支那雉と云ふ方適當なり)

高麗雉の英國に輸入せられしは日本産(朝鮮)にあらずして支那産なりしなり *torquatus* なる學名の附きし由來は昔し希臘人及羅馬人の頸にまこいし一種の頸飾を *Torque* と云しが此鳥は宛然かゝる頸輪をはめしが如き色彩により名けられしものなり。一七四二年或る人(商人)の東印度方面より得たる此鳥の記録あり英國人にて此鳥を見しは或は此人が最初ならん。

一七九〇年原種を輸入し一八五五年には已に原野に生育し居りし事は前に述べたり、其他の土地にては一五一三年ニュージールランドに輸入され、夏、冬六週間づゝの獵期には數百羽を得られるこの事なり、其外前に述べしセントヘレナ及び最近には合衆國、墨西哥等なり。

Prof. Temminck が標本を得始めて歐洲の學界に紹介されたり英國には珍らしき鳥故飼養者仲間非常に珍重され居れり未だ原野に放つ境には達せざるなり、一八六五年以來龍動々物園に養はれしが非常に爭鬪を好み雄二羽を同居さす時は兩者傷つくも未だ爭鬪を止めざるなり或る商人は航海中雌鶴雉が非常に馴れ着英後自由なる場所を與へたれば間もなく羽毛にて巢を造りだせし故非常なる望みの下に雄鶴雉を放ちしに其後見し時は雌は死して巢の内にあり頭云はず目云はずひびく啄かれ居たり云ふ、*Pigeonier on Pheasant* 及び *Pheasant in Covert & Aviary* の兩書に特筆せられあり最も荒き類なり、同年動物園にては十個の卵を産みし中辛ふじて數羽孵化せしも數日の後死亡したり云ふ。

雌の尾羽につき實驗せられし事は無けれも若し雌鶴雉と雄雉との雜種を造る場合には其雜種雄は雉より長き尾羽を有すべく若し反對に尾羽は雌鶴雉の二倍に等しき雌雉と雄鶴雉との雜種雄は雄鶴雉より短き尾羽を有すなり以上ダーウン氏の説なり。

尾長雉

Symnallus peruvii.

Mr. Beal 云ふ人が一八〇八年より十三年間雄をマカオに於て養ひしが死したる故新らしく此鳥を得る爲め苦心し一八三一年十年目に四羽の鳥を一一〇弗にて買ひたり多分同じ鳥ならんと思はる一八三一年 Reeves 氏により英國に運ばれしが皆雄なりき。一八三八年 John. R. Reeves 云へる彼の息子は遙々自分にて支那より雌を得て一番を動物園に寄附したりしが時に雌は老雉となり間もなく死し雌は他の鳥との相の子を産み一八四〇年に死したり。然れども其以前 Dr. Latham 著 *General History of Birds* には此鳥の尾羽を三十本まごめたるが何かの飾りの爲支那より來りしを見、體は判然せざりしも *P. superbus* の名を附したり。

次に Temminck 氏は支那人の此鳥を畫きたる繪を手に入れ彼の著 *Pigeons et Gallinans* (一八一三) にのせ *P. veneratus* 云ふ此鳥にふさわしからぬ名の下に發表したり。最も成功せしは G. B. 氏によりてなり、氏は支那に於ける各種の雉の採集を試み中支那に於て漢口の領事 Medhurst 氏の助力によつて多數の支那人を呼びて四羽を獲たり、此時前記の支那人の書きたる繪の寫が大に役立ちし云ふ、此四羽の内無事英國に着きしは僅か雄一羽のみなりき、次回同じく漢口より七羽の生鳥は無事龍動々物園に着き

たり其内の三羽（雄一雌二）は Medhurst 氏の盡力により Queen Elizabeth に献上したり、此時以來大陸方面の鳥屋仲間にも姿を表はすに至りたり此鳥の鳴き聲は他の類と異り非常に音樂的なり其音律は Hedge sparrow (*Acceptor modularis*) 日本の山雲雀、カヤクヅリの類によく似て七八回繰返し餘り高き聲にあらず此鳥にして斯の如き優しき聲の持主とはとても思へぬ云ふ、飼養は普通の雉の如く容易にして雛もよく育つなり、英國 Northampton Shire の Lord Lifford 氏の飼育場に於ける尾長雉は非常に廣き場所を歩く故大低附近の森にて獵られたり、加之此邊は例年狐狩の行はれる所故自然追散らしたるなり云氏は云へども廣き場所を往復するには此鳥の特性なるが如し白鷗の如く他の雉を窘め追出す惡癖あり、普通の原野に於ては容易に飛び上らず飛び方は早くして地上數尺なれば獵銃にては危険多し之を凹凸の地面にして倒れたる木等ありて齒菜、灌木等の密生し小川等のある場所に移せば走る事能はざる故直に飛び上り高き樹木ある時は一層高く飛昇る故如斯き山地が尾長雉には最も適當なり、茲に一言し度きは英國の獵場なり日本に於ては以上の如き土地にあらざれば雉鶴雉を見ざれども當地に於ける雉の生息地は地方によりて異れども多く平原にして鋤き返したる草無き所及牧場等にも冬期鳥の體を没する位の草は甘藍キャベツ及び道路の兩側位なり、餌搜しに出し鳥を遠方より見出し得、犬の之れに接近して飛付くも手にこる如く見ゆるなり日本の如き峻しき山は無き故鳥の逃げ込む恐れなく常緑の樹林等は大低地上の手入れ行き届き居る故日本の鶉うちより容易なり。尾長雉と他の雉との雜種は多く子を生ぜざるが如し野生の相の子は獲られたる事少なし金鷄の子は體の主色赤黄色にて尾も可成り長し白鷗とは體色茶色にして淡黑色の尾を有する雜種なり、普通種とは可成り美しき子を生ず鳴聲奇抜にて二三百ヤードに響き渡る云ふ最も美しき雜種は鶉雉となり。尾長雉老雄の爭鬪は時々行はれ五六尺の高きに跳上るこの事なり。

金 鷄 *Chrysolophus pictus*.

一七六六年リニネにより *Phasianus pictus* の名の下に發表され東歐 Adoria 地方の産と信ぜられしが實は Thaumalea Picta にて支那の原産なる事は最近に至つて明にされたるなり。飼養者間には普通の鳥なり山野に放たれたる確なる記録はなけれ共數回獲られたる事あり、余は一昨年十一月龍動のハムステッドの鳥屋にて數十羽の雉の内金鷄雌の吊しありしを見たる事あり店員の答に他の雉と

共に遠方より送り來りしものこのみにて産地は判らず價は品が古き故三志(日本貨一圓十錢位)なり云へり普通の雉は五志(二圓)位也鳥を手に取りて檢すれば散彈の入りたる跡あり原野にて獲られたるものなり。普通種この雜種は時に原野にても出来るものなれど此雜種には事更ら普通の雉が近接し易く忽ち品種を劣等ならしむ故飼養者は大に注意を要する所なり。東京の三井高遂氏飼養の金鶏雄、雉雌の雜種一番(一腹の内ならん)は數年間養はれしも一回も産卵せし事なし云ふ。數年前アントワープにて銀鶏雄と金鶏雌との雜種を生じたる事あり現に龍動物園には美麗なる金鶏雄と銀鶏雌との雜種二羽飼育されあり(口繪參照)、或外人の手記に十數年前横濱の鳥屋に於て白鷓と金鶏の雜種らしき物を見たりとの事なり。

銀 鷄 *Chrysolophus amherstiae*.

Gould 氏の著 *Birds of Asia* 中に左の記事あり。

一八二八年非常に美しき雉を Mr. Benjamin Leadbeater により其年の十二月二日龍動に開かれたる Linnaean Society にて *Phasianus amherstiae* の名の下に論文と共に提出されたりそれは學者の誰も未だ嘗て見たる事なき種類なり(略)其後六羽の鳥を英國に持ち來りしが皆雄なりし故自分は雌を見る事に非常に興味を持ち支那の原産地に於ける此鳥の習性等に關し何等かの報告を望む、此鳥の飼養は金鶏の如く容易く行はれん事疑ひなしと信ず云々の意味の記載なり Leadbeater 氏の此鳥を手に入れし経路を記せばアームハーストなる名は伯爵夫人より出たる事を知る、始め印度の Ava 王は二羽の雄鳥を交跡支那より得之れを Sir Archibald Campbell に與へ氏は之を Lady Amherst に送たり、夫れより夫人は二年間自身にて養ひたる後英國に持ち來りしが不幸にして二羽は數週間の後死亡せし故前記の Leadbeater 氏の手に渡りたるなり以上の如き込み入りたる経路故産地は元より捕獲等に關しては詳しく知る事出來ざりし Leadbeater 氏は二羽の内一羽を Earl of Darby に渡し、現在は彼の遺言によりリバープールにあり。

有名なる Kensington Natural Historical Museum の標本はネパール駐劄英國官吏 Mr. B. H. Hodgson により二個の中一は巴里に送りたり云ふ以上は *Birds of Asia* にありしものなり又他の本には一八六三年 Dr. P. L. Selater により新に標本を得たれ共最も成功せしは一八六九年にして F. T. Stone 氏が上海駐劄英領事 W. Medhurst (兩者は尾長雉を得しと思ひし人々)との共力により西方

雲南より二十羽を得中八羽は生きて上海より一月餘の航海を經七月龍動物園に收容されたるは六羽の雄一羽の雌なりき以後盛に繁殖し素人の飼養者間にも養はるゝに至りたるなり此鳥は異名を Flower Pheasant 云ふは支那話の華子鷄より始まりたるなり、一八八〇年頃愛蘭及びスコットランドの一地方に金鷄と共に他の雉を追拂ひて放したる事あり原野にて兩者の雜種を生じたりといふ飼養者は金鷄の雜種は容易に造り得べく非常に人に馴れ又二代三代に至りても左程の惡化を見ざるなり。

白鷄

Gallus nobilemurus.

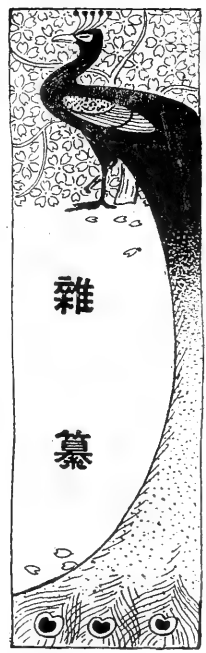
原産地南支那から一七三八年 Albin 氏により一七五一年 Edward 氏により始めて英國に移されたり飼養は容易く良く繁殖なす故原野に放ちたる事あれど飛様の非常に低き事及び他の雉類を驅逐するのみならず肉は他種より劣等なる故(二三月頃は此の鳥として一番香味の時なり云ふ)英國に於ては獵鳥としては重きを置れざるなり或人は追込中にて廿一、二年間飼養したる事あり可成り長壽の鳥なるが如し雄は非常によく人に馴れ普通の家禽と變らざるが如し然れ共蕃殖期に至れば烈しき争鬪を好み鋭き蹴爪の取れ去ることも尙止まざるなり以下其實例を記さん。

或英人は孔雀其他の鳥一所に放し飼ひにせしが朝食の時間となれば必ず窓近く來りて玻璃窓啄きて室内に入る事を求め飼主の手より餌を喰するを常とせしが其中春となりて性質次第に荒くなり他の鳥類は元より小供及犬に對しても喧嘩を始めまじき勢となり若し先方より人の來るを知るや草叢中に身を隠し人の近づくや飛で顔を目かけて向う云ふ又室内に入り來りて居合せし婦人を攻撃せし事もあり或人の話に飼養人が足にて蹴りしかば直に足に逆撃し距は靴の皮を貫きたり又或時一匹の狐は物蔭より忍びて飛つきしが鳥は夫れを知るや逆襲を行ひさしもの狐も逃げ去りし云ふ此時鳥は尾羽を失ひたり以上極稀なる事ならんも蕃殖期に於ては如何に荒き鳥なるかを知るべし。

英國に於ける鳥類の羽毛の白色變化は、非常に場合が多き如く思はる、氣候其の他の關係ならんか、雉類の白色又は半白は、それ程珍しき物にあらず、雌はあまり多數の卵を産せず成鳥も弱きが如し、一九一九年十月に劍橋附近にて獲られたるアチ雉は余の所藏標本なるが、目は薄き水色足は白ツボキ^{アチ}銜色なり他の此の如き標本と比較せしに(他は余の標本より白色少なし)兩者共頭部は幾んど白にて他は雜色なれども體の下部は濃く體の

上部は白羽多し明かに上下の色の區別が出来得れば白鷓に於けるが如き色彩とならん、雀に於ても頭部のみ白きもの及頭部及背部の白きものを得たり日本に於ても頭部の白き雀及頬白を見たる事あり、鳥類の白變に何等かの順序あるが如し、因に本誌第七號一三〇頁に森爲三氏のマガンの下面變りの記述を参照ありし。次に大英博物館及劔橋博物館所藏雜種標本名を列記せん。

雜類雜種 (凡て雄ロンドン博物館所藏)	
♂	♀
尾長雄	P. colchicus
雌 (日本産)	金鷄
銀鷄	金鷄
金鷄	尾長雌
金鷄	P. colchicus
P. colchicus	Game Bantan
P. colchicus	白鷓
P. colchicus	高麗雌
P. colchicus	Domestic Fowl
金鷄	白鷓
P. colchicus	銀鷄
P. colchicus	金鷄
雌	Black-breasted Kalij
ホロホロ鳥	P. colchicus
P. colchicus	Black-backed Talij
P. colchicus	Spanish Fowl
P. colchicus ♂	尾長雌—白鷓(明カナラズ)
P. colchicus ♂	白鷓
尾長雌 ♀	P. colchicus
金鷄—銀鷄	鷓雌 ♂
P. colchicus	Capin Domesticated hen ♀
1. P. colchicus	以下劔橋大學博物室藏
2. P. colchicus	Gallus bankiba 野生のニハトリ
1. (雄) 2. (雌なり)	金色 カンピン
P. colchicus	金鷄
後例の雜種は雌雄あり	



青森縣産鳥類目錄

和田 干藏

青森縣産鳥類目錄 (紙面の都合上學名を用ゐず)

科名	和名	津輕地方	南部地方	備考
阿比科	アビ	センスガモ	センスガモ	カモ類と誤認して狩獵せらるること多し。
鷹	ハシジロアビ	センスガモ、七里	センスガモ	同上
鷹	オホハム	ドンクグリ、ラデ	ケヤツブリ、ムグリ	當地にて盛に繁殖す。
鷹	カイツブリ	ドンクグリ	ムグリ	餘り多からず。
鷹	カムムリカイツブリ	ドンクグリ	ムグリ	同上
鷹	アカエリカイツブリ	ドンクグリ、マメ	ムグリ	同上
鷹	ハシロカイツブリ	ドリ、ムグリ	ムグリ	同上
鷹	ミミカイツブリ	ドンクグリ、ムグリ	カイツブリ	同上

青森縣は我本州の最北端に位し極南北緯四〇度二分より極北緯四一度三一分、極西東徑一三九度五四分より極東東徑一四一度三分に跨る海陸兩界を包含せし所にして、陸界は山嶽、原野、湖沼に富み、水界は三面海を以て抱擁せられ、且附近を流るゝ暖流及び寒流あるを以て氣候寒冷なりと雖も諸種の生物の蕃息に適し其等の分布極めて豊富なり。今青森縣に産する鳥類の主要を示して讀者の參考に資せむとす。

海 燕 科

鷗 科

鷺 科

雁 鴨 科

クロウミツバメ
 ハイイロウミツバメ
 オホミヅナギドリ
 アカアシミヅナギドリ
 ハシボソミヅナギドリ
 アナドリ
 フルマカモメ
 クロアシアホウドリ
 ウミ
 カハ
 ヒメ
 コサギ
 チウサギ
 アチサギ
 ゴキサギ
 ヨシゴキ
 サンカノゴキ
 ミゾゴキ
 ナシドリ
 マガモ
 カルガモ
 ナカヨシガモ

ウノドリ、ウ
 ウノドリ、ウ
 クロジ
 サギ、シロサギ
 サギ
 サギ、アマサギ
 ゴキ、サギ、アマサギ
 ダチ、ダウ
 サギ
 サギ
 ナシドリ、チシ
 アチクビ、マガモ
 ドロガモ、マガモ
 カモ

ウ
 ウ
 ウ
 サギ
 サギ
 サギ
 サギ
 サギ
 ダウ、カキジ
 サギ
 サギ
 ナシドリ
 カモ、マガモ、アチクビ
 ドロガモ、カル、カモ
 カモ

稀に認めらる。
 同 上
 可成多く出現す。
 同 上
 同 上
 稀なり。
 稀に出現す。
 日本海方面に主として出現す。
 餘り多からず。
 猿賀神社の森林に來りて(晩冬)盛に蕃殖し其の餌は十和湖に仰ぐが故に養魚家の被害大なり。
 可成多く狩獵せらる。
 近時頗に少數となれり。
 餘り多からず。
 可成多く猿賀神社の森林に營巢す。
 頗る多く猿賀神社の森林に營巢す。
 元多かりしが今は次第に少數となれり。
 猿賀神社に棲息すれども餘り多からず。
 猿賀神社境内森林に稀に出現す。
 夏期樹洞又は水田の稻株間に營巢す。
 鴨類中濃厚に分布する方なれり。
 越年して營巢するもの可成多し。
 南部方面に比較的多く出現す。

同 上

同 上

早秋出現冬季見えず、春季再出現して營巢するものあり。

南部方面に多し。

可成多く早秋出現す。

南部方面に多し。

各地に多し。

少数に出現す。

可成群を成す。

少数なり。(編輯者記す—次種の誤りなるべし) 可成多し。

少数なり。

陸奥灣内に極めて濃厚に分布し冬季狩獵家の好獲物なり、肉味差程佳ならず。

餘り多からず。

可成多く狩獵し難きものなり。

可成多く分布し強健にして仲々射殺に困難なり

左程多く分布せず。

多く分布し海岸に寄る習性あり。

仲々見當らず。

春秋の間に多く捕獲せらる。

同 上

同 上

同 上

同 上

オシガモ、オシドリ、カモ

カモ

ドロガモ、タカブ

カモ

オナガ、カモ

カモ

ハジロ、カモ

カモ

ハジロ

カモ

ハジロ

アチナ、ヘイケダ

カモ

カモ

キンクロ、カモ

ウルシガモ、カラ

ス、クロガモ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

カモ

カモ

カモ、タカブ

カモ

オナガ、カモ

カモ

ハジロ

カモ

ハジロ

カモ

ハジロ

カモ

ゴンゲン、ゲンゲ

カモ

カモ、キンクロ

クロガモ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

アイサ

同 上

同 上

早秋出現冬季見えず、春季再出現して營巢するものあり。

南部方面に多し。

可成多く早秋出現す。

南部方面に多し。

各地に多し。

少数に出現す。

可成群を成す。

少数なり。(編輯者記す—次種の誤りなるべし) 可成多し。

少数なり。

陸奥灣内に極めて濃厚に分布し冬季狩獵家の好獲物なり、肉味差程佳ならず。

餘り多からず。

可成多く狩獵し難きものなり。

可成多く分布し強健にして仲々射殺に困難なり

左程多く分布せず。

多く分布し海岸に寄る習性あり。

仲々見當らず。

春秋の間に多く捕獲せらる。

同 上

同 上

同 上

同 上

鸢 鷹 科

雉 鷓 科

オホヒシクヒ
サカツラガン
コクガン
シジウカラガン
オホハクテウ
ハクテウ
チウヒ
オホタカ
コノリ(ハイタカ)
エツサイ(ツミ)
イヌワシ
チジロワシ
オホワシ
クマタカ
ハチクマ
ノスリ
トシビ
サシバ
ハヤブサ
チゴハヤブサ
チヨウゲンボウ
コチヨゲンボウ
ミサゴ
キシ

ヒシガン、
クロハクテウ
ガン
ガン
ガン
ハクテウ
ハクテウ
ノウナシタカ、マ
メタカ
タカ
スズメタカ
タカ
ワシ
ワシ
ワシ
ワシ
クマダガ、ワシ
タカ
クソトンビ
トンビ、トビ
タカ
ハヤブサ
ハヤブサ
マノクソタカ
マクソタカ
同上
タカ、ワシ
キシ、サトキシ

クロハクテウ
ガン
ガン
ガン
ハクテウ
ハクテウ
タカ
タカ
タカ
タカ
タカ
ワシ
ワシ
ワシ
タカ、ワシ
タカ
タカ
トビ
タカ
タカ
タカ、ハヤブサ
ハヤブサ
マクソタカ
同上
タカ、ワシ
同上

可成多く分布す。
餘り多からず。
可成多産す。
少数なり。
東部小湊附近に棲息す。
西海岸金ヶ澤附近に出現す。
諸所にて捕獲せらる。
稀に捕獲せらる。
冬季多く出現す。
同上
餘り多からず。
同上
同上
諸所に散見し夏季雛を捕る者あり。
餘り多からず。
可成多し。
西海岸地方には極めて少数なり。
餘り多からず。
青森市附近にては妙見神社にて營巢す。
餘り多からず。
可成多し。
同上
海濱地方に多く秋季時々捕獲せらる。
極めて或局所には濃厚に分布す。

秧 雞 科

鷓 鴒 科

カウライキジ(?)
 ヤマドリ
 (ヤマドリ白變)
 ウヅラ
 ヒメクヒナ
 グヒナ
 ヒクヒナ
 パン
 オホパン
 メダイチドリ
 シロチドリ
 イカルチドリ
 コチドリ
 ケゲリ
 タゲリ
 ダイゼン
 ミヤコドリ
 アチアシギ
 ヘラシギ
 ホウロクシギ
 チバシギ

朝鮮雞
 キジ、ヤマドリ
 シロゲラ
 ウヅラ
 ヤチゲトリ
 ナマスハタキ、カ
 ンカン、ヤチゲト
 リ
 パン
 パン
 カハラシゲ、シゲ
 シゲ、カハラシゲ、
 チドリ
 シゲ
 シゲチドリ
 シゲ
 シゲ
 シゲ
 ヘラ
 ダイジヤク
 シゲ

キジ
 ヤマドリ
 ヤマドリ
 ウヅラ
 グヒナ
 カンカン
 パン
 パン
 ハマチドリ
 ハマチドリ
 チドリ
 シゲ
 シゲ
 シゲ
 シゲ
 シゲ
 ダイジヤク
 シゲ

朝鮮のカウライキジに極めて類似す。(雄の變種ならん)
 キジに比して分布極めて少し。
 此種にて純白なるを今年入手せり。
 原野多き諸所にて旺に繁殖す。
 極めて稀なり。
 極めて多く分布す。
 極めて多く分布し、水田稻株間に營巢するが故に小兒等のため卵を捕はるること多し。
 可成多く分布し、青森附近にては浦町驛の池沼内に營巢す。
 十月下旬乃至十一月上旬上北郡小河原沼には無慮一千以上の大群を成す實に壯觀を極む。
 早春より來り當地にて繁殖するものあり(?)、可成多し。
 春秋二期に出現す。
 當地にて繁殖す。
 少し。
 同 上
 同 上
 同 上
 餘り多からず。
 大正九年の秋期には只五羽位より出現せず。
 餘り多からず、味極めて良好なり。
 可成多し。

海 雀 科

鳩 科

シロカモメ
オホセグロカモメ
ワシカモメ
ユリカモメ
ウミネコ

ヅグロカモメ
トウヅクカモメ
コアサシ
ウトウ

ウミアウム
ケイマフリ

シラヒゲウミスズメ
ウミスズメ

コウミスズメ
マダラウミスズメ

カムムリウミスズメ
エトロフウミスズメ

ドバト(家禽)

アチバト

キシバト

ゴメ
タラゴメ
ゴメ
ゴメ
ゴメ、スキラ

ゴメ
タラゴメ

ハナドリ(鼻鳥)

ウミスズメ

スズメ
ガンアイサ

シラバト、クラハ
ト、ハト

マチドリ、マチ

ヤマハト

ゴメ
ゴメ
ゴメ
ゴメ、スキラ

マチドリ、マゴ

ヤマハト

餘り多からず
冬季鱈漁期の頃最も多く出現す。
同 上
冬季より四月中出現するが如し。
三戸郡燕島は有名なる營巢の根據地なり、其他諸所の海濱なる無人島に多く棲息す。
餘り多からず。
冬季多く出現す。
極めて少数なり。
寒流を追ふて棲息するが如し。嘴上突起は年中存するものもあり。
餘り多からず。
寒流に漂ふものの如し。
極めて少数なり。
分布は年により差あり大正九年の如きは極めて少かりき。
前者より遙少数なり。
餘り多からざるが如し。
極めて少数なり。
極めて少数なり。
近時著しく増殖したるため農家の被害多大なり、されど蝸牛、田螺等の幼仔を喰するを以て衛生上考慮する點あるべし。
深山に多く鳴聲人の小兒に似たるを以て之を神鳥とし此の影を見たるものは死すとの迷信あり、營巢す。
可成多く雛を捕へて養はんとす、ために狩獵法に觸るゝ者年々尠しとせず。

啄木鳥科

アカゲラ

ケラツツキ

キツツキ

コゲラ

ケラ

ケラツツキ

アチゲラ

ケラツツキ

ケラツツキ

雲雀科

ヒバリ

ヒバリ

ヒバリ

鶺鴒科

キセキレイ

ツメナガセキレイ

セグロセキレイ

ピンズキ

タヒバリ

ハクセキレイ

ヒヨドリ

サンクワウテウ

サメビタキ

コサメビタキ

キビタキ

ムギマキ

オホルリ

可成多く夏季雛を捕りて養ふ者あり、北海道とは不規則なる渡りをなすが如し。

近時著しく少数となれる傾向あり。

可成多し。

少数なり。

頗る多く春彼岸頃渡來し、晩秋去る、又少数は越冬するものあり。

近時人里に來るもの少数となれり。

近時極めて少数となれり。

年中棲息し春苗代に下りて農家に嫌はる。

可成多きが如し(昨春は特に多かりき)。

餘り多からず。

年中居るが如し。

少数は越年して蕃殖す。

諸所の森林に多しと雖も三戸郡名久比岳には殊に多く産す。又時に屋内に入り來ることあり。

餘り多からず。

極めて多く分布し時に二十以上の群をなすとあり。

南部地方に多し。

同上

當地にて蕃殖す。

科

科

トラツグミ	アカハラ	マミチヤジナイ	シロハラ	マミヅロ	クロツグミ	イソヒヨドリ	ツグミ	コマドリ	ノゴマ	コルリ	ツヤウビタキ	ノビタキ	カヤクグリ	イロヒバリ	ヤマヒバリ	シマセンノウ	オホヨシキリ	コヨシキリ	セツカ	ヤブサメ	ウグヒス
-------	------	---------	------	------	-------	--------	-----	------	-----	-----	--------	------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	-----	------	------

トラツグ	チヤツゴ	ツゴ	ツゴ	マユツゴ	ツゴ、クロツゴ	テウマン	コマ	ノドアカ、ヒノマル	コルリ	ヒタキ	ウグヒス						チヨチヨズ	チヨチヨズ			
------	------	----	----	------	---------	------	----	-----------	-----	-----	------	--	--	--	--	--	-------	-------	--	--	--

		ツゴ			コツケイ	イソコツケイ	テウマン	コマ	ヒノマル	コルリ	ヒタキ						チヨチヨズ	チヨチヨズ			
--	--	----	--	--	------	--------	------	----	------	-----	-----	--	--	--	--	--	-------	-------	--	--	--

稀に出現す。
 可成多く諸所にて晩秋迄蕃殖す。
 少数なり。
 少数なり。
 同 上
 極めて多く肉を肺病患者に喰はしむる迷信あり、此卵の味は鳥卵中の最たりと云ふべし。
 海濱地方には冬季多く産す。
 大群團を見ることあり。
 當地にては今別方面の権林中にて營巢す。
 陰性の鳥にして春季捕はるゝこと尠からず。
 秋季は屋内に入り來りて捕はるゝものあり。
 餘り多からず。
 可成多し。
 西部方面に多し。
 大正十年八月八甲田山海拔五、〇〇〇尺の高處に巢及四卵を發見す。
 餘り多からず。
 少数なり。
 頗る多く蕃殖季には晝夜の別なく嘯鳴す。
 可成多し。
 少数なり。
 同 上
 頗る多し。

河鳥科 鷓鴣科 燕科 山椒喰科 連雀科 鶺鴒科 五十雀科 四十雀科

コムシクヒ
メボソ
センダイムシクヒ
キクイタダキ
カハガラス
ミソサザイ
ツバメ
イワツバメ
サンセウクヒ
キンシヤク
レンシヤク
ヒレンシヤク
モズ
オホモズ
チゴモズ
アカモズ
ゴジウカラ
シジウカラ
ヤマガラ
ヒガ
コガ
エナガ

メジロ
マツトリコ
西洋(1)

ミソヌスビト、マ
メジヨ

ツバメ

ダケノツバメ

チリチリン

レンシヤク

レンシヤク

モズタカ

モズタカ

モズタカ

モズタカ

五十雀

四十雀

ヤマガラ

コガラ

ヒガラ
プリ、モホラ

マツムスリ

ミソサザイ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

ツバメ

少数なり。

餘り多からず。

極めて稀なり。

頗る多く松果の中より實を啄喰す。

餘り多からず。

可成多し。

頗る多く家屋に營巢を行ふ。

中郡岩木村岳温泉に息棲し又北郡十三村附近の海岸に多く、斯種にて食用となる巢を造るものありと言傳ふ。

可成多く分布し夏季蕃殖す。

極めて多く分布す。之地方と異なる點なりとす。

極めて少数にて分布す。

可成多く軒下に置く小鳥籠を襲ひて之を捕食すること多し。

稀に出現す。

可成多し。

少数なり。

近時著しく少数となれり。

頗る多く四時諸所に散見す。

同上

同上。(雛を青子と呼ぶ)

同上。(同)上)

秋季最も多し。

科	種	科	種	科	種	科	種
鴉科	ハシブトガラス ハシボソガラス ミヤマガラス	椋科	コムクドリ メジロ キバシリ シカメ	繡眼科	イカル リクゼンイカル(コイカル)	雀科	イリスカ

ハシブトガラス	クチブト、カラス	コムクドリ	サクラ	イカル	三光	イリスカ	イリスカ
ハシボソガラス	クチボソ、カラス	メジロ	メジロ	リクゼンイカル(コイカル)	三光	イリスカ	イリスカ
ミヤマガラス	ヤマガラス、ダゲカラス	キバシリ		イリスカ	三光	イリスカ	イリスカ
コクマルガラス	ブチカラス	シカメ		ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
ホシガラス	シロカラス、ブチカラス			イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
カケス	カゲス			ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
ミヤマカケス	松前カケス			イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
チナガ	オナガ			ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
ムクドリ	サクラドリ			イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
				ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ

クチブト、カラス	カゲス	サクラ	サクラ	イリスカ	三光	イリスカ	イリスカ
クチボソ、カラス	カケス	メジロ	メジロ	イリスカ	三光	イリスカ	イリスカ
ヤマガラス、ダゲカラス				ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
ブチカラス				イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
シロカラス、ブチカラス				ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
カゲス				イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
松前カケス				ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
オナガ				イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
サクラドリ				ケラツツキ、イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ
				イスカ	イスカ	イリスカ	イリスカ

頗る多し。冬季と雖も水浴す。
 同 上
 餘り多からず。
 稀なり。
 少数なり。
 頗る多し。
 八甲山麓にて観察することを得
 可成多し。
 渡鳥中最も多く分布し七月上旬頃より十月頃迄
 は數百の群團をなして飛翔し實に壯觀を極む。
 前者より遙少数なり。
 極めて多く分布す。
 少数なり。
 餘り多からず、樹芽を害す。
 頗る多く捕へて養ふ者多し。
 少数なり。
 當地にて蕃殖す、昨年六月十二日上北郡野邊
 地附近にて十數羽の群を觀たり。
 少数なり。
 春季イスカの群に混來す。上北郡三澤附近殊
 に多し。
 南部方面には多し。
 南部方面に多く飼養せらる。
 少数なれども飼養する者あり。

ア ト リ
マ ヒ ワ

ヒワ

ベ ニ ヒ ワ

大群を成して出現す。
毛色により柳ヒワ、青ヒワ、白ヒワ、クロヒワ、
動作により玉ヒワ、羽フリヒワ等の名を附す。
大群を成すことあり。
餘り多からず。

シロハラベニヒワ(?)

カハラヒワ

ケロロ、シトド

ベニバラウソ

ウソ

ウソ

オタネヒワ、シトド
ソウテル
アンマハシ、キリ
マハシ

ウソ

(所謂アカウソ)

スズメ

ハンテル、ウソコ
スズメ

ウソ
スズメ

ニウナイスズメ

臥雀、サクラスズ
メ、クダリスズメ

シトド

ホホアカ

四十九日の餅搗子
ヤマスズメ、ウツ
ラヒバリ

シトド

ホホジロ

シトド、四十九日
の餅搗子

シトド

コホホアカ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

ミヤマホホジロ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

アチジ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

クロシ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

カシラダカ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

ユツユリン

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

オホジュリン

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

ノシ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

ツメナガホホジロ

シトド、ヒワ

アチジ、シトド

同 上
極めて少数なり。
同 上
稍多く分布す。
頗る少数なり。
秋季大群を見ることあり。
少数なり。
春季五、六十の大群を見ることあり。
諸山にて蕃殖す。
極めて少数なり。

上表により青森縣には約三百六十種の鳥類産することを知りたれども、未だ調査に漏れたるものも尠からざるを以て他日其缺を補ふの日あるを信ず。由來青森縣は動物地理學上總北區舊北亞區中支那地方の北方に位置し、津輕海峽を以て舊北亞區中なる歐亞地方と相界せり、而して上記兩地方の分界線たる津輕海峽假想線はアラキストン線と稱せられ、兩區の鳥類分布に著しき差異ありと雖も、鳥類の生存上該線附近に漂ふものも尠しとせず、又寒流暖流の分布上是等に適應して棲息するものも稀ならず、是青森縣鳥界に稍特色を發揮する所以なり。されど青森縣産特有鳥とも稱し得べきものを未だ認めざるは遺憾とする所なり。此缺は他日を期して探險を行ひ是非共學界に未知なる鳥類の數點を發見せんと欲す。(完)

隱岐島の鳥類

曾田義文

鳥根半島の沖合四十哩日本海の一隅に墨痕數滴を點下せし如き鳥嶼は我が隱岐島にして四個の大島無數の小島より成り長徑十數里五小郡十數村に區劃せられ鳥根半島の一部加賀御碕と最も近くして而も猶二十里を隔つ鳥前、鳥後の間は五六里を隔つるも其の間に大小の鳥嶼散在するを以て鳥類の往復には差して困難なければ兩大島の鳥類は共通と見ざるべからず。

此如くにして我が本土と相隔つるを以て水鳥は格別と爲し陸鳥に在り

ては或る特殊のものにあらざれば本土より渡るべからず。加ふるに同島の沿岸は暖流寒流の洗ふあり隨つて渡鳥に於て本土のものとは異なる點の存する必然にして自然界に心の在る者の一度は探査せんとする傾きあり。

從來同島の調査を爲したるものは二三にして止まずされど何れも地方に於ける博物研究者等なるを以て鳥獸のみに着目する能はざるの恨みありし是等の外に同島に着目したる者には米國人ロバート、アイ、アンダーソン氏(二十一才)あり。氏は英國ロンドン市ブリチツシュ博物館備付の標本採集の目的にて派遣せられたるマルコン、ヒー、アンダーソン氏(二十六才)(北米合衆國カリフォルニア州メンロパーク住)の使者にして同地の居住なるも日本にては長野縣諏訪郡上諏訪町に假住せり。又之が案内役として來縣せしは東京市本郷區第一高等學校中寮三番室に住居する金井清氏にして當時二十二才の青年採集家なりしが如何なる人にや其の後を知らず。兩氏は一ヶ月の採集期間の許可を得明治三十八年六月下旬渡鳥せり。

兩氏は渡鳥して數日山野を跋渉せしが如く歸來後捕獲鳥獸を報告せる書面を見るに纔に鳩其他の數羽の小鳥を捕獲せしに過ぎず。恐らくは大なる失望を以て歸航せしや想像に難からず斯の如くにして從來同島の鳥獸は餘りに研究せられしと無く隨つて其の記載も當地方に一も存するもの無し迂生は鳥獸學の素養あるにはあらざれども職掌上一應同島の鳥獸界を一瞥し置くべき必要を感じ大正九年十月渡鳥せり素より何等の準備無く捕獲して真相を極むる能はず。學校標本、狩獵家の談話並に予の目撃

したるものを綜合して次の如き鳥類の棲息するとを認定せり此の他の小鳥に至りては一朝の調査を以て知るべきに非らず只だ概況を知る迄なり

隠岐島の鳥類

コマドリ、ヒゴマ、メジロ、ウグヒス、スヅメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、エナガ、シバウカラ、ヤマガラ、ホ、ジロ、カシラダカ、ヒガラ、アトリ、ヒタキ、ヒバリ、アカヒバリ(何種なるや不明)ウヅラ、ツバメ、イワツバメ、キジバト、ドバト、カラスバト、ビンズイ、ムシクヒ、ツグミ、アカハラ、トラツグミ、クロツグミ、シロハラ、マミジロ、モズ、アカモズ、オホモズ、ヒレンジャク、サンカウテウ、シメ、ウソ、イカル、ヒヨ、コゲラ、アラゲラ、アカゲラ、ミソサバ、イ、ホト、ギス、クワツコウ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ、イソヒヨドリ、カハセミ、ヤマセミ、ミサゴ、トビ、マグソタカ、ワシ、タカ、コノリ、ヂシキ、ヤマシギ、ケリ、タゲリ、バン、クヒナ、チドリ、ミ、ヅク、ヨヅク、ゴ井サギ、ミゾゴ井、ヨシゴ井、サ、ゴ井、チウサギコサギ、アラサギ、オホヨシゴ井、ウ、ウミネコ、カモメ、アイサウミスヅメ、アヂサシ、アビ、オホハム、セガロカモメ、ユリカモメ、アリツキ(チガモ)、マガモ、タカベ、ハジロ、チシドリ、スバガモ、アカバシラ、クロガモ、ツクシガモ、アカツクシガモ、

カイツブリ、ガン、ハクテウ、カウノトリ、ツル。

以上の如くにして之を内地本土の夫れに比し殆んぎ其の差點を發見し難けれども、ツル、コウノトリ、ツクシガモ、アカツクシガモ、ハクテウの如き鳥類の存すること及び本土より存することの色彩濃厚なる點に於て差點を認む又内地にては普通にして而も同島にては見る能はざりしは、キジ、ヤマドリ、アヲバト、カケス、ムクドリ、カハラヒワ、コシアカツバメ、イスカ等にして殊に雉、鶺鴒に至りては、土人中に想像の出來ざるもの多し。

鶴は大正四五年の頃約十羽同七年頃に二羽許渡來せしことありしが島前、島後の中間地を中心として旬日許悠遊せしも土人銃器を提げて追躡せしを以て遂に姿を隠せり故に本縣内にて鶴の足跡を止むる最終地は隠岐と言はざるべからず、鶴は縣内本土にも稀に渡來するを以て全く事情を異にするにはあらず只だ本土より幾分多きを認むツクシガモ、アカツクシガモは本土にて捕獲せられしを聞かざるも隠岐にては多少捕獲あり往時は更に多かりしと思はれ老人中には「トンガラスサン」が近年見えずなりしと云ふ蓋しトンガラスは赤筑紫鴨なり。鶺鴒の隠岐に現はるゝは但馬の出石山と連絡あるものなるべし。

隠岐島に上陸して第一に目を曳くはの鳥多きことにして西郷灣内の如きは帆柱千本鳥千羽の光景にして同島の特産鰯を製造するに鳥賊の臟腑は鳥に依りて整理せられ人の接近するも容易に怖れ去ること無し。椋鳥

の居らざるは飛翔力の乏しきを示すものなるべく樞島の棲息せざるは不思議なり。燕の少なきは島内に稻田の少なき原因すべく腰赤燕の居らざるも同一の原因ならん。之に反し布施村都万村の海岸絶壁に營巢する燕は恐らく岩燕にして本土の夫れより數量多きは地勢の然らしむる處なるべし。島内の主なる獵鳥は鳩にして鳥鳩の多きことは他に見るべからず秋季島内を旅行する時は至る所に其の鳴聲を耳にし而も甚だ大形種に屬し鳩の約二倍なり。磯鴨の多きことも同島の特徴にして沿岸至る處之を見ざるは無く五位鷺も相當多く鶴に至りては全島に多く美濃長良川の鶴は其の雛を此の地に索むるものありと言ふ。鴛鴦は島内奥部の池畔にて蕃殖し鴨の去來は本土と異なる點存す即ち本土のものは四月に去り十月來るも同島にては五月に去り七月に現ると云ふ。又アリツキと稱する一種は地鳥にして去ること無しと云ふ而して其の本據は東鄉村津井の池にして或る視察家の言によれば八月多くの鴨を認めたりと言ふも本種にして何れはカルガモの事なるべし。

島前、島後の中間に大森島、松島、桂島と稱する周圍約二里許の島嶼にして無人島にて本島より二三里を隔て島上には松樹茂れり。此等の島々には數百の鶴並に無數の大水風鳥棲息し其の斷崖には多くの穴ありて此の中に營巢して蕃殖す。されば同地にして大水風鳥を穴鳥とも稱す。蓋し此に基く名なるべし島根縣下に於ては他に多く見る能はず。

同島の鳥の渡りは本土に比し北方に位置するを以て鴨の去來期に於て

約一ヶ月の相違あり、一般の情況と一致するも同島のみにては地方的差異存す多くの渡りを爲す水禽類は同島中間部たる前後兩島の中間海峡の南端に現はれ數日此の附近に悠遊したる後四散するの傾きあり爲に島後の北端に居住する人々は雁鴨は南より來るものなりとの信念を懐かしめたり之に反し鶉類の類は北方より渡ると稱す先年島後の最北端なる白鳥沖に黒雲の動くと見し間に一音響と共に數千羽の鶉類白鳥に來れり而して甚だしく疲勞し居たりと云ふ是等の事情を綜合するに二種の經路あるかと思はる。

以上は眞に小調査にして果して眞相に觸るや否や保し難きも所感を儘に記載せり而して他日好期を得て之を訂正せんと欲す。

長門佐々並地方の鳥類 (上)

兼 常 彌 富

1. カイツブリ 方言 カイツムリ、

候鳥 來期 十一月下旬乃至十二月上旬 去期 三月上旬

候鳥にして其數餘り多からず、寒氣を催すの頃河川に來り魚族を捕食す、暖氣を將に加はらんとするに至り姿を沒す。

2. カワウ 方言 ウノトリ、

極めて稀に見ることあり。

3. ゴイサギ

稀に鳴聲を聞き又飛翔するを見ることあり。

4. ナシドリ 方言 オシ、

候鳥 來期 十一月中旬乃至下旬 去期 三月上旬乃至中旬

秋季群をなして來り、冬季溜池又は河流、山間の溪流等に下り、普通なり、椎、檜等の實を食す、常に未明中に飛翔し水面に下る、一度來りたる個所へは必ず連日來るものと如し。

5. マガモ 方言 カモ、

候鳥にして冬季來ることあれども稀なり。

6. カルガモ 方言 ナツガモ、

候鳥夏季河流に來ることあれども稀なり。

附記。候鳥なるや否や疑はし恐らく留鳥多からん(黒田記す)。

7. コガモ、候鳥 來期 十一月下旬乃至十二月上旬 去期 二

月下旬乃至三月上旬。

冬季溜池、河流等に來ることあれども少數なり。

8. マガン 方言 カリガネ、

候鳥にして秋季高空を飛翔するを見るのみ。

9. コノリ、ハイタカ 方言 ホンタカ、

四時共に棲息するも餘り多からず。

10. エツサイ、ツミ 方言 ヒイタカ、

四時共に棲息す普通なり。

11. クマタカ

四時共に棲息するも少數なり。

12. ノスリ、方言 クソトビ、

四時共に棲息するも稀なり。

13. ハチクマ

傳説 農民の説を聞くに、本種は蜂を非常に好み、蜂の巢を見付け

るや、直ちに下りて己が羽毛を擴げ、群る親蜂を羽毛の間にしめ付け後之を食す、斯くして親子共に食し終る、時には大食の爲め己が身體の自由を失ひ、暫くは飛翔することもならず、靜止し居れるものありと云ひ傳ふ。

候鳥 四月上旬西南より東方に向ふ、九月中旬乃至下旬東方

より西南に向ふ、

春秋通過するを見るのみ、春季通過する際は、高空を飛翔する爲めか餘り認め得ざるも、秋季は九月中旬頃より下旬頃迄、被岸を中心として、多數群を爲して通過するを認め、時には降雨などに會し、低く下り樹上に靜止し、獵者の爲めに捕へらるゝもの數多あり、通過の最も多き彼岸中にて、一日數千を以て算し、彼岸前後と雖も數百に達す、十月に入りては全く姿を認めたることなし。

14. トビ 方言 トンビ、

折々飛翔するを認め得るのみ、

15. ハヤブサ、方言 ハヤフサ

四時共に棲息す普通なり、小鳥類を追ひ廻るを見る。

16. キジ、蕃殖 四月上旬乃至七月中旬原野雜草、小樹の間に營

巢育雛す、卵は通常五個乃至七個あり、

四時共に棲息す極めて普通なる種類なり、早春曉告ぐる頃、諸所の山々にて勢よき鳴聲を放つ、秋季山間の田畑に出で、蔬菜、稻等を食害す。原野に多し。

17. ウスアカヤマドリ、方言 ヤマドリ、蕃殖 四月上旬乃至七

月上旬、杉檜林等の山林中に營巢育雛す、卵は五個乃至七個

あり、

四時共に棲息す普通なり、原野に在ること少なく、森林中に多し、

秋季山間の田畑に出で蔬菜、稻を食害することあり。

18. ク井ナ、方言 クロトリ、カンコドリ、カンコテフ、

候鳥 來期 五月中旬 去期 十一月上旬、蕃殖 七月上旬

乃至八月下旬頃、水田の稻葉を引き寄せ營巢す。

初夏より秋季まで稻田にて普通に見る種類なり、常に稻田の間に在

り、秋季稻刈取りの頃雛と共に去る。

19. タシギ、方言 ボタシギ、

秋季水田、河邊等にて見ることあれども稀なり。

20. キジバト、方言 ヤマバト、

秋季より初春頃迄普通なる種類にて、常に山寄せの田に下り食餌を

あさる。

21. アヲバト、

秋季より四月頃迄普通なる種類なり、常に桧林に多く棲息す、四時

共に棲息するものゝ如し。

22. クワクコウ、方言 カツボウ、カツボウドリ、

傳説 本種は一方の足には羽毛を有すれども一方の足には羽毛なし

故に「カツボウ」(片々の意味)と云へり。

又、此の鳥が鳴き始めなば、筈が生へ始めると云へり。

候鳥 來期 四月下旬乃至五月上旬、去期 九月下旬乃至十

月上旬

普通なる種類なり、常に一定の区域内を限り棲息するものゝ如し、

特に梅雨中鳴聲甚だしく、晝夜共に鳴く、曇雨の日などは極めて低

く飛翔す。

23. ホトトギス、

傳説 ホトトギスは曾て自分の弟をだまして一頭の牛を賣り、代金

を受取りたるまゝ牛を渡さず逃走せり、然れども良心の苛責

にて狂氣の如くに斯く晝夜の分なく、「こつといかけたか、お

とときたか」と、八千八聲も鳴き、果ては口より血を吐くと

云へり、コツトイとは牡牛の方言なり。

又、味噌の腐敗しがかりたるものへ、ホトトギスの羽を入れば良くなると云へり。

候鳥 來期 四月下旬乃至五月上旬、去期 九月下旬乃至十月上旬

蕃殖 老農の説に、ウグヒスの巢中に産卵す云へるも、未だ見たることなし、

極めて普通なる種類なり、前種と同じく晝夜の別なく鳴聲を放つ、梅雨中殊に鳴聲甚だしく、一區域内を飛び交ひ鳴く。

24. ツツドリ、方言(通常鳩の鳴聲云へり)、ヤマバト、候鳥 來期 五月上旬乃至中旬 去期九月下旬

前種に比し稍少なく、随つて觀察充分ならず、唯鳴聲を聞くのみなり。

25. アカセウビン 方言 ミヤマジョニ、四時共に棲息するも稀なり。常に山間の溪流に在り。

26. カハセミ、方言 シヨニ、傳説 本種の黒焼にせるものは、痲病の特効薬なりと云ふ。

蕃殖 五月中旬乃至六月下旬頃、土の堀り小口に横穴を穿ち營巢育雛す、中に魚骨あり。

四時共に棲息極めて普通なる種類なり、常に河流を上下して、水中

に入り小魚を捕食す、時には人家の池沼に來り、金魚其他の小魚を害することあり、又人之れを捕へたるときは、死を装ひて逃れ去ることあり、余嘗て本種を得、直ちに籠の中に入れては、仆れて動かす、よりに籠より出し掌上にて弄び居たるに、突如逃走せしことあり。

27. フクロフ(キウシウフクロウならん) 方言 フルツク、

傳説 怠惰者と梟との話あり、怠惰者の奉公人あり、或る日主家の用命を帯び、市に赴き主人の金錢にて酒を呑み、思はず日を暮し、月に浮れて歸途に就き、主家近くなり始めて、主家の金を費消したるに氣付き、酔も醒め果て、暫し思案にくれ居たり、然るに頭上の林にて一羽の梟が、「ボロキテホーコーくく」と、頻りに鳴くを聞き、成る程辛棒が大事じやと、大に覺醒し以後は一心に稼ぎしと。

蕃殖 五月中旬乃至七月中旬頃、大樹の空洞若くは人家の天井の上(草屋根)等に營む、

四時共に棲息し普通なり、夜々森林にて怪しき鳴聲を放つ。

28. コノハヅク、方言 ミミツク、蕃殖 五月乃至七月頃、人家の天井の上、又は大樹の空洞、人家の軒に吊されたる古き鶏の巢箱等に營む

四時共に棲息する普通なる種類なり、晝は巢中に眠り、薄暮より出

でく食餌をとる、晝巢中に眠り居るときは容易に捕へ得べし。

29. ヨタカ、方言 ウマグソツカミ、蕃殖 五月乃至七月頃、原野

雑草の間、草なき土上に産卵育雛す、余は五個の巢に就き檢したるに、何れも二卵なりき、

四時共に棲息す普通なり、冬季は餘り鳴聲を聞かず、薄暮より出で路上、庭園などに來り鳴く、余曾て原野に本種の巢を發見し、見たるに二卵あり、翌日來り靜に近づき見るに、親鳥の巢中にあるを認む、恰も手にせる捕蟲網を靜かに掩ひ、之を捕へしことあり。

30. コゲラ(キウシウコゲラならん) 方言 キツツキ 蕃殖 四

月上旬乃至六月頃、枯木の幹に自ら穴を穿ち營巢す、巢中には何物をも材料を用ゐず、白色の卵四個乃至六個あり。

四時共に棲息す極めて普通なり、常に樹幹を攀ぢ昆虫を捕食す、鋭き勢を以て枯木を破り虫を食す。

31. アナゲラ 方言 ミヤマキツツキ、蕃殖 四月乃至六月頃、

樹幹に穴を穿ち營巢育雛す。

四時共に棲息す普通なり、前種に比し稍少なし。

32. ヒバリ、方言 ヒバル、

傳説 雲雀は金貨の子なり、故に「リチクレカンチクレ〜」と頻りに鳴くと云へり。

蕃殖 四月下旬乃至六月下旬頃、麥畑、若くは原野雑草の間

小樹等に營巢す。

四時共に棲息す極めて普通なり、冬季は山野叢中に多く、春季里方へ出づるものあれども、大部分は山地の廣原にありて、雲井逆かに舞ひ上りて清らかなる、囀鳴を放つ、山地に多き理由は、地勢上耕地少なく、周圍山を以て圍繞し、眼界の廣き所少なきと、彼が蕃殖に適當なる麥畑の少なきとに依るならん、故に田園の上空にて、彼の鳴聲を聞き得るは、僅かに一二の部落に過ぎず、隨つて麥田に營巢するもの少なし、鳳翔山、臺持山等の高山に上れば、非常に多く棲息し、谷間の小樹等に營巢せるもの頗る多し。

33. キセキレイ、方言 セキレイ、

傳説 本種の黒焼とせるは、痰の特効薬と稱す。

蕃殖 四月下旬乃至七月下旬頃、瓦屋根の間、草屋根の空間

石垣の間等に營巢す、巢は雑草、苔、毛髮等にて作り、四卵乃至六卵を産す。

四時共に棲息す普通なる種類なり、四月頃棟上を飛び交ひ、高聲に囀る、水田、河流等に下りて小虫を捕食す。

34. セグロセキレイ、方言 セグロ、カハラスズメ、

蕃殖 四月乃至七月頃、瓦屋根の間、又は石垣の空所等に、

苔類、毛髮等を材料として營巢す。

四時共に棲息す普通なり、四月上旬頃棟上を飛び交ひ、清らかなる
囀鳴を放つ、常に水田等に下りて昆虫を捕食す。

35. ヒヨドリ、方言 ヒヨ、蕃殖 四月下旬乃至六月下旬頃、繁
りたる一、二丈内外の高所に、小枝、苔類等を以て營巢す。

四時共に棲息する普通なる種類なり、夏季は森林に多く棲み、秋季
より里方へ出づ、本種は甘きものを好み、花の蜜、通草の實等を食
し、又なんでん、きづた、えびづる、はぜ、せんだん、りうのひげ
やぶかうじ其他の實を食す。

36. サンクワウテウ、方言 サンコ、候鳥 來期 四月下旬乃至
五月上旬、去期 九月下旬乃至十月上旬

春季より初秋の間、大樹の梢又は、森林中にて、清き鳴聲を放つ種
類にて、餘り多からず。

37. コサメビタキ、候鳥 來期 四月中旬乃至下旬、去期 九月
下旬乃至十月上旬、蕃殖 四月下旬乃至七月上旬頃、大樹の
高所に營巢す、苔類、毛髮等を用ひ美麗なり。

夏季普通なる種類なり、秋季、サメビタキ、オホルリ、などと混じ
樹實を食す、一度止りたる所を放れ、空中に於ける蟲類、其他樹實
等を食し、再び元の所に止るを常とす。

38. サメビタキ、候鳥 來期 四月中旬乃至下旬、去期 九月下
旬乃至十月上旬、蕃殖 四月下旬乃至六月下旬頃、大樹の高

所へ營巢す。(エゾヒタキにては非ざるか——黒田記す)。

夏季普通なる種類なり、前種に比し稍少なし、前種同様の習性を有す

39. キビタキ、候鳥 來期未詳、去期 未詳。

二三回姿を見たるのみにて極めて稀なり。

40. オホルリ、方言 ルリ、ルリゴマ、候鳥 來期 四月上旬乃
至中旬、去期 九月下旬乃至十月中旬、蕃殖 五月中旬乃至
八月上旬頃、露を受けざる土の堀り小口、又は炭焼竈小屋の
内部、木挽小屋等に苔類、毛髮等を以て營巢育雛す、通常四
卵乃至七卵を有す。

四月頃より美はしき高聲にて鳴く普通なる種類なり、常に高き樹上
に多く、低きに下ること少なし、九月下旬頃サメビタキ、コサメビ
タキ及び、一年成の雛と共に混じ、樹實などを食す。(未完)

タマシギの習性

法學士 川口孫治郎

池村平太郎

大正七年五月中旬、筑前若松市深町(實は大部は蓮沼に占められてゐ
る水田地)の西の方、山際なる市立病院役宅齋藤院長方に寄寓中、毎夕方
コー、コー、と啼く聲が聞ゆる。下旬に入つて毎夕七時過に彼方此方で
啼くのが聞ゆる。最初はアチバツクの巢立後間もなきものゝ爲に、其親

鳥共が喜んで相呼ぶのでないかと考へてみたが、附近に木立がない。沖田濱際の松の並木の上からか、と思つて近寄つてみると、樹上からではなくて、地上からの聲であつた。アチバツクではない。更に傾聴してみると、KOH, KOH, と聞ゆる。即ちアチバツクのは HOI HO, と響くのには、これはコー！と響く。聲に圓みがある外に、何となく優しく奥深い感じがする。併し實體がわからぬ。六月上旬の或黄昏に、高橋甚太郎君から急報があつた。水田の畔に、稍々鈍い飛び方をする鳥が二羽連れて移つた、といふ。即刻、觀察に行つた。果して復た飛び立つて半町許彼方の畔に下りた。ヒゲヒナであることがわかつた。例の KOH, KOH, の主體でない丈には確にわかつた。其翌夕方、病院の一室にヒゲヒナが一羽誤つて飛込んだ。此附近には、ヒゲヒナの外に、普通のクヒナもある。(年中居ることも後に分明した) 其他の水禽で何が居るか、新参者たる川口には分らない。到頭 KOH, KOH, の主がわからずに其六月が過ぎた。大正八年五月に入つて、毎日晩くなつてから、新校舎より濱の町の寓居へ歸る途中、例の蓮沼の間の街道を通ると、昨年と同様に、KOH, KOH, を聞く。注意が段々鋭くなつて来ると、KOH, KOH, の外に折々、KOH, KOKKOH, と響く。雌と雄と相呼ぶのではないか、と考ふるまでに至つた。無學の川口は尙其聲の主は何鳥であるかを確知するを得なかつた。六月中旬、中學生二人より報告があつた。一昨日常盛川(例の蓮沼の一端を流るゝ小川)の橋詰の青物屋の主人が、嘴の長い鳥の雛を

五つ持てゐた、といふ。依つて其形態を尋れたが、殆んど無毛のやうにみゆるものであつたやうだ、唯嘴の著しく長いこと丈は確だ、といふ乃ち急に使丁老人を煩はして、事情を述べて分與を乞はしむべく赴かした。歸り報じて、昨日皆死んだから捨てた、といふたといふ。然らば其遺體を貰ひ受けんと、生徒と老人とが復た走つたが、塵溜には一匹も残つてゐない、昨夜中に何物にか無くされたものらしい、との報告であつた。だが此出来事のおつた爲に、例の KOH, KOH, は或はシギ類の所作ならずや、と氣付くやうになつた。依つて附近の蓮根掘を職とせる人々に尋れしに、此蓮の水田中の高みに、白地に黒斑ある稍々大い卵を四個又は五個横たへたのを見たことがある。毎年一二例は必ずあつた、といふ。

以上、大凡見當がつきさうになつたが、此年も到頭實物を見るを得なずに終つた。大正九年五月に入つ 例の KOH, KOH, を聞き始めた。本年こそはと苦心した。念の爲に、附近の人々に向つて、あの啼く鳥を何といふか、と尋れてみると、クロトリだ、といふ。川口云、所謂クロトリとは、或人はクヒナを意味し、或人はバンを意味し、あてにはならぬ稱呼である。

此頃、池村川口兩人は他の觀察の爲、毎早朝、附近に立ちしが、十六日午前五時、例の蓮沼の間の街道より一見して、苗代の苗の近々移さるゝ程に成長した縁に、一羽の中鳥が起つてゐる

るのを見出した。兩觀察者の立脚點から僅に十間許彼方であるが、尚ほ雙眼鏡を利用して觀るに、歴々わかる。嘴が長い。シギの仲間と直ぐ分明した。それがアゲハ蝶のする如く翼を勢よく揚げる。揚けたまゝでピリ／＼と震はせながら、地團駄踏むやうな氣合で多少方向の轉換する氣味をせる。下半身は苗で遮られて分明せぬ。

觀察者等の立てゐるのを知りながら、平氣で藝をやつてゐるので、觀察者等は心配し始めた。此調子なら折角の材料ながら敵に狙はれて亡くされはしないか。其うち全身が見えた。實に美しい。頭部は黒み勝ちで、頸から胸へかけて鮮やかな栗茶色で、腹部は眞つ白、翼裏も白色である。

靜に其附近に注目するに、右の鳥から二間許の彼方の苗代の上の方の岸の下なる矢張り同苗代の片端を、頭部を下けて、忍ぶが如くに他の一羽が、苗の間に隠れんこしつゝある。前者に比して、色彩は總じて淡い餘程灰褐色が勝つてゐる。而して頸胸邊りには栗茶色部がない。先刻來の藝を演じてゐたのは、此鳥に見せる爲であつたことがわかつた。

即ち我々の眼に非常に美しく見え、且つ盛に演藝してゐるのが、タマシギの雌であつて、美しくなくて且つ無藝のままに隠

くれ氣味の行動をこつてゐるのが其雄であることが、確實にわかつた。他の多くの鳥の雌雄關係と對照して、確に珍らしく認められた。

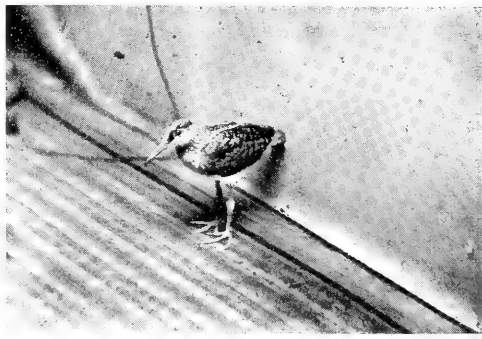
同日午後七時四十五分、川口のみ赴く。夕陽明かに没せし後、始めて KOH, KOH, の呼聲を聞く。聲の方向に搜索を徐るに進め、漸く近づきて、確に KOH と響くを聞く。遠方より聞けば寧ろ H₂O と聞えしも實際接近せば加行の發音なるを知る。

更に近づき、昏明に透かして、五間彼方なる水田にすべく始めて水を入れし鋤き返へしの田の中、未だ水に没せざる土塊の上に立てる鳥體を認む。雙眼鏡に依りて、今曉認めしタマシギの雌なるを確認す。三年前より懸案とせし發音の主はタマシギの雌なるを、今始めて實見に依りて確かめ得て、更に靜觀をつゞけるに、時々兩翼を例の如く蝶のなす如く開き揚ぐ。更にヤマセミのなす如く身をチリ／＼と左右に動かす。頓がて、其場で跳躍する。張り揚げし翼を收めし後、平常の姿勢に復するに時々長からぬ尾を上下するを認む。

八時七分、觀察者が動きし爲、飛び立ち軽く町餘の彼方に移り、程なく再び啼き始む。同廿分再び接近せんじしたるに、啼聲止み、四邊暗く全く辨ぜざるを以て、觀察を中止す。

なるを認む。五羽あり。各二三尺宛を隔て、蓮葉を地物に利用して静止す。兩親鳥の所在探ぐれども分明せず。再び五羽について變眼鏡に映じたるまゝころにては五羽共に成鳥の雄ミ類似の色合にて、成鳥の雌の如く顯著なる彩色のものなし。

試に來會せし少年に依頼して、兩觀察者の立てる道路の方向に、飛來らしむべく、五羽の背後より追ひ立てしめしに各十數間を飛去る。唯其一羽のみ觀察者等の計畫の如く飛び來る。即ち迎へて捕へんミせしに、彼は之を避けんミして方向轉換をなし、爲に著しく飛翔力を減じて、道傍の水田の蓮の間に落つ。水稻々深く、立つを得ずして翼を開きて浮ぶ。恙なく收容するを得たり。頗る成長したるものなり。撮影場に伴ふまでに軟らかく兩掌に包み行きしに、羽虱ハシラミの多きを認む。愈々撮影にかゝるミ、片翼を擴げて



鳥の幼圖 四 十 二 第
ダ マ シ キ の

其顔を蔽ふ爲に平靜の形態の撮影容易に出來ず。片翼を擴けて前方に其顔を蔽はんミする爲に自づミ他の平靜の片翼の方向に旋回して頗る奇態を演ず。

遂に床上を歩む。乃ち其爲すがまゝに放任せしに、佇立して頻に尾を上下す。其寫眞は瞬間を撮りしものなり。

撮影後、放還す。其後の各鳥の行動、目を追ひて觀察し難くなり、月末頃全く其影を認めず。

ハチクマ及サシバに就て

子爵 松平 頼孝

嘗て内田清之助氏は動物學雜誌第二七〇號に「誤られたるハチクマ」ミ題し余の標本中の黒色大形なるタカを以てハチクマの幼鳥ミ發表せられ當時大學の標本にハチクマなる名を附せしものは *Halastur indians* にして目下一般に稱するサシバに附せられたるものなりミして從來の誤りを正された。尙

古事類苑の記載「八雕雕類而黒色尾羽斑文稍大而黒白或正直或錯雜如畫間脊八字斑最爲珍奇故稱八雕乎此亦造箭羽以競奇也世俗所謂八者八幡之八而八幡神者武職常尊崇之源姓之族最然於是

是以有八字斑爲貴或曰蜂雕言如蜂之雄此未爲當焉云々」を以て

ハチクマ (*Pennis aptivorus*) なる和名を證せられたハチクマが蜂の巢を襲ひ食ふ事は一 Generally 知られた事であるが然らば從來サシバミ云つた鳥は何であるか、サシバは老幼の差の甚しきものなれば幼きものをサシバミいひ老ひたるものをハチクマといひしものなるかといふ疑問を残された。

當時私は嘗て鷹匠の田中ミ云ふ老人よりサシバミ云ふタカを示されたる事を思ひ出した(因に此人は *Locustella lanceolata* を志村附近で捕獲したる老人である) 其れ故に茲に一言するが其は今云ふミころのコチウゲンボウ (*Falco aesalon*) の雌の幼鳥であつた、猶同時にハチクマなる鳥も一巢三四羽入つたものを見せてくれたこのハチクマは即ち今云ふサシバ *Buteo indicus* であつた、大學の標本にハチクマなる和名の附せられたる誤りは古來鷹匠の云ひ傳へたる誤りより起りしものならむかと思はれる、此當時は尾州家の鷹匠であつた牧野茂十郎ミ云ふ老人が大學に出入して居た事があつたからそこで

1. *Buteo indicus* サシバ(鷹匠の所謂ハチクマ)

2. *Falco aesalon* コチウゲンボウ(鷹匠の所謂サシバ)

3. *Pennis aptivorus* ハチクマ(鷹匠の所謂クマタカの若)

ミ云ふ事なるのである。

さてそうなるミコチウゲンボウなる和名の鷹は何であるかミ云ふ疑問が内田氏のサシバの疑問と同じ事なるがこれはチウゲンボウに對して體形の小なる爲めに斯る和名の附せられたるものであらう。

猶サシバなる(鷹匠の所謂)鷹のコチウゲンボウ *F. aesalon* である事を立證するには左の

貞丈雜記(一五 鷹)

サシバは小ハヤブサなり大きはハトほざあつて諸タカの餌狩りをするなり小鳥をこるなりウヅラをもこるなりこれを以て見ればサシバなる名稱は今のコチウゲンボウ *F. aesalon* に附せられたる事確實なり如何になれば *B. indicus* なるものは常に其食ふところ蛙、蛇、トカゲ其他虫類を専らこすこれを以て鷹狩に用ゐられざりし事明白なり尙此鳥が度々鷹匠の手に入りたる事に就て一言しよう鷹匠の目的とするハヤブサは専ら其幼鳥でなければならなかつたものである大タカの如く巢子を得んとして古來屢々地方の獵師に命じた處が獵師の時々持ち來るものは *B. indicus* の幼鳥のみであつた、ハヤブサの幼鳥を得んとしてかくの如き用ひなさざる鷹を得て鷹匠等は又ハチクマかミ嘆聲を發せし事屢々なり尙ハヤブサ捕獲は面白い方法でせられる

ものであるがこれは他日に譲るゝして茲には内田氏のサシバの疑問に就き一言補足するに止める。

信州にて獲たる二種の鳥類

高松良

左に信州にて採集せる二種の鳥類に於て記述すべし。

ケアシノスリ? ♀

採集地 長野市の北西三里にある飯綱山(一九一七米)南東の中腹(約二二〇〇米の地點)なる白樺帯の雜木林中。
採集年月日 大正七年三月十四日。



第二十五圖

ケアシノスリ腹面

測定

體長	二尺一寸	六九三 _{ミメ}
翼長	一尺五寸	四九五
尾長	八寸	二六四
跗蹠	二寸五分	八二、五
趾(中趾爪共)	一寸八分(爪ノ長サ)	五九、四
嘴峰	一寸	三三、〇

a 上面

前額部白色、頭部は褐色の縦斑をなし羽縁白し、頸部も亦然り、背の羽は褐色にして羽縁淡褐色をなし、巾廣き縦斑の状をなす、腰部は褐色にして斑紋なし。

上尾筒は白色にして先端に近く褐色斑あり



第二十六圖

ケアシノスリ背面

b 下面

喉より上胸部までは褐色縦斑あり、但し羽縁は白色、下胸部は白色、腹部は不規則の黒褐色斑紋密在す、下尾筒白色。

c 翼

第一風切、黒褐色にして内辨の基部白色、第二風切は褐色にして黒褐色の横斑四條あり、内辨の基部は白色、第三風切、白地に淡褐色の横斑を有し基部は内外辨共に白し、雨覆、褐色にして羽縁は淡色なり、大雨覆ミ中雨覆の基部は白色なり。

d 尾羽

十二枚あり、白色にして先端に近き所は褐色の地に二條の黒褐色横帯ありて先端に近き方は巾廣し(約一寸)最先端は白色に近き淡褐色に終る。

e 脚

腿部の羽は約四寸あり白色にして褐色の横斑を有す、跗蹠前面は趾の基部に至るまで羽毛(褐色の横斑あり羽縁白し)を生ず後面は網状をなし羽毛を生ぜず前面の羽毛にて覆はる。

趾は裸出して黄色なり。

f 嘴

黒色、蠟膜は鉛色

標本乾燥して多少變色せる爲め蠟膜の色は正確に記し難きも、黄色ならざることは確なり、(採取當時蠟膜の記録を失念したるは大失策)。

以上形態の調査に依て見るに跗蹠後面の網状なるは黒田氏の敦示せられたるケアシノスリに當り、翼長はオホノスリに相當す。又日本鳥類圖説に依る時はケアシノスリとして見れば

翼の風切、尾羽、下面、跗蹠の長さ等に於ては一致する所あり又酷似する所あるも、翼長、上尾筒の色彩、蠟膜の色等に於ては大に異なる、

次にオホノスリとして見れば

頭部、頸部、背面、風切等の色彩及び翼長は酷似するも、尾羽及び下面の色彩、跗蹠、嘴峰の長さ等に於ては全然異なる。

序に捕獲當時の模様を左に記さんに

當日は飯綱山に兎狩を行ひたるが當時其地は三尺内外の積雪にて、融けたり凍りたりしたるため雪上は平地を行くが如く自由に馳驅し得られず獲物の兎は荷物となる故歸途持ち歸るべく雪上に放置して他の方面に獵し馳て歸來して見たるに一羽の巨鳥其の死兎を啄みつくあるを遠見した

れば忍び寄りて之を銃殺したるものなり若し之が果してケアツノスリとすれば北海道へ迷ひ來れるものが更に南下して奥羽山脉、三國山脉等を經て此の妙高火山群の一峰へ彷徨し來れるものには非るかとも考へらる之につきて思ひ起すは先年白馬山方面へ高山鳥類採集をなしたること四五回に及びしが何時も頂上附近にてノスリ大の鷹を見たるも遂に捕ふること能はざりしが、之も或はケアツノスリにあらざりしかとも思はれる

高山鳥類の研究に今一步を進むるならば之等の消息も大に判明する所あらんかと信ず、白馬頂上附近には雷鳥は云ふ迄もなく、イワヒバリ、ホシガラス、ハリチアマツバメ、アマツバメ、イロツバメ等多々棲息す、而して飯綱山にはホシガラスは多く、稀にイワヒバリを見、夏季はハリチアマツバメ、アマツバメの群を見る、之等はケアツノスリの生活上と氣候上何等が關係因縁あらざるかとも思はるるなり。(黒田記す—此標本はケアツノスリに相違なからん)。

イソヒヨドリ 上

採集地 長野市郷路山麓
 採集年月 大正六年一月四日
 測定

- 體 長 七 寸 一三二ミメ
- 翼 長 四 寸 一三二
- 尾 長 二寸九分 九五、七

跗 蹠 一 寸 三三三
 趾長(中趾爪共) 一 寸 三三三
 嘴 峰 七 分 一三三、一

其他の色彩は大體に於て日本鳥類圖説と一致すれども又多少異なる點あり即ち

尾羽に於て圖説には「黑色にして外縁空青色を呈し先端灰白色に細く縁取らる」とあるに本標本は中央の二羽を除くの外基部に於て外縁空青色をなし先端は細く淡褐色に縁取らる、下面、下胸部以下、下尾筒に至るまでの濃き栗色の中に黒褐色及び白色の小さき横斑散在す、大雨覆の一部は其の先端細く灰白色に縁取らる。

此の他は全く圖説の説明と一致す
 (黒田記す—下面の羽毛の先端白きは完全なる生殖羽にあらざるが爲めなり)

扱て此鳥を信州の山の中に獲んとは余も實に意外なりき。之を獲りたる場所は長野市西北の郊外にして彼の地質學上に有名なる郷路山の麓なり。そこは一帶に木イチゴ、バラ其他の灌木の藪多く苹果園、桑園、野菜園に隣接し南向きの日當りよき所にて海面上約五百米の標高なりイソヒヨドリは海岸地方に夏季渡來するものと聞き及び居たりしに、此の信州の山の中に而かも一月嚴寒の最中に之を獲んとは實に意外に

も意外奇異の外なし。黒田氏によるときは本種は渡りをなさずと故に暴風等の節迷ひ来りしならんか。一昨年八月暴風ありし節當市附近に數百羽のミヅナキドリ（オホミズナキドリならん）迷ひ来り二三週間の内外を夜間空中高く飛翔し晝間は小溝、水田中に下りて人々に捕へられたるもの數多くありたり、信州の山の中の高原と雖も折には斯くの如く海鳥を捕獲することあり、其他ウミネコの來ることも珍らしからず、又余先年越後國西頸城海岸地方へ四月の學期始めの休暇を利用して採集旅行せし時、名立海岸にてイツヒヨドリを採集したり。然れば思ふに、同地方のイツヒヨドリが秋季冬季にかけての西北卓越風に乗じて信州の山地に迷ひ来りしならん。

山形縣村山地方鳥類方言

石澤 健 夫

左に列舉せる方言は山形縣村山地方長崎町を中心として寺津村豊田村寒河江町、神町、柴橋村、朝日温泉等の諸地より輯集せるものにして實際は其種類尙多きも疑はしきものは除外せり。

種 名 方 言

鳥 類 總 稱 トリヅバ・トリヅバサ（共に鳥翼の意歟）
 カイツヅリ ミヨツコ
 ゴ 井 サ ギ イツバイサギ

ヨ シ	ゴ 井	マテエ・バガマテエ
中形鴨類	（マガモ・コガモを除く總稱）	ザグ・ザグガモ
チ シ	ドリ	チスカモ・チスドリ
カ ル	ガ モ	ドロカモ泥鴨・クロカモ黒鴨・スズ
ヨ シ	ガ モ	ワギマグレ脇捲れ・マグレ・ハネマグリ・マグリ
コ	ガ モ	タカブ
ト モ	ヘ ガ モ	ツレ
チ ナ	ガ ガ モ	チナガ・ナガ
ハ シ	ビ ロ ガ モ	ヘラカモ
ヒ ドリ	ガ モ	アガダ
キ ン	ク ロ ハ ジ ロ	ツヅボウハヅロ・ハヅロ・ツヅボウ
ホ シ	ハ ジ ロ	同 上
ホ ホ	ジ ロ ガ モ	同 上
アイ	サ 類 總 稱	アエシヤ
ワ シ	類 總 稱	ワスタガ鷓鴣類
ノ	ス リ	ベツキダガ蛙蟹（ベツキこは蛙の方言也）
ト	ビ	トンビ・トンビトロロ
チ ョ	ウ ゲ ン ボ ウ	ハヤブサ・ハヤビシヤ

キ ジ

キズ・クロカラ

クワクコウ

カツコドリ

ヤマドリ

キズ・アガカラ

ホトトギス

オタタカチヨウ・ホドドギス

ヒク井ナ

ミソクエナ・アガクエナ

ツツドリ

ボンボンドリ

ク井ナ

クロクエナ

アカセウビン

ナンバンゲラ・コマドリ誤稱

バ

ハナアガ鼻赤・コバン・ハナアガクエナ・バンドリ(當地方にてはムササビをもバンドリ云ふ)

カハセミ

スナドリ砂鳥・ギンドリ銀鳥・ザッコドリ、カハゼエミ

シギ類總稱

スギ

ヤマセミ

カハゲラ・カハゼエミ

イカルチドリ

ハマウス

オホコノハヅク

ミミヅグ

コチドリ

同 上

フクロウ

フグロ

タゲドリ

フハフハドリ・オガダズドリ雷鳥(オガダズは雷の方言にして本種は地上に降る時ごうごうと鳴く故この方言ありと)

トラフヅク

トラミミヅグ・ワダリミミヅグ・トラフアマツバゲラ

ヤマシギ

ボダスギ

ケラ類總稱

キタタキ木叩き・ケラツヅギ

ユリカモメ

カゴメ

コゲラ

マメケラ

カモメ

ハドカゴメ・カゴメ

ヒバリ

シバリ・スバリ

ワシカモメ

ワスカゴメ

キセキレイ

キビタキ・アチエスタダギ青石叩ぎ

コアジサシ

ツドリ・ザッコドリ

セグロセキレイ

エスタダギ石叩ぎ・セエギレエ

キジバト

ヤマバト・テデッポツボ

タヒバリ

タヒ・アチコ

キ

ツドリ・ザッコドリ

ヒヨドリ

アチツグ・ヒヨ

キ

ヤマバト・テデッポツボ

サンクワウテウ

チナガ・キズズホエホエ(鳴聲に依る)

オホルリ
ルリ・ボダルリ

トラツグミ
ヤマウヅラ山鶉

ツグミ
ツグメ

クロツグミ
クロツグ・コツケイ

コマドリ
コマ

シマセンニウ
ワダリノツコ

オホヨシキリ
ガエガエズ・カラカラズ・ヨスギリ

コヨシキリ
ノコ・ノチコ・コヨス

キクイタダキ
マヅムス松虫・スギムスコ

カハガラス
サハガラス澤鳥

ミソサザイ
ミソツグリ・ミソズメ・ミスクグリ御

崖潜り鳧・サザイ・クネムグリ垣潜り鳧

(クネミは垣の方言也)、セエンツドリ雪

隠鳥(セエンツミは雪隠の方言にして薄

暗い場所を好み雪隠等に屢入るためなり

(云ふ)

ツバメ
ツバグラ・ツンバグラ

シヤウドウツバメ
エスツバメ石燕・ユハツバメ岩燕

レンジャク類總稱
マンサグ萬作(豊年萬作の年のみ渡り來

モズ
ベツキモズ蛙則

ゴジウカラ
コツバヘガス木片剥す

シジウカラ
シンジュガラ・シジユケラ・スジュガラ等

ヒガラ
コガラ誤稱

エナガ
ジュルリ・ズリ・ジエレ・ジシロ・ジエレジ

ハシブトガラス
エレ(何れも鳴聲に依る)・ゴジウガニ誤

ハシボソガラス
稱フトガラス・クソガラ、糞鳥(肉に鳥の

糞の香有るためなり云ふ)

ミヤマガラス
ホソガラス

ハナズロ鼻白・ハマガニス濱鳥・カツカガ

ラス(鳴聲に依る)・ワダリガラス渡り鳥

・マギガラス・マゲ(マゲミは群をなす意

にして春季大群をなして渡り來るためこ

の方言有り)

ムクドリ
ガリ・ギヤラ・モグ・ムグ

コムクドリ
アリヲ・サグラコ

シカ
マメマス・マス・マメズ・スンメ

イカル
サンコウ

マ ヒ ワ ホンシワ・ワグリビワ
カハラヒワ類總稱 ホダシワ・ドビワ・ガラシワ・シワコ・ヒワ

・シワ

ニウナイスズメ ワゲリスズメ渡り雀・ミヨトナイ・アガ

ケ赤毛(♂)・アチケ青毛(♀)

ホ ホ アカ ホアガ

ホ ホ ジロ ヤマスズメ・ホズロ・シトト

ア チ ジ アチズ・アチコロ

カシラダカ アガリ・カシラ

宮城縣下鳥類雜記

熊谷三郎

(一) アカゲラに就て、アカゲラの尾羽第一對に斑點のあるもの(左

側先端内外辨に各一個の褐斑あり第二對に於ても左右兩側の

内外辨に各一個づゝの斑點あり)を大正十年一月十二日に一

羽採集す。尙同日に於て採集したる一羽(尾羽異常ならず)に

ありては其の胃中に禾本料類の植物の實(ヒエの類?)多數

あり。其の他多くの虫食しありし様なり。以前冬季に於て稻

の刈集められてありし場所に二羽のアカゲラの餌をあざりあ

りしを見たるこゝあれば本種も時としては植物性の食物を
取るこゝに信ぜらるゝもかゝる例は他にもあるこゝなりや讀
者の御教示を乞ふ。(本號丘博士講話參照)

(二) ハヤブサに就て 十二月採集せられたるハヤブサの胃中に多
數のバツタありし例あり當地方に於て十二月中にバツタを採
集せしこゝなし斯く多數のバツタを食せしは實に驚くべきこ
ゝなり。

(三) ムクドリに就て

「鳥千號にコシアカツバメの巢中にスゞメの營巢せし例ありしが茲
に又當地にてムクドリの巢中にスゞメの營巢産卵せし例あり左に報告
すべし。

椋鳥と雀とは其の産卵期に於ては同じく樹洞、家屋等を利用し又其
の産卵期も同時にあれば椋鳥と雀とが都合よき構巢の場所を爭奪する
場合多く次の二例に據るも明らかに爭奪戰の行はれておることが知ら
れる

第一例 大正四年四月十五日 コムクドリが樹洞中に一顆卵
を産む、この時この巢の附近に一對の雀がコムクドリに追ひの
けられるも再三、再四其の巢の附近に來りてコムクドリの様子
を見守つて居るのであつた、六月二日、其の巢を検せるに二顆

の卵があつた、されども尙其の一對の雀が其の附近を去り得なかつた、而して六月八日、再度その巢を検せしに卵なくコムクドリの姿をも見るこゝが出来なかつた其の巢は雀の所有となつてゐた。而して其のコムクドリの卵がさうして失なはれたかゞ不明に終つた。

第二例 大正五年五月十一日 前年と同樹洞中のムクドリ
の巢中に一卵あるを観察した。然るに前年と同様その附近に雀の一對が見守つておるのに氣がついた少時林中に姿をかくして其の雀の様子を見つめて居たにムクドリの不在中に一羽の雀が樹洞中の巢に入るや、しばらくにして巢の出口に出で來つた。そして雀の嘴には青いムクドリの卵がくはへられてゐた。巢の出口に來るや寸時にして地上めがけて飛び下り地上三尺位の所にてその卵を打ち棄て、飛び去つた速早樹林中より出で、其の場所を検せしに新鮮なるムクドリの卵の裂片が散亂してゐた黄味も白味も新らしいものであつたその裂片を集めて見たるに凡そ六、七個の裂片と思はれた。

この例に據つて第一例のコムクドリの青い卵の行衛もほど知るこゝが出来た。斯くの如くにして雀がムクドリとの巢の爭奪戰の勝利者となつた。そしてその巢に産卵を續けたのであつた。

ツバメに就て一觀察

齋藤源三郎

一、雛の哺育回数。大正十年六月十九日孵化後六日目の雛五羽に對して、正午より午後一時まで一時間の觀察をした。

此日は雨天にて重ね着をするほどの寒さであつたから、蟲類の飛翔は少しも無い様に思はれた日であつたにもかゝらず二十六回の哺育をした。若しも晴天の日であつたならば、是よりも多き回数に上るであらう。

二、營巢の數。千葉縣夷隅郡上野村の一部五つの區で戸數百九十八戸の處で、大正十年六月廿日に調査せるに、營巢の數七十八個の多きを認めた。之を戸數と巢の百分比にするときは四一・二六となりて戸數の半に近き數を得た。都會地にてはかかる割合に行かざるは明なるも、村落に於ては何地にても大體之に大差なかるべきかと思はれる。

コチドリ(?)の巢及び卵

武知彦榮

一、巢の位置は横須賀海軍航空飛行場(目下埋立中)に在りて

石材運搬軌道(毎日使用)より十米水邊より約二十米の所に在り其地形は寫眞第二十八圖に見る通りなり。

二、卵の長徑 三

○三三三ミリ短

徑二・二五ミ

リ重量六・五瓦

三、撮影年月日

大正十年六月

八日午前八時

五分頃

四、卵は人夫共の

注目する所

なり危険に付

鳩舎の鳩に預

け(孵卵器無き

爲)たるに三個

は過つて破損し目下一個抱卵中なり。

但し鳩卵と其ダイヤメターを異にするを以て孵化する公算尠かる

べし。



第二十七圖

飛行將校の卵撮影中のコチドリ

一 飛行將校は卵を取去りたる後へ卵大の小石四個を入れ置きたるに小石は鳥の爲に遠きは六寸近きは四寸巢の外に掻き飛ばされありたり。目撃者の談によれば鳥の大きはホ、シロ大にして腹白く翼は黒褐色の様なりしと云へり。



第二十八圖

コチドリ?の巢及卵

夕ざればさほの川原の河霧に

ともまどはせる千どりなく也

質疑應答



一三三 質疑者 東京 石澤健夫

問一 サ、ゴ井、ヨシゴ井、オホヨシゴ井の營巢の狀態及び卵の形狀、色彩、長徑、短徑の長さ等に就いて御教示下され度願上候

答 質問の鳥類に關する營巢の狀態其他左表の如し。

鳥名	營巢の場所	材料	卵腹の數	卵の大き	卵及卵形色彩	蕃殖期
サ、ゴキ	樹上(松等)	樹枝	三一五	40×30H	淡綠若色、卵形	五月一八月
ヨシゴキ	葎林又は小笹稀に叢中	葎葉、笹	四一六	33×24H	帶若白色、球形に近し	六七月
オホヨシゴキ	同上	同上	不明	33×27H	白色に近し、球形	不明

(答 黒田)

問二 東京及び其附近に於て剥製用死鳥を廉價に且つ一ヶ所に於て多數集め得る店を數ヶ所御伺ひ申上候。

答 東京府下千住中組八四五、鳥福

(答 内田及黒田)
問三 動物標本社にて發賣する「乾き粉」の原料及び製法について御伺ひ申上候。

答 「乾き粉」は多分筆商又は革製造に使用する筆粉なるべし、此筆粉の原料は詳ならざるも多分靱殼の細末ならんか。

(答 内田)

四 質疑者 在劍橋 蜂須賀 正 氏

問四 孔雀の雉の雉雌大にも達せざるものに於て冠羽は一寸位に伸張せり(尾羽は五寸位)、羽色は幼羽なれば色彩は灰褐色にて雌雄の差も分別し難き故之を以て雌雄淘汰と看做すは不適當かと思はれ且つ成鳥に於ても常夏の國の草原中より長き頸を人間の方に眞正面に向け加ふるに頭頂に冠羽を有する故或は水邊の叢中に棲息するヨシゴ井、サンカノゴ井の動作と同一理ならんかと思ひたり。元より雉と成鳥とに於て冠羽の形狀及色彩に變化を來たすなれども雌に於ても變化をなす故、冠羽は雌雄淘汰の理にては十分なる説明出來ず擬態とも云ふべき點を加味せりと思考す、如何なりや。

答 恐らく質問の通り雌の羽冠は雌雄淘汰の爲めにあらず一種の擬態作用を司るものなるべし勿論雌成鳥の長き尾狀の飾羽

は雌雄淘汰の結果を見るべし

(答 黒田)

五 質疑者 宮城縣 熊谷三郎

答 最近の學說によれば少なくとも二種の野雞即ち *Gallus gallus*

問五 (*Carpodacus japonicus* の學名例へば、カケスの灰變り、黒變種等

(*C. g. gallus*, *C. g. hankin* 及び *C. g. ferruginus* の三地方亞種を

の學名を普通カケスの學名 (*Carpodacus japonicus*) を用ひては普通種であるか變異型であるか混同して區別が出来ぬ故に稀に現

兩種に就て實驗的に證明せし學者あり。

らされる、) 等 Colour variety なにも *subsp.* を附して普通種

九 質疑者 岐阜縣 柳原要治

區別して

問九 理想的本剥製永久保存棚箱の構造御示教を乞ふ。

申上候

答 已に或固定種の色變りなること明白なるに於ては從來その

り内に棚三段を設け、下に大形鳥類(棚の丈高き方)上に小形

種名若しくは亞種名のみを用ひ特に新學名を附せず、但し別種又は別亞種を誤認して新名を附したる場合にはその新名は

鳥類(棚の丈低き方)を入れる、ガラス戸とガラス戸の間に隙を生ぜぬ様にする、その爲めにはゴムを附す可なりと云ふ。

六 八 質疑者 島根縣 曾田義文

(答 六 九 黒田)

問六 家雞の曉を報ずるは自然なりや淘汰の結果なりや其由來

圖 鶏

答 恐らく淘汰の結果なるべし其由來不詳。

問七 野雞も曉を報ずるや。

春雨にみのげあらしてれる鳥の

答 純然たる野雞は曉を報ぜずと云ふ半野生のもの及半家禽の

ふせこながさにてかへる哉

ものは此限りにあらず。

問八 世界の凡ての雞種はバンキバより發達したるものと看做

木工權頭爲忠



第十五回總會 大正十年五月十六日午後五時から春季總會を
 神田一ツ橋學士會假會館に於て開會。左の十五氏出席せられた
 り。(來會順)

大岩 紀 鹿 黒田 長 禮 戸 澤 富 壽
 齋 司 信 輔 内 田 清 之 助 葛 精 一
 松 平 頼 孝 小 林 重 三 靱 山 徳 太 郎
 石 井 金 吾 武 知 彦 榮 高 野 齋 藏
 丘 淺 次 郎 松 永 安 衛 飯 塚 啓

會場には北米及南米産鳥類、北海道及本州産鳥類標本並に書籍
 圖書 陳列し 晚餐後本會會頭後任の件及本會十週年記念に關す
 る件議決(幹事一任)後、内田清之助氏の「土佐産長尾鶏に就て」
 の講演あり 標本及寫真數葉を供覽せられ午後十時散會
 同日の陳列標本及書籍左の通りである。

種類 個數
 北米産鳥類(燕雀類を除く) 五五 五七

- | | |
|---|---|
| オホノスリ白變(朝鮮産) | — |
| エゾフクロウ(北海道産) | — |
| フクロウ(本州産) | — |
| キウシウフクロウ(九州産) | — |
| フクロウの亞種(朝鮮産) | — |
| 南米産小禽類 | — |
| カケス灰色變 | — |
| <i>Ptycyrtus nissus pallens</i> | — |
| キジ綠色變 | — |
| 土佐産長尾鶏 | — |
| ハシロコチドリ(<i>Charadrius hiaticula tanabae</i>) | — |
| シマフクロウ(北海道産) | — |
| エゾフクロウ(千島産) | — |
| キウシウフクロウ(九州産) | — |
| アチバト(本州産) | — |
| タイワンアチバト(臺灣産) | — |
| Leiferfant, I—IV, 1920. Revue Proleg. d'Ornithologie. | — |
| The Condor, Vol. XXII, No.6, Vol. XXIII, Nos.1—2. | — |
- 數拾個 齋司信輔氏出品
 以上黒田長禮氏出品

以上本會交換雜誌供覽

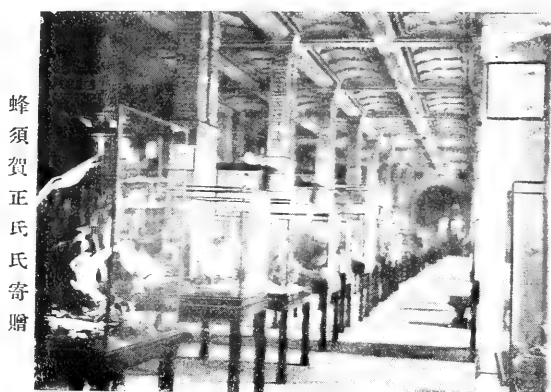
□飯島會頭逝去せられたる爲め本會評議員會の推撰によつて評議員公爵鷹司信輔氏は新に會頭に就任せられたり。

□天然紀念物の指定 内務省の史蹟名勝天然紀念物調査會では目下天然紀念物の調査に著々歩を進めてゐるさうであるが差當り調査の完了せる天然紀念物五種を大正十年三月三日内務省告示第三十八號によつて指定せられた、其の内四種は鳥類であつて鹿兒島縣出水郡阿久根及び出水村の鶴渡來地、山口縣熊毛郡八代村の鶴渡來地、兵庫縣出石郡鶴山の鶴蕃殖地及び鹿兒島縣大島の瑠璃櫃鳥等何れも第一に指定せらるべき値打のある貴重なる天然紀念物ばかりである、尙同會では引續き此の種の天然紀念物を順次指定する筈で調査を取急ぎつゝある由である。

□天然紀念物活動寫眞撮影 内務省史蹟名勝天然紀念物調査會では豫ねて天然紀念物宣傳の目的に使用する活動寫眞フィルム調製の計畫中であつたが其の一ミして昨年六月廿六日東京府下羽田の黒田家鴨場で各種のフィルムを撮影した當日は渡瀬博

士、黒田長禮、内田清之助の三氏同所に出張せられ鴨場溜池附近の鶯の蕃殖狀況及び鴨獵の實況一卷に並びに古式による鷹狩の實況（宮内省鷹匠實演）一卷を撮影されたさうである、本誌表紙の寫眞は此

のフィルム中の鷹狩の一部を複製したものである。



第二十九圖 英國博物館内鳥類室 (Birds Room, British Museum)

□蜂須賀正氏氏通信 當今は *Sheringham* と云ふ *Norfolk* の海岸に參り居り候、世話になり居る *Master of St Iwyn College* の別荘有之鳥には非常に面白き所の如く思はれ候、中にも當地には目今 *reared* せる

蜂須賀正氏氏寄贈

鳥學者有り、家の者の紹介にて知人となり申し候此の人は主として英國のみの鳥の卵の大なる採集家にて中には珍らしき物有之候、當地にては

一度も海に住びたる事無かりし故、最も普通なるツノメドリ、エトヒリカ等も始めて見候、此の蕃殖期には左程の面白き事も無かりしが家の庭のみにてミソサライ、アカウツ、スヤマ、ツグミ類二種 *Hedge sparrow*, *Black bird*, *Green Finch* 等の營業、育雛を發見致し候。

(第二十九圖は右の通信と共に蜂須賀氏の寄贈せられたものである)。

□福岡鳥の會 本會の目的は會則にある通り鳥に興味あるもの鳥を各方面から研究しよう云ふので醫師は醫者の立場から鳥の黒燒の話を法律家は法律ニ鳥の保護、狩獵者は狩獵上で得た鳥の觀察談、鳥學者は純粹鳥學の方面から云ふ様に思ひくゝの立場から自己の研究調査の持寄話をしよう云ふのです。川口孫治郎先生等も熱心に出席して戴きます、中には植物學者も昆蟲學者も獸醫も齒科醫や會社員もあります、師範學校校長も中等學校の博物の先生も總て網羅して居ります。

福岡鳥の會々則

- 一、本會の目的は汎く鳥に關する研究をなすにあり
- 二、本會は鳥に關する研究に付き特に趣味を有する同好者を以て組織す
- 三、本會は「福岡鳥の會」と呼稱す
- 四、本會は事務所を福岡市濱ノ町黒田侯別邸内に置く
- 五、本會は會費として各會員より一ケ年金五拾錢宛を年度初の開會の際

徴收し會全般の費用に充當す

六、本會は當分の間隔月に開會す

七、本會に會誌を備へ諸般の協定事項開會に關する簡單なる記事會員の住所氏名出納に關する事項其他重要な事項を錄取す

八、本會に常任幹事三名會計一名を置く但し兼任を妨げず

九、常任幹事は主として第六項第七項に關する一切の事務其他本會一般の事務を擔任す

十、會計は第五項に關する事務及び會費保管の事務を擔任す

十一、常任幹事會計の任期は無期とし辭任其他の事由により缺員ありたる場合其都度協議選定するものとす

常任幹事

三好彌六 梅崎亮吾 安部幸六

□寄贈書籍目錄

著者氏名 書籍名 寄贈者名

獵友 (每號) 獵友雜誌社

飛驒史壇 (每號) 飛驒史談會

昆蟲世界 (每號) 財團法人名和昆蟲研究所

内田清之助 鶴及鶴の棲息地 (史蹟名勝天然紀念物) 内務省

黒田長禮 對馬の動物に (調査報告第二十二號) 内務省

關するもの (史蹟名勝天然紀念物) 内務省

内田清之助

鹿児島縣奄美大島の(史蹟名勝天然紀念物)内務省動物に關するもの(調査報告第二十三號)

天然紀念物保存ニ農業工業及教育上の關係

内務省

史蹟名勝天然紀念物(第四卷第一號)

史蹟名勝天然紀念物保存協會

Ornithologisches Jahrbuch, Bd. XXVIII, (Heft 1-6)

Von Tschusi zu Schmidthoffen.

□新著紹介

「飛驒の鳥」本邦有数の鳥類生態學者川口孫治郎氏に依つて前出の著書が昨秋發表せられた。氏が飛驒の高山町に在職三ヶ年餘の間公務の餘暇に觀察せられた鳥類の生態的研究は既に本誌や動物學雜誌其他の誌上で毎回拜見して居り又鳥類の生態ニ日本民俗就中飛驒民俗との關係ニ就て記述せられた分は殆んき飛驒史壇上に載せられて居つたが夫等の毎回の發表を取纏めて各鳥に就て既發表月順に續けられ且つ適當の處に増補せられたものであつて全部で三卷に分れ第一卷ニ第二卷は鳥類生態ニ日本民俗との關係事項の記載、第三卷は主として鳥類生態の實驗的研究の發表のみを載せる筈であるニ著者は謂はれて居る、今回發表の分は此内の第一卷のみであつて何れ續刊せられるであらうけれど後卷の出づるのが待ち遠い憾は強ち評者はかりでもあるまいと思ふ。著者の實驗觀察の發表に對する

趣味は喋々しく論じなくとも讀者は既に識られて居る事でもあ

るし評者も痛くない腹を探られるのも好ましくないから強いて

擱筆するが蓋し此種の出出版物の今後一層多く發表せられん事を

希むで止まないものである事を附言して置く。定價金八拾五錢。

發行所東京市小石川區茗荷谷町五十二番地郷土研究社、發賣元

東京市神田區神保町東京堂書店(靱山徳太郎誌)

□入會

丹波國船井郡下和知村アセリ (乙種) 時 椀 巖氏

東京市芝區新櫻田町一九 (乙種) 池 田 信 一氏

東京市小石川區高田豊川町四二 (甲種) 鈴木 文五 郎氏

東京市外大井町字山中四二七三 (甲種) 矢 野 戀氏

栃木縣芳賀郡山前村 (甲種) 高松 甚兵衛氏

□轉居

東京府北豐島郡高田町大字高田一三六三 飯 塚 啓氏

大阪市北區天神橋筋四ノ二八 酒 井 彌之助氏

朝鮮新義州高等普通學校 土 居 寛 暢氏

宮崎縣飯肥町飯肥高等女學校 伊 東 育 太 郎氏

東京府荏原郡大井町字森下四〇九二 田 中 誠 吉氏

高知市雜喉場四七 藤 田 昌 世氏

東京府荏原郡世田ヶ谷村池尻二一四

東京市外中澁谷六五七大城松尾方

京都市祇園圓山公園村井長樂館内

埼玉縣南埼玉郡大相模村字千疋

朝鮮釜山本町朝鮮總督府水産試驗場

青森縣勸業課

大連市春日町番外地洗兵臺

東京市小石川區大塚坂下町四〇

永井 靖 吉氏

石澤 健 夫氏

藤木 常 隆氏

蓮沼 薫氏

馬庭 軍 市氏

北村 榮 次氏

吉倉 汪 聖氏

岡田 信 利氏

竹下 實 治氏

○退會

○死亡 本會員臺灣總督府博物館囑託菊池米太郎氏は昨年七月

以來病氣之處遂に十一月十六日逝去せられた、氏は天才的の鳥

類採集家で特に臺灣の鳥類の研究には大部分氏の手によつて採

集せられた標本が利用せられた云ひ得る特にミカドキジの最

初の採集家として有名であつた、其の他の氏の鳥類採集の範圍

は頗る廣く本邦内地は勿論支那海南島(明治三十五年乃至三十

七年) 峽西省西安府大白山(明治三十八年)等の採集品は何れも

鳥學上多大の貢獻をなせるものであつた氏の逝去は臺灣博物館

に取つて大なる損失であるのみならず本邦鳥學界の爲めに此最

優秀なる採集家を失つたことは遺憾の極みである。

會員荒木彦助氏は昨年夏逝去せらる洵に哀惜に堪へず氏は大正

八年本會に入會せられ爾來屢々本誌に有益なる記事を投稿せら

れたるは會員諸君の知らるゝ如くである、左に氏の論著の目錄

を掲げる。

種子島の鶴及び附近の二三鳥類六號一七頁、猶太民族の古代

に於ける禁獵鳥類六號四六頁、徳川時代の薩摩に於ける動物

園(七號一一五頁)、再び種子島の鳥類に就きて(八號二二四頁)

鳥類籠養の沿革(九號二四四頁)、アウムの習性(十號三二六頁)

會員栃木縣芳賀郡中村久保壽氏は昨年夏逝去せらる、茲に哀悼

の意を表す。

○第十六回總會 大正十年十二月四日午後五時より神田一ツ橋

通學士會假會館に於て開會、左の十四氏外二氏出席せられたり

(順不同)

齋司 信輔 飯塚 啓 田子 勝彌

黒田 長禮 内田清之助 柳澤 保承

高野 鷹藏 岡田 信利 榎山 徳太郎

小野 安堯 矢野 懋 葛 精一

大岩 紀 鹿 連沼 薫

晩餐後會場に於て内田幹事會計報告あり夫れより榎山徳太郎氏

の「伊豆大島産鳥類談」黒田長禮氏の「醫陵島産鳥類標本供覽」及び田子勝彌氏の「樺太鳥類談」あり九時三十分散會。當日の陳列標本及書籍左の如し。

種類	個數	出品者
伊豆大島産鳥類標本	三四	黒山徳太郎氏
内地産比較標本	若干	同
大島産雉食餌標本	九	同
オホミズナギドリ(信濃篠の井産)	一	同
醫陵島産鳥類	四	黒田長禮氏
キウシウキジ(九州産)	一	同
タシギ(バフ變)	一	同
樺太産鳥類	六二七	田子勝彌氏

Collinge, Walter E. : The Food of Some British Wild Birds.

岡田信利氏供覽

□「鳥の展覧會」本會創立滿十週年紀念の意味に於て「鳥の會」を聯合して來る三月三、四、五の三日間東京市赤坂區溜池町三會堂に於て「鳥の展覧會」開催せらるゝ筈である。詳細なる記事は次號に掲載する。

日本鳥學會規則摘要

第二條 本會事務所は東京帝國大學理學部動物學教室内に置く

第四條 本會は前條の目的を達する爲め評議會の決議を経て隨時種々の事業をなす

一 當分一年に二回雜誌「鳥」を出版すること

一 臨時刊行物を刊行すること

一 毎年春秋二回會合し鳥類に關する講演談話をなし同時に鳥類に關する圖書標本其他の展覽會を催す

一 鳥學的探檢を舉行すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員と乙種會員の二とす

一 甲種會員は會費として一箇年金五圓を納むること

一 乙種會員は會費として一箇年金二圓五十錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌「鳥」及臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌「鳥」を配布す臨時刊行物は配布せず定價の三割引を以て講讀することを得

會 頭 公 爵 鷹 司 信 輔
幹 事 内 田 清 之 助
評 議 員

理學博士 飯 塚 啓 理學博士 丘 淺次郎

黑 田 長 禮 子 爵 松 平 賴 孝

大正十一年三月廿七日印刷

大正十一年三月三十日發行

定價金 貳圓

禁 轉 載

編輯兼 發行者 木 下 憲
東京市日本橋區兜町二番地

印刷人 神谷 岩次郎
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

發行所

帝國大學理學部 動物學教室内 日本鳥學會
振替口座東京六五九九番

發賣所

東京日本橋區 十軒店町 裳 華 房

振替口座東京一〇七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 第一篇 內田清之助著 鵜類圖說 絶版

獸醫學士 第二篇 內田清之助著 海産保護鳥類圖說 原色版三枚 定價四錢 郵稅四錢 附錢

理學士 第三篇 黒田長禮著 世界の鴨 絶版

理學士 第四篇 黒田長禮著 世界の雁と鵠 絶版

仁部富之助著 第五篇 郭公の蕃殖に關する研究 寫眞版一枚 地圖一枚 定價金卅五錢 郵稅四錢

理學士 第六篇 黒田長禮著 臺灣の鳥界 附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性 原色版口繪一枚 寫眞版四拾錢 郵稅四錢

理學士 第七篇 黒田長禮著 鮮滿鳥類一斑 原色版口繪一個 寫眞版一圓五十錢 郵稅十二錢

理學士 第八篇 黒田長禮著 六郷川口に於ける鵜 千鳥類の「渡り」 寫眞版口繪二葉 定價七拾五錢 郵稅六錢

初山徳太郎著 第九篇 邦領南洋諸島産鳥類 原色版三枚 コロタイプ版四葉 地圖二葉 挿畫數個 約四百頁 定價七圓半 郵稅十二錢

房 華 裳 町店軒十區橋本日本 番番七百京東替振 所 捌 賣

告 豫 編 九 第 物 行 刊 時 臨 會 學 鳥 本 日

日本鳥學會員 靱山徳太郎君著

大正十一年三月發行

邦領南洋諸島産鳥類

原色版三葉コロタイプ版四葉
菊版紙 數約四百頁
定價七圓五十錢 郵稅十二錢

本書は本會臨時刊行物第九編として目下印刷準備中のもので、大正十一年三月出版の豫定

であります。内容は昨夏本會員靱山徳太郎君が約半歳に亘つて我南洋諸島に鳥類採集を試

みられた結果を記述したもので、主としてカロリン群島其他諸島の鳥類に就て分類學上の

考察、習性の觀察並新亞種の發表等に加へて以上諸島の鳥類既知種全部の目録が添えてあ

ります。寫眞版は著者撮影の生態寫眞其他を四葉十數個、三色版は小林重三氏寫生の南洋

鳥類十數種を三葉に収めてあります。本書は雜誌「鳥」に掲載せられた鷹司黒田兩理學士の

論文と相俟て我南洋の鳥に關する缺くべからざる文籍であります。

本書は本會甲種會員には無代配布、乙種會員には規定の割引を以て配布しますから豫め御

申込を願ひます。

所 捌 賣 日 振 本 替 橋 東 區 十 軒 十 京 店 七 番 裳 華 房

理學博士 飯島魁先先生

內田清之助先生著

增訂改版

日本鳥類圖說上卷

(正價金八圓 郵稅八錢)

下記要項の訂改にりよる目一新せり

- (す致一に録目類鳥編會學鳥本日)正改の名學 1
加追の種亞新並類種の數多るたれらせ見發後行發版初 2
入挿の圖生寫類鳥るな巧精ふ伴に右 3
補増訂改の部說總他の其録目書文 4

日本鳥類圖說續編 增補

(正價金七圓 郵稅八錢)

初版發行後見れらせる臺灣産鳥類約十四種を加す

版元

警 醒 社 書 店

東京 銀座 尾張町

■ 日本鳥學會創立十週年紀念出版 ■

日本鳥學會編纂

日本鳥類目錄 (英文)

A Hand-List of the Japanese Birds.



編輯擔當

阿比目ヨリ鶴型目迄七日

理學士 黒田長禮

鶉型目ヨリ佛法僧目迄三日

理學士 鷹司信輔

燕雀目

獸醫學士 内田清之助

内容

現時知ラル、全日本(各殖民地ヲ含ム)産鳥類ノ全種類ヲ含ム目錄ニシテ之ヲ最近ノ分類ニ從テ排列セリ其内容ハ

學名及其ノ原記載掲載ノ書目 英名

學名ノ重要ナルしのにむ 和名及其ノ重要ナルしのにむ

從來知ラル、本邦内ノ詳細ナル分布 索引

體裁

菊版 用紙泊來上質百斤

紙數約百六十頁

並製 表紙こーでりあ假綴

上製洋布表紙天金脊及角皮

出來期日

大正十一年三月 日

出版部數

上製百部

並製三百部

再版セズ

實價

並製金三圓

上製金五圓

郵稅十二錢

注意

本會會員ニ限リ一割引(會員ハ直接本會ヘ申込ヲ乞フ)

臨時刊行物ニ非ザルヲ以テ甲種會員ニモ無代配布ヲナサズ

出版部數僅少ナルヲ以テ豫メ本會又ハ賣捌所ヘ御申込ヲ乞フ

賣 捌 所 裳 華 房

日本橋區十軒店町
振替東京一〇七番

“TORI” THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. III. Nos. 12 & 13. March, 1922.

(A Number Issued for the Commemoration of the 10th year
of the Foundation of the Society).

Frontispiece :

Ornithologists who rendered a great service to the Japanese Ornithology (Pl. III.)
Pheasants in Britain (Pl. IV.) By *M. Hachisuka*.

Contents :

On a new genus proposed for Mikado Pheasant of Formosa.
By Prince *N. Takatsukasa* and *N. Kuroda*.
On the moulting of gulls. By Viscount *Y. Matsudaira*.
Birds in the vicinity of Shizuura, Suruga (I). By *N. Kuroda*.
On *Chaunoproctus ferreirostris*. By *M. Hachisuka*.
Notes on some birds from Hachijō Island (I). By *T. Momiyama*.
Method of the flight of *Aquila chrysaetos*. By *Y. Enomoto*.
Birds from Shikoku. By *M. Fujita*.
Anomalies of egg marking. By *J. Nibe*.

Curious habits of the Californian Woodpecker. By Prof. Dr. *A. Oka*.
Pheasants in Britain. (With frontispiece). By *M. Hachisuka*.

ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN.

e/o Science College, Tokyo Imperial University.

President.

PRINCE N. TAKATSUKASA.

Secretary.

S. UCHIDA, C.F.A.O.U.

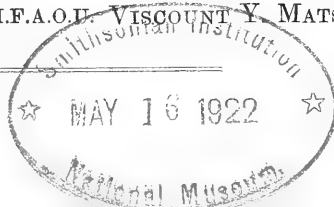
Committee.

The President, The Secretary, Exofficio.

A. IZUKA, *Rigakuhakushi*.

A. OKA, Ph. D. *Rigakuhakushi*.

N. KURODA, F.M.B.O.U., H.F.A.O.U. VISCOUNT Y. MATSUDAIRA.





鳥

第
十
一
號

大正十年四月發行

日本鳥學會

鳥 第三卷 第十一號 目次

口 繪

故會頭理學博士飯島魁先生肖像(第一圖版)

真孔雀の蕃殖(第二圖版)

論 說

理學士 黑田長禮氏原圖

二三鷓・千鳥類の羽衣脱更

理學士 黑田長禮

二種の迷鳥ヒゲガラ及ノドグロツクミに就て

獸醫學士 内田清之助

クロトウゾクカモメの習性

羽山徳太郎

廣島市内の一部にて見る鳥類

中尾春雄

雜 纂

エゾムシクヒの新分布地

羽山徳太郎

カケスの頭部の斑點の變異

理學士 黑田長禮

米國シカゴ市リンコン公園の鳥類其他に就て

水野誠

長門佐々並地方の鳥類の價格

兼常彌富

病的の瘤を有するマナヅル

理學士 黑田長禮

質 疑 應 答

六 件

(黑田長禮回答)

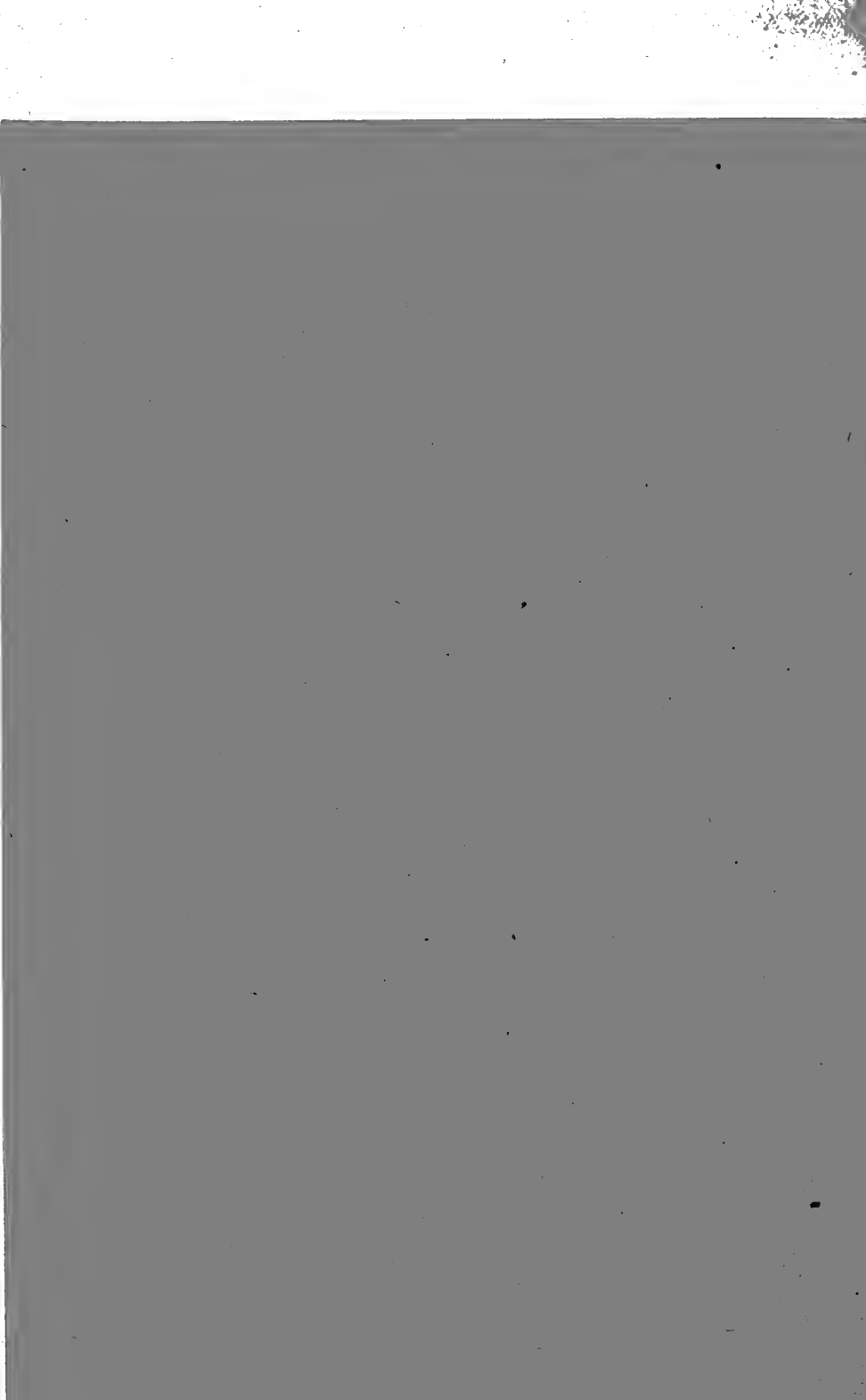
雜 報

八 件

附 錄

動物學雜誌に掲載せられし鳥類に關する文献

理學士 黑田長禮編



發賣所 裳華房書店

東京市日本橋區軒店町十番地

發行所 日本鳥學會

東京帝國大學理學部動物學教室

大正十年六月

上梓した次第である

本會は本會員及び一般讀者の便宜の爲め農務の省し稿を乞ひか
本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し
重なる資料に關し參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

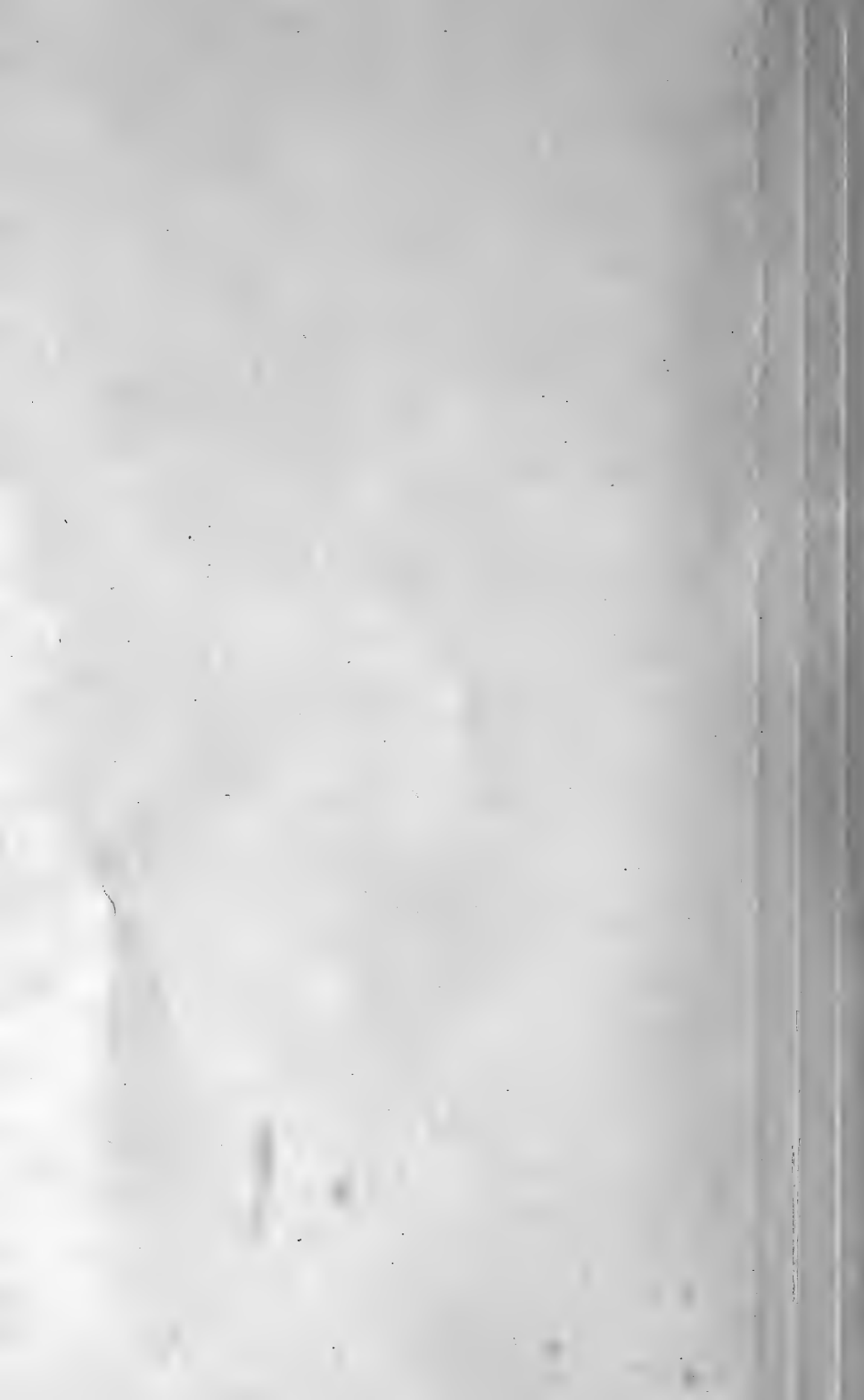
本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

本會は本會が右の如く知らるる資料たることを參照するに關し本會は本會員及び一般農務の省し稿を乞ひか

狩獵鳥類の方言

日本鳥學會發行
農商務省農務局編纂

七月下旬發行(四六版)假裝約二百頁
定價二圓(發售)定價三圓(函購)二號(引)



發賣所 裳華房書店

東京市日本橋區十軒店十番地

發行所 日本鳥學會

東京帝國大學理學部動物學教室

大正十年六月

に上梓した次第である

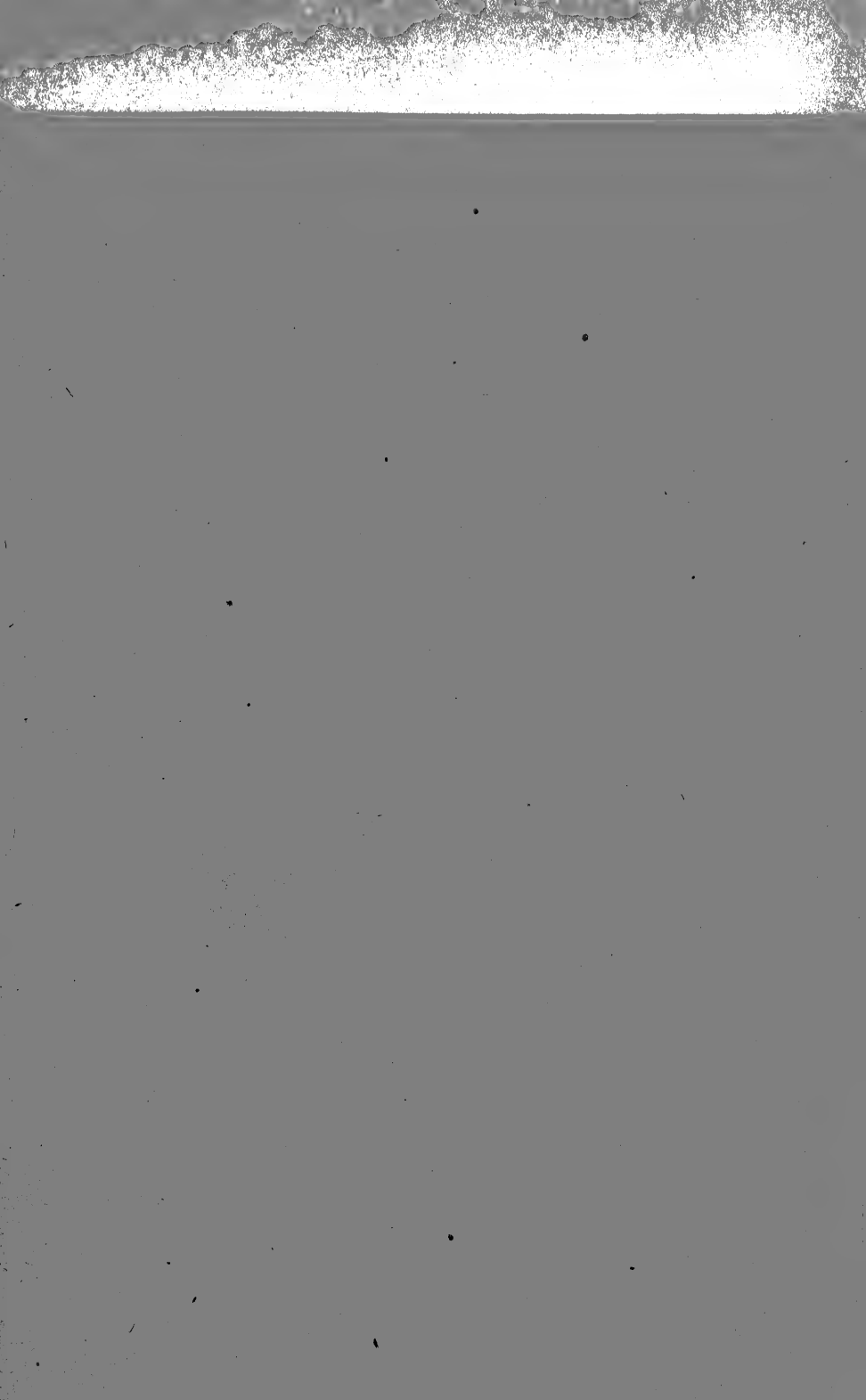
ら本會は本會員及一般讀者の便宜の爲め農商務省より稿を乞ひ

本會は本會が右の如く鳥類研究上必要なるものとして認めらるる

重なる資料はとこ参考するに邦産鳥類の全種を約半一般鳥類に達する

り狩獵に關するに始ると邦産鳥類の全種を約半一般鳥類に達する

は獨り狩獵に關するに始ると邦産鳥類の全種を約半一般鳥類に達する



會頭飯島魁先生を悼む

大正十年三月十四日拂曉本會々頭理學博士飯島魁先生腦溢血症を以て千駄ヶ谷の邸に薨去せらる 嗚呼悲しいかな

顧みれば明治四十五年五月初めて本會の設立せられしは實に先生の主唱に係る所にして爾來茲に十星霜を閱し會運漸次隆盛を致し其の基礎の漸く固からんことを至りしは一に先生の周到懇篤なる指導の賜に外ならず而して今後本會が益々健全なる發達を遂げ本邦鳥學の確立を期するに於て尙先生の指導に俟つもの實に尠からず、而るに今や卒然として先生の計に接す、吾人茫然として其の爲す所を知らざるなり

然れども靜に惟へば本會のこるべき途は將に先生が本會を創立せられたる遺志を學に殉じたる意氣を體し不斷の努力を以て鳥學の發達に貢獻するにあるべし、吾人は誓つて此の一事を以て先生の英靈を安んぜんことを期すべし
今左に先生の略歴を學界に遺されたる業績の一端を掲げ以て吾等相共に先生の偉業を追懷せん

飯島先生履歷

- 明治八年 東京開成學校ニ入り修學ス
- 同 十四年 東京大學卒業理學士ノ學位ヲ受領ス
- 同 十五年 動物學修業ノ爲三年間獨逸國ライプチヒニ留學申付ケラル
- 同 十七年 ライプチヒ大學ヨリドクトルフヒロソフ井一並マギステル、アルチウムノ學位ヲ受領ス
- 同 十八年 理學部講師可相勤事
- 同 十九年 任理科大學教授
- 同二十四年 明治二十年勅令第十三號學位令第三條ニ依り茲ニ理學博士ノ學位ヲ授ク
- 同二十六年 動物學第二講座擔任ヲ命ズ

同三十二年 萬國學術上ノ出版目錄編纂委員ヲ命ズ

同三十四年 理學文書目錄委員會委員被仰付

同 年 御用有之歐米各國へ被差遣

同三十五年 歸朝

同 年 陸叙高等官一等

同三十七年 補帝國大學理科大學附屬臨海實驗所長

同三十九年 帝國學士院規定第二條ニ依リ勅旨ヲ以テ帝國學士院會員被仰付

同四十一年 御用有之比律賓諸島及蘭領印度被差遣

同四十二年 歸朝

同 年 動物學第二講座擔任ヲ免ジ動物學第一講座擔任ヲ命ズ

同四十二年 櫻井東京帝國大學理科大學長英伊兩國出朝不在中學長代理ヲ命ズ

同 年 叙勳二等授瑞寶章

大正 二年 叙從三位

同 年 東京帝國大學評議員ヲ命ズ

同 三年 賜木俸一給俸

同 八年 同右

同 九年 叙勳一等

同 年 學術研究會議會員被仰付

同 十年 特旨ヲ以テ叙正三位

主要なる論文目録

(一)海綿類に關するもの

1896. Notice of New Hexactinellida from Sagami Bay. II. Zool. Anz., No. 504.
 1898. The Genera and Species of Rosellidae. Annol. Zool. Japon., Vol. II.
 1901. 日本産玻璃海綿研究第一報、理科大學紀要第十五卷
 1902. 第二報、同 上 第十七卷
 1903. 第三報、同 上 第十八卷
 1904. 第四報、同 上 同 右

(二)寄生蟲類に關するもの

1897. 本邦人に寄生する肝臟デストマの性質を研究し其結果を記述す
 1887. 歐洲の或トリクラダ(渦蟲類)の説
 1889. 裂頭條蟲の日本人體中に生ずる原因研究
 1899. 本邦人の眼、尿道其他潰瘍中より出でたる條蟲の一種に就き實驗(村田共著)
 1894. 一新人體條蟲に就いて(栗本共著)
 1905. 人體に寄生する新條蟲の幼蟲に就いて

(三)鳥類に關するもの
 動物學雜誌掲載の分

表	題	卷	數	頁	數
1	鳥獸の採集及び剖製		一	一六、四八、七三	一一〇四、一三一

2 本邦産の雀科

3 發育學一斑〔鳥類に就きて〕

4 日本鳥類の分布に付き

5 鳥雜記

6 カラムクドリに就きて

7 鶉の話

8 Nippon no Tori Mokuroku.

9 日本の雁鴨(板嘴類)

10 ヤマガラの新種に就て(英文)

11 小笠原島産カラスバト一種に就きて(英文)

12 イハミセキレイに就て(英文)

13 和鳥啓蒙(スタインゲル氏)

14 臺灣巡回談〔鳥類の記事あり〕

15 鶯及雉・鶉雉類に關する話

16 瑠璃椋鳥の記(第六版附)

17 樺太の鳥類に就て

一一二六、一六九

一一〇〇、二一四

一六二、二八九

二五〇、二八九

三三三、三七九

四二三、四五八

一五一

一九七、二五六

三二二、二七二、三〇九

三三二、二七二、三〇九

三三五七、四〇一

四〇八

三四四八、四九三

三第卅一、卅二、卅四

四四四一

五四四五

六二四

六二六

八三五九、四一三、四五二

九二七七、一二一、一六九

二一三、三八六、四二五

一〇九、四六、一六三

一一三二六

一六一六〇

一七一四三

一九三六

理科大學紀要掲載の分(鳥類に關するもの)

Notes on a Collection of Birds from 'Yushima. 第五卷 第一篇 頁一〇五—一二八 第十二版附(一八九一年)

「鳥」掲載の分

本邦鳥類の研究に就いて 第一卷第一號一頁

主なる著書左の如し

保護鳥圖譜 明治三十一年三月十七日發行

増訂保護鳥圖譜 明治三十八年一月二十六日發行

動物學提要 大正七年三月八日發行(再版九月三日)

今左に飯島先生の發表せられし鳥類及び先生の姓を有する種類を列記せば

1. *Parus varius owstoni* Iijima.

オーストンガラ

Parus owstoni Iijima. 動物學雜誌、第五卷、四四五頁(明治二十六年)

産地、伊豆三宅島及び八丈島

2. *Graphophasianus soemmerringi* Iijima (Dresser).

ロシジロヤイドリ

Phasianus ijima Dresser, Ibis, 1902, p. 656.

産地、九州中部以南

3. *Acanthopneuste ijima* Stejneger.

イイジマメボメ

Acanthopneuste ijima Stejn., Proc. U. S. Nat. Mus., XV, p. 372 (1892).

產地、伊豆七島

4. *Riparia riparia ijimae* (Tonenberg).

シヤウドウツバメ

Chrysocola riparia ijimae Tonnb. 理科大學紀要第廿三冊第一四篇二八頁 (一九〇八年)

產地、樺太、千島、北海道、本州、朝鮮

5. *Zosterops palpebrosa ijimae* Kuroda.

イイジマメシロ

Zosterops palpebrosa ijimae Kuroda 「鳥」第一卷、第五號後附四頁、第六圖版第三圖及插繪第一圖

產地、北九州、對馬、濟州島、南朝鮮、鬱陵島、

6. *Emberiza cioides ijimae* Stejneger.

イイジマホシジロ

Emberiza cioides ijimae Stejn., Proc. U. S. Nat. Mus., XVI, p. 637 (1893).

產地、對馬、濟州島、南朝鮮



J. Gima

像肖生先魁島飯士博學理頭會故

眞孔雀の蕃殖（口繪解説）

理學士 黒田長禮

此口繪第二圖版に掲げたのは東京赤坂の自庭内で大正七年の春に孵化した眞孔雀 (*Pavo muticus*) の雛の發育を示した寫眞である。第一圖（五日目）にて見らるる如く鷄雛と異り孵化せし時より已に兩翼の風切充分發達して延び居るに注意すべきである。孵化後即時のものから五日目迄は大差なく其後も非常なる變化なくて十日目（第二圖）に至り僅に頭上の突起状を見るのみで二十日目（第三圖）になつて突起が稍々延びて之れが明かに見える様になる。この時已に圖にある様に雄は短かい尾羽を擴立せしめて怒れる風を示す（雌の成鳥も怒れる時屢々行ふことがある）。其後は變化至つて少なく三十日目位で上翕に綠色羽が見え始める五十日目頃から全く體羽一變して各羽に横線状を見るに至るのである（第四圖五十三日目）。其後は只體形長大さなるのみで次第に成羽に移るのである。雌雄の差は只體の大小のみで一年後の秋に至つて始めて雄の長き上尾筒が出現するのである。（鳥「第一號二六頁參照」）

以上は單に口繪の解説のみであるが序に眞孔雀の産卵期、卵數其他を表記して見るに左の如くなる。

年	産卵期	一腹の卵數	産卵日數の （平均）	卵量平均	卵殼量平均	孵化日數
大正七年	三月二八日 五月二八日	一九	二・四日	三四・二分 二三・八分 （四個のみ）	—	二六日—二八日
大正八年	三月二〇日 五月一三日	一九	二日	—	—	二七日—二八日

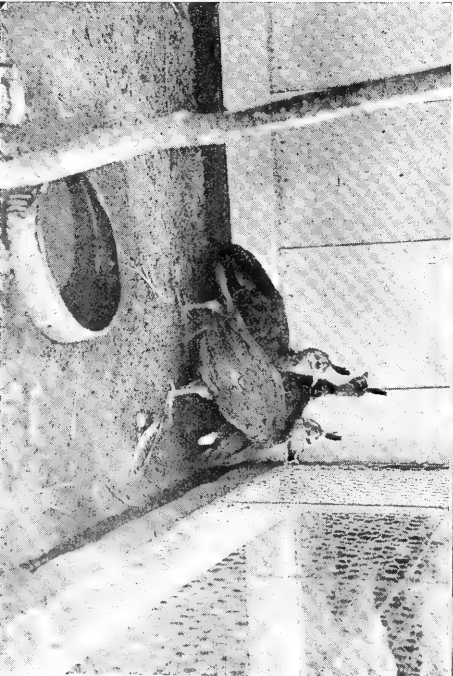
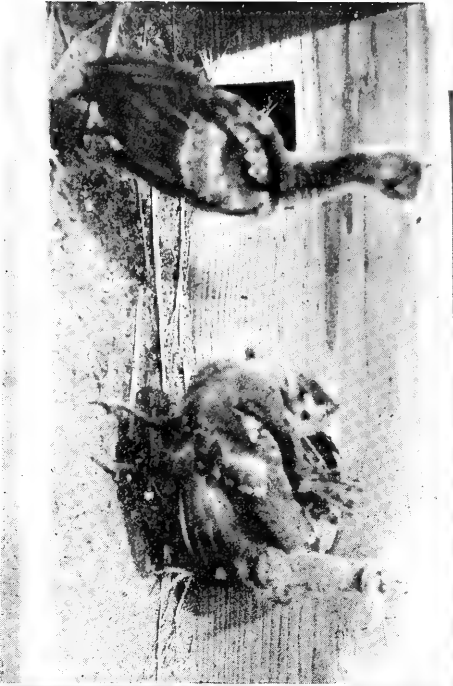
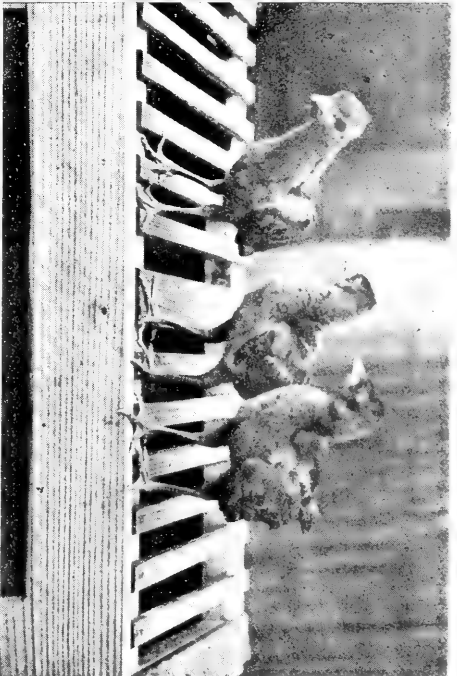
年	産卵期	一腹の卵数	産卵日数の間隔(平均)	卵量平均	卵殻量平均	孵化日数
大正八年	五月二五日 七月一二日	一三	三日	—	—	二七日—二八日
大正九年	三月二八日 三月三一日	二	二日	—	—	—
大正九年	四月一六日 七月二日	二六	二・二日	—	—	二七日—二八日

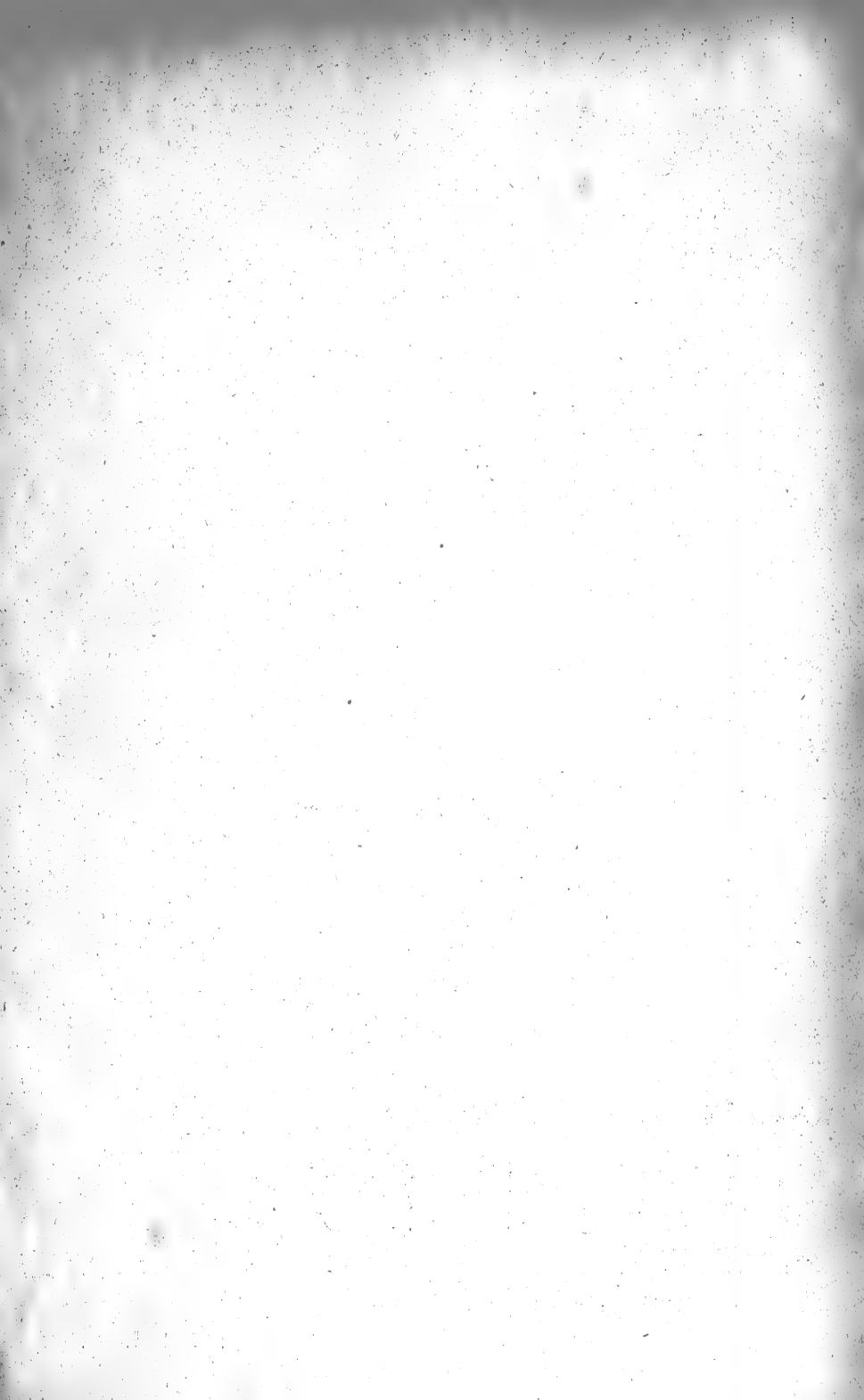
即ち産卵期間は三ヶ年間の調査によれば始めの一腹は三月下旬から始まり五月の中下旬で一度止んで更に二腹目の産卵に移る様である而して大正九年度のは始めの一腹は僅に二個であつたのは何にか原因があるであらう。その代り二年間一腹十九個であつたのが九年度には二腹目の一腹二十六個と云ふ多數を産んだのである。飼養の鳥類故野生のものとのまきまは相異なることは勿論である。産卵日数の間隔も平均二―三日であるが一日のこまもあり多いのは九日位ひ隔つて産むこまもある。一腹と次の一腹との間隔は十一日以上二十一日位ひである。卵量は十九個の内三十二匁―三十七匁で平均三四匁二分であつて空卵量は四個の内三匁五分―四匁一分で平均三匁八分である。孵化日数は平均二十八日である。大正八年度の始めの一腹十九個中午前産卵九個、午後(主として夕刻)十個であつた。又産卵のまきまは立ちながら産卵する年もあるが(大正八年)又地面に座して普通の鳥類の様にして産む年もある(大正九年)。

次に眞孔雀の雌雄数を調べて見たところ大正七八年度のもの十七羽中左の結果となる。

雄 十一、雌四、性不明(雛)二、

これによつて見ても雌が如何に少ないかが知られる他の雉類では雌の方が多い様に思はれる。







論 說

二三鶺鴒・千鳥類の羽衣脱更

理學士 黒 田 長 禮

レオンハード、スタイナーガ―氏著、飯島博士譯「和鳥啓蒙」(動物學雜誌第八卷三六二頁―三六三頁)に左の記事あり。

前略『初春季尾期ノ近ヅクニ當リ羽ノ實際ニ變色(脱更若クハ部分ノ損失スルコトナシニ)スルコトアルハ疑ヲ容レズ、此現象ニ對シ未ダ満足スルニ足ルノ説明アルヲ聞カズ左レバ此事アルヲ信ゼザルノ人士少カラズト雖モ是レ全ク事實ナリトス、ソチ實視スルコト決シテ難キニ非ズ、試ミニ背部黒色ノ鶺鴒若クハむなぐろ(一名ちやどり又)あひぐろト云フ)ニ就テ觀ヨ、其淡色部中春ニ至レバ眞黒トナル部アルモ毫モ脱更或ハ失縁ノ跡アルヲ發見セザルベシ、今後此種ノ變色ニ就キテ研究ヲ遂ゲンニハ定メテ面白キ結果アルナラン』

余は此記事を読み大に興味を感じ前記ムナグロ並びに最も近縁なるダイゼンに就て飼養の上羽衣の變化を調査するを得たり。尙ほ之れニ同時に他の鶺鴒・千鳥類中二三の種類羽衣變色をも調べ見たれば左に其各に就て記述を試みんむす。

(一) タゲリ *Turdus ruficeps* L.

雌♀成鳥一羽(年齢及び産地不明)を飼養したるが大正七年秋に羽衣脱更によりて幼鳥の如き上面の各羽に淡色縁を生じ頭側は軟皮褐色となりたり。大正八年三月二十八日上面の淡色縁少くなり喉に黒色羽生じ始めたり。

本種に就ては觀察不充分にして上記の外記すことを得ざりき。

(二) **ダイゼン** *Squatarola squatarola hypomachus* Pall.

大正七年秋六郷川口にて生獲せる成鳥(二年鳥)に就て實驗す。

大正八年に至り三年鳥なる。

る。

同年三月二十八日調査、上

面全部(?)羽衣脱更して新

羽を認め且つその縁白く幼鳥

に似たりこれ即ち冬羽とす。

この冬羽となるは完全脱更

(Complete moult)に歸因す。

只野生の場合よりも冬羽に變

り終る時期は稍遅し。

同年三月三十日調査、前頸

(一枚)、上胸(一枚)、胸側(二

枚)、脇(一枚)の各部に黒羽*

同年六月十七日調査、下面中央以上喉に及ぶ大部分に黒羽を生ず。中央以下白し。

大正八年度にありては遂にこれ以上の黒羽を生ぜざりき。こは年齢尚ほ若き爲めか又は飼養ニ云ふ不自然の爲めか?

大正九年度にありては五月二十五日調査撮影せしもの第二圖向つて左圖の如く完全なる夏羽となりたり即ちダイゼンの下面黒色



第一圖　ダイゼンの下面の黒斑を示す

*を生ず而して各羽の先端のみ黒し。

同年四月十五日調査、下面の黒羽は凡て新生のものに決す。其數未だ少なく點々たり脱更せるものとす。

同年四月二十日調査、下面の前頸下部及上胸に著しき黒斑を生ずその數十七位あり。

同年五月八日調査、上面も脱更して夏羽を示す。下面の黒羽は次第に上方に向つて増加を見る。撮影す(第一圖参照)

こなるは少なくとも三年鳥以上のものに限らる。(拙著鷓・千鳥類圖説七〇頁参照)

ダイゼンの下面の黒羽は始め新生物の先端の小部分にのみ存し、而してこの新生の針羽 (Pin Feather) が延ぶるに従て黒色素が多く擴がり行くは確かなり。然れども白色羽 (冬羽) が直ちに脱更せずして黒色羽となることは絶對に之れなきこと考ふ。

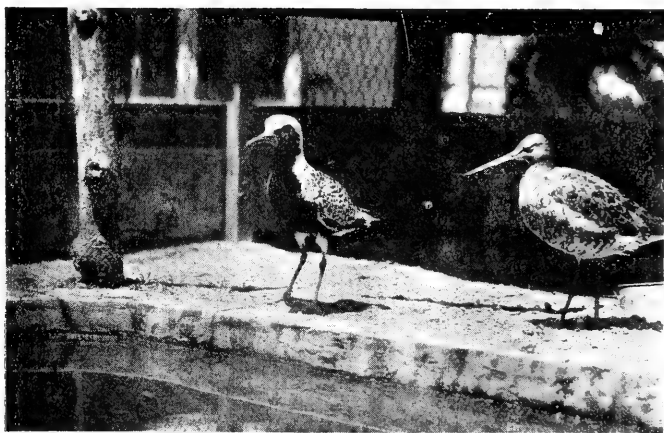
(二) ムナグロ *Charadrius dominicus fulvus* Gm.

大正七年秋大師河原附近にて生獲せる鳥(一年鳥)に就て實驗す。

大正八年三月二十八日調査、此日より少しく以前に上面羽衣脱更、但し局部脱更? (Partial moult) によりて黄色が色美しくなれり即ち夏羽? に向ひしなり。*

(四) キャウジヨシギ *Arenaria interpres ochensis* Blox.

大正七年春六郷川口にて生獲せる成鳥三羽(年齢不明)に就て實驗す。



第二圖 向て左ダイゼン完全なる生殖羽(夏羽)
向て右チグロシギ 同上 (同上)

* 同年五月十日調査、前頸下部、上胸(多し)、胸側及脇に黒斑十二三を生ず。こはダイゼンの場合と同じく完全脱更に歸因す。五月八日迄は全く黒羽を見ざりき。

同年六月七日調査、下面に黒斑多く下喉に特に著し。中央以下の下面には殆んきなし。

大正九年度には完全なる夏羽を示せしこみダイゼンと同様なり。即ち少なくとも三年鳥以上のものにおいてのみ黒色の下面を呈す。(第三面左より)

ムナグロの下面の黒色もダイゼンの場合と全く一致しスタイナー氏のムナグロの變色説に賛同するを得ざりき。(鷓・千鳥類圖説七六頁参照)。

大正八年二月中旬調査、此時期より冬羽ミなれり。こは完全脱更によりてなり。三羽共上面の羽縁白くして幼鳥の如き羽衣ミ變ず。脚も橙黄色ミなり赤味なし。

同年三月二十八日調査、上面の白縁なくなり赤味を認む。

同年五月初旬調査、三月二十八日以後著しき變化なかりしに五月初旬に至り赤羽多くなり初めたり。

同年五月八日調査。頭及顔並びに前頸下部は凡て脱更して夏羽ミなり始む。

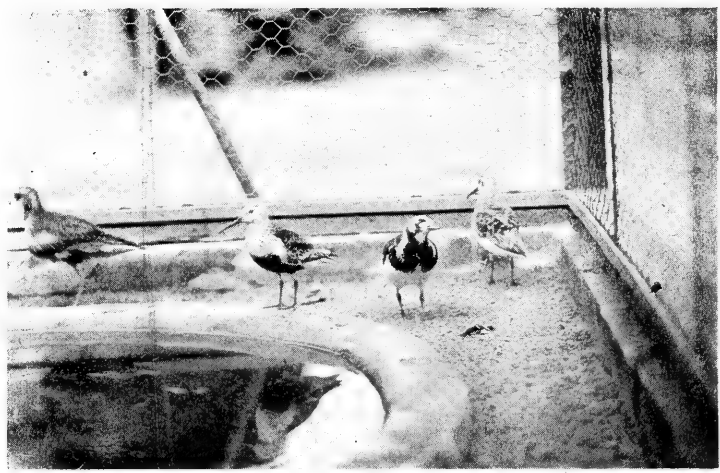
終に完全なる夏羽ミなれり(第三圖左より3)

(五) チウシヤクシキ *Phaeopus*

phaeopus variegatus Scop.

大正七年春相州馬入川口にて生獲せる成鳥(年齢不明)に就て實驗す。*

大正五年秋六郷川口にて生獲せる一年鳥(當歳)を三ヶ年飼養したるも終に赤色羽衣を示さずして大正八年秋に斃死したり。同



第三圖 右より1、2、4、3羽(凡て生殖) ナマシヨ、グシヨ、ハヤウ、ムハキ、1、2、4、3羽(凡て生殖)

* 大正八年三月二十八日調査、完全脱更をなしたるこを認む。即ち上面より變化を始む、特に最初變化するは肩羽の脱更にあり。

同年四月十五日調査、翁も新生す。

同年四月二十日調査、頸羽脱更を始む。

同年五月九日調査、體側、頭上、下背等の新羽を生じ全く完成す。

即ち生殖羽(夏羽)ミなり終る。但し色彩前記の種類の如く變化著しからざるも新舊兩羽は明に區別

(新羽は色濃く、舊羽は色褪めて見ゆ)するこを得。

(六) オホソリハシシキ *Limosa*

Japonica nove-zealandica Gray.

八年三月(日?)調査したるに完全脱更によりて冬羽(?)となり居たり。其他は不明。

附記―本種は實際野外にての觀察にありても赤色の生殖羽のものは少なきを以て見れば老鳥ならでは赤色となりぬものと如し。今後充分再調査を爲すを要す。

(七) ヲグロシキ *mosa limosa melanuroides* Gould.

大正五年十月二十四日、千葉縣五井にて生獲せる一年鳥(當歲)一羽に就て實驗す。本種の飼養實驗はその材料得難きも幸に上記の一羽に就て殆んど完全に近き結果を得たり。

大正六年度には羽色の著しき變化を認めざりし。

大正七年三月下旬調査、此時期より羽衣脱更(完全)によりて夏羽となり始めたり。

同年四月中旬調査、完全なる夏羽となり(第二圖向つて右参照)。

これによれば三歳にて始めて夏羽となるを知れり。(鷓・千鳥類圖說二四六一―二四七頁に詳細の記事あり)。

大正八年度に觀察せし結果は七年度と同様なりしも稍變化の時期早くより開始せられたり。

同年二月二十七日調査、上胸に黒横斑生じ始む。

同年三月四日調査、上胸の黒斑の上部に褐赤色斑らしき色を帯び始む。後列風切に褐赤色現はる。

同年三月五日調査、前頸下部に不判明なる灰褐色を見始む。

同年三月十日調査、下面の褐赤色多くなり上面は後列風切の外に大雨覆にも褐赤色の斑を生ず。背に黒羽少しく見ゆ。これ等は局部脱更による。

同年三月十三日調査、上胸の褐赤色著しくなる。上面にありて背の黒羽多くなり褐赤色を伴ふ。

同年三月二十八日調査、頭頂、全頸其他褐赤色の生ずべき部分には完全に生じ終る。即ち完全の夏羽となり(第二圖向て右圖)。

同年七月中旬前調査、此時期より明かなる羽衣脱更によりて褐赤色の部分は次第に消失して冬羽になりかゝれり。

以上の調査の結果によれば年齢を重ねるに従つて春秋の羽衣脱更の時期早くなるを知るべし。

(八) キアシシギ *Heterosculus incanus brevipus* Vieill.

大正七年春六郷川口にて生獲せる成鳥(年齢不明)に就て實驗す。

大正八年三月二十八日調査、上面は局部脱更によりて灰蒼色となる。大雨覆に少しく白縁を存す。體側には尙ほ横斑少し残る。翼尾尙ほ脱せず。

同年四月四日調査、尾羽中央二枚新羽生ず。大雨覆も變更す。下面の斑は冬季少しく残り居たり(?)他に又新生す。

同年四月八日調査、尾羽全部新生す。中雨覆のみ舊羽を存す。後列風切新生す。

同年四月十五日調査、中雨覆殆んど新羽となる。翼も大部分新生し初列風切外側のみ舊羽なり。

同年五月八日調査、小雨覆の或部、肩羽の短かきもの、後列(?)、初列風切、同雨覆のみ舊羽其他は新羽となる。

附記―以上は冬羽となりしものなり。實際の(野生の場合よりは時期非常に遅きものにしてこの月は已に夏羽たるの時なり。即ち長く飼養せしもの例へば上記ラゴロシギの如きは野生の場合と同一と思はるゝ時期に羽衣脱更を完了するなり。

(九) ハマンギ *Peitidua alpina subhirtina* Vieill.

大正七年春六郷川口にて生獲せる數羽の成鳥夏羽(年齢不明)に就て實驗す。

大正七年秋より羽衣脱更(局部?)によりて大正八年春(一二月頃)全く冬羽となり終る(これも野生の場合より遅し)。

大正七年秋同所にて生獲せる成鳥(冬羽)に就ての實驗によれば。

大正八年三月二十八日調査、肩羽に褐赤色を認め同時(?)が少し早くかに下面(胸と體側)に黒斑新生す。この黒斑は一枚の羽の先端部近く即ち *subterminal spot* としてのみ認めらる。

同年四月五日調査、頭頂、肩羽、後列風切に褐赤色の新羽を生ず。他の飼養成鳥皆然り。下面の黒斑多くなる。

同年四月十五日調査、下面殆んど全部黒色羽を生ず。上面の褐赤色稍顯著なる。

同年四月二十日調査、上面の褐赤色一層顯著になり下面の各羽の白縁失はる即ち完全の夏羽になりたり(野生より稍遅き?)。(第二圖向て左より2及4参照)。

一種の迷鳥「ヒゲガラ」及「ノドグロツグミ」に就て

獸醫學士 内田清之助

一、ヒゲガラ

ヒゲガラ云ふ名稱は黒田理學士が『鮮滿鳥類一斑』(百五十四頁)で附せられた新稱で、學名を *Pomurus hiemius puscus* (Brehm), syn. *Pomurus hiemius sibiricus* (Bonaparte) と云ふ。此種類は極めて美麗なエナガ大の小鳥であつて、從來知られた産地は東部西比利亞・蒙古・滿洲等に亘り分布する。(本種に極めて近き亞種たる *Pomurus hiemius hiemius* (L.) は歐羅巴の大部・小亞細亞・南部露西亞等に分布し本種は即其の東方型である)。

本年一月初旬末見の愛鳥家山形縣最上郡古口の細矢貞氏は予に珍鳥の鑑定を求められたが、之を見るにまぎれもなき前記の種類の雄鳥であつた。此鳥は同氏が昨大正九年十月二十二日霞網獵の際に獲られたもので、其朝は非常に渡り鳥が多く、三回に約二千五百羽の小鳥が糺つた想である。而して其の多數の内に此鳥を發見し、爾來不明の珍鳥として愛飼してゐたが、本年一月七日に斃死した爲め予に送附せられたのである。

鳥體は約二ヶ月間飼養されたものにも係はらず極めて美しく、別にいたんだ個所もなく、無論其の以前飼養せられたものと認むべき形跡もない。且つ捕獲の時の狀況が前記の如くであるし、又本種の分布の状態から考へて見ても此鳥が秋の「渡り」の際の迷鳥 *Straggler* として本邦に渡來したる事は疑もなき事實である。ヒゲガラは外見上カラ類に類似するが、ガドー氏によれば内部の構造は反つて雀科に近く、分類上議論のある種類である。多くの人はやはり四十雀科 *Paridae* に入れてゐるが、ガドー、エバンス二

氏は本種の爲に特に *Pannuridae*
 と云ふ科を設け、又シャープ氏は
 知目鳥科 *Timalidae* に入れて
 る。斯く本種は分類學上にも
 一寸面白い種類である。

記 載

雄鳥 頭部は淡き帶青灰色
 にして、眼先きより頸側
 に亘る顯著なる太き黒色
 の鬚斑あり。脊は淡黃褐
 色にて、肩羽は白色の地
 に赤褐色を帶ぶ。翼の風
 羽切は褐色、初列及中列
 雨覆は黒色にして此三者
 共に白及黃褐色の縁を有
 す。喉及上胸は灰白色、胸
 側は微に紫色を帶ぶ。腹

に草葉を以て丸き巢を營み、葦穂等を以て巢の内面を覆ひ、此の内に乳白色の卵四乃至八個稀に十個を産附す云ふ。



第 四 圖 ヒ ゲ ガ ラ

部は黃白色、脇は黃褐色、
 下腹及下尾筒は黒色にして
 顯著なり。尾は鏽赤色にし
 て外側の尾羽は縁及先端灰
 色を呈す。嘴は橙黄色、脚
 は黒色なり。

雌鳥 は黒色の鬚斑を缺き、
 眼先及頬は汚白色、下腹部
 及下尾筒は黒色ならずして
 黃褐色を呈す。下面は一般
 に雄に比し色鈍し。

翼長 二寸内外 嘴峰約三
 分 尾羽二寸七分

跗蹠 六分

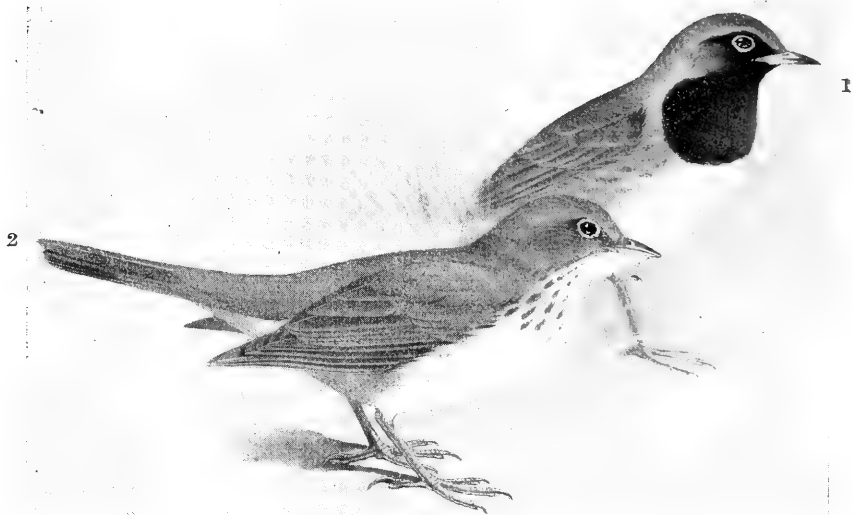
本種は主として蘆荻等の茂みに
 棲息し、冬期は草實、春夏の期
 節には昆蟲を食す云ふ。四
 月より七月頃迄の間に水草の間

二、ノドグロツグミ

(新稱)

農商務省では鳥類の「渡り」の研究の爲め全國數ヶ所に「渡り」の調査を依託してあるが、其の内沖繩縣では石垣島測候所長岩崎卓爾氏が専ら此調査に當り、其必要上同地方の鳥類採集をも行ひつゝある。

茲に述ぶるノドグロツグミは右の岩崎氏から農商務省へ送附せられた鳥類標本中に發見されたもので、前種ヒゲガラと共に從來本邦では一回も採集せられた事のない珍種である。標本は稍若き雌鳥で、産地は石垣島石垣村ミサキ、採集年月は昨大正九年三月二十五日である(第五圖)。此標本は囊に取り敢へず鳥學會第十三回總會の際供



第五圖 ノドグロツグミ 雌雄

覽したから、在京會員諸君の内に既に實物を見られた方もある。

本種は學名を *Yunus arifalensis*

Temminckii 云ひ、從來知られた

分布は冬期には西比利亞に於てオ

ビ川及エニセイ川の間南方トルキ

スタン及アルタイ山を以て界する

地方に在りて蕃殖し、冬期はアサ

ム・印度北部・バルキスタン・ア

フガニスタンの滲迄渡りを營み、

又稀には同地方ヒマラヤの高山で

蕃殖する事もある云ふ。前種ヒ

ゲガラの方は本邦に迷ひ來る事は

其の分布から考へて順當である

が、本種は右に述べた分布から云つ

て沖繩地方に迷ひ來る事は一見不

思議の感があるが、併し鶉の類は

一般に渡りの際には非常に遠距離

を遂行する事があるもので、現に本種に就て見ても迷鳥として殆んご歐羅巴の各國（匈牙利・澳太利・獨逸・丁抹・白耳義・佛蘭西等）に出現し、一回は英吉利に於て捕獲せられた事すらあつて、我沖繩に來た事も敢て不思議でもない事と思ふ。

記 載

雄鳥（挿畫第五圖） 眼先・頬・腮・喉・胸及頸側は黒色にして、其の部の各羽毛には白縁あり、（夏期には殆んご白縁消失す）其の以下の下面は白色にして、脇には灰色の縦斑散點す。耳羽及全背面は灰褐色にして、頭上の羽毛には暗褐色の軸線あり。翼及尾羽は褐色にして、外縁は脊と同色を呈し、下雨覆は橙黄褐色、腋羽は帶赤灰色なり。下尾筒の羽毛は暗褐色にして先端に白點あり。脚は灰褐色、嘴は下嘴の基部黄色にして其の他は黒褐色なり。

雌鳥（挿畫第五圖） 顔及頸は背面と同じく灰褐色を呈し、腮及喉は白くして暗褐色の縦斑を散在し、胸は灰褐色の地に濃き多數の褐色點斑あり。其の他は雄に同じ。

翼長四寸三分 尾長三寸一二分 跗蹠一寸一分 嘴峰六分五厘

今回岩崎氏の獲られたるものは稍若き雌鳥にして、喉及胸の斑紋濃厚にして、腹面には微に淡褐色の縦斑を止むる事挿畫第五圖2に見るが如し。

ク ロ ト ウ ズ ク カ モ メ の 習 性

叔 山 德 太 郎

過る大正七年夏、露領勸察加州西部海岸地方に滯留中、本邦にては稀種に屬する處のクロトウヅクカモメに就て其習性の一部を識るを得たれば茲に紹介する事となささん。

一般に盜賊鷗類は他鳥を強襲し其食餌を掠奪するの通有性あるは須知の事實なり、據て如上の名稱を附せられしに他ならず、尙普通のトウゾクカカモメの方言にゴメナカセ（千葉縣安房郡）なるあり即ちゴメは鷗類の方言なるを以て鷗虐めの意なり、又クロトウゾクカカモメを露語にてコルサーリ（Корсары）と稱す蓋しコルサーリは海賊を意味せり、夫等は總て此類の特殊なる性状の一端を窺測するに足らん。

觀察地方に於けるクロトウゾクカカモメの習性に就て見るに嘗て子爵松平頼孝氏が相模灣に於て觀察せられたるオホトウゾクカカモメ及びトウゾクカカモメ兩種の習性（『鳥』第二卷第六號四—五頁）と多分の共通點を見出さるゝは類縁上至當ならんも亦觀察地方の地勢並びに種の差異・直接交渉を有する棲息海鳥類の相違等に依り其習性に於ても多少の異點を認め得る處なり。

該地方にありてはクロトウゾクカカモメの専ら求餌の目的と囓目され居る數種の海鳥類は海濱近くに繁棲し陸岸より遠隔なる海上にては極めて寡産なり、此は海鳥類蕃殖地たる沼池若くは河川に添へる苦原（Tundra）の海岸より遠隔ならざる内陸地に設けらるるご食餌させる處の魚類其他の海産動物の陸岸近くに密集し來れるごは有力なる原因たるべく又此地方に住人稀薄なるも其一小因たらん故に夫等の海鳥類を求餌の目的物とさせる本種も亦本邦内地に於ける盜賊鷗類の如く陸岸遠き海上に多く見出さるゝ事なく單に海濱附近にのみ見受くるを常とす、而して本種が當地方に於て求餌の目的と爲せる海鳥類は殆んどユリカモメ及びミユビカモメ兩種に限られ甚だ稀にアヂサシをも襲ひ食餌強奪を敢て行ふ事あり、其他の小型なる海鳥類等をも襲ふ事あらんも目下の處にては不明なり。

二、觀察日誌

以下本種の習性其他を該地方産鳥類觀察日誌中より抜記すべし。

大正七年六月十七日 昔原地にて海濱方面より沼地へ向け上空を飛過せし本種一羽を目撃せり、其飛行の狀稍鰭刺類と鷗類との中間に位する程度なり、尾羽は中央のみ長く突出し兩端のものは略同長に見ゆ即ち飛行時其直下より仰觀する時は其尾は錐の先半部に似たり。

同十八日 菅原地にて上空を飛過せし一羽を見る、腹面白し。

同十九日 堤商會コセゴチック第一號漁場事務所附近海濱に下降せる奇鳥あるを雜役夫梶村英一報じ來れるを以て同所に赴きしに本種二羽を發見す、一は普通のものなるも他は黒色型なりき、人影に飛立ちしに一射を送り黒型雄鳥を獲、其儘他の一羽の行動を監視せしに砂上に倒れたる反鳥の上空を二—三廻翔せる後一直線に遁れ行衛を識らしめず、而して爰に面白き一事は常に本種を仇敵と目し居れる鷗類——カモメ多數にユリカモメ二三雜る——の附近より忽然と群れ集り來り此被倒彈者の上空を盛に叫聲を發しつゝ亂翔せるを見たり、夫は彼等の同族間の銃撃に會したる折屍鳥を弔ふに似たる動作を行へるを屢々見受くる場合と全く同様なるが如きは稍奇異の感あり。

同二十一日 本種一羽海汀に求食せる群鷗中に飛入り群を攪亂しつゝあるを遠望せり。

同二十二日、二十三日及び二十六日 此種の菅原地上若くは海濱附近を飛行せるを見たり

同二十七日 比較的多數の本種に會したるも皆通常のものゝみにて黒色型は一もなし、恐らく三羽以内のものを重視せるものならんと思考す。本種は當地（勘察加州西部海岸コシエゴチェンスキイ）にては専ら鷗類中のユリカモメを追ふものゝ如く該種は己自身が此怖るべき敵の攻勢の目標となれりを見るや未だ遠距離なるにも不拘 *“pursued”* の叫聲を續發し專念此追撃より逃れんものゝ焦慮しつゝ遁翔を企つるも遂に敵鳥が後尾に觸迫するに至り一上一下右横左横に轉じ其攻撃を避くることに腐心するも攻者は夫れに應じ對者より翔力迅速なるを利用し其前面に過ぎ側面より攻め又は脊面に己の腹面を摩さん計りに接觸し嘴を以て啄き或は蹴り或は翼を以て打ち或はたく等の事を爲す、然るときは被攻撃者は己の食道内に收めたる食餌を吐出するに至る。此時攻撃者は待ち構へたるが如く一氣に下方に飛下り強制被奉供物を空中にて嘴を以て受止め其對者の遁翔するを顧みず直線飛行をなしつゝ掠奪物を喰ふ、因に本種の攻撃を被る者たるや必ず食餌を攝り終りたるばかりのものに限らるゝ如し換言せば本種は飛翔しつゝ食を攝りつゝあるユリカモメを狙ひ攻撃を試むるものとす。

菅原地に在る小沼内を遊泳せる一羽は人影を見て飛立ちしも後再び飛戻りて水濕地の叢間に下降せり、或は此附近に彼の營巢も



第 六 圖 クロツグカモメ(上)と
ユリカモメ(下)

あらんかとも想ひたれど濕苔深く
腰部に達し進退困難を覚えければ
及び難きを推し探索を断念せり。

二羽のもの砂汀近き海上を廻翔
し居りしに近づき一弾を送り一羽
を波上に落せしに他の一羽は此友
鳥の上空に至り附近より集り來れ
る鷗類と共に亂飛群翔をなし居り
たり(集れる鷗類はユリカモメ多
く少數のカモメを混す)。

同二十八日 一羽の本種、ユリ
カモメ一羽に追はれつゝ飛び行く
を目撃せり、兩者は海濱に添ひ一
直線に追遁し來れるものゝ如し、
而して本種の飛翔速かなるに見極
めを附けたる爲めか聽てユリカモ
メは側方に轉じ、長追ひをせざり
しき、恐らく追跡者の本種に對する
平素の私怨一端の發露とも見るべ

きもの歟。

同二十九日 海濱に添ひ飛行中の本種一羽對方よりアヂサシ一羽の來れるに會し突如攻撃の態度に出でしも對者の一換し目的方向に再翔に移れり。見るや更に攻勢に出づる事なく是を見棄て、飛去れり、一般に本種はアヂサシに對して攻撃を試むる事尠きものなるが如し蓋し該種の翔速大なるを本種自身にて知識し居れる結果ならん。推考す而して該種も本種の襲撃に會せし場合にユリカモメに於ける如く叫聲を發する事なく又彼の如く敢て遁逸に腐心せざるが如く見受けらる。

七月二日 本種及びアヂサシ各一羽砂濱上約三百呎の空中に於て上下交々に亂飛轉翔追避騒然たりしも間も無く本種の雜揉狀降下二百餘呎、地上に達せざる以前に其掠奪物を受け止め彼方に飛去りしに依て終局を告げたり、本種は常時にありては本例の如き高空に達する事無きものなれど被攻撃鳥たるアヂサシが本種の攻撃を避くべく遁昇せるを追跡し遂に此くの如き高所に騰空せるなるべし。

同三日 本種一羽のユリカモメ二羽に追はれ廻翔し居るを目撃す、被追撃者は緩翔しつゝ二者を巧に替はし敢て速度を増す事なく遁逸し終りぬ、最初より實見せる者の言に依ればユリカモメの魚干場近くに下降し居れる處へ本種の飛來ありしを見て一舉に二羽の追撃を開始せるなり。

同四日 苔原地帯の小沼附近の草叢地に下降せる一羽を發見す。該鳥は其後間も無く飛び立ち余の銃手に掛りたり。

同十一日 第一號漁場事務所の屋根裏に巢食へるハクセキレイの雌雌二羽の内の一羽漁夫寄宿舎屋上に憩ひ居りし處へ本種一羽飛來せしにハクセキレイは直ちに配偶の一鳥を呼び鳴き二羽にて是に追跡を初め叫聲を發しつゝ本種の後尾を追ひ迫りしも數尺の間隔を置き夫れ以上に接近する事を爲さず、單に脅迫を試み居る如く見受けらる、されど彼追迫者は敢て之に抗する事なく寧ろ何等意に介せざるものゝ如く此附近を暫く廻翔せる後飛去れり、夕刻も再び同様の事ありしに聞きたるも余は之を見ざりき。

海濱砂上に憩降せる一羽を目撃せり。

同十四日 苔原地の小沼附近にて單獨の本種飛翔し來れるに會し採集せり。

同十八日 午前中普通型のもの一羽漁場附近に飛來せり、夕刻黒型一羽ユリカモメに追はれつゝ逃げ廻り居るを目撃す。

本種は或る一定の區域内に一定の數即ち多くの場合二羽 恐らく一偶——を見る處なれども鷗群の多數群集せる場所（比較的面積廣大なる場合）にありては尙多數のものを見る事あり、されど折にても四羽——恐らく二偶——を越ゆる事なきものゝ如し、此は彼等の嚙食上必須の好策たるべし、或はモズに於けるが如く所謂繩張り地なるものならん歟。

同十九日 普通型及び黒型各一羽漁場附近に飛來せり。

菅原中の大沼の南岸附近にて普通型二羽に會せり、二羽は一定の間隔を置きて提携飛翔を爲し居りしを以て恐らく雌雄なるべしと想す、再度兩鳥に會したる時は二羽ながらタグロシギ二羽の追跡に遭遇し居りたるも特に此追跡を苦にせざるが如く軽く遇ひ過ぎ行きたり、因にタグロシギは此附近に其營巢ありしものゝ如し。

同二十一日 普通型一羽漁場附近に飛來せり。

備考、上記の觀察は總てコシエゴチエンスキイのみに於て行へるものにして後記の分はヤウエンスキイ及びオジエルノイにての觀察に掛る處なり（鳥第二卷第七號一〇一頁地圖參照）。

同二十四日 堤商會第四號漁場（ヤウエンスキイ）の海濱魚洗場の水小流れを形成し海面に流出する邊に鮭鱒卵を喰はんごてミユビカモメ多數群集し居れる處に本種一羽（普通型 飛來し該群中に突入し一羽のミユビカモメを僅かに追ひしも觀察者の近きを斜瞥し沖合へ飛去れり、因に當地方は前觀察地たるコシエゴチエンスキイより海岸線に添ひ南方へ僅々七里餘に過ぎざれども前觀察地のユリカモメを多産せしに反し之を殆んど見る事なく（余は全く該種を見ざりき）換ふるにミユビカモメを以てす、此種は前觀察地にては目撃せし事なき種に屬せり、故に本種即ちクロトウゾクカモメの求餌の目的異なる種に於ても彼我の相違を見出す處なり。

同二十六日 堤商會第二號漁場（オジエルノイ）附近は從來の觀察地と趣きを異にし海邊に岩礁多き兩岬突出し灣入せる個所は砂濱なれども後方に斷崖を控へ其幅員廣からず、然れども魚屬の集合する事多きを以て鷗類の棲息に最適地たるは多くの鷗群を常に目撃する處に依て立證するを得べし、さりながら此海岸附近に見る鷗科に屬する鳥種は甚だ尠く僅かにオホセグロカモメ・ミユ

ピカモメ並びに本種の三種に過ぎず（ヤウエンスキイにては之等の他に尙アジサシ及び少數のカモメを見る）此の如く種類さきも鳥數多きを以て此一小灣内に定住せる本種は四羽を算せり恐らく二偶なるべしこ觀察す皆普通型なり。

八月一日 堤商會第二號漁場の灣内には常に四羽の本種を見るを以て以後特殊なる生態を見たる場合を除き他は記さざる事す、而して本日此種に就きて些しく觀察なし得たる處を記さんに當所にてはミユビカモメのみを追撃しオホセグロカモメには更之を試むる事なし、却て該種に追翔せられ居るを一回目撃せり、次に本種が海面に浮はんこ欲する時は常に鷗類——恐らくミユビカモメなるべし——の咥遊せる中央部に下降するも鷗類は之を嫌憚し徐ろに他方に避轉す、故に降下せる際は鷗群の中心に彼の黒き鳥體を遠望し得れども暫時にして咥側に轉位せられ居るを見る處なり。

八月三日 本種二羽の同時に一羽のミユビカモメに攻撃を開始せしも上方よりの一羽は間もなく他方に轉翔し他の共撃者に譲りたるもの、如く見受けたり、即ち二者共同して一鳥に當るも鹵獲物は一者の嘴先に掛るに過ぎざる點を知悉し居るもの歟。

三、約言

以上の事實に依り觀察地方に於ける本種の習性に就て大體を約説する事次の如し。

- (一) 夏季にありては一定の區域内に或一定數のみ定棲し多數群集する等の事をなさず。
- (二) 本種の食餌強奪被害鳥はユリカモメ・ミユビカモメ並びにアヂサシ（稀に）等あるを識る、其他の小型若くは中型なる海鳥類中にも被害鳥あらんも目下の處にては不明なり。
- (三) 本種の奪餌は多くの場合被害鳥の食道内容物を吐出せしむるもアヂサシにありては嘴に銜へたる餌物を投ぜしむるものこす。

(四) 他鳥より奪餌の方法たるや己の翔速大なるを利用し目的鳥の脊面若くは側面に接近し嘴を以て啄き又は脚趾を以て蹴り或は翼を以て打ちたく等の事をなす、尙間々其前面に出で遁翔に阻害を試むる等の間接行動をもなす、而して多くの場合此目的を達するにあらざれば止む事なきものこす。

(五) 主として被害鳥種の食を攝りつゝある一羽のものを狙ひ攻撃を開始するものにして多数の同時に食を攝りつゝある場合にありても目標を爲せるは其内の一羽に限るものとす、而して或一羽に追撃を開始せば中途他鳥に轉ずる事なきものと如し。

(六) 他鳥に強襲を加ふるは主として海濱若くは海上に限らるゝものゝ如く昔原地其他にては未だ目撃せし事なし。

(七) 被害鳥の吐出若くは嘴より投じたる食餌の地上若くは海上に落下到達以前即ち墜落途中を己れの嘴を以て受止め飛翔しつゝ、

(多く直線飛行) 夫等の奪取物を喰ふか又は飛翔に移る際に夫等を嚙下す、誤りて夫を地上若くは海上に墜落なせしめたる場合其食物の處置に就ては目下の處にては詳かならず。

(八) 被害鳥種の食物をなせるものは總て本種の食物を共通せりとも謂ふを得べきも就中被害鳥種の海中若くは海濱にて求食せる各種の魚類並びに魚卵其他少數の他の海産動物は疑なく本種の食餌を共通せりとも確認するを得。

(九) 本種は反對にオホセグロカモメ・ユリカモメ・タグロシギ・ハクセキレイ等に追跡せらるゝ事あるも此場合更に反撃を加ふる事なく前三種の如き中型以上のものに對しては翔速大なるを利用し遁避するも本種自身の他種を攻撃する折の如き急翔を爲す事なきが如し、最小形なる後種の如きものゝ追跡に對しては寧ろ何等意に介せざるが如くに見受く。

(十) 友鳥の危難に際し急遽其現場に飛來する性あるは鷗類に於けるも同様なるも異種に對しても同じかるべきや否やに就ては不明なり(即ち鷗類其他の罹害の場合を謂ふ——鷗類にありては此場合異種なりとも殆んま必ず飛來する習性あり)

第六圖説明——ユリカモメ(夏羽)背面より迫近蹴撃を試みつゝあるクロトウヅクカモメ(普通型夏羽)、ユリカモメは今や食道内容を吐出せんと爲す瞬間。

横磯のよこさにこりにあみせねば

鷗も海士にむつれてぞこぶ

下田義照

廣島市内の一部にて見る鳥類

中 尾 春 雄

一八

此の記録は市街の東南の一小區域、主として自宅の庭内、及び僅か十町餘を距だてゝるる比治山公園との間に於てなしたる觀察である。比治山公園は市街の東端にある、標高六九、六米、周圍約三〇〇米の小丘であつて、松樹を主とする密雜林で被れてゐる。

1. カイツブリ *Pelecanus nigricollis japonicus* Hartart.

九月下旬から、下水の溜池や、新開地の沼で見られるけれども稀である。

2. ゴ井サギ *Melanocorypha caerulea japonica* (L.).

下水溜、川洲、養魚池、比治山公園の雜林中なきて最も普通に見る。五月下旬から七月中旬迄、上空を渡るのを毎日見る。

比治山公園で營巢繁殖する。

3. マガモ *Anas platyrhynchos platyrhynchos* L.

十一月中旬頃から江波の養魚池に下りてゐる、五六羽の群を見る。ここにある。

4. トビ *Milvus lineatus lineatus* (Tracy).

数は少いけれども普通、多くは單獨で上空を舞つてゐるのを見られるけれども、嘗て八月下旬、新鳥を雜えた八羽の群が川洲にトビりてゐるのを見たことがある。トビが餌を食べるのは、空中を滑翔しつゝたべる。

5. ミサゴ *Panthon barbatus barbatus* (L.).

九月下旬江波の養魚池の上空で一羽を見たことがある。

6. チドリ、シギ類

秋季は八月二十日前後から、川洲、河口岸の下水溜の泥土上に來る。最も多きは八月末から、九月下旬迄であつて、一個所百羽内外の群を見る。春期は数が遙に少い。下水溜では殆んど見ない。下水溜に集るものは、七種はざるるけれども、種の判別し得たものは、コチドリ、トウネン、オホソリハシシギに過ぎない。最も早く渡つてくるものはオホソリハシシギであつて其れに續いてコチドリ、トオネンが渡つて來る。全群の多くはオホ

ソリハシシギである、九月下旬になるミオホソリハシシギ、コチドリの群はるなくなつて、トウネンの数が増して百羽位になり、二三十羽づゝ一團となつて、密集し首を脊に托して眠つてゐる。啄餌してゐるものは疎集してゐる。他に三四羽の中型及大型のシギ類を見る。十月上旬にはトウネンも著しく少くなり、中型のシギ類の十五六羽の群を見る。十月中旬以後には下水溜ではシギ類を見なくなる。

7. タシギ *Gallinago gallinago raddai* (Butorjin).

秋季新開地の水田や小溝の中で單獨のものを見るけれども数は多くない。

8. ヤマシギ *Scolopax rusticola rusticola* L.

秋季は十一月中旬から下旬にかけて、春季は三月下旬頃單獨にて庭内に来ることがある。晝間は枯れ落葉の中にうづくまつて、首を脊に托して眠つてゐる。一三間迄寄つても動かない、夕刻から起きて嘴を間断なく土中に入れてミ、ズを喰つてゐた。

9. キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham).

比治山公園に普通であるが数は少い。営巣するものと思はれる。

10. ホトトギス *Cuculus turnerius turnerius* Vahl.

五月中旬から夜間鳴聲をきく。

11. カハセミ *Alcedo atthis bangalensis* Gunjin.

養魚池、沼、下水溜、川邊等で普通見るけれども数は多くはない。稀に庭内へも来るこがある。

12. アヲバツク *Ninox scutulata scutulata* (Raffles).

五月下旬から、九月中旬頃まで時々庭内にくることがある。比治山公園では晝間鳴聲をきくこがある。

13. ヒバリ *Alauda arvensis japonica* Temm. & Schl.

囀聲をきくのは、三月上旬からである。数はかなり多い。畑地では十一月中旬まで見る。十一月の小春日和の温い日には囀聲を聞く、春季のやうな上空ではなく、畑中の肥溜の屋根で鳴いてゐる。音調は春季より低い。

14. キセキレイ *Motacilla alba melanope* Pallas.

普通見る鳥であるが、あまり多数は見ない。八月中旬から渡つて来るけれども、所々で見得るやうになるのは九月下旬以後である。二月上旬畑の残雪の間で啄喰してゐたのを見たこがある。越冬するものもあるやうである。稀に庭内に来る。

15. セグロセキレイ *Motacilla alba grandis* Sharpe.

前種に比して遙に数が多い。周年見るけれども秋季はこに多

く、嘗て一養魚池の泥土上に數十羽の群が啄喰してゐたのを見たことがある。前種は多く單獨であるが。此の種は二羽の群を見るこゝが普通である。

16. ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Kittlitz.

前二種に比べて数が少いけれども十月上旬からよく見るこゝが出来る。

17. ヒヨドリ *Hypspetes amurensis amurensis* (Temm.).

九月下旬から渡つて来る、庭内にも来る。

18. コサメビタキ *Alseonax latirostris* (Rathes.).

九月中旬から庭内に来る。比治山公園では小群を見るこゝがある。五月上旬公園内で見たこゝがあるが、春季は甚稀である。

19. サメビタキ *Henicelidon atricapilla tomentosus* Johannsen.

前種に比べて遙に数少く、比治山、江波等の公園地で、秋季に見るのみである。

20. キビタキ *Zanthopygia narcissina narcissina* (Temm.).

21. オホルリ *Cyanopitta cyanostrigata* (Temm.).

右二種共に稀であつて、前者は十月中旬、後者は四月下旬に一度庭内で見た許りである。

22. ツグミ *Turdus eunomus* Temm.

渡つて来る数は多くない。春季は麥畑で單獨にて、地上で啄喰してゐるのをよく見る。庭内にも稀に来る。

23. アカハラ *Turdus chrysolaus* Temm.

一月下旬から一羽若しくは二羽庭内に来る。四月中旬迄連日庭の落葉を一つ一つ嘴で返して啄食する。又薦の實を嗜食する。薦の實を飽食した後は枝上に靜止して薦の種子を思はるゝものを度々吐き出す。ジャウビタキにも此の習性がある。二月下旬から美しい囀聲をする。去期四月上旬。

24. クロツグミ *Turdus caesus caesus* (Temm.).

五月中旬一度庭内で見たのみ。

25. ノゴト *Calliope calliope* (Pall.).

秋季は十月下旬、庭内に渡つて来る。あまり人を恐れない。地上にて鱗翅類の幼蟲、小形の蜂類を捕食する。春季の渡來期は五月中旬。

26. ジャウビタキ *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pall.).

十月二十日前後から人家近く渡つてくる。當地で越冬して三月下旬から四月の初めに去る。狭い庭内で年々越冬する所を見るこゝ、越冬中はあまり移動せないやうである。数は少いけれども普通である。同一區域に二羽以上を見るこゝは甚稀である。

27. ツグミ *Turdus eunomus* Temm.

渡つて来る数は多くない。春季は麥畑で單獨にて、地上で啄喰してゐるのをよく見る。庭内にも稀に来る。

28. ツグミ *Turdus eunomus* Temm.

渡つて来る数は多くない。春季は麥畑で單獨にて、地上で啄喰してゐるのをよく見る。庭内にも稀に来る。

羽るる時は、多くの場合、相争ふてゐる。鳶の實を好食する。

27 ルリビタキ *Tarsiger eganus* (Fall.)

一月中旬一度庭内で見たことがある。

28 オホヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (L. & S.)

四月下旬から八月中旬迄、比治山公園、その他沼邊、松林等で普通に見る。先づ山地に渡つてきて、平地に現れるのは二―三日遅れる。庭内へ稀に來ることがある。庭内では小型の蛾を巧みに捕食してゐた。所々で營巢する。

29 ウグヒス *Horeites cantans cantus* (L. & S.)

普通に見る鳥ではあるが数は少い。庭内へ渡つて來るのは秋季は十一月上旬、春季は三月下旬。

30 コムシクヒ *Phylloscopus borealis borealis* (Blas.) ?

單に觀察のみなれば、コムシクヒなるや、メボソなるや判明せないけれども、下面の著しく灰白なるよりしてコムシクヒらしく思はれる。比治山公園にて小數を見る。庭内には年々九月中旬から渡つてきて、二週間位滞庭する。

31 キクイタダキ *Regulus regulus japonensis* Blak.

秋から冬にかけて、二―三羽から五―六羽の群が庭内に渡つてくる。松樹に寄生する貝殻蟲を啄食する。

32 ミソサザイ *Troglodytes troglodytes fumigatus* Temm.

十月中旬から比治山公園に渡つてくる。

33 ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* Scop.

數は多くない。渡來期四月中旬、去期十月上旬。

34 コシアカツバメ *Hirundo daurica nipponensis* (Hodges.)

前者よりも少い。渡來期は遙に遅く、五月中旬である。去期は正確に知り難いけれども十月中旬頃のやうに思へる。

35 モズ *Lanius bucephalus* L. & S.

周年見るけれども留鳥となるものは僅にその一部に過ぎない。

渡つてくるのは九月下旬からである。山地に歸るのは大抵五月下旬である。比治山公園其他所々で營巢する。庭内でも二度營巢したことがある。庭内で營巢を始めたのは二月下旬、産卵が三月中旬であつた。故に育雛期には昆蟲類が未だ少いのこ、庭

内に蛙類が稀な爲に、育雛の食餌は主として小形の爬虫類即ちトカゲ、カナヘビ、ヤモリ等であつた。就中トカゲを最も嗜食するやうである。稀にはカハホリを捕えてくるのを見たことがある。抱卵は雌がする。其の間雄が雌に餌を運ぶ。雌は雄の聲を聞くに大抵巢から二―三間離れた枝上まで出て、恰も雛が親から餌を受ける時のやうに體を平らたくし、兩翼を少し横に張

り、震はして、鳴きつゝ受ける。モズが大型の餌を食べる時は、多く枝上に突きさして食べるけれども、蟬を食ふ時丈は趾にて枝上に壓えて食べる。

36. チゴモズ *Lanius tigrinus* Dreyf.

比治山公園に渡來して、其處で營巢するけれども数は少い。渡來期は五月下旬 雛の巢立を見るのが七月中旬、八月下旬には既に姿を見ない。

37. アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* Lath.

九月下旬一度庭内で見たことがある。

38. シジフカラ *Parus major minor* T. & S.

周年見る、比治山公園で營巢する。庭内へもよく来る、

39. ヤマガラ *Parus var. us var. us* T. & S.

十一月月上旬比治山公園へ渡つて来る、數羽の群を見る、

40. コガラ *Parus atricapillus restreatus* Helm.

稀であつて、嘗て十月下旬シジフカラの群に雜つてゐる數羽を比治山公園で見たことがある。(ヒガラ *P. ater insularis* Helm. の誤りにては非らざるか——編輯者記す)。

41. エナガ *Aeginthos caudatus trivirgatus* (T. & S.).

比治山公園にては年を通じて見る。此處で營巢する。數多く、

五十羽位の群を見ることもある。

42. ハシボソガラス (*Corvus corone orientalis* Evensm.

夏季は少く、秋から冬にかけて普通に見るけれども数は多くない。比治山で營巢する。

43. ムクドリ *Spyllopsor cinereus* (Temm.).

周年見るけれども秋から初冬にかけて最も多く、四—五十羽の群が市中のセンダン、クス、ハゼ等に集まつて其の實を食べてゐるのをよく見る。比治山公園で營巢する、饒津公園ではドバトの群に雜つて地上で啄食してゐるのを見る。

44. コムクドリ *Sturnia rotulacea* (Bodd.).

稀にムクドリの群に雜つてゐるのを見る。

45. メジロ *Zosterops palpebrosa ja. omeus* (T. & S.).

九月上旬から比治山公園で一群のメジロを見ることがあるけれども数は多くない。二月頃二—三羽の群が庭内にくることがある。

46. カハラヒワ類 *Chloris sinica*, subsp.

C. s. karawakhia であるか、*C. s. minor* であるか不詳、比治山公園で營巢する。三月上旬から十羽内外の群が連日鳴きつゝ低空を一日數回、五月上旬頃まで渡る。庭内に下りることは甚だ稀で

ある。(恐らくコカハラヒワならん——編輯者記す)。

47. ホホジロ *Emberiza caesia crispis* Bp.

比治山公園で營巢する。九月上旬未だ哺育されつゝある巢立雛を見たことがある。

48. ノジロ *Emberiza sulphurata* T. & S.

秋季時々庭内に來る。こゝがあるけれども、飼鳥として、市中に最も多き種類であるから逸鳥かも知れない。

以上の外、僅か一—二回而も極めて短時間の觀察であつた爲種屬を明になし得なかつたもの、及び四—五年來の觀察に過ぎない爲未だ發見し得ない種も數多くあるこゝこゝ思ふ。是等は追加報告するこゝこゝする。

尙老人から聞く所に由るこゝ、維新前後迄は市内で、コサギ、タカ (*Falco* 屬か) キジ、ビンズキ、シメ、イカル、マヒワ、ウソ等が普通に見られたそうである。比治山へは年々、方言ハネゲロツル (コウノトリならんか) がきて營巢したそうである。



エゾムシクヒの新分布地

榎山 徳太郎

エゾムシクヒ *Acronthopneuste tenuipes* (Swinhoe) は『日本鳥類圖説』刊行當時迄には樺太・北海道並びに朝鮮以外の邦領各地より全く識られざるものなりしも其後子爵松平頼孝氏に依り信濃南安曇郡に此種の分布せる事實を報ぜられし結果其分布區域は中部本邦に迄擴まれり『鳥』第一卷 一號二八頁・大正四年) 茲に余の所藏標品中に東京市京橋區築地——大正二年四月採集の此種一標品あるを検出せり、恐らく東京市内にて獲られたるは初めての事なるべし、因に春秋兩季に當市内を通過する蟲喰類は敢て珍らしきものにはあらざるも主としてコムシクヒ *A. loricatis loricatis* (Brustus) なるが如く余は未だ他種の蟲喰類の獲られたるあるを識らず (但し前記のエゾムシクヒを除く、

尙拙稿「東京市内にて見たる鳥類」中にメボソを掲げたるも誤りなり『鳥』第二卷第六號五六頁・大正七年）エゾムシクヒの偶々當市に見たるは恐らく規則的の「渡り」にはあらざるべく寧ろ迷ひ飛行を見做す方至當なるべし。

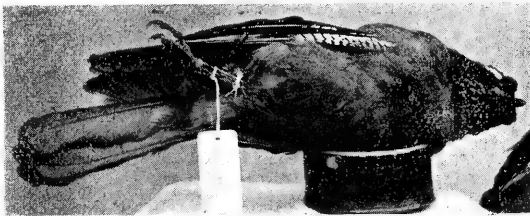
黒田理學士に依れば氏が九州地方よりメボソを報ぜられしは『動物學雜誌』第三十一卷三五頁・大正八年）エゾムシクヒの誤りの由、然らば該種は本邦西部に迄達する事明かまはなりたり。須らく各地在任同好諸氏の向後此類に充分の注意を拂はんか其は單にエゾムシクヒのみならず從來不明なりし蟲喰類各種の分布區域並びに渡行經路等も自ら分明するに到らん。
附記——東京市内にて獲られしメボソの標本を藏す（黒田記す）。

カケスの頭部の斑點の變異

理學士 黒田長禮

本邦産各地のカケスを集め頭部の斑紋種々なるに注意せしが嘗て會員熊谷三郎氏も宮城地方の多數のカケスを調査し灰色變種（動物學雜誌第三十一卷二〇二頁）並びに最も珍稀なる黒頭に於て喉に白色軸斑を有するものを發見せられ且つ報告せられたり（同誌同卷二九三頁）（第七圖参照）。第八圖に出せし寫眞は頭

部最も白きものより最も黒き無斑のものに至るを陳列撮影せし圖なり。



第七圖 カケス黒變種の喉の軸斑を示す

り。寫眞向つて左よりの其產地其他を記るせば



第八圖 カケスの頭部の斑點の變異を示す

米國シカゴ市リンコン公園の

鳥類其他に就て

水野誠

産地	採集月	性	所蔵
1. 日光?	?	?	内田清之助氏
2. 岩手縣陸中一の關、水澤附近	冬季	?	熊谷氏寄贈、黒田藏
3. 鹿兒島市外伊敷村宇花尾山	十二月	♂	荒木彦助氏寄贈、黒田藏
4. 埼玉縣秩父大宮	一月	♀	黒田藏
5. 丹波國	十一月	?	同上
6. 栃木縣下野原	十月	?	同上
7. 岩手縣陸中一の關、水澤附近	冬季	?	熊谷氏寄贈、黒田藏
8. 宮城縣陸前玉造郡岩出山町附近	十月	?	同上

此種の頭部の斑點の變異は地方に關せず上表の如く同一地方にても著しき相異あり。即ち各個的差異にして分類上何等の値なきものなれども同一種類にして斯くの如く著しき變異を示すはヤマドリ尾の斑紋(「鳥」第十號三〇七頁参照)と同じく最も面白き例なりとす。

終に於て此比較をなすを得たるに對し内田學士、熊谷、荒木諸氏の好意を深謝す。

リンコン公園 (Lincoln Park) は當市にある大公園三十八小公園六十九に冠たるものにして以前レイキ公園 (Lake Park) と稱せしが一千八百六十五年六月市會の決議によりて斯く改稱さるゝに至れり而て其目標たるべき第十六代大統領アフラハム、リンコンの銅像は一千八百八十七年十月に建造され當公園にある十六個の銅像中最傑出せるものなり公園の面積は以前三百十七「エイカー」なりしも次第に擴大せられて今は六百四十二「エイカー」以上となり種々なる設備により面目を一新せり即二千近くの動物を包容する動物園。「ヨット」碇繋所。一哩に廣がる水浴場並に競漕場。植物温室。博物館。野球場。庭球場。「ゴルフ」場。「クローケー」場。花壇。舟遊池。自動車道。馬上隊道等は其主なるものなり。今是等の設備の中此記事の主眼とする鳥に關するものにつき左に列記せん。

(1.) 動物園中の鳥の飼養所につきて

鳥の飼養所は三箇所に區分せり第一は大なる建物にして其中中央に鐵柵を設け猶池には絶えず新しき水を湛えて水禽を放ち

三壁面には悉く小區分せる柵を造りて一々陸鳥を飼育せり又中央の天井には大なる硝子窓を設けて採光、換氣に便する様にせり冬期は暖房用鐵管に蒸氣を通じて約七十度の溫度を保たしめあり第二は多くの動物園に見る如き外庭にある一連の鐵柵にして孔雀、駝鳥、山鳥、鳥、鷺の如き比較的強大なるもののみを飼へり。第三は外庭にある

Duck pond と稱する小池にして鴨、雁、鶯鳥、鶯の類を放飼せり此所は遊覽人殊に小兒に喜ばるゝ所にして或は遊び相手となり或は寫眞の「モデル」となり水より芝生に芝生より水に或は歩のみ或は泳ぐ等一方ならぬ御愛嬌に見る人欣然たらざるはなし。

今是等の水禽並に陸鳥の名稱を示せば次の如し。

1. 水禽名(「鳥」第二卷、第十號、三二三頁に掲げしを以て再記せず)

口、陸鳥名(生鳥)

July 25, 1920.

1. Red & Blue Macaw (Brazil)
2. Blue & Yellow Macaw (〃)
3. Military Macaw (Central America)

4. Higgins Macaw (Brazil)
5. Sulpher Crested Cockatoo (Australia)
6. White " " "
7. Salmon " " "
8. Naked-eyed Cockatoo " "
9. Lesser Crested Cockatoo " "
10. Lead-breasted Cockatoo " "
11. Rose-breasted Cockatoo " "
12. Red-tailed Hawk (N. American)
13. Pigeon Hawk " "
14. Sparrow Hawk " "
15. Bald-hill Heron (S. America)
16. Wood Pigeon (Europe)
17. Nicobar Pigeon (India)
18. White-wing Dove (Mexico)
19. White-bellied plumed Pigeon (Australia)
20. Ring Dove (Europe)
21. Zebra Dove (Europ.)
22. White ring Dove (産地記載ナシ)
23. Bleeding heart Dove (Philippine Island)

24. Pearl neck Dove (Mexico)
25. White-bellied Dove (Jamaica)
26. Eclectus Parrot (New Guinea)
27. Single Yellow head Parrot (Mexico)
28. Double-fronted Amazon (S. America)
29. Red head Parrot (Mexico)
30. Cofora Parrot (S. America)
31. Vase Parrot (Africa)
32. Red-throated Amazon (Mexico)
33. King Lory (Australia)
34. Red " "
35. Rosella Parrakeet "
36. Cockatiel "
37. Ring neck Parrakeet (India)
38. Alexandrine Parrakeet "
39. Shell Parrakeet (Australia)
40. Screech Owl (N. America)
41. Emen (Australia)
42. Canary
43. Finch
44. Nompereil (America)
45. Napoleon Weaver (African)
46. Bishop " "
47. Robin (America)
48. Linnet
49. Black head Grosbeak (British Columbia)
50. Japanese Robin
51. Brazilian Cardinal
52. Java Sparrow
53. White Java Sparrow
54. White-throat Thrush (India)
55. White Crested Laughing Thrush "
56. Red-breasted Grosbeak (Mexico)
57. Brown Thrush (India)
58. Cardinal Grosbeak (America)
59. Pied Wino (India)
60. European Black Bird
61. Texas Bob-white
62. Red-wing Black Bird (America)
63. Scaled Partridge (Mexico)

64. Cuban Oriole
 65. Green Jay
 66. Brazilian Jay
 67. Blue Jay (America)
 68. European Jay
 69. Venezuela Jay
 70. Guan (America)
 71. Black head Jay (India)
 72. Giant King-fisher or Laughing Jakass (Australia)
 73. Silver Pheasant (China)
 74. Raven (Europe)
 75. Pine Crow (Australia)
 76. Jackdaw (Europe)
 77. Piping Crow (Australia)
 78. Green-billed Toucan (Central America)
 79. Yellow-billed Curassaw (Mexico)
 80. Ring-necked Pheasant (China)
 81. Black-banded Curassaw (Mexico)
 82. Golden Pheasant (China)
 83. Lady Amherst Pheasant (China)
84. Golden Eagle (America)
 85. Great-horned Owl (N. America)
 86. Red-billed Curassaw (Mexico)
 87. African Ostrich
 88. Bald Eagle. *Haliaeetus leucophthalmus alascanus* (Townsend)
 89. Sanderling. *Catirys leucophua* (Pallas)
 90. Hudsonian Godwit. *Limosa haemastica* (Linn.)
 91. White-rumped Sandpiper. *Tisotia fasciicollis* (Vieillot)
 92. Semipalmated Sandpiper. *Erynetus justilis* (Linn.)
 93. Black-bellied Plover. *Squaturota squatarola* (Linn.)
 94. Least Sandpiper. *Tisotia minutilla* (Vieillot)
 95. Dowitcher. *Macrorhamphus griseus* (Gmelin)
 96. Long-billed Dowitcher. *M. g. scotogaeus* (Say)
 97. Hudsonian Gull. *Numenius hudsonicus* (Latham)
 98. Semipalmated Plover. *Legiditis semipalmata* (Bonaparte)
 99. Crow. *Corvus brachyrhynchos* (Brehm)

(2) 標本陳列所についで

The Academy of Sciencesなる建物あり之は前に便宜上博物館に記せしものにして一千八百九十三年の創立に係り二階建にして地下室を事務室とし他を陳列場とせり此建物内には約二十

五萬種の地方の博物を軟體動物の標本を藏し當市唯一の地方的博物館たり家屋は餘り大ならざるも各種標本の配置整然として自然界の縮圖に等しく人をして佇立久しからしむるの魅力あり採光亦行き届き配景は總て引伸ばし着色寫真によりて「パノラマ」式に實景を連續せしめたり猶場内には見學々生に講演すべく特に區劃せる一室あり當シカゴ大學博物科を連絡を保てること勿論なり各室には一々説明書を貼付し猶判別に苦しむものには寫真を併置して双方の番號を對照して首肯せしむる様にせり今夫等の全部は勿論シカゴ市附近の自然界の全部につきて列擧することも貴重なる紙面の許さざる所なるべければ此シカゴ附近に於ける鳥の名稱のみを列記するにせり即ち以下は剝製標本なり。

Chicago Environs 博物館内に於ケル The Grand

Cal net, Miller, Indiana.

Birds.

1. Osprey. *Pantheria haliaetus carolinensis* (Gmelin)
2. Tree Swallow. *Iridoprocne bicolor* (Vieillot)
3. Great Blue Heron. *Ardea herodias* (Linn.)
4. Pied-billed Grebe. *Polligmbus podiceps* (Linn.)

5. Wood Duck. *Aix sponsa* (Linn.)

6. Ruddy Duck. *Erythraura americana* (Gmelin)

7. Red-winged Black Bird. *Agelaius phoeniceus* (Linn.)

8. Virginia Rail. *Rallus virginianus* (Linn.)

Chicago Environs, Pines, Miller, Indiana.

Birds.

1. Piping Plover. *Agitillitis melodia* (Ort)

2. King Bird. *Tyrannus tyrannus* (Linn.)

3. Tree Swallow. *Iridoprocne bicolor* (Vieillot)

Chicago Environs. Beach at Miller, Indiana.

Birds.

1. Common Tern. *Sterna hirundo* (Linn.)

2. Black Tern. *Hydrochelidon nigra americana* (Gmelin)

長門佐々並地方の鳥類の價格

兼 常 彌 富

左に掲げるものは何れも一羽の價格なり。

大正五年頃迄

鳥名 圓

ツグミ	〇・五—〇・六
ヒヨドリ	〇・五—〇・六
アトリ	〇・〇二
ヒワ	〇・〇一
カモ	〇・五〇
オシドリ	〇・三〇
キジ	雄 〇・三五
ク	雌 〇・三〇
ヤマドリ	雄 〇・四〇
ク	雌 〇・三〇
ホ、ジロ	〇・〇二
ス、メ	〇・〇二

大正七年頃

鳥名 圓

ツグミ	〇・二〇
ヒヨドリ	〇・二〇
アトリ	〇・〇五
ヒワ	〇・〇三
カモ	一・〇—二・〇〇
オシドリ	〇・八〇
キジ	雄 一・三〇
ク	雌 一・二〇
ヤマドリ	雄 一・五〇
ク	雌 一・三〇
ホ、ジロ	〇・五—〇・六
ス、メ	〇・五—〇・六

以上は何づれも獵鳥にして、生鳥は尙高價なり、生鳥を以ては、餘り賣買を爲さざるに付省略す。

病的の瘤を有するマナヅル

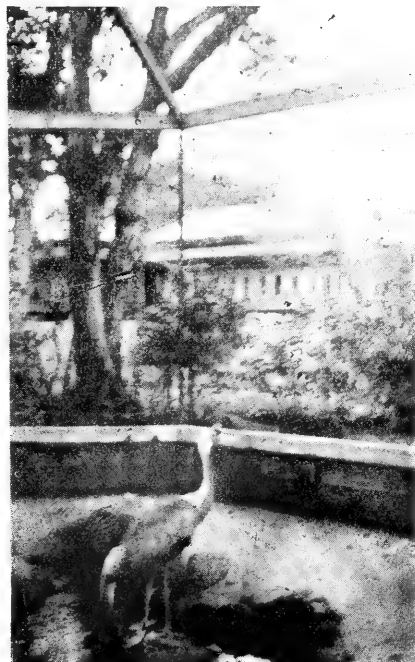
理學士 黒田長禮

昨年八月二十七日静岡縣三島驛附近安生氏別荘に赴き飼鳥を見ることを得たる其際第九圖に掲げたる如きマナヅルの額に肉

第九圖

額に瘤あるマナヅル

三〇



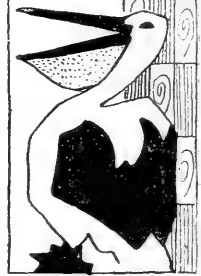
隆起あるものを見たり。こは單なる病的のものならんも一見異常の感を呈す面白き例なるにより茲に報告す。

附記——二三年前上野動物園飼養のタンチャウ幼鳥にも同様のものありたり(叔山記す)。

鶺鴒と金鶏との雜種

鶺鴒と金鶏との雜種には古來天鶏と云ふ名で呼ばれて居ることは一般に知られて居る様であるが鶺鴒と金鶏との雜種に從來名が附けてあるかどうか御承知の方があれば御教示を仰ぎたし。(黒田)

質疑應答



一四 質疑者 東京 榎山徳太郎

問一 カルガモをマガモ屬より分離せしむる時は其屬名は何づれを用ふべきものなりや。

答 カルガモの屬名としては *Potamoneta Oates* (1899) を用ふることを得べし。

問二

Fuligula marila nearectica (Stejneger) なるものは *F. m. marila* *F. m. mariloides*

兩亞種中の何れの「シノニム」なりや。

答 *F. m. nearectica* は北米主産の亞種にして他の二亞種より分ち得るものなり。

問三 カハツ、シマツの類ごヒメウ、チシマウガラスの類ご

を分つ時は何れを *Phalarocorax* 屬の基型種となすべきものなるや、カハツ、シマツの類に *Carbo* 屬を用ふることを得べきや。

答 カハツ類に *Phalarocorax* Brisson (1760) を用ひヒメウ

類に *Uria Bonaparte* (1855) を採用するべきを得れり *Carbo*

Lucpède (1799) 及び *Phalarocorax* 々の基型種は共にカハツ類なるを以て *Carbo* 屬を用ふるべきを得ず。

問四 *Colymbus tiber* (Günnerus) 々は何種か

答 *Colymbus immer* Brännich (1764) の「シノニム」を認むる

ことを得。始め *Colymbus Imber seu Immer* (Günnerus (1761) として發表せられたれど此不必要なる重複せる學名を採用することを得ざるを以て前名を採用すべきものとす。

五 質疑者 東京 中島利一郎

問五 マガモとカルガモとの幼鳥綿羽の差異御教示を乞ふ。

答 質問の兩種の幼鳥綿羽の差は一見なき如きもマガモにありては下尾筒の部分淡色(バフ色)なるにカルガモにては暗色を呈す。其他體の上面マガモにては暗褐色に富み淡色斑稍大きく明瞭なるがカルガモにては上面にオリブ色を帯ぶるもの多く淡色斑は稍小なり。以上はカムチャツカ産マガモ雖一個も東京府下羽田産カルガモ雖數個を比較せし結果とす。凡て野生のものに依れり。

六 質疑者 東京 近藤他喜

問六 雁、鴨、鴛鴦などの水鳥は夜間水上に浮寝する者なる

や又陸上又は樹上に寝るものなるや又夜間の視力は如何なるものなるか御教示被下度候。

答 雁、鴨類の眠るは夜間よりも晝間の方多く主として其時間は正午前後及び深夜なり。其他の時は食物を求めつゝ活動す特に黄昏より深夜前迄は其最も食物を求むるの時なり。眠る時は水上に浮寝もすれど又陸上にても眠る。但しチシドリ、トモエガモ、コガモは樹上に眠るこゝあり特にチシドリにありて然りしす。又夜間の視力は暗夜にては不充分にして寧ろ其力殆んど無きが如きも月夜なれば充分にして多くの食物は此月夜に捕食せらるるなり。(以上六件黒田長禮回答)

豪雨で斃れた數千の雀群

八月二十八日の夜半から降り出した雨が全北道益山全州郡方面に與へた被害は頗る甚大なものであつた、(中略)然るに廿九日曉方の雨量が如何に猛烈であつたかといふことは裡里驛構内に繁茂して居る亞藤林アサギには平常幾千と數の知れぬ程多數の雀の群がつて居るが夫が廿九日の朝地面一ぱいに死んで居たのを發見し多數の内鮮人が我勝ちに拾ひ取つたが中にはバケツに五杯も拾つた人もあつた是と同様の事が黄登でもあつたから誠に妙である斯る出来事は稀有の珍事だから一寸聞くと嘘としか思はれぬが實際だから珍妙である。

(大正九年九月十二日京城日報による)



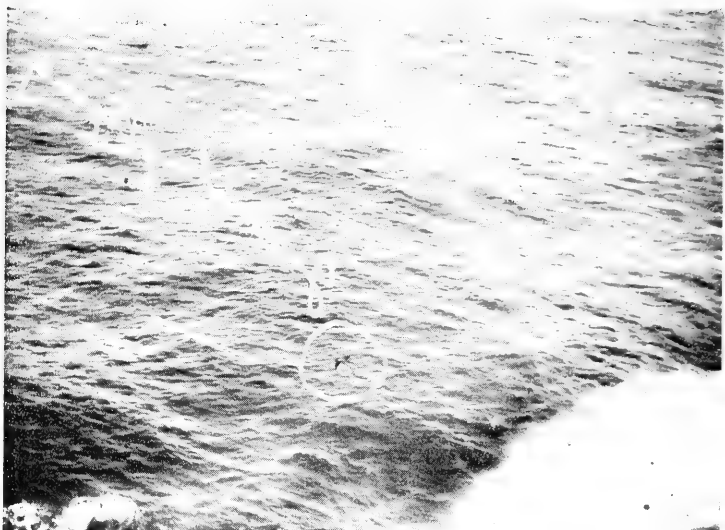
□表紙畫説明

昨大正九年出帆英國に留學せられた本會々員蜂

第十圖

船中の蜂須賀正氏氏





蜂須賀氏寄贈

第十一圖 リウキウカツナドリの飛翔

□外國雜誌交換 前號に報告した二學會の他洪牙國中中央鳥類調査局 The Hungarian Central Bureau for Ornithology から同様の希望であつたので今後同局出版の鳥學雜誌 *Agula* に本誌との交換が開始せらるゝ筈である。

蜂須賀氏寄贈



第十二圖 リウキウカツナドリ

須賀正氏^{アサウジ}からの通信の一節に氏は上海香港間の船中でリウキウカツナドリを捕獲した由で其折の寫眞を送附せられた本號表紙畫及上圖は右の船中及海上に於けるリウキウカツナドリである。

□日本鳥類目錄の編纂 小川三紀氏の「日本鳥類目錄」が出てから十三年、内田清之助氏の「日本鳥類圖説」附録の目錄が出版

せられてからも既に八年を経過してゐる、此間世界の鳥學の上から見るに分類の方式等に大分變化が起つてゐる、又我國の鳥學の狀況は此の八年間は其以前に比べて特に各種の研究調査が盛に行はれ鳥學上餘程の進歩を見たこと云へる、従て邦産鳥類の種類も新に追加すべきもの又は亞種を分つ必要あるものなご大分の數に上り又分布に就ても餘程改正を要する點が少くない且又前述の通り分類の様式も多少の變化を加へる必要が生じてゐる、本會は此要求に應ずる爲め昨年の秋頃から日本鳥類目錄の編纂を計畫し目下次の部門に就き左記の諸氏主管の下に稿を急ぎつつある。

第一部 阿比目から鶴型目迄の七日 黒田長禮氏
 第二部 鶉型目から佛法僧目迄の三日 齋司信輔氏
 第三部 燕雀目 内田清之助氏

本書の脱稿豫定は本年五月末日迄とし原稿整理の上直に印刷に附する筈故遅くも今秋迄には出來上る見込みである本書の發刊は本會創立十週年を紀念する爲め最適當なる計畫であること信ずる、其の内容體裁定價は本誌廣告欄に就て見られたし。

□東京市外青山原宿一七〇侯爵山階芳麿氏は甲種會員として本會に入會せられ、外左記八氏も新に入會せらる。

埼玉縣警察部保安課 栗島久次氏(乙種)
 日本橋區龜島町一ノ八〇 石井金吾氏(乙種)
 小石川區竹早町三六 小林重三氏(乙種)
 德島市西横町 柏原理一郎氏(乙種)
 横濱市青木上反町四八一 吉村福三氏(甲種)
 横須賀海軍航空隊 武知彦榮氏(甲種)
 愛知縣岡崎市祐金町六六 權田宗平氏(乙種)
 京都府師範學校 清水善次郎氏(乙種)

□轉居

朝鮮咸鏡北道羅南公立高等女學校 岡田信利氏
 支那山東省青島千島町一 山添輝男氏
 高知市東唐人町十四 藤田昌世氏
 鹿兒島縣出水郡高尾野村 石澤鐵四郎氏
 赤坂青山南町六ノ五六常磐館内 石澤健夫氏
 兵庫縣武庫郡東芦屋黒川大吉方 吉田浩夫氏

□退 會

萱 原 三 郎氏

中 力 一 二氏

神 谷 直 秀氏

朝 倉 喜 代 松氏

渡 邊 登 美 次氏

□次號の本誌は本會創立十週年を紀念號とする爲に目下夫々各方面に交渉して貴重なる原稿の蒐集に力めて居る、依つて頁數なごも増加すべき見込みであるから原稿のめ切も特に繰上げ四月末日限とする。

□死 亡

會頭理學博士飯島魁先生去る三月十四日薨去せらる。十八日告別式の際本會より花輪一個を呈し、内田幹事は弔辭を供へられたり。先生に關する詳細なる記事は本號劈頭にあり。

『鳥』第二卷 總目錄 正誤

頁 行

論說之部

八……………
二 二 叔山德太郎
野村宗畫
南洋諸島産アプロニス屬の一新亞種(英文)……………
叔山德太郎(後附)……………九

雜纂之部

三 上段三
三 下段三
三 (上恭治)
三 下段八
ムケドリ
アメリカヒドリとミコアイ
アメリカヒドリとミコアイサ
三 (上恭治)
ムケドリ

質疑應答之部

四 上段終ヨリ三
四 上段終ヨリ七
四 上段終ヨリ一
四 下段終ヨリ一〇
四 下段終ヨリ九
四 下段終ヨリ八
四 下段終ヨリ六
四 下段終ヨリ四
五 上段終ヨリ一
五 下段終ヨリ一

海苔養場
信天翁の布及び高麗鶯の營業に就て
(答黒田)
Chelidon (「タイプ」)
モヅ
モヅ
カヤクグリ
ノジコの屬名に就て
二五九
三二二
三三〇

海苔養場
信天翁の分布及び高麗鶯の營業に就て
(答黒川)
Chelidon (「タイプ」)
モヅ
モヅ
カヤクグリ
ノジコの屬名に就て(答黒田)
二五九
三二二
三三〇

雜報之部

五 下段終ヨリ一

三三〇

三三〇

附 録

動物學雜誌に掲載せられし

鳥類に關する文獻

理 學 士 黒 田 長 禮 編

動物學雜誌第一卷(明治二十二年)より最近第三十二卷(大正九年)迄の三十餘年間に同誌に掲載せられし鳥類に關する文獻を集め見たり。因て本誌に掲げ鳥類研究者の參考に資せんことを出來得る限り細大漏れなく網羅したれども尙ほ脱漏なきを保せず。讀者諸君の御氣付きの點は御報あらんことを希望す。

表中配列の順序は同一の卷にありては頁數の順によれり。同表中の略字例へは論は論説を意味し他は次に列記するが如し。講は講話、抄は抄録、發は發生學、形は形態學、生は生態學、地は動物地理學、實は實驗動物學、解は解剖學、應は應用動物學、雜は雜錄、傳は傳記、質は質疑應答、新は新著紹介、内は内外彙報、會は東京動物學會々報を意味す。

著 者	發 表	卷 數	頁 數
飯 島 魁	鳥獸の採集及び剥製	(論)	一六、四八 七三、一〇四 一三二
飯 島 魁	那須原の鳥類	(論)	一六〇半
飯 島 魁	本邦産の雀科	(論)	一一六、一六九 二二〇
え、い	クロトキの學名	(雜)	一四五
飯 島 魁	發育學一斑【鳥類に就きて】	(論)	一一六、二二四 一六〇、二八四 三三三、三七九 四三三、四五六 五一
波 江 元 吉	伊豆諸島の鳥類	(同)	一九七、二五六
服 部 徹	鳥の發聲に就て	(質)	三三九、三六八
服 部 徹	鳥島信夫翁の話	(論)	三九、五一八
服 部 徹	千島群島色丹及び擇捉の景況【エトピリカに就て】	(雜)	一四〇五
野村彦太郎	動物聲音考(第一鴉、第二家鷄、鴉)	(雜)	一四三六
野村彦太郎	(寄書)		四六八、五五
野村彦太郎	同第三鴉、雁、第四鴿、第五斑鳩、郭公、第六杜鵑、第七柴鶴、第八雉、第九雀、	(同)	二二二、二二六 一六八、二二二 二五八、二九七 三四〇
野村彦太郎	鶴の蕃殖地(殖民雜誌第四號四五頁ヨリ)	(雜)	一四七六
野村彦太郎	鶴と龜に就て	(同)	二四三

丹羽 甲子郎	<i>Parus orientalis</i> (L.) (雜)	四二七
同	<i>Monticola cyanus sibirica</i> (Mull.) (同)	四二七
同	<i>Cinurus pallasi</i> (L.) (同)	四二七
同	ナベコウ (同)	四七三
同	烏鶺 (同)	四一三
渡邊 盈作	羌鶺とナジロツシ (同)	四一一
丹羽 甲子郎	雪後の鳥【静岡縣下の鳥類】 (同)	四一四
同	北海道よりの鳥便り【ヤツガシラと	四二〇三
同	ハミジロ】 (同)	四二一八
高松 榮太郎	大阪府能勢郡根根莊採集日記【鳥類に關するもの】 (論)	四二四八
同	大阪市民の供膳動物【鳥類】 (雜)	四二九三
同	北海道の鳥便り (同)	四三七一
飯 島 魁	御嶽の動物【鳥類あり】 (論)	四四四一
野澤 俊次郎	日本の雁鴨(板嘴類) (論)	四四六九
同	北海道と南日本と動物の差異【鳥類あり】 (同)	八、四五
長濱 兼吉	本邦保護鳥類【六卷の終り参照】(同)	一三七、四一〇
黒 岩 恒	球陽雜譚【鳥類の方言】 (同)	五四四
八田 三郎	明治廿五年西海の動物【水鳥の一種】 (雜)	五七六
同	警察官と鳥類 (同)	五一五三
箕作 佳吉	動物防禦攻撃之手段【鳥類含む】(論)	五一七、二一五

石川 一男	鳥類の卵(動物叢話) (雜)	五一九〇
三本 貞守	一口物語【エビチーニス卵、鳥の體温、鳥の羽搏等】 (同)	五二〇二
服部 捨太郎	肥前ガラス (同)	五三一八
飯 島 魁	ヤマガラの新種に就て【英文】 (論)	五四四五
同	小笠原島産ガラスバト一種に就きて【英文】 (同)	六二四
同	イハミセキレイに就て【英文】【小笠原島】 (同)	六二六
同	鳥と蟲との關係一實例 (雜)	六七五
S. I. カラス	鳥類の数【一二五〇〇種】 (同)	六七八
酒井 寅造	相馬地方動物實驗雜記【鳥類の記事あり】 (論)	六一三八
同	同上(雀も亦た保護鳥類の一ならん乎) (同)	六一五七
同	同上(桑の芽食蟲と四十雀) (同)	六二六〇
松村 松年	厚田採集記【北海道なり、鳥五種あり】 (同)	七三〇七
同	同上(桑の芽食蟲と四十雀) (同)	六一六三
渡邊 盈作	雉の變種? (雜)	六一九二
弘田 貞守	小笠原島(後篇)【鳥類九種の記事あり】【前編には鳥なし】 (論)	六一九二
同	鷄仔羊膜及外膜間の結合及胚膜(雜)	六二二三
野澤 俊次郎	千島の動物【鳥類あり】 (論)	六二六七
同	同上(鷄仔羊膜及外膜間の結合及胚膜) (論)	六二八四

著者	表題	巻數	頁數
名和 靖	ヤマカラスの鳴聲	六三〇八	
弘田 貞守	南島雜十件(小笠原島の鷺)	六三八一	
同	同(三意外)【信天翁のこと】	六三八二	
同	同(鳥と目白)	六三八二	
弘田 貞守	廣く諸君の教授を仰ぐ【静岡の鳥類のこと】	六四三四	
中村 正雄	鷄仔發育中鷄卵の重量の變化(論)	六四四五	
ナ、モ、	コクマロガラスに就て	七四六	
小倉 孝治	丹羽氏の質問に就て【鳥類に關するもの】	七六七	
矢澤 米三郎	銃獵一斑【筑前志賀島附近ならん】	七二二	
波江 元吉	イロツバメ及カハガラス	七一六七	
小川 三紀	帝國新領地臺灣動物彙報【鳥類】(同)	七二七一	
ス、ツ、	静岡地方鳥類一斑	七三一七	
た、う、	臺灣動物彙報(第二回)臺灣南部の鳥類	七三六五	
S. O. 生	飛翔せる鳥の足の位置	八三一	
な、も、	鷄卵と酒精(Ford氏)	八三七	
酒井 寅造	疲勞に斃れたる動物肉【鷄肉】	八五二	
同	銃獵家に望む【鳥の飛翔と脚】	八七〇	
同	相馬通信【四十雀・田雲雀其他】(同)	八一三三	

著者	表題	巻數	頁數
酒井 寅造	五十年間に於ける動物の種類を増數【鳥類】	八一三五	
和多 生	北相馬郡内鳥類一斑	八二一一	
丹羽 生	山口萩通信(第三鳥類)	八二一六	
名和 靖	伊豆通信【鳥類に就て】	八三四、二五二	
澁江 富貴三	害虫と燕との關係に就て	八二四八	
小川 三紀	雞足の局處解剖に就て	八二六九	
同	静岡の鳥類目錄	八三〇三	
飯鳥 魁	概説	八三五九、四一三、四五三	
和鳥啓蒙	壁鷗目、善潜目	九一	
同	鷗目(海雀族)	九七七	
同	同(鷗族)	九一二一	
同	同(同)	九一六九	
同	同(同)	九二一三	
同	雁鴨目(雁亞族)	九三八六	
同	同(同)	九四二五	
同	雁鴨目(雁亞族)	一〇九	
同	同(鴻亞族)	一〇四六	
同	同(鴨亞族)	一〇一六三	
同	同(同上等)	八三九四	
多田 綱輔	カモメの蕃殖場【八戸鮫港】	八三九四	
同	臺灣通信(其三)【鷺其他】	九二六	
同	臺灣通信(其三)【鴉・アカハラ】(同)	九六八	

同	同	同 (其四)【澎湖島の鳥】 (同)	九 九三
同	同	同 (其五)【東嶼坪・猫島の鳥】 (同)	九 一九〇
廣瀬 渡	利尻山見聞一二【鳥あり】 (札幌博物學會記事)	現生動物の種類【鳥類】 (雜)	九 七一
小寺 甲子二	鳥類雜誌 (札幌博物學會記事)	動物の夜間保護色に就きて (A.H. Verhulst氏)【鳥類あり】 (同)	九 七三
ふ、つ	白雉を得！【大分郡八幡村】 (同)	天鹽産ユキホ、ジロ (札幌博物學會記事)	九 七五
A. I. 生	キユーリル島のウミバト類の新種 (スタインゲル氏)	無害剥製用藥 (同)	九 一〇一
小寺 甲子二	紅頭鰐探検記【鳥類あり】	雷鳥の食物 (雜)	九 一一六
土 田	雷鳥の肉 (同)	鳥類移住取調べに付會員諸君の協力 を乞ふ (同)	九 一六六
多田 綱輔	三重縣局部の動物分布調査に就て	【鳥類】	九 二四七
市村 塘	ハトの話	臺東探検記【鳥類あり】 (論)	九 二五五
同			九 二六八、三二六
ふ、い、			九 三六〇
丹羽 甲子郎			九 三六〇
多田 綱輔			九 四〇四
			九 四三二、四六五
			九 四四七
			九 四六二

丹羽 甲子郎	鳥記【伊豆地方其他】 (雜)	九 四七四
球 黒	球陽雜俎【鳥類あり】 (同)	九 四七九
オーストン	アマツバメ (同)	九 二八
受 験	鳥蛙の進化 (同)	一〇 二六
會 田	毛と羽 (一一二) (同)	一〇 一九三
多田 綱輔	鳥類の血液の凝固 (同)	一〇 二二九、二五七
	臺灣採集動物 (鳥類の部) (論)	一〇 二三五
	津輕海峡【鳥類に關するもの】 (雜)	一〇 三六九、四四三、 一一 一七六
	鳥類の背と腹の色 (同)	一一 一一四
	獨逸國中等動物學教科書の一例【鳥類】 (同)	一一 一五〇
	上野動物園の近況 (同)	一一 二二二
岸上 鎌吉	歐米巡迴談 (東京動物學會記事)【雷鳥の雜種】 (同)	一一 二二四
	鳥類の體重と腦重との割合 (同)	一一 二二七
飯島 魁	臺灣巡迴談【鳥類の記事あり】 (同)	一一 二五四
飯塚 啓	卵中の卵【旅行雜記】 (同)	一一 三二六
同	卵中の卵 (論)	一一 三四一
や つ	鶏卵の殻膜内面の扁平細胞 (雜)	一一 三一
中川 久和	猯りに外國より鳥獸を輸入するは危険なり (同)	一一 三二
	不具鳥 (鳩)の卵巢の構造 (同)	一一 七〇、一〇六
		一一 一一〇

著者	表題	卷數	頁數
小川三紀	静岡地方に於けるキジに就て(論) 日本動物に關する近時の論文【鳥類あり】(雜)	一一一 一三八、三〇二	一一一 一三八、三〇二
小川三紀	雀の産卵期に於ける氣温並に其卵量に就て(論)	一一一	一一一
新國豊七	會津平原の西側山麓に添へる地方の鳥類の移住(同)	一一二	一一二〇
大上宇一	播磨室港採品【鳥類少數あり】(雜)	一一二	二六五
村田莊次郎	北海道鳥類一斑(論)	一一三 一一四 一一五	二六七、三六五 九二、三二二 四〇三
丘淺次郎	動物の和名【鳥類を含む】(雜)	一一三	二九九
波江元吉	ヤイロツグミ英彦山に来る(同)	一一三	三三六
小川三紀	鳥界雜觀(一一四)(同)	一一三 一一四 一一五	四〇九 二六、二六 三八、四
同	夏月富士山の鳥(同)	一一三	四一二
同	日光足尾地方に於ける秋季の鳥類(論)	一一三	四三六
	日本鳥【マミジロ、トラツグ】【クロツグ、ハツグミ、ハチジャウツグ】【アカハラ、カラアカハラ】【シロハラ、マミチヤゲナイ、アカコツコ】【アカヒゲ、コマドリ】(圖版)	一一三	第一—五版

著者	表題	卷數	頁數
新國豊七	會津局部鳥類の去來(一一三)(雜)	一一三	二七
丹羽甲子郎	アチサギ(鳥類研究の遊獵)(論)	一一三	一五三
小川三紀	ツメナガセキレイ【新稱】(同)	一一三	七四
林壽祐	動物の防禦法に就て【鳥類あり】(同)	一一三	九〇
谷津直秀	動物界に於ける防禦の方法【キユエ—氏講、鳥類あり】(同)	一一三	九四
H. B.	哺乳類鳥類其他脊椎動物中膽囊を有せざる動物の名稱(質)	一一三	一〇三
丹羽甲子郎	鳥類研究の遊獵(第二)(ダイシヤクシギ)(論)	一一三	一一九
小川弘太郎	ツメナガセキレイ【府下南足立郡江北村大字鹿濱】(雜)	一一三	二〇六、二七四
	北村大字鹿濱(雜)	一一三	二一四
	鶏の畸形(同)	一一三	二四二
	アカツクシガモ【理科大學所藏標本】(同)	一一三	二四三
	鳥の羽色(讀書餘香)(同)	一一三	二四五
	雨量と鳥色(讀書餘香)(同)	一一三	三〇五
吉原重康	小笠原島の動物【鳥類あり】(論)	一一三	三〇五
小山内孝九郎	雉の話(仙臺博物學會記事)(雜)	一一三	三二〇
	日本鳥類圖版【シマゴマ、ノゴマ、コルリ】【カハガラス、カヤクグリ、イソヒヨ、イワヒバリ】【ノビタキ、ジヤウビタ	一一三	四二二
		一一三	第六—九版

林 壽祐	動物雜觀	第一	一 アチバヅク	一四	一七	酒井 寅造	安達太郎山磐梯山紀行(仙臺博物學會記事)【鳥類六種あり】	一五	三五
		第二	二 ヒクヒナ	一四	二〇	林 壽祐	雌の説	一五	四八
			三 鶉	一四	一八〇	同	東京に於ける野雉	一五	五二
			四 メジロ	一四	一八五	同	鶉雌の説	一五	八三
			五 鶉	一四	一八七	新國 豊七	鳥卵採集報告【會津】	一五	八四
			六 雀	一四	三七四	大上 宇一	播摩産鳥類雜記	一五	八八
			七 鶉	一四	四一四	た、か 生	水鳥の卵の發育に於ける温度の影響(諸研究瞥見)	一五	九七
			八 鶉	一五	一一二	同	鳥類の卵に於ける擬染色體(同上)	一五	九七
			九 アカツバラ	一五	一一三	同	半規管の障害(同上)【ハト】	一五	九九
			十 コノハヅク	一五	二八六	同	鳩の説	一五	一一〇
渡瀬 庄三郎	西川君の通信【濠洲の鳥】			一四	三二	林 壽祐	雀のマラリア寄生蟲(Halteridium)に就て	一五	一一一
	谷津君よりの近信【鳥二三あり】			一四	一一五	宮島 幹之助	鳥の移住と風の關係(Towbridge氏)	一五	二四九
	陸生動物の分布(東京動物學會記事)			一四	一一六	林 壽祐	鳥と蛇	一五	一六七
	【鳥類あり】			一四	二二三	須本 次生	静岡地方に於ける秧鶉の産卵と其季節に於ける氣象との關係	一五	二六九
小倉 孝治	鳥類の飛翔する高さに就て			一四	二二三	小川 三紀	伊豆半島東方面局部の鳥界視察(雜)	一五	二八九
小川 三紀	富士山麓の鳥界(一一二)			一四	二六七、三三三	同	八丈島よりの鳥便り(第一報—第三報)	一五	四一四
西川 藤吉	濠洲旅行談【鳥類あり】			一四	二八八、四〇七	同		一七	七八
や、つ、	イギリスのロビンとアメリカのロビン(動物雜記)			一四	三〇三	同		一七	七八
小倉 孝治	鳥翼の爪			一四	三四八	同		一七	七八
小川 三紀	東京に於ける九月の鳥界			一四	三七八	同		一七	七八
た、か、生	家鶉の産卵に於ける食物の影響(動物學研究拾集)			一四	四四三	同		一七	七八

著者	表題	卷数	頁数
同	駿河地方鳥類一斑 (論)	【五】四四九 【六】二〇三、二八五	
高倉	占守島の鳥信 (雜)	一五四六七	
飯塚啓	駝鳥の習性 (同)	一六三五	
飯塚啓	鳥卵中の砒石 (同)	一六三八	
林壽祐	鷓の乾物 (同)	一六七九	
同	上總長生地方の鳥類(一一二) (同)	一六一〇五、一九五	
飯島魁	鷺及雉・鶺鴒類に關する話(東京動物學會記事) (同)	一六一六〇	
市村塘	鷓卵内の砒素 (同)	一六一九八	
同	暗處に於て物を視る眼【鳥類の記事あり】 (同)	一六二六四	
同	鷓卵の新陳鑑定法 (同)	一六四二二	
小川三紀	静岡及濱松地方よりの鳥便り (同)	一六四七〇	
同	金澤よりの鳥便り (同)	一六四七〇	
同	ヨコフリセキレイ【圖入】 (論)	一七一	
同	地方よりの鳥便り【静岡、岡山、鳥根埼玉、福岡各縣下】 (雜)	一七一八	
同	富士山麓東南方面に於ける夏期の鳥界視察 (論)	一七五一	
倉賀野晋	鳥構に就て (雜)	一七六六	
小川三紀	南洋にて採集せられたる日本の鳥(論) (雜)	一七七三	
同	駿河及遠州よりの鳥便り (雜)	一七八六	

著者	表題	卷数	頁数
飯島魁	瑠璃椋鳥の記(第六版) (論)	一七一四三	
妹尾秀實	鷓卵中のゲストマに就て (同)	一七一四六	
田子勝彌	四國採集旅行日記【鳥類】 (同)	一七一六三	
入江彌太郎	龍ヶ崎地方の鳥類に就て【茨城縣稻敷郡】 (雜)	一七一九五	
小川三紀	東京市内及附近に於ける鳥類の産卵數例 (同)	一七二一七	
波江元吉	南鳥島産動物(ブライアン氏)【鳥類十八種】 (同)	一七二一八	
小川三紀	日光山麓西北方面に於ける夏期の鳥界視察(一一二) (同)	一七二五〇、二六八	
同	岸上博士よりの來信【コルサコフ附近の鳥】 (同)	一七三〇〇	
岩川友太郎	鳩の解剖 (附録)	一七五二頁あり	
	<i>Tarullus tidhi</i> Bp. (原色圖版) (同上)	一七第六版	
	<i>Picus urs'oni</i> , n. sp. (同上) (同上)	一七第八版	
	<i>Nannocnus yimuti</i> , n. sp. (同上) (同上)	一七第九版	
	清國西安府より長聖道氏の音信【鳥類】 (雜)	一七八八	
小川三紀	琉球ヨシゴイとオーストンゲラ(論) (雜)	一七八九	
西川	雌雄優劣論【鳥類】 (雜)	一八九六	
小川三紀	明治廿九年一月中に静岡附近にて捕 (雜)	一八一〇三	

同	はれたる鳥類	(同)	一九一二五
同	臺灣綿花鳥にて獲る數種の鳥類	(論)	一九一五七
同	静岡縣にて得たる珍鳥二種【コホ、アカとハイイロウミツバメ】	(同)	一九一七二
松島 克生	第一報	(雜)	一九一七一
	羽前米澤よ	(同)	一九二二二
	りの鳥便り	(同)	一九三三二
	第十報—第十三報	(同)	一九三三一
小倉 孝治	廣東蘇州産蝶蛾類及鳥類	(同)	一九三三八
安田 篤	仙臺附近の鳥類	(同)	一九三三八
や	鶏の胚(動物研究法雜誌)	(同)	一九三三八
	谷津氏歐洲通信【鳥類に關するもの】	(同)	一九三三、七五
飯島 魁	樺太の鳥類に就て(東京動物學會記事)	(同)	一九三六
波江 元吉	一、綠色啄木鳥	(同)	一九一〇五
	二、松鴉	(同)	一九一三二
	三、南濱鳥類	(同)	一九一三三
吉田 貞雄	冬期毛髮羽毛の白變につき	(同)	一九一一一
や	ニューヨーク學士會の陳列【鳥類】	(同)	一九一二七
	ウツトリの害	(同)	一九一五四
横川 四十八	鳥類の移住(仙臺博物館會記事)	(同)	二〇二二
安蘇 善四郎	鷹の話(同上)	(同)	二〇五六
市村 塘	諸動物の心臟重量【鳥類】	(形)	二〇八四

谷津 直秀	鳥の卵の一實驗	(雜)	二〇一二八
八木 貞助	キジとヤマドリとの雜種に就て(同)	(同)	二〇一五四
同	鳥類は何故に皆卵生なるか	(質)	二〇一八〇
同	鶏は卵を一日に一つより多く産まざるか	(質)	二〇一八〇
飯塚 啓	鶏の産卵に就て	(生)	二〇二二一
	魚類、兩棲類、爬虫類、鳥類等の骨	(質)	二〇二二五
	格標本の製法	(質)	二〇二六六
渡瀬 庄三郎	英國畜産の宮【家禽あり】	(應)	二〇三八九
谷津 直秀	現存の鳥の翼の爪	(解)	二〇三九〇
同	鶏の卵黄の成長及黄白の卵黄の意味	(發)	二〇三九二
吉田 貞雄	鳥類の食物	(生)	二〇四〇三
	去勢家鶏の交尾につき	(質)	二〇四二八
吉田 貞雄	鳩の氣囊	(形)	二〇四四八
谷津 直秀	北海道の鳥學	(雜)	二〇四九六
田中 茂穂	鳥類漂游の試験	(同)	二〇五三八
谷津 直秀	鳥の羽色と氣候との關係	(生)	二〇五五〇
中澤 毅一	人工的の赤卵と赤雛	(質)	二〇五六四
岸上 兼吉	ロシヤ旅行談【二三の鳥談あり】(東京動物學會記事)	(會)	二〇五六四
川村 多實二	故醫學士小川三紀君小傳	(傳)	二〇三三四
	鶏の發生に於ける體節生成の順序	(質)	二〇三三四

著者	表題	卷數	頁數
同	鶏の發生に於ける血液血管の生成 (同)	二	三五
波江 元吉	アカツクシガモ(黃鴨)【熊本縣】(地) ヤツガシラ(戴勝) (同)	二	四二
同	アメリカヒドリ (同)	二	四二
黒田 長禮	韓國鳥便り (同)	二	一四五
入江 彌太郎	柄を有する鶏卵 (同)	二	二七二
深井 武司	中武地方の鳥類 (生)	三	二四
寺崎 留吉	脇山三彌氏の通信【鳥類】 鶏胚のプリミチーブストリークに就 ての研究 (論)	三	三七、五八六
八田 三郎	動物分布上北海道の位置【鳥類あり】 (同)	三	八六
桑野 久任	北京に於て日常生活に關係ある動物 【鳥類あり】 (同)	三	一三〇
吉田 貞雄	異常鶏胚の二例 (同)	三	一三七
内田 清之助	數種の樺太産鳥類に就て (同)	三	二五六
秋山 重美	ミツユビカモメ (同)	三	二八六
谷津 直秀	響尾蛇の音を擬するフクロオ (雜)	三	三〇九
桑野 久任	北京の鳥類に就て【東京動物學會記 事】 (同)	三	三二二
五島 清太郎	動物の種の數【鳥類一一〇〇種】 (同)	三	三八九

著者	表題	卷數	頁數
内田 清之助	鳥獸義眼の成功 初めて本邦にて獲たる二種の鳥類 附日本産鸞類 (論)	三	五二四
同	北米合衆國狩獵法の一般 (同)	三	五二七
石橋 榮達	種々の動物の腦の重さ【鳥類あり】 (雜)	三	五四四
大島 廣	「エトピリカ」二萬餘疋 (同)	三	四三
藤木 好三郎	鳥の古巢中に多數の守宮の棲息せる 事に就て (同)	三	一〇二
内田 清之助	誤られたるハチクマ (論)	三	一六六
大島 廣	卵中の卵(パーカー氏) (抄)	三	一七六
内田 清之助	日本産鸞類索引表 (論)	三	二〇五
ビービー	東洋及び南洋印度地方にて撮影の寫 眞(東京動物學會記事) (雜)	三	二四三
内田 清之助	硫黃島産鳥類數種に就て (論)	三	三五八
谷津 直秀	動物園の動物の數【鳥類あり】 (雜)	三	三五五
梶山 英二	鳥類及若干の魚類の赤血球の形に就 て(ウエンツラフ氏) (抄)	三	五八九
内田 清之助	四國産ナミエゲラの一標本に就て附 四國産鳥類目錄 (論)	三	七〇八
黒田 長禮	珍らしき一種の鴨 (雜)	二	一四
飯塚 啓	沙鷄の新産地 (同)	二	一五五

R	極樂鳥の値段	二四	一〇六
R	蛇鳥の耐寒力	二四	一〇六
B	鳥類脾臓の大きさ	二四	一八三
R	「カリフォルニア・コンドル」の漸滅	二四	一八四
R	兀鷲の食物	二四	一八四
S	鶴・鴨・鳧	二四	一八六
R	雪中の孔雀	二四	二五一
S	鳥と煙突と	二四	三六八
T	骨の異名【鳥類あり】	二四	四二四
T	「グレート・オーク」	二四	四二五
谷津	鳥體の力學	二四	五四三
忙中	徳川光圀公の生物移入(閑人雜鈔)	二四	一一一
波江	【鳥類あり】 小海雀	二四	一七四
脇山	旅順の鷓鴣	二四	一七五
谷津	チンドリの雌雄の羽毛	二四	一八一
永澤	紐育動物園(口繪附)	二四	二一一
梶山	鷄の卵巢の移植(ダヴェンポート氏)	二四	二三〇
谷津	ストラスブルグの鳩	二四	二四一
石川	家禽人工學尾術	二四	二四一
内田	千鳥産鳥類目錄	二四	二七〇
谷津	鳩の卵の雌雄(リッツル氏)	二四	三五二
波江	沖繩及奄美大島の採集鳥類	二四	四一一

内田	清之助	鳥類雜記【イスカの變種・マミジロキビタキ】	(同)	二四	四一六
朴澤	三二	家鷄の輸卵管に關する新説(パール氏)	(抄)	二四	四五八
黒田	長禮	セグロゴキに就て	(雜)	二四	四六七
高橋	堅	脊椎動物の行爲に關する最近研究	(雜)	二四	五〇三、五六九、六三三
川村	多實二	【鳥類あり】 鳥の飛行法	(講)	二四	五三八
波江	元吉	沖繩群島を通過する鷹類は果して何種なるや	(雜)	二四	五九五
内田	清之助	臺灣産鳥類目錄追加	(同)	二四	五九六
同		鳥學に用ひらるゝ諸術語(日本鳥學會撰定)	(講)	二四	六二四
谷津	直秀	現今の脊椎動物の種の數【鳥類二〇〇〇種】	(雜)	二四	六四五
黒田	長禮	鳥類の方言	(同)	二四	六五一
同		硫黄島にて新に獲たる數種の鳥類	(論)	二四	六六五
平坂	恭介	「ペリカン」の古郷(口繪附)	(口繪解説)	二四	第百八十三號
永澤	六郎	「ペンギン」の羽衣脱更(口繪附)	(同)	二四	第百八十六號
内田	清之助	ジョン・ジエームス・オーザユホン(口繪附)	(同)	二四	第百八十七號

著者	表題	卷數	頁數
石橋 榮達	脊椎動物の大脳下垂體【鳥類あり】 (チイルネー氏)	二五	二九
黒田 長禮	「カルカリウス・ラボニクス」の新産地 自然界に於ける矛盾の一例(ハツクスレー氏)【マカモのこと】 朝鮮のトキ	二五	一〇一
永澤 六郎	鳥の一年(西村醉夢氏著)	二五	一一三
下郡山 誠一	滿洲の雁	二五	一二二
永澤 六郎	鳩雪中に羽蟲を驅除する歟	二五	一七五
脇山 三彌	ハチクマの幼鳥【實はハチクマの黒變型の幼鳥】	二五	一七八
波江 元吉	紫外線と動物の眼(高嶺・武居兩氏)	二五	一八三
黒田 長禮	【鳥類あり】 學名先取權制限問題【鳥類あり】 メシロと梅の花粉	二五	二一四
大島 廣	南滿洲の日本人は沙鷄を鷓鴣と呼び居るが右は不當なりや 鷓鴣に關する質問【此表題は略記なり】	二五	二二八
永澤 六郎	南米展覧會を観る【鳥類あり】	二五	二四二
鈴木 寅之助	本邦産ヒシクヒ屬に就て	二五	二四二
永澤 六郎		二五	二四二
谷津 直秀		二五	二四二
黒田 長禮		二五	二四二

著者	表題	卷數	頁數
同	讃岐及び大和地方採集の鳥類(論)	二五	三二九
川口 孫治郎	杜鵑に關する研究	二五	三四一
黒田 長禮	羽田産カハツに就て【ウミウ】 紅外線と鳥の歸來性 死體搜索に鶏 立法者の所謂先見【パツセンジャー・ヒジヨン】 大極樂鳥の運命	二五	三四七
R	雜聞雜記 羽毛輸入制限法案 死體搜索に鶏續報 鶏とスベクトル 鳥が隠亡	二五	三五七
大島 廣	動物の色彩と色感(フリツシュエ氏)	二五	四二六
朴澤 三二	【鳥類あり】 筋肉の興奮傳搬(ホッフマン氏)【鳥類あり】	二五	四二七
黒田 長禮	オホチドリとハイイロアジサシ(雜)	二五	四二七
鳥羽 源藏	臺灣に於ける鷺の飼養(口繪附)(同)	二五	四二七
永澤 六郎	日本鳥類圖說上卷(内田氏)(新)	二五	四二七
内田 清之助	臺灣産鳥類追加	二五	四二七
黒田 長禮	羽田村に渡來せるブンテワの群【東京府荏原郡】	二五	四二七
榎本 佳樹	德島地方にて採集の鳥類	二五	四二七
内田 清之助	世界の雁鵝類(黒田著)	二五	四二七

黒田 長禮	旅順附近産鳥類數種に就て (論)	二六 一
同	ホトトギス類の蕃殖法 (雜)	二六 三五
坂本 住樹	南滿洲産鳥類の一部(第一—第二) (論)	二六 四〇、九四
黒田 長禮	北見産鳥類數種に就て (論)	二六 六二
飯塚 啓	朝鮮産のオホヒシクヒ (雜)	二六 八二
鷹司 信輔	ミカドキヅに就て (同)	二六 九一
飯塚 啓	朝鮮のカサ、ギと其巢(圖版附)(論) (論)	二六 一〇五
桑 鷹 生	素人の鳥日記(第一—第四) (雜)	二六 一四三、三六〇、 四二四、四六七
飯塚 啓	朝鮮産鳥類目錄 (論)	二六 一七五
下郡山誠一 鷹司 信輔 黒田 長禮	雄類の種雜交に關する二三の現象 (抄)	二六 二〇三
黒田 長禮	旅順附近産鳥類追加 (雜)	二六 二一六
鷹司 信輔	家鷄の精蟲發生中に現はるる餘分の 染色體(ボーリソング氏) (抄)	二六 二五八
N. S. 生	鴨と蚊と(話の種其一) (雜)	二六 二八四
同	米國加州の油田と鳥(話の種二)(同) (同)	二六 五二六
同	傳書鳩 (同)	二六 五六七、五六八
黒田 長禮	筑前にて獲たる珍らしき鳥類並に筑 前産鳥類目錄 (論)	二六 三一二
同	再びホトトギス類の蕃殖法に就て (雜)	二六 三三三
八田 三郎	北海道の疑問を伯林で晴す【マガモ (雜)	二六 四一〇

黒田 長禮	の【こと】 エナガの巢と卵 (同)	二六 四一八
同	本邦及び歐洲産ワヅラ類の比較研究 (論)	二六 四三五
同	アチバツクの幼鳥と其習性 (雜)	二六 四八五
仁部 富之助	一、ホトトギスの雛の奇 習に就て (雜)	二六 四八九
同	二、セウビンの巢の位置 (位置)	二六 四九一
同	三、コカハラヒワの哺育 奇習 (同)	二六 四九二
黒田 長禮	羽田村にて獲たる鴨の雜種 (同)	二六 五一七
同	伊賀にて獲られし白頭の雉 (同)	二六 五二四
藤田 輔世	シヤバに於ける雨燕の養殖 (同)	二六 五五三
鷹司 信輔	七面鳥と吐綬鷄 (同)	二六 五五七
黒田 長禮	再びエナガの巢に就て (同)	二六 五五九
仁部 富之助	ヨシゴキの飼養觀察 (同)	二六 五六二
山田 信一郎	鴨に挿げたる記念碑(口繪附) (口繪解説)	二六 第三百十一號
内田 清之助	杜鵑類の卵と胚鵞(同上) (同上)	二六 第三百十三號
仁部 富之助	二三鳥類に於ける上、オホヨシキリ の習性の觀察並に其巢及卵に於ける 變異の研究 (論)	二七 八
黒田 長禮	羽衣脱更と羽及鱗の關係(ホルンシ タイン氏) (抄)	二七 二二三

著者	表題	卷數	頁數
榎本佳樹	徳島地方の鳥類日録(追加)	二七	三〇
鷹司信輔	朝鮮産鳥類目録増訂	二七	三五
	四、軍用傳書鳩	二七	三九
	五、鶏の視先(ビービー氏)	二七	一〇一
	五、軍用傳書鳩の利用(同)	二七	一〇一
	五、野鳥羽毛輸入禁止(同)	二七	一〇三
	五、野鳥獸保護	二七	一〇三
	五、大極樂鳥の保護(同)	二七	一〇三
	五、「キウイ」の卵の重さ	二七	一〇四
	六、羽軸の構造(ウエツア氏)	二七	一六六
	六、白鷺の飼養	二七	一六九
	六、鳩の大群作物を荒す	二七	一六九
	六、米國に於けるムクドリ	二七	一六九
	の繁殖	二七	一六九
	八、英國の鳥類保護(同)	二七	二九六
	九、雄鳥の羽雌鳥の羽に變ず	二七	三五九
	十、雄遠距離の海戦を知る	二七	四一五
	(同)		

著者	表題	卷數	頁數
黒田長禮	旅順附近産鳥類目録追加	二七	九四
同	シノリガモとケイマフリの新産地	二七	九八
某	ナシドリに充つべき漢字は鶯鶯・濤	二七	二二九
永澤六郎	何れを用ふるが當れるか	二七	二二九
鈴木寅之助	大多喜に於ける燕の移住期	二七	二九〇
黒田長禮	第一回採集新占領南洋諸島産鳥類	二七	三二五
	(論)		
	十、害蟲驅除と鳥類(同)	二七	四一六
	十、クインスランド鸚鵡の絶滅	二七	四一六
	(同)		
	十一、雄及鸚鵡の微音感受	二七	四六八
	(同)		
	十一、飼鳥の放養	二七	四六八
	(同)		
	十三、米國鳥類分布變化	二七	五六一
	(リツヂウエー氏)		
	十三、極樂鳥の保護(同)	二七	五六一
	十三、加奈陀の羽毛輸入禁止	二七	五六一
	(同)		
	十三、輪水湖の水禽斃死	二七	五六二
	(同)		
	十三、米國に輸入せらるる飼鳥數	二七	五六三
	(同)		

同	第二回採集新占領南洋諸島產鳥類	(同)	二七	三八九
鷹司 信輔	眞鴨に於ける羽色と睾丸との季節的變化 セリグマン氏)	(抄)	二七	三四五
永澤 六郎	鴨とマラリヤ	(雜)	二七	三五七
永澤 六郎	羽田鴨場に於ける統計(黒田)	(抄)	二七	四〇四
川口 孫治郎	寄托育性ホトトギスの研究	(論)	二七	五三五
八田 三郎	戦争と候鳥とに關する奇現象(伯林動物學會近況二三)	(雜)	二七	五五七
黒田 長禮	二種の鳥類の新分布地	(同)	二七	五九九
永澤 六郎	日本産鳥類の二新亞種(リレー氏)	(抄)	二七	六三四
谷津 直秀	輸卵管にて發生する鳥卵	(雜)	二七	六四六
永澤 六郎	郭公の蕃殖に關する研究(仁部氏著)	(抄)	二六	三三
同	カラスの水浴(仁部氏)	(同)	二六	三四
同	南洋産鳥類の二新亞種(黒田)	(同)	二六	三四
仁部 富之助	異常なる雀の巢	(雜)	二六	四四
同	ヨソゴキの藪中産卵	(同)	二六	四七
黒田 長禮	南洋諸島採集鳥類追加	(論)	二六	六八
同	鴨類雜記【ツクシガモとチナガガモの變種】	(雜)	二六	八四
永澤 六郎	鷺と子と	(同)	二六	一一〇
谷津 直秀	カハセミ、犀鳥、雌羽を有する雄鷄	(同)	二六	一一〇

田中 茂穂	佛法僧か	(片々録)(同)	二六	一一一
南 北 生	倫敦動物園飼養動物數並に死亡率	(同)	二六	一一一
同	【鳥類あり】	(同)	二六	一六一
飯塚 啓	鶴殺し死刑の一例	(同)	二六	一六一
黒田 長禮	臺灣産ペリカンの一種	(同)	二六	一八二
黒田 長禮	朝鮮産のガランテウ	(同)	二六	一八九
谷津 直秀	九官鳥、鸚鵡(第三片々録)	(同)	二六	一九〇
山鳥 吉五郎	雀の智慧(野外觀察數則)	(同)	二六	二四〇
南 北 生	Structure of Povi	(同)	二六	二四四
黒田 長禮	臺灣産鳥類の珍種並に一新種	(論)	二六	二五九
永澤 六郎	雲南産鳥類目錄(内田氏及び黒田)	(抄)	二六	二七〇
大道 金松	人に馴れたる小笠原島の鶯	(雜)	二六	二七七
山鳥 吉五郎	四本脚の鶏	(同)	二六	二七九
永澤 六郎	杜鵑研究(川口氏著)	(新)	二六	二八一
大鳥 正滿	臺北博物館所藏鳥類標本目錄	(論)	二六	二八三
黒田 長禮	四十雀の蕃殖經過	(雜)	二六	三七一
川口 孫治郎	カモノハシと鳥との系統的關係(同)	(同)	二六	四〇九
谷津 直秀	水禽五種の新産地【アメリカカゴガモ、コガモ、ツクシガモ、ミズナギドリ、ハリモ、チウシヤク】	(同)	二六	四一三
同	オホハムかシロエリオホハムか(同)	(同)	二六	四一八
同	ミカドキシの新産地	(同)	二六	四七六

著者	表題	卷數	頁數
川口孫治郎	ホ、ジロの晩期蕃殖例 (同)	二六	四七七
佐藤忠助	アカエリヒレアシシギと鯨の漁期と (同)	二六	四八二
黒田長禮	夏季のウミアイサ (同)	二六	四八三
同	珍鳥チガハコマドリ (同)	二六	五〇八
同	白鳥(第七片々録) (同)	二六	五一六
谷津直秀	ペリカン(同) (同)	二六	五一六
川口孫治郎	キツバトの晩期蕃殖例 (同)	二六	五一九
永澤六郎	臺灣島の鳥界(黒田著) (新)	二九	五一二
同	鴨類の體温(黒田) (抄)	二九	一八
同	數種の鳥卵の孵化日數(黒田) (同)	二九	一八
同	雷鳥の養飼(内田氏) (同)	二九	一九
川口孫治郎	ウソの習性及ウソとアカウソと(雜) (同)	二九	二一
同	尾長鶏の起源と種類 (同)	二九	二五
南北生	尾長鶏の尾の長さの記録 (同)	二九	二五
同	ホトトギス一種の食餌(ブライアント氏) (抄)	二九	四七
木下周太	キツの同性群集 (雜)	二九	五一
川口孫治郎	駝鳥の卵 (同)	二九	五三
谷津直秀	猛禽の餌食み方 (同)	二九	五三
川口孫治郎	珍味の數々【食巢燕・孔雀其他】(同)	二九	五四
永澤六郎	本州及九州に於ける鶴の渡來地(口繪第三版附) (口繪解説)	二九	前一五頁
内田清之助			第三四十一號

著者	表題	卷數	頁數
黒田長禮	朝鮮にて初めて獲られし二種の鳥類【ヒゲワシとチゲロヅル】(雜)	二九	九五
川口孫治郎	イカルチドリ雌雄 (同)	二九	九七
柳原要二	高麗雄美濃に發見せらる (同)	二九	九九
川口孫治郎	鳥と光【旅順白玉山表忠塔に關するもの】(同)	二九	九九
同	ホシガラスの雌雄 (同)	二九	一二四
脇山三彌	旅順の鶉 (同)	二九	一五四
川口孫治郎	カハガラスの初期の蕃殖 (同)	二九	一五四
同	モズの蕃殖 (同)	二九	一七八
脇山三彌	狩獵と支那服 (同)	二九	一八二
同	盲人に鳥の聲 (同)	二九	一八三
谷津直秀	埼玉縣下にて獲られたる海鳥【アカチネツタイテウ、シロアジサシ、コアジサシ】(同)	二九	一八七
脇山徳太郎			
錫木外岐雄	トンキン産の鳥(黒田) (抄)	二九	二四六
同	臺灣産の鳥(黒田) (同)	二九	二四六
仁部富之助	農作物の鳥害三例 (雜)	二九	二四九
同	鳥の飛ぶ高さ(新續)話の種(四)(同)	二九	二五二
南北生	羽毛の密輸入(同) (同)	二九	二五三
同			
中川久知	熊本市附近の蛙類調査及九州に於ける養鶏業の一斑 (同)	二九	二五七

川上 漸	雉鶏の胸腺一部剔出後に於ける翠丸の變化に就て	(同)	二五	二五八
谷津 直秀	ドードーとソリテーア(口繪第九版附)	(口繪解説)	二五	第三卷十七號 前二七頁
日野 光次	鳥の音響(ハツセリ氏)	(抄)	二五	二八六
黒田 長禮	カハガラスの習性	(雜)	二五	二九七
谷津 直秀	ダイアトリマ【化石の鳥類】	(同)	二五	二九八
同	牝雞を多く産出する法	(同)	二五	二九九
仁部 富之助	スマメの體重と心臟重	(同)	二五	三三七
鍋木 外岐雄	飼養鶏の鳴管の研究(マイヤース氏述)	(同)	二五	三三九
濱田 徳次	雞の胎生と	(同)	二五	三四〇
川口 孫治郎	コサメビタキの蕃殖	(同)	二五	三四一
仁部 富之助	逆斑の鳥卵に就て	(同)	二五	三四三
熊谷 三郎	コノハチクの卵と雛【コノハツクの意ならん】	(同)	二五	三八六
岡田 要	鳶を飼つた經驗	(同)	二五	四二五
熊谷 三郎	ヤマドリの子	(同)	二五	四二七
中本 大二	鳥の友情	(同)	二五	四二八
川口 孫治郎	猛禽に對する中小鳥の態度	(同)	三〇	三五
齋藤 宗雄	山形縣庄内地方に珍らしき鳥類【アカツクシガモ、ウキホ、ジロ、コアシサシ】	(同)	三〇	三七
谷津 直秀	シーブライト種の雄鶏の去勢(モル)	(同)	三〇	三七

黒田 長禮	ガン氏)	(抄)	三〇	八三
同	逆斑鳥卵の數十例	(雜)	三〇	九〇
同	アカツクシガモの新分布地	(同)	三〇	九二
小山 海太郎	鳩の飼育	(同)	三〇	九二
川口 孫治郎	鳥の貯蓄心か	(同)	三〇	九四
阿部 余四男	鳥の貯蓄心か	(同)	三〇	一三二
川口 孫治郎	シチメンテウの大腿骨(哺乳類雜報中)	(同)	三〇	二一八
谷津 直秀	白いカラス	(同)	三〇	二六二
同	卵を産みし雄鶏(片々録十六)	(同)	三〇	二六五
同	シヤボテンに攀ちてフクロの巢を求む	(同)	三〇	三五〇
同	鳥の起原(東洋學藝雜誌三五卷五册)	(新)	三〇	二六六
黒田 長禮	朝鮮産の鳥類追加	(論)	三〇	二八九
川口 孫治郎	カハセミの智慧	(雜)	三〇	三〇七
同	山中に迷込みし海鳥【コシロハラミヅナギドリとマダラウミスズメ】	(雜)	三〇	三〇九
黒田 長禮	伊豆七島産鳥類に就て【新亞種ナミエヤマガラ】	(論)	三〇	三一三
榎山 徳太郎	北海道産ヤマガラの一亜種	(同)	三〇	三四五
川口 孫治郎	クマタカの雌雄	(雜)	三〇	三五〇
黒田 長禮	日本産雄・雌雄類の地方的種類に就て	(論)	三〇	三六四

著者	表題	卷數	頁數
川口 孫治郎	ツバメの蕃殖の經過	三〇	三八五
仁部 富之助	コチドリ <small>の</small> 蕃殖につき	三〇	三八七
鷹司 信輔	鹿兒島縣下の鳥類	三〇	四三八
同	同上 (一一)	三二	四五
雨宮 青作	鷗の食食	三〇	四六五
〔池村 平太郎 川口 孫治郎〕	ヒヨドリ <small>の</small> 蕃殖の經過	三〇	四九六
榎山 徳太郎	カハセミ <small>の</small> 巢内の魚骨	三〇	五〇二
鷹司 信輔	クロジヨウビタキに就て	三二	二九
川口 孫治郎	ノスリ <small>の</small> 雌雄及習性	三二	三〇
谷津 直秀	脊椎動物學參考書目【鳥類あり】(譯)	三二	五九
川口 孫治郎	カハセミ <small>の</small> 巢の營み方	三三	六四
小山 海太郎	海鳥と信濃佐久 <small>の</small> 地【長野縣佐久郡】	三三	六五
同	海鳥と信濃佐久 <small>の</small> 地(續報)【アカチ	三二	一九九
同	ネツタイテウ、トリシマアジサシ、カ		
	モメ、ユリカモメ】	(同)	
	ノガンの捕獲	(同)	
竹下 政之助	家禽 <small>の</small> 生殖腺摘出 <small>の</small> 第二次性質に	三二	一〇一
同	及ぼす影響(Goodale氏)	三二	一一八
川口 孫治郎	カラス <small>の</small> 嗅覺と視覺	三三	一三三
榎山 徳太郎	カケス <small>の</small> 貯食	三三	一三四
黒田 長禮	杜鵑屬鳥類 <small>の</small> 赤色羽衣に就て(上、	三三	一七四、二〇九
	下)	(論)	

著者	表題	卷數	頁數
榎山 徳太郎	二種 <small>の</small> 涉禽 <small>の</small> 新産地【ムラサキサギ	三二	二〇〇
	ヘラサギ】	(雜)	
熊谷 三郎	カケス <small>の</small> 灰變り【宮城縣下産】	三二	二〇一
黒田 長禮	南日本産三新鳥 <small>の</small> 記載	三二	二二九
仁部 富之助	カハラヒ <small>の</small> 育雛習性	三二	二三四
谷津 直秀	モズ、ウヅラ <small>の</small> 卵を孵化す	三二	二三七
〔小山 海太郎 黒田 長禮〕	鳥類 <small>の</small> 前肢に爪を有するもの <small>の</small> 研究	三二	二三八
黒田 長禮	上の參考書	(質)	
榎山 徳太郎	帝雉 <small>の</small> 分布及び蕃殖に就て	三二	二五四
仁部 富之助	再びカハセミ巢内 <small>の</small> 魚骨に就て	三二	二五五
榎山 徳太郎	カハセミ <small>の</small> 巢内 <small>の</small> 魚骨に就て	三二	二五六
熊谷 三郎	北海道産ハクテウ <small>の</small> 二標品附雁鵲類	三二	二九〇
	の嘴斑に就て	(同)	
	カケス <small>の</small> 黒變種	(同)	
	臺灣 <small>の</small> ミカド雉	(同)	
	支那 <small>の</small> 雉類	(同)	
M. O. 生	話 <small>の</small> 種	(同)	
	Encyclopaedia sinica 中 <small>の</small>	三二	二九六
	鳥 <small>の</small> 記事	(同)	
	Marine Camouflage と鳥 <small>の</small>	三二	二九七
	色	(同)	
黒田 長禮	日本産雉・鵲雉類 <small>の</small> 亞種に就て	三二	二九九
同	ヘラシギ <small>の</small> 蕃殖と蕃殖 <small>の</small> 習性(テイ	三二	三三〇
	キソン氏)	(抄)	

同	仁部 富之助	鴨類の雜種(レインベルグ氏) (同)	三三〇
同	黒田 長禮	郭公は巢を撰擇する能力ありや(雜) 九州より始めて知らるる鳥類 (論)	三三六
同	同	オホハム類に於ける地理的趨異(ベ ント氏)	三三四
同	小山 海太郎	キジバトと家鳩の交配未だし (雜)	三三九
同	黒田 長禮	米國産鴨類の一新亞種(ケナード氏) (抄)	三四〇
同	同	鴨類の二雜種(ロビンソン氏) (同)	三一七
同	同	部分の相關的比例に於ける一定の差 異が種の特性たること【米國鳥類に 關するもの】(ミラー氏) (同)	三一八
同	熊谷 三郎	宮城縣下に於ける鳥類の「渡り」と 氣温 (雜)	三一九
同	黒田 長禮	京橋區にて捕らへられしクロアシア ハウドリ (雜)	三六四
同	川口 孫治郎	メジロの雌雄相互の關係 コイカル五家莊に徘徊す (同)	三七三
同	同	二三鳥類の新分布地 (同)	三七四
同	榎山 徳太郎	ホ、ジロの卵の斑 (同)	三九五
同	川口 孫治郎	剥製の蟲除け(實驗漫録) 巡米雜感(續)【米國に於ける鳥類研 究】 (同)	三二六
同	大島 廣	大島廣氏通信【鳥の記事あり】 (同)	三二九
同	川村 多實二	(内外彙報)	三三二
同	同	大島廣氏通信【鳥の記事あり】 (同)	三三五

村上 銳夫	傳書鳩の歸居本能(ホイットマン氏) (抄)	三一六
川村 多實二	米國博物館の生體陳列【鳥の記事あ り】 (内外彙報)	二一七
黒田 長禮	隴鷓類の特殊の求食習性(ウエトマ ー氏) (抄)	二二二
同	本州及び臺灣産鳥類の三新亞種(論)	二四三
同	北米産鴨類一新種(ヒューバー氏)(抄)	二五三
大島 廣	倫敦便り【駝鳥の鵝に關するもの】 (内外彙報)	二六七
黒田 長禮	北日本産シロハヤブサの二標本に就 て (論)	二六九
榎山 徳太郎	クワクコウとテンマクケムシ (雜)	二九四
同	鳥類と壁蝨との關係 (同)	二九五
川口 孫治郎	ホ、ジロの習性と場所 (同)	二九五
池村 平太郎	鳥類觀察(一)【コシアカツバメの蕃 殖】 (同)	三二六
川口 孫治郎	同 (二)メジロと樹木 (同)	三二八
同	同 (三)オシドリ習性 (同)	三二八
黒田 長禮	北米ウイソコンシン州に於ける鴨類 の比較數(ホリスター氏) (抄)	三五一
榎山 徳太郎	北海道に蕃殖する鳥類 (雜)	三五四
石澤 健夫	コアシサシ山形縣下に蕃殖す (同)	四〇二
池村 平太郎	ヒヨドリの渡り (同)	三六三
川口 孫治郎	同 (同)	三六三

丘	淺次郎	動物の社會【鳥類の記事あり】	(講)	三三	三九六
黒田	長禮	樺太産のタヒバリとスマメの學名	(雜)	三三	四〇七
同		臺灣産鳥類學名訂正及追加	(同)	三三	四〇七
同		二三鳥類の學名及び分布【カイツアリ類、シユリン類】	(同)	三三	四〇八
仁部	富之助	鴨は雛を運搬し得る歟	(同)	三三	四一〇

日本鳥學會規則摘要

第二條 本會事務所は東京帝國大學理學部動物學教室内に置く

第四條 本會は前條の目的を達する爲め評議會の決議を経て隨時種々の事業をなす

一 當分一年に二回雜誌「鳥」を出版すること

一 臨時刊行物を刊行すること

一 毎年春秋二回會合し鳥類に關す講演談話をなし同時に鳥類に關する圖書標本其他の展覽會を催す

一 鳥學的探檢を舉行すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員と乙種會員の二とす

一 甲種會員は會費として一箇年金五圓を納むること

一 乙種會員は會費として一箇年金二圓五十錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌「鳥」及臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌「鳥」を配布す臨時刊行物は配布せず定價の三割引を以て講讀することを得

會 頭

幹 事

内 田 清 之 助

評 議 員

理學博士 飯 塚 啓

理學博士 丘 淺 次 郎

公 爵 應 司 信 輔

黑 田 長 禮

子 爵 松 平 賴 孝

大正十年四月二十七日印刷

定價金 壹 圓

大正十年四月三十日發行

東京市日本橋區兜町二番地

編輯兼 發行者 木 下 憲

東京市日本橋區兜町二番地

印刷人 神 谷 岩 次 郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東 京 印 刷 株 式 會 社

帝國大學理學部 動物學教室内 日 本 鳥 學 會

振替口座東京六五九九番

發 行 所

東京日本橋區 十軒店町

裳 華 房

振替口座東京一〇七番

禁 轉 載

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

第一篇 內田清之助 著 類圖說

絶版

第二篇 內田清之助 著 海産保護鳥類圖說

原色版三枚 附
定價四圓十錢

第三篇 黑田長禮 著 世界の鴨

絶版

第四篇 黑田長禮 著 世界の雁と鵠

原色版四枚 寫眞版五枚 附
定價四圓 郵稅四錢

第五篇 仁部富之助 著 郭公の蕃殖に關する研究

寫眞版一枚 地圖一枚
定價金卅五錢 郵稅四錢

第六篇 黑田長禮 著 臺灣鳥の鳥界

原色版四枚 繪數個
定價四拾錢 郵稅四錢

第七篇 黑田長禮 著 鮮滿鳥類一斑

原色版十枚 繪一個
定價一圓五十錢 郵稅十二錢

第八篇 黑田長禮 著 千鳥類の「渡り」

寫眞版十枚 繪二葉
定價七拾五錢 郵稅六錢

第九篇 叔山德太郎 著 邦領南洋諸島産鳥類

原色版三枚 コロタイプ版四葉
地圖二葉 挿畫數個 約四百頁
定價七圓半 郵稅十二錢

房 華 裳 町店軒十區橋本日 番七百京東替 賣 所 捌 賣

告豫編九第物行刊時臨會學鳥本日

日本鳥學會員 靱山徳太郎君著

大正十年六月發行

邦領南洋諸島産鳥類

原色版三葉コロタイプ版四葉
菊版紙數約四百頁
定價七圓五十錢 郵稅十二錢

本書は本會臨時刊行物第九編として目下印刷準備中のもので、大正十年三月出版の豫定であります。内容は昨夏本會員靱山徳太郎君が約半歳に亘つて我南洋諸島に鳥類採集を試みられた結果を記述したもので、主としてカロリン群島其他諸島の鳥類に就て分類學上の考察、習性の觀察並新亞種の發表等に加へて以上諸島の鳥類既知種全部の目錄が添えてあります。寫真版は著者撮影の生態寫真其他を四葉十數個、三色版は小林重三氏寫生の南洋鳥類十數種を三葉に收めてあります。本書は雜誌「鳥」に掲載せられた鷹司黒田兩理學士の論文と相俟て我南洋の鳥に關する缺くべからざる文籍であります。本書は本會甲種會員には無代配布、乙種會員には規定の割引を以て配布しますから豫め御申込を願ひます。

賣 捌 所 日 振 本 替 橋 東 區 十 軒 百 店 七 町 番 裳 華 房

■ 日本鳥學會創立十週年紀念出版 ■

日本鳥學會編纂

日本鳥類目錄 (英文)

A Hand-List of the Japanese Birds.

編輯擔當

阿比目ヨリ鶴型目迄七目	理學士 黑田長禮
鶉型目ヨリ佛法僧目迄三目	理學士 鷹司信輔
燕雀目	獸醫學士 內田清之助

內容

現時知ラル、全日本(各殖民地ヲ含ム)産鳥類ノ全種類ヲ含ム目錄ニシテ之ヲ最近ノ分類ニ從テ排列セリ其内容ハ

學名及其ノ原記載掲載ノ書目 英名

學名ノ重要ナルしのにむ 和名及其ノ重要ナルしのにむ

從來知ラル、本邦内ノ詳細ナル分布 索引

體裁

菊版 用紙泊來上質百斤	紙數約百六十頁
並製 表紙こーでりあ假綴	上製洋布表紙天金脊及角皮

出來期日

大正十年十月三十日

出版部數

上製百部	並製三百部	再版セズ
------	-------	------

實價

並製金三圓	上製金五圓	郵稅十二錢
-------	-------	-------

注意

本會會員ニ限リ一割引(會員ハ直接本會へ申込ヲ乞フ)

臨時刊行物ニ非ザルヲ以テ甲種會員ニモ無代配布ヲナサズ

出版部數僅少ナルヲ以テ豫メ本會又ハ賣捌所へ御申込ヲ乞フ

賣捌所 裳華房

日本橋區十軒店町
振替東京一〇七番

"TORI" THE AVES

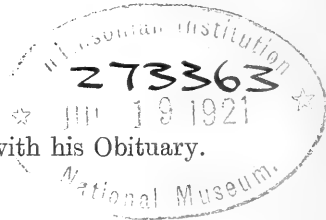
28

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. III. No. 11. April, 1921.

Frontispiece :

The late Dr. Isao Ijima, President of the Society, with his Obituary.
Breeding of the green Peafowl, *Pavo muticus*.



Contents :

The moulting of some Charadrine Birds. By *N. Kuroda*.
Notes on two stragglers, *Panurus biarmicus russicus* and *Turdus atrigularis*. By *S. Uchida*.
Notes on the habits of Richardson's Skua. By *T. Momiyama*.
Birds seen in the Hiroshima City. By *H. Nakao*.
A list of papers on ornithology appeared in the "Zoological Magazine."
By *N. Kuroda*.

Miscellaneous notes.
Queries and Answers.
Proceeding of the Society.

ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

c/o Science College, Tokyo Imperial University.

PRESIDENT.

SECRETARY.

S. Uchida, C. F. A. O. U.

COMMITTEE.

The President } Ex officio.
The Secretary }

A. Izuka, *Rigakuhakushi*.
A. Oka, Ph. D., *Rigakuhakushi*.
Prince N. Takatsukasa.
N. Kuroda, F.M.B.O.U., C.F.A.O.U.
Viscount Y. Matsudaira.

The dates of issue of the "Tori" are as follow :—

Vol. I. No. 1.	May 26,	1915.
„ „ No. 2.	Dec. 10,	1915.
„ „ No. 3.	Dec. 31,	1916.
„ „ No. 4.	April 15,	1917.
„ „ No. 5.	Dec. 7,	1917.
Vol. II. No. 6.	May 31,	1918.
„ „ No. 7.	Dec. 31,	1918.
„ „ No. 8.	July 21,	1919.
„ „ No. 9.	April 14,	1920.
„ „ No. 10.	Dec. 30,	1920.





M-9

